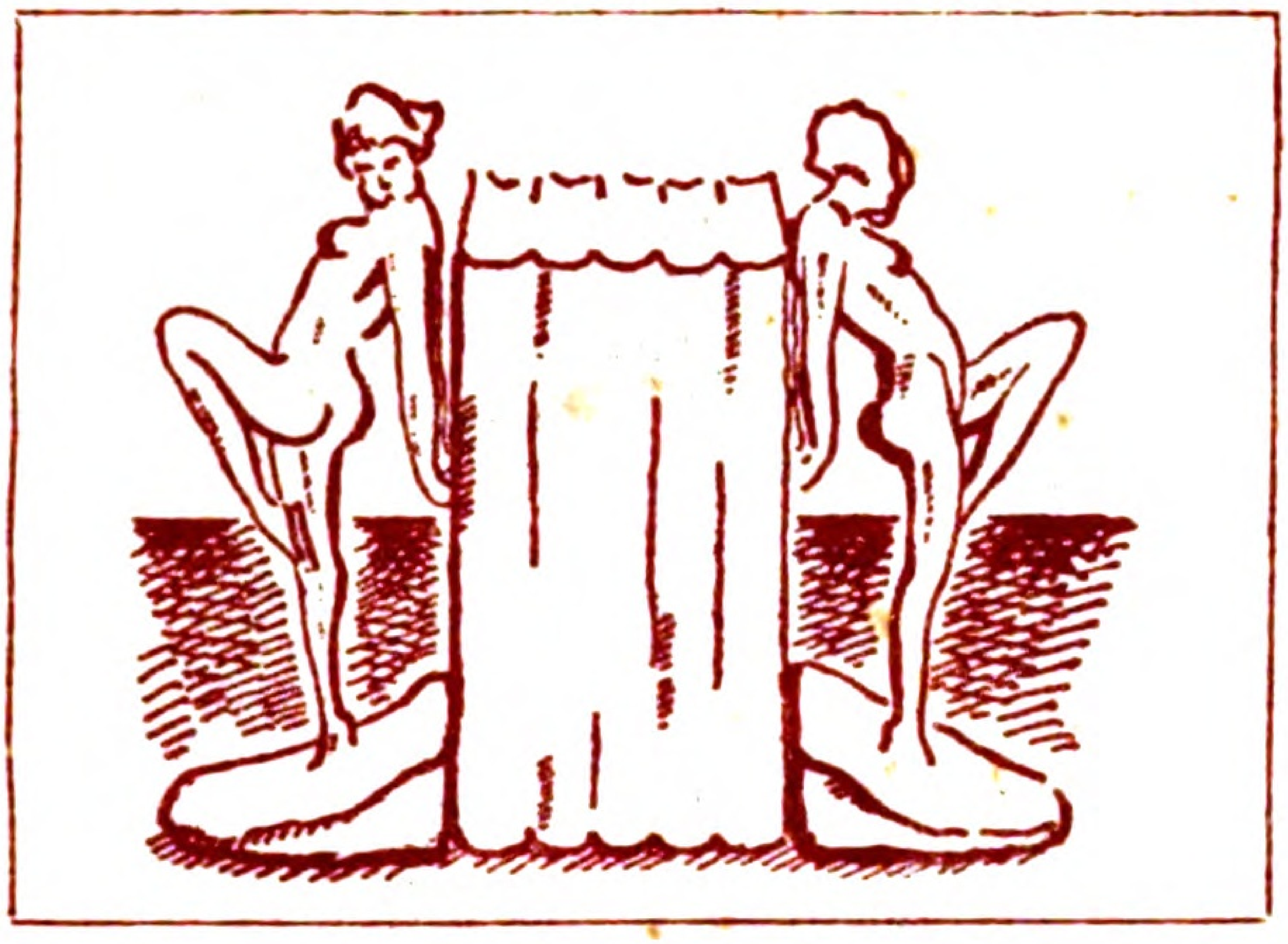
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

「日本の再認識・再吟味」號

二月特輯

第四十四年 第二號 第四百九十三號



藝術的な本立
ブックエンド


洗練に洗練を加へられたその意匠と高雅なブロンズや、瀟洒な清水燒の仕上げ等……從來の本立とは全く趣の異つたもので、目下非常に流行して居ります一種の趣味の室内裝飾品で御座います。

陶製　三、〇〇円より　六、〇〇〇位迄

鑄銅　一五、〇〇〇円より

松屋呉服店

東京・銀座


神經衰弱　新藥
ヒステリー
ホパレット
獨逸エルランゲン　チーマ製藥會社製
「頭が重い、眠れない、氣分が晴れない……
「興奮し易い」と云ふ症狀は、神經に過度の疲勞又は刺戟を與へたる後に起り易きところで、この際ホパレットの內服は、心身の疲れを醒さめ、興奮を鎭めて安靜を與へ、且つ快き自然的の睡眠を得せしめます。從來の催眠劑と異り、劇毒性を缺き全く無害の純植物製劑です。
頭腦過勞、神經興奮、ヒステリー症狀……
及びこれに隨伴する不眠、焦燥、煩悶、動悸、健忘、注意散逸、逆上、强迫觀念等に賞用されます、少量づゝを分服せしむれば腦の過敏を鎭め、夕刻及び就寢前に與ふれば快き安眠劑となり、長く續け用ゐても習慣作用を起しません。
一〇〇錠入……二圓四十錢　著名の藥店にあり
說明小冊子送呈
總代理店　株式會社　田邊元三郎商店
東京市日本橋區本町

艸木虫魚

叡智と愛と靜思に輝く珠玉の如き新名著出づ！

著者病を抱いて六甲山下の草堂に閑居する數年、深く自然と神交默會する所あり、茲に名著「艸木虫魚」が出來上つた。艸木昆虫魚介の類がいかに魅惑に富める微笑と新感覺とをもてこの詩人と私語し交歡してゐるかを知らば、何人もその秘密不可思議の境涯を羨望せずには居られまい。唐辛と蟹とカマキリは何を怒つてゐるのか。西瓜と柚子と古池の鯉は何を苦に病んで腦神經衰弱に罹つてゐるのか。詩人の愛と敏感はこれを如實に描いて、そこに人生の姿を暗示し髣髴させてゐる。著者の提唱する叡智の文學とは本書の如きをいふのだらう。裝幀高雅內容と相俟つて圓本流行の今日眞に机上の清玩である。

薄田泣菫著　最新刊

四六判四百拾頁　天鵞絨金模樣表紙　著者コロタイプ肖像

定價壹圓八拾錢　送料拾二錢

茶話抄

薄田泣菫著　定價一・二〇　送料・一二

無慮千數百に亘る有名なる茶話中より著者の最も會心の作百五十余篇を自選せられたもの、蓋し我隨筆文學の王座を占むべき不朽の名著である。本書を一讀して氏の輕快幽妙なるリズムを持つユーモアには誰れしも快心の微笑を洩らさないものは有るまい。近頃の好讀物として本書を薦む。

八版　猫の微笑　薄田泣菫著　定價二・〇〇　送料・一二

藝術隨筆　怪奇美の誕生　園頼三著　定價二・五〇　送料・一二

戲曲集　鴉　關口次郎著　定價一・八〇　送料・一二

詩集　室內　竹內勝太郎著　定價二・三〇　送料・一二

增補　文藝辭典　創元社編　特價二・八〇　送料・一八

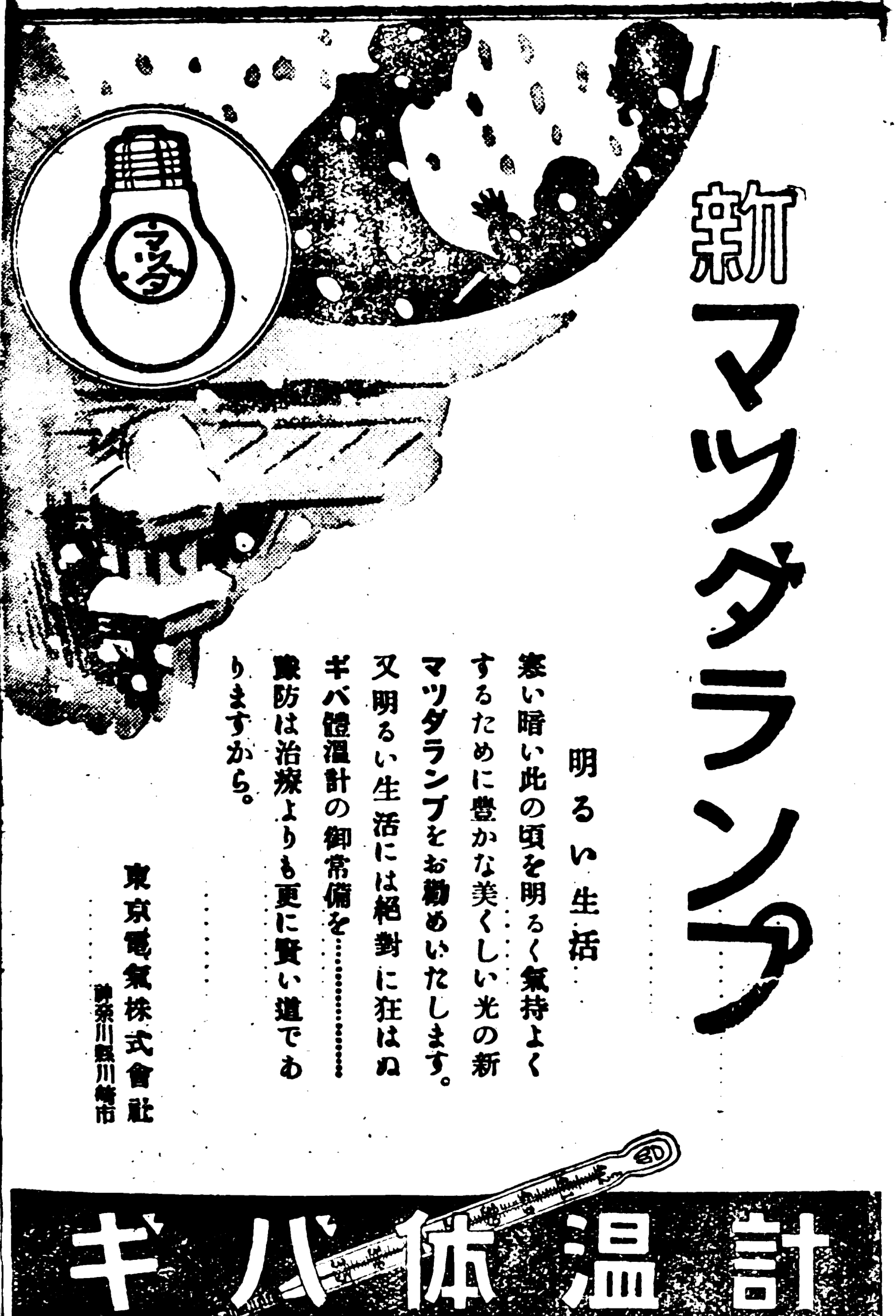
史蹟と地理　傳說を尋ねて　近畿行脚　大阪市教育部編　定價二・八〇　送料・一二

版元　大阪市西區靭上通一　振替　東京一五六五　大阪五七〇九九　創元社


眞に
大新聞!!!
その信用に於ても
實力に於ても


寫眞材料界ノ權威
アグファの製品を推薦す
東京市麴町區丸之内仲通
十四番館五號
アグファ合名會社
大阪市東區南久寶寺町
四丁目七番地
アグファ合名會社
Agfa

モダーン・ライフ再吟味


マツダ
新マツダランプ
明るい生活
寒い暗い此の頃を明るく氣持よくするために豊かな美くしい光の新マツダランプをお勸めいたします。
又明るい生活には絶對に狂はぬギバ體温計の御常備を……豫防は治療よりも更に賢い道でありますから。
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市
ギバ体温計



野火　　小川芋銭筆

婦人公論

◆婦人新職業としての白帽……記者

◆映畫印象を裏切る人氣女優の性格……林まゆみ

現代女學校教育の缺陷

◇エンゲルス・ガールと性學

◇虚榮市と父の涙

◇スポーツ教育の犠牲……

◆尾崎士郎・宇野千代兩氏愛のスナップ……木蘇穀

◆大學評判記・慶應の巻—三田ゼントルマンの歎き……

◆雪の乘鞍ケ嶽遭難實記……畔田明

(連載小說)京都(藝者あがりの優しい女 菓子は若い幸吉と遂に)……渡邊均

(内外時評)床次氏の支那土產・大衆黨の成立・公娼廢止……山川菊榮

◇愛兒のためのお獻立

▽兒童と食物……岡田道一

▽子供の喜ぶお惣菜……高鍋千代

▽母親の心づかひ……植原あや子

▽遠足のお辨當……坂本孝子

▽榮養本位の子供辨當……高久邦三郎

◇姙婦の美容と衞生

◆醫者の立場から……北井幾八

◆美容師の立場から……早見君子

◆容貌の衰へない食餌法……田中美保子

◆花はくれなゐ(影子は涓と同室で何の危險もなかつた。…汀は?)……池谷信三郎

◆誕生日(女流作家中の白眉殊に其鋭き觀察は短篇に於て光る)……宇野千代

◆木がくれの巢(梅子は夫が何處へ行つたのか不安だつた。漾子!?)……小島政二郎

◆八百屋お七(さしもの大火もやつと終つた。お七はどうなる?)……眞山青果

定價七十錢

東京・丸ビル 振替東京三四
中央公論社

◇文學士 中島悦次氏新著◇

—（我出版界最初の唯一の註釋書）—

新刊 大好評

● 宇治拾遺物語新釋

（最もユーモアに富んだ）

（王朝時代の短篇物語集）

宇治拾遺物語は鎌倉初期に現はれた最もユーモアに富んだ短篇物語集でその文章は當時の代表的國文と云ても過賞ではあるまい。併し惜しい哉從來纏つた註釋書の有るを聞かない。玆に著者は苦心の末此註釋を完成す。內容は詳細にして平易懇切なる語釋句解を施し物語の出典系統主意に附て評言を加へ而も單に註釋を以て終始せず每に其各物語の底に人間を見ようと勉めた蓋し國文學に志す人乃至は國文に興趣を有する人々の味讀すべき良書である倚附錄の打聞集譯註は我國最初の註釋書であつて是亦斯界を益する事は鮮少ではあるまい。敢て一本をお奬めする。

菊判最上製美本 全壹册六百餘頁

● 正價金四圓五拾錢 送料廿七錢

吉澤文學博士 奧里將建氏著 ●最新國文學史辭典 斬新な年表と系譜とは國文學徒に絶好の師友である。（新刊） 金參圓參拾錢 送料廿七錢

上田文學博士 山田武司氏著 ●參考近世名家國文新釋 苟も近世文學を語る程の者は必ず讀む可き參考書。（新刊） 金五圓八拾錢 送料廿七錢

小林 博氏著 ●詳說日本歷史 趣味ある國史たらしめて居る比類なき良書と激賞の聲を聞き大好評なり。（上下） 各六圓八拾錢 送料廿七錢

井原 儀氏著 ●德川時代通史 歷史書と云はんより寧ろ辭典と稱すべきもので江戶三百年の記錄である。（三版） 金七圓五拾錢 送料廿七錢

三村信男氏著 ●世界地理の史的考察 世界の諸國は如何にして建設されたかゞを詳述す。（新刊） 金四圓八拾錢 送料廿七錢

栗原寅治郎著 ●解り易き國際講話 最近世界の大勢 全世界の情勢を一目の下に明瞭ならしむる書。（三版） 正價金貳圓 送料十二錢

稻毛詛風氏著 ●歐洲文化の印象と批判 獨逸を中心として最近の歐洲文化を批判せり。（好評） 金參圓八拾錢 送料廿七錢

日高瓊々彥著 ●國家に及ぼす宗教の害毒 日蓮の如きも玆ではみじめな馬脚を露出せり。（三版） 金壹圓八拾錢 送料十二錢

大阪朝日記者 山名正太郎著 ●政談演說の仕方と聽き方 際物でなく眞面目な手引書指導書である。（五版） 金壹圓五拾錢 送料十二錢

東京市神田區西小川町二ノ三 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

對支關係の前途と床次氏の立場

——（卷　頭　言）——

對支交渉の停頓に直面し、我が國民の多數が支那の立場に多分の同情を寄せ、我國の責任を重しとして我が政府に歸せんとするは、殘念ながら之を事實と認めねばならない。國民多數の支持せざる要求を敢行し又その心に非る頑强の態度を改むることの外に打開の途なかるべしとするが我が國民多數の意見だとすれば、政友會内閣の現に執る所の對支策は正に國民の輿論と背馳するものでなければならぬ。政友會の年少氣鋭を中心として作られた外交同盟會とやらの無暴な宣言の如きは、此際最も帝國の公正なるべき立場を毀するものではあるまいか。

打開の途は要するに好意を以て彼方の要請に傾聽し而して後徐かに我方の生存上必要とする最少限度の希望を開陳するに在る。依然として帝國主義の甘夢に惑溺し加ふるに保守反動の特權階級の支持に立つ政友會の、容易に這の當然の軌道に還り來らざるは明白だ。たゞ此際に當り僅に一縷の望みの繫けらるるは渡支後の床次氏の去就如何である。

床次氏の渡支が當初うたはれた如く全く田中首相の意を承けたものとすれば、それは完全に無駄の骨折に終るばかりでなく、彼自身の立場をして亦救ふ可からざる窮地に陥らしむるものであることは言ふ迄もない。幸にして彼の支那に於ける行動は、その應酬の秘密に附せられ居るだけ之を詳にし難きも、表面に顯はれたる實績に徴するに、十分彼方に滿足を與へ得なかつたのは致方なしとして、頭から彼方を失望せしめしにも非るは疑ないらしい。果して然らば彼はまた必ずや從來の蒙を啓き、幾分新しい方策を胸中に懷いて歸つた筈である。事實の指示する所に正直に從ふ者に取て、斯の如きはまた固より當然の順序でもあると考へる。

いづれにしても、床次氏に由て對支交渉の現況が打開せらるるを得ば——少くとも打開せらるるの端緒がつけば——それは國民の幸福であり、又床次氏の前途に取ても祝すべきことに相違ない。只床次氏の昨秋以來の特異の政治的立場は、果して能く彼に斯の轉回を許すや否や。支那問題に關する彼の從來の宣明と政友會に對する彼の最近の腐れ縁とを思ひ合して、吾人はまた多大の危惧を此間に挿まざるを得ない。

要するに、**今日の政界に於ける床次氏の存在は一個の解き難い謎である。**其限りに於て對支關係の前途はまた仍然として暗黒である。

けれども見よ、彼我國民の内面的交歡の機は今や正に熟し切て居るではないか。この相思の仲を頑迷なる老親は何時まで阻むことが出來るだらう。支那國民政府の前途猶ほ鞏固たらずなどの口實の下に此上永く放任さるべき問題ではあるまい。

左傾彈壓に餘力を殘さざるの故を以て、唯單に之れだけの理由で、南京政府を否認せんとする共産派の主張が、偶々政友會の立場と此點で一致するのは、奇と謂ふべきである。

中央公論



第四十四年第二號
二月號
四百九十三號

性の決定と性の本質

永井潛

一

最近世界大戰によつて、人類は、一つの偉大なる手、恐るべき手を見附けた。夫れは『婦人』と云ふ手であつたと、米國の或る哲學者は穿つたことを云つて居る。一世紀の前に起つた佛蘭西革命の泉から湧き出た流が、右に左に、落ちてな

がれて、幾つかの湖に湛えたゝえて居た其の湖の堰を、大戰亂の暴風雨は、容赦なく叩き壞した。そして幾十條の激浪の端が、耳を聾ひ膽を寒からしめつゝ、世界人類の前に突如として現はれて來た。曰くボルセビスム。曰くコンムニスム。曰くサンヂカリスム。曰くフアスシスム。曰く勞働問題。曰く階級戰。曰く何。曰く何。そして其の最も目立てるものゝ一として、婦人問題が擡頭した。

二

世界の人口二十億の中、十億が男子であり、十億が女子であることが、動かすことの出來ない事實であるとするならば、國家も、社會も、政治も、産業も、宗教も、藝術も、あらゆる人間生活は、男と女と云ふ二本の大黒柱によつて支へられて居ることを、何人も否定することは出來ない。槌と砧とは、其の役目こそ違へ、金鐵を鍛煉する上に於て、等しい力を有ち、等しい効果を擧げつゝあることを考ふる場合、人間生活の舞台に於て、男女が均等の役割を演じ、對等の權利者であらねばならぬことは、當然すぎる程當然のことであり、又男と云ふ半球と、女と云ふ半球とが、相待ち相寄つて、茲に始めて圓滿具足せる人生を實現することが出來るのも、自明の歸結でなければならない。

最初の人間生活の過去を振りかへつて見る時、何人も、如何に平然として此當然の理法が無視せられ、自明の歸結が蹂躙せられ來たつたかに、驚かずには居られないであらう。假令、婦人が、靜かな、併し强い强い大海の底の如き隱れたる彼女の力によつて、人生を美化し、淨化し、激勵し、指嚮した點に於て、知らず識らずの間に、偉大なる影響を及ぼし來つたとは云へ、婦人の過去の歷史は、抑壓と、屈服と、忍從と、犧牲の文字によつて誌されたのである。而かも撓んだ竹に、何時かは雪を撥ね返す時期が來る樣に「ルネーサンス」の春光に芽ぐんだ人間の思想の潮が、藝術に、宗教に、哲學に、科學に、燗熳たる花を開いて、十九世紀の初頭に於て、人間の實生活の歸趨たる政治の上に反映し、自由平等博愛の果を

結んで、佛蘭西大革命を勃發するに至つて、健氣にも、婦人は終に男子に對して反抗の火蓋を切つたのである。斯くて一七九二年に、メリーウオルストンクラフツの「婦權の防衞」を先頭としてジヨルジ・サント出で、ヒツペル出で、ミル出で、斯くて此等有力な產婆によつて發祥の初聲を揚げた婦人運動が刻一刻生長を加へ來つて、ピタトル・ユーゴーをして、早くも已に、『十九世紀は婦人の世紀なり』と叫ばしめた其の十九世紀を送り、二十世紀を迎ふるに及んで、婦人運動が益々其の結束を堅うし、其の努力を强うしたことは、必然の勢であるが、殊に最近の大戰を動機として、其の旗幟は愈々鮮明となり、其活躍は益々眞劍味を加へ、生產問題に、參政權に、幾多の獲物を攫み得たことは、吾等の記憶に最も新たなる所である。今や斯の偉大なる手、恐るべき手が、自信に滿ち勇氣に溢れて、更に飛躍を試みんとして居るのである。

婦人運動。其の中には幾多の重要な想案が含まれて居る。或る者は、結局、之を以て、女性が男性に對抗する宣戰であると見て居る。若し其の見方が當つて居るとして、果して夫れが人生に取つて眞の幸福を齎すであらうか。或る者は、之を以て婦人解放と見て居る。然らば其の婦人解放とは果して何を意味すべきであらうか。

人生の動きは、恰も振子の如く、動もすれば、一の極端から他の極端に向つて飛躍せんとする。さりながら、最後の平和と安靜とは、必ずや正中の位置に就くことでなければならない。男子の抑壓專橫に對抗して起つた婦人運動が、其の頭初に於て、多少極端に流れるのは、恕すべしとしても、若し其の最後の目的が、人間自然の本性に從ひ、自他平等の權利を重んじ、眞に人生の平和と幸福とを冀ふのであるならば、婦人は、徐ろに自己を省みて、最も正しき位置を求め、最も正しき行動を取ることを忘れてはならない。基督は、婦人が男の如く裝ひ、男子が婦人の如く化することを以て、世の終であると悲んだ。試みに往いて銀座街頭のモボ、モガを見よ、基督ならざるも、淚なしには過ぎることが出來ない。

婦人よ、恐るべき手よ、偉大なる手よ、借問す卿の斯の恐るべき手が、眞に其の恐るべき力を自覺し、偉大なる使命に向つて活躍し、人生に過誤あれば其の過誤を匡し、虛空あれば其の虛空を充たし、男子と云ふ他の手と握手し抱擁して、

圓滿なる社會相を實現すべく努力するの日は何時來るであらうか。婦人問題の究極の而して最も正當なる解決は如何にして求められるであらうか。其の意味に於て最も必要であることは、婦人が男子を知り、男子が婦人を知ると共に、先づ以て、男子も婦人も『汝自身を知る』ことでなければならない。其の意味に於て私は玆に生物學上より見たる性の決定と性の本質を論じて見たい。

三

性別の決定を論ずるに先立つて、性別と云ふことに關して、少しく述べて置く必要がある。抑、性別の起源を尋ねて見ると、二様の生殖細胞の出現に歸著するのである。由來、自己の生存と、種族の保續とは、生物の上に加へられた二大使命である。自己の生存を確實にすべく、生活體は、絶えず自分を新たにして居る。活潑なる新陳代謝の作用が夫れである。而かも生存久しきに亘れば、自から老衰が起り、軈て死滅に赴かなければならない。斯くて自己の生存は、壽命によつて一定の制限を加へられる。而も斯る場合、生活體は、第二の方法によつて自らを新たにし以て種族の保續を企てて、限りある個體の壽命を超越して、限りない生命の展開を如實にして行く。是れ即ち生殖の作用である。

斯く個體は死滅するにも關らず、種族が永遠に活き延びるのは、畢竟個體は自己生存に必要な諸機能を行ふべき體細胞なるものの外に、專ら生殖の機能に携はる生殖細胞なるものを有つて居て、斯の生殖細胞が、勢力將に衰へんとする舊い個體から分れて、元氣潑剌たる新個體を生成し、世々代々極り止むことがないからである。この意味に於て、生殖細胞は、確かに不老不死である。親より子に、子より孫に、生殖細胞は連綿として繼續して行く。そして親の體も、子の體も、孫の體も、皆この連綿たる生殖細胞から出來てゆく。これが即ちヴイズマン氏の生殖質連續説である。

元來外的條件にして滿足なるものであれば、細胞其のもの丶本質は、不老不死であるが、併し無數の細胞が相寄つて、

一個體を構成して居る樣な場合には、多數の細胞は、直接外界と交渉して、物質の交換を行ふことは困難となり、動もすれば有害な老廢物が體内に鬱滯したり、又榮養物の配給が不十分となつたり、加之、分業の法則に從つて、各種の組織器官が分化發達すれば、内外の變動に對し益々過敏となり、終には、死が最後の避くべからざる運命として、體細胞の上に現はれて來る。斯る場合、不死の運命を有する生殖細胞によつて、生命の焔を、この死の風の前に掩護し、永遠に之を消さない樣にするのである。換言すれば、生殖の作用によつて、生活體は新規建て直しを斷行し、之によつて自己を若返らしめ、生命を永遠に繋いで行くのである。而して生殖細胞によつて、この若返を實現する爲めには、常に二個の細胞が相接合一して、其の成分を交換することによつて行はれる。高等生物では、合一すべき生殖細胞の一は、能動であり、輕快な運動によつて、相手を求めて、進んで之と合一を遂ぐることの出來る爲に、體は小さく、且つ尾の如き運動器官を具へて居る。是れ即ち雄性生殖細胞若くは精子と呼ばれるものであり、之に對して、他のは、受動的で、且つ發達すべき新個體を十分に養ふことの爲に、通常多くの榮養物を細胞體内に貯へて、隨つて雄性生殖細胞に比較すると遙に大きい。是れ即ち雌性生殖細胞即ち卵と稱せられるものである。一般に植物及び多くの下級動物では、斯の兩種の生殖細胞が、同一個體内に出來るもので、之を雌雄同體と云ふのであるが、一定の植物及び多くの高等動物では、別個の個體内に出來る（雌雄異體）。そして始めて嚴格な意味に於て、性別なるものが現はれるのである。勿論、新個體が出來るものは、必ずしも兩種の生殖細胞の合一によるのではなく、場合によつては、一個體が、二等分せられ（分割）、若くは其の一小部分が分離（分芽）して、新個體を造ることもある。斯る時之を無性生殖と云ひ、有性生殖に對峙せしめる。有性生殖は、無性生殖に比して、遙に有利である。蓋し之れによつて生ずべき新個體の變化を豐富ならしめ、夫れをして進化向上すべき可能性を大ならしめると共に、雌雄何れかに缺陷がある場合にも、生殖細胞の合一によつて、彼是相補ふて、或程度迄之れを矯正することが出來るからである。

雌雄兩種の生殖細胞は、生殖腺なるものに於て形成される。精子を造るものが睾丸で、卵子を造るものが卵巣である。斯の各生殖腺が、別々の個體に宿つて、茲に始めて雌雄男女の別が起るのであるから、之を名づけて第一次性徴乃至は主要性徴と呼ぶのである。

四

而かも雌雄男女を比較して見ると、其の差別は、單に生殖腺のみに止らないで、他に幾多の心身の相違を認めることが出來るものであるが、凡て之を附帶性徴と云ふのである。或は廣義に於ける第二次性徴と云ふことが出來る。皮膚及び其の附屬物たる毛髮や乳房、筋肉、骨格、內臟生殖器等に於ける性的相違は、皆之に數ふべきものである

以上生殖の本義を論じ、性別の源泉を尋ねて、第一次性徴と第二次性徴との別を述べたのであるが、然らば斯る性別は、如何にして起るのであるか、先づ雌雄男女の根本の差別は、如何にして決定せられるかに關して述べて見たい。

性別の決定は如何にして出來るか、斯の問題位、最も一般的興味を惹いて、而かも其の解決の難い問題は外にない。今を去る百四十年も前に、ブルーメンバツハといふ獨逸の有名な學者が其の著書に書いてゐる所によると、佛蘭西のドレーランクールと云ふ學者が、性別の決定に關する自己の學說を公にした時、早く已に二六二通りの假說が出て居て、自分のは其の二六三番目に當るものであると云つたさうである。凡そ假說の價値は、其の數に逆比例するものであつて、說明が不確であり、不十分であればあるだけ　次から次にと數多くの臆說が出て來るものであることを考ふる時、性別決定の問題が、古往今來、如何に多くの興味を以て迎へられて、而かも其の眞相に至つては、全然雲を攫むが如きものであつたかを、想像するに餘りある次第である。

最も古く信ぜられて居た說は、母體感應說とも名づくべき考で、之れに由ると、一般に姙婦が外界からの刺戟によつて

感動を受けると、夫が母體を媒介して胎兒に影響し、自から性別を決定することになると云ふのである。例へば姙婦が火事を見ると、赤い痣のある子が生れるとか、又朝夕美はしい畫像に向つてゐると、美麗な兒を産むことが出來るとか、恐ろしいこと、嬉しいこと、悲しいこと、凡てそれが胎兒に感應を起すと考へられたのである。洋の東西を問はず、昔から胎教を重んずるに至つたのも、畢竟斯る考が、土台をなして居るのである。そこで感應説では性別の決定に關しても、姙婦の精神が、若し男性に集注されると男兒を産み、女性に傾倒されると女兒を産むと唱へるのである。併し斯る學説が、學問上正當の根據を缺いて居ることは、云ふまでもないことで、假りに外界の刺戟に基く感動が、母體に一定の變化を起すとしたとした所で、之れが其の儘胎兒に現はれることは、到底信ずべからざる臆説である。晩近の生物學は、環境の爲に母體に起つた變化が遺傳して、其の子に再現することは否認されて居る。若し又姙婦の觀念が産兒の性に決定を與へることが事實であるならば、大多數の場合に於て、母は已れの冀望する性の兒を設くることが出來る筈であるが、併し事實は決して左様でない。

次には又傳統的に大なる權威を有つて居る説は、一對の卵巣が、左右に從つて性を異にせる卵を造ると云ふ考である。近時に至つても、英國の醫家ドウソンの如きは、此の説を固守して、男性を造る卵は右の卵巣に於て生じ、女性になる卵は左の卵巣から生ずると説いて居る。氏の言ふ所では右の卵巣は左のよりも大きい。夫れ故に男兒は女兒よりも稍數多く生れるのである。併し斯様な説が一種の空想に過ぎない立派な證據としては、手術によつて一方の卵巣を取り去つた後にも、矢張男女兩性の子が生れる事實を擧げることが出來る。

性別決定の問題が、學問上の基礎を得る様になつたのは兩性の生れる數の統計的調査であつた。而して之の調査の結果として得られたる大切なる獲物は、大數の上から統計すれば、雌雄男女の生産數は略相等しいと云ふ事實であつた。動物でも左様であるが之を人間に就て見るも、國によつて多少の相違こそあれ、先づ女兒の生産一〇〇に對して、男兒の生産は一

〇三一一〇七の間に位し、吾邦に於ても、近時は女兒の一〇〇に對して、男兒は一〇四人強となつて居る。何れ個々の夫婦間に就て見れば、男女の生れる數は、必ずしも平均はして居ないで、往々一方にのみ偏する場合があるのは云ふを俟たない。

そこで此の統計的調査に於て、兩親の年齢と、男女兩性の生れる比例とを比較して、兩親の年齢が、性別の決定に密接の關係があると說いたのは、ホーフアッケル及びサドレル氏等であつた。氏等は夫が妻より年長であると、一般に男兒が餘計生まれ、之に反すると、女兒が比較的多く產まれる傾向があると說いた。此れ即ちホーフアッケル、サドレル氏法則である。例へば四千の出產に就て調べた成績によると、夫が妻よりも若い場合には、男女の生產數は略相匹敵するが、次に夫婦の年齢が同じ場合には、女兒の一〇〇に對して、男兒は一〇二・七であり、更に又夫が妻よりも年長であると、女兒一〇〇に就きて、男兒一〇五・七であると云ふて居る。併し此の考察も決して信用出來ない、スチーダや、ベルナー等の統計は、正反對の結果を齎して居る。

次にスタークウエザー及び其の追從者たるバン・リユイの說である。抑々兩親の中、元氣旺盛なる者が、自己の性を子供により強く印象すると云ふ考は　ヒツポクラテース以來夙に唱へられた所であつたが、之れが延いて現代に於ける勢力旺盛說を產んで居る。スタークウエザーによると、子供の性別は、元氣旺盛なる方の親によつて決定せられるもので、常に其の優勢なる親と反對せる性の子供を喚び起すものである。而かも其の體の性質は、優勢なる親に肖よる。例へば母が父よりも元氣旺盛である時には其の子は男性で、而かも其の心身の性狀は母に似て居るものが出來る。

バン・リユイの說に從へば、生殖細胞と、夫れを宿せる個體との間には、反對の性質を具へて居る。即ち精蟲は一般に女性を造るべき性質があり、卵は男性を喚び起すべき性質を有つて居るものである。そこで、今若し比較的優勢である精蟲が、比較的薄弱なる卵によつて受胎されると、其の子供は女性となり、而かも其の心身は父に似たものになる。隨つて又男性の子が出來るのは、優勢な卵が、薄弱なる精蟲と合一する場合である。

斯の說に對しても、多くの反駁が加へられる。第一には、元氣が優つて居るとか劣つて居るとか云つても、心身の多くの性狀の中、何れが其の標的となるか、頗る漠然として居る。或る性質は父が母に優れて居つても、他の性質は却つて母が父に勝つて居る樣なこともあるであらう。

次に又動物に在りては、優秀なる雄が、他の雄に打勝つて、多數の雌の所有者となる樣な場合、其の子供には專ら雌が產れるかと云ふに、決してさうでない。即ち必ずしも優秀なる者と反對の性が、子供に實現さるゝものとは限らない。

勢力旺盛說に對する第三の非難は、双生兒に見らるゝ事實を說明することが出來ぬ點にある。双生兒には二通りがあつて、其の一は、一個の卵が一個の精蟲によつて受胎されたものが、二分して、其の各々から一個體が發育する場合である。斯る際には、双生兒は常に同一の性を示すものである。之に反して、若し二個の卵が、夫々二十四時間乃至一ケ月位の範圍內で、時を異にして成熟し、二個の精蟲によつて受精せられて、二個の個體に發育した場合には、其の双生兒の性は、必ずしも一致せずして、一人は男性であり、他の一人は女性である樣な場合がある。併し若し勢力旺盛說が眞理であるならば、斯る場合を說明せんが爲めには、僅に二十四時間乃至一ケ月間に、父と母とが、勢力旺盛の點に於て、其の位置を顚倒したと云ふより外に仕方がない。而も斯ることは到底考ふべからざることである。

次には所謂榮養說であつて、性別が母體の榮養の如何によつて決定せられると云ふ說が、先づ動物、就中蝶や蛾の種類で行つた實驗成績から提唱せられ、人間に於ても亦、これが適用せらるべきものであると信ずる學者が少なからず出た。ウインナ大學の生物學教授であつたセンクの如きも、其の有力なる代表者であつた。氏の云ふ所によると、婦人が、受胎前に、蛋白質に富み含水炭素に乏しき食物を攝取し、同時に始終尿を檢査して、尿中に少しも糖分の出ない樣になつた時、始めて姙娠を許され、又姙娠中も、約八週間は同樣の食餌を取る樣にすると、男兒を生むと云ふのである。

動物實驗に就ては、蝌斗（オタマジャクシ）が、屢々好箇の材料として用ゐられた。其の他蝶や蛾の類でも、食物の如何によつて、雌雄の

生れる數に非常な影響があることが報告された。元來此の說の根據とする所は、女性の體に餘計の材料を體內に蓄積して、建設的の生理作用が、破壊的の生理作用に打ち勝つて居るもので、そこで過剩の榮養物を供給すると、女性の兒が生れ、之に反して榮養が不足勝であると、男兒が生れると云ふのである。此の說を唱へて居る主なる近時の學者に、ユング、キユネー、トムソン、ゲッツ等である。

併し此の說も甚だ當にならない。先づ第一に此の說の主張が正しいとすれば、生殖細胞は全然定まつた性なき中性のものであつて、榮養の如何によつて、雌雄男女何れかに變はるものと云はなければならぬ。併し夫れは輓近生物學の考慮と相反するものであつて、榮養の如何によつて、母の體に起る變化が、生殖細胞若くは胎兒に影響して、其の爲に性を決定するが如き考へは、最初に批判を加へた母體感應說と大差ないもので、到底之を承認することは出來ない。斯く理論上より此の說を認容することが出來ないのみならず、事實上から見ても、また宛てはまつて居ない。若し常に榮養が性別を決定すべきものであるとしたならば、双生兒は常に同樣の性を示すべきであるが、事實は必ずしもさうでない。又動物の實驗成績に徵するも、近時キングが蝌斗につきて愼重に肉、小麥、卵黃、混食等種々なる飼養の下に觀察した所によると、食餌の如何に關せず、常に略同數の雌雄が生じて居ることから見れば、正に斯の說に反對せる成績であると云はなければならぬ。又家畜は、同一種類の野生の動物に比して、一般に過度の榮養を受けて居る。然らば家畜は多く雌を産むかと云ふに、必ずしもさうでない。又或る動物が、新たに或る地方に入り込んで、長日月間を通して過剩の榮養物を以て惠まれ、非常なる勢を以て繁殖を續けた場合、例へば濠洲に兎が入り込み、亞米利加に英國の雀が繁殖した樣な場合に於て、若し榮養が雌性を造ると云ふのであるならば、雌性の動物が餘計に生まれる筈であるが、事實は夫を許つて居ない。又人間に就て、デュシングは、貴族や富家には女兒が多く生れ、貧民には男兒が多く生れることを說いて居るが、併しパンネツトの浩汎なる統計的調査によると、反對の結論に到達して居る。

チュシングの如きは、榮養說に基いて、過度の榮養は常に女性を造ると云ふ考へから出立して、受胎せる卵の年齢が性別の決定に大關係あることを說いた。畜産家が往々唱へる如く、牝牛に發情時の初期に交尾を行はせると、多くは牝牛を生み、之に反して、其の末期に交尾さすと、牡牛を多く生むと云ふことは、全くチュシングの說の正しいことを裏書するものであつて、卵が新しく成熟した初期には、榮養が十分であるが、日を經るにつれて夫れが不十分となる。そこで交尾期の初期に交尾が行はれると雌性が生れ、末期に交尾すると雄が多く出來ると云ふのである。併し此の說に對しても、前の榮養說に對する反駁を繰り返すことが出來るのであり、且つ又交尾と受胎とは必ずしも同時に行はるゝものではないことを考ふる時、其論據は頗る薄弱になつて來る。

要するに性別決定に關しては、斯く幾多の說を列擧することが出來るが、而かも何れも滿足なる說明を與へるものはない。然らば全然未可解のものとして此の重大なる問題を葬り去らなければならぬかと云ふに、決してさうでない。吾等は與へられたる此の大問題を解かんとする前に、先づ自然界に於ける大なる調節の現象として雌雄男女の生産數は常に相等しいと云ふ動すべからざる統計的事實に着目する必要がある。而かも以上列擧せる諸說によつては、到底此の重要なる事實に滿足すべき說明は與へられないのであるが、獨り較近遺傳學の立脚地より之を考察する時のみ、十分に之を釋明することが出來るのである。即ち性別決定の問題も、畢竟するに遺傳の一問題たるに過ぎないのであつて、親の何れかゞ、其の性を子供に遺傳することによつて起るものと云はなければならない。

五

第一次性別の決定が遺傳によつて行はれるものとして考察する場合、已述の如く、性比即ち兩性の數が、略相等しいと云ふ統計的事實は、最も重大な意義を有するものでなければならない。蓋しメンデル法則によつて明示される如く、斯

る等しい數の割合が出來る場合には、何れか一方が等接合體（ホモチイゴート）で、他方に異接合體（ヘテロチイゴート）でなければならない。等接合體とは、或る遺傳性質に關して父方からと、母方からと、同樣の遺傳物質を受けて居る場合を云ふのであり之に反して異接合體とは、父と母とから、夫々異なつた遺傳物質を受けて居る場合を云ふのである。例へば今Fを以て女性たらしむべき遺傳物質とし、Mを以て男性たらしむべき遺傳物質であると假定すると、女性の場合には、Fを有せる卵子に、Fを有せる精子が受胎して、FFなる等接合體となつて居り、之に反して、男性が出來るのは、Fを有つ卵子に、Mを有つ精子が受胎するのであつて、MFなる異接合體となつて居ると考へることが出來る。さうすると、女性の生殖細胞たる卵の中にある性に關する遺傳物質は、FFであり、夫れが受胎の準備をなすべく豫め遺傳物質を半減する場合（所謂減數分割）、卵は何れもFなる遺傳物質を有つ一通のものとなるが、精子が減數分割を行ふ場合には、Fを有つものと、Mを有つものとの二通が出來て、而かも其の數は相等しいことになる。そこでFを有つ精子が、Fを有つ卵と合體してFF即ち女性を造る機會と、Mを有つ精子が、Fのある卵と受胎して、MF即ち男性を造る機會とは、大數の法則から考へると、均等でなければならないから數十數百と云ふ少數でなく、數萬數十萬と云ふ大數に就て見ると、略同數の男女雌雄が出來ることになるのである。

以上述べた所の關係は、雄性が等接合體であり、雌性が異接合體である場合にも適合する。然る時には、雄性はMMであり、隨つて減數分割によつてはMなる遺傳物質を有つ一通の精子が出來、之れに反して、雌性はFMであり、減數分割によつてはFを有つ卵と、Mを有つ卵と、二通が出來て、Fを有つ卵に精子が受胎すると、FM即ち雌を生じ、之に反してMを有つ卵に受精が行はれると、MM即ち雄性を生ずることになる。實際廣く生物界を見渡すと、（一）雌性が等接合體、雄性が異接合體、隨つて減數分割によつて、卵には一通しか出來ないが、精子には二通を生ずるものと、（二）雌性が異接合體、雄性が等接合體で、卵に二通を生じ、精子には一通しか出來ないものとの二樣の型式が見られる。（一）の型式は、人類を始めとして殆んど凡ての哺乳動物及び各種の昆蟲類に於て見られるもので、特にモルガン氏によつてドロソフイラ（果蠅、

に就て、實驗的によく調査されて居るから、之れをドロソフイラ型と呼んで居る。此の種の特徴は、性の決定が、精子によつて行はれることで、精子には、雌を生ずべきものと、雄を生ずべきものとの二様があることである。之れに反して、（二）の型式に在つては、性別の決定は、卵子によつて行はれるもので、卵に雌を生ずべきものと、雄を生ずべきものとが、始から二様に分かれてあるのである。此の型式に屬するものは、蝶類や、海膽や、鳥類に於て見られるもので、特にアブラクサスと唱ふる蝶に於てよく實驗的に研究されて居るから、アブラクサス型とも云ふ、或は海膽即ちエヒメス類に於てよく知られて居るから、エヒメス型とも呼ばれて居る。

六

若し斯る假定が正しいものとしたならば、卵と精子とに於て、遺傳物質を荷へる細胞の核の中にある核絲なるものに、何等か相違を見るべき筈である。然る所近時細胞學上の研究によつて、果して此の豫想を實現することが出來た。元來核絲なるものは、動物の種類によりて一定數を示すものであるが、夫の數が、同種類の動物でも、性の異なるにつれて違ひがあることが、近時に至つて分つて來た。例へば人間ではギニワーター氏が白人に就て調べた所では、卵の核絲の數は四十八本であるが精子のは夫れよりも一本少なくて四十七本である。更に又進みて各核絲の狀態を研究して見ると、夫々固有の性狀を具へ特殊の遺傳物質群を荷つて居るもので、隨つて遺傳學上獨特の機能を爲すものであることが明かになつて來た。そして此の核絲は、受胎に際して、其の一半は父方より、他の一半は母方より與へらるゝものであることは言を待たないのであるが、其の父方から來たものと、母方から來たものとは、各々對をなすものである。そこで前例、人間の卵の如く、核絲の數が48で偶數である場合には、相匹敵せる二つ宛のものがあつて、二十四の對をなすものであるが、之に反して人間の精子の如く核絲の數が47で奇數である場合には、23の對をなすものと、外に一個だけで對をなさぬものとが

あることになる。精子に於ける此の對をなさぬ染色體をX染色體若くは性別を決定する上に大切なる意味を有つて居る所から性染色體と唱へるのである。つまり卵に於ては23對の普通染色體の外に尙ほ一對即ち二個のX染色體があるのであるが精子に於ては23對の普通染色體と、唯一個のX染色體があるのである。即ちX染色體が二本あれば女性となり、一本しかない時には男性となるのである。

　そこで上述の如く受胎の準備として生殖細胞が減數分割によつて核絲を半減する場合には、卵に在ては核絲の關係に於て23+Xと云ふ一通りのものしか出來ないが精子にありては23+Xと、23と云ふ二樣の核絲の配列を有するものが同數出來る譯である。今若し23+Xの染色體を有する卵と23+Xの染色體を有する精子とが合一すると48（其の中にX染色體が二個ある）の核絲を有する女性が出來る。之に反して23+Xの卵と23の精子を受胎すると47（其の中にはX染色體が唯一つある）の核絲を有する男性が出來て而かも男女兩性の數は同じにならねばならぬ。

　斯く人間は、已述の如く一般哺乳動物と同じく、ドロソフイラ型に屬するものであるが、人間の染色體の數に關しては、所説が一定して居ない。上述の如くウイニワーターは、白人に就て檢査し、男四七個、女四八個で、其の中男には普通染色體が四十六（二十三對）と、X染色體が一本あるが、女には普通染色體四十六（二十三對）の外、X染色體が二本ある。ガイヤーが、黑人に就て檢べた所によると、男子では二一本で、其の中二〇（十對）は普通染色體で、尙ほ一のX染色體がある。そこで減數分割に於ては10+0のものと、10+XXのものとの二樣が出來る。然るに女子では、十對の普通染色體の外、四本（二對）のX染色體がある。そこで減數分割によつては、10+XXなる一通のものが出來る。其の他ギーマンによると、男の染色體は二四個で、其中二二（十一對）の普通染色體と、一個のX染色體があるが、女では、十一對の普通染色體の外、二個のX染色體がある。随つて減數分割によつて、精子にはXを有するものと、Yを有するものとの二樣が出來て、前者は受精によつて女を生じ、後者は男を生ずることになると云つて居る。

七

尙ほ又性別の決定が特殊の遺傳物質によつて出來るものであり、而して其遺傳物質は各種の形質を決定すべき一般遺傳物質と等しく、メンデル法則に從つて離合集散するものであることは伴性遺傳の研究からも、確實に立證せられて居る。伴性遺傳とは、男性たるか女性たるかに從つて、或る形質の遺傳關係が、趣を異にする場合を云ふのである。其の最もよく知られたる例は色盲の遺傳である。

普通の眼は、光波の波長の異なるにつれて、之を各種の色として感ずる能力を有つて居るのであるが、色盲の人には、この能力が缺けて居る。就中最も屢々見らるゝ色盲は、赤と綠とが共に色のない感じ即ち灰色に見えて、隨つて此の兩者を甄別することの出來ないもの、即ち所謂赤綠色盲なるものである。而かも注目に價することは、夫れが專ら男子に見られて、其の數は約三%に上るに反して、女子には其の數男子の十分の一にも及ばざる程の極めて少數なることである。なぜ女子には色盲がないのであるか。その謎は、色盲の遺傳に關する研究によつて始めて奇麗に解くことが出來た。色盲は確かに遺傳性のものであるが、而も其の遺傳する有樣を統計的に調査して見ると、極めて奇妙に感ぜられる事實がある。例へば（一）色盲の男子と色盲の家系に屬せざる隨つて色盲の遺傳質を有たない女子と結婚したとすると、其の間に生れた子供は、男女共に健眼であつて、色盲にはならない。

（二）色盲の父と、健眼の家系に屬せる母との間に生れたる色盲でない男子が、色盲の家系に屬せざる女子と結婚すると、其の子供は男女共に悉く健眼である。而して此の健眼なる子女が、健康なる家系の子女と結婚すると、其の子孫は又全く健眼である。是に由つて之を觀れば、色盲の父と、健眼なる家系の母との間に生れたる男子の子孫は、其の人が色盲の家系に屬せる人を配偶者とせざる以上、幾代か代を重ねても、色盲者を出す憂はない。即ち父の色盲は其の男系には遺傳

しない。

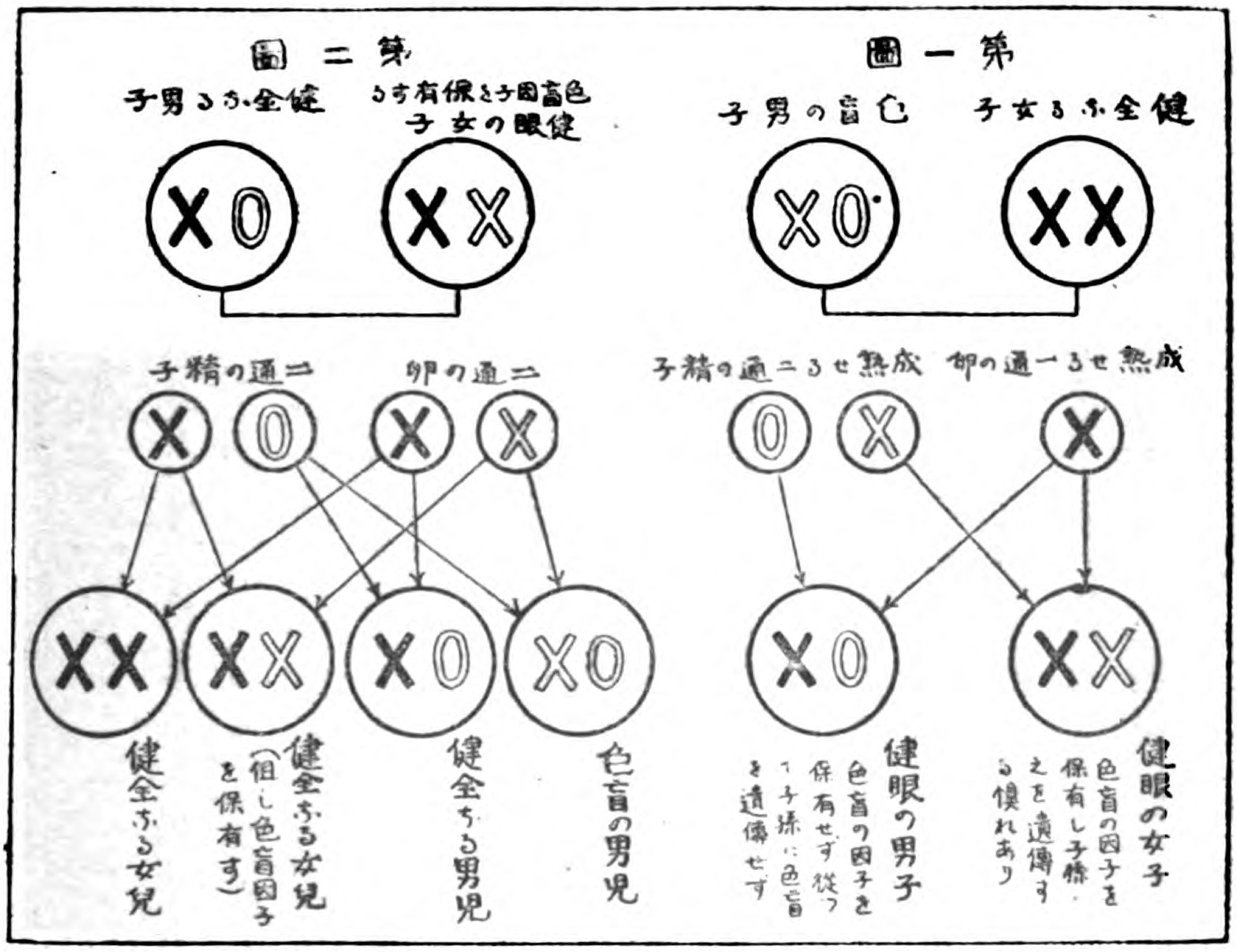
（三）色盲の父と健眼の家系に屬せる母との間に生れたる女子は、上述の如く、自分自身は色盲でない。而かも此の健眼なる女子が、健眼の家系の男子と結婚すると、假令配偶者自身は共に健眼であつても、其の間に生れた男子の半數は、色盲になる。之に反して、其の女子では、何れも皆健眼である。是れによつて之を觀れば、色盲の家系に屬する女子は、たとひ自分は色盲でなくとも、色盲たるべき遺傳因子を保有し、隨つて父の色盲は其の娘（夫人自身は色盲でなき）を通じて、男性の孫（其の半數）に遺傳するものである。斯樣な關係であるから、色盲は男子には多くして、女子には比較的少ない事がよく分る。

（四）女子と雖も、全然色盲を起さないものではない、若し色盲の家系に屬する男女が結婚すると、色盲が女子にも現はれて來る。即ち色盲の家系に屬する女子で自分は色盲ではないが、併し色盲の遺傳因子を保有せる人が、色盲の男子と結婚すると、色盲の遺傳因子が相重なつて、濃厚となる結果として、其の間に出來た子供は、男女共に半數は色盲になる。而かも斯く色盲者間の結婚の行はれる機會は、極めて稀であるから、從つて女子には色盲を見ることが少ないのである。

（五）色盲の女子が、色盲なき男子と結婚すると、其の間に出來た子供の中、男子は皆色盲になるが、女兒は皆色盲にはならない。即ち母の色盲は男兒に傳はり、父の健眼は女兒に遺傳する。即ち所謂交叉遺傳なるものが起る。

色盲の遺傳に就きての以上のべた事實から見ると、色盲が遺傳に依つて現はれるのは男子に多くして女子には少なく、而かも其の色盲の遺傳因子を後代に遺傳する媒をなす者は、男子でなくして女子であることが分かる。

扨て前述の事實を、遺傳の學說上、如何に說明すべきかと云ふに、已述の如く、性別を決定する爲の遺傳因子があり、それが他の般の遺傳因子と等しく、メンデル法則に從つて離合集散すと考ふることによつて、滿足なる解決を與へることと



が出來るのである。例へば（一）（二）（三）の項に擧げたる事實の說明を與へんに、上述の細胞學上の研究によつて知られたる如く、Xが二個ある時女性を、Xが一個ある時男性となることを前提とし、又色覺を起すに必要なる發育を、眼の網膜に喚び起すべき遺傳因子を黑色にて示し、該因子が缺如して色盲となるものを白色にて示すとXX健全なる家系に屬せる女性XXは色盲の女性XXは健眼なるも併し色盲因子を保有せる女性に相當することになる。XOは健全なる男性。又XOは色盲の男性に於ける遺傳因子の配列を示すことになる。そこで今色盲の男子と、健全な女子との間に結婚が行はれたとすると、其の生殖細胞が受胎に先だつ準備として、減數分割を行ひ、遺傳因子（核絲）を半減すると、第一圖に示す如く、卵には一通しか出來ないが、精子には二通が因數の割合で出來て、此の成熟せる精子と卵とが合一する機會は均等であらねばならぬから、大數の計統を取つて見ると、略相等しい數の男女が生れ、而して兩性共に健眼であることがよく分る。而して斯くして出來た男兒の遺傳因子には、Xのみあつて、X即ち色盲たるべき因子がないのであるか

ら、此の男子が健全なる家系の人を配偶者とすれば、其の子孫には色盲者の出る憂はないのである。

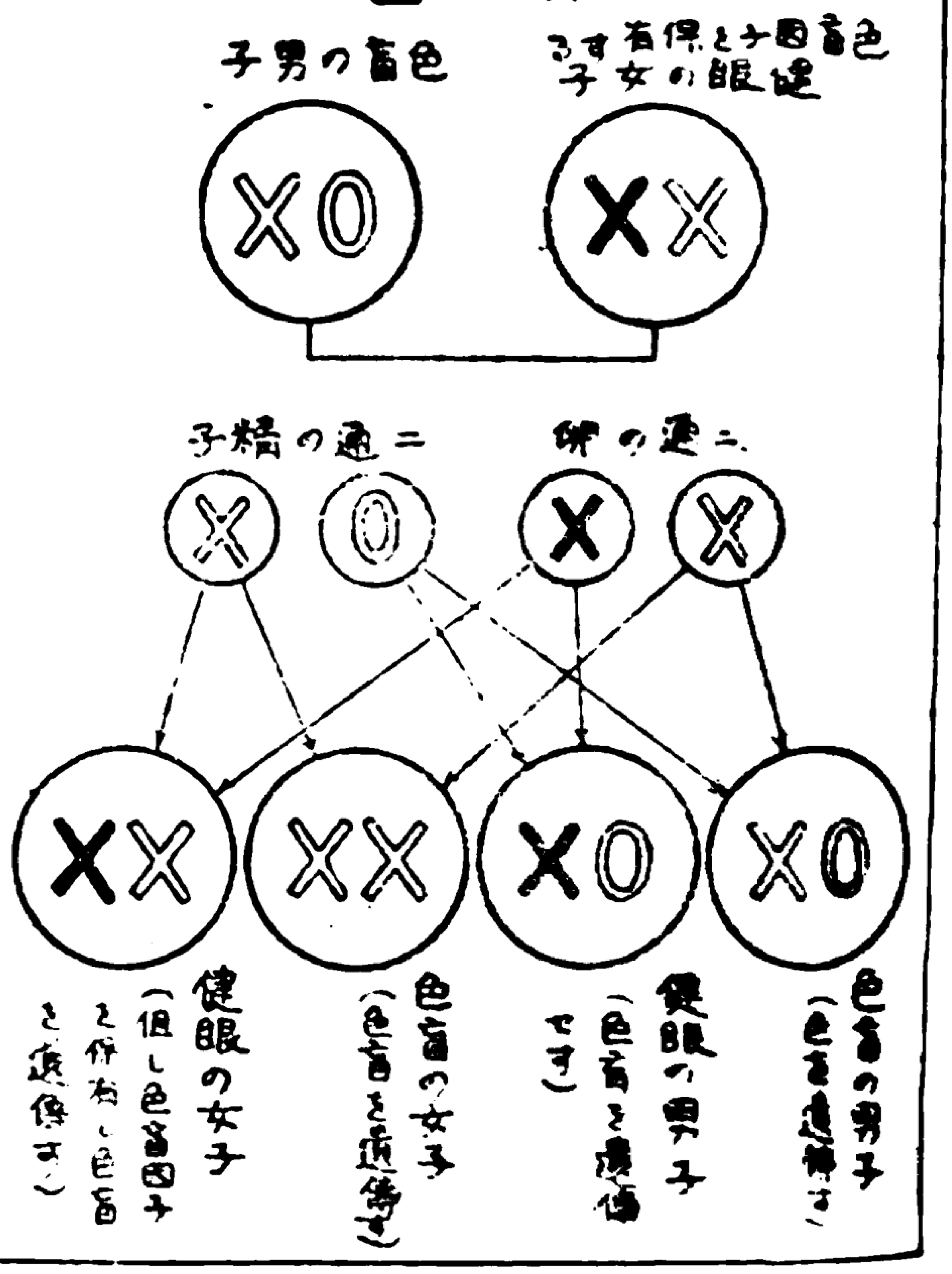
之に反して、女兒では二個のX中一個は**X**であつて、隨つて色盲にはならないが、而かも他の一個は**X**であつて、色盲たるべき遺傳因子を保有して居る。そこで今この健眼ではあるが、而も色盲の因子を保有せる女子が健全なる家系の男子と結婚すると、第二圖に示す樣に、其の女兒は皆健眼であるが男兒の半數は色盲となるのである。

次に色盲遺傳因子を有せる男女間に結婚が行はれると、第三圖に示す如き方式によりて、其の間に出來た子供は、男女共に半數は色盲となることを豫想しなければならぬ。卽ち盲の血が濃厚になる場合、女子にも亦色盲を起すものである。

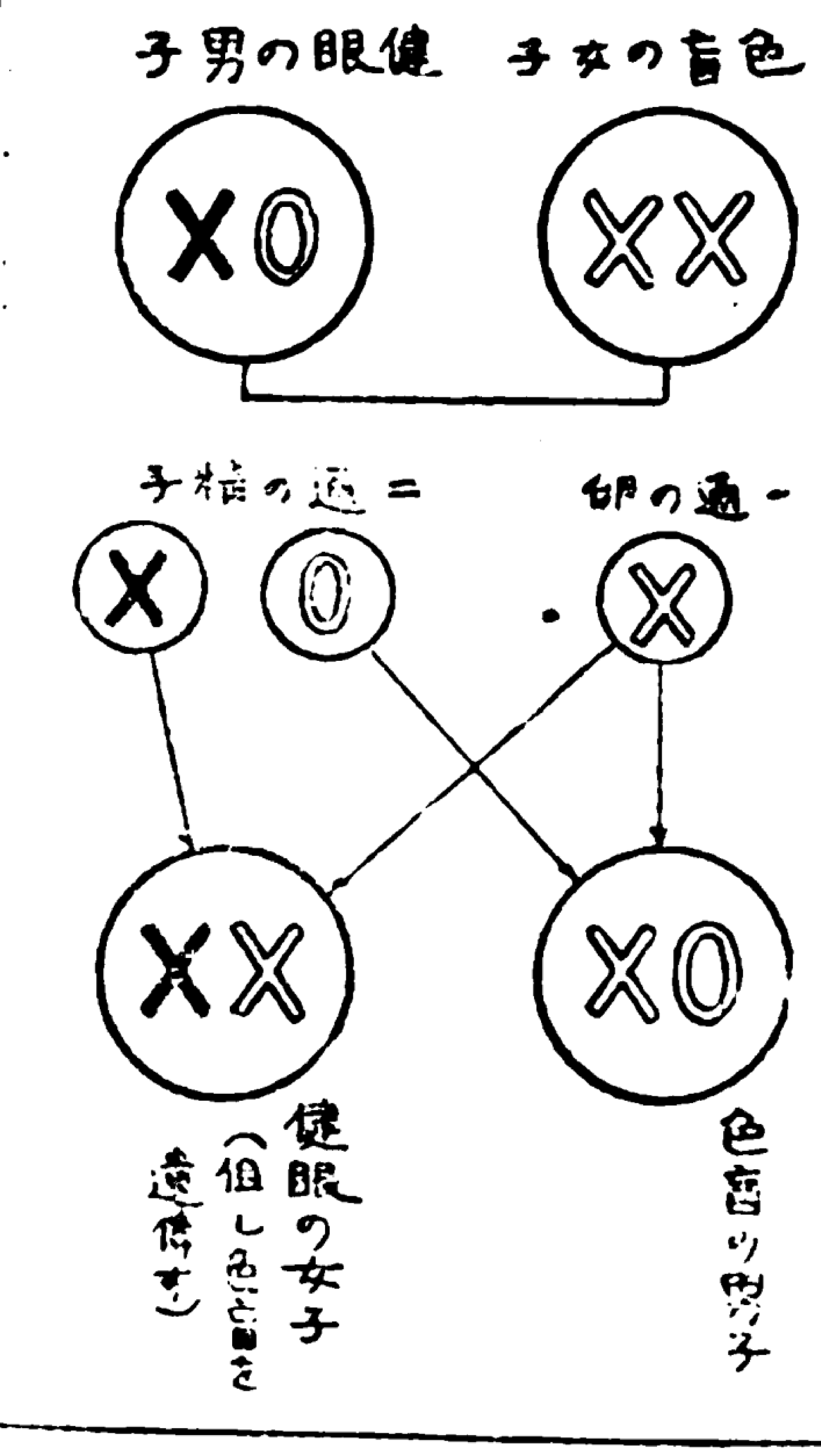
同樣に又第四圖に示す所によつて、色盲に於ける交叉遺傳の關係を容易く理解することが出來る。

斯く色盲其の他一般に伴性遺傳の現象が性別決定に關して、特殊の遺傳物質があり、而して該遺傳物質は一般の遺傳物質と等しくメンデル法則に從つて離合集散するものであるとして、奇麗に說明せらるゝものとしたならば、性別の決定

第三圖



第四圖



は、人間の如きものに於ては、早く已に受胎の瞬間に於て起るものと見ることが妥當であらねばならぬ。隨つて榮養とか温度とか云ふ様な環境の爲に後天的に影響せらるべき筈のものではない。

蓋し若し已述の如く性別決定に關するセンクユング、キユネー諸氏によつて唱導せらるゝ榮養説が、正しいものであるとしたらば、双生兒は毎も同様な性を示すべきであるが、併し事實はそうではない。双生兒がいつも必ず同様の性を示すのは一卵性双生兒の場合に限られる。一卵性双生兒とは何を意味するかと云ふに、元來一個の卵細胞に、一個精子が入り込んで、受胎を遂げた卵細胞は、間もなく分割して二個となるのであるが、此の際其の二個が相寄つて居ると、夫れ〳〵身體の右半と左半を造るべき運命を持つて居るのである。併し若し何らかの原因で、二個が相分離すると、各々が一個の完全なる個體を造り、斯くて二個の胎兒が出來る。斯る場合を、一卵性双生兒と云ふのである。之に反して、人間に於て、通常の如く、一個の卵細胞が二十八日毎に成熟して、夫れに一個の精子を受胎することの代りに、稀れに二個の卵が同時に成熟して、各卵細胞が夫々一個の精子と合一することがあるが、さうすると、二卵性の双生兒が出來るのである。斯の二卵性の双生兒では、蓋然律によりては、(一)双方共男性の場合と、(二)甲が男で乙が女の場合と、(三)反對に甲が女で乙が男の場合と、(四)甲乙共に女の場合とが、均等なる機會を以て起り得るのであるから、つまり双方共男性の場合と、一人が男で他の一人が女の場合と、兩方共に女性の場合との數の比は1:2:1の割合をなすべきである。實際羊の如き、專ら二卵性の双兒を生ずるものでは、斯の比率を取つて双生兒が生れるのである。隨つて人間でも、若し凡ての双兒が二卵性のものであるとしたならば、双生兒の統計を取つて見る場合、上記の三つの場合の比率は、1:2:1となるべきである。然るに事實はさうでなくして、人間の双生兒では、双方共に同性のものゝ比率が比較的高い。ニコル氏の多數の双生兒に就きての統計調査の成績によると、次の如き數を示して居る。

双方共に男	一方が男他方が女	双方共に女

231437 : 264008 : 213312

1 : 1 : 1

即ち上記三の場合は、略同數であつて、共の比率は 1:2:1 となる代りに、1:1:1 となつて居る。是れ畢竟双生兒には、二卵性のもの丶みでなく、一卵性（隨つて毎に性を同じうす）のものが加はつて、双方共同性の者の數を増すからである。

一卵性の双生兒は常に同性であるが、之に反して二卵性の双生兒では、双方共に同性の場合の外一方と他方とが性を異にする場合が起ることの事實は、疑もなく、性別の決定が、遺傳物質によつて惹起さる丶ことを明瞭に裏書するものである。北米產のキワヨ（犰狳）と稱する動物の如きは、四匹の子を產むが、それは常に皆同性である。而して共の發生の狀を見ると、一卵性であつて、一個の受胎した卵が、二回分裂を重ねて、四個となつたものが、相分離して、各一個の胎兒をなすのである。蓋し性別の決定が遺傳物質によるならば、一個の受胎せる卵が、二分し、若くは四分して生ぜる双生兒若くは四個の胎兒は、性別に關して、同一の遺傳物質を有すべく、即ち悉く皆同性であらねばならぬが、二卵性のものに於ては、性に關する遺傳物質の結び附きは、或は双方共に男性か、若くは女性か、若くは一方が男性で一方が女性であり得べく、共の各場合の比率は、已述の如く蓋然律によつて決定せらるべきである。

八

さて以上述べ來つた所によつて、主要的性別の決定は、遺傳によるものでなければならないことが、遺傳學上の實驗的事實と、細胞學上から得た研究成績とから、確實に立證されたのである。然らば、更に一歩を進めて、X染色體なるものが、如何なる性別決定の遺傳物質を有つて居るのであるかを考察しなければならない。ドロソフイラ型に屬する人間に於

ては、已述の如く、精子に二通を生じ、其のXを有つものが受精すると、雌を生じ、Xなきものが受精すると、雄になるのであるから、Xなる染色體は、雌性を決定すべき遺傳物質を有つて居ると考へなければならない。今Fを以て雌性遺傳單位と見做し、Fを缺くことをfで示すと、FはX染色體にあるのであるから、XXはFFとなつて雌を生じ、XOはFfで雄を生ずと云ふ結論になる。併し夫れには、F即ちfなきことが、Fに對して優性となつて、雌性遺傳質を抑壓して、雄性を生ずるものと見なければならないが、而かも斯の如く、無が有に對して優性となると云ふが如きことは、不合理のことで到底考ふべからざることである。

若し又、一般メンデル則に從つて、大數に就て云へば、男女の生れる數が略相等しくあることは、不純優性と、純劣性との交配によるものと見做し、Mを以て雄性遺傳物質として、mを以てMのなきこととすれば、不純優性たる男性はMm、純劣性たる女性はmmとならなければならない、そしてMなる遺傳物質が、X染色體にありとすればMm、即ちXOであつて、雄性の生ずる所以を說明し得るとするも、何故にXXが雌性を生ずるかは、說明することが出來ない。

斯る困難を一掃して、X染色體の遺傳學上の意義を明瞭にする爲めに、ゴルドシユミツトは、次の見解を提唱した（一）雌性も雄性も、共に雌雄兩性の遺傳物質を有つこと。（二）而し其の兩性の遺傳物質の量的關係は、個體により異なること。（三）一個體內に並存する雌雄兩性の遺傳物質の、何れが發露し、随つて何れの性徵を顯現するかは、一に當該個體に於ける雌性乃至雄性遺傳物質の量の多少に基く、力の强弱に因ること。

今Mを以て雄性遺傳物質を表はし、Fを以て雌性遺傳物質とし、Mなる遺傳物質は、X染色體內にあり、Fなる因子は、X染色體以外の染色體、例へばY染色體乃至は原形質內に在り、而かも獨り雌生性殖細胞即ち卵を通してのみ遺傳せられるものと假定する。さうすると、蝶類の如く、アブラタサス型に屬するもので、雄はXX、雌はXOの場合には、雌性は（F）Mmとなり、雄性は（F）MMとなる。そしてFなりMなりに夫々量に應じて雌性乃至雄性を顯現せしめんとす

る力に强弱があると假定すると、前に述べた樣なヂレンマに陷ることなく、よく遺傳學上からの考察と、細胞學上から得た成績とを調和して、X染色體の意義を明瞭にすることが出來る樣になる。

ゴルトシュミット氏は、斯る想定に基いて、獨り正常の性別決定を滿足に說明し得たのみならず、更に進んで純然たる雌でもなく、純然たる雄でもなく、其の中間に立つ所の雌雄中間性のものゝ出來る所以を明かし、實驗によつて之を立證した、そして其のことが、性別と遺傳の學說の上に大なる光明を齎らしたと同時に、性の本質を考察するに當つて、全く新らしき態度を取らしむるに至つた。

九

さて主要性徵の決定は、上述せる如く遺傳によるものであり、遺傳學の問題として取扱はなければならなくなつて來たのであるが、然らば附帶性徵の決定は、果して何によるものであるかと云ふに、之には明かに二樣の別を立てなければならないのである。其の一は、附帶性徵も亦、主要性徵と等しく、全然先天的遺傳によつて決定せられる場合であつて、斯の場合には、後天的の影響は、何等之を動かすべき力を有たないのである。斯の如き場合は、昆蟲類に於て見るのである。

之れに反して、第二の場合は、附帶性徵の決定は、主として主要性徵に待つのである。換言すれば、雌性生殖腺があれば、夫の爲めに雌性の第二次性徵が喚び起され、之に反して、雄性の生殖腺があれば、之れによつて雄性の第二次性徵が現はされるのである。醫學の泰斗ウイルヒョウは、此のことを『吾等が婦人に於て敬愛すべきあらゆる物は、悉く皆卵巢の賜である』と云ふ麗辭を以て云ひ表はして居る。斯く生殖腺が、第二次性徵を決定する上に、有力なる働をするものであることは、幾多の證跡を擧げることが出來る。

先づ男女の心身の差別の發露する有樣を見ると、胎內生活の時期は勿論のこと、幼少なる年齡期には性の差別は極めて

微弱であるが、年を追ふに從つて漸く夫れが明瞭となり、一定年齡即ち年頃に達すると、男らしさ女らしさが其の高潮に達する。而して其の時こそ實は是れ迄未發の狀態にあつた生殖腺の蕾が、立派に咲き揃ふたときである。更に又老年期に向つて生殖腺の花が凋落するにつれて一旦現はれた性の差別は再び不明瞭となつて花恥かしかりし新郎新婦も、何れを夫れと分ち難き尉と姥とになるのを見ても、生殖腺の潮の、一進一退と作つて性別の舟も亦一進一退して居ることを明かにすることが出來る。

更に又た主要性徵が、附帶性徵を呼び起す根源であると云ふ考へは、去勢に關して見られたる幾多の事實によつて裏書された。元來去勢なるものは、人間が、動物や加之人間自己の上に加へた最も古い手術であつた。蓋し太古人類の祖先が、獵者の生活に一歩を進めて、野獸を馴らして、之を自分の思ふが儘に利用すべく、牧者の生活を始めた時に、雄よりも雌の方が柔順であり、且つ肉も亦美味である所から、人間は何時しか雄を變じて雌となしたいと云ふ冀望から、雄にのみあつて雌にない睪丸を切り取つて、偶然にも成功を喜んだものと見える。又人間自身に去勢の手術を施こすに至つた動機を考ふるに、二つあつた。其の一つは信教的信念であり、他の一つは多妻主義であつた。蓋し最も神秘なる生殖の作用に直接關係せる生殖器其の物を神秘なるものとなして、之を宗教的に崇拜するに至つたのは、自然の勢であつて、土俗學上世界到る所に見らるゝ生殖器拜祈の慣習は、斯る立場から見ても、頗る興味を唆るのである。隨つて又斯の神聖なる生殖器に手術を加へることは、神に奉仕することの最高の標徵であり、又天國に入るべき最善の道であると云ふ樣な信仰を懷くに至るのであつて、現に露國の「スコプツエン」や及びルーマニアの「リポツーネル」の如きは、斯る信仰から男子に去勢を實行して居る。又歐羅巴では中世紀に於て、寺院が讃美歌の歌ひ手として美聲の男子を要求した結果、去勢が實行された。多少動機は異つては居るが、矢張宗教に關聯して居る。次に多妻主義と去勢とは、離るべからざる關係を保つもので、王侯貴族の後房に奉仕する男子をして、危險なからしむる爲には、此の方法によるの外はない。去勢された男子

を「ユーヌヘン」と云ふのは、言語學的に之を立證して居る。「ユーヌヘン」とは、寢臺の番人と云ふ意味である。そこで埃及小亞細亞支那等の古文明國に於て、之が實行されたのは敢て怪むに足りない。土耳古では、今猶ほ貴族富豪の子女が婚嫁する時、其の嫁入り道具の一として、去勢された男子が追隨する。是れ等の男子は無慘なる人買の手によつて、容赦なく製造せられ販賣せられて居るのである。

斯様な關係から、人間でも、動物でも去勢は專ら雄性に於て行はれ來たのである。今生殖腺の働きがまだ目醒めて居ないで、隨つて性の特色が發現して居ない幼少時に於て、去勢が行はれるとき、年月を重ねても、性の特徴が現はれて來ない。然るに之に生殖腺を移殖すると、後れ馳せながら其の特徴が立派に現はれて來る。加之、場合によつては敢て生殖腺其の物を移殖せずとも單に其の中に存する有效成分を含める生殖腺の「エキス」を注射した丈でも其の効果を擧げることが出來る。

是等の問題に關して、最も興味ある研究成績が、夫の若返り法で有名なスタイナハ氏によつて報告されて居る。スタイナハ氏は、生後僅かに三週間を經たモルモツトを取り、雄には其の睪丸を切除して、其の代りに卵巢を植ゑ、雌には卵巢を取り去つて、其の後に睪丸を移植して、成長後如何なる狀態が現はるかを見た。所が前者は本來雄として生れたにも關らず、體の太さ毛並乳房外陰部等が悉く雌の樣になり、加之、心の働き迄も雌性化して、雄から追ひ廻はされたり、或は自分の大きくなつた乳房を幼兒に含ませて、之を愛育することを見た。之に反して、後者は、元來雌たるべかりしものが、卵巢を取つた後に睪丸を植ゑ附けられた爲めに、心身共に雄性化して、子宮乳房等は發達せずして、却つて、體重身長毛並等も普通の雄と選ぶ所なく、又雌に對して慾望が著しく旺盛となることが見られた。

男子にして幼少の時に去勢された「ユーヌヘン」や、或は先天的に睪丸の發育不完全なる男子、即ち「ユーヌヒヨイド」を見るに、成長しても男らしい特徴が現はれないで、男とも女とも見分け難い樣な狀態を呈する。即ち骨格が優しく

細長く出來、皮下脂肪が餘計に溜つて、丸味を有つて、所謂曲線美を呈し、腰部が大きく、頭を除くの外、毛髪が少なく、鬚髯がなく、喉頭が發達しない爲め、聲帶が細く少さくてよく振動するから、音聲の調子が高く、筋力が弱く精神的には感情に走り易く、且つ性慾が缺如して無勢力となる。

又去勢者は、年齡若くして而かも皮膚に皺がよつたり、顏つきがませたりする。是れは身體の新陳代謝が一般に衰へた兆である。其の他記憶力が減じ、意氣銷沈して、動もすれば憂鬱になつたりする。即ち或る程度迄老衰の現症と似通うた現象が起つて來る。玆に於てか、老衰するから生殖腺が衰へると云ふよりも、寧ろ生殖腺の機能が衰へるから、老衰が起るものとの考へを起して、何等かの方法によつて、老衰した生殖腺の機能を再び恢復せしめることによつて、老衰したものを若返すことが出來るだらうと云ふ考へから、夫れに關して研究が行はるるに至つたのであつて、夫の嘗に一時注意を惹いたスタイナハ氏若返り法の如きも、全く此の考から出立して攻研せられた一新法に外ならない。併し、單に生殖腺の機能障碍丈けが果して老衰の原因たり得べきや否やは、大いに考慮を要する問題であるし、又老衰と生殖腺の機能減弱とは、何れが原因であり何れが結果であるやの問題も、輕々に速斷する譯には行かぬのである。又た假りに好結果を得たとした所で、斯る場合には、暗示が働くものであるから、其の點も大に考慮しなければならない。多くの學者は嚴正なる批判的態度から之を否定してゐる。

之を要するに、高等動物ではあらゆる附帶的性徵は、主要的性徵によつて惹起さるるもので、體細胞と云ふ白紙の頁を、女と云ふ紅い筆で染めるのも、男と云ふ青い繪具で隈取るのも、斯の生殖腺の運行自在なる妙手であると云はなければならぬ。然らば生殖腺は、果して如何なる手段によつて斯の巧妙なる働きをなすものであらうか。以下之に關して述べて見たい。

「吾等が婦人に於て敬愛すべきあらゆる物は、悉く卵巣の賜である」私は、茲に、重ねて碩學ウイヒョウの語を引用する。第二次性徴は第一次性は徴の爲めに喚び起さるゝものであるとしたならば、生殖腺は、果して如何なる手段によつて斯る深甚なる影響を他に及ぼし得るのであるかと云ふに是れ全く内分泌の作用によるのである。已述の如く、身體の一部が、遠隔せる他の部分に對して、緊密なる關聯を保ち、相呼應することの出來る方法は、二つある。其一つは神經系であり、他の一つは内分泌物即ち「ホルモン」である。そして生殖腺が第二次性徴に影響を及ぼし得るのは、この「ホルモン」によるのである。其の證據としては、幼時に去勢せる動物で、第二次性徴の發露せざるものに、生殖腺を移植すれば、遅れ馳せながら、夫れが現はれて來るのは勿論ではあるが、敢て生殖腺其の物を移植せずとも、單に生殖腺の化合成分を含有する生殖腺エキスを注射した丈けでも、十分に効を奏することの事實を擧げることが出來る。是れ即生殖腺に於て造られたる或る化合物が、直接其の作用をなすことを語るものである。

生殖腺が、生殖細胞を造る働きをするのは勿論の事であるが、其の他なほ、内分泌をも行ふものであることが、斯様にして明瞭となつた。然らば生殖細胞を造るものと、内分泌を行ふものとは、同一の物であるかと云ふと、左様ではない。生殖腺には、生殖細胞になるものゝ外に、内分泌を行ふものがある。睾丸に於ては、顯微鏡でなければ見ることの出來ない細い管即ち細精管なるものが無數にあつて、其の管の内壁に竝らんで居る細胞が、增殖し變化して、次から次にと精蟲に變化し、細精管の集合によつて成れる輸精管によつて、外に出されるのであるが、尚此多數の細精管の間隙を滿たして居る或る種の細胞がある。之を間細胞、若しくは發見者の名擧の爲めに、レーヂッヒ氏細胞と呼んで居る。此の間細胞が如何なる役に立つのであるかは、全く不明であつた所が、近時に至つて、この者が内分泌を行ふものであることが分つた。

夫れは次の事實からである。

幼い時に去勢し、随つて第二次性徴の現はれない動物に、生殖腺を植ゑると、暫時ながら夫れが現はれて來る事は、前に述べた通りであるが、其の際移植された睾丸を、顯微鏡下に檢べて見ると、細精管の細胞は死滅して、獨り間細胞のみが増殖して居る。して見ると、間細胞さへあれば、立派に第二次性徴を喚び起すことが出來るもので、敢て細精管の細胞を必要としない事が分る。次に又レントゲン線で屢々若い動物の睾丸を照射すると、該動物は、生長した後で、普通の雄と同様に、心身共に雄らしい性質を現はし、性慾もあり、交尾も行ふが、併し子供が出來ない。即ち性交可能であるが、生殖不能に陷るのである。今其の動物の睾丸を取つて、顯微鏡下に檢査して見ると、X線の爲めに、專ら精蟲を造るべき細精管の細胞のみが侵されて、間細胞は殆んど害を蒙つて居ない。此の事實は、X線照射が、動物をして、何故に生殖不能にならしむるかを語ると同時に、間細胞さへあれば、心身の第二次性徴を十分に發露するに足ることを立證するものである。此の關係から、人間でも、常にX線を取り扱ふ人は、十分に注意しないと、生殖不能に陷る憂がある。

次に輸精管の結紮法、即ち簡單な手術によつて、股の附け根の皮膚を切り開き、輸精管を出して、二ケ所で之を縛り、其の縛つた二箇所の中間で切斷する方法も亦、X線照射と同一の結果を齎らすものである。蓋し此の場合、輸精管結紮の爲めに、精液が外部に出る事が出來なくなつて、夫れが細精管に鬱滯して、管壁を壓迫し、其の結果、精蟲となるべき細精管壁の細胞を死滅し、細胞管は萎縮し、夫れに變つて間細胞は増殖する。そこで幼稚なる動物に、此の手術を施すと、第二次性徴は現はれ、性交可能にはなるが、生殖は不可能になるのである。生長せる動物では、此の手術の爲めに、性交可能は繼續せられ、加之、間細胞増殖の爲めに、却つて性慾が亢進する傾向がある。精蟲は出來ず、精液は外に出ないから、生殖能力は固より絶滅せらる。夫れであるから、常習犯罪人とか、遺傳性の恐るべき病的體質とか、凡て劣惡なる遺傳的素因を人類の間から一掃して、社會生活をしてより安寧に、より幸福ならしめん事を企圖する消極的人種改善學(消極的優

生學」の實行に際しては、斯の法を採用して、人道問題と衝突する事なしに、よく劣種剪滅の効果を收めんとするのである。

十一

斯く人間を始めとして、高等動物では、第二次性徵の決定が、一に生殖腺のホルモンによつて行はれるに反して、昆蟲類では、第二次性徵も亦た、受精によつて先天的に決定せられるもので、隨つて、第二次性徵は生殖腺には無關係に、自獨の道を辿つて展開して行くものである。此のことは、ケロツグ、マイゼンハイマー、コヘツク氏等によつて、十分に立證されたのである。

例へば、蝶類の仔蟲に於て、睾丸の去勢を行つても、其のものは、蝶に迄成長した時、去勢されない雄と全然同樣の翅を有つたものになる。即ち睾丸の有無に關らず、第二次性徵の發露は、自獨の方向に進み行くのである。更に又、雄の仔蟲に於て、睾丸を除いた後、之れに卵巢を移植して見ても、其の仔蟲が蝶になると、依然として完全に雄の翅をますのである。

併し斯の實驗に於て、去勢をした時期が已に遲れて居て、目にこそ見へね、生殖腺からの影響が、已に身體の細胞に及んだ後である爲であらうと云ふ反駁があるかも知れない。そこで斯る反駁を防ぐべく、ヘグナー氏は、發育の極めて初期に於て、生殖腺たるべきものを破壞して見たのであるが、斯る際にも、依然として固有の第二次性徵が現はれるとを見たのである。

念ふに第二次性徵の決定に當つて、斯る二樣の型式を生ずる所以は、昆蟲類では、凡ての細胞が、自己の遺傳質を開發するに必要な働を、自分でするのであるが、鳥類・哺乳類の如き劣等な動物になると、特別に内分泌腺なるものが出來て、内分泌物を造つて、其の働を擔當する樣になるのであらう。例せば、昆蟲の如きものでは、中央集權が、まだ完全に行はれないで各州夫れ〳〵法規を制定して居たが、哺乳動物になると、各州を統一して、共通の法令が出來ると云つた樣な譯である。

斯樣な譯であるから、中間性の現出も亦昆蟲類では、遺傳物質の結合如何によるもので、接合體の問題であるに反し

て、哺乳動物では、ホルモンの作用に基くもので、內分泌の問題でなければならない

十二

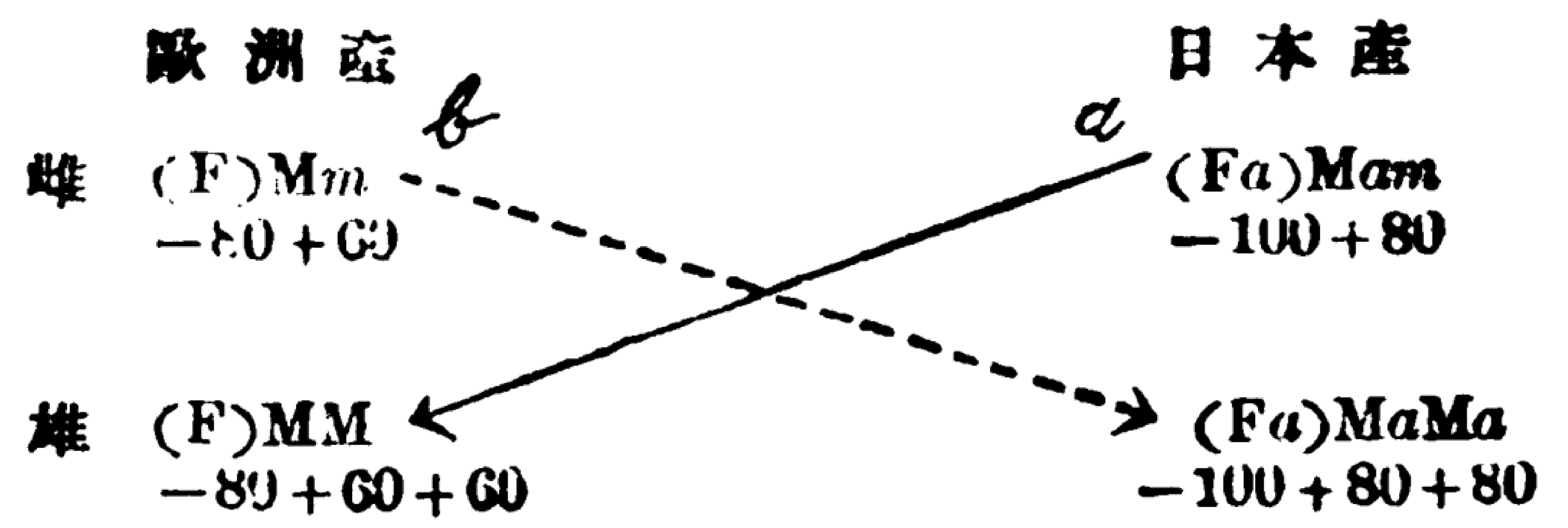
ゴルトシュミット氏は、斯る見地から、マヒマヒ蝶の異種族間に交配を試み、斯くて出來た雜種に於て、種々なる程度の中間性を造ることに成功した。氏は、已に述べた樣に何れの個體にも雌雄兩性の遺傳物質が並存して居るもので、其の量的關係に基く力の如何によつて、其の何れかの遺傳物質が發露し、性別を決定するもので、其の力の差が、或る値、例へば+20以上であれば、完全な雄を生ずるが、若し夫れ以下であると、漸次に雄の性質が薄らいで、雌の方に近より、0であると、恰度中性となり、更に減少して(−)の値を取ると、逆轉して雄性よりも雌性が著しくなり、−の價が增すにつれて、現はれ、−20になると、完全な雌性が現はれるものと云ふ假定を立て、之れによつて、豫期せる如き實驗成績を擧げ、且つ其れに滿足すべき說明を與へたのである。

試みにマヒマヒ蝶の同種間の交配を行つて見ると、夫れによつて出來る雌雄は、何れも完全な性別をなして、中間性を生ずることはないが、交配によつて雜種を造つて見ると、往々中間性のものが出來る。例へば歐洲產マヒマヒ蝶の雄と、日本產マヒマヒ蝶の雌とを交配さすと、夫の結果出來る雄も雌も、皆な完全なものである。然るに歐洲產の雌と、日本產の雄とをかけ合せて見ると、其の際出來る雄は、正常なものになるが、之れに反して、雌は恰度中性のものになる。

斯の事實を如何に說明するかと云ふに、已述の如く、マヒマヒ蝶の雌は(F)Mmで表はし、雄は(F)MMで表はすことが出來る。そして日本產のものでは、Fの力を−100として、Mの力を+80とする。歐洲產のものでは、Fを−80とし、Mを+60とする。さうすると、次式に示す如き關係が成り立つて、上記實驗の事實を明瞭に說明することが出來るのである。

ゴルドシュミット氏は、M及びFなる、雄性乃至雌性遺傳物質なるものは、酵素の如きものであると假定した。そして

この酵素の働によつて、雄性乃至雌性を決定すべき化學的物質即ちホルモンの生成が促進されるものとした。そこで若しFの力が、Mよりも强い時には、雌性の分化を起すに必要なホルモンが早く造られて、雌性を顯現せしめるのであるが、



(a)なる矢に示す雜種に於ては、雌は(Fa)Mm＝−4。
−100　＋60
となつて、完全な雌が出來、雄は(Fa)MaM＝＋40
−100＋80＋60
となつて、是れ亦完全な雄になる。

(b)なる矢で示す交配では、雌は FMam＝0 となつて
−80＋8
恰度中性の中間性となる。之れに反して、雄は、
FMaM＝＋60 となつて、性別の完全なものになる。
−80＋80＋60

之れに反して、若しMの力が强くして、雄性の分化を爲すに必要な化學的物質が早く造られると、雄性が現はれるものと考へた。要するにFとMとの量的關係、隨つて其の力の關係が、正しき割合を保つて居れば、正常の雄が現はれる。假りにFの力が100であり、Mの力が80であるとすると、Fの力で、十分に雌性化すべき化學反應が行はれ、其の後になつて、始めてMの働が起るから、中間性のものを生ずる患はないが、若し之れに反して、Fの力が100であるのに、Mの力が90であるとすると、Fによつて行はれる雌性化の化學反應が、まだ十分でない間に、早く已にMの雄性化の働が加はつて、玆に純然たる雌性化を妨げ、幾分……Mの力の如何によつて程度に違はあるが……雄性化の反應も加はつて、中間性のものを生ずると說くのである。

斯くてゴルトシユミツト氏の所見によつて、性別遺傳物質の作用は、究極する所、固有の化學反應に基いて惹き起さるる身體形成作用の差違に歸着することになつたのである。氏は斯る結論の根據として、スミス氏によつて研究された、イナクスなる蟹の、性の轉換に關する事實を擧げて居る。イナクスなる蟹に、サクリナなる一種の蟲類が寄生すると、生殖腺が侵されて、一種の去勢狀態になる。そうすると、イナクスの雌では、さしたる變狀らも起ないが、雄では、爪や胴に甚しい變狀が起り、殆んど雌の樣な體になる。スミス氏は、此の事實を說

明して、睪丸の去勢された結果、イナクスの雄の新陳代謝に激變が起つて、雌性の夫れに近づき、終に性の轉換を喚び起すものと云つて居るのである。實際イナクスの雌の血液中には、多量の脂肪質があるに反して、雄の血液中には、脂肪質が甚だ乏しいのであつて、確かに性の如何によつて、新陳代謝に大なる相違があることを示すのである。又たマイマイ蛾の血液の如きも、雌では、喰べた植物の葉綠素が、其儘存在して、綠色を呈して居るが、雄では、夫れが變化し、黄色になつて居る。又たワインランド氏等の研究によると、蝿の仔蟲の時と蛹の時とで、新陳代謝の性質が一變することも明かにされた。斯様な譯であるから、性別分化の時期なり、又た夫れが雄性であるか雌性であるかに隨つて、夫々固有の化學反應があることは、想像するに難くない。そして夫れが、性別の遺傳物質を基調として行はれることを考へても、決して無理ではないと、ゴルトシユミツト氏は云つて居る。殊にそれと關聯して、興味ある事實は、一部の去勢を行つた後に、再生作用が行はれる場合、往々、異性の生殖細胞が出來ることである。マイヤー氏によると、蛙の睪丸を移殖すると、一時其の組織が萎縮に傾き、夫れに次いで再生作用が行はれるが、其の際精子の細胞と共に、往々にして卵子が出來ることを述べて居る。即ち一定の原因で、Mの力が衰へると、Fの力が擡頭し來つて化學反應の變化を惹き起し、幾分か性の轉換に傾かしめることを思はざるを得ないのである。

斯くて近時に至つては、性別の決定を、全然固有の化學反應に歸し、其の昔センク氏が主張した様に、榮養の如何によつて思ふが儘に性を決定せしめることが出來るとさへ説く極端な學説が、一部の學者によつて唱道せられるに至つたのである。

十三

要するにゴルドシユミツト氏等の最近の研究によつて、兩性は、其の本質に於て通有性をもつもので、雄性も亦た雌性遺傳質を有つて居り、雌性も亦た雄性遺傳質を具へて居るもので、其の量的關係の如何によつて、其の發現を異にするものであるとしたならば、兩性問題に於て、根本的の差別觀を行ふことは、許されざる過誤であつて、男と女とが、人間としての權利の上に於て、平等であらねばならぬことを、この最近の生物學的新研究からも、主張し得ると共に、性別の起つた根本義が、那邊にあるか、又た其の根柢が、如何に早く且つ深く根ざして居るか、隨つて、男女はたとひ其の權利の上に於て優劣なしとは云へ、槌ゝ槌として、砧は砧として、各其の天分を完了しなければならないことを、自覺しなければならない。

日本大衆黨結成批判

戰線統一の流れに浮ぶ一抹の泡

=日本大衆黨の成立およびその本質=

大山郁夫

一　最近に於ける無產階級政治戰線上に現はれた分化過程

日本のプロレタリアートが空前の苦難の試練を潜り抜けつつ實質的には益々堅實に成熟じつゝあつた一九二八年もまさに暮れようとしてゐた矢先きに、二個の極めて顯著なる現象が、時間的に緊密に相前後して、大衆の面前にむくむくと擡頭した。

その一つは、十二月二十日に行はれた所謂『中間派五黨』の合同（事實上合同大會の當日に更らに二個の地方政黨が參加し來つたので七黨の合同となつたが）であり、他の一つは、十二月二十二・三・四日に亙つて開かれた新勞農黨結黨大會の第三日に於ける新黨準備會の解散である。

これらの二個の現象は、徹頭徹尾あまりにも異常に鋭き對照を、相互間に展開した。そして、その極限に於て、前者は合同の成立そのものによつて右・中・左の一切の社會民主々義者のブルジョア政權への最終的屈從を表示し、後者は結社の解散そのものによつて左翼戰線の牢乎たる確立を白日の下に耀やかしく押し出した。

從來一般に『無產階級政治戰線』として總括的に見られがちであつた全分野の上に、かくして一大分化の跡が劃然としてしるしづけられた。そして、その結果として、從來一般に同一陣列の右翼および左翼として取扱はれて來た二つの部分の間の本質上の相容れない差異が明確に認識し得られるやうになつたばかりでなく、所謂『中間派』と呼び做されて來た部分も、その核心に於ては畢竟ブルジョアジーの配下の變裝せる傭兵にすぎないことが、——そしてその點から見て、右翼と本質的に何等の差異を示してゐるものでないことが、——最早一點の疑ひを容れる餘地なきまでに證明された。

かかる關係の下に於て、我々は今や最早、從來一般的に何等の疑問なしに受け入れられて來た『無產階級政治戰線』、並にその右翼・中間派・および左翼に關する通俗的既成概念の上に、一の根本的修正を加へなければならなくなつた。さうすることが、理論上にも實踐上にも、差し迫つた必要になつて來たのだ。何よりも殊に、從來一律に『無產階級政治戰線』の名を以て呼ばれて來た全陣營も、今日では最早や、決してその各部分が多かれ少かれ純粹にプロレタリアート的政治機能を果たしてゐるものとは言へないことが、あまりにも明瞭になつて來た。即ち前に示唆した通り、『右翼』および『中間派』は、それぞれの色合ひの社會民主々義の黨としてブルジョアジーに奉仕し、特に『右翼』は公然とプロレタリアートの黨を排撃し、『中間派』はさうした公然の右翼社會民主々義者たちと、口に左翼的言辭を弄して內實はプロレタリアト運動の進捗を阻害する行動に出てゐる左翼社會民主々義者たちとの聯盟を構成してゐる。ただ現在のわが國の實情に於ては、『右翼』および『中間派』は、その機能の點から見てこそ、さういふ風に明かに社會民主々義の黨として活動してゐるものであるが、しかしその構成の點から見れば、尙ほ依然として工場を基礎として組織されたる勞働者大衆を最も有力なる組織單位として包含してゐるから、この視角から見れば、『右翼』および『中間派』は、無產階級の地盤に打ち込まれたブルジョアジーの楔として見ることが出來るのである。それ故に、『左翼』以外に尙ほかかる『右翼』および『中間派』をも含めての全陣營を『無產階級政治戰線』と總稱するのは、單に歷史的因緣のためだけとして說明し去る譯には行かないし、更らに各部分の機能に卽して言はれ得るものでないことは無論であり、たゞその構成を基點としてのみ言はれ得るものである。その機能から眞に無產階級的と言ひ得られるのは獨り『左翼』だけであつて、そしてその左翼の一部分が既にプロレタリアートの黨として組織されてゐることは、今

日では最早周知の事實となつてゐるのだ。

右翼および中間流のブルジョアジー陣營への急ぎ足での跡順、並にまさにそれと逆比例的に進んでゐる左翼のプロレタリアート的活働の尖鋭化。――これが最近に於て所謂無產階級政治戰線の上に益々顯著に現はれかけた分化的傾向の中心的事實だ。そして、それはまた、今日着々と帝國主義戰爭の危機を醸し出しつつある世界の――從つてわが國の――資本主義の歷史的發達の現勢の所產であらねばならぬ。と同時に、かかる情勢が、昨春以來わが國にもプロレタリアートの黨の存在と活働とを前面に押し出した眞因であることもまた、一の客觀的事實として認識されなければならぬ。

かうした諸事象は、單に、所謂中間派諸黨の合同による日本大衆黨の出現が、最近の無產階級政治戰線の上に起つた分化過程の上に於て占めてゐる地位を見定めるために、玆に一應擧示されたものである。それ以上に、それらの諸事象間の內的聯關を跡づけて行くことは、本文の目的の埒外にあることだ。いま筆者に與へられてゐる課題は、新生の日本大衆黨を批判の對象として簡明にその本質を闡明することである。從つて、日本大衆黨の出現に踵を接して起つた新黨準備會の解散の意義を說くこともまた、直接には問題外におかれなければならない。ただ後者は、日本大衆黨の出現のための槓杆となつた中間派諸黨の合同の過程の敍述に際して屢々引合に出されなければならない關係におかれてあるから、少くともその範圍內に於ては、本文に於ても觸れられない譯には行かないであらう。

二　ふたつの要點

一昨年末に於て急に具體的に持ち上がり、それ以來間斷なく昂進しつづけて來た所謂無產階級戰線統一の機運を背景にして、最近に實現された中間派諸黨合同の本質を觀察すれば、如何なる結論が下し得られるか？

それは大衆の合同欲求の流れの上に浮んだ一抹の泡だ。――といふのが、その問ひに對する我々の答へである。

何故さういへるか？

まづ第一にそれは、日本大衆黨は、今回新たに合同契約によつてそれを構成した既存諸黨の雜駁なる結集體であつて、その相互間の凝集力が甚だ稀薄であり、向後の風の吹き廻はしによつては、尙ほこの上の離合集散の測られないものがあるやうに見られるからである。第二にそれは、大衆の合同欲求の中心的動力であるところの、その無產階級的鬪爭意志の上に、毫も根を卸してゐないからである。

これらの二つの要點を略說することが、以下の論述に於て眼目とされるものである。

三　構成上から見た日本大衆黨

第一の要點――すなはち日本大衆黨の構成諸分子間の凝集力の稀薄に見えること――に關して。

日本大衆黨は中間派諸黨の合同によつて出現したものといはれてゐるが、この場合、『中間派』といふ言葉は極めて曖昧な意味に用ひられてゐるのだ。即ち、日本大衆黨の出現を促進した主要勢力は、左右兩翼の社會民主々義者たちを幹部のうちに包含してゐた日勞黨と、主として左翼社會民主々義者たちの指導下にあつた無産大衆黨と、それから寧ろ反動的とさへも言ひ得られる程度の極右翼社會民主々義者たちの集團を幹部として戴いてゐた日農黨とである。それらの三黨に樣々の複雜なる色合ひの――恐らく主として右翼寄りの――社會民主々義者たちに率ゐられてゐた九州民憲黨、中部民衆黨、信州大衆黨、および島根自由民選黨の五つの地方政黨を搗き交ぜて、捏粉細工の如く捏ち上げられたのが、問題の日本大衆黨である。

かうした日本大衆黨の構成諸分子の雜駁なる混合から來た不安性は、その結成過程の上に於て、さまざまと反映された。

まづ初めに、昨年末今回の合同問題が具體化しかけた時、日農黨から日勞黨へ合同協議が提案されたが、その際日農黨は希望條件として、『九州民憲黨、中部民衆黨に對しては日勞黨より合同を勸誘せられたく、無産大衆黨に關しては日勞黨に一任すること』と附言して、無産大衆黨に對する自黨の態度の不確實さを暴露した。更らに無産大衆黨は、その日勞黨への合同提議に於て、一方では『貴黨がその立黨精神たる階級的正義に基いて「右翼結成」と勇敢に鬪はれつつあることに對して、わが黨は心から敬意を表します』と言ふことによつてそれ自身の左翼氣取りの態度を表明しながら、他方では『絶對無條件による全無産政黨の合同』の口實の下に極右の日農黨の本質に對する批判の眼を固く閉ぢた。

だが、合同問題を中心として最も甚だしく内部的不統一の醜態を露出したのは、左右兩翼の社會民主々義者たちを幹部の中に包含してゐた日勞黨であつた。即ち同黨内の關西派といはれてゐた組合同盟の代表者たちは、寧ろ社民黨との融合の方向に強く牽き附けられてゐたが故に、左翼社會民主々義者たちの指導下にあつた無産大衆黨との合同に對しては、強硬に反對の態度を示した。それに反して、同黨内の所謂關東派は、あくまで無産大衆黨との合同を主張して、遂に關西派をして一ト先づ之れ

に折れ合はしめた。かうした事件の進行に加へて、合同大會の前日に擧行された日勞黨大會では、同黨の九州の代議員の一團が、民憲黨との合同に關して、自黨の幹部が九州の特殊事情に顧慮せずに專斷的に事を運んだことを理由として議場を大混亂に陷らしめつつ連袂退場し、間もなく一場の暴力沙汰を演じて、遂に臨監をして大會を解散せしめたまでの劇的シーンを惹き起すに至つた。等々。

かうした諸點を見てゐると、我々は、それらの諸黨が、よくも結局比較的簡單に合同を一應の結末にまで押し進めることが出來たものだと訝からざるを得ないやうにも思へるが、しかし、實はそこにこそ却つて彼等が本來一つの穴のむじなであることの證明が見出されるのである。右翼社會民主々義者といひ、左翼社會民主々義者といひ、その表面上の言動の上にこそ、考へ及び得られる限りの差異がまさまざと見られるが、しかも究極に於ては彼等は一樣に、無產階級陣營に於けるブルジヨアジーの觸手である。即ち彼等は、第一には彼等がその上に直接に影響力を及ぼし得る地位にある勞農大衆を無產階級的言辭によつて扮飾されたるブルジョア的イデオロギーおよび行動の方向に導くために、第二に眞正の左翼陣營のプロレタリアート的行動を牽制し阻害するために、ブルジョアジーの使嗾もしくは默容の下に、その恥づべき存立と活動とを維持してゐるものである。であればこそ彼等は、今日風の吹き廻はしによつて、相互に一團となつて同じ岸邊に寄せられて結集する泡の如き存在を開始することが出來たのだ。もとより明日の彼等の離合集散は、今日から豫見することを許さない。だが、彼等は分れて居ても、合つてゐても廣い見地から展望すれば、共に社會民主々義の陣營に於て相互に同居してゐるものなのだ。そしてこのことは、單に所謂中間派と稱せられてゐる日本大衆黨の各部分間の關係についていへるだけではなく、それと公然の右翼社會民主黨であるところの社民黨との、およびそれの各部分と社民黨の各部分との間の關係についてもまた、同樣の當然さを以て言ひ得られるのである。

四　非鬪爭主義の產物

第二の要點――すなはち日本大衆黨を出現せしめた中間派諸黨の合同は大衆の合同欲求に根を卸してゐなかつたといふこと――に關して。

合同協議の進行中に於て、參加諸黨は何れも口を揃へて、大衆の合同欲求への追從を呼ばはつた。だが、彼等は果して大衆の合同欲求の本質を顧慮したか？　斷じて否！

一昨年末以來、戰線統一問題の潮の漸増的昂進の過程に於て、大衆は如何なる動機から次第々々に熱烈に勞農政黨の合同を欲求するに至つたか？　それは、大衆が刻一刻激化しゆく支配階級の全面的攻撃に直面して、より强力に資本家地主の政府に抗爭しようとする無産階級的鬪爭意志からであつた。一言にしてつくせば、さうした大衆の合同欲求は、『鬪爭のための合同』への欲求以外の何物でもなかつた。

舊新黨準備會は、戰線統一問題の取扱ひに際して、終始一貫その點を凝視して、合同が大衆と浮き離れた各黨幹部同士の間の交渉――所謂『頭と頭との取引』――によつて成立せしめられようとした危險に對して最も嚴重に警戒して、その樞軸を、底から不可抗的に湧き上がつて來る各黨大衆間の共同鬪爭の上に置いた。

だが、日勞黨および無産大衆黨――この場合日農黨は問題に上りさへしない――の幹部諸君は、さうした下からの共同鬪爭を極端に忌避した。彼等が共同鬪爭を口にした場合も、それは各黨幹部間の合議から出たそれ――即ち上からの共同鬪爭――を指してゐるものであつた。しかもそれをすら、彼等にただ掛聲に終らせただけで、多くの場合それを實行に移すことを敢てしなかつた。そして、このことは、彼等の一切の活動を支配した一種の『合法主義』から導き出された必然の歸結であつた。

彼等の『合法主義』の根本精神は、彼等をして彼等の黨としての一切の活動を、支配階級の認許する範圍内に限らしめる――さうした範圍は今日急速に縮少されつつあるにも拘らず――ことにある。かくてそれは、非鬪爭主義の別名である。合法性の擴大乃至獲得の問題の如きは、彼等が嘗て上程だもしなかつたことである。彼等が口に習慣的に反復する『鬪爭』は、支配階級の權力に抗爭する鬪爭ではない。從つて、それは無産階級的意義に於ける政治鬪爭ではない。

そこが、右翼左翼をこめての一切の社會民主々義者たちの落ち行く先きだ。彼等は無産階級的政治鬪爭を拋棄する。それ故に彼等は彼等が奉仕するブルジョア社會と共に、一切の發展性を喪失してゐるのだ。彼等は初期のブルジョアジーの抱負と氣概とをさへも缺いた生ける屍となつて、急速に腐朽しつつあるのだ。『新黨準備會』が戰線統一問題に對する方針に於て、最後まで執拗に社會民主々義に對する批判の自由を留保して已まなかつたのは、如何なる合同による新黨をも社會民主々義者の指導權の下に置いてはならないといふ趣旨から出たものであつた

日勞黨の幹部諸君が、舊新黨準備會からの合同提議に對して、常に『合法政黨になつてから出直して來い』といふ言葉を

以て答へつゞけ、そして無產大衆黨の幹部諸君もまたその與みに傚つてゐたことは、今更それを繰返す必要はないであらう。彼等は無產階級の獨自の努力によつて築き上げられた鬪爭實體の存在よりも、支配階級がそれに向つて與へる――或は拒む――合法性の有無を以て、合同の先決條件としてゐたのだ。

日本大衆黨の幹部諸君の、かかる消極的な、受動的な、何よりも殊に卑屈な態度は、彼等の指導下の黨員大衆中の進んだ分子の何時までも堪へ得るところではないに違ひない。少くとも、軈て至るところで、舊新黨準備會の大衆との提携の下に共同鬪爭を展開してゐた日勞黨大衆の大多數は、新黨準備會拔きの合同を肯定しはしなかつた。のみならず、社民黨の大衆中にさへも、特に關西方面に於ては、新黨準備會をも含めての全線的の合同を熱望してゐたものも少からずあつた。今日となつては、新黨準備會をも含めての合同といふが如きことは全然問題外のものとなつたが、しかし當時さういふことが熱心に問題とされてゐたのは、各黨大衆間の合同欲求が如何に、意識的にもせよ無意識的にもせよ、無產階級的鬪爭意志に根ざしてゐたかを物語るものだ。しかも、日本大衆黨の成立に導いた合同協議の當事者であつた各黨の幹部諸君は、さういふことには一切頓着なく、遮二無二頭と頭との取引によつて合同の交渉を進めたのだ。そして、その結果に於て彼等は、ともかく一時的にもせよ、大衆の合同欲求を合法主義――非鬪爭主義――の殼の中に押し込めることに成功した。だが、帝國主義戰爭の危機の刻一刻切迫しつつある今日、刻一刻益々生活の窮迫に追ひつめられつつあることを痛感する大衆の無產階級的鬪爭意志は、刻一刻益々尖銳化しつつあることも事實だ。

我々は既に、日本大衆黨を成立せしめた諸黨の合同の不安定性の原因として、各黨間の凝集力の稀薄といふ一點を擧げておいた。だが、それは決してその原因のすべてではない。その、より深い、より根本的な原因は、該合同が大衆の眞に要求する種類の合同と懸け離れてゐたものであつたといふ點にある。そして、この意味に於ける該合同の不安定性が具體的效果を擧げるであらう日は、無產階級的鬪爭意志に燃え立つそれら諸黨の大衆が彼等の指導下を離れて前進する日であらねばならぬ。

五　左翼社會民主主義者の屈從的讓步

日本大衆黨の成立に至るまでの合同協議の過程は、左翼社會民主々義者の右翼社會民主主義者への徹底的な屈從的讓步の連續であつた。しかも、それは特に、合同新黨の綱領の審議に際して最も顯著に表示された。即ち、まづ第一に、綱領中に「我國

の國情に即して』の文字を挿入することに對しては、無產大衆黨は、その左翼振りの手前、一應反對を唱へてみたが、日勞日農兩黨の駁論に壓倒されて譯もなく沈默した。次に、『合法的手段により』の文字の挿入が問題になつたときも、無產大衆黨は再びそれに反對を唱へたが、再び他黨に逆襲され、『淚を呑んで』（『無產大衆新聞』の關係記事參照）自黨の主張を撤回した。最後に無產大衆黨は、同黨の當初からレーゾン・デートルと稱してゐたところの言ひ草に從つて、『我黨は無產政黨の合同を期す』の一項を綱領中に挿入することを主張したが、又々他黨に反對されて、遂に彼等が虎の兒のやうに愛撫してゐたこの要求をも讓歩せしめられた。等等。

かかる頭と頭との取引の間から產まれた日本大衆黨の綱領が結局如何なる姿のものとなつたかは、その世間に發表されたものを一讀したもののすべてが知つてゐる通りである。それは、今から三年前の舊勞農黨の創立大會で採用されたその綱領と大同小異のものである。舊勞農黨のその綱領は、當時尙ほ非常に幼稚であつた大衆の意識をさへも、樣々の關係から、極めて不完全に反映したものにすぎなかつた。それ以來の三年間に於て、大衆の意識は眼ざましき速度を以て進んだ。殊に昨年末に於て無產階級解放運動の波が急激に高まつて行つた際に當つては、それは驚くべきテンポを示した。舊新黨準備會の結黨大會に於て掲げられた十五項の行動綱領――勞働者農民の政府の樹立で結ばれてゐるところの――が、大衆の熱烈なる共鳴と支持とを得たことは、そのことの的確なる證明である。しかるに、日本大衆黨の綱領は、…………もうこれ以上言ふ必要はなからう。

ただ最後に、新生の日本大衆黨の幹部諸君が、結黨後の第一着手として何をなしたかを、事の序に一應瞥見しておかう。彼等は日本大衆黨の成立に引續いて舊新黨準備會が解散されたのを見て、そのフラクションが自黨に流れ込むことを氣遣つて、極力その防止手段を講じた、と新聞紙は傳へた。彼等の心配は無用である。彼等がさうした防止手段を講じるまでもなく、舊新黨準備會は、社會民主々義の黨へ割り込むが如きことを恥とする。それにしても、水鳥の羽音によつてさへ膽を潰す日本大衆黨の幹部諸君の狼狽振りはどうだ！

更らにまた、日本大衆黨の幹部諸君は、彼等自身が右翼結成の張本人と罵る社民黨の幹部諸君と同樣に、政府の舊新黨準備會解散の暴壓に對しても右の如き沈默を守ることを決議したとも、新聞紙に報道されてゐる。彼等が何等かの形式で抗議運動をしようとしまいと、舊新黨準備會に於ては一向痛痒を感じな

いことだが、しかしそれにしても彼等は、彼等が採用した政策中に、たしか言論・集會・結社の自由への要求を掲げてゐる筈だ。彼等はそれを忘れたか？ 否、彼等社會民主々義者たちの要求する言論・集會・結社の自由は、支配階級の認許する範圍內のそれにすぎないのだ！ そこにも『合法主義者』が如何に自己を暴露してゐるかが見られる。（完）

各種指導精神の亂立政黨

赤松克麿

問題の日本大衆黨

昭和三年といふ年は、無產政黨の合同整理に於いて著しい進捗を示した年であつた。社會民衆黨は四個の地方政黨（社會民政黨、勞農民衆黨、佐世保民衆黨、民衆進黨）を合流せしむることが出來た。ところでこれらの地方諸政黨は、みな社會民衆黨と同一指導精神の下に立つものであつて、所謂大右翼結成の旗の下に參じたのである。だから合同による內部的不安は毛頭生じない譯である。

一方に於て日勞黨、日農黨、無產大衆黨等の全國的政黨と民憲黨、中部民衆黨の地方政黨とが合流し、更に信州大衆黨、島根自由黨等の地方政黨も參加して、日本大衆黨と稱する中間新黨が出現することになつた。ところが此の日本大衆黨の結成は、いろ〳〵な意味に於て社會運動界にセンセーションを捲き起した。

日本大衆黨は如何なる過程を經て結成されたか？ このことについてもさま〴〵なる政界秘話的な流言が社會運動內部の各情報網に傳はつて居る。合同は大衆の要望だと簡單に云ひ切つてしまへばそれまでの話であるが、實際今度の合同の過程には、無產政黨らしくもない裏面的いきさつが相當に潛んで居るらしい。しかし私は今こゝでそれを詮索しやうとするのではない。既成政黨の離合集散に種々の裏面的事實が附きまとふやうに、

無産政黨の合同にも、なか〳〵面白い事實があるものだと私かに感心する次第である。

しからば日本大衆黨はどうなるのか？、うまく有機的に統一されて發達するのか、また四分五裂するのか。このことについても既に諸說紛々たる有樣である。實にこの政黨はその出立に於いて問題を含んだやうに、その前途にも大きな問題をはらんで居る。日本大衆黨は正に問題の無産政黨である。私はこの問題の無産政黨のその問題的性格について二三の解剖的批判を加へて見やうと思ふ。

大日勞黨主義の實現か

日勞黨の機關紙によれば、日本大衆黨は大日勞黨主義の實現だといふことである。戰線統一を標榜してきた日勞黨の立場からいへば、日本大衆黨が日勞黨の擴大されたものだと說明することは、社會的面目も立ち、自黨内の反對分子をなだめる上からしても都合のいゝことには相異ない。しかし日本大衆黨自身の立場からいふならば、そうした說明はあまり有難くない否むしろ迷惑至極な說明であるかも知れない。

元來日勞黨は左右兩翼の混合型の中間黨であつて、近來合同問題のために混合型の惱みを遺憾なく暴露し、殆んど分裂の危機にさへ立つた苦い經驗を持つて居る。また最近日本大衆黨が結成される直前、左右兩翼の抗爭は激化して亂鬪を演ずるに至つた。その結果右翼たる勞働組合同盟は、已むを得ず日本大衆黨には參加するが、黨内にあつて、あくまで左翼――無産大衆黨其他――と戰ふことを聲明して居る。混合型的中間政黨なるものが、いかに内部的統制上困難を有するものであるか、換言すれば、指導精神を異にする各勢力の雜然たる寄合世帶なるものが、いかに揖の取りにくいものであるか、過去二年間の日勞黨の歷史はこれを實證してあまりがある。この一事を見て、尙ほ單一無産政黨主義の空想から拔け切らない者がありとすれば、それは低能兒かしからざればこれを利用してひと儲けしやうとする左翼的香具師に外ならない。

まことに日勞黨は混合型中間政黨としての惱みを惱み拔いた政黨であつた。然るに今回新生した日本大衆黨が、大日勞黨主義の實現だと銘を打たれることは、この黨が依然として日勞黨の有した混亂的性格を相續することを意味し、黨の前途に對して少からぬ不安を暗示するものでなければならぬ。事實に於て日本大衆黨は舊日勞黨よりも一層複雜なる混合型を示し、農民中心主義に立つ極右翼の日農黨から右翼共産主義に立つ山川主義者に至るまでの雜然たる各勢力を包容して居るから、麻生久

君等が日勞黨を指導してきたやうな調子で以て、唯だ漫然と得意の腹藝位で混合型をそのまゝにまとめて行かうとするならば、かつて日勞黨が失敗したやうに、日本大衆黨も惨めな破綻を暴露する日が必ず來ることを豫言して憚らない。

反社民諸勢力の物理的合同か

極右翼の日農黨の中心人物平野力三君の説明によれば、日本大衆黨は反社民諸勢力の物理的合同だといふことである。社會民衆黨に對して反感と蔑視とを抱く諸勢力が、同黨に對抗する意識の上に大同團結したといふことは、たしかに一面的には事實に立脚した說明ともいへる。特に平野君一派がそうした心理によつて動いたものだといふことがよく分かる。極右翼の日農黨が、社會民衆黨を飛び越えて、日勞黨、無產大衆黨などの左翼派と握手しやうといふのだから、平野君一派の合同の基準は、反社民黨の諸勢力の糾合以外に、これを求めることは困難である。

五黨協議會の際に、無產大衆黨が社會民衆黨及び新黨準備會に對しても勸誘しやうと提議したところが、日勞黨及び日農黨の强硬な反對を受けて一蹴されてしまつた。反對の理由は、社民黨と新黨準備會を加へると、新黨内に動搖を生ずる恐れがあるからだといふのである。なぜ動搖を生ずる恐れがあるのか。社會民衆黨が異つた指導精神を持つからだとはいへない。既に日本大衆黨の結成準備會には各種各樣の指導精神が亂立して居るからである。要は社民黨の勝利者的地位に對する反感からこれと一緒になりたくないのである。そしてむしろ反社民の一大勢力を作つて、社民黨に一泡吹かしてやりたいのである。少くとも平野君一派には斯うした心理がたしかに動いたと思はれる。

今回の合同問題の立役者は平野力三君である。彼が書記長になつたのはその論功行賞による。彼の率いる日農黨は近時内部的不安が增大して、何んとか局面展開を圖らなければならない立場にあつた。彼の奉ずる所は「農民は農民黨へ」の極右主義であつた。ところで彼の一派は、右翼の社民黨と感情的及び歷史的に相容れない。社民黨と合流出來なければ、仕方なく中間派の日勞黨、左翼の無產大衆黨と款を通じなければならぬ。日勞黨も近來合同問題のために內部的抗爭を捲き起して、何んとか速かに局面展開を圖らねばならぬ狀勢にあつた。

こうした形勢の下に、平野君と麻生君との會見は行はれた。社民黨に反感を有する立場に於て、何んとか體裁のいゝ自黨の局面展開策を必要とする立場に於て、この二人の政治家は全く

同一の心持であつた。二人の會見によつて描かれたプログラムは、トン〳〵拍子に進んで行つて、今回の新黨出現となつた。だから平野君が、新黨を以て反社民勢力の物理的合同だと說明したことは、たしかに一面をうがつた解釋といふべきである。

平野君一派の取引的成功

日本大衆黨の結成によつて、日勞黨も日農黨も名分の立つ自己清算をして、ほつと一息ついた形である。しかし問題は殘る。「反社民意識」なるものが、新黨を維持して行くに足る唯一の結合紐帶として果してどれだけの力を持つものであらうか。社民黨が無產階級解放に障害だから是非ともこれを仆求しなければならぬといふのならば別であるが、唯だ源平式の勢力爭ひから、社民黨が癪だからといふので、譯もなく諸勢力を糾合して社民黨に對抗するといふだけであれば、一時的には旗上げが出來たとしても、天下の公黨を創立する精神としては實に拙劣も甚しい。そしてさうした立黨の精神は、黨の前途に對して決して恒久性のある希望を與へるものではない。若し狀勢に變化を生ずれば、また直ちに黨の構成上に變化を生じなければならないやうな極めてアヤフヤな集團といふべきである。

尤も平野君一派は、この黨の生命を長く見て居ないさうである。一體彼等には將來に亘り或る一貫した方針を樹てゝ進むことをしないで、その場限りの機會政策を巧妙にやつてのければいゝのだといふ態度がある。だから突拍子もない曲藝を平氣でやる。宙返りも逆立ちも御手の物である。今回の合同問題では、この曲藝の名人平野力三君が原動力であつて、見事に芝居を打つて、書記長の重職をかち得た。故に平野君一派としては、自黨當面の危機を救ふと共に、新黨の中堅的地位を獲得し、一石二鳥の妙技を振つて大成功を收めた譯である。但しそれは行きあたりばつたり主義の妙技であつて、日本大衆黨の前途に光明を認むる何等の根據にもならない。平野君一派にすれば、若し將來この黨が不安狀態に陷れば、そのときになつてまた自己の立場を最もよく展開する臨機應變的妙技を演じさへすればよいのである。

こうした掛引に於いて、平野君一派には既成政黨流の技能が備つて居る。少しも筋の通らない離合集散を行ふて、その間に自己の立場を有利に展開して行くことは、有產政黨界には常に見受ける現象であるが、私は日本大衆黨の結成を見て、無產政黨界にも此の道にかけては、有產政黨界に輸出しても遜色のない敏腕な策士が居るものだと敬服する次第である。

合同を通じて横斷左翼の結成へ

「大日勞黨主義の實現」といふ說明も、「反社民勞力の物理的合同」といふ解釋も、いづれも日本大衆黨立黨の精神として極めて不確實であり、從つてこのまゝの狀態では、今後この黨が强力なる一政黨として發達して行く希望を何處にも見出すことは出來ない。若し日本大衆黨が今後階級戰線上に一個の明確なる存在性と成長性とを獲得しやうとするならば、右翼政黨か若くは左翼政黨としてはつきりした指導精神を確立しなければならぬ。この點に就いて、舊日勞黨の右翼派勞働組合同盟は、黨內にあつて左翼と戰ふことを明言して居るが、この黨を右翼政黨たらしめやうとするほどの積極的態度は現はれて居ない。しかるに無產大衆黨は、この點に就いて最も明確なそして積極的な態度を示して居る。

無產大衆黨の機關紙は、「合同を通じて横斷左翼の結成へ」といふスローガンを呼號しつゝある。無產大衆黨が左翼政黨であることは玆に說明するまでもない。この黨は今回の合同を通じて、日勞黨の左翼、其他各黨の左翼分子を結束して一大左翼ブロックを作り、このブロックの統制下に日本大衆黨を置かうと目論んで居る。左翼的立場からいふならば、日本大衆黨には多くの反對分子を含んで居る。無產大衆黨の理論的指導者猪俣津南雄君の言葉を借りていへば、「日本農民黨のボツス政治家諸君」が居り、「日勞黨の協調主義者、機會主義者」が居る。だから無產大衆黨としては、各黨の左翼分子を横斷的に結成して、合同政黨の指導權をその手に收め、反對幹部に對しては巧みにこれを大衆から離間せしめて、手際よくこれを淸算して行くことが新黨內に於ける彼等の最大の任務である。

無產大衆黨の機關紙に「新合同黨內で如何に戰ふか」といふ一文があるが、その一節に次の言葉がある。「全國の同志よ！五黨いな七黨合同はとにかく出來上つた。だがわれわれ階級的左翼を以て任ずる勞働者農民の鬪爭は、本當にこれからだ。新生の日本大衆黨內に巢喰ふ反動的右翼（平野君一派を指す）これと策應これ努めて居る舊日勞右翼派の機會主義を粉碎して、新合同政黨を本當の日常鬪爭の大衆的機關に仕上げること、しかも新黨準備會と社民黨とを更に合同に捲き込むこと、これがわれらの最大の鬪爭だ」云々。

舊日勞黨、舊日農黨の幹部諸君にくらべて、舊無產大衆黨の幹部諸君は、日本大衆黨の將來に關して最もはつきりした見解を持つて居る。しかし事實の發展が、彼等の見解通りにスラ〳〵と運ぶかどうかは甚だ疑問としなければならぬ。

果して左翼は勝つか

左翼主義からいへば、合同は左翼勢力を展開する最大の手段であるから、どんな反對勢力とでも喜んで合同するのがその一貫した方針である。特に無産大衆黨の立場からいへば、自分達は現在の合法政黨の中で最も大衆的背景を有しない最小政黨であるのだから、合同政黨内に割り込んで行つて、得意のアヂテーションをやつて置けば、たとひ合同政黨が將來どんな仕末にならうと自分達には損はない譯である。うまく行けば合同政黨を乘つ取れるし、まづく行つても多少の駄賃は出やうといふものである。かういふ點が左翼少數黨をして無責任に大膽に合同論を叫ばしめる所以である。

だが果して無産大衆黨の豫定計畫通りに、日本大衆黨を大した犧牲を拂ふことなしに左翼ブロックの統制下に置くやうに出來るかどうか。これは深甚な興味を唆る問題である。尤も合同政黨内に於ける横斷左翼の結成は相當な効果を收めるであらうと思はれる。舊無産大衆黨の幹部諸君と舊日勞黨左翼の田所、河野、加藤、三宅の諸君との結合は難事ではあるまい。これに九州民憲黨の淺原君一派も加盟するであらう。ところで若し此の左翼ブロックが、合同政黨の覇權を掌握しやうとして眞向から左翼主義を押し通さうとするならば、必然的に先づ舊日勞黨の右翼特に勞働組合同盟と正面衝突をしなければならぬ。勞働組合同盟は既に左翼に向つて實戰を布告して居るのだ。そして勞働組合同盟は合同政黨内に於ける殆んど唯一の戰鬪的勞働組合であることを記憶しなければならぬ。

そして若し合同政黨内の左右兩翼の抗爭が進展してくれば、杉山、吉田君等の率いる農民組合、平野君等の率いる農民組合も必然的に右翼に加擔して左翼と戰はざるを得なくなるであらう。この抗爭は何れの勝利に歸するか分らないが、何れにしたところが、結果に於いて大なる犧牲を伴ふであらうことは察せられる。或はそのときは日本大衆黨そのものゝ存立を危くするやうなカタストロフイーを生ずるかも知れない。

左翼派の弱點

無産大衆黨の描く日本大衆黨の左翼化計畫は、筋は通つて居ても、その實踐過程に於て多くの困難を有するものであるが、この困難を更に大ならしめる諸條件がある。

(一)、無産大衆黨には筆先きだけの理論家が多くて、實戰的鬪士にとぼしい。筆を執れば滔々數千言の論文を書く理論家は居ても、實踐的に大衆の信任を博する鬪士が稀れであるから、左

翼主義の旗の下に大衆を引きつける力を有しない。同じ左翼政黨でも勞農黨が大衆に對する一種の魅力を有するのは、果敢なる實踐性を有するがためである。だが、遺憾ながら無產大衆黨は理論的多辯ではあるが意志薄弱なインテリゲンチヤが中心勢力をなして居るので、大左翼を結成して全無產政黨を指導するには些か心細い感じがする。日本大衆黨結成の準備會たる五黨協議會に於ても、社會民衆黨及び新黨準備會を合同に勸誘すること、黨名を勞農大衆黨とすること等の無產大衆黨の重大なる要求は、日勞黨、日農黨などの代表委員によつて脆くも一蹴されてしまつた有樣である。

（二）、斯くの如き左翼理論黨の持つ謬見は、理論の力を不當に評價し、理論の力によつて右翼勢力の幹部と大衆を容易に離間し、よつてもつて幹部を浮き上らせ、右翼大衆を獲得することが出來ると思つて居ることである。だから彼等の理論的鉾先きは常に右翼陣營の幹部に向つて集中される。現に彼等は全力を擧げて社會民衆黨幹部に對して出鱈目な惡口雜言を浴せかけつゝあるのみならず、合同新黨内の右翼幹部に對してさへ中傷的宣傳を飛ばして居る。かうした理論的中傷離間策は實際的に何等の効果がないのみならず、却つて左右兩翼の對立を一層感情化するに役立つ位のものだ。左翼派もこんな淺はかな謬見をやめて、理論的多辯でなく、また他黨幹部の惡口專門でもなく、實踐の戰野に於いて堂々と大衆の信任を博するやうにならなければ、彼等はいつまでたつても渺乎たる左翼理論團として殘るであらう。そして十年一日の如く徒勞ながらも單一政黨主義を叫びつつ、澎湃たる右翼大衆を物欲しさうに眺めてゐるだらう。

我々は斯く觀測す

斯く論じてくると、日本大衆黨はどの方面から見ても問題の無產政黨である。たとひ高野岩三郎博士が黨首の椅子に鎭座したところが、この前途多難な政黨を調子よく操縱して行くことは恐らく至難の業であらう。我々の確信を以てすれば、相異る指導精神を有する諸勢力の合同は、眞の戰線統一ではなくて、却つて戰線混亂の機會を作るやうなものだ。しかし今回の合同は、各黨特に日勞黨、日農黨の行詰りを打開する意味が多分に含まれて居るから、各當事者は新黨の永久的生命に就いて愼重に考へる餘裕もなかつたといふことが出來る。さういふことになれば、新黨の成立は各黨の行詰りを一時的にせよ救濟した點に於て本當の意義はあるのであつて、眞の戰線統一といふ點からいへば、殆んど意義を發見することは出來ない。合同は大衆の

要望だ、といふあまりに簡單なスローガンも、時あつて重寶なものではある。

少しく將來を見通して考へるならば、今後無產政黨戰線にさまざまの波瀾曲折があるとしても、結局の所、我々の持論のやうに、右翼陣營と左翼陣營とに分立するのではないかと豫想される。それは社會運動の必然的大勢であるばかりでなく、客觀的事實に最も適合した行き方であると信ずる。この必然的大勢に適合する合同は、眞に戰線統一として價値があるが、これに適合せざる合同は、當事者の無知か若くは當事者が他の目的を以て合同を利用する行爲に過ぎない。日本大衆黨の結成過程に於て、純眞なる戰線統一の動機以外のものが、如何に活躍したか、思ひ半ばに過ぎるものがある。

しかし左右兩翼分立の大勢は必ず落ちつく所に落ちつく。日本大衆黨の成立は、この大勢の進行からいへば一種の變態現象のやうに見えるが、しかし大勢の基調は依然として一定の方向に動きつゝあつて、やがては日本大衆黨もこの必然的大勢の審判を受けなければならぬ日が來るであらう。

稅制整理案の解說及び批評

牧野輝智

今回の稅制整理案の骨子は地租及營業收益稅を地方自治體に委讓して地方稅制を整理せしめ、此の兩稅委讓に關聯して國稅の改廢を行ふことである。現政府が兩稅の委讓を行はんとする趣旨は、是により地方自治體に獨立せる確實なる財源を得せしめ、地方自治の本能を發揮し、現行の弊害ある地方稅を整理せんとするのである。斯くていよ〳〵決定したる稅制整理案の大綱は左の如きものである。

一、國稅としての地租を廢止し、之を市町村稅となし、土地の賃貸價格を以て課稅標準となす。現行府縣稅に於ける地租附加稅及び特別地租約八千萬圓に代るべきものとしては、府縣に於て土地の賃貸價格を標準として市町村に分賦して是を徵收す。

二、國稅としての營業收益稅を廢止して之は府縣稅となす。府縣稅となれる營業稅は現行の國稅たる營業收益稅と同樣營業收益を以て課稅標準となす。

三、兩稅委讓による國庫收入減の一部分を補塡する爲め所得稅法の改正を行ひ第一種及び第二種所得の稅率を引上げ、第三種所得に就ては所得金一萬圓を超ゆる分に對して累進率の引上げを行ふ。此外第三種所得稅中の新目として不動產による所得及び營業行爲による所得に對して前者は百分の〇・六乃至百分の一・八、後者は百分の〇・四乃至百分の一・二の比例稅を課する規定を設く。

四、現行の資本利子稅（國債利子稅を除く）は右の所得稅法改正中第二種所得として徵收することに改め、而して其の稅率を引上げ今後に於ける資本利子稅は國債利子稅のみとす。

五、國税中鑛産税收入の約額は之を地方税（市町村税）に委讓す。從つて國税として鑛産税なるものは依然存するけれども國庫の收入は半額に減少されるのである。

六、地籍を整理するため地籍法を創設し税務署をして其事務に當らしむ。

七、現行府縣税の一種たる家屋税は之を市町村に委讓す。

斯くて、新税制整理後の直接國税は、所得税を中心とし國債利子税、相續税、鑛業税取引所營業税の類のみとなるのであるが、地方税制は左の如く變更される筈である。

府縣税
- 獨立税——營業税、雜種税
- 國税の附加税——所得税、取引所營業税、鑛業税、砂鑛區税の附加税
- 府縣費の分賦——土地に對する分賦、家屋に對する分賦（何れも市町村へ）

市町村税
- 獨立税——戸數割、地租、家屋税、段別割其他の獨立税
- 國税の附加税——所得税（戸數割たき市町村）、取引所營業税、鑛業税、砂鑛區税の附加税
- 府縣税の附加税——營業税、雜種税の附加税

今回の税制改正により國税は、約八千一百萬圓の減少となる計算であるが其の內譯は地租及び營業收入税の地方委讓による國庫收入減約一億二千九百萬圓、鑛産税の地方委讓による國庫の收入減百萬圓、所得税法の改正による國庫の收入增四千九百萬圓、是等を差引計算して結局國庫の收入減は八千二百萬圓となるのである。國税としての地租及營業收益税の合計額は是を今日のまゝ繼續すれば前揭の如く一億二千九百萬圓に達する見込（自然增收をも加算して）であるけれども、此の內から約一千三百萬圓は昭和四、五年兩度に於て兩税の輕減を行ふことになつてゐるから、兩税委讓の實施する可き年即ち昭和六年度に於て國税として廢止される兩税の額一億一千六百萬圓となる計算である。

然らば此の兩税の收入は悉く地方税に委讓する計畫であるかといふと政府案では此の內から約五千五百萬圓を地方税に委讓することになつてゐる。三土藏相の說明する所では兩税收入一億二千九百萬圓中約三千六百萬圓は所得税法改正中に第三種所得中に土地及び營業の所得に對し比例税を新設することになるのであるから、委讓さるべき兩税の金額から此の三千六百萬圓を差引き、殘金九千二百萬圓の中で約三千八百萬圓を土地及び

營業行爲に對する國民の負擔輕減に充當し、其殘額五千五百萬圓を府縣及び市町村に委讓するのである。從つて兩税委讓實行の曉には土地及び營業行爲に對する負擔だけで現在よりか三千八百萬圓だけ輕減されるといふことになつてゐる。而して此の委讓された新財源五千五百萬圓及び之に鑛產税委讓一百萬圓合[redacted]るかといふと、是に對して現政府の方針は全部現行地方税の整理輕減に充てしむる筈だといつてゐる。此の點に就て三土藏相の説明では左の如き內譯になつてゐる。

家屋税の負擔輕減	約二千六百萬圓
戸數割の負擔輕減	約二千二百萬圓
雜種税附加税の輕減	約五百萬圓
市町村交付金減收の補塡	約三百萬圓
合計	五千六百萬圓

斯くて政府の宣傳する所では『今回の税制整理によりて土地及營業上の負擔は約三千八百萬圓の輕減となり、家屋税、戸數割、雜種税等にかて約五千三百萬圓を輕減し、而して國税地方税を通じて見れば國民の租税負擔は八千萬圓を輕減されるのである』といふ。(三土藏相の説明の一節を其のまゝ借用す)

税制整理案の內容は大體右の如きものであるが、此の整理案に對して民政黨及び貴族院議員の一部には根本の問題として兩税委讓そのものに反對してゐる。民政黨の聲明する所では地租の委讓に對しては(一)地租は千數百年の歷史を有し極めて安全確實なる財源であつて、國家有事の際には常に之に財源を求めてゐる。(二)[redacted]民思想に重大なる關係を以てゐる。(三)地租の課税標準たる賃貸價格の決定を地方團體に委する時は政爭の具となり不公平なる課税を免れない。(四)耕地整理とか自作農の保護とかの實行を頗る困難ならしむる等の理由を列擧して委讓反對の意思を表し、營業收益税の委讓に對しては(一)營業税は元來地方税であつたけれども、地方政爭の具に供せられ其の弊害に堪へずして國税となつたものである。(二)營業税を地方に委讓する時は各府縣間に著しき高低が起り商工業を不當に壓迫する恐れがある。(三)年收百圓二百圓に過ぎない小營業者に對しても營業純益を調査せなければならぬ不便がある。(四)數府縣に跨つて本支店を持つてゐる營業者に對する調査が完全に行はれない等の理由を擧げて營業收益税委讓の不合理を攻擊してゐる。

民政黨の意見は兩税委讓の反對の代表意見と目す可きもので

あるから、玆に其の重要なる點を掲げた次第であるが、私は根本方針として國税の委讓に反對する意見には同意を表しかねるものである。特に地租委讓を以て我が國體觀念に反すといふが如きは一顧の値だにない固陋なる意見であると考へてゐる。土地課税の如く地價（特に宅地）の變動甚しく其の收益を的確に調査することの困難なるものは、國税として負擔の公平を期すること殆ど不可能であるけれども、之を地方税とすれば調査の地域が狹くなり、而かも事情に精通する地方民が之に當るのであるから、的確なる時價を知り、其の公正なる賃貸價格を知ることが容易である。國税としての地租の不公平なることは多年地租の標準であつた法定地價と土地の時價とが極端に相違してゐることに考へても明瞭である。

先年濱口雄幸君の藏相時代に土地の賃貸價格を調査することになつたが、之が調査に數年の日子を要し千數百萬圓の經費を要するのである。しかも斯くして出來上つた賃貸價格なるものは片つぱしから激變して行くのである。例へば或る處に停車場が指定されたとする。さうすれば其地價は數倍に昂騰し賃貸價格を數倍に昂騰せしむる。又學校が新設されたとする。其附近の地價の昂騰することは同樣である。私の知つてゐる某氏が巨資を寄附して學校を設立した時、序に其の附近の土地を買込んで置いたところが、其附近の土地が暴騰したので寄附金が同額の利得を擧ぐることが出來たといふ實例を私は聞いたことがある。實際問題として斯樣な昂騰は常にあり得ることである。反對に停車場や劇場などが他に移轉した場合に舊所在地附近の地價が低落することも同樣である。斯の如き地價の變化は地方税であれば容易に其の眞實を知ることが出來るけれども國税として却々分り難いことである。分り得ても公平に賦課し難いことである。それは今日現に東京市中にて優秀なる廣大住宅地が山林としてしるしばかり地租を課せられてゐる例の珍しくないのに徴しても明かである。私は斯樣な不公平を除去する點から考へて地租は地方税として地價相當の賦課をなすことが正しいことだと思ふ。又政府のいふ通り地方に確實な財源を供する點から考へても地租や營業税を地方に委讓するは適當なことだと思ふ。今日の不當なる地方税を改廢せしむるには地方財政其のものゝ緊縮も無論必要であるけれども、現實の問題として之に代る可き確實な税源を與ふることも亦極めて必要であるからである。

是等の理由によりて地租が地方に委讓されるとすれば、營業税も亦地方税に委讓されることが租税の性質上當然であるやうに考へる。といふのは現行税制組織上地租と營業收益税とは相

對立せしめて、土地と營業とに對する國民負擔の權衡を圖ることになつてゐるのであるから一を國税から廢し他を國税として殘すことは當を得たものでないからである。即ち兩税委讓の相互關係は農業者に對する地租(田畑税)と商工業者に對する營業收益税の關係を比較考慮しても當然問題とならなければならぬことである。私の本文は兩税委讓の可否を論評の點とするのではなく、政府の整理案全體の論評を目的とするものであるから既に十分論議を盡されてゐるかの感ある兩税委讓其のものに就ては、多くの言を費すことを避け、私が純理論として兩税委讓其のものには寧ろ賛成である理由を一言するだけに止めて置く。

然しながら兩税委讓の趣旨が民政黨邊りで非難するやうに惡いことではないといふことは、今回の整理案其のものが良い案か否かといふこととは別問題である。私は今回の税制案に對しては幾多の點に於て異議を挾まざるを得ないのである。抽象的に兩税委讓の可否を論究する場合と現實の問題として之が實行の可否を論究する場合とは結論に於て相違を生ぜざるを得ないことになる。兩税委讓其のものは良いとしても、是を實行せんとするに就ては、是によりて生ずる國庫の收入減を如何にして補塡するかといふことが第一の問題として發生するのである。然るに現内閣の此の點に對する方針は甚だ不確實であり且つ不合理で其の補塡策の第一としては所得税の引上を行ふこととなつてゐる。而して其内で特に注意す可き點は實質に於て特別所得税と稱す可きものを一般所得税中に併設し不動産所得及び營業所得に對し百分の〇・四乃至百分の一・八の課税をなさんとすることである。此の所得税の改正によりて四千八、九百萬圓の增收を得ることになつてゐるが、それでは尙ほ八千萬圓位の收入減の始末がつきかねることになるので、政府では震災復舊費を公債支辨に振り向け、或は減債基金繰入負債の一部を特別會計の負擔に振向け、其他木材關税の引上げを行ひ、是等をかき集めて歳入減に對する始末をつけんとしてゐるのである。兩税委讓の如き財政上の大事業を決行するに當りては、何といつても膨脹し切つた現在の財政に大斧鉞を加へ、是に依つて得たる餘剩を以て之に充つることを考へなければならないのであるが、政府のは此の點に就ては殆ど無關心である。尤も口では財政整理によりて得たる餘剩金をも是に充てたいと稱してゐるけれども、何等實行には現はれてゐない。現に昭和四年度の豫算案では整理節約に相當の努力を試みたと稱してゐるけれども、豫算に現はれた節約額は僅に七百五十萬圓、繰延額をも加へて八百萬圓に過ぎない。十七億五千萬圓の大世帶にありて八百萬圓の節約

は、月收三百圓の家計にありて僅に一圓四十錢の節約をなしたやうなものである。是が特に節約として吹聽す可きものでないことは改めていふ事でもない。現内閣の整理節約に對する態度は斯の如きもので今回の税制案にしても尨大な豫算を實質的に緊縮して兩税委讓の收入減を處理することを實行的に考慮しないために、財政上非常な無理を生ずることになるのである。震災復舊費を公債費に移して、兩税委讓の財源となすことは取りも直さず、兩税委讓の不足財源を公債にて補充せんとするのである。減債基金繰入金一部の特別會計負擔も亦公債の増發の動因たることを免れないものである。かやうなことがさなきだに公債の激増に苦みぬいてゐる我財政の基礎を著しく不安にすることは免れない事實である。兩税委讓は斯の如き無理をしてまで實行せなければならないのであらうか。此の點になると私は政府の實行案に贊成を表し得ない次第である。

以上は根本の問題であるが、整理案の各部に就ては論議を挾む可き幾多の問題がある。第一は政府の矢釜しくいふ國税の體系問題である。政府では直接國税を所得税一本に統一したと稱してゐるけれども、直接の國税は他にも幾つも殘つてゐる。然産税は其半額を地方に委讓して依然其形態を直接國税として殘してゐるのである。資本利子税の大部分は直接國税統一の趣旨から所得税に併合されたけれども、國債利子税のみは依然資本利子税として殘存するのである。斯の如きことをして資本税を所得税に統一する必要がどこにあるであらうか。若し又資本税を所得税に統一することが形式上よろしいといふならば國債利子も所得税に併合したらよろしいではなからうか。政府の考では國債には所得税がかゝらないことになつてゐるから、別に國債利子税（資本利子税として）を殘存せしむのであらうが、公債所有者からいへば所得税であらうと、利子税であらうと、納める金額が同一であれば苦痛は同一である。政府が國債利子の爲めに資本利子税法を引離して殘すことは形式上の不統一でもあり、實質に於ても不眞面目な遣方である。

又政府が特別所得税類似のものを設定しながら、是を新設となさず、所得税中に挿入したことに就ては、恐らく識者の非難を免れ得ないであらう。元來今日の場合土地家屋の所得及び營業所得に對する實質上の新税を設けるのがよろしいことか、それが第一の疑問とされることである。政府の言では兩税委讓では土地及び營業收益に對する負擔の輕減に主力を注いでゐると稱してゐる。又家屋税に就ても現行税の重課税に鑑み、其の輕減に力を傾注したと稱してゐる。然るに一方に於て土地家屋及

營業收入を標準とする新國稅を設くるは如何なものであらうか。更に又土地の收益や營業收益を國稅とするは不適當だとして兩稅委讓を實行しながら、それと同一の實質を有するものを所得稅中に新設するは矛盾した行爲ではあるまいか。政府では兩稅を完全に地方に委讓すると稱するも實質に於ては一部分は國稅として殘し、他の一部のみ地方に委讓すると同樣である。是は極めて理義の一貫を缺いた遣方である。

斯くの如き意味に於て私は兩稅委讓の場合に土地及び營業に對する新種の稅を見ることを喜ばないものであるが、百歩を讓り強いて此の新課稅を實行せんとするならば、公明正大に獨立せる特別所得稅法を制定し、異つた方法により課稅することが適當であると思ふ。第一に所得稅は累進稅であるのに今回の新課稅は比例稅である。二千圓未滿、三千圓未滿、三千圓以上と三つの階級は區別されてゐるが、其稅率は比例稅である。同一稅法に於て、而かも同種の所得に對し或は累進稅を課し或は比例稅を課し、且つ是を部分的に重復せしむるは甚だ間違つた遣方である。現行所得稅の外に獨立した特別所得稅を設け、異つた標準變つた稅率にて課稅するといふたらば負擔の平衡といふ點からいつても意義をなすのである。今回の稅制案は新稅制定といふことが、國民の反感を買はんことを恐れ、現行法改正の名の下に、新稅法制定と同一の徵稅をなさんとしたのであるから、そこにかゝる矛盾、混亂を惹起さした次第であると思ふ。

兩稅委讓に就ては委讓された地方自治體が如何に之を有効に使用するかといふ問題が最も重要なことである。政友會が最初兩稅委讓を聲明した當時に地方分權の實を擧げることをその第一の目的とした。今回の整理案では此の趣旨は全く沒却されてゐる。しかしながら私は其の最初の趣旨が沒却されてゐることを必ずしも非難するのではない。地方分權の實を擧げるには、同時に中央の權限を縮少し、其の事業を整理し、中央の政費及び事業費を節約せねばならぬ。是をなさずして地方分權と稱し、新な施設を續々實行されては國民の負擔はいやが上にも加增するのみである。今回の整理案では前に說明した通り、委讓財源全部を擧げて地方稅の整理に充當し、地方負擔の輕減に供する筈であるといふ。是は今日の場合當然のことであるが、地方財政の現狀を今日のまゝにして置いて、負擔輕減は果して何時まで繼續するであらうか。況んや政友會の所謂地方分權を其の一部にても實行するに於て、果して國民負擔の輕減は何時までつづくであらうか。私が玆に其の實狀を詳述するまでもなく今日地方財政の膨脹の形勢は實にすさまじい勢である。中央財政

の膨脹も諸外國に多くその例を見ない狀勢であるけれども、地方政財に至りては更に甚しいものがある。單に地方税に就ていふも、大正五年度の地方税額は一億八千萬圓であつたものが、昭和三年度には六億四千萬圓に增加してゐる。十二ケ年間に三倍四割餘の增加（此の間に國税は二倍半の增加）である。此の地方財政激增の狀勢を抑制することを考へずして却つて地方分權などと稱してゐては假りに兩税委讓によりて一時は幾分の地方負擔の輕減が實現するとしても、それは束の間のことで、程なく增税を餘儀なくされることは免れ難いことであらうと憂慮するのである。

之を要するに今回の税制整理案には幾多の無理があり矛盾がある。一億二千九百萬圓といふ巨額の兩國税を財政の節約緊縮によらずして地方に委讓せんとすることが無理の本源である。公債を增發し、增税を行ひ（木材關税引上の類）、兩税委讓を行ふてもそれは無意義であるばかりか寧ろ有害である。又地方財政激增の狀勢に對しても、歳出の方面に於て之を堅實に樹て直すことを考へないで、新財源を供與し、負擔減を實現することを策しても、それは一種の手品に過ぎない。地方財政膨脹の勢は更に激成され、國民の負擔が更に重課される日は數年ならずして實現するのである。兩税委讓の如き財政上の重大問題は政實協定の如き政治的事情に支配されて無理押に實行を急ぐ可きことではない。問題の出發に無理があり、其の實行方法に眞面目を缺いたため、提示されたやうな杜撰な税制案が出來上つたのであらうと思ふ。

現代政局の展望

吉野作造

今度の議會の景况……去歳初秋以降の政況……政友會の下院に於ける優勢……憲政逆轉の責……下院優勢の事實が田中内閣存立の唯一の根據か……特權諸階級の政友會支持……政友會と財閥との關係……特權階級と國民大衆との對立……民衆の自覺……民衆開導の方策……開導運動に於ける一つの惱み……東京市會議員の改選に對する市民の態度……民衆運動の出發點並に其上に築かるる二態樣……大衆の爲の仕事であることと大衆の爲の仕事だと云ふこと……共産黨運動の特色……我國民衆運動の將來……戰線統一の前途……我國無産政黨界の現況

今度の議會の景况

今度の議會の樣子は奈何なだらうと能く人から訊かれる。問ふ人の氣持は無論いろ〳〵であつて、中にはどんな事で波瀾がおこるだらう、意外の出來事で政變を捲き起すやうなことはないかと、好奇心に驅られるのもあるが、幾分まじめに、治安維持法改正緊急勅令承諾案の運命は如何とか、支那問題はそも〳〵如何な風に取扱はれるだらうとか、又は支那問題でしつくり肚の合はぬらしい田中床次の兩派は強て他に政策共同の口實を見出すの必要から小選擧區制の採用と云ふが如きを目論むことはなからうかなど、具體的の問題に付て心配してゐるのもある。今日の政友會内閣の掲ぐる政策には、對内對外の兩方面に亘り、毫も我々國民を滿足せしむるに足るものなきは言ふまでもないが、朝野兩黨の政戰の好題目たる上記の諸件につき、國民の政治的不滿がどれだけ今度の議會で代辯さるるだらうかが、即ち心ある人達の普ねく知らんと欲する所なのであらう。尤もそれが如何に力強く代辯されたとて、換言すれば個々の問題に付ての朝野兩黨の論爭が如何に尖鋭であつたとて、其結果に於て我々の滿足に値する何物かの實現さるべき見込もないことは勿論だ。この事に國民は疾うの昔から諦めては居るが、唯幾分の痛快を豫感しつゝ私かに期待して居ることは、這の澎湃たる國民的反政府感を利用する在野諸黨の肉薄がどれだけ政府の牙城を震撼するかの點である。之れで頑迷なる政友會に我を折らさうと云ふのではない、よし彼れが勢の自家に非なるを見て新に

的態度に出で幾分我々の主張を容れたからとて、固より安心の出來る話でもない。たゞ一方は在野黨をして國民大衆の要望を振り翳すことが政府を追究する最有力の武器たるを知らしめ、他方には又政府をして結局之を無視しては其地位を保ち難きを悟らしめ、斯くして國民大衆の要望が漸を以て實際の政界に確乎たる地歩を占むるに至るの趨勢を其の裡に看取し得んことを期するのである。併し今度の議會に於ては單に之れだけの期待すらが少しでも充たされ得るだらうか。

この點に關しては我々は殘念ながら全然悲觀的の觀測を下すの外はない。尤も我國政界の近狀に在ては、悲觀するのが常則で一時の變態としてでも樂觀し得べき事由は存しないとも云へる。何となれば議會内に於ける議員の行動は民間輿論の批判とは全然沒交渉に營まるるを常とするからである。併し夫れにも拘らず我々は、昨年二月の總選擧後の政情に當面しては一時少くとも多少の樂觀を感じたのであつた。一つの理由は政府のあれだけの大干渉にも拘らず選擧の結果は見事にその期待を裏切つたことである。之を私は國民の政治的自覺の一進歩と觀たのであつた。モ一つの理由は少數ながら無産黨議員の出たことである。既成政黨の人達と全然イデオロギーを別にする之等の議員に依て、始めて國民大衆の要望は直截に代辯せられ得るを信じたからである。而して政界爭覇の當事者たる政友會と民政黨との數が極めて近似してゐるの事實は、その外に於てまた二重に國民を喜ばしめたのであつた。一はカスチング・ヴォートを握る無産黨議員はその數少きに反比例して直接に發言するの機會を大に惠まれ得べきことであり、二は闘志滿々たる民政黨は戰略上また大に無産派の要求に聽くべきを以てである。選擧後に開かれた臨時議會幷に特別議會は會期の短かつた爲め十分に所期の機能を發揮せしめ得なかつたが、それでも政府に加へた壓迫は渺少でなかつた。あれでもう少し推して往つたら一寸面白い展開を見得るやも知れないとひそかに前途を樂んで居たのに、何事ぞ、九月以後の形態は在野黨に取つて散々ではないか。但し無産黨の陣營に於ては、當然爲さるべきことが爲されずして放任されたと云ふの外、格別の變化はない。政友會の斯の如き專恣横行を前にして猶且戰線統一の必要が只單に口先だけで叫ばれるのは、何と謂ても彼等の缺點たるを免れぬだらう。民政黨に至ては床次の寢返り以來脫黨相繼ぎ、自ら之を收拾するの術なき醜態を暴露して、内部の結束力の案外弱きを見透かされてしまつた。が、何よりも驚いたのは、脫黨議員の斯かる露骨な無節操の行動に對し、社會一般よりは無論のこと、直接の選擧民の側よりも殆んど何等問責糺彈の聲を聞かぬことである。之では國民の自覺も何もあつたものでない。斯くして舞臺が一ト廻りすれば、國民も依然として呉下の阿蒙であり、民政黨も亦昔ながらの木偶の坊に外ならない。國民多數の不滿をよそに、ひとり政友會は牢として拔くべからざる覇權を確立せるものの如くである。小波瀾は暫く度外に措かう、今度の議會は要するに極めて平々凡々におわるのではあるまいか。

去歳初秋以降の政況

議會を唯一の政戰舞臺とすれば、今日の政友會は正に天下無敵の覇王の地位に在る。言ふ勿れ、彼は未だ下院に絶對多數を占めて居らぬと。成る程最近著しく數は殖えても絶對多數を占むるまでには達してゐない。從て理窟の上からは、他の總ての黨派が一緒になつて彼を倒しに來ないとも限らぬわけだ。併し斯は杞人の憂に非ずんば單なる一片の屁理窟に過ぎぬ。表面の粉飾としては兎も角、政友會に眞に這般の煩悶なかるべきは、去歳初秋以來の政況を見れば一目極めて瞭然ではないか。

去歳初秋の政變といへば、先づ床次の民政黨脫退を皮切りとする。夫より同黨に於ける脫黨沙汰は連綿として今日に盡きず、或は床次を擁立する新黨俱樂部の結束となり、更にまた憲政一新會の設立とやら大隈派の旗上げとやら、民政黨の一角の崩壞より色々の小黨を簇出せしむるばかりでなく、中には直に籍を政友會に移したものも尠くはない。之等の政變が事實政府側の糸を引く陰謀の現れなりや否やは別論として、直に政友會に投ずるを不便とする特殊の事情が暫く獨立の別派を成さしめしに非るかの疑あるもの尠からず、少くも總じて民政黨の大を破るを直接緊急の目的とする運動たることは毫も疑を容れない。故にこの政變を總括していへば、形はいろ／＼になつて居るも、要するに近き將來に於ける政變の到來を極力防がんとするに出でたものと斷じていゝ。蓋し民政黨の陣容をみだし之と政友會との隔りを大にするときは、政友會內閣の多少の失策に依て直に之に取て代らんとする民政黨の立場を易く抑へ得るばかりでなく、更に又民政黨を中心として頻發するの恐れある倒閣陰謀を有效に封じ込むことが出來るのだ。いづれにしても、此際政變を來させまじとの要求と之に基く努力とが強く働いて最近の著大な政變を出現せしめたことは、何としても隱すことは出來ない。斯うした裏面の考が更に其奧に積極的に政友會を聲援したいといふ希望を包藏して居たかどうかは私に分らぬ。その見極めが付かぬ以上政友會として十二分の安心の出來ぬといふは分るが、兎に角、民政黨に天下をやりたくないと云ふばッかりに白晝公然あゝした露骨な政治的罪惡の行はれた以上、今日の政友會內閣はこゝ暫くは焦らず迫らず悠々その全盛を誇つても差支ないのであらう。

政友會の下院に於ける優勢

政友會が下院に於て居然たる優勢を占むることは疑もなき事實である。併し之と同時にその形式的優勢が何となく底力を缺き道義的根柢の以て人を服するに足るものなきも亦明白なる事實である。さればにや彼はあれ丈けの優勢を擁して而もなほ獨往無碍の勇斷に出でず、左顧右眄ひたすら其地位の持續に焦慮して維れ日も足らざる有樣ではないか。是れ何を以て然るやと云ふに、外ではない、一に國民的基礎を缺くからだ。云ふまでもなく政友會今日の優勢はその實質に於て何等國民の輿望と關係なくして作られたものである。

政界に於ける勢力はその據る所の國民的基礎あるに因て始めて搖かす可からざる威望を有すとは、能く人の云ふ所である。謂ふ所の國民的基礎とは、主として「公正なる選擧」並に「其結果として獲られた

る多數」を必須の條件とする。(形式的制度の問題もあるが此事はいま姑く論外に置くこととする)。公正なる選擧の結果として作られたる多數である以上、假令解散に依つて選擧を繰り返した所で結果に異常の變化あるべくもなく、先づ大勢は之できまつたものと觀ねばならず、爰に始めて道の多數に他の凡ゆる勢力を排して獨り自ら其の欲する所を擅行することが許されるのである。夫の閥族官僚の勢力の如き過去の情勢に由て今仍ほ過分の發言權を認めらるるものありとはいへ、國民的基礎に立つ政黨に對しては最早風前の燈にひとしと謂てい丶。政界に於ける國民的進出の傾向に對し閥族官僚の一派の如何に臆病であるかは、この傾向の頗る微溫緩漫たる我國に於ても、既に之を推定せしむべき多くの事例に富むを見るのである。

而して政友會今日の多數は如何。彼がこの多數を作るには二つの段階を經た。その各の段階に於て彼は些でも國民の輿望を顧慮したことはあるか。諄々しく說くまでもなく、第一に彼は總選擧に於て自家の多數を獲べく凡ゆる不正不義を公行して憚らなかつた。從て彼が其結果に於て幾分在野黨を凌駕するの多數を作り得たとはいへ、そは固より國民の意嚮を反映するものではない。第二に彼は事後に於て議員の節操を買收するの醜手段に倚り利權の提供に依て更に十數名を加ふるに成功した。斯の如きは槪して國民の最も憎む所、加之その個々の場合に於て曾て選擧民の意向を訊くべき手段の執られたことを耳にしない。是れ泥棒が財を積んで人に誇ると何の異る所がある。斯うした方法が許さるるものなら、一旦風の吹き廻しが變ると、何ん時また政友會が同じ方法で覆へされぬとも限らない。畢竟は國民的基礎に據つて盤石の强味を擁して居らぬからのことだ。この形勢はまた自ら政界の一隅に各種の低氣壓の釀成を促すことにもなる。樞密院だの貴族院だの軍閥だのが今日現に夫れ〲相當の勢力を陰微の間に有して居る所以である。我國の政界が常に白日の明るさを示さないのも宜なる哉と謂はざるを得ない。故に政友會がこの上如何にその數を增したとて、之に依て政界の安定を圖し得ざるは勿論である。

憲政逆轉の責

尤も、完全に國民的基礎に立たざるの故を以て今日の政友會を責むるのは聊か酷だ。ひとり政友會に限ら　・民政黨にだッて此事は遂に十分に期待し得べからざるを以てである。要するに既成政黨には、その成立發達の基礎に於て、容易に國民的基礎に立ち難き情質の存するものがある。之を一部の社會主義者の說くが如く絕對的のものと觀るべきや否やに付ては世上に種々の論あるが如きも、事實に於て今日の既成政黨にその情實の徹底的拋棄を望み難きは何人も異議のない所であらう。從て私は結局に於て既成政黨に望みを置かず切に無產政黨の發達を冀ふものであるが、さりとて明日の問題に非ざるの故を以て今全く既成政黨の動きを度外におく譯にも行かない、こ丶暫くは何と謂ても既成政黨の掛引きに依て我々の生活が拘束され我々の運命が左右さるるを免れ難いからである。明日の政治を考察するは固より缺くべからざる必要ではある、併し乍ら先づ以て今日の政治を確實に理解す

るに非ずんば、その折角の考察も今日と連絡する現實の基礎を缺くことにならう。憲政今日の活動の攻究が比較的に看却され勝なる事實に鑑み序を以てこの事を一言しておく。

さて再び話を前に戻す。元來國民的基礎に立つ下院の多數に天下を料理するの實權を託すべしと云ふ民衆政治（デモクラシー）の道徳的根據は、國民の圓滿なる自覺を前提とするものたるは論ずるまでもない。國民が全體として曖昧の域に沈淪して居れば、その判斷に何等の道義的權威なく、從てまた其結果たる下院の多數に大事を託して安じ得るの道理がないからである。是れ屢々憲法政治は智德の相當に進みたる文明國民のみ獨り之を運用するに耐ゆとの說ありし所以（我國憲法發布の頃、西洋諸國に於て此點に基き我が憲政の前途を危みし議論の盛なりしは人の知る所である）。素より憲法政治の運用に耐ゆるとする智德の程度如何の問題に至ては、人に依て其の觀る所を一にしない。只疑なきは、民智の十分に進まざる國に於て憲法政治を採用するに方つては、必ずしも本來の意義の十分なる徹底を期し難しとすることである。民度の著しく遲れて居る國に憲政の採用すべからざるは論なしとして、大抵の場合に於ては、之が採用に依て以て漸次國民を訓練し得べしと信ぜられて居る。故に斯うした國に在ては、憲政の運用に際し頗る變態たる事實の發生を避け難く、而して識者は常に局外から、政治的訓練の效果如何を準據として、侃々諤々の批判を憚らぬやうである。

顧つて今わが國憲政の跡を按ずるに、是亦常態を以て目すべからざるものがあるやうだ。爰に之を評論するの遑はないが、試みに其大略を要約すれば次の通りである。

（一）憲政創設の當初、實權を掌握して居つた藩閥の一團は、議會を以て單純な諮詢機關の地位に置かんと欲し、下院の多數黨に讓るの意なきは勿論、始めから之を無視して掛つた。漸くその無視し難さを看るに及んで彼は暴力を以て容易に之を壓倒し得べしと期した。民衆政治の端はまだ僅に政界發言の權を得たるに止らざるを得なかつたのである。

（二）民衆政治の要求の大に伸びんとするの端緒は、政黨が其の結束に由て天下の事當に藩閥者流の意の如くならざるの實を示したるに始まる。併し之より更に發展して、藩閥者流が完全に内閣を政黨に明け渡すの慣行を生ずるまでには、相當永い時間を要した。而してその經過期にあらはれた特殊の現象に二つある。一は政黨員の内閣割込みである。二は閥族官僚と政黨側との協定に依る内閣更代である。第二は第一に踵いで起り、且此期に及んで閥族官僚の來り政黨に投ずるものあり、幾分二者の限界を紛更した。要するに政黨の勢力の伸びて此處に到れるは亦一偉觀たるを失はざるも、猶未だ閥族官僚の好意に恃まず獨力を以て天下を取るの地位にまでは進んで居なかつた。

（三）明治年間に於ける議會政治は、概觀するに閥族と政黨との角逐を以て始終したと謂てい丶。この約二十年に亘る悪戰苦鬪に依て、大正の始めに入り、幸と「天下は議會の多數黨に與へざるべからず」との原則が正式に認められかけた。此事の殊勳者として前に星亨あ

り後に原敬あるは言ふまでもないが、傍系の功勞者として伊藤博文・西園寺公望・大隈重信・加藤高明の名も亦忘るべかざるものであらう。

但し茲に一言辯じておかねばならぬことは、大正に入て三度も續いて官僚內閣の發生を見た事實である。之にも拘らず私が政黨內閣の慣行の公認を加藤高明內閣以前に遡らしむる所以は、高橋政友內閣崩壞後の政界は一時特殊の事情に支配され且之には又政友會自ら之を促せるの情實あり、而も之に拘らずとする輿論の要求が力強く現れて瞬く間にその變態を匡正せるの經過に顧み、政界の大勢を支配する底潮は大正の始め以來毫も渝る所なしと觀るからである。

(四)一度「議會の多數に天下を與へよ」との政黨內閣主義の公認に滿足した國民は、次に進んで「其多數は選擧の結果に由るものならざるべからず」との原則を要求した。此點に躓いたものに大隈內閣の內相大浦兼武がある。非曲の摘發は司法部の進んで爲せる所たりしとは云へ、國民は之に依る政界腐敗の廓淸に多大の滿足を表したのであつた。政績と共に幾多の罪惡を遺した政友會總裁原敬が、敢然としてあの驚くべき「多數」を專ら選擧に由て作出するの勇斷に出でたのは、是亦或る意味での一功績と謂はねばならぬ。

(五)天下は下院の多數黨に與へる。その多數は必ずや選擧に由て獲たものでなければならない。そしてその選擧が公正に行はるれば、それで民衆政治の眞面目は形式實質の兩面に於て完了されるわけだ。理論からすれば選擧の公正が基本となるので、之れ無くんば前二者が形を整へても何にもならぬのだ。但だ前にも述べた樣に、民智發達の少く遲れた國に於ては、先づ形式を整ふることに依りて漸次に國民を訓育するの途に出でざるを得ない。而して我國の民衆は實にこの順序の訓育を受けて今や相當の進歩を示して來た。乃ち更に一歩を進め「選擧の公正」を叫んで大に民衆政治の本義を充實せんと欲するに至れる所以である。

以上說く所に依て今日田中總裁の率ゆる政友會を判ずるに、一旦原敬に依て範を示された「多數を選擧に求むる」の主義は彼に依て正に拋擲されたものと謂ふべきではなからうか。果して然らば是れ取りも直さずわが憲政發達の過程に照せば正に大浦兼武の犯迹に逆行するものである。「選擧の公正」は固より彼等に望み難い。この點は始めから諦めて居るが、せめて彼等の崇敬する先輩の作つたレコードだけは鄭重に之を保存して貰ひたいと思ふ。是れ啻に先輩の素志に忠なる所以であるのみならず、抑も亦わが國憲政の發達に對する彼等の重要義務の一つではないか。

下院優勢の眞實が田中內閣存立の唯一の根據か

今日の政友會は憲政發達の政戰に於て政黨の當に據るべき第二の前進陣地を我れから棄てたものである。然らば退いて死守せねばならぬ第一の陣地は如何。換言すれば今日の政友會內閣は、單に下院に優勢を占むるの事實に據つて、卓然としてその存立を主張して居るのであ

るか。尤も目今現に彼の存立を搖かさうとする有力なる運動はないやうだ。在野黨の運動なら有つても優に之を排し得るは勿論だ。但し優に排し得るから之を無視すると云ふのと、向ふから抗敵して來ないのを僥倖して一時の苟安を貪るのとは全然譯が違ふ。政友會があらゆる勢力を壓倒して、單に下院に多數を擁するの一事實のみに基き、傲然として天下の事を獨斷專行するのなら、また或る意味に於て憲政發達史上の一存在たることを許し得ないでもないが、事實果して然るや否や大に疑なきを得ない。

之に就て憶ひ起すのは一昨年の若槻内閣の終焉だ。彼は優に議會に多數を擁して居たに拘らず、不覺にも政界一部の陰謀に乘ぜられて敢なくも内閣を投げ出した。事情の已み難きものありしとはいへ、一擧に第一の陣地までを抛擲してしまつたのは、何と謂ても見苦しき限りであつた。而して之は一體誰が倒したのか。陰微の策動の如何は暫く人々の揣摩する所に委し、表面は樞密院と云ふ憲法上の機關ではなかつたか。樞密院が法律上如何の權限を有するかは今問題とする所ではない。たゞ其の政治上の機能をして内閣の存續にまで干涉せしむべきに非ずとは、從來の政論の等しく皆最も熱心に主張せる所であつた。從て政黨としては、常に之に對する態度を一定して置くことが必要である。固より問題は頗るデリケートだ、それだけ此事に付ては必ずしも正式公然の表明を求めはしない。流石に原敬は事實に於てこの問題を相當立派に解決してゐたやうだ。而して田中總裁の政友會に至てはどうか。

樞密院を如何に處置すべきやは、我國憲政上の基本的問題であつて素より一政黨のみの關心事ではない。故に樞密院が一政黨の組織する政府に肉薄し來るときは、之を超政黨の大問題として、すべての政黨が擧つて政府の立場を支持するに協力すべき筈だと思ふ。具體的の問題につき偶々樞密院とその見る所を同うすと云ふなら、之を議會の壇上で堂堂政府と爭へばいゝ。樞密院と一緒になつて政府の倒壞を僥倖するが如きは、政黨自ら己れを侮るものでなくて何だ。而して今日の政友會は、若槻内閣の倒壞に關連し、果してよく這般の批判に堪へ得るかどうか。

若し政友會が若槻内閣を打倒する爲に樞密院と協力したとすれば、或は少くとも双方部内の者の一部の陰謀的策動を默認したに止るとしても、どの道政權の歸趨を支配する勢力としての樞密院を默認したことに變りはない。果して然らば今日の田中内閣は、單に下院に優勢を占むるの事實に據つて天下を取つて居るものと云ふことは出來ない。即ち彼の據る所の陣地は、大正の始めに世上一般の公認を得た處より遙に後へ引き退つて居るもので、風の吹き廻しで樞密院邊の御機嫌を損じでもしようものなら、何ん時若槻内閣同樣の浮き目を見るか分らぬ境遇にあると謂ふべきだ。それ丈け彼はまた事實巧にその邊の輿望に迎合して只管地位の持續に心を痛めて居るやうである。而して我々が田中内閣の地位に特別の關心を寄せるのは要するに此點に在るのだ。彼が此種の特權階級に迎合することの、正に我々國民大衆の利福と相悖るなからんかを切に恐るるからである。

樞密院などが積極的に田中内閣打倒の擧に出でざるの故を以て、政友會の政界に於ける根據を過信してはいけない。我々は寧ろ彼が特權諸階級の愛撫を據りどころとするの事實の裡に、彼の施設する所の畢竟何であるかを洞察すべきである。之には先づ一應何故に特權諸階級が斯くまで政友會に好意を寄せるかを見てをく必要がある。

特權諸階級の政友會支持

所謂特權階級の政治的勢力を適當に理解する爲には、先づ之等の集團は政黨獨自の實勢力が強くならない限り何時までもその發言を停止するものでないことを知らねばならぬ。樞密院にしても貴族院にしても將た軍閥にしても、彼等は元來内閣の運命に關係する程の重大な發言權をばそれ〲憲法幷に其附屬法規に依て立派に與へられて居るものなのだ。例へば貴族院が政府の提出に係る豫算並に其他の重要法案を否決し去つた時は如何。樞密院がその必要とする協賛を拒めば、直接に君主の親斷を仰ぐの異例を取らざる以上、政府は忽ち進退谷まるの窮境に陷らざるを得ぬ。陸海軍大臣は必ず武官たるを要すとの規定ある限り、軍閥の要求を全然無視しては内閣を組織することすら出來ない。一内閣倒れて誰を後繼に擬すべきかに付ては、政黨内閣主義の漸次公認せられんとするの今日多くの疑義なきが如くなるも、元老奏薦の慣行は未だ全く廢せられたるに非ず、而して元老凋落の勢に伴ひ此點に關しては常侍輔弼の大任に當る内大臣の地位が昨今漸く閑却する能はざることになつた。而して内大臣の地位の重きを加ふるに連れて自ら亦宮内大臣の威力をも計算の外に置く能はざるは云ふまでもない。宮中府中の紛更を說く形式的批難もあらうが、最近の勢遂に全然之を無視し得ざるに至れるは讀者の既に知らるる所であらう。而して之等の諸勢力は、必ずしも其特異の地位を恃んで、我意を主張するのではあるまい。民間政黨の國民的基礎未だ立たず政黨に事を託して安ずるを得ずとすれば、國事を憂ふるの餘り彼等の進んで天下の大事に關與するは亦怪むを須ひぬのである。特權諸階級の立場を最も善意に解するも、政治が完全に國民のものとなるまでは、全然その發言權を封ずる能はざること凡そ右の如きものがある。たゞ私は我國の憲政が始めから先づ形を整へて後ち徐ろに實を充たすの順序を取り來つたことに照應して、政黨に對つては、何處までも之等特權階級の干渉に果せられざるの立場を要求するものである。

さて斯うした特權諸階級が擧つて政友會を支持する所以は何處に在るか。

（一）一つの理由は所謂特權階級は往時の專制的藩閥の一味が政權を乘る積極的地位を喪ひしに伴て分散した結果生じたものであることだ。伊藤が黒田を立て山縣を推し松方を起した頃は、之等の集團は皆一つの大きな傘の下に包まれて居つたのだが、實權を離るる段になると、個々分散の運命を免れぬは昨今の在野黨と同じ事である。それは兎も角もとして、元々政界の主動者であつた所から、彼等がまた自ら彼等自身の嘗て爲さんと欲せし事の現に今亦行はれんことを熱心に希望し、その要求に適ふ者を特に擇んで之を支持するに傾

くは當然である。政友會が最もこの要求に適するものたるは是れまた云ふまでもない。

(二)政友會が特權階級の要求に合する所以に付ては二つの事情がある。一は政友會がもと〳〵彼等に迎合することに依て其の大をなした政團たることであり、二は斯くして早くから屢々政權の衝に當り多年慣用の迎合的政策に依て既に十二分に彼等を安心さして居ることである。どうせ同じく迎合政策を執るに決まつて居るとされ乍ら、民政黨が兎角政友會程の好意を彼等に求め得ないのはこの第二の理由に依るものであらう。

(三)その結果として政友會の實際に執る所の政策は、到底保守的であり資本主義的であり警察的であり又帝國主義的であることを免れない。之でまた益々上層階級の喜ぶ所となるのだが、此點を以て軍閥財閥までが彼を謳歌するに至るの事實も看逃すことが出來ぬ。

(四)貴族院の政友會に對する關係は他の場合に比し幾分複雜である。貴族院が政府に對抗して恐るべき威力を發揮したのは、議長近衞公が先達となつて時の首相伊藤博文を窘めた頃に始まるが、この形勢を見て取つた其後の政治家は、新に上院操縱と云ふ一策を工夫し出した。之には相當長い且つ込み入つた沿革もあるが、後に至り操縱の功を見事に築いたものに原敬がある。斯くして貴族院の多數は、その直接に政治的立場を同うすると否とに關らず、少くとも利害の關係に於ては政友會と切つても切れぬ間柄となつてしまつた。世襲議員や勅選議員の間に多少此の形勢に憤慨する者もあつたが、大勢如何ともすることが出來ない。今日に於ても大體上の趨勢は傾いて居ると觀ていゝ。必ずしも常に進んで政友會に盲從すると云ふのではないが、政友會の天下の還へることだけは彼等の利害の上に到底忍び難いとする情實を如何ともすることが出來ぬのである。

(五)尤も貴族院の形勢は加藤高明内閣の成立後從來の如き單調なものではなくなつた。政友會の押しの利く天下が覆つた爲に俄に窮境に陷つた上院議員の幾分は、新に新内閣の庇保に依て救濟され、其れ以來舊憲政會と特殊の因緣を結ぶものを發生したからである。この點に於ける上院議員の爭奪は最近田中内閣に依て試みられた下院議員の買收誘拐と何等其實質を異にする所がなかつた。青木信光など云ふ人が其頃異常の勢力を振つたのは、自ら憚らず進で這般の醜取引を中介したからだと云ふ人がある。孰れにしても、斯くして最近の貴族院には、政友系に對して民政系（或は舊憲政系）の侮るべからざる勢力を發生した。尤も貴族院に特殊の因緣を有する床次の今日の立場の頗る曖昧なる結果として、右の分野も從て亦幾分鮮明を缺くの嫌なきに非るも、今や貴族院も亦衆議院に倣つて縱斷されんとするの形勢に在りと云ふは強ち無稽の言ではない。たゞ幸にして上院には、之等の紛爭に超然たらんと期し又事實に於て超然たり得る若干の集團がある。上院の使命と面目とを思ふてか彼等が屢々改革問題などを提げて起つのは亦一服の清涼劑たるを失はぬも、殘念ながら未だ大勢を動かすまでに其實力を伸ばして居らぬ。而して斯うした複雜な關係を省みるとき、貴族院の形勢は他の特權階級

の場合の如く政友會に取つて常に必ずしも十分安心し得るものでないことは明である。たゞ大體から云へば、貴族院の多數も亦その本來の志向に於て他の特權諸階級と異るものに非ず、其上由來優勝な勢力と結んで安穏を貪らんとする事大黨が多い處たから、政友會内閣にして拙いヘマをやらぬ限りは、當分の所彼等を自分の味方と勘定しても大した誤算ではあるまいかと思はれる。

之を要するに、政友會が今日特權階級の支持を恃み得る所以は、主として過去を背景とする惰力と又その傳統的政策とに在る。之が國民の利福に如何の交渉を有つやは別問題として、彼が這個の政策を固執する間は、特權階級の支持に依てその金甌を誇るを得べく、こゝ暫くは容易に天下を人手に渡すことはあるまいと思ふ。

政友會と財閥との關係

私は政友會を支持する特權階級の中に故らに財閥を加へなかつた。之を或は奇怪に思ふ人があるかも知れない。無論私は三菱が民政黨を助けてゐるとか政友會と三井と密接の關係に在るとかの噂を聞かぬでない。今日の政黨がその運動に莫大な資金を必要とする事實の明白なる以上、之が各種の財閥と特殊の關係を結ぶはまた怪むに足らぬ事でもある。たゞそれにしても、今日我國の財閥はその獨自の力を以てよく政界の趨勢を左右する程の力を具備せりや否やの一段になると、大に疑なきを得ないのだ。昨今世上には西洋に流行する說明の公式を其儘襲用し、我國に於ても亦金力が政權を驅使して居るかに說くものあるも是の如きは實際の事實に基かざる机上一片の空想に過ぎない。

尤も私は結局に於て金力が遂に政權を支配するに至るべしとする原則的假說を否認するものではない。日本でも此儘にして進めば遠からず斯うなるだらうとは私も考へて居る。只今日當面の事實として金力と政權との關係を右の如く觀るのは大なる誤りだと云ふのである。詳しく云へば、我國の金力は未だ此處までは發達して居ないのだ。今なほ何れかと云へば金力は概して政權の庇保に頼り過ぎて居るのではないか。財閥が政權の誅求に甘んじて物質的援助を辭せないのは、寧ろ政權より受けんことを期する直接間接の庇保の對償に過ぎず、政權が時に財閥の爲に謀るも、その要求に動かざるを得ざりしと云ふよりは寧ろ進んで恩を賣つておくを利とするからに外ならぬと觀るべきであらう。この邊の事は我國財閥の發達の歷史から考へても分る。

詳しい事は別の機會の說明に譲るとして、唯之丈けは心得ておいて欲しい。我國の產業に殆んど一として官權の奬勵保護に頼らずして發達した者のないこと、從て我國の財閥は官權に頼ることに依て不當の膨脹をなし爲に健全資質の發達に進む機會を逸せしこと、それにも拘らず時勢の進みは彼等を大に肥やしたが併し未だ官權の庇保を離れて獨り立ちするの氣慨はなく今猶其頤使に甘じて恥ぢぬこと、この狀態に應じて我國の官僚主義は形式的に異常の發達を遂げ從て殆んど官權を離れた獨立の產業の發達する餘地なからしめて居ること等々。

若し我國に於て資本主義の發達を云々するなら、それは官僚的資本主義と謂つていゝ。三井や三菱はどうか知らぬが、古河だの鈴木だのと

云ふ互商が官邊の手加減一つであゝした惨めな没落の運命に陥つた事實は、如何に日本の財閥が内容の空虚な而して危い根據の上に立つものかを語るものではないか。それだけに今日の財閥はピンからキリまで悉く官權の力をたよらんとする。地位の維持擁護の爲に政權に結ぶ點は同一だが、西洋の財閥は優に自ら立つの實力あり而して尚ほ飽くなきの慾を逞うせんとして政權を驅使するのだが、我に在ては僅に政權の哀にすがつて其命脈を保ち戰々兢々その意に背かざらんことに苦慮するのだからガッかりする。

もつと話を具體的にして這般の關係を明にしよう。今日の政黨は兎にも角にも莫大の資金を必要とする。而して主として之を財閥の供給に仰いで居る。その結果として政黨は事情の許す場合財閥の要求を聽いてやッたり時としては又進んで特殊の便宜もはかつてやるが、併し之をしてやらねば金を出させ得ぬと云ふのではない。財閥の存立それ自身が、何等の交換條件を必要とせずして、當然に報償を出させ得る事實だと決めて掛つて居るのである。尤も政黨の中でも一旦權力を握れる者は、少くとも今日の狀況の下に於ては、財閥に頭を下げなくとも必要とする位の金は不思議に作り得るものらしい。すると彼の財閥に對する威力はいよく\重くなると共に、それだけまた財閥の影は彼の前に一層薄くなる。財閥としては實はたゞ譯もなく金を誅求された方が安心なのであらう。故に彼は政府黨に金を貢ぐばかりではない、求めらるれば在野黨にも喜んで出すを辭せない。然せざれば他日どんな酷い目に逢ふか分らぬからである。之れが實に今日の財閥一般の狀態ではないか。斯う云ふ連中にどうして政界を動かす積極的の力を認むることが出來よう。財閥が政權の移動に密接の交渉を有するのは事實だ。密接の交渉を有するとは必ずしも自動的立場を執ると云ふことを意味しない。

右の如き事情から日本の財閥は概して一方の政黨に偏しない。甲黨又は乙黨と目星をつけて我が事を爲さしむるのでない、唯々政權を握ることあるべき各政黨に憎まれざらんことを専念するのである。要するに自家の利益を庇保して呉れるものでさへあればいゝのだ。されば所謂ブルジョア政黨である限り、我國の財閥は吳越を分たず等しく秋波を寄せるに決まつて居る。只現に政權を握つて居る者に對し特に忠勤を擢んぜんと努むるは已むを得ない。而も彼等は他の特權階級の人の様に例へば政友會の天下に寄生して利權を頒たれて居るのとは違ふから、政友會が倒れて民政黨の天下になつたとて一向に驚かない。天下が代ればまた新なる主人に頼つて己れの立場を保護して貰へるからである。只聞く所に依れば、昨今我國の財閥は若干政友會を忌嫌する様になつたとやら。そは政友會のやり方が政界に於てもさうである如く財界でも亦頗る惡辣横恣だからだといふ。之に由て觀ても、我國の財閥が必ずしも一方の政黨に偏せざるの態度はよく分ると思ふ。

要するに我國今日の財閥は、既成政黨の爭覇戰をば比較的に超然たる氣持で眺めて居る。財界内部の個人々々には或は政友系なるあり或は民政系なるもあらうが、全體としての財閥は爭覇戰の結果如何について格別の痛痒を感ぜぬのである。是れ一面に於て財閥の發達既に

らず未だ進んで政權を驅使するの地位に到らざるの事實を語るもので

ある。而して之と同時にモ一つ見逃してならぬことは、民衆一般の無自覺と從てまた其結束の弛頽とが今猶ブルジョア財閥をして惰眠を貪るを得しめて居り、此事實が亦實に這般の現象の背景をなして居ると云ふことである。民衆の要求が本當に力強く叫ばれて直に財閥の牙城に迫るの日が來たなら、彼等はいやが應でも既成諸政黨の力を合せて敵對の準備に眞劍になるだらう。財閥の人達は之を困つた事と嘆ずるだらうが、我々は政界の爭鬪が此處まで進んで始めて國民の實利實益が具體的に問題になることを喜ぶものである。併し今日の樣にブルジョア陣營の內部に於ける既成政黨の遊戲的爭覇戰に專ら國民の耳目の集中させられて居る間は駄目だ。而して此事に考へ及ぶと、我々はまた他の一面に於て民衆運動を語る人達の責任をも問はずには居れない。

特權階級と國民大衆との對立

私は前段に於て、既成政黨の遊戲的爭覇戰に政戰の舞臺を獨占さしく置くのは民衆運動の恥辱だと云つた、又政治が國民大衆のものとなり少くとも政界に於て全民衆の威力がモ少し伸びて來ぬ限り政友會の天下は續くと云つた。政友會に代るに民政黨を以てしたところで、要するにブルジョア政治の連續たるに變りはないが、併し停頓せる空氣を一新し幷て民衆の耳目を刺戟する意味に於て是非好もしき一波瀾だと思ふけれど、殘念なことに今の所どう見ても民政黨に運が向いてゐない。畢竟特權諸階級の好意が著しく政友會に傾いて居るからである

る。民衆の反政友會熱に押されて珍らしく非政友大同盟の出來そうに見へた去年晚春頃の好時期に於てすら此事の終に成らざりしは、結局特權閥の支持の恃み難きを見越したからではなかつたか。我々の眼から觀て一寸天下の取れそうに思はれぬ床次一派が時々妙な蠢動を試みて世上の嘲笑を顧みぬのも、主としては曾て政友會の一重鎭たりし時代の緣故を回想して今仍ほ彼れが自家に特權閥の好意ありと過信して居るからだと云ふ人がある。特權階級が彼れの人物に好意を寄するは事實であらう、併し今日の特權階級は、私交上の好意を其儘政治上の公けの支援に移すには、餘りに利害の打算に鋭敏になり過ぎて居る。この一床次氏が彼等の支持を夢想する態度の批判は兎も角もとして、この一事を以てしても今日の政治家が如何に特權階級の一顰一笑を氣にするかが分るだらう。

之を要するに今日の政治は表面だけに就て見れば政友會全盛の治政であり、更に裏面に立ち入つて觀察すれば少數特殊權力閥の治政である。まだ主動的の立場を占むる迄には至て居ないが所謂財閥もこの中に加つてブルジョア政黨を支援して居ることは云ふまでもない。而して斯の形勢は當分の所急に變る見込みのないことも明白だ。

人或は民政黨最近の脫黨騷ぎを見て、小黨分立の情景既に成れりと說く。民政黨の崩壞は單に政友會のいたづらの結果とのみ觀るべきでない、既に崩壞すべき要素を醞釀し之が個々政府黨の策動に依て爆發の機を見出した迄であると云ふのだ、或はさうかも知れぬ。民政黨內に化膿しつゝあつた既成政黨共通の毒素は固より政友會の內部にもあ

ろ筈だ、此處にも何れ遠からず分解作用の割裂を見ねば收まるまいと云ふのだ、之にも一應の理由はある。而して之等の理由からばかりではない、近き將來の我國政界の分野は、それが我國憲政運用の當然の歸結なりや否やは別として、少くとも暫くは多數小黨對立の觀を呈すべきはどうも免れぬ運命らしい。兎も角も範を英國の先蹤に取り二大政黨の更立を豫想して運用し來りし我國の憲政は、近き將來に豫測せらるる這般の新形勢に對し如何の覺悟を以て臨むべきかは、重大なる問題である。たゞ併し乍ら斯の如き既成政黨の分解乃至崩壞は其自身直に喜ぶべき現象なりとするの說に至ては、吾人遽かに之に贊同することは出來ない。

既成政黨の崩壞が眞個民衆政治の爲に其前途を坦にするものたるは疑を容れない。併し前者の崩壞の跡を承けて後者が武者振り勇ましく直に其雄姿を顯すか否かは別問題だ。第一に謂ふ所の既成政黨の崩壞はブルジョア政黨の消滅ではないのだ、たゞ僅に一黨を以て天下を制するの勢が成り立たなくなつたまでの事に過ぎぬ。而してこの新なる形勢に乘じて無產政黨の進出すべき餘地は固より十分に開かれた譯だけれども、彼に政權を託されて之を適當に活用するの準備ありやが又大なる問題となる。啻に之のみではない、第二に注意すべきは既成政黨は崩壞しても之を操つる背後の特殊權力團の潛勢力には何等の異狀を來さぬことである。特權階級と云つても固より纏つた一個の勢力ではないが、その利害の打算に聰明なる所より、自家の代辯を勤めさすべき政派の結成と其支持とに關しては由來不思議に堅い一致を示して來た適中である。既成政黨の崩壞に伴つて無產政黨進出の傾向の伸るべきを見たら、或は更に一層廣く且強く其の力を集中するに至るかも知れぬ。今日特權諸階級が主として政友會を支持するは之が一番便利だからだ、理が非でも政友會でなければならぬと云ふのではない。どうしても政友會だけに賴つて居れぬとなつたら、直に又別個の便法を按出するに苦まぬだらう。故に私は曰ふ、既成政黨がどんなに崩れようが、單にそれ丈けで、國民大衆の政治が實現するものと空想してはいけないと。取て代つて而して附託に孤負せざる內面的準備の問題は姑く別として、差當り我々は既成政黨の背後に隱るる特權階級の潛勢力に着眼を怠つてはいけないのだ。政治を完全に全民衆のものとせんと期するに方り、その大衆に對立するものは單に既成政黨のみではない、實際に政界の運命を支配する特權階級であることを注意しておきたいのである。

次手に一言しておく。私が民衆に對立する勢力の表示として單に特權階級をいひ所謂資本閥を云々せざるの理由に付ては、上來說明せる所に依て自ら明瞭であらうと思ふ。この點或は年少讀書生の氣に入らぬ所があるかも分らない。西洋の政治の說明としては資本閥を擧げねばならぬこと勿論である。政界背後の大勢力は云ふ迄もなく資本其ものだからである。幸か不幸か我國では資本の實勢力は其處まで未だ延びて居ぬ。政治の形體を同うする丈け實權歸屬の推移の趨勢も彼此大差あるを得ず、傾向としては我國に於ても資本の勢力の駸々として伸びて熄まざるを承認せねばならず、國民が呑氣にして居れば、何れ遠

からず金力が完全に政權を支配するに至るを避け難いとは思ふが、前にも述べた如く、我國の金權が政權の庇保に依て今日の大を致せるの歷史がまだ今日に續いて居り、其外封建の遺風が殘つて居たり、特殊の教育方針が庶民の眼を掩うて居たりする等の事情に基き、天下の形勢を左右する一威力としての資本の進出には、今の所さう未だ大した恐るべきものを示して居ない。原則的提說としては兎も角、我國今日の形勢を有の儘に理解する爲には、西洋の公式に盲信する一部の論者の樣に、余りに大なる地位を資本閥に認めてはいけなと思ふ。さうでないと、實際の病弊の診定に於て所謂肯綮に中らぬの譏りを免れまいからである。

民衆の自覺

政友會の全盛と云ふことは、繰り返して述ぶるまでもなく、益々國利民福に背反する施政の盛行することを意味する。國利民福に背反すれば窮極に於て信を天下に失し事に臨んで行詰るを免れず、斯くして謂はば自ら墓穴を掘るやうなものだけれど、併し事實その掘る所の穴に陷沒して再び浮び出で得ざるや否やは、一に國民大衆の態度如何にかゝると謂はねばならぬ。折角明け渡された場處に民衆が早速適當の管理者を送るでなければ、特權階級の連中は無遠慮に來りて彼等の進出に墻壁を築くべきを以てである。その故を以て特權階級を直に民衆の敵と罵るべきや否やは別論として、少くとも民衆がこの點に階級意識を大に鮮明にさせなくては、政治の革正は到底期せられない。私は特權階級に對立する一政治勢力團としての國民大衆の意識的行動に頼ることの外に、立派な政治の行はるる見込みは絕對にないと信ずるものである。但だその所謂意識的行動の必ずしも常に積極的に發動せざる可からずとするに非るは論を待たない。

然らばそれ程に頼みとせらるる民衆それ自身の自覺の程は如何。

昔し西洋の論客は大國支那を眠れる獅子と評したとやら。日本の無產大衆も或は稍之に近いのではあるまいか。彼等がその地位と使命とに多少の自覺を有つて居れば、所謂特權閥の如きは全く影をひそめ既成政黨の如きも遂に彼等の頤使に甘んずべき筈だからである。全く眠りこくツて居るのでないにしても、有毒なる蚊虻のいたづらを其儘平氣で放任しておく程度に惰容を恣にして居ることは爭ひ難い。

尤も國民大衆の政治的自覺は我國に於て全然絕望だと斷ずるわけにも行かない。著しい當局の失態乃至横暴に刺戟された爲めだとはいへ、發作的に民衆が一團となつて其不滿の情を洩した例は幾らもある。去年冬の宮崎事件の如きもその一つである。先年の米騷動などは別樣の社會的意義を有するものとして考察するを要するも、是亦民衆意向の突發的表示の一例たるを失はない。いづれにしても我國では既に一再ならず民衆の事に臨んで結束以て其の不滿を表示することあるを經驗し、而して更に其結束の力の如何に怖るべきものなるかをも能く經驗したのである。只不幸にしてそは發作的であり且甚しく不規則なものであつた。それだけ又常規を逸したる多くの憂ふべき現象を伴ひ民衆運動としては固よりあまり好もしいものではなかつた。民衆運

勢が常にその本來の道德的威力を發揮するには、先づそれが常住に現はれるものであり且つ規則的に營まれるゝものでなければならぬ。それが具體的の個々の問題につき積極的な主動的な立場を執つて現れることは必ずしも必要ではない。それは固より大に喜ぶべき事たるを失はぬも事實に於て多く望に之を期し難いのを如何ともすることは出來ない。而して民衆がよくその當然の立場を意識して居る以上、實際政治に對する發言が單に受動的に或は消極的に現はるゝだけでも、牽制匡救の力としての作用は相當に强い筈である。要はたゞ民衆がその政界に有つ立場、就中特權階級に對立するものとしての階級的立場を明白に意識し、又その立場の主張に相當の熱意を有つて居ればいゝのだ。

そこで今日の民衆が政局の現狀に對し大體どんな考を有つて居るだらうかを想像して見る。私の觀測する所では

(一)田中內閣にはひとしく不滿足して居ないやうだ。併しそんなら其代りに誰を立たさうかと云ふ點になると殆んど見當がついて居ないらしい。

(二)無論無産諸政黨には概して多大の囑望を寄せては居る。が、その幹部も、既成政黨の人達の樣に惡事を敢行するに無恥でなからうとする程度のもので、進んで之に天下を託さうと云ふまでの信賴を繫けて居るかどうかは疑しい。

(三)然らば何故一般民衆は今日の無産黨に全幅の信賴を捧げ與へぬかと云ふに、之には三つの理由がある樣に思はれる。一つは人物が乏しいと云ふことである（乏しいのではない選擧民が出して與れぬのではないかと云ふ辯明がないとも限らぬ、それよりも從來の如く過分の期待を掛け勝ちな今日の民衆が人物缺乏を以て無産黨に迫り來るの事實は、併し乍ら如何ともしがたい）。二には理論の持ち合せが無からうと云ふことである。餘りに理論鬪爭に熱中し過ぎるの形情はさらでも局外の大衆をしてこの感を深からしめはせぬか。三は協力以て大事に當るの誠意のないことである。己れを主張するに熱心なのはいゝが、强て小異を押し立てて自家陣營內の黨同伐異に浮身をやつすのを見ては、誰しも其の果してよく大局を達觀して居るやを疑はずには居れまい。外にもあらうが大體以上の如き理由が民衆一般の今なほ無産黨政治に全幅の信賴を吝む所以だらうかと考へる。

(四)そこで自ら民政黨にでもやらさうかと云ふ者を生ずるに至るのだ。政友會よりは良いだらうと云ふ事と、斯くして政黨間に更代の頻繁に行はるるは其抗爭の武器として必ずや民衆の利福を揭ぐべきが故に、之に依てまた幾分民心の開發を促す機縁ともなると云ふ。この二つの意味に於て民政黨の立つことに多少の意義を認め得ぬでないけれど、本氣に探せば自分の家に結構な後嗣ぎの見出せるのに、何を苦んで縁もゆかりもない他家より養子を迎ふるの必要があらう。併し斯んな氣持に一體誰がさせたのだと云ふ點が我々の反省を要する所なのであらう。

要するに階級の自覺なほ甚だ微弱なるを悲まざるを得ぬのである。而して斯かる狀態は此上何時までも放任しておけぬと云ふのであれば、

次に起る問題は如何にしてこの民衆の自覺を喚起し促進すべきやと云ふ事である、手短にいへば民衆開導の方策如何と云ふ事である。

民衆開導の方策

我國政界の革正は一に繫りて民心の振起に存し、而してその民衆は此際外部より大に鼓舞作興せらるるを要すとすれば、政界發展の前途に對して民衆開導の任に當る者の責任は甚だ重大である。私は固より民衆と孤立しての彼等の威力を信ずるものではない、又之をして變則的に其自身の威力を振はしむること伊太利の如くなつてはいけないと考へて居る。何處までも最後の力は國民大衆の自由無碍の判斷に歸すべしとする者であるが、それには專ら事前に於ける客觀的指導を必要とする。故に外形の順序だけからすれば、之等開導の任に當る者が我國政界の將來の鍵を握ると觀てもいゝ。そこで私は自ら進んで之等の人達の執る開導方策に一瞥を與へざるを得ぬ。

一、民衆運動家多數執る所の開導方策には餘りに民衆に阿ねり過ぎてゐるものがあると思ふ。是れ私の平素最も慊らず思ふ所である。例へば彼等は動もすれば民衆全般の要望を云々する、甚しきは我等は唯一般大衆の命を奉行するのみだなどと云ふ。民衆運動家としては如何にも聽しい言ひ方の樣だけれど、併し之れ程事實を枉げた觀察はない。一般民衆は概して謂ふに積極的には何を爲すべきを知らぬのだ。素より知らぬから之を何う取扱つてもいゝと云ふのではない、先覺の士は恰も事理を辨ぜざる小兒の爲に其事務を代行するの心掛を以て、一面に彼れの將來に於ける開發を信じ又併せてその天分を尊敬しつつ、他面親切に彼れの當に爲さざるべからざる所を指示すべきである。斯く親切なる指導者を得て民衆は始めて適當な組織を與へられ正しく其威力を發現することに成功する。併し一般民衆はどんなに其明知を啓いても、所謂一般民衆の立場に於ては本來政權の運用に對し單に消極的牽制力たるにとゞまるものである、積極的主動力としての立場は民衆自身の能くし得る所ではない。是れ私が種々の機會に於て論辯を怠らざりし所。然るにも拘らず、今日の民衆運動家は徒らに民衆に阿ねり、如何にも民衆が政界の實權運用に於ても萬能であるかの如くに說く。斯く說くことに由て彼等の心を籠絡せんことに腐心するの常なるが故に又きまつて私のする樣な說明をよろこばない。焉んぞ知らん、彼等が右の如き民心阿附の方略を擇ぶことが既に始めから民衆の欺き易きを見透かして居るものなることを。私は眞に民衆の良友たらんことを期するが故に、彼等の及ばざる所を露骨に指摘し彼等に止まるべき所を敢て無遠慮に指示する。良友たるを看板にして自家の便宜の爲に民衆を欺瞞するが如きは寧ろ私の大に憎むところである。

民衆に阿附する者固より心から民衆を其の云ふ所の如きものと確信して居るのではあるまい。たゞ自家の事功を急ぐの餘り方略として斯の態度に出づるのではなからうか。例へば大衆をして自分を最も理解ある人と爲し爭つて來り就かしめんとの考から民衆阿附の言を弄ぶものがある、之はいゝ。在來の指導者を離間し新に大衆を自家勢力の圏内に獲取せんが爲に之を口實とするに至ては難だ。孰れにしても、事

理の判斷に基かずして勢を加へた者は何時また之を奪はぬとも限らない、浮雲の如き勢容を維持せんには不斷に無理な努力が要る、是れ此種の民衆運動家の間に、民衆に對する一層甚しき欺瞞的宣傳と反對派に對する極度の離間中傷の絶へざる所以である。その結果彼等の結局に於て得る所の何なりやは暫く措くとして、之が爲に其の指導下に在る民衆の蒙る禍害に至ては測るべからざるものがある。試に其重なるものを擧げんか、（一）虚傲還り難き頑陋を養ふことである。少くとも道義的判斷に於て彈力的な雅量を養ふの弊が著しい。（二）容易に先入の偏見を棄てない。謙抑人に聽くの訓練を缺くが故である。（三）而して彼等の聞く所は迎合阿附の說を多しとするが故に、實際問題の處理に伴ふ苦がい體驗に依て悟ることの外、殆んど異說に觸れて自ら研くと云ふ機會を有たない。私の知る限りに於ても、昨今所謂指導されてゐる階級に屬する人達で既にこの點に氣付き、相談相手を擇ぶの大事なことを痛感して居る者も頗る多い。

序ながら一言しておく。今日の民衆運動家の間に細末の點に關し紛雜無益の理論闘爭の烈しいのも、一つの原因は蓋し茲處に在ると思ふ。彼等は一旦民衆の前に說いた所を後に至て訂正するの勇氣を有たない。一度民衆が之を採つて信條と首肯した以上、之に迎合する外に彼等と論陣を共にする途あるを知らぬからである。所謂自縄自縛の難を自覺して内面的に悶へるの情狀は眞に憐憫に堪へぬものあるが、一面に於て誤りと識りつゝも民衆の信條に迎合して異說に當らざるを得ざるが故に、堅白異同の辯を競つて所謂理論闘爭とやらに浮身をやつすことになるのであらう。私はよく人々の口から「そう云ふ事は聞て民衆の納得を得ることは出來ません」とか、「さう云ふ高尚な議論の根據とすることは一寸困ります」とか、「今日の民衆を動かすには斯んな方面から說くに限ります」とか云ふ述懐を聞かされる。云々の說明、云々の立場が端的に正しいか否かを論ずるのではない、民衆が有つ（或は之に與へた）一つの固定的立場を動かすべからざるものと前提して之に擬を合はす樣な議論を立てようとするのだから、眞面目に相手にたつて居れぬのである。それだけ又私共の自由討論の議論は之等の人達に取てまた大に邪魔になる。この論文の如きも固より大して顧みられる價値あるものではないけれども、多分之等の連中からは例に依て默殺されるか又は大に罵倒されることであらう。

三、階級意識喚起の方策にも其宜しきを得ぬものがあるらしい。

民衆を階級的に目ざめしめることは何よりの急務だ、急務だからと謂つてどんな方法を執つてもいゝと云ふ譯には行かぬ。先づ第一に着眼せられるのは支配階級の横暴の摘發である。今日はまさか明白なる專恣横行をまで平氣で看過する程の存在者はあるまいが、陰微の間に行はるゝものに在ては、巧に世評の監視をかくるゝの事實現に決して稀でない。この點に於て所謂現實暴露は有効なる方略としてもツと盛に行はれてもいゝと考へる。之に依て民衆は最も鮮明に「壓迫せらるべからざる自己」を發見すべきを以てである。而して今日の民衆運動家は、自ら進んで現實を檢討するの勞を肯んぜず、西洋流の社會批判の公式により抽象的結論を一生懸命に受賣りする割合に、肝腎な此方面

の宣揚に甚だ無精を極めて居るではないか。精力の利用に於ていさゝか彼等の所謂科學的でないと云ふ嫌を免れまい。

現實の本當の筋路に依て有効に民衆を動かすの方法を探るの結果は、無理に階級的反感を昂奮せしむる爲に假想敵を假定すると云ふ陳腐のやり方を踏襲する。是れ私がひそかに懸念する第二の點である。平和を大宗とする現代に於て、帝國主義者がその好む所の方向に民心を導かんが爲に執る所の唯一の手段が假想敵の設定であることは周知の事實である。單に戰術の訓練に於て、支那の空軍が日本を假想敵とし合衆國の西岸防備がまた日本を假想敵としたとて、何の不思議もない。明治三十年代日本が露西亞を假想敵としたのは現實の必要をも伴つたものではあつたが、昨今或は支那を或は亞米利加を假想敵としたとて是亦何の怪む所はない。たゞ現に近き未來に於て或は支那と或は亞米利加と交戰せざるべからざるが如き實感を民間に流布し、不當の敵愾心を煽揚することに依て帝國主義的思想の頽勢を防止せんとする者あるに至ては沙汰の限りである。日本には封建の遺習がまだ殘つて居て時々之が民心當然の啓發を妨げて困る。封建制と云ふものは素と人々相敵を人世の常態と視た根本觀念の上に立つものだ。故に人を見たら泥棒と思へと訓へ門を出づれば七人の敵ありと諭して、以て自ら奮ふの志氣を作興し得べしと考へた。その反面に於て、敵がなければ人心遂に萎靡すと決めてしまう。強て變亂を好むに非れど、太平の必ずしも安んずべからざるを相誡めて、治に處て亂を忘れずなどと力んで居た。この考方が今でも殘つて居ると見へ、又は少くとも殘つて居る筈と考へる人が多いと見へて、田舎廻りの職業的思想宣傳師などの中には、得々として今にも合衆國と戰端の開かるべきを説くものありとやら。いづれにしても假想敵の患を尤もらしく説くことは、高尚を抛つて一番に愚民の心を緊張せしむる捷徑には相違ない。而して今日なほ斯うした煽動方策の相當効を奏すべき素地ありと見たものか、民衆運動の方策としての階級鬪爭説がまた、資本閥と云ふものを惡鬼のやうに見立てて、譯もなく適當の埒を超へて民衆の間に盛に吹き捲られて居る。無學の軍人がマッソン秘密結社を擯き廻ると正に異曲同巧だ。資本閥を全然怖るべからずと云ふのではない、怖がり方が餘りに人を馬鹿にして居ると云ふのである。

尤も私は西洋流の階級鬪爭説を謬りだと云ふのではない。が、之を一つの社會運動の理論として承認するには、その前提たるべき種々の條件の理解が必要だ。之は今日の民衆一般の問題として能く耐ふる所ではないと思ふ。又之を社會運動の實踐に採用すると云ふのなら、之と同時に民衆に一獨立階級としての建設的方面に於けるモ一つの自覺を喚起して置くことが必要だ。「濫りに壓迫さるべからざる自己」を主張すると共に「何故に壓迫さるべからざるか」の立場を積極的に押して行けるのでないと本當の正しい威力にはならない。差し迫つた社會的鬪爭の實際に於て斯うした周密の注意の加へらるるを要するや否やは**別問題としよう。少くとも平素の訓練に於ては斷じて**この常識を無用としない。而して私は之等の顧慮を周密にせず空疎なる階級論を以て過激な鬪爭心を挑發することなきやを彼等の爲に憂ふるものである。

空疎な階級論を以て過激な闘爭心を挑發することの結果は、根據ある確實な階級意識の作興には何の役立つこともなく、却て民衆をして次の三團に割據せしむる弊なしとせぬ。(一)は年少躁急の徒をして現實を無視し直に暴力革命に趨らしむるもの、(二)は之に對する反動を誘致し、傳統の惰力はまた案外多數の者を一方の極端に集め、從て居然たる保守的團體の發生を促すもの、(三)は之等兩極端の對立抗爭に累はされた極遂に安を偸んで逃避的態度に出で以て健全なる階級運動よりすらも離れんとするものを生ずる、是れ。而して斯の如きは現に我國に於て見る所の現象ではないか。所謂共產派の人達は始めから暴力革命に一般大衆を動員せんことを期するものだから、固より斯の結果の前に辟易せぬであらう。彼等は右述べた樣な民衆の分裂を氣付かざるに非るも、更に進んでその特殊の戰術が少數の一團を以て優に他の集團を支配し得べきを信ずるからである。事實彼等の信ずる通りになるやは容易に首肯されぬが、此點に彼等と前途の見込みを異にする者に取て、彼等の運動ほど始末に負へぬ厄介なものはない。

三、民衆の內面に建設的な創造的な自覺を誘發する方面の運動が足りぬ。階級戰に勝て新に實權を握つたとする。古い秩序の廢墟の上に新しい秩序を樹つるは民衆の任務である。彼等は果して能く之に堪へるであらうか。その當然の地位にさへ置かるれば、無くてならぬ凡てのものは直に集まるなどと、唯物的人生觀を振り廻して一時を糊塗するを許さるべき問題ではない。固より私は一般民衆に直に積極的な仕事を求めるのではない。たゞ民衆の裡から萌る新しい秩序を適當に評價し、その安定運用を適當に監督することを彼等の最少限度の責任として要求するのだ。要するに新しい秩序の維持者としての「これ」を自覺して貰ひたいのである。斯う云ふ方面になると、今日の民衆運動家は丸で手をつけて居ない。無論勞働者敎育などいふことは各方面で叫ばれる、現にまた若干の程度に於て實行されても居る。併し乍らそは要するに自家の好む所の鑄型に勝手に民衆を嵌め直さんとするものではないか。その點に於ては所謂國家主義の官僚的教育方針と何の擇ぶ所もないのだ。政治でも自家の志を遂ぐる爲めの術を取られては困るが、せめて敎育だけは、純粹に教育を受くる人の爲めとして戰術的打算より解放されたいものである。

開導運動に於ける一つの惱み

尤も民衆の開導につき其創造的建設的方面を顧慮するに方り、實際上民衆運動家に一つの惱みあることは私も同情を以て之を視るを躊躇しない。そは眞面目に此點に顧慮するの結果は、動もすれば反動派の陰險なる策略に乘ぜらるるの虞あるからである。蓋し創造的建設的方面を大事だとする態度は、自ら民衆の行動を制して無暗に破壞に突進する勿らんことを戒めることになる。次ではまた破壞も必要だが其外にもッと重要な仕事があるのだなどと教へることになる。斯くして民衆に退いて眼を外に轉ずるの用意が出來ると、橫合から傳統尊重の反動派の宣傳が飛び出すのだ。十分に聰明を開かぬ民衆に取て、習慣化の作れる見慣れた偶像の方が、より多くの魅力を有するは勢の免れざる

所。斯くして遂に全くプロレタリアート意識を置き忘れてしまふ疑なしとせぬ。そこで之を捉へて逃さぬにはどうすればいゝか。最も手早い方法は先手を打つて之等の偶像と民衆とを離間する事である。是れ一派の民衆運動家が徹頭徹尾資來の文化を——而も玉石を分たず——一把一からげに呪咀してやまざる所以である。啻々之ればかりではない、最近第三インターナショナルの發した指令に依れば、總ての青年團に文化的目標の掲揚を禁ずべきことが疑適されて居る。文化的向上など云ふことをまで棄てさせなければ、自家の陣營に永く彼等の足を停めることは出來ないと觀てゐるのだ。宗教を鴉片の毒に比し靈性の權威を河童の屁程にも思はぬのだから、右の如き指令の出づるも亦怪むを須ひない。併し之でよく民衆の心が我に繋ぎ得るや否や、繋ぎ得たとしても之を率ゐて果して能く新しい文化と新しい秩序とを作り得るや否や、彼等自身と雖も本當の所は恐らく此點に十分の安心を感ずることは出來ないであらう。

一部の民衆運動家の右の如き態度の中につき私の最も不快に感ずることは、全然人の誠意を無視することである。すべての內面的な價値に眼を塞がせようとするのだから、彼等の是非善惡の標準はたゞ自家の指令に盲從して所謂階級戰に無批判の突進を敢てするか如何のみに在る。從て自家の好む所に隨はざる者は一切是を惡とする。是れ彼等が最も安價に裏切者だの反逆者だのと云ふ最大級の惡名を無暗に人に浴せて悔ゐざる所以である。苟くも人の誠意を尊重するものは、假令著しく彼此見る所を異にすとも、輕々しく相蔑視することを好まない、一應相互の立場を敬重して、其間に自ら研き更に一層高き立場に於て共通の見地を發見せんと努むるのが常だ。協同の實の容易に擧げ難き場合と雖も、少くともフェア・プレーを以て相對峙するの雅懷を失はざらんとする。日本にも嘗ては學生が競技に負けて相手を擲つたと云ふ時代もあつた、今日は立派にスポーツマン・シィップの發達を祝し合ふこととなつたのに、獨り更に一層高尚の意義を有する筈の民衆運動に在て、立場を異にする者の間に犬猿啻ならざる醜鬪を見るのは何としたことか。況んやその立場を異にすると云ふも、概して云ふに、相當の理由に基くに非るを多しとするに於てをや。

東京市會議員の改選に對する市民の對度

東京市會が遂に解散を命ぜられた、今度こそは市民も過去に懲りて眞面目に改選のことを考へてゐるだらうと、都下の諸新聞は期せずして社會各方面の代表的人物から之に關する意見を徵して見た。今までの樣な市會議員を出してはならぬと云ふに一致せるは申すまでもないが、變つた所では、勞働者出身の覇氣滿々たる鬪士を選るに限ると云ふ意見があつた。誠實を看版にして下らぬ人物の出ると云ふが既成政黨の方面に多いから此際無產黨の候補者に投票したいと、幾分穩健な態度に出たのもあつたが、之は無產黨側から出た言とすれば多少我田引水の嫌なしとせぬも、局外の我々にも一應は首肯かれる。只更に一步を進めて無產者の天下にならぬ限り所謂誠意も恃むに足らずとして一にも二にも階級鬪爭の勇士を選るべきを說く者あるに至ては、かの

一部の過激なる民衆運動家の創設の相當に民間に根を張つて居ることを思はせる。併し意見を寄せた人の大多數は、不思議に、此際政黨政派の關係はどうでもいゝたゞ誠實の人格者を出せと云ふに一致して居つた。蓋し主義政見は時に應じて變り得る、而已ならず其人の都合に依てはまた如何樣にも欺き得る、斯んなものに頼るよりも、不變の人格に着眼した方がいゝ、事を託して安心の出來るのは唯變らざる其人の誠實のみだと氣づいたわけなのであらう。之を考へると、また我々は一部の民衆運動家の躍起の宣傳にも拘らず、世間の一般は今仍は主張よりも誠意を恃み得べしと信じて居ることが分かる。この事の喜ぶべきか否かに付ては固より多言を要せずして明白であらう。

私の立場からすれば、東京市民の斯うした態度は慥かに覺醒の第一歩を踏み出したものとせねばならぬ。只問題は、近く行はるゝ市會議員改選の投票の上に、斯の新しい覺醒の効果がどれ丈け現はれるかの點である。今までの樣なことはなからうとは思ふも、過去の實績に照してこの點實は頗る危まれる。意外に良い結果を導くれば滿足此上もないが、若し仍然として在來の系統の人が多く選出されると云ふのであつたら、私は矢張り市民彼自身の誠意を疑はずには居れなくなる。否、誠意がないのではないとする又覺醒して居ないのでもないとする、少くとも全體として誠意を貫く熱意に乏しいのだと云ふ非難は免れまい。併し乍ら斯の如きは實は東京市民に限るのではない、日本人全體の態度が斯うなのではあるまいか。東京市民は恐らくたゞ之を代表するものに過ぎないのだらう。而して東京市民にして既に然りとすれば、日本人全體としては殊更だと云はれても致方があるまい。

投票の結果が民心傾向の豫測を裏切ると云ふことに付ては、理論上から云へば制度の關係と云ふこともあり得る。制度がわるいと、民心が其儘正直に具現せぬは云ふまでもない。官僚政治家が制度を方便として民意の暢達を阻んだ例は東西最近の史上にも澤山の例がある。此頃では時々變轉してやまざる民心は到底膠柱的固定制度を通じて具現し難きを前提し、一方には制度の工夫に一層周密の注意を拂ひ乍ら、他方にはレフェレンダムの如きを認めて制度の及ばざる所を補はうとさへして居る。斯くして制度の上に現れた民間諸勢力の關係が社會に於ける現有の關係と相容れぬからとて驚くには當らない譯だが、併し我國に於て選擧の結果がとかく我々の豫想を裏切るといふのは、實は斯う云ふ關係にも基くといふのではない。斯う云ふ關係も幾分あらうとは理論の上では許さればならぬのかも知れないが、實際の觀測に於ては、斯んな方面の關係はまるで無視してもいゝ程、他の原因が非常に力強く働いて居ることを看逃がせぬ。そは何かと云ふに、外でもない、投票する者に獨立の判斷がないことである。詳しく云へば誠意を貫く熱意を缺くことである。

選擧民一人々々を捉へて所見を叩いて見る。皆一ト通り筋の通つたことを云ふ。此點から觀ると、彼等は謂はゞ皆よく分つた人達なのである。初心の生まじめな候補者は動もすると之に安心して大丈夫自分の當選に疑ないなどと速斷するが、併し乍ら選擧民の腰は實は案外に落ち着いて居らず、何時の間にか不義の誘惑に動かされてしまう。

らく彼は自分一人の行動で全局を左右するのではないからと、不義の意識に對しても自責の念が薄いのであらう。自分一人の行動が直に多勢の人に迷惑を掛ける樣な事になるのなら、彼は必ずや細心之を愼んだに相違ない。その限りに於て彼は少くとも外見上誠心誠意の人格者であるが、眞に心の底からその誠實を貫く熱意のない限り、彼にその結果の直に現れぬ所に於ても同じく平素の態度を貫かんことを求むるは或は無理だ。而して民衆といふものは要するに全體として斯んな程度のもの、なのである。全然事理を辨じないのではない、故に遠く離れて民心の動きを達觀すれば、あれで相當不義を抑へ正しきを扶くる監督のつとめを果して居る。最もだらしのない我國の政界に於てすら、誰かよく今日の政情が憲法發布當時に比し毫も進歩して居ないと斷言し得よう、遲速緩急の差はあるが、之でも段々良くなつてゐるのは矢張り民衆監督（ポピュラー・コントロール）の賜に外ならぬ。けれども近く寄つて見ると、民衆ほどぼんやりして居るものはない。東京市會の腐敗は今に始まつたことではなく、之を廓淸するの唯一の鍵は市民の確實に握る所であり、加之傍（はた）でがみ／＼八釜しく騷ぎ立てるのも久しいものだのに、未だに市民は平然として居るといふ狀態である。國民全體としても亦同じ事だ。斯う云ふ民衆を賴りに仕事をするのだから骨が折れるのである。と云つて私は民衆を罵つて自ら快を貪らんとするものではない。斯く云ふ私も實は此種の民衆の一代表者なのだ。自分も實は好んで他に向つて事理を說く割に甚しく實行的熱情を缺くを自ら耻ぢて居るものだが、現に僞民衆の中に交つて民衆と共に事を爲さんとする者が先づ民衆を斯の如きものと觀念して掛るを要すと云ふ說明に至ては、他山の石として民衆運動家の傾聽を要求しても敢て不遜ではあるまいと考へる。

民衆運動の出發點并に其上に築かる二態樣

民衆と云ふものは案外にてきぱきせぬものだ、それかと云ふて全然ぼんやりして居るのでもない。てきぱきせぬので無視して見ると怒る。結果から見て永い間には相當の務めを果しても居るのだから、矢張り彼れに賴るの外に途はないとすべきであるが、放任しておいて急の間に合はせ難いのを一つの缺點とする。而して斯う云ふ新しい民衆觀が實に最近の民衆運動の特色ある出發點であると云ふことを一言しておきたい。

茲で私が新しい民衆觀と云ふ所以は、以前は民衆を謂はば萬能と前提して其上に一切の計劃を樹てたからである。例へば第十九世紀百年間を通ずる民主主義の政治的發展を見よう。舊時代（レヂーム・アンシアン）の殼を破つたばかりの一般民衆に直に全幅の寄託を認めなかつたのは事情已むを得ないとして、少くとも世間は漸く下層階級の發達を信じ、外形の上でこそ中等階級と所謂第四階級の不斷の抗爭を呈したが、政界を支配する底潮としては、民衆の開發に伴つて選擧權を擴張すべきの說が承認され、而して與へられた選擧權は必ずや有權者の有效に之を利用すべきを疑はなかつた。さればにや斯かる權利の擴張を喜ばぬ專制政治家は

種々頑現なる國民の投出に依つて大勢の進行を阻まんとし、民衆の友を以て任ずる者は之に反して權利の擴張と共に直に民衆政治の理想の實現すべきを視したのであつた。之等の事實は共に皆民衆を觀ること與へられた權利を直に有效に使用する者と獨斷して怪まなかつたからではないか。斯うした民衆萬能觀の一層露骨な信仰に基いて飛び出して來たものに社會黨がある。社會運動をマルキシズムと云ふことに拘泥して考へると話がやゝこしくなるが、大體に於て第十九世紀の特色をなす此種の運動は、數の威力の認識の上に實行方針を樹てたものと謂ていゝ。始めは數の力を擁して待遇の改善を要求して見た。後遂に立法部に威力を張るに非ずんば根本的の改革を見得べからずと氣付いて、一方には政黨運動を開始し他方には選擧權擴張の要請を新たにしたのであつた。而して其根柢の思想は、全國民中の最大多數を占むるプロレタリアートが洩れなく選擧權を得るに至れば、議會に於て亦當然に社會黨が壓倒的大多數を得ること疑なしと云ふに在つたことは明かだ。即ち彼等は民主主義者以上に此點に於ける民衆萬能を信じたのである。しかもこの期待は民衆運動の場合でも社會黨の場合でも共に見事に裏切られたのではないか。尤も始めには之を制度の罪に歸しても見た。無論制度にも責任のないことはない。併し豫想の外づれ方は單純に之を制度の罪に歸するには餘りに大きかつた。斯くして遂に漸を以てこの誤い民衆萬能觀は棄て去られることになつたのである。

然らばこの新しい民衆觀を特色ある出發點として最近の民衆運動は如何様に發展したか。之には二つの違つた態様がある。

一つは民衆の政治に對する立場が常に受働的であり消極的であり消費者としての立場以上に出で得ないと云ふ事實に鑑み、この受働的の立場と主動的の立場とを分離し、民衆にはその當然爲し得る地歩に立つて十分に其機能を發揮させようとするものである。這の民衆運動には細目に亘ればいろ〳〵の特徵を擧ぐることが出來るが、其重なるものを摘記すると、(一)は政治の積極的方面は專門の政治家の事として民衆にはその集團たる政黨の外に立たしむることである。從て所謂大衆政黨と云ふものを認めない。政黨が大衆と密接に連絡せざるべからざるは言ふまでもないが、大衆を直接に黨員とすると云ふ方式で進んでは、政黨その者の健全に發達せざる恐れあるのみならず、又大に黨員の爭奪に因する政黨間の無用の軋轢を深くする。現に我國無產政黨の融和を見ざる實際の原因も一つには慥かにこゝに在ると思ふ。(二)は民衆は直接には政治の積極的建設に關らずとするも各種の施設に依て痛痒を感ずるものは彼等なるが故に、受働的に結果の適否を判斷し得る者は彼等を措いて外にない、從て彼等はこの立場からどの政黨を支援すべきやを容易に判斷することが出來る。彼等に無理な仕事をさせようとすればこそ彼等は尻込みもすれ、容易になし得る限界で務めを果させようと云ふのなら相當に民衆を緊張させるに苦しまない。(三)は斯くして各政黨を鞭撻して善を競はしめんと期することである。政黨が既に多數の大衆を味方にし得たと安心すればこそ、氣を許して惡いこともする。始めから頼みにする味方はない、唯その時々る所の成績如何に依て大衆の支持を恃み得るとすれば、彼等が專心少

しても善い事を爲すに競ふに至るは期して待つべきである。而して斯かる期待の理想的に掲かる必要條件として(四)に民衆の判斷の自由を擁護助長する方策が亦最も注意せられねばならぬは勿論だ。判斷の自由を妨ぐる各般の支障が嚴に法規の制裁を以て抑壓せらるべきは言ふまでもなく、更に進んではその自由の判斷をして實質的に價値あらしむる爲に環境の改善が要求され教育の急要が叫ばれる。要するに民衆の物質的並に精神的環境を良いものにし、一切彼等の自由獨立を妨ぐる條件を取り去つてやつて、そして其地盤の上に各政黨をして良善をつくして生存競爭をやらさうと云ふのである。この立場を簡短な言葉で現はさうとなら、民主主義の立場と云つてもよし又自由主義の立場と云つてもいゝ。たゞ併し乍ら民主主義又は自由主義と云ふ言葉には近來特殊の歷史的意義を附するものがあつて、事に依ると私の附する意味の誤解される慮なしとせぬ。單純に第十九世紀の政治思想の底潮を爲した所の、個人の發達を信じ並にその自由なる發達の爲に環境の整頓を要求した思想、之が民衆の現狀に即して新に斯んな方策を樹てるに至つたものと理解して貰へばいゝ。

第二は民衆は到底全體としては纏め難いものであり從て又其の全體としての積極的支持などいふことの恃み難いと云ふ事實を見越し、全體の名義を假り少數の力を以て急いで事功を擧げんとする者である。露骨に民衆の無力を口實にして獨り決めの善政を布かうとする者にムッソリニあるが、之は始めから民衆の代辯を標榜して居らぬのだから問題外とする。民衆全體の代辯を表看板として其實少數專制をやつて居るものは先づ露西亞の共產黨であらう。所謂共產主義も亦かの新しい民衆觀に基いて生れた一種の民衆運動であることは疑ひ容れぬ。

共產主義が所謂新しい民衆觀に基いて現れたものなることは、その發展の歷史を顧ればよく分る。こゝで私は共產派理論の發達を云々するのではない、その運動方針が多かれ少かれ各國に蔓延して行く道に付て概括的に云ふのである。私の觀る所に依れば、政黨運動に失敗の經驗を積んだ先輩の社會主義者は、全體としての民衆の到底賴み難きを見越し、一方に議會否認論を以て溜飮を下げると共に、他方暴力に訴へてその經濟的要求を貫徹せんとした。サンヂカリズムは少數者の暴力を以て目的を遂せんとする運動方針の、先づ經濟行動の方面に現はれたものであつた。やがてサンヂカリズムの失敗は、運動の分野の先づ政治界にあらざるべからざるを教へ、今度は全力を政權獲得に集中することになる。組合主義の單純な經濟行動が政黨運動に轉回したと同じ様な經過が此處に復た繰り返されるのだが、たゞ運動の武器として暴力の採用された所に前とは違つた著しい特色がある。而してその暴力の採用された所以は、民衆結束の至難なる事實の認識に基くは勿論、又兼ねて民衆はどうにでも籠絡が出來ると多寡を括つた結果に外ならない。

大衆の爲の仕事であることと大衆の爲の仕事だと云ふこと

民衆運動はもと全大衆の利益の爲めにする行動なのだから、共產黨

を民衆運動の一種として擧ぐる以上　之に亦全大衆の爲めにする運動たるの資格が許すは勿論だ。それにも拘らず私は共產黨の一つの特色として少數專制を說いた所以は如何。當今の所謂共產主義運動が、その主觀的確信に於て、全民衆の爲めにあの花々しい活動を續けて居るものなるは疑を容れない。併し乍らその執る所の特殊の戰術は、吾人の客觀的判斷を促して彼れの面上に少數專制の烙印を捺さざるを得ざらしむる。共產派の人達は玆處に反省して新に其立場を修正するの義務を感ずるか否かは私の問ふ所でない（所謂共產黨の修正派とも觀るべきものが最近現に起らんとしつゝあるの事實も此際看却することが出來ない）。私はたゞ此點の認識に基いて共產黨運動の是否につき一言國民に警告しておくの必要を感ずるのである。

暫く共產派のいふ所を聞いて見よう。彼等は常に全世界の無產大衆の爲に戰つて居るのだと云ふ。ソヴィエット・ロシアは全世界無產大衆の一代表として、その故國に於てプロレタリアート獨裁政治を贏ひ取つた、從て世界中の無產大衆は勞農露西亞を無條件に支持する義務があると云ふ。我々はまた露西亞が示して吳れた模範に則つて全大衆の爲にその獨裁權を奪還せねばならぬ、我等の勝敗は直に全無產大衆の運命に關すると云ふ。戰ふべき相手は軍國主義者の指示する所謂外敵ではない、我等を壓迫搾取して飽くことを知らざる國內のブルジョア階級であると云ふ。之等の說には、固より格別の異議はない。併し之を打倒するの全權を共產派の特殊の戰術に託して安心すべきかといふ點になると、國民の間に恐らく種々意見の分岐があらう。相當重大な異議あるに拘らず、無理に押し切つて我意を通さうとすれば、それが最早全大衆の爲めの仕事でないことは勿論である。

全大衆の爲めの仕事だと云ふことは、必ずしもそが眞に全大衆の爲の仕事であることを必しない。爾く云ふだけを證左とするなら、すべての政黨政派が皆之れでなければならぬわけだ。西洋には或は亡びた民族の獨立恢復の爲めの政黨と云ふがある、又或る教派の權利の擁護を目的とする政黨と云ふのもある。併し斯かる變態政黨を發生せしむべき特殊の事情のない國に在ては、假令農民團とか勞働團とか特殊の結合を基礎とするにしても、苟くも政黨を標榜して起つものなる限り、そは各々其立場より觀ての全大衆の利福を目標とするものでなくてはならぬ。さうでなければ政黨の名を附すことは許されぬ筈だ。そは政黨は卽ち國全體の政治を取り賄ふ人達の結合だからである。たゞ併し乍ら、一旦特殊の結集を成すと、その結果の目前の急に迫はれて動もすると全局面を見損ふの弊に陷り易い。中にも屢々繰り返さるる過誤は、自家の狹い利害を取て直に全面の利害なるかに輕信することである。であるから、全大衆の爲めと稱してその實看版に僞りあるの譏は、何れの政黨にも免がれない。是れ政黨に向つて絕へず朋黨の域に墮する勿れとの警告ある所以。而して政黨が如何に屢々この過誤を重ぬるにせよ、之を過誤と自覺して常に局外の批議を甘受する限り、彼はまた一個全大衆の爲めの政黨たるを失はぬとされる。たゞ共產黨に至ては他のすべての政黨とひとし並に取扱ふには、餘りに著しき特徵を此點に有つと考へられるのである。

共産黨が一家の見を以て直に全大衆の爲めと稱へたからとて、それを私は不思議とするのではない。斯うした錯覺は實は各政黨通有の現象と謂てい〻。たゞ彼の立場に異とする所は、之れの自信を全大衆に強制するを主要の方針と立て、之に就ては絶對に他の批判を寛容せないことである。即ち斯れが彼等の據て以て目的を達し得へしとする主要戰術の一なのである。して見れば、共産黨運動は、彼等の主觀的提唱の何であれ、冷靜なる客觀的批判の面前に於ては、徹頭徹尾如何にして政治を自分のものとすべきかの問題に對ふる政術（クンスト）に外ならない。斷じて近代的意義に於ける政治運動（ポリチック）の一形式ではないのである。

政治が單なる一君主又は少數貴族の仕事であつた時代には、政治の名の許に攻究立案せられた諸方策は要するに一個の政術（クンスト）に過ぎなかつた。蓋し如何にせばその治世を平穩無事にし又之を永續せしむべきかが唯一の關心事であつたから。而して國民全體の利福の如きは單にこの目的に副ふ一方便として第二義的に考慮せられたるに過ぎなかつた。然るに現代になつては、政治は完全に國民の仕事とされて居る。從て全大衆の生活の全面に亘つて價値の顯現することが其の最後の目標でなければならぬ。然らば如何にして最高の價値を顯現せしむるか。之が實に國民の日常生活の上の主要の問題となつたのだ。謂はゞ現代の政治（ポリチック）は國民の生活の一面を代表するものとなつたのである。從てまたこの立場からすれば、或る一黨派の主張を直に全大衆の要請と盲信せよとする共産派の運動方針の如きは、到底之を承認することは出來ないのである。

政治を政術（クンスト）ときめて掛る立場と政治を國民生活の一面と心得てかゝる立場とは、必ずしも兩立しないとは云はない。凡この政黨に自家の志を遂せんと熱中する點に於て、いづれも皆それ〴〵の政術を有する、その政術を振り廻はす點に於て政黨の間に朋黨的紛爭は絶へない。併し乍ら彼等がまた一面に於て其間にフェーア・プレーの雅量を識し、各々其所を競うて徐かに國民の取捨を待つのなら、之で政治を國民の生活の一面とする立場は滿足する。斯くして自ら最高の價値にそれ自らを實現するの機會は十分に惠まるべきを以てである。不幸にして共産黨の政術（クンスト）は、餘りにも輕動にこのフーェア・プレーの精神を閑却する。乃ち現代的意義における政治（ポリチック）と相容れざらんとする所以である。

共産黨運動の特色

共産黨運動を少數者の專制だと云つてしまへば如何にも利己的な朋黨の様にひゞくが、是れ併し乍ら私の云はんとする眞意ではない。私は大體に於て飽くまでも彼等の動機の純眞を信ぜんと欲するものである。それにも拘らず彼等を何故に少數專制の過誤を犯さないものとするかに付ては別に説くとして、兎に角純眞な動機に發足してゐる丈けその掲ぐる所の綱領政策には大に傾聽すべきものあるを見る。一體彼等は何を目標として居るのかと云へば、申す迄もなく被壓迫全民衆の凡ゆる方面に亘つての解放と並に其利福の伸長とである。この窮極の目標に到達する細目の段階として彼等の列擧する綱領と及び其の不撓

の努力に依て既に例へばロシアに於て成就した成績とに至ては、現に多くの教訓と示唆とを我々に與へて居るではないか。この點に於て我國の官憲が陰に陽に現代露西亞の研究を甚しく不便ならしめて居るのは飛んでもない間違だとせねばならぬ。共產黨の基本綱領は勿論のこと、就中現勞農露西亞の各般の新施設の如き、寧ろ是非とも早く國民一般に知らしめねばならぬものである。たゞ官憲の人達は、共產派の立場が其の掲ぐる綱領の在來の制度の下に於ては到底十分に行はれ得ないとの見解に基き、先決の急務としてブルジョア政治の打倒と無產階級の獨裁權の確立とを叫ぶに在るのを忌避するのであらうが、之とても單にそれ丈けの事なら大して懸念するにも及ぶまい、共產黨に限らず、他の凡ての無產黨も亦同じく現に之と同じ事を目ざして運動を續けて居るのだから。

共產黨の運動も若しこの邊で止まるものなら著しく我々の耳目を聳動することはない。細目に亘つては兎も角として、大體に於て贊成も出來れば協同も出來ると云へる。共產黨の人達にしても亦固より我々の贊成なり協同なりを喜んで迎へる筈だと考へる。たゞそれがうまく往かないのは、それから先きの段階に就てである、詳しく云へば、ブルジョア政治の打倒・無產階級獨裁權の確立の爲めに執る所の手段に就てである。この點になつて始めて我々と彼等の立場とが根本的に相容れぬものとなるのだ。要するに我々は共產黨の運動の全面に亘つて反對を表するのではない。政策綱領の大部分には異議を挿まない、どうしても贊成の出來ないのは主としてその戰術に關してである。

政權の獲得には無論のこと、その維持に付ても第一に必要なのは云ふまでもなく大衆の支持である。而も大衆の意識的結束に由る恒久的支持の恃み難しとすれば、別に特殊の方策を講ぜねばならぬことになる。斯くして共產黨の大衆獲得の戰術は生れるのだ。

大衆獲得の戰術には三つの方面がある。一は大衆獲得の爲にする特殊の教化(カルチュア)である、二は大衆獲得の爲の現實の手段である、三は獲得したる大衆の特殊の結束法である。特殊の教化方策として觀るべきものは、出來るだけ多くの大衆を自家の陣營に引きつける爲に、盲目的に階級戰に昂奮せしめ所謂熾烈なる階級意識を挑發するを以て最先の急務とし、社會生活の凡ゆる方面をして悉く此唯一の目標に朝宗せしめんとすることである。例へば教育も藝術もその全機能を擧げて階級意識の祭壇に己れを捧げしめる。之が挑發に役立つものが善否らざるものは皆棄てて顧みぬ。若し夫れ些でも之を抑制するの活らきを爲すものは悉く之を不善として極度の侮蔑を勇敢に投げ掛ける。博愛とか人道とかは敵が我々の鋭鋒を挫かんが爲に設けた陷穽に過ぎぬと說くに至るのだ。勿論さうした傾向もないとは云へぬが、兎に角無條件に宗教を鴉片の毒に比するが如きは、我國にも一時流行(はや)つた夫の軍國主義教化方策と同じく、全く爲めにする所の見え透いた方便に外ならぬのである。之に依て一時目ざした目的は遂し得るかも知れぬが、爲に民知の根本的開展を邪碍するの罪に至ては測り知るべからざるものがある。大衆獲得の爲の現實の手段として採用さるる細胞組織の潜行的前衛活動に至ては、その陰險なる正に世界的國家競爭時代に於ける國際

政策にも比すべきものがある。無産階級内部に於ける平和なる政治運動を攪亂ずる最大の原因はこれだ。若しそれ獲得したる大衆の結束方法として、退いては外部の批判に耳傾くるを禁じ、進んでは他派に極度の罵詈を浴びせ依つて以て黨員の熱情をつなぎ得べしとする、是亦毫も民知の開發を念とするに非ず、彼等を愚にし又愚なるに乘じて之を籠絡するものではないか。何處の國でも幼稚な黨員の足をとゞめるには、彼に教ふるに他黨を罵倒することを以てするに限るとしたのは、政黨發達史の語る所である。眞に國民の文化を念とする者の到底這般の戰術を堪へ難しと稱する所以である。

共産黨の戰術にして吾人の注目を要するは、單に大衆獲得の方面に限らない。斯くして大衆を獲得し之を動かして所謂無産者の獨裁權を確立する革命行動に成功したとする。無産階級の獨裁權と云ふも要するに彼等一派の獨裁權たることは云ふまでもない。而して一旦占め得たるその險要の地位を維持するが爲に執る所の戰術も、亦吾人の慎密なる注意を必要とするのである。大衆の本當の支持を待つてやつた仕事でないから、彼等の爲す所には毎時無理が伴ふ、之を補ふ爲めに依然として大衆獲得の宣傳を怠らざるは論を待たぬが、更に進んで彼等は大衆を他に奪れぬ用心の爲めにも其の與へられたる權力の利用を忘れない。乃ち彼等は第一に殆んど戒嚴令にも等しき嚴しい警戒の下に異端の發生する勿らんことを周到に注意する。其情其宛として徳川封建の世全然自由の認められなかつたのに類するものがある。無論之には外に相當の理由もあるのだらう。何の理由あるにしろ、斯くまで精神生活の自由を抑へるのは時代錯誤である。又斯くまで自由を抑へねばならぬ所に、共産黨政治の無理ある點が暴露せられて居ると謂ふべきである。

尤も共産黨の人が之を一時不得已の過渡的段階と看做し、斯んな變態もさう永く續くのではない軈て無事立派にやつて行ける時代は來ると考へて居ることは私も認める。何となればブルジョア政治を一掃さへすれば、民衆は新しい環境の下に間もなく其の必要とする資質を必然的に發展すると信じて居るからである。即ち彼等の奉ずる唯物的人生觀からすれば、民衆のだらしないのは眞の一時の事、今日の様な變態專制は何時までも必要とされるものではないのだ。一寸の間我慢せいと云つても結局全民衆の爲めなのだからと、案外彼等は人を窘めても平氣で居る。この點に私は秋毫の惡意をも彼等に認めることは出來ない。寧ろ少しも早く黄金時代の實現を見ようとて全世界に革命の實行を流行らすべく焦つて居るその熱情を多とすべきだとさへ考へて居る。併し乍ら彼等のプログラムは唯物的人生觀を文字通り正しいと許して始めて實現の可能性ありと云へるのだ。唯物史觀が從來の誤つたそして偏つた社會思想を矯正する意味に於て今日大に傾聽されねばならぬことは認めるが、理想主義的人生觀を排する意味に理解さるべしと云ふのなら、それは斷じて實際の事實と齟齬する。從てあゝした基礎の上に急いで築かれた共産黨の治政の下に在ては、夫の變態的專制獨裁は彼等の云ふが如く決して一時的のものではなく、必然的に何時ま

でも之に附き纏ふものなのである。故にこゝ數年の將來に、も少しの間我慢しろ、と云はれた者がしびれを切らし始め、永い事でないと信じて滿身の力を張り詰めた連中も容易に豫期の常態の到來せぬに自ら困らじ果てる時が來ないとも限らない

要するに共産黨運動のうち我々の頗る問題とするのは、主としてその戰術に在てその政策綱領ではない。又政策綱領に於て許すべからざるものあるのなら、始めから容易に之を指摘し又之を爭ふことも出來る。只その戰術に至ては文書の上に之を徴し得べき場合が少いだけに厄介なのだ。例へば舊勞働農民黨の如き又再び禁止の厄に遭ひたる新黨準備會一派の結黨運動の如き、その表面に掲ぐる所の綱領に於て又其政策に於て、多少その文字の矯激なるは之は認むるも、その實質に於ては甚しく異議を挿むべき點を見出さざるのみならず、又格別他の無産黨と異る所もないやうに私は觀た。即ちこの場合に於ても、この一派と私共とは綱領政策に於て特に甚しく啀み合ふ理由を見ないのである。たゞその戰術に就ては如何。之に關して私は實は餘り深く知る所がないが、政府がモスカウの第三インターナショナルと連絡ある我國唯一の秘密結社日本共産黨と特殊の交渉あるの故を以て之を禁止せし點と、并に他の無産諸政黨が擧つてその特殊の戰術を恐るるの點とよりして、直接さうでないと云ふ明白なる説明に納得の往くまでは、矢張り戰術に於ても亦共産主義を學ぶものと推定するの外はないと考へておる。

繰り返して云ふが、警戒すべきは共産黨の戰術であつてその綱領政策ではない。共産黨の問題を取扱ふに當ても我々はよくこの二者を區別して考ふることが必要だ。但だ茲に一つまた厄介なことには、共産黨自身は常に右の二つを不可分のものとして吾人に提供することである。之も或は彼等の戰術かも知れない。之を理論づける爲の彼等の巧妙なる説明に就ても言ひたい事があるが、他岐に亘るを恐れて今は略する。要するに斯うした物の出し方の結果として、綱領政策に共鳴して彼等の陣營を見舞つた者は、動もすれば之に併せて無理強ゐに戰術までを負はされる。その反對にまた戰術の厭ふべきを知らされたものは、無暗に怖氣がついて結構な綱領政策にまで面を背け勝ちになる。謂はば共産黨は因業な兩親に附き纏はれた美人のやうなもの。美人だけを娶ると云ふわけに行かず、二者を併せ背ひ込むか又二者を併せ棄てるかと云ふ問題の出し方である。色氣を離れて冷靜になれば、娘は娘、親は親と、善惡のけぢめもはツきりするのだが、年少血氣の徒は動もすれば客氣に驅られて甲乙を併せ呑み、因循姑息の老輩は又たゞ譯もなく兩者を併せ忌避したがる。斯んな所から共産主義問題は特に我國に於てこんがらがるのではあるまいか。老人に向つては無鐵砲な抑壓を差控へしめ、若い者にはお前の好きなのは之れだけなのだらうと敎へてやつたら、無産階級の陣營内に於ける無益の紛爭も餘程整理され得るのではあるまいかと考へられる。

我國民衆運動の將來

前にも述べた如く、政府を本來の規道に復らしむるものは民衆の力

の外にない、民衆がよく政治を自分のものとするや否やは一に繋りて民衆運動の成果如何に在る。民衆の裡より起り民衆に組織を與へて之を政戰場裡の一大勢力たらしめんとする我國各般の運動は、果してよく眞に民衆を有力なものに育てあげて之を政界の儼然たる主人公たらしむるに成功するだらうか。民衆運動の將來の展望はいろ〳〵の意味で大に吾人の關心に値する。

政治を國民のものとすると云ふ意味に付て、そはブルジョア政黨を完全に打倒することを含むや否やは豫め一考しておくの必要がある。單純な希望をいへば、無くせるものならブルジョア政黨の如きは全然無くしてしまつた方がいゝ。少しでもあれば、それが何時の間にか反動的策謀の利用する所となりて種々の紛擾を後日に捲き起す種とならぬと限らない。併し事實之を完全に倒滅するは容易の事でなく、その容易に非る事を無理に成さうとすれば勢ひ共產黨の故智に倣ふの外はないことになる。而して彼れの戰術に傾るを避くべしとせば、寧ろ徐ろに實力を養つて彼等の存在を苦とせざるに到らしむべきであらう。要するにブルジョア・イデオロギーは十分に克服せなければならず、ブルジョア政黨に大きな口を利かしてはいかぬが、彼等の氣息喘々たる存在を苦にせねばならぬ程自信を缺くのでは、未だ民衆の實力を語ることは出來ない。斯んな事を云つたら、共產派の人達は直に我々の微温的態度を罵るだらう。彼等は實力の自信なくして天下を取らんとするの野望を包藏するが故に、詭計を用ひても一擧に敵を屠るの必要に迫られて居る。欺瞞とか妥協とかの文字に對する反感を利用して自家の野望の障礙を除かんとするも亦彼等の一戰術に外ならぬ。ブルジョア政黨の如きはもと〳〵此方の實力さへ伸びれば獨り手に引き退がるべき筈のものだ。實力がつかねば無理に引つ込めてもまた何處からか芽を吹き出さう。強て之を芟除せんが爲に無用の精力を浪費するのは愚だ。我等は寧ろ退いて民衆の眞の力を發展せんことを一層專念とすべきである。

民衆の力の發展は二つの方面から推し進められる。(一)は根本の培養の方面である。消極的には彼等の發達を阻害する凡ゆる原因を除き(主として制度上の施設の問題に關はる)、積極的には彼等の智德の向上に資すべき諸般の方策を樹てる(主として教化の問題に關はる)。之等の事はまた自ら特殊の一問題をなすものなるが故に他日の考察に讓ることとして今は說かぬ。茲に特に讀者の注意を乞ひたいのは(二)の民力組織の方面である。現に在る所の力、即ち個々散在して實用に供し難き狀態にある力を組織して之を政界に活らかすことである。民衆は案外に無力だなどと云ふけれども、これは未だ組織して一個の活動力に作つて見ないからの事だ。今の儘でも之に相當の組織を與へたら又案外に有力なるものかも分らない。政界に於ける民衆勢力の地位如何は、先づ之等の順序を經てから論ずべきものであらう。

この段になると、我々は直に無產政黨を思ひ浮べる。何となれば無產政黨は所謂無產大衆の勢力に政治的組織を與へんが爲に起つたもの

だからである。我國で無產政黨の起つたのは近年のことだ。普通選擧も漸つと一昨年から施行されたのだから致方もないとは云ひ、隨分遲れたものだと思ふ。それでも全く無いよりは增しだ、就中出來るが早いか無產政黨が社會の人氣の焦點となり、概して全民衆の好感を以て迎ふる所となつて居ることは愉快である。たゞ今日の無產政黨の行き方が、全民衆の力を結束し之を有效に活躍せしむる上に果して適當を得て居るだらうか。この點になると私は茲に一つの大なる遺憾を感ぜざるを得ぬ。そは云ふまでもなく戰線の統一を缺くことだ。戰線統一の缺如は即ち組織の中途半端なるを意味し、ある力を半分にして使ふ樣なもので不經濟此上もない。力の有效なる活用を稱にして起つた無產政黨がこの體たらくなので、操觚界の同情者が筆を揃へて憤慨するのも無理はないと思ふ。

戰線統一の前途

無產政黨に取て戰線統一の必要なるは說くまでもない。一般民衆の立場から云つても、（一）それが民衆の力の正しい政治的表現であり、從て又その最も有效なる活用であり、（二）殊に議會に於ける一層效果的なる活動は、牽制力としての民衆勢力の作用を鮮明ならしめ、以て一には敵を戒しむると共に一には味方に自信を與ふるの效用あり、（三）併せてまた民間輿論の進展を適確にし、兼て大に民心の開導に資するからである。若し夫れ無產政黨自身の立場から云へば、戰線の統一は正に焦眉の急務と云ふべきである。從てこの事には政黨自身が焦り更に一層強く世間が之を促してやまない。世間の要求の熾烈なるは各無產政黨をしてひとしく此事を其重要政綱の一に擧けしめたことに依ても分る。

それにも拘らず戰線統一の事業の遲々として進まざるは何ぞや。人或は之を左右兩翼の分裂主義に歸するも、是亦說いて猶ほ精ならざるの嫌がないでない。最近日本大衆黨の結成に由て、統一を阻むものは之に取り殘された極左極右の兩翼だけの樣に見えるけれど、その日本大衆黨のうちにだッて分裂の種子の孕まれて居ることは公知の事實ではないか。日本大衆黨の如きは、十分に分裂の素因を克服するに及ばず只譯もなく外部の統一要求の聲に驅せられて出來た不自然の結成と觀るべきであらう。と云つて私は日本大衆黨を遠からず分裂するだらうなどと推定するのではない。分裂の素因のあることは遺憾ながら認めねばならぬが、分裂させるか否かは黨員諸君の之からの腕にある。心の配り樣では分裂の素因の如き後からでも取除き得るであらう。私は寧ろ此點に於て黨員諸君の腕の冴えに信賴し、その不自然なる結成を轉じて速に自然的なものに發展せしめられんことを冀ふて怠まない。日本大衆黨の將來がこの點に見事な成功を擧げることは、また實に無產政黨の全陣營に取ての一大福音でもある。

いづれにしても私は今日の無產政黨の陣營内にはその戰線統一を妨ぐる幾多の原因あることを認むるものである。試に其重なるものを列

擧して見よう。

(一)一般に協働の訓練に乏しい。　之はひとり無産政黨界に限つたことではない、或は日本人全體の通患と云つた方がいゝのかも分らない。丁度靜かに純潔な交際を續けるに堪へぬ青年男女のやうなもので、肉交まで行くか喧嘩分れするかの外に方途あるを知らないのである。氣心も分らぬのに世間の思惑を顧慮し過ぎて完全な合同に急がうとするから話が纏らないのだ。合同に到るの段階として個々の案件につき臨時の協働をする丈けの餘裕があつたら、却て本當の戰線統一は出來易からうと思ふ。

(二)ドグマに捉へられ過ぎる。　前に私は今日の民衆運動家が民衆に阿ねり過ぎるの嫌あることを述べた。その結果一旦與へたドグマに關し後に其誤謬を覺つても之を修正するの勇氣を缺く、この自縄自縛がまた無用なる理論鬪爭を熾からしむる一因たることをも先きに述べた。之が年少讀書子の理論的潔癖性と結んで、各無産黨の立場をば餘りに融通の利かぬものにする嫌はないか。今日の無産黨が、表面に何と謂つても、事實に於てインテリゲンチアの指導下に甘じて居る間は、無産大衆の利害よりも讀書人の面目が先に立ち、獨斷に捉へられた無用の嫉視反目の屢々繰り返さるゝは免れ難いと思ふ。

(三)政黨成立の基礎に協働を難んずる素因が伏在する。　之も前に述べたことだ。無産政黨も既成政黨と同じく地盤の上にその勢力を築いて居る、否、地盤に倚ることの關係は既成政黨よりも或は一層甚しいかも分らない。無産政黨は階級代表の政黨である限り、無産大衆を地盤とするは當然だが、今日の如くその無産政黨が相當の合理的な根據もなくして澤山の分立を見て居るに際しては、大衆其ものがまた數個の集團に分たれてそれぞ〱各黨派の固定的地盤とされるのは禍だ。例へば或る勞働組合が自發的に——眞に自主的に——或る無産政黨を支持するはいゝが、無産政黨の方から働きかけて或る無産者團體を手に入れると云ふやり方が流行ると、其處に勢ひ醜怪なる爭奪戰の行はるゝを防ぎ難い。地盤爭奪の戰は必然に醜陋の投げ合ひを伴ふ、他を罵ることに依て自己の存在を誇示せんとするのである。今日の無産政黨間の反目を感情の爭だなどと云ふ人があるが、大部分は實は皆ここに述ぶるが如き事情に胚胎するものであらう。

以上三つの原因は、實際に於てかなり深酷だとは思ふが、併し必ずしも絶對に避け難いものではない。各黨幹部の人達の達觀と雅量とに待たねばならぬは勿論だが、學友蠟山政道君が、絶へず有益なる資料を供給して呉れる雜誌「社會思想」の本年一月號の時評欄に説かれて居る樣に、無産黨議員の數の増加と議會に於て積む彼等の經驗とは、恐らく不思議に這の難問を解決して呉れるだらうと期待される。無産黨の戰線統一は議會から始まるべしとは是まで屢々私の本誌に於て説いた所、故に今はこれ以上の詳説は故らに遠慮しておくことにする

(四)共産黨の戰術に大に惱まされて居るか。　無産黨の協働を妨げて居る原因としては寧ろ之が最も重要なものであらう。それは何故かと

云ふに、前にも屢々述べた樣に、共產黨は素と大衆の獲得に出て一黨の專制を夢想するものであり、戰線統一を看板にして實は眞正の協働を破らんと期するものだからである。斯うした統一論に迂潤に乘れぬは勿論のこと、加之此種の運動の活潑に行はれる限り、統一の誘ひに可笑しい程尻込みするものあるも深く咎めるわけには行かぬ。共產黨の戰術が直接に他の無產黨を攪亂して居ることの外にモ一つ吾人の看逃してならぬのは、その流布する特殊のイデオロギーが亦大に無產戰線の統一を妨げて居るの事實である。就中一方に空疎な統一論を以て他無產黨の對立を抑へ、他方排他心の高調に依て猜疑嫉視の種を蒔くことである。彼等の活潑なる宣傳に出て今日共產主義イデオロギーが一般無產階級間に相當根強く擴がつて居るは周知の事實であり、それ丈け各無產政黨は戰々兢々としてその戰術の前に退嬰せざるを得ざる有樣に在る。この點をうまく突破するでなければ、或は健全なる戰線の統一は容易に出來難いのかも分らない。

故に私は考へる、無產政黨の戰線の統一は、先づ共產黨運動の戰術を完全に克服する所より始められなければならぬと。必ずしも共產主義その者の克服とは云はぬ。戰術と綱領政策とを絕對に不可分と考へて居る人には共產主義の克服となるは致方がない。我々は採るべきは採り棄て去るべきものは遠慮なく之を打倒せんことに理知の眼を開きたいと思ふ。要するに無產政黨の人達も世間の論客も、此點に十分の見極めをつけたら、案外問題の解決も早からう。この先決問題に觸れずして徒らに戰線の統一を叫び、躊躇逡巡する者を一概に分裂主義者など罵るのは、少くとも純理的洞察を缺くものである。喧嘩をさせずして馬を走らさうとするのはどうしたッて無理だ。

我國無產黨界の現況

以上の論點よりすれば我國の無產政黨は大體(一)一黨專制主義で押し通さうとするものと、(二)各派協働主義で進むものとの二種類に分たれる。一黨專制で行かうとするものが理論上二つも三つもあつて差支ないのだが、今の所唯一つしかない。而してそれが表面上獨自の專制を要求せず常に戰線の統一を標榜して居る事は申す迄もない。各派の協働主義がそれぐ\早晚合同に到るべきを期待して居るか否は別として、そが何故に數個に分立して居るかに就て十分吾人を納得せしめないものあるは亦蔽し難い。表面の口實の何であれ、そは主として各派成立の歷史に基くものであり恐らく主義を以て分るるものではないのだらう。尤もブルジョア階級との關係を云々して左右兩翼の別を立てる人はある。所謂右翼は資本閥と現實の取引をする點に於てその不純を責められるのだが、併し白紙に文字を書く樣な徹底一點張りで進む革命主義者でない限り、時に應じて相手方と一種の協定に入るは本來何等咎むべき事ではない。戰陣の間に見ゆる敵味方ですら、時に軍使を往復して必要なる事項を相談するではないか。取引が惡いのではない、取引をする間に敵の奸策に乘せられるのが惡いのだ。此方が確つ

かりしてさへ居れば、さう敵に乘ぜられるを恐るる必要はないが、自信が足らずして往々此の過誤を犯すの危惧ありとすれば、そは左右兩翼の共に發成すべき通弊であらう。ブルジョア階級との關係に依て甲を是とし乙を否とするは、俗耳に入り易くして而も事の眞實に適ふ判斷ではない。

若し我國の無產政黨間に右の樣な形での左右兩翼を分つべしとすれば、その標準は恐らく共產主義との關係であらう。共產主義の本體に對する一般の理解が足らぬ結果として、共產黨と事を共にすべからざるの深き體驗を有する人達の間にも、自ら徹頭徹尾之を嫌惡するものと今猶ほ情に於て多分の好意を寄せ理に於て彼等の提議を斥け難しとするものとを生じた。之が即ち現に左翼右翼の名を冠せらるるものの本當の分岐點ではなからうか。確に所謂右翼が共產黨の陰謀に窘められたるの經驗に懲りてか餘りにも戰線を引き下げ過ぎて狹き陣地を堅むるに汲々たるの事實は、單にそれ丈けでも、共產主義に同情を寄せ過ぎてゐる左翼の人達の反感を唆るに十分である。共產主義の本體に關する理解の十分ならざる間は斯うした狀態はまだ〳〵續くのだらう。共產派を左とし社會民衆黨を右と視ての所謂中間派の存在理由も要するに玆處にあるものらしい。

併し私の右の分類は、現在の社會民衆黨・日本大衆黨及び[illegible]新黨準備會の對立にしッくり當て嵌まると云ふのではない。無論大體の傾向をさう觀て差支ないのだが、精密に云へば、少くとも[illegible]新黨準備會を除いた他の二派は、結局何處へ落ち着くか分らないとも云へるのだ。そはこの兩派はその成立の基礎に於て、徒らに大を爲すに急いで清濁合せ呑むを憚らなかつたからである。幹部に居る人達の大體の傾きはやや明かだが、中味を精密に吟味したら、到る處に水と油とがごッた返して居るのを隱し得ない。無產黨戰線の整理と共に此方の整理も亦一つの重要なる仕事であらう。併し之とてもまた共產主義の本體の究明に由て容易に解決さるべきものなることは論を待たぬのである。

中間派の分裂に依て無產政黨界が益々甚しき混亂に陷るか、又は之と所謂右派との歩み寄りに依て協動すべきものの根據ある協働を實現するかは、一に懸りて共產主義に對する今後の理解の樣子如何に在る。私の立場から云へば、共產黨の戰術を克服することなくして無產戰線の統一を語るは夢だ、之に觸れずして局外より戰線の統一を迫るのは操觚界の不明だ、統一完成の確信なくして徒らに之を口にするは無產黨自ら民衆を欺くものに外ならない。無產黨界も段々整理の緒に就き頗る前途の光明を思はしむるものあるだけ、私は特に此苦言を呈して一層民衆運動の完成に眞劍の努力をたいされん ことを望まざるを得ない。

現代日本の再認識

客觀日本

杉森孝次郎

進歩は客觀に始まる。自己客觀は反省だ。功利主義的見地からして、自己客觀の手段價は絶對的だ。

客觀は認識だ。認識の自己滿足もまた一とつの絶對價だ。

客觀日本はなにか。これを知ることは日本の進歩に原因づけることだ。それはまた同時に一とつの深い認識慾滿足だ。

客觀日本の特徴は多い。私は、しかし、原則心の一般的薄弱に先づ注意する。

現存のいはゆる左傾思想を見よ。それの多くの價値と功績とにかかはらず、原則心の缺乏はいはゆる右傾思想に比して意外の近似を示すでないか。意外とは勿論準備なき考察者の立ち場を假定しての話だ。

マールクシズム、新露主義、唯物史觀、必然論、辨證法、これらのすべてを通じて最も感ぜられる缺乏は原則心だ。多少の理屈はもとよりそこに發見されるが、全體が現象心的だ。判斷的、反省的でなく、反射的、反映的だ。ただ、その反射的、反映的に多少の情熱が加はつてゐる。

日本の全き歴史がいかに現象心的であることか。そこには哲學がなかつた。科學もなかつた。捕捉がなかつたからだ。論理

の集義養氣の說も白隱にあつては臍下三寸の丹田、寸半の氣海主義として發想、把握される。行動の秀吉に比すべき思想の巨人は日本に出現しなかつた。「節分のひひらぎ、いわしの頭も信仰からとはいへども、豆に逃ぐる鬼ならば、來りたりともまた何事をかなさん」、「それ佛法は寂滅を致とし、地獄極樂なんど名をつけて、愚痴無智の姥嬶を敎ふる方便にして、智ある人を導くべき敎にはあらず。……火の薪ある內は人の一生のごとし、火消ゆる時跡に殘る所の炭は卽ち死骸なり。其時消えたる火地獄へ行くや極樂へ行くや。汝此行衞を知らば、地獄極樂有りとすべし」、「……近儒學究とて、袴を着て井戶をさらへ、……唐の反古にしばられて、我身が我自由にならぬ……されば味噌のみそくさきと、學者の學者くさきは、さんぐ〵のものなり」等、部分的に見識をほのめかした平賀源內が、肝腎の他の部分に於いて、例へば「唐の風俗は日本と違うて、……天下は一人の天下にあらず、天下の天下なりとへらず口をいひちらして、………不埒千萬なる國」など、淺見暴評に及べるが如き、決して一源內の事のみとして素通りするわけに行かん。明治、大正、昭和の學說と常識が、あるひは文字通りに、あるひは意味に於いて、それに類するもので概ねあるでないか。

いはゆる右傾の多くの場合が洞察と思索に缺乏してゐることは定評的だが、いはゆる左傾の多くの場合は、その點に於いて、決して前者と凹凸相對するが如きものではない。左傾思想そのものが、理解、判斷による採用、肯定ではなく、暗示、集團本能による改宗だ。

最初に地理が人間を決定した。イギリスなどとはくらべにならぬ、隔絕した距離を日本はそれの最も近い大陸から持つた。その環境下に日本の社會的新接觸率、民族的再變化率は甚だ低く制限された。適用に深入りするほか、日本の發展は、與するにその途を見いださなかつた。纖巧、細緻がそれの唯一の進路だつた。建築、衣服、庭園等々にその例は豐富だ。新材料の大膽な取り寄せや進取ではなく、一枚の盆を拭き込むのだ。實驗でなく反覆だ。保守にみがきをかける一方であるのだ。傳統から底光りをだすことに腐心するのだ。

凝つた趣味の或種類がそこから發生しないことはない。しかし、その事實の他側面にはこせつきがある。單純はもとよりある。貧弱もあることをまぬかれない。單純を單純ながらに複雜化し、貧弱を貧弱ながらに豐富化する世智辛さがそこには養はれない。周綱、頑鈍、停滯、そして朽廢さへもと、それは障子一重をなかにした危殆至極の位置にある。

これをヨーロッパのルネッサンスの事情と照比せよ。なんと

いふ苦業か。そこには、ヤツ紀元六世紀から十世紀へかけての大規模の民族移動があつた。十一世紀から十三世紀へわたる十字軍行動があつた。十五世紀末にはアメリカが發見された。

新天地、新社會、新文物が續々として生活圏内に大擧到來した。かくして、そこには科學が發生した。個人主義及び個性主義の哲學も發達した。進歩の方法、最も確實な方法がそこなる住民の手には入つた。

一定の土地に一定の人々が繁殖、接觸、存續をいとなむ事情下に旅制の發達は必然、著甚だつた。かくして、こなた日本には情實主義、貴緣主義の發達がいちじるしかつた。これの明かるい方面は人情があり、おもひやりがあり、義理があり、そして酷薄、冷忍でないことだ。しかし、それには勿論暗い方面がある。それは旅と共にでなくては動けないことだ。個人的、自由結社的に動く自由がそこにはない。或程度及び種類の「平均人」だけがその社會に於いては日なたを惠まれる。けれども、平均人は文字通りに平均人であつて獨創人ではない。進歩は、社會進歩そのものが實に、獨創から始まる。

日本が缺くところのものは、說明的には地理ゆゑに、個人主義そのものだ。現代は、即ち産業革命以來の時代、機械時代は斷じて社會主義時代だ。それの必然發達する時代だ。しかし、個人主義の洗禮を經ない社會主義は一とつの悲喜劇だ。それは一九二一年初の新經濟政策及びその後を孵孕する十月革命以來のロシヤのやうなものだ。多少の幻滅と反省とを前途に持つものだ。

現在の日本に社會主義の發達は幼稚だ。しかし、日本の冬き歷史を通じて、個人主義の發達は極めて微弱であつた。幕末までには、それの大規模の發達は、前述地理的事情ゆゑに不可能であつた。浦賀灣頭四隻の艦船と共に、それの出現と共に、その地理的事情は退却し始めたが、續いて直ちに生じた對支那の緊張した關係と、それの解決に接踵して到來した對ロシヤの更に緊張した關係とは、日清、日露兩役の名に於いて、個人主義の發達に機會を與へなかつた。

日本は、日清、日露兩役を中心として、民族的集團主義の意識的發達を成し遂げ、その習性を獲得した。小學校からたたき上げ、制度力で强壓した効果は一般的に深大だ。

今日の左傾的人口そのものが、それの集中的部分と緣常的部分とを通じて、概ね、その習性の無意識的及び反意識的所有者だ。かくして、かれらは、かれらの兄、父、祖父たちが民族主義的集團行動にすべてをささげたやうに、階級主義的集團行動にすべてをささげる。個人主義の原則を確實に把握しての集團

行動では兩者共にない。

考へるものは集團であるよりも個人だ。個人には腦神經の系統があるが、集團には同等の高度に於いてそれに比すべきものはない。個人を拔きにした集團主義は、それの各種形を通じて、根柢淺きもの、無きものだ。それは或價値あるもののために、一層根本的な價値を犧牲にする、なさけないものだ。

人間性に親切な社會組織が最も善い社會組織だ。先づ個人を知ることが人間性を知るための第一方法だ。日本の最大悲哀はこの第一方法に對する無理解の、そして無理解ゆゑの輕度にある。

この無理解は勿論現代の世界的通患だ。しかし、それが日本に於いて格別劇惡だ。

日本の最善進化は、世界の各處に於いてと原則的には同一に、機械時代の社會を條件とした個人を再發見するの一途に斷然限られてゐる。個人を知らない社會主義は、目的を知らない方法主義であり、原則を知らない適用主義だ。

近代國家の見直し

長谷川如是閑

Y　日本を何う見直したらいゝでせうか？

Z　見直すといふにも二た通りありませう。肯定の立場から、否定的に見られてゐたものを見直すのと、その反對に、肯定されてゐたものを、否定的に見直すのと。

Y　われ〳〵は何方の立場をとるべきでせうか？

Z　それは時と場合によることでせう。たとへば維新當時は、日本が始めて外國に關するやゝ正しい認識を得始めた時でしたから、日本といふものゝ、自己認識を批判し出して、今まで肯定してゐたものを否定的に見直す態度をとつたものです。然るに、外國に對する認識がもつと發達して來ると共に、自己に對する認識も發達して、今度は外國を批判的に見直すやうになると、日本自體をも今一度、見直して、今まで否定的に見て

ゐたものを、肯定的に見直すやうになつたのです。明治の中頃の國民意識の勃興といふのがそれで、國權黨といふものが出來たり、保守黨といふものが出來たり、國粹保存主義といふやうなものが流行したりしました。見直す態度は、時代の推動に從つていろ〳〵に變化することでせう。

Y　現在は何ういふ態度で見直してゐるのでせう？

Z　現在は、反動的に見直してゐるのが世界一般の傾向だとは誰れも云つてゐることです。

Y　それは明治の中頃に日本が自分自身を反動的に見直したのと同じやうな、妥當の態度でせうか？

Z　妥當といふことも、それ〳〵立場のあることで、一方の立場に妥當なことも、他方の立場からは妥當でないといふことになります。明治の見直し方だつて、日本にとつては妥當の見直し方でせうが、外國にとつては甚だ妥當でない見直し方だつたので、勢ひ日清、日露の戰爭も起つた譯です。

Y　目下の反動的な見直し方は何ういふ立場にとつて妥當なのです？

Z　いふまでもないことです、すべて反動的の立場といふものは、現狀を守る立場ですから、現狀によつて有利な形勢を占め得るもの丶立場です。

Y　それは誰れですか、さうして誰れに對して有利とか不利とかいふのですか？

Z　それが誰れであるか、それが誰れに對してゞあるか、といふことも時代によつていろ〳〵に變つて來るのです。先きの例を今一度借りていへば、それは日本と外國との立場でした。外國の政治的、文化的勢力に對して日本がこれに追從すべきか對抗すべきかといふ問題だつたのです。それは當時は、すべての國家が、國家對國家の問題を主題としてゐた時代だつたからです。世界的にそれは近代國家の發展時代だつたのですが、日本も遲れ走せにその渦中に入つた譯で、無論、日本自身それに入るといふことも、諸外國の對外發展の鋒先に觸れた結果であつたことはいふまでもありません。で日本は消極的に外國の勢力に卷き込まれるといふ時代が過ぎて、自から外國を卷き込むといふ積極的の地位を得る時代が近づいて來たので、自己認識が發達して來たわけですが、何れにしてもそれは、國外的關係を主調としてゐました。いはゞ世界的に帝國主義への發展時代だつたので、日本の問題が對外的だつたのです。從つて、見直しの問題も、外國に對して自己を見直すともいふことだつたのです。

Y　それで現在は？

Z　所が各國家が、對外的に自己を見直した結果は、世界の到る所で、衝突が起り、やたらに國と國とが戰爭をしたが、とう〳〵それが世界の大戰となつて、見直しのけりがついたわけです。所が、今度は時代が變つて來て、國家は對外的には出來るだけ衝突を避けねばならぬ當面の必要に迫られ出したのですが、それは各の國家の中心の問題が對外的から對內的へと轉じて行つたからでした。世界一般の社會的不安のために、各國は、外國に對する問題よりは、國內に對する問題を主題とせねばならぬことゝなつたのです。これは大なる見直しでした。今まで、敵は外國に在りと考へてゐたものが、敵は本能寺にありと知つたわけです。戰は國と國とのそれから、階級と階級とのそれに變つたのです。そこですべての國家は、自分を見直して、對外硬を對內硬に轉換せしめたのが、現在の反動時代です。

Y　日本について具體的にいふと何うなります？

Z　日本は、何時も外國の勢力に曳きづられる國です。

Y　何處の國だつて外國に曳きづられないものはないのだから、それは國辱でも何でもありません。イギリスだつてアメリカに引づられ、フランスだつてドイツに引きづられ……

Z　イギリスも今少しアメリカに引づられ、フランスも今少しドイツに引きづられたらよかつたのだが、引きづられ方が足りないからいけないのです。引きづられない方が國辱でせう。で日本は大に引きづられる光榮を有してゐたので、自分を見直すにもいつも、人のふり見て我がふり直す方で、世界の大勢を握ることが、とにかく早いわけです。維新當時の否定的見直しは、近代國家化した外國の形勢を認識した結果でしたが、この認識をどし〳〵押し進めてゐたうちに、その當然の結果として、外國の經過して來た過程を踏襲することとなつて、國內的に近代的自由主義の勃興となり、日本は、次第に、近代的產業組織による社會形態に轉じて行きました。然るに、この近代的の社會形態は自然、國家形態の變化を要求し近代產業組織の政治形式たる、デモクラシーの政治が要求されたのでしたが、さうなると、始めに申したやうに、國家形態の進化の妥當性を立場の相違から否定せねばならぬものが出來て來ます。それは當時の政府者でしたが、彼等は、封建國形態から新產業國家に移る過渡期に在つて、中間的の、所謂『官僚』といふ階級を構成し、それをギルド的の構造にして排他的のものとして、所謂『藩閥』なるものを作りあげ、それで支配的權力を獨占しやうとしたのです。所が近代國家は、產業階級の支配への過程ですから勢ひ官僚政府と『民間』との對立となります。民間とは、變化しつゝある國家過程に於ける新らしい支配階級としての產

業階級の意識を漠然ながら表現してゐる政治階級です、これが官僚政府を倒して、デモクラシーの政治を持ち來たさうとする國家的變化に應ずる態度で政府者に迫ります。政府者は、既に形作られた權力構成のギルド組織を維持しやうとしてこの近代國家過程への歩調にブレーキをかけます。これが明治十年代の後半期から二十年代の前半期にかけての、政府者の變節時代、即ち猛烈な反動政治的見直し方の時代でした。それは政府者の見直し方です。この同じ政府者は、維新の始めには、自から日本を見直して、舊制度、舊文物を片端しから否定した連中でしたが、それが十數年の間に、政治的權力のギルドを作つてそれに閉て籠つて、獨占的權力者になると、恐ろしいもので、忽ち自から持ち來した政治的變化の當然の歸結を蹂躪しやうとします。五百何十人を帝都から追ひ拂ふ保安條例なんてものは、今でいへば『治安維持法』といふ奴です。これは當時の政府者が政治的支配を地緣團體の如き滯留なるものゝギルドの獨占として、近代國家への必然の進化過程たるデモクラシーを防禦してまでも、自己の階級的支配の安全を計らうとしたのです。官僚といふと、愛國者の標本のやうな顏をしてゐるが、近代國家過程をこの官僚が妨げたことを、當時の商人でも政治家でも、所謂民間の士は悉く叫んでゐたものです。

Y　彼等は舊國家を愛してゐたのです。だからやはり愛國者には違ひない。

Z　本人も舊國家を愛してゐたつもりでせうが、事實は、舊國家的形態を保存することによつて、自分達の政治ギルドを固守して、彼等の愛してゐたのは舊國家ではなく、自分達のギルドだつたのです。がそんなことを今更問題にしたつて始まらない。

Y　で彼等の反動的見直し方は、結局又見直しのやり直しをせねばならぬことになつたのですか？

Z　所が見直しは彼等ばかりの仕事ではありません。所謂『民間』といふ近代的市民階級の玉子は、かくの如く國家を近代化する過程を押し進めて、とにかく立憲政治を持ち來し、近代的産業國家の形に國家を作り直すことに成功したのですが、それは要するに、資本主義國家の建設です。而かもさういふ國家は、帝國主義的に進轉する必然性をもつてゐるものですから、かくして『民間』の作りかへた日本國家は、忽ち對內的から對外的に轉じ、民間自體が今度は、掠奪的の舊國家のそれとは違う、産業立國の基礎となるべき海外侵略の方向に轉じたのです。さうなると、內のデモクラシーは外に向つてミリタリズムで、それが舊國家形態の衣裳を被つて、國民意識といふやう

な本能的の意識形態で現はれて、日本にとつては未曾有の對外大戰爭を二度まで戰ふことになつたのです。これは『民間』の見直しです。產業支配者の帝國主義への見直しです。

Y　それから何う見直しました？

Z　ですから、前に云つたやうに、產業國家の行き詰りが、社會的不安の一般的形勢となつたので、外敵に向つたミリタリズムは內敵に向ふことになつて、外に對する見方と內に對する見方とが顚倒して、外に向つてはデモクラシー、內に向つてはミリタリズムとなつたのが現在の見直し方です

Y　所謂『民間』國家が官僚國家に逆轉したわけですね？

Z　官僚の國家が民間の國家に變つたのです。官僚の國家は、舊國家の繼承ですから內にも外にもミリタリズムで、そのミリタリズムは、內外の產業を抑壓する性質のものですが、『民間』が天下をとると、その國家は、產業本位です。その內に向つて轉じたミリタリズムは自國の產業の支配のためのミリタリズムです。それは舊國家のミリタリズムのやうに、たゞ自國の民間から又外國から掠奪するためのミリタリズムではありません。又官僚國家のミリタリズムのやうに政治的ギルドの防守のためでもありません。近代國家の支配は產業の支配者の手に當然收められるものですから、產業の支配さへ握つてゐれば、政治的權力などは向ふからこつちの手に入つて來ます。だから近代國家のミリタリズムは、產業支配者が、その產業の支配權を守ることによつてその利潤を確保するためのミリタリズムです。近代國家は、目下は外に對してはデモクラシーだといふが、それは對外的ミリタリズムで大痛手を負つたゝめの休息で、外に對しても、產業の支配のためには、ミリタリズムを振ふことを決して躊躇しません。つまり外國の產業の支配を爭ふためのミリタリズムです。ですから近代國家は必ず、未開國の產業の支配を爭ひ合ひます。近代國家の戰爭は、外國の領土を爭ふのではなくして、未開國に對する產業上の優勝權を爭ふのです。世界戰爭もそこから起つたのですが、これからの戰爭も必ずそこから起るでせう。舊國家は自分の掠奪を妨げるものに對してミリタリズムを振つたのですが、近代國家は、產業的搾取を妨げるものに對してミリタリズムを振ひます。內に對しても外に對しても、その點は決して遠慮しません。そこに戰爭の危險が潜んでゐるわけです。

Y　それは大に見直す必要のある現象ではありませんか？

Z　必要といふことも立場によつて違うことは前にもいひましたが、大に見直す必要があると感じるのは、產業の支配者の立場ではありますまい。近代國家の立場からは見直しの必要

はないわけです。近代的産業國家は、さういふ組織から大成されたものですから、それを見直しては自己破壞になる。

Y　では結局、見直したくも見直せないのですか?

Z　見直しは、個人々々の意志を超越した社會的必然から起るものです。見直したくないと思つたつて、さういふ客觀性が存在すれば、見直しますし、見直したいと思つたつて、社會的必然性が起らなければ決して見直しません。明治の自由主義は、さういふ必然性をもたない藩閥の政治ギルドからは起らないで、近代産業組織への必然性をもつた『民間』から起りました。現在の見直しは、ですからその必然性をもつた無産階級から起りました。現在では、無産階級的認識の外に、日本の見直し方はありません。日本のみならず、世界の見直し方は、無産階級的認識に依る外はないでせう。

Y　近代國家の見直しは、無産階級の見直しによるとすると、大體どんな見當に見直すのでせうか?

Z　それは社會史的進化の大問題で一言では片づけられませんが、要するに、今までの進化の中軸ともいふべきものは、一體何が何う進化したのであるか、といふ問題を研究せねばならぬことになるでせう

Y　何が何う進化したのです?

Z　さう手輕に訊ねられると、勢ひこつちも手輕に答へざるを得ませんが、答へないと同じほどの手輕なお答へをすれば、舊國家の破綻は、軍閥的支配階級の財産制度の崩壞に根柢してゐたのでしたが、近代國家の破綻は、近代國家的財産制度卽ち産業的支配階級の財産制度の崩壞の兆から來てゐるのです。だから近代國家たる日本を見直すといふことは、つまり近代國家的財産制度を見直すといふことになりませう。

Y　無産階級的認識による財産制度の見直しといふことが、日本の見直しなのだといふのですか?

Z　日本には限りません、すべての近代國家の見直しです。この見直しに對するタブーを規定してゐる『治安維持法』といふ法律も、財産制度のことを主題としてゐるところを見ると、『見直し』とは財産制度の見直しを意味するといふ點については、敵も味方も異議のないものと見へます

Y　『誰方も御異議はありませんか、御異議がなければ可決と認めます』といつた風に無事平穩に見直しが進行出來ないものでせうかね?

Z　『誰方も御異議はありませんか』と無事平穩に進行する筈の議場でさへ毆り合ひをするやうな始末ではね……。(完)

反對相の擴大

石濱知行

一定社會の進轉が、そのスムーズなる進行を阻められて、時代閉塞の樣相が現ぜらるるや、そこに社會混亂の事象が發生する。かゝる事象に面前して、その社會には、恒に三樣の認識體樣とそれに應ずる三樣の行動體型が、認められる。

社會組織の機構に對する何等の理解もなく、社會進化の理論には全く無知であり、權力に對しては盲目的な信頼を有し、『現在ある所のもの』それ自體については無批判的肯定をなすところの人達の抱く社會觀がその第一體樣である。彼等にとつては、過去よりの傳統が唯一の信條であり、この傳統に反するすべてのもの——傳統を否定するものと、それを批判するものとを問はず——に對しては最上級の形容詞を冠することによつて、之を嫌惡し、排擊せんとする。外觀的に社會混亂の事象が發生するや、即座に「澆季の世」を口にし、「國難來！」を怒號し、「危機」を反覆し、悲觀的豫言を發する人達はこの類型に屬する。しかして、かゝる人達には概して封建的氣概と中世的勇氣を有する場合が尠くない。故に、かゝる事象に面して採る態度は、二樣に考へられる。悲憤慷慨し、暴力を使用するものと潔くすべてを棄てて社會的に逃避するものとである。この類型に屬する人達は、しかし、一方から見れば、概して、無意識的であり邪氣なきものが多い。この類型に屬する人達には、頭腦の進化が停滯して固定し切つた名士や、それらの人達の一言一行を盲目的に尊信する無智識大衆やが多い。しかし、中には、社會の認めて有能の士と看做す人達であつて、このグルッペに屬するものも尠くない。個人的心理の解剖にのみ浮身を窶す文藝家、技術家、觀念的哲學者などはそれである。『誰ぞ！　花園の美を荒すものは！』などと、みえを切るものなどはその好き一例である。だが、前にも言つた樣に、この類型に屬する人達の中には、無意識的にさう思はせられる樣な邪氣なきものが多

いゝだから、思はぬドンキホーテ型の珍劇――本人にはしかも判らない――を演ずることがすくなくない。幾度叫んでも澆季の世が續くので、十年經つても二十年たつても同じ樣に澆季の世を絶叫したり、國難來！を叫んでも一向國難らしいものが來ないので、國難の上につける形容詞を度々換えて見たり、花園は一つでも珍らしい草花が殖えれば一層美しかるべきに、その珍らしい草花の移植者に對して『誰ぞ！花園を荒すものは！』などと吼えてみたりするのである。かゝる無意識的無邪氣な無批判的信奉者の頭腦は、その故にこそ、外觀上混亂せる社會相と適應して、混亂してゐるのである。從つて次に述べる第二の類型の人達によつて、好んで、利用されるのである。

一定の社會には、その社會の支配的地位を占むる社會層がある。彼等にとつては、從來彼等がその勢力と權力とを維持し發展し得た基礎であるスタトウス・クオの存續をその第一要件とし、それに向つて、全力を傾注する。而して、いやしくも、このスタトウス・クオを打破し又はそれを變改せんとする人達及びその人達の行爲、言動に對しては、その社會層のみの有する武器たる權力、金力等々をもつて、極度に至る可能性をもつて、妨害をこころみる。又は、嚢に述べた第一の類型に屬する人達の無邪氣性を利用することによつて、輿論の獨占によつて、思想工場のロツク・アウトによつて、可能なる範圍の、抑壓策をとるのである。このスタトウス・クオの維持存續をその根本的信條とすること社會層の人達にとつては、社會進化のテンポの滑性が鈍重となり、スタトウス・クオに對する反對相が擴延の徵を見せ、時代混沌の相を現出し來るや、彼等は傳統を高唱し、現狀維持を力說することに於いては、既に述べた第一類型の人達と同樣である。しかし、異るところは、前者は後者に比して、社會の機構、社會進化の理論に對して、一定の理解さを有するのである。彼等は、彼等が今日の支配的地位を獲得したことは――ここでは各個人について言つてゐるのではない、かゝる各個人の屬する社會層一般の成立を問題としてゐるのである――、かつての社會進化段階に於ける支配的地位に對するアンチ・テーゼとして、その反對相として、現れ、前者を克服し得たことによつて、始めて、可能であつたことを、身を以て體驗し來つたのである。從つて、彼等には、社會の機構の中には常に既存の狀態に反する反對があり、その反對の擴大が次の社會への進化の重要なる要素をなすものであることを知つてゐる。知つてゐればこそ――それが第一類型の人達と異る。乃ち第一類型の人達は知らざるがゆゑに――反對相に對しては、自己の有する有利なる地位の誘引性に惹かれて、無限の憎惡を

感に、それを排除せんとする。社會進化の理論に對し、ある程度の理解さを有しながら、またかつてはそれを體驗しながら、その通りの行動を取り得ざるところ、むしろその反對の行動をなすところに、進化過程無視があり、無理があるのである。一定の社會段階にその支配的勢力に對する反對が醇化され、擴大するにつれて、時代閉塞、時代混亂の相が現ずるに至るや、彼等は、そこに彼等の立場に對する反對の發展を認め、その反對相の擴大をもつて社會の害惡と認め──實は自己地位の對抗物──、かゝる社會相を以て不健全極まるものと看做し「危機」とする。かゝる認識が、第二の認識體樣である。かゝる認識は、單に、支配的地位にある社會層によつてのみならず、この社會層と、その生存の上に於いて、密接不離の關係を有する人達によつても同じくなされる。左に新興要素に秋波をおくり、他方自己の地位を維持する賢明さに於いて右に支配的社會層と協調するを忘れざる自由思想家の群の如きも又この類型に屬する。前にも述べた通りこの類型に屬する社會群は、社會進化の理法について、ある程度の理解さを有してはゐるが、その理解の程度は、根本につき入るほどの徹底さを缺いてゐる。否抑くともそれを徹底さするに於いて怯懦である。故に社會機構の暴露、社會進化理論の發表に對しては著るしく神經過敏である。

この理解の不徹底さは、從つて、また社會混亂期に際して採る態度の周章狼狽となつて現はれる。學業過怠の故をもつてスポーツを極度に抑壓した支配層が、一度び學生層に社會科學研究の風潮おこるや、一轉してその反毒素として極度にスポーツ奬勵策をとるといふが如き狼狽さ加減はその一例である。

社會的混亂に對する第三の認識體樣は、その時期を以て既の狀態、並びにそれに立脚する支配的地位に對する反對的要素が漸く擴大し、行詰まり、閉塞せる既存の狀態を打開し、社會を新らしい軌道に進ましむるほどに成熟し來り、それが、既存の狀態と並存し、それと相剋する時期であつて、かゝる對立狀態はやがて、反對要素の既存狀態の克服を以て、社會が更生するものなりとする認識である。從つて、この認識によれば、かかる社會混亂の時代は、決して第一類型の人々の考へるが如く澆季の世ではなくして黎明の時代であり、國難來！の時代ではなくして社會甦生來！の時期である。又第二類型の人々の考へるが如く社會の危機ではなくして社會の轉廻期である。この第三の認識體樣の把持者は、つねに、既存社會段階に於ける支配的地位につける社會層に直接對抗的地位にある社會層である。現實的に言へば、封建領主に對するブルジョアジーであり、ブルジョアジーに對するプロレタリアートである。而して、彼等

の行動體型は、既存狀態維持のための努力でもなく、スタトウス・クオ保存のための反對層抑壓でもなく、反對相擴大のための努力である。社會進化を混亂、閉塞の狀態より、打開せしめんとする精進である。

――以上、社會混亂期に於ける三種の認識體樣及びそれらの把持者たる三種の社會層について、一般的に、述べた。

これ丈のことを前置きとして、公論子の要求するところの日本の再認識の問題に入る。

我が日本は、イギリス、フランス、ドイツ等の諸國の如く、自働的に産業革命を經驗せずして、むしろ、經濟的後進國の例に洩れず、他働的に産業革命を受胎して、封建制度の社會から資本主義制度の社會に入つた。日本の資本主義はその後、駸々乎として上向線を辿り、歐洲大戰前後に至つて著るしく爛熟し、それとともに、既存の資本主義的諸關係に對抗する反對相も亦漸次顯著に發展し來つた。無産政黨の發生及びその發展(社會民衆黨、日本大衆黨、舊新黨準備會の實體等)と、地方自治體及び中央議會への進出(多數の無産者市町村會議員、二十八名の府縣會議員、八名の國會議員)、勞働組合、農民組合の發展(勞働總同盟、組合同盟等、日本農民組合と全日本農民組合同盟の合同、社會民衆黨系農民組合)、プロレタリア科學の發達と既成學界への侵入對立、學園に於ける社會科學學生運動の進轉、文藝に於けるプロレタリア文學の確立(文藝戰線、戰旗)、演劇に於ける無産者劇團の發生(例へば左翼劇場、農民劇場)、美術に於ける無産者美術團の勃興(昨年末上野に第一回展覽會を開く)、婦人界に於ける無産婦人運動(社會民衆婦人同盟、全國婦人同盟、無産婦人同盟)、既成哲學界に對する抗議(新興科學の旗の下に、社會認識)、宗教界に於ける無神論の提唱、協同組合運動、社會問題研究所の發展(大原社會問題研究所、産業勞働調査所等)等は各方面におけるかゝる傾向を代表する主なるものである。

かゝる、資本主義の對立物の發展とともに、資本家は企業の獨占化、産業の合理化を以て資本主義經濟を安定せしめんとし、又僱主組合の結成によつて勞働者運動に對抗せんとし、政府は對立物の勃興を抑壓せんとしてゐる。これが日本現實の社會相である。

かくして、現時の日本に於いては、言葉通り、社會は對立物の相剋によつて混亂してゐる。この混亂せる社會事象を果して如何に認識し、把握すべきであるか。

我々は、たゞ、そこに混迷をのみ見、從つて、國難來!を、危機を、認むべきであるか。それとも、反對相の擴大を、

社會の更生の端緒を認むべきであるか。

先に述べたるが如く、ある社會的段階に於いて支配的地位に居るものは、その社會狀態の下における自己の既得權的地位を極力固守せんがためにあらゆる努力を惜しまない。またその地位よりする認識を唯一の正しきものとして、それを墨守し、一般大衆に强制する。資本主義經濟制度の下に於けるブルジョアジー及びそれに追隨する者の態度が乃ちそれである。彼等は學校、新聞、雜誌、ラデイオ、活動寫眞等に依つて自己の屬する社會層のためにする宣傳を怠らない。このことは、社會の機構に對する直視を鈍らしめ正當なる判斷を誤らしめ、社會狀態の正當なる認識を歪曲する。前にのべた、第一、第二の認識は、乃ちこれに屬する。而して、かゝる歪曲にまで、大衆は、輿論の獨占を通じて、導かれて、彼等とともに、彼等の音頭取りに和して國難來！ 危機來！ を歌つてゐる。

日本を再認識することは、かゝる歪曲せる認識を排除し、現實を直視し、社會機構を暴露し、反對相擴大の現實に眼をつぶらず勇敢にとばりの奥を見つむることでなければならぬ。意識的企圖から、又は逃避的恐怖から、又は不關心的なげやりから、反對相の擴大に眼をつぶり、安價なるスタトウス・クオに安住することは、社會進化の進行を停頓せしむるものである。

矛盾の發展は、その本體を更に鮮新なる更新への途上に發展させることとである。外觀的には混迷せる社會事象の裡に、脈々として動ける反對相の姿を見つむるものは、閉塞ではなくして打開を、停滯ではなくして清新を認識するものは、憂欝なる日本の代りに、新生への苦しみを經驗しつつある日本を見るであらう。

各種無產黨の認識内容

青野季吉

現狀を維持して行けばよろしい、今日の物の秩序をそのまゝ保存して行けばよろしい、と意欲する人々には、またそう意欲

すべく運命づけられてゐる階級にとつては、現實の再認識などはあり得ない。彼等にとつて現實は常に同じである。否、彼等の見る現實は常に同じである。

言ふまでもなく、現實は常に生々流動してゐる。流行語で言へば、辯證法的に發展して止むことが無い。封建勢力の沒落過程は、近代ブルジョアジーの擡頭過程であり、近代ブルジョアジーの沒落過程は、近代プロレタリアートの擡頭過程である。だが、封建勢力を維持し利益を持つものは、近代ブルジョアジーの擡頭と言ふ、流動展開せる現實は、これを觀まいとする。近代ブルジョアジーの支配に利益をもつものは、近代プロレタリアートの擡頭といふ、流動展開せる現實を觀まいとする。そこで彼等の觀る現實は常に同じである。

尤も、觀まいとしたところで、觀ずには居れなくなる時が來る。その時が來ると、こんどは、その觀ずにはおれなくなつた不快な現實を、物理的な力をもつて消してしまはふとする。つまり觀えなくしてしまはふとするのである。しかもそれが出來ると考へる。やはり彼等は、いつも同じ現實を觀てゐるのであり、觀てゐたいのである。

ところが、現狀の維持に滿足しない人は、現狀の改更に、運命的に利益を持つ階級は、現實の生々流動に、先づその足場をおく。彼等の觀る現實、彼等の觀やうとする現實は、流動展開して止まない現實であり、起伏生滅の現實である。常に同じ現實ではなくて、常に變つてゐる現實である。——この故に、現實の再認識、乃至再々認識のあり得るのは、獨りこの人々の中、この階級の中のみである。今日の場合で言つて見れば、プロレタリアートの階級の中のみである。

少し極端に言へば、プロレタリアートは、時々刻々に、現實を『新らたに認識』してゐると言つてよい。言ひ換へれば、プロレタリアートの生長の過程は、現實認識の新化と深化の過程だと言つてよい。

プロレタリアートの眼に、まだ幼年のなごやかさがあつた時代には、彼等は、己れを搾取する惡魔だと觀て、機械を破壞した。彼等の眼に青年の光りが加はつた時代には、彼等は、機械の背後に人間を觀た。資本家を觀た。そして資本家に向つて戰ひを挑んだ。最後に、彼等の眼に壯年の鋭さがひらめいた時代には、資本家の背後に××權力を觀たのである。かくて××權力にたいする、終局的の鬪爭の時代が來たのである——プロレタリアートの現實認識は、かく常に新化し、かく常に深化する。この新化と深化の上に、プロレタリアートの運動がある。

だが、どんな人だつて、どんな階級だつて、現實を觀ないな

どと言ふことはないと、反駁する人があらう。勿論、そうである。だが、問題は現實の內容である。

日本のブルジョアジーも、日本の現實を觀てゐる。これに間違ひはない。日本のプロレタリアートも、日本の現實を觀てゐる。これにも間違ひはない。だが、問題はそれぞれの觀てゐる日本の現實の內容である。

ところで現實の內容とは、これを言ひ換へれば、現實の理解、把握である。暴風雨と云ふ現實は、未開人には神の怒りといふ內容をもつてゐたが、文明人には氣象變化の自然現象といふ內容をもつてゐる。改造思想の擡頭といふ事實は、ブルジョアジーには思想困難といふ內容をもつて迫り、プロレタリアートには、自己の階級の觀念的生長といふ內容をもつてゐる。

つまり現狀維持派が、常に同じ現實を觀てゐるといふのは、現實の把握に變りがないといふ意味である。プロレタリアートが、常に變つた現實を觀てゐるといふのは、現實の把握が、現實の辨證法的展開につれて、常に變つてゐるといふ意味である。

そんな譯で、眞に日本の再認識をなし得る階級、なしつつある階級は、プロレタリアートのみである。日本のプロレタリアートは今日まで、常に新らたに、常により深く現實を認識して來た。

ところで日本のプロレタリアートの中でも、その觀る日本の現實、その現實の把握が、勿論必ずしも一致しない。そこに社會的に必然の根據をもつて、幾多の差異がある。

極く具體的に、分り易くするために、今日政黨的に對立してゐる日本プロレタリアートの陣營を例にとつて、話を進めて行かう。今日政黨的に對立してゐると言へば、誰でも知つてゐるやうに、社會民衆黨、日本大衆黨、新黨準備會（これは先頃解散を命ぜられて合法的存在を徹底的に奪はれたが、それを組織してゐた大衆があり、その指導精神が現に在るわけだから、いまかりにこれを一個の政黨的存在として取扱ふ。）である。この三つの政黨の見てゐる日本の現實、その現實の把握にどんな異ひがあるか？ここで一寸注意しておき度いのは、日本の勞農政黨の對立は、大衆の側から見ると、決して深い社會的理由が在るわけでなく、主として少數幹部の對立から來たものであるが故に、自然、各政黨の日本の現實把握の差異と言つたところで、それは必ずしもそれぞれの黨大衆の關するところではない。この區別をよく呑込んでおかないと、根本的に間違ひの起る場合がある。

先づ社會民衆黨である。彼等は、今日極右翼と言はれてゐる。この極右翼の日本に現實把握、即ち彼等の觀てゐる日本の現實はどうであるか？

（三つの黨の現實把握の對比にとつて、最も便利であるといふ意味と、また對立の根本的契機といふ意味から、問題を議會運動、合法運動に局限する。即ち議會といふ與へられた現實、合法性といふ與へられた現實の上に問題を局限して、三黨がそれ〴〵その現實をどう把握してゐるかを觀やう。）

社會民衆黨は、議會といふ與へられた現實を觀、運動の合法的可能といふ現實を見る。そしてこの現實に、最大限度の重點をおいてゐる。即ち議會主義、合法主義である。

プロレタリアートの解放運動は、議會を通じてのみ可能である。だから、その運動は飽までも合法主義でなければならない。これが彼等の信條である。もう少し具體的に言ふと、社會民衆黨が、その不斷の活動によつて、黨員を大いにふやして行き、總選擧毎に代議士を多く出して行つて、それが議會に多數を占めるやうになれば、プロレタリアートの利益をはかる法案が續々議會を通過し、かくてプロレタリアートは平和裡に解放される、と言ふのである。まことに樂天的、平和的、初等數學的である。そしてまた、いかにも萬人向に平明である。

だが、彼等が議會や合法的可能をかう把握するについては、他の一切の理由はこれを問はないとして、一方に抽象的な法治主義、議會機能にたいする迷想が作用してゐるし、他方に大衆の闘爭意志にたいする閑却が作用してゐる。成るほど抽象的な法治主義によると、議會は主法の機關であつて、議會の主法を通ずれば、どんなことでも出來る。しかも議會の主法をかち得るには、多數の議員を制し得ればよいのであるから、プロレタリアートに多數の議員さへ出せば、どんなことでも出來る理屈になる。だが、現實の議會は、どうしてそんな抽象的なものではない。議會の背後には巨大な金融ブルジョアジーが控えてをり、議會は、その支配の一道具にしか過ぎない。だから、議會がその支配に役立つ間は、最大限度に役立たせるが、少し形勢が怪しくなつて來ると、議會の權威などは問題でなくなる。例の鈴木前内相の反議會主義の言などが、そのよい例である。これは議會現實のホンの一端に過ぎないが、社會民衆黨はこの具體的な現實には、どうしたものか全然觸れない。また一方、大衆の闘爭意志に、決して議會闘爭で滿足しない。選擧や議員や議會を通じないで、大衆自身の中で、支配階級と闘爭しやうとする。否、現に自然發生的に、部分的に闘爭してゐる。これをどう組織するか？　これをどう發展させるか？　この現實把

握も社會民衆黨は、どうしたものか全然回避してゐる。

この意味では、社會民衆黨の人々も、謂ゆる自由主義ブルジヨアジーも、少しも變りはないと言つてよい。自由主義ブルジヨアジーも、彼等と同じに、議會に架空的希望をつないで居り、大衆の鬪爭意志を全然無視してゐる。たゞ兩者の異れるところは、一方はプロレタリアートの一つの勢力を率ひて舞台に上つてゐるに反して、他方は小ブルジヨアジーの勢力を率ひて舞台に立つてゐるに過ぎない。

社會民衆黨と對蹠的に對立してゐるのは、舊新黨準備會である。しかもそれが最も鮮明に現はれてゐるのは、議會といふ現實の把握においてである。

社會民衆黨が、合法的可能、議會に、最大限度の重點をおき、最大限度の抽象的尊重を投げかけてゐるとすれば、舊新黨準備會は合法的可能、議會に、最大限度の輕視を與へ、最大限度の輕蔑を投げかけてゐる。

舊新黨準備會の事實上の壓倒的意見によると、勿論議會は鬪爭の舞台たり得るには相違ないが、強いてそれを鬪爭の舞台にしなくともよい。合法的可能も在るには在るが、これも強いて利用しなくともよい。これらのものは大衆に合法主義による解放の可能を迷信させるが故に、寧ろ危險である、議會政黨、合法主義とは、寧ろ鬪爭すべきである、と言ふのである。だから、可能な條件を準備して、舊新黨準備會を合法政黨たらしめる努力においても、彼等は決して緊張しないのである。合法性を獲得するとしないに關らず、舊新黨準備會は大衆の鬪爭組織？ であるが故に、その實體には變りはないと、彼等は揚言してゐる。

だが、これは社會民衆黨の議會觀の抽象性と對比して、別個の抽象性である。とにかくそれが金融ブルジヨアジーの支配の機關にせよ、またそれを通じてプロレタリアートの全的解放が期待されないにせよ、議會が存在することは事實であり、議會においてプロレタリアートの政治的要求の一部が表現されることが事實であり、また謂ゆるホンの爪のアカほどの合法的可能にせよ、それが在存することが事實である以上、プロレタリアートは、その鬪爭において、何故その舞台、その可能を利用してはいけないのか？

また大衆の鬪爭意志に、勿論、議會鬪爭に詰め込まれるものではないが、大衆自身による××鬪爭と、議會鬪爭とを結びつけることが、何故いけないのか？ これを別の方面から言ふと、合法的可能を利用して、廣汎な大衆を政治鬪爭の舞台へと導き出し、政治的の日常鬪爭において、大衆を動員、訓練すること

が何故いけないのか？

合法的可能を利用して、大衆を實際上に（空想上でなく）動員し、行動を通じて（名目のみでなく）訓練することが、何故合法主義になるのか？

舊新黨準備會は、およそこれらの根本的に重要な、具體的な方面を、どうした譯か回避してしまつて、議會のブルジョア性、合法的可能の『官許性』をのみ抽象的に誇大化してゐる。これはさきにも言つた通り、社會民衆黨の現實把握と對蹠的なものであつて、實に『極右と極左とは結局一致する』一つのよき實例である。即ち議會の把握仕方は、對蹠的に異つてゐるが、それを具體性において把握しないといふ點で一致してゐる。

日本大衆黨は、つい昨年成立し、日本プロレタリアートの戰線統一の意志の力強く反映してゐる黨である。が、この黨は、言ふまでもなく、指導精神にこだわらない大衆的共同戰線黨である。したがつて、この黨の唯一の指導精神によつて、こゝに話を進める譯には行かない。從つてこの黨の指導精神の一つによつて話を進めなければならない。

この黨の先進分子の議會現實の把握は、社會民衆黨及び舊新黨準備會と對して、何よりも先づ具體的である。彼等は、議會をもつて飽まで支配階級の支配の用具と解する點において、社會民衆黨と對立してゐるが、議會の鬪爭と大衆の××鬪爭とを結びつけることによつて、最も廣汎な大衆を××鬪爭に動員し得ると解する點において、舊新黨準備會と對立してゐる。彼等は、合法主義によつて、大衆の鬪爭意志を組織することに反對する點において、社會民衆黨と對立してゐるが、合法的可能の利用と合法主義とを混同せず、合法的可能を最大限度に利用して、廣汎な大衆を××鬪爭に動員すべきことを主張する點において舊新黨準備會と對立してゐる。

これを別個の方面から説明すると、議會といふ與へられた現實は、社會民衆黨にとつては、プロレタリアートの全的解放がそこに約束されてゐる階級法廷である。またそれは、舊新黨準備會にとつては、大衆の××鬪爭の麻痺にしか役立たない取引所である。然るに日本大衆の先進分子にとつては、それは大衆の鬪爭の一つの與へられた有力な舞台であり、プロレタリア大衆自身による議會外の××鬪爭と結びつけられねばならぬものである。

また合法的可能は、社會民衆黨にとつては、そこにプロレタリアートの全的解放が約束されてゐる武器であり、舊新黨準備會にとつては、それが利用は即ち墮落した合法主義である。然るに日本大衆黨の先進分子にとつては、合法的可能の利用は、

決して合法主義ではなし、廣汎な大衆をして××闘争へ登場せめる一つの手段である。

同じ議會、合法的可能といふ與へられた現實にたいして、かうした三つの把握が對立してゐる。尤もこの外に、日本大衆黨にはまた別個の、曖昧な見解（妙な言葉だが）が介在してゐる。言はゞ形をなさない、中間的見解である。だからこれを加へて、同じ現實にたいして、極右、中間、左翼、極左の四つの見解が對立してゐると言つてもよいのである。

この四つの對立に、この三四年來の日本プロレタリアートの現實認識の推移を思はせる。中でも最も私の興味を抱くのは、かの福本イズムの現實認識にたいする日本プロレタリアートの清算過程である。

誰でも知つてゐるやうに、福本イズムほど日本の左翼運動を、短日月の間に支配したイズムはあるまい。今日でこそ、當時のそのイズムの追隨者までが、『福本イズムの毒杯』だなどと言つてゐるが、その猖獗を極めてゐた當時は、福本イズムこそ最も正しい日本の現實にたいする左翼的把握だと考へられて、謳歌され、禮讃されてゐた。

福本イズムの現實把握によると、日本は急激に沒落の過程に在り、今や左翼は一切の反左翼と一先づ分離して、獨自の左翼運動を展開しなければならぬと言ふのである。この分裂理論のお蔭で、日本のプロレタリアートの組織は、ありとあらゆる隅々まで分裂してしまつた。そしてその分裂は、結局何に益したかと云へば、支配階級の分裂支配に役立つたばかりであつて、分裂、對立せるプロレタリアートのそれ〴〵の單位は、日に日に闘争力を失つて行くばかりであつた。

それればかりではない。プロレタリアートの陣營から、そのお蔭で、急速に、意識的な右翼が發展して來た。それと同時に、福本イズムに拍車を與へられたプロレタリアートの一部は、極左翼へと偏向してしまつた。

今日の反動期を前にして、日本プロレタリアートが、いつまでもこの狀態に陷つてゐることは、あり得ない。大衆自身による日本の現實の再認識が始まつた。戰線統一、單一無產政黨の要求が、その再認識の輝ける表現である。

日本の資本主義は、福本イズムが說くやうに、急激に沒落の過程をとつてはゐない。いまや日本の金融ブルジョアジーは、反動の勢力を逞ふして、プロレタリアートの××闘争への進出を壓殺しやうとしてゐる。この時に日本プロレタリアートは先づ、その勢力を集中して、その××闘争の陣形を整へねばなら

ぬ。その大衆の陣形の整備と、その日常の力強い闘爭の中からのみ、××闘爭の中心が結成する——。この現實の再認識が、日本プロレタリアートの理論となつたのである。

かくて福本イズムは、急速に清算されて行つた。が、勿論、一時あれほど左翼運動を支配した一つのイズムが、そう容易に清算されてしまはれるものではない。實は清算したと唱へながら、まだその毒杯を地に投げうつことをせず、その毒杯に新らたな酒を盛つてゐる人々がある。だが、これらの人々も、次第に大衆の現實の再認識の前に、克服されつゝあるが如くである。

現實を迷想で蔽ふて、樂天することは容易である。現實を無視して××的自己陶醉にふけることも、同じく容易である。だが、現實の把握を常に新らたにし、常に深くすることは、決して容易ではない。しかしこの容易でない仕事が常に存されなければ、運動の全體としての、實質的な發展はないのである。

（一・六）

紋付シルクハットの日本

山川均

一と月に一度、散髪屋の姿見の前に坐つてみることも、己を知る上に大いに役に立つ。五十錢銀貨一枚をもつて、伸び放題の鬱蒼たる頭を伐り拓き、積つたふけを掻き落とし、なほその上に、久し振りで見すぼらしい自分の姿を再認して歸れるなら、むしろ安價なものである。しかし安價な自己再認には、往々にして危險が伴うてゐる。鏡を見て己惚れを増長させるのは、必ずしも輕薄な婦人ばかりではない。歴史の鏡の前で、鼻を撫でたりお髯を撚つてみて、自分の姿に見惚れてゐるような民族がないでもない。イソップ物語には、橋の下に映つた自分の姿を見たゝめに、折角咬えてゐた肉の塊までも取り落とした、氣の毒な痩犬の話がある。

□

婦人雜誌の口繪か何かで、よく新郎新婦の寫眞を見たことがある。いづれも現代日本の文化の精華によつて、晴れの装ひをこらしてゐる寫眞である。ところがこの寫眞は、まづ間違ひなく、花婿は最新型の洋服を着てゐるが、花嫁は純日本の服装である。そして恐らくは、大神宮の神前で、神世の昔をしのびつつ、華燭の典を擧げたものらしい。花婿の洋服は、言葉通りの意味での『最新』の型である。もちろん花嫁の服装といへども、最新流行の粋を集めてゐるといふ意味では、その最新なることにおいて、斷じて花婿のそれに劣るものではない。これは女嫁の名譽のために、保證しておく必要がある。ところがこの『最新』の流行なるものが、かなりに多くの場合、舊いものへの復歸再興の方向を指してゐるのだから面白い。

この二人の男女を一括して、お似合ひの夫婦といふ。そこで中身は兎も角として、少なくともその包装の關する限りにおいては、この二人の男女は、全く正反對の方向に動いてゐるものを現はしてゐる。ところがこの似ても似つかぬ二つのものを結びつけることが、似合はしいことになつてゐる。

私はこの新郎新婦の寫眞を見ると、吾々の社會生活の特徴的な一方面を、鏡に映して見せられてゐるような氣持がする。

□

かつて吾々の祖先は、支那の文化を攝取し、咀嚼し、消化し、同化して、新らたな日本固有の文化を打建てた。吾々はかう敎へられてゐる。そして今日は、吾々は西洋の文明を取り入れて、新日本の文化を生み出してゐる。吾々はまた、かう敎へられてゐる。日本民族は、明治維新以後の僅かに五六十年の間に、西洋の文化を取り入れて立派に我が物とした。吾々は常にから己惚れてゐる。そして西洋人もさう褒めそやしてゐる。

この頃の東京の町を歩いてみると、東京の市民が、どのような新東京を建設してゐるかゞ、よく分かる。區劃整理の出來上がつた町並みを電車の窓から眺めると、石造やコンクリートの洋風の店が軒を並べてゐる。何だか西洋の町へ來たようだ。しかしよく見ると、この石造家屋の石のうちには、ペンキで書いた石もある。電車が曲がつて、このコンクリート造りの建物を側面から眺めると、この建物と思はれたのは（これも建物には違ひないが）厚さ一尺ばかりの建物で、その背後には、低い木造の日本家屋がくつ附いてゐる。鬼面をもつて人を驚かすといふことがあるが、これ洋風建築の鬼面をかついだ日本家屋で

ある。尤もこれは、外面は西洋文化でも、内心は大和魂を失つてゐないといふ、含蓄ある謎なのかも知らぬ。

□

銀座の街を歩いてみると、新しい日本と舊い日本、洋服と裾模様、斷髮と銀杏返し、紋附とシルクハット、西洋にくるまつた大和魂と日本にくるまつた大和魂とを、笊の中でかき混ぜて鋪道の上にぶち撒いたやうな、雜然とした光景が見られる。一たいどちらが新しい日本なのだらうか。シルクハットなのだらうか、それとも紋附なのだらうか。でなければ、シルクハットでもない、紋附でもない、第三の或るものなのだらうか。この第三の或るものは、今日のところでは、少なくとも眼に見える形では、ほとんど何一つとして現はれてはゐないやうに思はれる。たとへば男子の洋服は、もはや洋服といふよりも寧ろ日本服の一種と云ひたいほどに一般化され、實用化され、無くてならぬものになつて來た。今日、洋服と名づける日本服を全廢することは、袂のついた日本服を全廢するのと同じ程度に六ケ敷い。しかしこの場合にも、吾々が、吾々の生活に洋服を取り入れて新しい生活の樣式を造つたといふことは、洋服でもない日本服でもない、第三の或るものを造つたといふ意味ではなくて、西洋人の洋服が、そのまゝ吾々の生活のうちに根を卸したといふことであり、洋服と和服といふ、全然系統の違つた二つの服裝が、石ころは石ころとして、鋪栗は鋪栗として、そのまゝ混ざり合つたといふことなのである。

或る外國人は、日本では燕尾服や大禮服などが、日本古來の衣冠束帶などゝ、誠に見事な調和を遂げてゐると云つて、感心したといふことである。この場合にも、見事な調和といふのは兩つのものが融合して、一つのものになつたといふ意味ではなくて、全く異つた、全く似てもつかぬ、全く融合すべからざる、或は全く調和すべからざるものが、仲よく並んでゐることであり、仲よく妥協してゐることなのである。

□

すべての人が、何時でも、そして何處にでも見てゐる眼前の日常生活の樣式のうちにも、二つの大きな流れが並行して流れてをり、しかも反對の方向に流れてゐるかのやうに思はれる。この二つの河流は、高い堤防によつて遮斷せられてゐる。その水は殆んど何處でも交通してをらぬ。これが最近五六十年の間に、日本が建設した新しい文化であり、西洋文化と日本固有の文化との、美事な調和である。

しかしこの種の調和は、調和である以上に、戰爭であるとも云ふことができる。吾々が西洋の文化が生んだ生活の或る様式を取り入れるといふことは、これによつて第三の新しい生活の様式が生まれたことではなくて、西洋の或るものが、謂ゆる、誇るべき日本固有の或るものによつて置き替へられたこと、取つて代はられたことを意味してゐる。そこで吾々が西洋文化を取り入れゝば取り入れるだけ、日本固有なものゝ版圖はそれだけ縮少する。そこで西洋髷が流行すると、髮結師の國粹運動や愛國運動が起つてくる。

國粹主義者は、西洋の生活様式のために、日本がその大和魂もろ共、いまにも浚はれてしまうやうなことを云つてゐる。そこで洋裝亡國論、斷髮亡國論、横文字亡國論、假名文字左書き亡國論、外來思想亡國論、その他色々な亡國論が現はれる。たしかに、日本が西洋臭くなつたことも事實であるが、それと同時に、謂ゆる日本固有の舊るい物と舊い傳統とが、今日ほど勢ひを得てゐる時代もない。古器物が地底から掘り出されて珍重がられるやうに、とくの昔に葬られてゐたものが、歴史の中から發掘され、人工呼吸を施され、そして再び社會生活の中に持ち込まれたものが幾つもある。私が小學校で受けた教育と、私の子供がいま小學校で受けつゝある教育とを較べると、新しくなつてゐると共に舊くもなつてゐる。古代模様が新時代の新流行の先頭に推し出されるやうに、三十年二十年前には全く廢れてゐた、誰れ一人顧みなかつたものが、然かも今日の生活のうちに甦つてゐる。かうして吾々の社會生活の一方は、東へ東へと進んでゆき、一方は西へ西へと進んでゆく。見事な調和である。しかし今日のやうに、吾々の社會生活の左の手は左に引つ張られ、右の足は右に引つ張られてゐたならば、結局、吾々の胴體はどうなるのか。

〔二〕

國粹主義者は、吾々日本人が、もつとよく自分の姿を見ることを要求する。日本人は美しい自分の姿を見失つて、他人の姿に見惚れてゐる。だから男が丁髷を斷ち切つたやうに、女までが斷髮する不心得が流行し、日本文字を左から書く不逞の徒が飛び出したり、赤化思想が横行したりする。しかし今日の日本に、自分の姿を見失つたからといふ傾向が空前の勢力を現はしてゐるとしたならば、これと反對に、日本の姿の再認から出發した國粹運動が空前の繁昌をしてゐるのも、今日であることを見のがすわけにはゆかぬ。今日の日本には、數多くの國粹主義の團體があつて、吾々のために國粹の保存に任じてゐる。

尤もこれらの國粹主義の運動もそれが日本人の運動である限り、日本的な特徴をもつてゐる。現代國粹主義の著しい特色は、

ムッソリーニ主義によつて鼓吹せられてゐることである。西洋文化を取り入れる日本の天才は、こゝにも閃いてゐる。國粋主義そのものゝ中における、國粋品と舶來品との見事な調和である。

□

資本主義の多くの先進國では、ブルジョアジーは前時代の政治勢力と闘爭し、前時代の政治機關や政治組織を破壊する行程のうちに、自分自身の獨自の政治形態を創造した。あらゆる西洋の物産を輸入した日本人は、もとよりこの政治形態をも輸入した。しかし日本のブルジョアジーは、羽織袴をことごとく洋服に仕立直す代りに、洋服と羽織とを交互に着用して見事な調和を現はしたように、前時代の政治形態と新舶來の政治形態とを、交互に着用したのである。立ち働きには洋服が便利である。しかし寝轉んでゐるには和服の着心地には及ばない。そこでブルジョアジーは、政治上の洋服を着ることに決して躊躇せぬように、政治上の和服を大切に保存することにも、決して手ぬかりをしなかつた。政治的和服は、洋服主義のブルジョアジーによつてほど、それほど恭々しく保存せられたことはない。

かうして日本のブルジョア議會政治のうちには、もしくは議會政治と相並んで、多くの前ブルジョア的政治の因襲や遺制がそのまゝ殘つてゐる。しかしこれらの前ブルジョア的要素は、必ずしもブルジョア政治、即ちブルジョアジーの政治的支配に楯突いてゐるものでもなければ、その妨げとなるものではない。洋服が日本服と共に、たゞ袂の無い日本服となつたように、すべての政治的衣服は皆ブルジョア的衣服となつてゐる。こゝにも見事な調和がある。

□

吾々の社會生活の根抵となる經濟の組立てのうちにも、ほゞこれに近い現象がある。今日吾が國の經濟が、資本主義の上に組み立てられた資本主義經濟であることには、何人にも異論がない。ところがこの經濟の一部分をなしてゐる農業はどうかといふと、殆んど資本主義以前の舊い關係そのまゝの上に立つてゐる。尤も、どこの國の資本主義經濟のうちにも、資本主義以前の經濟形態や經濟關係を、多いか少ないか持ちこしてゐる。そして農業は、どこでもその部類に屬してゐる。そこで日本の場合も、畢竟、程度の違ひだとも云ふことができる。

日本の農村には、小作人の生産の半分或はそれ以上をも取り上げてゐる點では、封建領主そのまゝの地主がゐる。地主は、農業の生産の組織に當るわけでもなければ、管理に任ずるわけでもない。彼らは全然、生産の行程の外に立つてゐる。若し小作人の田地が、一反二石の米を生ずるなら、地主がゐようとゐまいと、一反の耕作からは二石の米が上がる。そしてその内の一石は、地主の地代になる。かういふ法外な地代を土地から取

り上げてゐる地主は、資本主義國には滅多にない。從つて土地は、法外な値段がする。

資本主義の先進國では、地主が土地に對して受ける地代は、領主が百姓から取り上げたかういふ年貢の性質を持つたものではない。地代は遙かに安い。土地も勿論安い。そして農業上の企業者が土地を借入れ、農業勞働者を雇傭して耕作するといふ具合に、農業は資本主義的に合理化されてゐる。資本主義は、封建時代の生産形態たる農業をそのまゝ呑み下だしてゐるのではなくて、或る程度まで、資本主義の胃液でもつて消化してゐるのである。

日本では、洋服がそのまゝ袖のない日本服となつたように、この封建形態が、そのまゝ資本主義經濟の一部に取り入れられてゐる。地主は金貸となり、銀行家となり、株主となり、會社の重役となり、近代的な資本家に化身した。しかし一方では、どこまでも封建領主的な地主で納まつてゐる。

昨今、産業の合理化が喧しく云はれてゐる。しかし産業を資本主義的に合理化するためには、農業と工業との關係を、資本主義的に合理化しなければならぬ。農業がもつと資本主義化し、もつと資本主義的に合理化されぬかぎりは、産業の資本主義的な合理化には、最も根本的な問題が解決されないまゝで殘つてゐることになる。ところが日本の農業は、少くとも著しい歩調でもつて、この方向に進んでゐるとは云はれない。たとへば、土地は高速度で少數の大地主の手に集中する。しかしこの場合にも、封建領主的な地主と百姓との關係と、その上に立つ農業には何らの影響もない。これは同じ地質の布片を、たゞ接合はせただけの變化であつて、地質そのものには少しの變化も起こさない。

ところが面白いことには、日本のブルジョアジーは、農業を資本主義化しようとはしないで、むしろこの前資本主義的關係を、そのまま保存することに努めてゐるらしい。これは恐らく、和服を洋服に仕立かへるよりは、いつまでも和服として着た方が、便利なからにちがひない。たとへば土地の集中、自作農の沒落は、農業資本主義化に欠くべからさる條件であつて、農業を資本主義的に合理化する方向を指した作用である。ところが日本のブルジョアジーは、却つて自作農の創設などによつて、この作用に逆行しようと試みて居る。

□

ともかくも、吾々は社會生活のあらゆる部面において、反對した二つの方向に引つ張られてゐる。吾々は大和魂の持主である。しかし無暗に兩方から引つ張られると、日本家に接ぎ足したモルタに塗の高い洋風の前面が引き裂かれるように、吾々の大和魂が胴體から引き裂かれなければよいが。(一月七日急行列車中において。)

小泉策太郎論

馬場恒吾

西洋の諺に、罪惡の裏には必ず女があると云ふ。それに似て、近年の政界の變動の裏を探つて行くと、其所に小泉策太郎と云ふ人物が出て來る。恰も繪に描いた龍の如く雲の間に或は頭、或は胴、或は尾を顯はすけれども、決して其全身を顯はさない。世間は小泉とはどんな人物かと不思議がつてゐる。私も好奇心に驅られて、其人物研究を志した。初めは策士、陰謀家、相場師など位にしか思つてゐなかつた。然るに段々研究するに從つて、それが意外な男である事に驚いた。只遠方から見て、政界の風雲を捲き起す龍だと云ふ所の漠然たる印象丈けは存外當つてゐたのである。

然らば彼れは如何なる人物にして、何を爲さんと欲し、何を爲し得るか。民政黨の策士と云はれる安達謙藏氏は小泉策太郎を評して、「彼れは帷幄の臣たるに滿足してゐればよいに」と云ふ。所で、小泉は帷幄の臣たる事に滿足しさうもない。其滿足しないのが果して無理か、無理でない乎。それを考へる事に依つて小泉が將來如何なる政治的徑路を取るかゞ判る。

昭和三年の暮れも押詰つて十二月廿三日の夜、滿鐵社長山本条太郎氏の宅へ、政友會の巨頭が集つた。小川鐵相、三土藏相、山本農相、岡崎邦輔、それに山本滿鐵總裁も居た。其席へ彼等は小泉を招いて、政友會へ復黨を勸告したのである。小泉は自分は必ずしも復黨しないとは云はぬ。併し自分と田中とは政治意識が違ふ。政治意識の違つたものが一つの黨派に居たつてつまらないから、復黨しない迄だ。復黨するには此政治意識をどうして呉れると云つた。すると主人側は、まあ、そんな理屈を云つたつて仕樣がない。理屈は拔きにして歸つて來たらどうかと云ふのであつた。越へて二日目の二十五日の晩、岡崎

邦輔は麻布の小泉邸を訪ねた。三遊亭圓朝が建てたと云ふ三疊許りの離れの茶室に通され、主人と膝つき合して、復黨を勸告したのである。併し話しは前の會合のときの話しを蒸しかへすのみで一向に新たな進展を見なかつた。

かうして政友會の幹部が小泉に復黨を勸告する心持ちはどうであるかと云ふに、彼等は政友會が遠からぬ内に純粹の政黨的立場の政黨に復歸する事を豫想してゐる。具體的に云へば、他所から連れて來た田中總裁、又其連れ子たる久原房之助、さうした政黨出身でない幹部を除いた所の政友會になる日を豫想してゐる。其場合、政黨を纏める上に於て小泉が居なくては困ると云ふのである。小泉が果して政友會に復歸するか、しないか、今日では豫言出來ない。併し彼れは田中首相が政黨主義を諒解してゐないものと思つてゐる。だから田中には反對であるが、政友會其物には好意を有してゐる。だから田中內閣を倒しても、政友會を潰さうと云ふ意志はない。

先頃彼れが民政黨を中心とする野黨聯盟を作つて、田中內閣を倒さんとする計畫をしてゐるかの如く噂された。余程前に、彼れが民政黨の安達謙藏に會つたのは事實であるが、今は民政黨とは沒交渉である。民政黨には何處を搜したつて小泉ほどの闘爭力を有してゐる政治家はない。それは民政黨だつて自覺してゐる。小泉を一枚加へたら、手に唾して天下を取る事が出來るとは思ふ。だから、或意味に於て小泉に惚れてゐる。けれども、何を云つても民政黨の眼から見れば小泉は海山千年の莫連女の如く見へる、うつかり惚れたと云つて、弱味を見せると、——どんな非道い目を見せられるかも知れぬ。惚れては居るが云ひ出し兼ねる。硬くなつて小さく縮まつてゐる形である。今少し太つ腹になればよいと見てゐて歯痒い事夥しい。

小泉の政治的活動で、世人の注目を惹いたのは、彼れが高橋是清子爵を丸裸にして、之を護憲運動の先頭に立たしめ、軈がて、之を引退さして、田中義一を政友會總裁にし、そして又軈がて之と喧嘩別れになつた事である。恰かも小兒がおもちやの家を建てる。建てると直ぐこわす。こわしては又建てると云ふ如く、政局を作つてはこわし、作つてはこわす。つまり彼れが完全に支配する政局でなければ、彼れは滿足しない性格を有してゐるのではあるまいか。それまでは、彼に取つては政治はおもちやの家を建てる事に過ぎない。

死んだ横田千之助は彼れの親友であつた。それが云つてゐた事に、小泉は革命家だ。だから小泉と話してゐる内に、情熱を吹き込まれて、自分は元氣が付く。何んでもやつて退ける勇氣が付く。二三日して意氣銷沈すると小泉の處に行つて話しをす

る。さうすると亦元氣が出ると云つた。革命家と云ふのは唯の形容詞に過ぎないけれど、小泉が燃ゆる如き情熱を胸に貯へてゐる事は事實だ。

彼れの他の親友の一人が、彼を評して、世間では小泉を策士だと云ふ。併し策士ではないのだ。彼れは非常な智慧者だ。だから普通の人よりは一歩先きが見へる。そして自分の先見に依つて仕事をする。そして其仕事が成功すると、普通の人は小泉が策を以て成功したかの如く云ふ。何んぞ知らん、小泉は先きが見へるから、只當り前にしてゐた仕事が成功したのみだと。

理智に優れた人間はよく大悟徹底して冷靜になるものだが、小泉は其所迄は行かぬらしく、怒りもすれば、怨みもする。それが彼れに普通人の持つ人間味を與へる。彼れが今政友會から脫黨してゐるのも、彼れの肝癪が破烈した結果である。其直接の動機は例の久原入閣の際の優諚問題であつた。

優諚問題とは文部大臣水野錬太郎博士の辭表に關聯して起つた問題である。其起りは久原遞相の入閣にあつた。久原が入閣に對して三土藏相、水野文相は公然反對し、小泉も亦反對して、三人が連盟を作つた形になつてゐる。然るに田中首相は誰れが反對しても久原を入閣せしめる。反對する大臣は出て行つてもよいといふ決心をした。田中が此決心をしてゐる事を知つた小泉は直ちに三土を麻布の宅に呼んで、

『君は大臣を止める譯に行くまい。田中はどうしても久原を入閣せしめる決心でゐるのだから、君は反對を熄めて、內閣に居る方がよからう』

と忠告した。之を見ても小泉は其時（五月二十二日夜）はまだ田中內閣を潰す意志はなかつたのである。三土が留任を承諾して去ると、小泉は水野に電話を掛けて、

『今殘つてゐる問題は只君が辭職するか否かと云ふ事のみだ。久原はどうしても入閣する。三土は留任を承諾した。僕は大臣でもなく、僕の進退が內閣の運命に關すると云ふのでないから、僕に遠慮する事は不必要だ。だから、君も辭職するのは熄め給へ』

電話の向ふで、水野は、

『イヤ、僕の辭表は總理に出したのでなく、陛下に出したのだから、兎も角も執奏して貰ふ事にした』

と云つた。小泉は、

『それなら、已むを得ない』

と云つて電話を切つたのである。

翌朝田中首相は小泉邸を訪ねた。其時小泉は、

『三土は辭職を熄めた。併し水野はどうしても辭表を撤回せぬ

と云ふから、首相は其後任をお考へになつた方がよろしからう』

と云つた、田中は前夜水野に會つてゐるのであつた。水野の辭表は兎も角も御前に出す。それから後の事は後の事と話しが極まつてゐたのである。田中はその事を小泉に打開けなかつた。水野の事に關する限り、小泉の云ふ事を聞いた丈けの形で引揚げた。

午后になつて、小泉の宅へ水野の秘書官から電話がかゝつて來た。

『大臣は只今お召しに依つて參內された』

と云ふのである。小泉は其時ハツと思つた。形式的に辭表を捧呈して、優諚に依つて留任すると云ふ官僚的な筋書をやつてゐるなと思つた。同時に彼れの肝癪が破烈した。それはそれ丈けの仕組みをして居りながら、田中が今朝來た時には一言も其事に觸れない。それがそれ迄の小泉と田中との關係では出來た義理でない。もう、我慢は出來ないと思つて、小泉は行政制度審議會員を辭し、政友會を脫黨し、田中とは路傍の人になつた。

これほどまでに彼を怒らした田中との關係はどうであつたか。それを知るには其前の高橋是清、原敬との關係迄溯らねばならぬ。それは明治四十五年に彼れが初めて代議士として中央政界に乘り出した時以來の彼れの政治的經歷を述べる事になる。

後には彼れは原敬に傾倒するやうになつたが、初めは原敬を小生意氣な弱輩がとしか思つてゐなかつた。尤もそれには、彼れが松田以外の長老政治家の處へは滅多に顏出しもしなかつたと云ふ事も原因となつてゐたであらう。所が或時小泉はかう云ふ話しを聞いた。長崎に鈴木天眼と云ふ老新聞記者が居つて、それが老來振はず、病氣で困窮してゐる。原と鈴木は一度も會つた事がない。然るに原は鈴木が困つてゐると云ふ事を聞いて、月々幾許かの生活費を送つてゐると。此話しを聞いた小泉は、原と云ふ男がそれほど迄に他人の事に氣を配つてゐるとすれば、これは只の人物ではないと考へた。それで原に接近して、原內閣の時にはかなり立ち入つた世話迄した。併し小泉の流儀は先輩政治家の間を萬遍なく歩くと云ふ風でなく、松田なら松田、原なら原と、只一人と交渉するのみであつた。原內閣の時は原一人と交渉して他の政治家とは本部で顏を合はすと只挨拶をすると云ふ程度であつた。

其中に只横田千之助のみとは稍深く交渉した。元來原の流儀は黨員を碁石の如く見る。一つの石は何處までも一つの石であ

つて、其間に價値の區別はない。皆んな平等に取扱ふ。さうしないと、依估贔屓だと云つて黨員が不平を起すと、原はかうした事に非常に心を用ひた。だが其中に横田のみは原が特別に重用してゐた。彼れの平生の主義を破つたのである。其結果として、小泉は横田とは稍深く交渉するに到つたのであつた。

原が暗殺されたとき小泉は天津の宿屋に居た。朝寢てゐる時に、駐屯軍司令部から電話が掛かつて原横死の報知を得た、其時先づ彼れの胸に浮んだことは、政友會の大阪城が來たと云ふ事であつた。原が居たればこそ政友會の統一が出來てゐた。これからが政友會の受難時代だと感じた。其内に彼自身も大病に罹つた。醫師は肺炎だと診斷した。彼れは鎌倉に引籠つて寢てゐた。

原の後に高橋内閣が出來たが、これは半年ならずして果して混亂の幕を演出した。病氣が稍々良くなつて、小泉が鎌倉から東京に出て行くと、内閣は改造と非改造の兩派に分れて内部鬪爭に熱中してゐる。高橋横田小川（平吉）などの改造派は中橋文相、元田鐵相を免職する上奏文を出さうと犇めいてゐる。彼等は政は正なり、内閣の規律を正さなければならぬと云つてをる。元田の方は、政府が上奏文を出せば吾々も亦反對上奏文を出すと云ふ。

其頃小泉は横田に云つた。内閣が改造非改造で、陛下に御斷を仰ぐなどと云ふのは全く狂氣亂心の沙汰だ。政友會の大阪城は來てゐるのだ。關ケ原の一戰なくして天下が治まる筈がない。一戰しろ。己れが味方をしてやる。そして此受難時代を乘り切るのだと。

高橋内閣は改造、非改造で潰れて、後は加藤友三郎、山本權兵衛、清浦圭吾と云ふ三代の超然内閣が續いた。其間に政友會では高橋では政權が門前を素通りする許りだと云ふので高橋を追出し運動が起つてゐた。小泉は之を關ケ原に行く前提と見て眺めてゐた。

小泉が其鬪爭的な本領を充分に發揮したのは清浦内閣の時から始まる。其前に一日彼れが貴族院の渡邊千冬子を訪ねると、渡邊子は彼れに云つた。高橋是清と大木遠吉を僕が紹介するから、君の處の佛像を見せて呉れないか。此間、研究會の幹部と政友會の高橋野田（卯太郎）などを招いて晝飯會をした處が、君の處の佛像の話しが出て、高橋と大木が見度いと云ふのだから、僕が紹介すると、小泉は前からの流儀で高橋が總理大臣のときも一度も訪問せず、議會で會つてもしみじみ話しもせず、其結果高橋とは餘り懇意でなかつた。併し彼れは云つた。

「紹介は可笑い。兎も角も我黨の總裁だから、君に紹介されれ

と云ふのも可笑いから、僕の宅で佛像鑑賞會を開かう。其時に來て貰へばよい』

それで高橋、大木、渡邊、野田、床次などを招いて佛像鑑賞會を開いた。其時小泉は高橋も佛像を有つてゐる事を聞いたから、更めて今度は小泉がそれを見せて貰ふ事にした。

小泉が高橋を訪ねた時、小泉は一つ政治上の話を仕度いが聞いて呉れるかと云つた。高橋は是非それを聞き度い。今客が來てゐるから、それを歸して來る迄待つて居て呉れと云ふ。客は二十分許りで歸つた。其後で三時間ほど小泉は自分の意見を述べた。其趣旨は震災は政治の根本的改革を行ふ爲めに、人爲でしなければならぬ事を、天がして呉れたのだ。暴動が起れば起れ。それを利用して政治の改革が行はれる。然るに今の政治家の云ふ處は畢竟するに井戸側會議の範圍を出でない。彼等が會合すれば、暴動が起つたとき如何にして避難するかと云ふ話しかしない。彼等には最早國家を背負つて行く元氣がない。然らば誰れが國家を脊負つて行く。それは矢張政黨政治家の外はない。世人は代議士の腐敗墮落を非難する。非難する程ならば何故自分に代議士になるべく選擧に打つて出ない。自分には其勇氣も犧牲心もなくして、徒らに代議士の腐敗墮落を非難するのは無責任だ。苟くも代議士にならんとするものは一家の財産を蕩盡し、言ふに言はれない苦勞をして選擧を爭ふ。これを除いて、外に愛國運動のありさうな筈がない。元より代議士の中にはさほどでもない人物も居る。併し大隈内閣に叩かれたときの選擧でも、政友會は百名を下らなかつた。原内閣の時の選擧でも憲政會百名は殘つた。政友會、憲政會合せて二百名は如何なる場合の選擧にでも當選する強者である。これが中堅になつて國家を負擔するより外に、國家を負擔するものはない。政友憲政が只政權爭奪に沒頭して無益の爭をなすほど愚かな事はない。宜しく政黨が連合して時局の立て直しをやるべしと云ふのであつた。高橋は心から此說に共鳴した。

小泉が此事を横田に話すと、横田はそれは一つ三土にも話して置いて呉れと云つた。小泉は三土にも高橋に述べた意見を話した。

それは山本權兵衛内閣の時であつた。山本が虎の門事件で潰れ、越へて三日（大正十二年十二月三十日）小泉は鄕誠之助に招かれた。行くと其席に井上敬二郎氏が居て、今度は淸浦内閣が出來るから、君はそれを助けて呉れと云つた。小泉は己れはそれは出來ぬ。己れは田舍に歸つて寢るのだと答へた。

愈々淸浦子に内閣組織の大命が下り、淸浦は一度は之を拜辭すると云つて又引受ける事に決心した。貴族院の研究會が汎べ

て閣員の人選をなしつゝ、其代表者は横田の處へ來て、政友會の援助を求めた。小泉は其時(一月二日)風邪で家に引籠つてゐたが、政友會は幹部會を開いた。其席上で、高橋總裁は自分は決心したと云つた。小泉は翌朝新聞でそれを見たのであるが、決心とは何の決心か判らなかつた。

其日小泉の家には榊田淸兵衞、島田俊雄などが來て碁を打つてゐた。小泉は横からそれを見てゐた。其時横田が訪ねて來たから別室で會つて、小泉は横田に向つて、

『高橋の決心つて、あれは何を決心したのだ』

『イヤ其事で來たのだ。何の決心だか誰れにも判らない。其所で、高橋の胸を開ける鍵は君より外にない。君なら話すだらう。だから君に往つて聞いて貰ひ度い。高橋には飯時分の客には必ず飯を出す癖があるだから、夕飯前に往つて、ゆつくり聞いて貰ひ度い』

高橋が横田にも話さぬ秘密を自分に話すかどうか、小泉は確かに請合ふ事は出來なかつた。併し兎も角も往つて見ようと約束して、横田を玄關迄送り出した。

横田の自動車が走り出して、小泉は未だ玄關に迂路々々してゐる中に、横田は又歸つて來た。そして、小泉に向つて、

『君、是非往つて呉れ玉へよ、間違うと困るから。そして僕は何處にも出ずに、家で君の返事を待つてゐるから』

と云ふのであつた。

併し小泉は動かうとしなかつた。碁を打つてゐる連中と自分の家で夕飯を濟ました。そして又碁が初まるのであつた。其中に小泉は、このまゝ高橋の處に行かずに居ると、余り念入りに横田を欺ました事になる。横田への義理を濟ます丈けにも、兎も角高橋の處へ行かうと思つて、漸く尻を持上げたのである。

高橋に會つて聞くと、高橋の決心と云ふのは、自分が政友會總裁であるが爲めに、政權が政友會に來ないのであるから、自分は總裁を止めて、政界を引退する。あとは政友會は團體の代表委員制でゞもやつて行つて貰ひ度いと云ふのであつた。

其決心が余りに悲壯なのに釣り込まれて、小泉は持前の激情を勃發せしめた。恰かも狐に乘り移られた心持ちなのである。其前から政友會には非改造派の中橋徳五郎、元田肇などに依る高橋追出し運動があつた。一時妥協は出來たやうなものゝ、其運動の火は消へてゐなかつた。だから小泉は昂奮して、

『政黨首領はそんな詰腹を切らされて引退すべきものでない。原の横死で政友會は大阪城に來たのだ。關ケ原の一戰なくして、政友會が治まる筈がない。其戰ひを闘ふに今が時機である。貴族院が政權を握るに對して、吾々は衆議院本位で進む、

吾々の方が正義正論だ。總裁も貴族なんか廢めて、衆議院に打つて出る。そして關ヶ原の戰爭をやる決心をなされ度い』

と云つた。其處になると高橋の恬淡無慾の性質が發露した。

『よしやる。華族を廢めるなどは何んでもない。君其手續を教へて呉れ』

鬪爭の感激に燃へて二人は深更泣いて別れた。小泉は家にかへると横田に電話をかけて、翌朝來さす事に約束した。其前に、小泉は政友會の事情通である松野鶴平に電話をかけて、議員名簿を持つて來いと云つた。

松野が來ると、小泉は、

『政友會も分裂する時が來たのだ。山本達雄、床次、中橋、元田が脫黨する。岡崎は泣き／＼居殘る。さうなるとして、政友會は何人になるか勘定して呉れ

と云つたのである。松野は議員名簿に印を付けてゐたが、脫黨するもの百五十、居殘るもの百十何名、不明二十と算へた。此計算は大體に於て、事實に依つて裏書されたのである。

横田が來たとき、愈々政友會分裂を賭して清浦内閣と鬪ふと云ふ話しをすると、横田は『せい／＼三十人も脫黨するか、床次は出ないだらう』と云ふ意見であつた。小泉は『博徒でも、女郎でも、何か大事をなさんとするときは自分の身を切る。例令政友會が半分に割れても、一戰爭せねばならぬ。先づ戰爭すると君が決心して呉れ』

と促した。横田は其時は考へさせて呉れと云つたが、後に護憲運動の中心になつたは人の知る通りである。

其日に革新俱樂部の古島一雄がぶらりと小泉の處に來た。政友會に奮發して、清浦内閣に反對して呉れと云ふ所の、犬養の傳言を以て岡崎邦輔の處へ行く途中であつた。小泉は古島に向つて、岡崎の處に行くのはよせ。岡崎は泣き言以上に出でる男でないと云つた。併し古島は暫らく話した後に岡崎の所へ行つた。

清浦の特權内閣を打倒する爲めに金がかゝつた。其時小泉は實印を横田に渡して、麻布の家屋敷を抵當に農工銀行から三十七萬圓借り、二十萬圓を政友會に納め、あとは自分と横田で費つて了つた。感激すると汎べてを捨てゝ顧みないのが彼の流儀だ。

かうして護憲運動が起り、清浦内閣は倒れ、三派連立内閣が出來、高橋、横田が加藤高明内閣の閣員となるに至つたのである。

高橋を丸裸にして奮鬪さしたのは小泉である。それを引退せしめたのも亦小泉であると噂されるが、これには少しく誤聞が

あるやうだ。高橋が最初に引退の意志を漏らしたのは故人の三浦觀樹將軍に對してゞあつた。ある日古島一雄が三浦の處に行くと、三浦は云ふ。

『高橋が今日妙な事を云つてゐた。どうも政友會總裁を熄め度い樣子だ』

『それは怪しからん。あなたこれから高橋を訪ねて、眞意を突き止めて下さい。それには斯う云ふに限る。政友會を二分したのは高橋ではないか。原が殘した二百八十名の政友會を分裂さして置きながら、今になつて逃げ出すとは無責任だ。其理由を聞きに來たと云へば高橋が本音を吐くだらう』

三浦は早速高橋の處へ行つた。そして歸つてからの報告に、高橋の引退は矢張金の問題だ。政友會は中々金が要る。幹事長の岩崎勳などが、屢々黨の費用を取りに來る。總裁として居ればそれを出すのが當り前だが、高橋は此上出すと食へなくなると云ふのだ。三浦も古島も金の問題ではどうする力もないのだから、高橋の引退も已むを得ざる事として諦めるより外はなかつた。

三浦古島の間に政友會後任總裁の話しが出た。三浦は田中義一に大將の軍服を脫がして政友會總裁にならし度いと云ふ意見であつた。古島はそれに反對した。

『大將の軍服が、あなた方にはどれほど難有い事か知らないが、一般の世間は柳原の古着屋に行けばいくらもあると思ふであらう。殊に高橋は已に華族の服を脫いだ。あなた自身も護憲運動の爲めに樞密顧問の服を脫いだ。こんな古手な芝居で、世間を感激せしめる事は出來ない。』

『それでも、長州政治家としては桂が死に、寺内が死に、後繼者としては田中より外にないのだからな』

『それではあなたは矢張長州本位の藩閥政治家だ。田中をかつぐことは僕は御免を蒙る。小泉と横田に御賴みなさい』

三浦は改めて田中の事を小泉、横田には賴まなかつたけれども、彼等は彼等自身で總裁の後任問題を考へた。横田に向つて總裁になれと勸める者もあつた。併し其時はあのやうな元氣であつた横田が銷氣切つて、

『君、そんな事を誰れにも云つて吳れるな。僕は今とても總裁なんかになれる身體ではない』と云つた。

横田が死んだ後で判つた事であるが、横田は五臟悉く病氣ならざるなしで、恰かもこわれた玻璃を袋に入れたやうな體をしてゐた。それで自分ではこれと云ふ病氣を自覺せず、健康な積りで活動してゐた。只時々非常に意氣銷沈することがある。それで元氣を付けに、小泉の處に話しに來る事は前に述べた。死

明の近づく事が、或暗い影を彼の精神の上に投げてゐたのではないかと思はれてゐる。

高橋の總裁辭退の志動かすべからず、後繼者には田中を持つつて來ると、小泉、横田などの腹は決まつた時、小泉は獨りで高橋を訪ねた。それは大正十三年十二月二十九日であつた。小泉は高橋に向つて、總裁引退には時機がある。よく時機を見てやらなければならぬが、其前に後任を誰れにするかを決めて置かねばならぬ。黨内では色々の人が評判になつてゐる。後藤新平、伊東巳代治、田中義一などが候補者である。其中の誰れが適任であらうかと云つた。

高橋はそれは田中が一番良いと即席に決定した。小泉は田中の處へ行つて政友會總裁になる心組みで居れと云つた。

正月になつて、伊豆の修善寺に居た田中は同じく伊豆の子浦の小泉宅を訪ねた。子浦は下田から遙かに西の海岸である。田中は山越しに其所へ行つて、小泉の宅に泊つた。彼れの政友會入りは其所で決まつたのである。熱海會議、下田會議と傳へられるのは、畢竟するに此會見の餘波に過ぎない。

政友會は高橋を總裁としたまゝに大正十四年春の議會を濟ました。議會が終つた或日小泉が高橋邸を訪ねると、高橋は、

『此頃はどうしたものか、政友會の連中はちつとも來ない。皆んな忙しいのか知らん』と云ふ。小泉は、

『それは來ない筈です。總裁が引退して、田中が來ると云ふ事は、黨内で知らぬものがないと云ふ有樣です。昨年云つた引退には時機があると云ふのは此事です。引退されるべき時機が來たのです』と云つた。此所でも高橋の淡泊な性情が發揮されて

『あゝさうだつた。明日加藤（首相）の處へ行つて引退を聲明して來やう』

高橋の引退、田中の乘込みは新聞に出た通りに運ばれたのである。

小泉は田中に對して初めから高橋に對する如き感激の念を懷かなかつたらしく見へる。正式に政友會總裁になれと云ふ交渉を受けた翌日、田中は高橋の處へ挨拶に行つたのはよいとして、床次、山本などの處へも挨拶に廻はつた。小泉はこれは政友會總裁に就任してからなすべき事だ、早まり過ぎる。いつその事、加藤高明にも、後藤新平にも、皆んなの處へ廻れと怒鳴つた位である。

田中が内閣組織の大命を受けた夜、小泉が田中邸に行くと、夜を徹して踊り狂ふと云ふ光景を見せられた。彼れは澁い顏をして引き下がつた。尤も彼れに探つては内閣組織の顏振れも氣に入らなかつた。小泉は内閣の顏振れは大命降下の後に決める

べきだ。其前から下相談をするのは取らぬ狸の皮算用で見つともないと云つてゐた。然るに取らぬ狸の皮算用をしてゐる連中があつて、田中は大命を受けると其連中の拵へた筋書に手もなく乗つて往つた。貴族院の研究會へは閣員として今勸銀總裁になつてゐる馬場鍈一氏を取ると云ふ事を前夜約束してゐた。政友會員としては新らしき鈴木喜三郎氏を内相に、原嘉道氏を法相に持つて來る事にも小泉は反對であつた。

其鈴木が小泉を呼びに來る。往つて見ると鳩山一郎、森恪が居る。小泉に對する要件と云ふのは彼等も研究會から大臣を取ると云ふ事に反對であつた。それ故に小泉をして田中に抗議を申込ましめんとするにあつた。小泉は云つた、

『併し田中がどうしても研究會を入れると云つたらどうする。へえ、さうですかと云つて引退るのか。俺れは君等のお先棒になつて、無駄な憎まれ役を勤めるのは厭だ』と云つた。鈴木は默つてゐる。小泉は森に向つて、

『君は研究會反對の急先鋒だ。若し田中がどうしても研究會から取ると云つたら、君はどうする。』

『僕は政友會を脫黨する』と森は云ひ切つた。

小泉は鳩山に向つて、

『君はどうする』

『僕は內閣書記官長を辭する』

『鈴木君、君はどうする』

『僕も內閣には入らん』

『よし、それ丈け腹が決まつてゐればよい。證文は書かなくとも、確かに君等證文を取つたぞ。此證文を以て田中に談判してやる』

小泉は田中邸に乘り込んで、鈴木、鳩山、森三人の進退を代表して、研究會から閣員を取る事に反對した。其結果が政友會の長老會議となり、研究會の入閣は中止になつた。かうした強硬な談判をする小泉の腹には、或は此談判が成功しなく、鈴木が入閣しなくなつてもよいと思つたかもしれぬ。

後に小泉は久原の入閣、それに關聯して水野の優諚問題に憤慨して、田中とは義絕のやうになつてゐるが、田中に對しては惡聲を放つてゐない。

曰く、田中は政權を取つても、何一つ自分の思ふ事はしてゐない。自分のしたくないと思ふ事ばかりさせられてゐる。山梨を朝鮮總督にした事だつて、田中は逃げ廻はつてゐたのだが、過去の因緣で、厭々ながら總督にせざるを得なかつた。上山をも台灣總督にして置き度かつたのだ。それが周圍の者に强要されて、罷めさせざるを得なくなつた。頗る氣の毒な人だと。

曰く、田中は田中自身の事を賞められると非常に喜ぶ。だが、悪口は他人の事を惡く云ふのを聞かされても厭やな顔をして横を向く。いくらか人の長たる資格のある人だと。

だが、之を以て小泉が田中の政友會に復歸するものと斷定してはいけない。彼れは感激の人だ。意氣に感ずれば水火をも厭はないが、かう冷靜に田中を見るやうになつては、田中との脈は切れてゐる。蓋し彼れは政治的には今何んにもしてゐない。併し彼れの心の動きやう一つで政界の波動は起る。例へば若し彼れが政友會の十五六名を引拔けば、現在の微妙な政局に於ては、如何なる政情の變化をも來たす。彼れの性格は休息せる噴火山に似て、何日何處に爆發するか判らない。

今でこそ小泉は代表的な舊い型の政治家と見られてゐるが、其腹の中に何を考へてゐるか判つたものでない。彼自身職業を聞かれるときは新聞記者だと云ふ。それは彼れの出身の初めが新聞記者であつたからである。徴兵檢査の翌年、二十二歳のとき彼れは郷里の伊豆から出て、自由黨の機關である静岡日報の記者となつた。所が其新聞社に社員のストライキがあつた爲めに、彼れは主筆、探訪、校正を一人でやつて一ケ月も奮闘したが遂にヤリ切れず、東京へ出て放浪生活を始めた。其頃(明治廿七年)東京に矢張自由黨の機關紙で自由新聞と云ふのがあつた。宮崎晴瀾と云ふ妖詩を作る人が主宰してゐた。其新聞に入る運動をすると宮崎は小泉に向つて何か書いて見よと云つた。小泉は上野の圖書館に通つて由井正雪を書いた。それが好評であつたので彼れは、日本の叛臣傳を書く積りで織田信長、明智光秀、加藤清正を書いた。此等の著書が中々の素人藝でない。德富蘇峯氏が私に話された。

『兎も角も、信長を讀んで御覽なさい。小泉は歴史の本流に掉してゐる。其眼の付け所が正鵠を得て居る。一體が凝り屋だから、何か研究を始めると徹底的に研究しないと氣が濟まないのだらう。小泉の著した運慶考は日本の佛像彫刻に關する立派な考證だ』

蘇峯氏の折紙が付いてゐるからは、私は此上に彼れの著書を批評する事を差控へる。

此等の著書は汎べて上野の圖書館で作られた。小泉は其頃は書物を買う余裕などはなかつたのであるから、圖書館の本を見て著述する外はなかつた。半年ばかり圖書館の茶呑所で、毎日顔を合はせる男があつた。後に名乘り合つて見るとそれは當時已に有名になつてゐた久津見蕨村であつた。君が久津見か、お前が小泉かと云つたやうな工合であつた。

小泉の著書は偉人史叢として裳華房から出版された。裳華房

と云ふのは吉野兵作と云つて、仙台の藝妓と松島で情死を企て、そして死に損なつた人である。それが東京に來て本石町に二間の家を借りて出版をしてゐた。小泉は其所から時々金を借りた。

尤もそれは本の原稿料の前借としてゞあつた。一冊の本を書くと三十圓の原稿料が貰へた。其頃小泉は圖書館に近い清水町に家賃一圓二十錢で住んでゐたのであるから、月に拾圓もあれば生活出來た。一冊著書をすれば三月は遊んでゐられる勘定であつた。併し彼れは遊んでは居なかつた。自由黨的の天下の志を抱いて、新聞記者として活動し度かつた。自由新聞、星亭のめさまし新聞(井上敬二郎社長)、陸奥宗光の『世界の日本』などに居たが、新聞其物が潰れるので、小泉の地位は永續きはしなかつた。

小泉が自由新聞に居たとき、幸德秋水も亦其社に居た。後に小泉が金を儲け出してからは、幸德の生活費を助けてゐた。それはさうする事に依つて、幸德を溫和ならしめる積りであつたかもしれない。幸德が死刑に處せられて、其遺骨が四谷南寺町の堺枯川老の處に引き取られて來た。そのとき小泉は香奠を持つて御通夜に來た。それから今日迄二十年間、小泉は今尙幸德の未亡人に對して生活費を貢いでゐる。

小泉と幸德の友人で、これも亦不遇の文士である長田偶得が居た。學者としては堂々たるものであつたが、生活の途を講ずる上に於ては無能力に近かつた。小泉は長田の爲めに自分の邸内に家を建て、それに米と味噌を與へて、長田が死ぬる迄世話をしてゐた。

小泉は廿六七の頃、新聞記者としては都落ちをせざるを得なかつた。それは彼れが加藤淸正を書いた緣故で熊本に人望があつた。それで自由黨が熊本で九州新聞を作るとき、小泉は創立者として派遣されたのである。當時熊本の九州日日には安達謙藏、博多の九州日報には古島一雄、福岡日日には高橋光威が居て、九州の政爭を過激化してゐた。其間に小泉は自分の新聞に文學欄を拵へて、文藝的のものを連載してゐた。選擧が始まると味方の自由黨支部の連中は、此選擧最中に文學欄などを設ける小泉は怪しからんと憤慨した。小泉は妥協して、それでは紙面の二段丈け自由黨支部に提供するから、其所で勝手に國權黨反對の熱を上げたらよからうと云つた。それでも血の氣の多い熊本人は小泉を憎むで、選擧が濟んだら、新聞社へなぐり込みに行かうと相談してゐた。小泉はこんな爭ひを馬鹿々々しく思つて、選擧の濟んだ夜、熊本を去つて東京に歸つた。

文筆を携へて放浪生活を送る事七八年、小泉も漸く三十歲に

ならんとした。其時彼れは決心した。四十迄には金を儲けて代議士になると。それで彼れは金儲けにかゝつた。初めは米相場に手を出したり、東京市に石材を賣込まんとしたが、何れも思はしくなかつた。それで彼れは蠣殻町に經濟新聞と云ふ週刊雜誌を起した。八代久吉と云ふ其頃の經濟に關する評論界の權威を連れて來て此雜誌を主宰さした。それが當つたのである。經濟新聞に信用が付くと共に小泉の金廻りもよくなつた。彼れは何んとかして自分の印刷所を有ち度いと思つてゐると、銀座にある三協舍と云ふ活版所が二萬圓で賣物に出た。小泉は友人の間を奔走したが一萬圓しか出來ない。

小泉は栗生武右衛門の事を思ひ出した。栗生は大きな株式仲買であつた。小泉に向つて度々云つた。

『オイ、小泉、おれの所にはな、金が行列して入つて來るんだ。要る時には遣へよ』と。

小泉は栗生に云へば出來ると思つたが、相場師から金を借るのは厭だと思つて云はずに居た。すると或日の晝頃、小泉は鎧橋の上で栗生にバッタリ遇つた。栗生は兜町の妾宅へ毎日晝飯を食ひに行く。其途中であつた。どうしたと聞くからに、小泉は活版所を買ひ度いが金が足らないと云つた。栗生は『ウン、これから直ぐに其活版所を見に行かう』と云つて、二人は其足で銀座へ出掛けた。

栗生が三協舍の主人に談判して、二萬圓のものを一萬圓現金で拂ひ、殘り一萬圓は栗生の信用で後拂にした。栗生は外に一萬圓運轉資本として貸して呉れた。小泉は感激して『人間の榮枯盛衰は計るべからず。貴下が困つた時には私がどんな事をしても助ける』と誓つた。小泉は此活版所で電車切符の印刷を引受けて儲けた。震災の時は六十萬圓からの復舊費を自力で出した。今でも年に二三萬圓の純益を生んでゐる。此活版所が小泉の財産の基礎工事となつた。

日露戰後、栗生は相場に失敗して二百萬圓の借金を背負つた。小泉は其時は實業界に相當の信用を有つてゐた。栗生は小泉に訴へた。

『もう俺れもいかん。家の小僧や下女迄、俺の云ふ事は聞かなくなつた。君が俺れの店に來て座はつて居て呉れさへすれば、店が立て直るのだが、さうして呉れないか』

と云ふのである。二三度さう云はれても躊躇してゐると、栗生は、

『君は三協舍を買うとき、人間の榮枯盛衰は計るべからず、貴下が困つたら助けると云つたではないか』

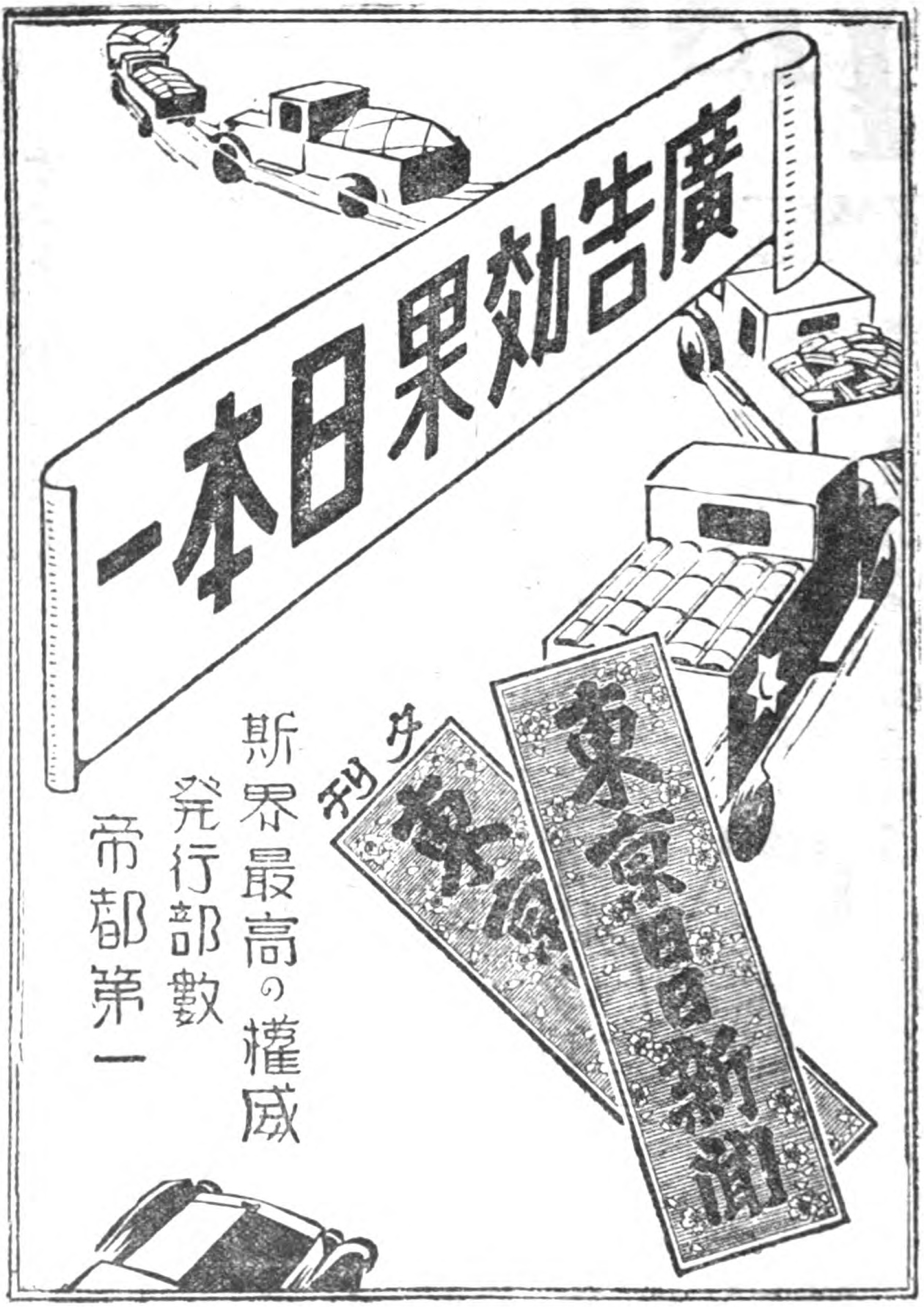
と云ふ。之には小泉も一言もなかつた。それで彼れは栗生の

店に客分として二年間坐はつた。それで栗生の店は立直つて小泉は去つた。其後二度目に栗生は失敗して、再び小泉の助けを求めた。小泉は今度は店に坐はらなかつたが、只二十萬圓許りの貸しと、及び今日に至るまで小泉は相場師であると云ふ惡名が殘つてゐる。

世間的には彼れは打算的の人物と見られて、實際は氣節を負つて進退を決してゐる。政界に游泳して、功名の地位に居るかと思へば忽ち肝癪を起して脱線して了う、溫和しく順番を待つて出世すると云ふ風でない。政治に熱狂して風雲を捲き起してゐるかと思ふと、暫らくすると政爭を逃避して佛像をいぢくつてゐる。其佛像も信心からかと思へば、彼れが佛像を見るは只骨董を弄ぶ心持ちに過ぎない。彼れが昨年滿州から歸つて、新聞記者に云つた言葉に、山外山ありて山盡きずと云ふのがある。何時も現實に滿足せずして次ぎの社會を要求する。

小泉は伊豆の伊東の別莊に溫泉を堀らした事がある。八十尺堀つて溫泉が出たが少しぬるいので百三十尺堀つた。すると地下水が滔々と出て來て、溫泉が水になつた。これは熱海の井戸堀りがした仕事で彼自身の責任ではないが、稍々彼れの性格を形容してゐる。完璧を求めて、不完全な璧をも失ふ。

だから彼れの現在には煩悶がある。現在の社會に滿足せず、されば云つて、彼れの理想の社會は並大抵の手段では實現出來ぬ。現在の政局に滿足せず、而かも政治は彼れの生命である。彼れの激情は最も多く政治に關聯して爆發する。時にはそれが犧牲的になり、時にはそれが狂暴性を帶びる。現在の彼れが茶人然として靜かにして居ても、吾々はそれは休息中の噴火山である事を忘れてはならない。それが何所に爆發するかは、蓋し彼れ自身にも判らないであらう。


廣告効果日本一
斯界最高の權威
発行部數
帝都第一
夕刊
東京日日新聞

吉原今昔

久保田万太郎



一

「此年三の酉までありて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく、此處をかこつけに檢査場の門より亂れ入る若人達の勢ひとては、天柱くだけ地維かくるかと思はるる笑ひ聲のどよめき、仲の町の通りは俄に方角の變りしやうに思はれて、角町京町處々のはね橋より、さつさ押せ〳〵と猪牙がかゝつた言葉に人波を分くる群もあり、河岸の小店の百囀りより、優にうづ高き大籬の樓上まで、絃歌の聲のさま〴〵に沸き來るやうな面白さは大方の人おもひ出でゝ忘れぬものに思すもあるべし」とは『たけくらべ』の十四章「酉の市」の光景をうつし出した一節である。——何とみるべきだらう、われわれ、この光景を？

といふのが昨夜、五六年ぶりでわたしは……いゝえ、もつとである、七八年ぶりでわたしは、その「酉の市」のむかし可懷しい光景をみに行つたのである。さう思ひつゝ「初酉」にも行けず「二の酉」にも行きはぐり、これはまた今年も緣がなかつたかとあきらめてゐた矢先、昨夜「三の酉」に、たまたま連れをえて思ひもよらず行くことが出來たのである。——でわたしと、わたしのその三人の連れとは、八時やゝすぐるころ、三の輪ゆきの電車の入谷の車庫まへで自働車を下りた。——下りたのではない、下ろされた。警戒にあたつた巡査と在郷軍人との勇敢にふりまはす提灯の火に、自働車といふ自働車、（さうし一

まれに俥といふ俥）ことごとくそこにせきとめられたのである。

そのまゝ、わたしたちは、その電車の線路に沿つて弓形に大きく曲つた廣い往來を――區劃整理の完了した廣い往來を――廣い故に暗い……といふことは、兩側、おなじやうな恰好の、きはめて榮えない、きはめて實直な、きはめて世帶じみた、たとへばおでんだのすしだのアイスクリームだのゝ屋臺の既成品ばかり所狹く並べた萬屋臺車製造販賣の、銅壺だの鍋だの天ぷらの揚げ臺だのをうづ高くつみ上げた銅器類製作の、煙草だのパンだのの飾り棚を引ツ擴げた店飾陳列の「時代の生んだ」鐵網萬年襖商の、さうした特殊の、めづらしい、誰にでも呼びかける必要のない店々ばかりならんでゐる關係で、その店々たがひの、謙遜な、つゝましい燈火の影は決してそこにまじり合ひ溶け合はないから……往來をぞろ／＼つゞく人の流れのなかにまじつてあるいた。自動車も俥も通らないから、あたり、さうなるとうそのやうにしづかである。聞えるのは人のその流れの音だけである。――とき／＼たゞ、風のやうに、滿員の、三の輪ゆきの電車がおもひ出したやうにうしろから拔いて行つた。――その行く手の線路の、工事のために置かれたところどころのカンテラの火の鈍い瞬きが、曇つた空、しぐれた月……ありやうは、自動車に乘るとき、一滴、二滴、冷めたい雨の粒がわたしたちの顏のうへに落ちてゐたのである……のはうへ心細くわたしたちの眼をさそつた。

『この電車、どこを通るんだ、お西さまの？』

わたしと同じ淺草の育ちながら、ずつと上方へ行つてゐたあとの山の手住居で、いつにもこつちのはうへ來たことのないわたしの連れの一人はいつた。

『どこつて門の前をさ。』わたしはこたへた。

『門の前？――』と、何か、電車通りになつたのか、お西さま？』

『さうさ。』

『戯談だらう、いつからそんな？』

『十年もまへからだ。』

『十年も？』信じられないやうにそのわたしの連れはいつた。

『さうかなア……』

『さうかなアぢやアないさ。』

が、さういふわたしにしても『お西さまへ行つてもいゝけど田圃に落ツこちないやうにおしよ。』といはれたのを昨日のやうにしかまだ思はないのである……

千束町の停留場のはうへ曲ると一しよに往來の幅は一層廣くなつた。公園のはうからのものと合してそれまでの人の流れの

音は一層そこで高くなつた。――が、あかく／＼と灯しつらねた露店は、その暗い人の流れに背を向けて、右側の步道のうへにだけ竝んでゐる。わたしたちはそのはうへ電車の線路を越した。完全に「酉の市」の群集のなかに交つた。――が、さて、それにしても、大頭、黃金餅、かんざしの店々のすくないことよ。――まづ最初わたしのまへに展けた七八年ぶりでの「酉の市」の光景はそれだつた。

二

……正面に高く「澤の鶴」釀造元の大きな提灯の列が暗い中ぞらを劃つてゐる。兩側には、木馬館、遊樂館、松竹座、三友館、大東京、大勝館、さうした公園の活動寫眞の小屋の名を一つ／＼にしるした、玉子形の、やゝ小ぶりな提灯が透きなく竝んでゐる。――その提灯のあかるい光の中に犇めく群集、眞つ赤な中へ眞つ黑に大頭と大きく書いた看板、金箔うつくしい熊手、鳥居に立添へたカサカサの笹、客をよぶ商人たちの姦しいわめきにまじる神樂の音。……一ト足「大鷲神社」の境內へ入ると一しよに、辛うじてわたしたちは、それまでの凡常な「緣日」意識からすくはれた。

と同時にわたしたちは人波に揉まれ出した。いまゝでのやうに安閑とあるいてゐられなくなつた。奴、萬盛庵、梅園、來々軒、一仙亭、透きなく竝んだ兩側の提灯の記名は間もなくさう「活動寫眞」から「飮食店」に移つて行つた。資だの、小業燕だの、清吉だの、浪花ぶし語りの藝名が時を得顏にそのなかに立交つてゐた。――と、急に、神樂堂の近くまですゝんだとき、どツと前方から、逆にわたしたちはうしろへ押返された。――危くわたしたちはふみ留つた。

『押しちやアいけない、押しちやア……』

みをつくしのやうに立つた巡査は聲を嗄らしていつた。赤い筋の入つた提灯がどこにもふり廻された。

『女はこつちへ來い、此方へ。――危いから此方へ來い。』

混亂――

連れの名を呼交はす聲。

賽錢を投げる音。

子供の泣く聲。

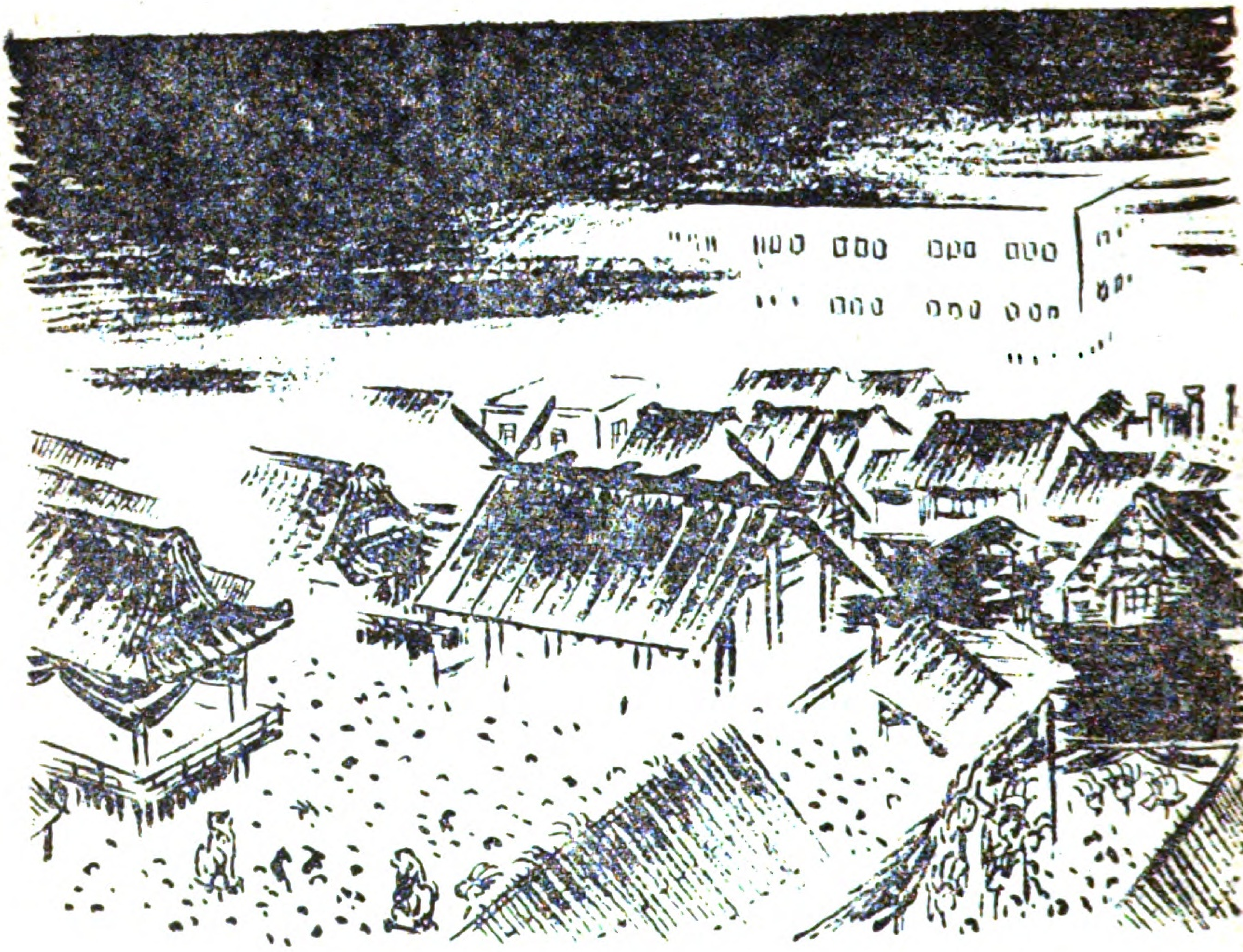
わたしたちはそのまゝ神樂堂の下を左へ切れた。わづかにその渦中から拔出すことの出來たわたしたちの行く手に立ちふさがつた熊手店。――五彩眩ゆい熊手店。――狹い道を距してずらりと兩側に立並んだその店々の小屋がけの光景こそむかしに變らない光景である。むかしながらの可懷しい光景である。――わたしたちは……すくなくもわたしは、その瞬間、電車をわ

すれ自動車を忘れた。——今を人の出さかりとたゞもうわめき立てる商人達の聲をいつそ夢みごゝちに私は聞いたのである。

が、「うれしかつたもたつた半時の」の、さうしたわたしの心もちはすぐ冷え返つた。「檢査場の門」から吉原の廓内へ入つたことによつて慘めに冷え返つた。なぜならそこに「天柱くだけ地維かくるかと思はるゝ笑ひ聲のどよめき」も感じられなければ「さつさ押せ〳〵と猪牙がかつた言葉に人波を分くる群」もみ出されなかつたからである。「河岸の小店の百囀りより、優にうづ高き大籬の樓上まで、絃歌の聲のさま〴〵に沸き來るやうな面白さ」のさうした光景を廓内のどこにもわたしは求めることが出來なかつたからである。——たつた一けん、大門に近いとある引手茶屋の店さき、閉めた障子の硝子越しに一人のお酌の太鼓を火鉢の上にかざしてゐるのをみた以外には、三味線の音、太鼓の音一つわたしは聞かなかつた。座敷へいそぐ藝奴のすがた一つわたしはみなかつた。

これよりさき「檢査場の門」へ入らうとする際で道は二つにわかれる。一つは「吉原」へである、一つは「公園」へである。大鷲神社の境内を流れ出た人たちは原則としてその前のものをとるべきだとわたしは信じてゐた。すくなくもわたしの子供の時分にはさうした「慣例」が作られてゐた。が、いまはもうさうした「原則」も「慣例」も無力になつたことを、その證據を、昨夜まのあたりわたしはみた。わたしたちのやうにそこからそのまゝ「檢査場の門」へ入るものは實にそのうちの三分の一、いゝえ、もつと少いかも知れないあとはみんな有無なく「公園」のはうへ流れ去る群集だつた。——しかもそこには、中ぞらは張りわたされた一本の綱の眞ん中に「公園近道」さうした文字の、墨痕淋漓、夜目にもしるく書きなぐられた紙片のしづかにしら〳〵とぶら下つてゐることを誰も不思議と感じないのをどうしよう……

『たけくらべ』の出來たのは明治二十七年から八年にかけてゞある。明治二十七年といへばわたしの六つのときである。「角町京町處々のはね橋より」とあるやうに非常門の外でさへなほ刎橋の行きかひだつた時分である。だから「何とみるべきだらう、われわれ、この光景を?」とさうは正面を切るもののその光景をわたしたちの知らうわけがない。でも物ごゝろがついてからは毎年缺かさず書入にして(といふことは、どこにもこれといふ遊び場所をもたなかつたそのころの淺草の子供たちは、正月を除いて、夏は三社の祭禮と富士市、冬はこの酉の市と年の市とをどんなことででもあるやうにその月の近づくのをそれぞれたのしみにしてゐたのである)あるひは親たちと、あるひは



店のものたちと、やゝ長じては友だち同士、必ずわたしたちはその人込のなかへ揉まれに行つた。だからそのころのことはわりとはツきりした印象をわたしたちは殘してゐる。——それだけわたしたちにすると、大鷲神社の境内ほどのことはなくつても、とても仲の町、押しツ返されるまでもたやすく通り切れることではあるまいとおぞくもさう思つたのである。——いいえ、「張見世」だの「積夜具」だのといつたもののあつた時代のことをおぞくもわたくしたちはおもひ浮べてゐたのである。

折からの御大典奉祝、廓の中にはどこにも紅白の布で卷いたはしらが立ち、花暖簾といつた感じの、天地を紅と淺黄とで染めた鶴と龜との模樣の幕が結ひまはされ、そのうへに提灯の火があかるく照りはえてゐた。さうして仲の町には、市松の油障子、雪洞、青竹の手摺。——丹精を凝らした菊の花壇が出來てゐた。——が、いへば三々五々、何の混雜もみせず、おもひ〳〵のしづかな歩みを運んで行く人影は、それ〴〵のその人かげは、あまりにその華やいだ光景を裏打しなさすぎた。——といふことは、その空しい、白け切つた、浮足立つた感じの行きかひの中に、その花壇の菊のいろは褪せ、下葉は枯れ、茶屋々々の門の番手桶の濡れは乾いた。——あかるい燈火のかげをふいてわたる冷めたい夜風をわたしは感じた。

……忘れられた吉原よ

三

わたしたちは角町の非常門を千束町のはうへ出た。――おはぐろ溝がなくなつて幾年、その代りともみられた千束堀（その大溝にさうした名稱のついてゐたことをつい最近までわたしは知らなかつた）も覆蓋工事が施されて暗渠になつたいまでは、そこはたゞ、いたづらにだだつ廣いだけの往來をよこたへた、無味な、とりとめのつかない裏通りになつた。（曾て、その、蓋をした溝のうへに青いものを植ゑる計畫のあることをわたしは聞いた。が、間もなくまた、さうした器用なことの出來るわけのものでないことが分つて止めになつたといふことを聞いた。眞僞は知らない）が、まだ、そこのさうした往來にならないまへから住んでゐる人たち、たとへば竹細工だの、袋物製造だの、帽子の洗濯だの、自轉車の修繕だの、あるひは比雛屋だの、建具屋だの、せんべやだの、つつましく、寂しく、決して榮耀を望むことなしにその毎日を送つてゐる人たち（ここに限つての光景ではない。が、すぐその眼のまへにそそり立つてゐる廓内の大きな建物に對して何といふこれが不思議な取合せをみせてゐることだらう。）に立交つて、このごろ、暖簾を下げたり、ビールの瓶を棚の上に並べたりしたやうな小料理屋のちらほらそのあたりにみえ出して來たことをわたしは何とみたらいいだらう？ 勿論その暖簾のかげに、棚のまへに、白粉の厚い女たちが立つたりすわつたりしてゐるのである。――心許ないのは、半年あと、一年さきである……

わたしたちはすぐその往來を左へ切れ、おでんやだの汁粉屋だの、煽情的な眞つ赤な提灯（いかにそのいろの所柄の夜寒さをおもはせること よ）の下つてゐる細い道を表通りへ出た。――わたしたちはみんなまだ夕飯を食べてゐなかつた。――さればこそどこへ行かう何をたべようと、わたしたちは、そこもまた區劃整理の完了して以前とはみ違へるやうに廣くなつたその往來を、前方から後方から間斷なく來る自働車のヘッドライトを避け〳〵熱心に評議した。

やがてその評議の仲見世の「食川」といふことに決着し、それたら少しいそぐ必要がある。あすこのうちは店を閉めるのが早い、さうしたことをさへお互のいひかけたとき、急にわたしの連れの一人は嘆息するやうにいつた。

『お酉さまの歸りといへばだまつてむかしは大金だつたもんだがなア。』

と、おなじくわたしの連れの一人はすぐそれに同じた。

『あのうちさへあればいさくさはないんだ。』

……といふのはいふまでもなく周圍の「大金」のことである。公園裏にあつたあの古い鳥料理屋のことである。もと淺草五けん茶屋の一つ。黒い塀をたか〴〵と贅澤にめぐらした。矮柏の影のしづかに澄んだ。やゝ深い入口への敷石のつねに清く打水に濡れてゐたその表構へについてだけいつても。わたしたちは「古い淺草の黄昏のやうなみやびとおちつき」とを容易にそこにみ出すことが出來たのである。一ト口にいへば江戸前の普請。江戸前の客扱ひ。瀟洒な。素直な。一トすぢな。さうしてけれんといふもののゝ。すべてのうへに。それこそ兎の毛でついたほどもみ出すことの出來なかつたそのうちの心意氣は。空氣は、どういふ階級の、どういふ育ちの人たちをでも悦喜させた。さうしたうちをもつことを「淺草」のほこりとさへわたしは思つた。——が。惜しくも震災でそのうちは燒けた。——そのまゝそのうちはわたしたちの前からすがたを消した。——古くゐたそこの女中の一人に。その後。築地の「八百善」でゆくりなくわたしは邂逅つたりした。

『行かう。ぢやア大金へ。』

二人にこたへてわざとわたしはいつた。——といふのは。もとのそのうちといかなる關係をもつうちか知らない。おなじ「大金」といふ家名の。もとのうちで調理したとおなじ種類のものばかり調理するうちの富士横町の裏通りに出來たことをわたしはおもひ出してゐるから……

が、それ以上わたしの説明する必要はなかつた。だれもその存在だけは聞いて知つてゐた。さうしてわたしたちの氣紛れはすぐその「金田」説をそのうちに搗替へた。——すなはちわたしたちは、それと一しよに。いまはたゞわづかにそこの交番の名栗にだけその名殘をとゞめてゐる「小松橋」を象潟町のはうへ急にまた左折した。——うつかりしてゐた間に雲はすつかり切れ、さえ〴〵とあかるい月の光は水のやうに空に滿ちてゐた。わたしは喜んだ。なぜなら熊手はもたなくつても、唐の芋は下げなくつても、黄金餅は買つて來なくつても、それによつて、その冷え〴〵とした「月夜」をえたことによつて「酉の市の歸り」といふその心もちをはツきり自分に背ふことが出來たから……「年の市」と雪である、「酉の市」と月である……

『が、いけない、もつと陽氣が寒くなくつちやアいけない。』

わたしの連れの一人はいつた。

『さうとも、もつと下駄の音が凍てゝ聞えなくつちやアうそだ。』

すぐまた一人が贊成した。

『そんなことをいつたら吉原に菊の咲いてゐるのが一番間違つ

てゐる。――あれぢやア秋の光景だ。――「冬のはじめ」でなくつて「秋の末」だ。』

それに對してまたわたしはいつたのである。「酉の市」といふもの、いまゝでわたしにとつて冬の來たといふ可懷しいたのしい告知以外の何ものでもなかつた。「酉の市といふ聲をきくと、すぐに霜夜といふこと、北風といふこと、火事といふことを誰もみんなを思ひ遣つた。」の「霜のいろと一しよに寒さは日に〳〵濃くなり、はう〴〵にもう夜番の小屋が立つてその時分から火事の噂が毎晩のやうに聞えだしました。――ことに今年は三の酉まであるから火事が多いといふことがいつものことで誰にも同く信じられました。」のといまゝで始終さうしたことを書いて來たわたしである……

本街道はいかほどにぎやかでも一ト足そこをわきへそれるとうそのやうにしづかになるのがさうした晩（「年の市」の場合でもさうである）の習ひである。象潟警察の角を一トたび富士横町へ入ると、月の光にうかんだ廣い道はたゞもう森閑とすみずみまで霜げてゐた。いッぱしもう更けたやうに火の番の拍子木の音ばかり高かつた。――間もなくわたしたちは、大ていこのあたりと當てずッぽうに曲つた細い道の、あかりのぼやけた、人通りの全くない中にめざすその「大金」の――以前のそのうちとは似ても似つかない恰好の、どう贔屓目にみてもむかしのそのうちの後身とはおもへない作りの、一ト坪に足りない土間のそのうへにすぐ階子口のみえる、淺い、むき出しの、ガランとしたその「大金」の門口をみ出した。――宵からまだ一ト組の客もなかつたらしい心弱さを、月の中、もり鹽のかげは衿くしづんだ。

わたしたちは三間ほどしかない座敷のその一つを占めた。わたしたちは、ごます、やまとあげ、やきつけ、さうしたむかしながらの言ひ方の、むかし可懷しいしな〴〵の運ばれて來るのをみながら盃をふくんだ。――しづかに、寂しく……で、わたしは、もう一度そこで「吉原」を思つた……

四

「……十二階のまへをつきあたつて左へ切れ、右へ曲ると、片側は幸龍寺の古い筋塀の、片側は幅六尺あまりの大きな溝のまへに、屋根の低い、同じやうな恰好をした小さな古家ばかりずつと立續いてゐました。――店に堆くがらくたを積んだ道具屋、古鐵をならべたふるがねや、襤褸屋、女髪結、かざり工場。――さうしたうす暗い陰氣な稼業のものばかりがその溝の上にかたちばかりの橋をわたして住んでゐました。」

わたしは併て『ふゆがすみ』といふ文章のなかにかうしたことを書いた。

「その家つゞきの盡きたところにやゝ氣ましな橋があり、そこを右へ入つたところに、狹くはあつたが、しづかな、おちついた、しめやかな感じの往來がありました。右手には格子づくりのしもたやが二三げんならび、左手には、めぐらした建仁寺のかげにいくつもの盆栽棚の出來てゐる植木屋の廣い庭と、古い、がつしりした格子をおもてに入れた三番組の仕事師の住居とが並んでゐました。――その往來の行きどまりは十二階の裏門で仰ぐと十二階のその巨人のやうなすがたがすぐその眼のうへに立つてゐました。」

……といふのは十二三の時分、わたしは、半年ほどその近所で毎日をくらした。――その時分、その仕事師のうちの前をまた入つたところの細い道にわたしの祖母の姉にあたる人が住んでゐた。わたしはこの人のことを「大きいおばアさん」と呼んで祖母につぐ好きな人としてゐた。その關係で始終わたしはそのうちへ入浸つた……とはいふもののそれに上越すもう一つの大きな理由は、その「大きいおばアさん」といふ人が、意氣な、華奢な、娑婆つ氣の強い人だつたゞけ、唄の師匠は來る、藝妓は來る、役者は來る、始終うちのなかは賑やかだつた。それがわたしにうれしかつた。「夜學」へ通ふのに近いといふことを理由にしてしまひには泊りつきりにとまり込んだ。――どんなにそれが親たちの機嫌をわるくしたことだらう……

「……馬道の學校から歸ると何をする間もなく夕方になります。あたりが刷かれたやうに暗くなります。――と、近所に用のあるものでない限り、でなければ松井源水のはうからの近みちの露次を拔けて來るものでないかぎりそこを往來するものといつては絕えてないその道のうへを――そのしら〳〵とした道のうへを植木屋の建仁寺について溝のうへの橋に出ると、吉原のおはぐろ溝のはうから來る水が、ことに雨上りでもあると、岸を浸して、深く、寂しく、おもひかさなるさまに流れてゐました。――その水に、そこの紺屋の店さきに咲いた夾竹桃の木綠らしい影をうつしてゐたのを昨日のやうにしかまだ思はなくつても、風はもうしみ〴〵と身にしみて、幸龍寺の、新谷町のはうまで長々とつゞいた塀も、塀の角に屋臺を出してゐる團子屋の葭簀つ張も、その葭簀つ張のまへに置かれた人力も、

すべて末枯の、悲しく眼をふせ額をふせた光景でした。――わたしの記憶にもしあやまりがなければ、空は毎日、日の目をみせずどんよりと曇つてばかりゐました。」

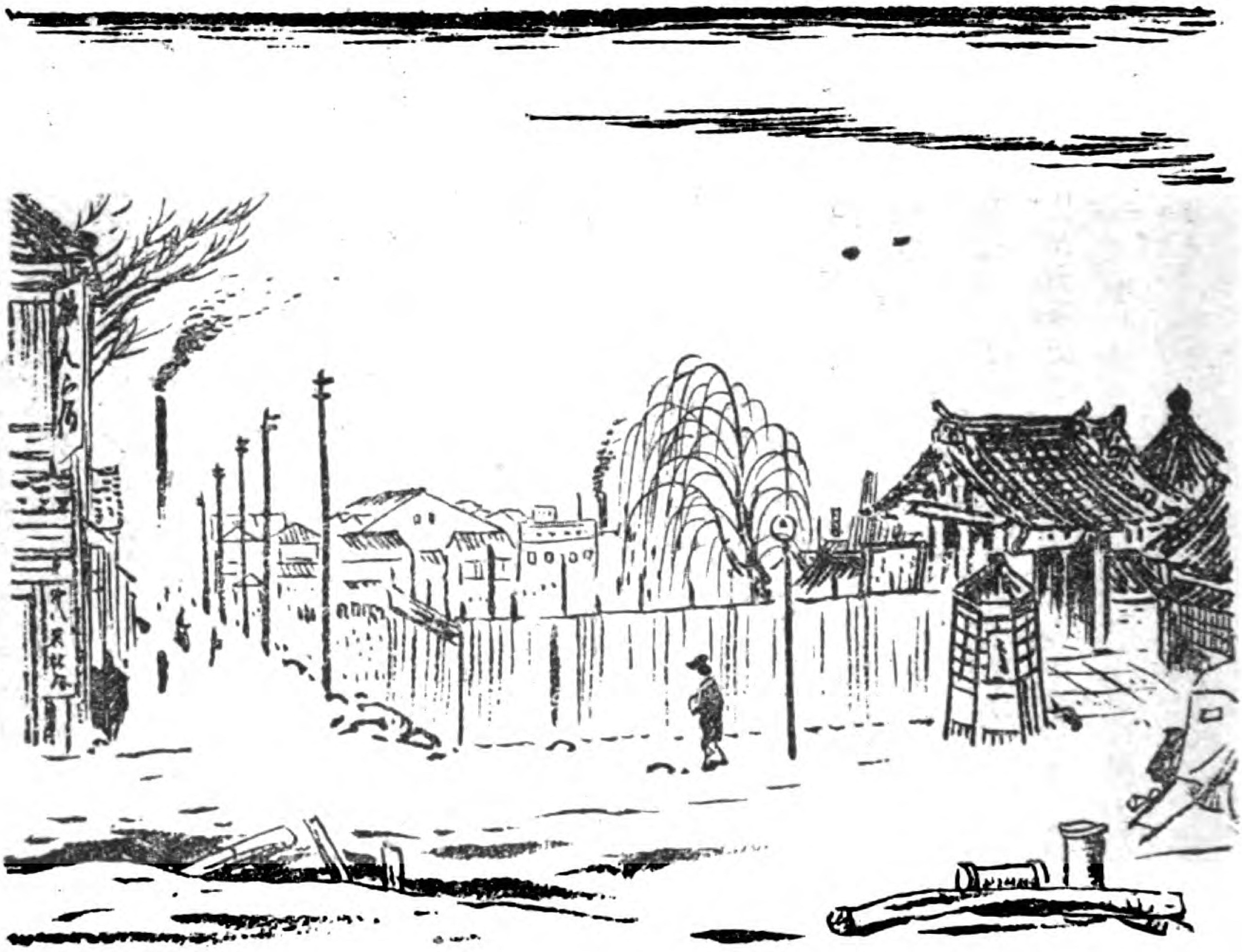
さういふそこは寂しい土地だつた。「眠つたやうな」とでもいへれば「生活力を失つた」とでもいへるすがたをした所柄だつた。さうしてその溝について眞つ直にどこまでも行けば、吉原の前記「檢査場の門」のまへにおのづから出られた。

さすがにもうその時分には一めんの田圃もだん／＼埋められ、以前のやうに太郎稻荷（『たけくらべ』の第六章「……鰐口ならして手を合せ、願ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて」畦路づたひに美登利の歸つて來る中田圃の稻荷とはこれである）の森もみ通しにはみえず、道の兩側に撰つた水田の影もすでにみられなくはなつたものの、すゝんでその「檢査場の門」のまへぐらゐまで行けば、田圃の名殘の、枯れ／＼になつた蓮池の夕ぞらのいろをしづめてゐるといつた風の光景を寂しくなほそこにみ出すことが出來た。

「夕飯をたべると、わたしは包みをかゝへて宮戸座の近くまで「夜學」にかよひました。包みの中にはナシヨナル讀本と論語とが入つてゐました。――すがれた菊の鉢のかげにほそ／＼と蟲の鳴いてゐる夕あかりのなかを、拔けみち傳ひに「米久」のまへの廣い往來へ出ました。――そのまへ通りすがりに荻野といふ酒屋のうちの友だちと石川といふ比羅屋のうちの友だちとをいつもさそひました。」

「宮戸座の近く」とさういつていへないことはないけれど、その毎晩「夜學」にかよつたさき、ほんたうをいふと宮戸座よりずつともつと手前のとある横町の露次の中だつた。もと淺草學校の先生でそのころ本所の江東小學校の先生をしてゐた三木さんといふ人のところへの通つたのである。江東小學校といへば亡き芥川君のゐた學校である、ことによるとだから芥川君もこの先生を知つてゐるかも知れないと思ひ、聞いてみよう／＼とおもひながらいつも忘れてとう／＼聞きはぐつた、惜しいことをしたと思つてゐる。

一しよにその「夜學」へかよつた仲間の荻野といふ男は第三中學を出たあと京都の高等學校の一部へ入つたが在學二年にして世を早くした。石川といふ男は、いまは他姓と名乘り、帝展派の聞えた畫かきになつてゐる。



「ほんたうにすればそこから千束町の通りをぐるつと廻らなければならないのを、土地つ子の勝手を知つてゐるまゝに近みちをして「草津」の裏の藝妓新道をわたしたちは抜けました。――行きは三人ですから何のこともなかつたものゝ、「夜學」の暗いランプの下で一二時間すごしたあと、待合せて同じ方角へ歸るものばかり六七人、その同勢で再びその新道を抜けるとき、必ずそのなかの一人が「草津」の離れの、ほの明るく燈火のかげのさしてゐる障子めがけて石をぶつけました。これと一しよに、わたしたちは、大通りさして一散に呼吸をもつかずに逃げました。――さうしたいたづらを毎晩のやうにつゞけました。」

「草津」といへば公園切つての大きな料理屋である。――「大きな」といふ意味は「資本主義的色彩のそれほど濃厚な」といふほどの意味である……

「……が、秋の深くなるにつれてそれもいつとはなし止みました。「草津」の離れにも燈火のみえない晩がだん／＼とふえました。――兩側にしつツこく立竝んだ同じやうな格子づくりの、土間のうへに下げた御神燈のかげがいたづらに白く更け、どこからともなく聞えて來る三味線の音じめがすでに來た夜寒

のさびしさを誰のうへにも思はせました。」

　そのころ「米久」の向う"ツ角に當時はまだめづらしかつた支那料理屋が出來た。「支那料理」といへば横濱しか思はなかつた時代である、必ずわたしたちはその「夜學」の歸りその店のまへに引ツかゝつた。なぜならその店のまへで賣る揚饅頭の白い湯氣が冬近い燈火のいろをいつも明るくつゝんでゐたから。――そこにはかけ聲いさましい「吉原通ひ」の俥の音が、狭い往來の上をれきろくと絶えず景氣よく響いてゐた。

　で、十一月は來た。――さうしたなかに「酉の市」の季節は來た……。

五

　そのあと三四年してゞある、いふところの「十二階下」といふ一區劃の出來たのは……

　これよりさき公園の中の、玉乘だの、劍舞だの、かつぽれだの、都踊だの、浪花踊だの、さうした「見世物」の一部にすぎなかつた「活動寫眞」がその前後において忽に勢力をえて來た。さうしてわづかな間にそれらの「見世物」のすべてを席卷し「公園」の支配權をほとんどその一手に掌握しようとした。と同時に「公園」の中は色めき立つた。新しい「氣運」は隨所に生々しい彩りをみせ、激しい、用捨のない響きをつたへた。――幸龍寺のまへの溝そひの町も、さうなるとまたゝく間に、「眠つたやうな」そのすがたを、「生活力を失つた」その本來の面目をたちまち捨てゝ、道具屋も、古鐵屋も、襤褸屋も、女髮結も、かざり工場も、溝を流れてゐた水のかげとゝもにいつかその存在を消した。さうして代りに洋食屋、馬肉屋、牛肉屋、小料理屋、ミルクホール、さうした店の告げるさまなく軒を並べ看板をつらねるにいたつた。――といふことは、勿論そのとき、その横町の、しづかな、おちついた、しめやかなその往來の、格子づくりのしもたやも、建仁寺の植木屋も、「三番組」の仕事師も、いつかみんな同じやうな恰好の小さな店。――それは嘗て「公園」の常盤座の裏、でなければ觀音堂の裏で念佛堂のうしろ、大きな椴の暗くしづかに枝をさし交してゐた下に限つてのみ出すことの出來た小さな店、……銘酒屋あるひは新聞縱覽所……にたち直つてゐたのである。

　その後また大きな火事があつて「公園」の大半を燒いた。「公園」ばかりでなくその火は「廣小路」の一部をさへ燒いた。――それまではまだ隅々に幾分でも「奥山」の相を殘してゐた「公園」がそれ以來根本から改まつた。すなはち猿茶屋がなく

なり、釣掘がなくなり、射的がなくなり、揚弓場がなくなつた。松井源水の齒みがきを賣る人寄せに、獨樂をまはしたり居合拔きをしたりすることも再びそこにみられなくなつた。――十二階株式會社の、餘興と稱して入場者に小屋がけの芝居をみせたり、最上階で甘酒の接待をしたりしだしたのもその火事以後である……

で、「公園」は、そこで完全な活動寫眞街になつた。――曰く電氣館、曰く富士館、曰く三友館、曰く大勝館、曰くオペラ館、曰く何、曰く何……

かくして可愛想に「千束町」は……つみも報いもない千束町といふ町は、浮氣な、惡性な、安白粉の匂の骨の髓まで浸込んだ町として天下に有名になつた。――さうして、それは、それ以外の存在の何ものでもなかつた……

六

と、震災である。十二階は十二階劇場……嘗てのかの小屋がけの餘興場から出發した十二階劇場を殘して亡びた。――が、幾ばくもなくいまの昭和座が出來、その十二階劇場もまたわたしたちのまへから永遠にそのすがたを消した。

『けど、では、十二階のあとはどうなつてゐる？……』

さう思つて今日……昨夜の今日である……晴れぬいてさびしい青空の下、いとほしく輝くあかるい日の中をわたしは御苦勞にも古なじみの幸龍寺のまへに立つた。――どうしてさう助かることの出來たものか、幸龍寺の門、燒けないでもとのまゝの……震災以前のむかしのまゝの、古い、大きな、すべり落ちさうな瓦屋根をもつたそれである。

そのくせ境内はみるかげもない。

その往來を……むかしのその溝ぞひの往來をあるくことはわたしにとつて決してめづらしいことではない。三月ほどまへにもあるいた、一ト月ほどまへにもあるいた、必要によつてつねにわたしはあるいてゐる。――が、つねは、いつもは、そこをあるくのが目的ではない。――それだけにわたしは、空にいつもみてすぎてゐたその往來のうへをしげ〲といまみ守ることによつて輕い驚きを感じた。――整つたからである、おちつきが出來たからである、ヒレがついたからである……

いゝえ、その家ならびのうへに。――町としてのそのいとなみのうへに……

といつて當年の洋食屋、馬肉屋、牛肉屋、小料理屋、ミルクホール、さうしたものゝげ怯げるさまなく立竝んだ光景を再びそこにみるよしのなくなつたわけではない、牛鳥御料理、鮮魚御

料理、酒場、喫茶店、カフェー（馬肉屋とミルクホールとはいまにして完全に「昨日」の存在になつた）さうした店々の、競つてその兩側に、それ〴〵のその看板をかゝげてゐることはむかしの光景にまさるとも劣らないものである。――が、いへばその家づくりに、飾りに、嘗てのやうな「衒ひ」がなくなつた。「焦慮」がなくなつた。……しかもそれらのその水稼業に立交つて自動車屋だの、ラヂオ商だの、なにがし金融事務所だの、さうした堅氣（この場合の水稼業に對してゞある）の店々のそこにさういふ適當な配置をもつにいたつたことが否むことの出來ない堅實感を與へてゐる。……それにはまた倍餘り廣くなつた道幅がさうした光景を許す機緣になつたこともたしかである……

狂躁な「新しい町」にも年月はふりつもつた。

わたしは藥屋と小料理屋を兩角にもつた「昭和通り」といふ狹い横町を入つた。そこがむかしの、しづかな、おちついた、しめやかなあの往來のあとに違ひないと思つたからである。が、そこには、こま〴〵した商店の、規則たゞしい平凡な羅列があるばかりだつた。

『こんなはずでは……？』

さう思ひつゝわたしはさきへすゝんだ。――と、わたしは、いつかその往來を出はづれてゐた。――いつかわたしは「米久」の通りのいそがしい通りの中に立つてゐた。

『此奴は……』

やゝ狼狽てゝわたしは引つ返した。――左へ曲れる道を發見して試しにそれをえらんだ。――飽つ氣なくわたしは昭和座の横へ出た。

縱横十文字。――整然とした十字路……

『さうかなア。』

ひそかにわたしは嘆息した。――分り切つた話の「十二階」のあとは「昭和座」になつたのである。――はツきりさういへばいゝのである。――よけいな心配をする必要はないのである……

ぼんやりわたしは踵を返した。――空は青く日のいろは澀い……

七

……が、わたしは失望しなくつてよかつた。入谷と田の宿とをつなぐ新開道路の、自轉車、自働車、貨物自働車のはげしい行きかひ。――その瀨戸の荒い波の中を乘越したとき、忽ちわたしは、いまゝでのあかるい日のいろの代りにしづかな月のひ

かりを感じた。しづかに可咲しい夕月の匂を感じた……

とは何か？

古着屋である、堅光地藏のほとりの古着屋である、そこに四五けんかたまつて並んだ「確實・正札附」の古着屋である。

その店さきに下つた双子縞、唐棧縞、御召縮緬。――黒八のいろのさえた絆纏、むきみや、丹前。――帶の獨鈷、獻上、平ぐけ、印絆纏、長繻絆。――その長繻絆の燃え立つやうないろにまじつた刺つ子、刺つ子、刺つ子絆纏……

その刺つ子である、刺つ子絆纏である。――その刺つ子絆纏の紺のいろの褪せである、その背を抜いた朱のいろの古びである、そのまた朱のいろをつぶした紺のいろの――その紺の縁のいろの情の強さである……

はツきりそこに「三の酉」のあくる日をわたしは感じた。すでに來すぎてゐる「冬」を感じた。淺草といふ土地を支配する「吉原」のいのちを感じた。――さうしてしづかに可咲しい夕月の匂を感じた。

「……通ふ子供の數々に或は火消鳶人足、おとつさんは刎橋の番屋にゐるよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにアレ忍びかへしを折りましたと訴へのつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねえと言はれて、名のりや辛き子心にも顔あからめるしほらしさ、出入りの姻家の秘藏息子寮住居に華族さまを氣取りて、ふさ附き帽子面もちゆたかに洋服かるがると花々しきを、坊ちやん坊ちやんとて此子の追從するもをかし、多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となづる黑髮も……」

……『たけくらべ』の第一章である。

八

……去年の暮である、「一葉とその大音寺まへ時代」を書く必要のため、馬場（孤蝶）先生におねがひして、龍泉寺町の、むかし一葉が一文菓子を賣つて住んだあとをわたしは連れてあるいていたゞいた。

馬場先生の、眞筆版『たけくらべ』の跋にお書きになつたところによれば、そこは、下谷龍泉寺町の三百五十八番地である。――すなはち龍泉寺町の交番の角でわたしたちは自動車を下り、そのまゝ馬場先生のあとについて電車通りを越し、角に大きな瀬戸物屋の店舗をもつたやゝ狹い往來へ入つた。さうして、左側の、とある酒屋の角の番地早わかりの揭示板のまへに立つて「三百五十八番地」をさがした。が、「三百五十七番地」はあつたが「三百五十八番」はなかつた。可笑しいと思つた。

とにかく「……五十七番地」まで行つてみることにした。――すなはちその掲示板の命ずるところによつてその角を左折した。

が、いくらさがしても「……五十八番地」はみつからなかつた。訊いても分らなかつた。……五十七番地」はその店たつた一けんの小さな自轉車屋へ入つて訊いてもそんな番地は聞いたこともないといふ膠もない返事だつた。

『いゝえ、こんな横町ぢやアなかつた。』

其とき先生はかういはれた。『とにかく眞つ直の通りだつた。』

何分古い事なのに先生も大事をとられたのである。大事をとられてまづ番地にたよられたのである。が、よく讀めば、げんに、その眞筆版『たけくらべ』の跋のあとのはうにでも「吉原遊廓の北西の西端は揚屋町の非常門である。その非常門のところから、西へ、即ち上野の方へ向けて大凡一町位來てからの右側の家であつた。」と、先生、はツきりさう書いてゐられる。――そこでまたわたしたちはもとの往來へ出、改めてその往來の突きあたりの揚屋町裏の非常門のまへに立つた。さうしてそこを起點として、西へ、先生の記憶をたどりつゝ幾たびかその往來を行つたり來たりした。――そこにすでに三十何年といふ月日の距りがあるばかりでなく、そのあたり明治四十二年の吉原大火のをりにも燒け、大正十二年の大震のときにも罹災をまぬかれなかつた場所だけに、さうした番地の存在のことによるともうすでにむかしの話になつたかは知らないが、それにしても樋口家の、位置としてこの往來の左つ側（揚屋町の非常門のはうへ向いて）といふことだけはたしかにいへる、はツきりさう先生はいはれた。

このごろよくある例の、土地の整理から來る番地の組替へ、さうした都合でことによると、大きにいま行はれてゐるものはこのごろでの新しい番地かも知れないとも疑つてみたり、揚屋町裏の非常門といふのは京町裏の非常門の間違ひではないかといふ説を立てゝもみたり、さうでもないもしやと、もう一度その界隈に住む人と一しよに以前のその「……五十七番地」の自轉車屋のまへに引つ返してもみたりしたあと、あねぐつくして、ものは試しと連れの一人が交番にぶつかつてみた。――と、交番の返事はきはめて簡單だつた。「三百五十八番地」なら表通りの肴屋の並びだと有無なくたゞさういふのだつた。が、その肴屋のもつ番地は「……五十八番地」でなく「三百六十八番地」だつた。しかもそこなら、先刻から、その十番違ひをうらめしくながめながらわたしたち幾たびとなく無駄にそのまへを行つたり來たりしてゐたのである。――全く私たちは失望した……

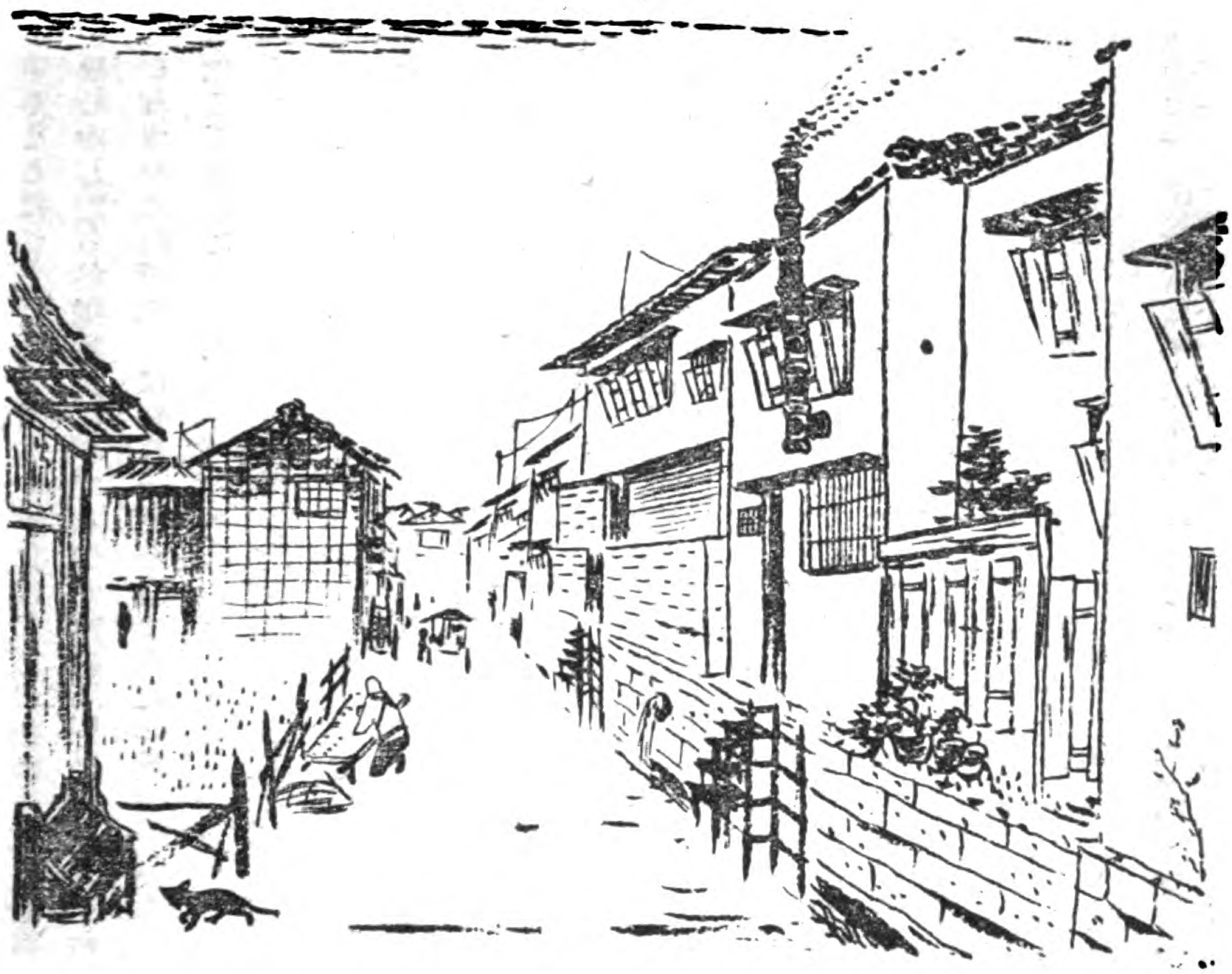
と、急に、わたしたちのもう一人の連れのすがたがそのときみえなくなつた。どこへ行つたかと思つてゐるとすぐそばの煎餅屋の店から出て來た。その人の機轉がそのあたりでの最も古い居住者をその人に訊き出させたのである。それによると、そ

のあたりで、二けんある酒屋のどつちかゞ最も古いとされてゐるといふことだつた。そこですぐ手分けして、その一人は最初にそのわたしたちが掲示板をみて立つた角の酒屋をあたり、わたしともう一人の連れとはもう一けんのはうの伊勢屋といふ店をあたつてみることにした。

が、何としても雲をつかむやうなたづねごとである。何といつて訊いてい丶ものかと思案した。結句、わたしは、以前さうした古い店があつたと聞いたがと前置して石橋の田村やの所在をまづ訊いてみた。主婦とみえる五十恰好の人がそれならあの時計屋のあるところがさうだと、反對の側の、やゝ揚屋町のはうに近い見當をすぐさし示してくれた。つぎに上清の所在を訊いた。同じく反對の側の、その時計屋よりやゝ手まへの葛籠屋がそのあとだと敎へてくれた。――厚く禮をいつていさんでわたしたちは馬場先生のそばへ引つ返した。

石橋の田村や、上清、ともに『たけくらべ』の中に出て來るその界隈の店舗（みせ）の名まへである。すなはちあの「春は櫻の賑ひよりかけて」のくだりの「……赤蜻蛉（あかとんぼ）田圃に亂るれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ。朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懐爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく」とありその「上清」と「田村や」である。――くはしくいへば田村やは龍泉寺町百四十七番地、上清はおなじく百四十四番地……いまその時計屋と葛籠屋との占めてゐる位置からいつてわたしははツきりさういふことが出來た。――といふことは田村やと上清との所在のしかくあきらかになつたことによつて、先生の記憶の「眞つ直の往來の左側」といふことのいよいよわたしかになつたとゝもに、いへばその十番違ひの「三百六十八」といふのがほんたうの番地で、延いてその伊勢屋といふうちの、肴屋の並び四五けんだけを同番地とすれば、まさしくそれは日記『塵の中』に「左隣りの酒屋なければ……」とあるその「左隣りの酒屋」である。急にすべてがばた〳〵と解決した。すなはちその伊勢屋の右隣の「鈴音」といふ乾物屋にわたしたちは長い間の念願の『たけくらべ』の作者の住んだあとをみ出すことが出來たのである。

……堅光地藏のまへを去つたあと、一年ぶりでわたしはその龍泉寺町三百六十八番地を訪問したのである。あとになつてみれば、そんないまさらのやうな騷ぎをしなくつても、その眞筆版『たけくらべ』よりずつともつとまへに出てゐる『一葉全集』後編の跋をみればちやんとさう「三百六十八番地（こゝ）」になつてゐるのである。そればかりでなく、もつとよく此方に下讀（したよみ）が出來てゐれば、おなじその「春は櫻の賑ひよりかけて」のくだりの「……つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶこと此通りのみにても十五輛と數へしも」とある描寫の日記『塵の中』に「一昨日（をとゝひ）の夜彼が門通る車の數をかぞへしに十分間に七十五輛成けり、これをもつてをしはかれば一時間には五百輛」



通るべし、吉原かくて知るべし」とあるのから出てゐるのに徹してもそのうちのはツきりさう表通りに面してゐたことはすぐ分つたわけなのである。下司の智慧はあとからでいまとなつてみればキマリのわるいことだらけである。――さうしたことを思ひながら、そのとき以來はじめて、久しぶりでわたしは角にその大きな瀨戸物屋の店舗をもつやゝ狹い往來をめがけてあるいたのである。――が、一年のうちに、わづか一年のうちにこれはまた何といふ變り方だらう！　去年まだ、わづかにその指さきだけしかみせてゐなかつた「區劃整理」が一年のあひだに全くその手を擴げ切つたのである。――といふことは、「やゝ狹い往來」の道幅は舊に倍して決してもうそんな去年のやうな「狹い」といつた感じをかんじさせなくなつた。さうしてそのわたしたちが三島神社のはうから入つてそのまへで自動車を止めた、あぐねつくしてものは試しと改めてその番地を訊きにぶつかつた角の交番は、そこもまた以前よりだゞツ廣く擴つた電車通りのコバのそろつた家並の間にそのかげを潛め、「田村や」のあとの時計やは去年と同じ店つきをみせても「上淸」のあとの葛籠屋伊今年はもうそこにその所在を消してゐた。――可懷しくそのは勢屋といふ酒屋の店の中を通りすがりに覗いたとき、去年それらの店の所在をわたしに敎へてくれた其うちのおかみさんの、去年と同じ前垂形で、並んだ樽のまへに立つてぼんやり外をながめてゐるのをわたしはみ出した。――田村やを知り上淸をお

ぼえてゐるその人にとつてこの變りつくした町の光景……さういつてもそこは、わたしが覺えてからでさへ、いかにも廓の裏らしい感じの、暗い、陰氣な、悒鬱な、そのくせどこか時雨氣のしみ〴〵した町だつた。……は果してどう感じられるだらう？——もし生きてゐれば、一葉も、明治五年の生れだから今年五十七の、ちやうどこのおかみさんぐらゐになつてゐるのである……

　わたしは揚屋町裏の非常門につきあたつて左へ曲つた。さうしてきた江戸町裏の非常門のはづれを右の切れた。——そここそ、わたしの、はじめて『たけくらべ』を讀んだとき以來、「仲の町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寢の床にと何ならぬ一ふし」のあはれも深く三味線の音とゝもに落ちかゝるやうに聞えて來る土手下の細道ときめてゐるわたしの大好きな道である。信如が「昨日も今日も時雨の空」に田町の姉のところへ長閑着をとゞけに行つたのもその道なら、「假初の格子門、のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖垣しほらしう見えて、緣先に卷きたる簾のまきも」なつかしい大黑屋の寮の存在したものその往來のどこかの部分とむかしからわたしは固くさう決めてゐたのである。——またさうわたしに決めさせるに足る風情をそのお齒ぐろ溝にそつた、狹い、寂しい往來はもつてゐた。——二階のそそり立つた廓の中の大きな建物とまへに並んだしづかな生垣つづきの家々と……ことにそれが晴れた冬の午前でゞもあると日の光のいとゞ澄んだ中に山茶花のかげがやさしく匂つて飴屋のちやるめらの音がどこにともうすら哀しく纏つてゐた。さうしてそのあたりうそのやうに人通りがなかつた。——しかも一ト足土手へでれば眼もあけられない「浮世」のゆきかひがはげしくそこに織り出されてゐたのである……

　が、それも震災ずつとまへまでの光景だつた。お齒ぐろ溝がなくなり刎ねばしがなくなつてそこの風情のあらましは消えた。——刎ねばしの名殘の小刻みの段々にいたつては汐の退いたあとのどんな棧橋でもこれよりはわびしい感じ與へないであらう。

　ことに震災後、——いゝえ、震災後もしば〳〵わたしはその道を通つた。通つてはひそかに返らないむかしの光景と偲んだ。——だから、何も、今日にかぎつてのさうして慘めさではないのだが、それにしてもこの……何といふこの荒廢の仕方だらう！うちつゞいた古い煉瓦塀、そのかげに力なく枯れて枝を張つた無花果、不細工にうちつけた窓の目かくし、捨車、さうしていまいつた刎ねばしの名殘の間に合せの段々。——これが吉原の外廓の一部である。……生垣のつゞいた背ての片つ方の側はほとんどまだ空地のまゝの、をりからの夕影に、遠くたゞ灰いろに擴つた廣さの末とつぎの往來に立並んで小さな家々の燈火のいろがさむ〴〵と霞んでゐるだけだつた……

　先刻よりずつと濃くなつた月のかげを仰ぎつゝ土手のはうへわたしはあるいた。（未完）

新支那訪問記

村松梢風

南京（二）

新都建設

劉紀文といふ政治家がある。南京の市長である。劉君は今年卅七歳で、初め日本へ留學して法政大學を卒業し、更に英國へいつてケンブリッヂ大學で專ら都市計劃を研究して來たといふ。

國民政府では南京に特別市制を施行して、この首都を全然新らしく改造しやうといふ大事業に着手してゐる。北京といふ完成の極致に達した東洋の模範的首都を拋棄して現在では一大廢墟に等しい南京城内に彼等自身の力で理想的首都を建設しやうといふのである。そこで無數の新らしい計劃が生れたり突飛な政治が施かれたりしてゐる。彼等の理想は、其處に外觀的新都市を造り上げるばかりではなく、精神的に國民革命の意義と共の効果とをそれによつて表現しやうといふのだ。或意味では、否、殆ど全き意味に於て新首都南京の建設事業の成否が現在の國民政府の實力及び運命を證據立てる結果となるだらう。だから此の事業は各方面から非常に重大視されて居り、現政府の人々はそれ〲努力もしてゐるやうだ。此の秋にあたつて、南京特別市政府第一期の市長に選任せられた劉紀文といふ人は相當出色の人物であるには相違ない。曾て、孫逸仙も、軍事は蔣介石、都市經營は劉紀文と云つたほど此の人を信用してたさうだ。

或人が私に向つて「劉紀文は一枚の地圖と一本の物指とであれ丈の仕事をしてゐる」と、半ば讃嘆的、半ば嘲笑的口調で云つた。劉市長は暇さへあれば卓上に南京市の地圖を擴げて眺め

てゐる。其の時彼の頭腦に或る計劃が閃く。すると彼は直ちに地圖の上に二つの點を打つて、其の二點に物指を當てゝ一直線を引く。それから屬僚を呼んで

「今度此處へ新道路を附けるのだ」と命令する。

其の線上にどんな障害物があるかといふことは劉君は全然考慮に入れてゐない。彼はたゞ自己の都市計劃上の天才だけを信賴してゐる。處が不幸にも彼の引いた線上には軍隊の營舍があつたり、官衙があつたり、古い寺があつたり、多くの民家が必ずある。それらの建築物の使用人や住み手に對して市政府から一週間以内の立退命令が發せられる。南京市民に向つて何が恐いかと尋ねて見たら市政府の立退命令だと答へるに違ひない。立退き命令が出たが最後一寸の用捨もない。期限が來ても立ち退かずにゐると憲兵隊を派遣して家主を捕縛して牢屋へ叩つ込んだ上に家財道具を沒收してしもふ。厭も應もない。だから命令を受けるが否や行き先のある者も無い者も顚へ上つて逃げ出してしまふ。尤も家屋の破壞料及び移轉料として一戸について金五圓也を下附される。讀者諸君は私の原稿が五の字と圓の字との間に脫字があるだらうと思ふかも知れないが脫字でも誤植でもない、正に金五圓である。南京がいかに物資が安くても五圓では家は建たない。どんな大商店でも大邸宅でも一列一體五圓で追つ拂つてしまふ。海軍の司令部だとか國民政府の官衙だとかいふ物になると住み手が住み手だから人民のやうにオイソレと立ち退かない。必ず「此處だけは困る」と云つて來る。けれども劉市長は承かない。

「軍隊や役所なら猶更早く立ち退いて人民に範を示して貰ひ度い」即日人夫を繰り出してドシ／＼役所を破壞してしまふ。軍人だらうが役人だらうが机を抱えて逃げ出さなければならない。

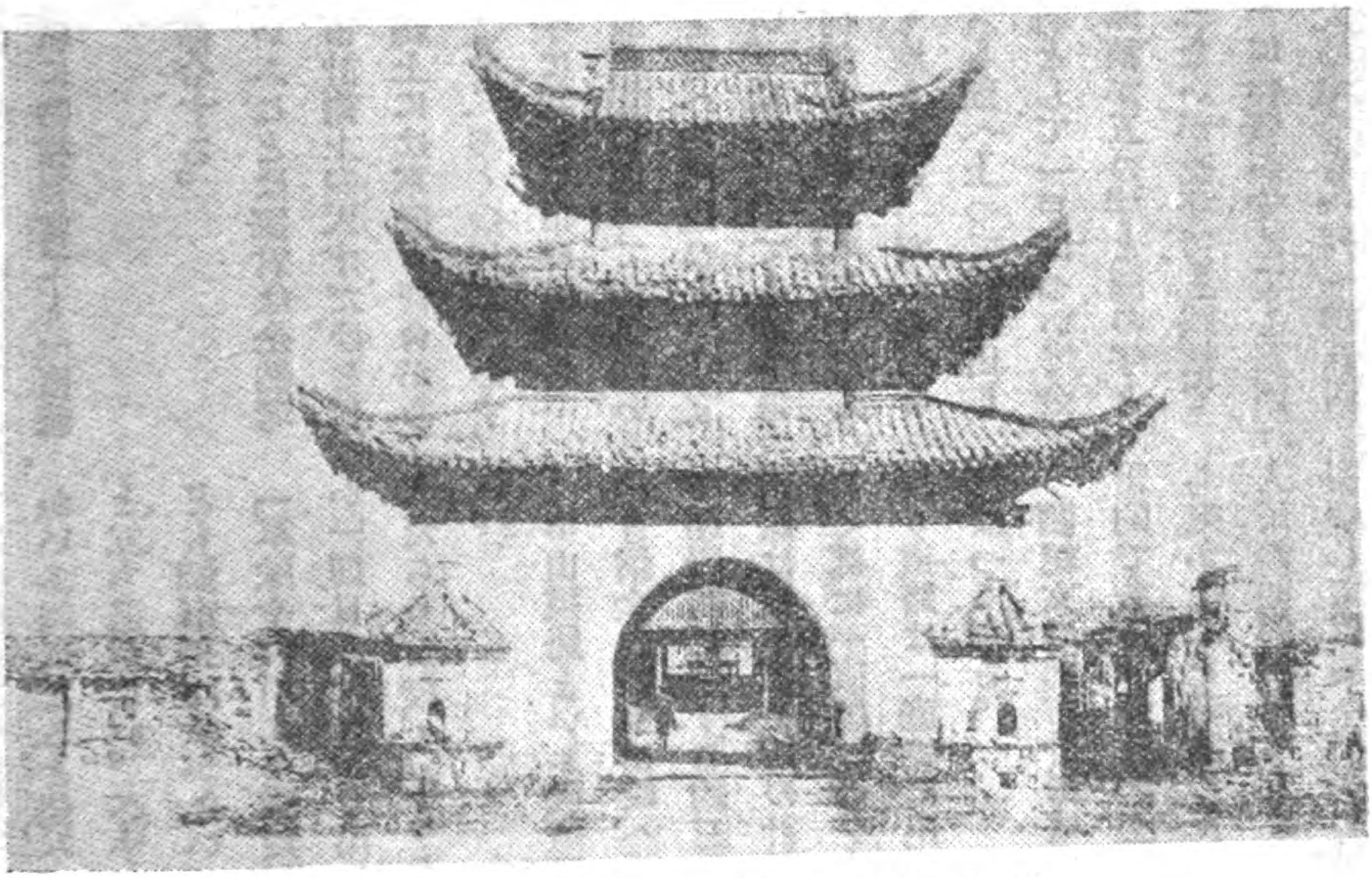
中山道路といふ大道路が出來た。これは孫中山の遺骸を鎭むべき紫金山の中山陵へ通ずる道路だが、下關（シャークワン）から城内を貫通して朝陽門に達する約三里の間二十間幅の道が附いてゐる。此の道路は途中二ケ所の計劃的屈折をしてゐる以外は一分一厘狂ひなく眞に一直線につゝ走つてゐる。市長の物指が曲つてゐない限り道路は一直線に出來る。道路もかうなると一種の豪快味が加はつて來る。

劉紀文の都市計劃はすべて左樣に幾何學的であり且つ疾風迅雷的である。最近寒空に向つてから劉市長は更に巧妙な人民立ち退かせ法を考案した。それは立ち退きたいにも行き先の無い人民が期限が來てもまご／＼してゐると、市長自から消防夫を引率して現場へ出張し劉君自身ホースの筒口を持つて家の中へ

水をぶつ掛けるのである。どんな強情な人間でも頭から水を掛けられては堪らないから這々の體で逃げ出した處を忽ち屋根も壁も取壞してしまふ。「餘り殘酷ではないか」と或人が劉君に云つたら「否、縛つて牢へ入れるより此の方が慈悲である」と答へたさうだ。讀者もおそらく此の話を信じないだらうが私も最初は噓だらうと思つた。處が誰に聞いても事實である。

住むに家無く、生活の道を奪はれた市民の中から首をくゝつて自殺する者が近來頻々として現はれ始めた。乞食になつた者は更に澤山あるだらう。

劉市長のヤリ方はすべてかういつた風でよく云へば剛毅果斷だが惡く云へば無法とも亂暴とも云ひやうがない。一般市政に對してもすべて其



貢院（今は南京特別市政府）

の態度である。例へば日本の新聞にも傳へられたが藝娼妓の禁止にしても實に徹底的で、市政府が布告を發するが否や數百軒の妓館に對して即日營業禁止を命じて其の間何等の假借がない。現在南京には一軒の妓館も一人の藝娼妓も居ない。全部追放されてしまつた。往年日本でも西久保警視總監が淺草の銘酒屋に立退きを命じたことがあつたが到底あんな生ぬるい程度ではない。かういふ高壓的政策を市民が喜ばぬのは無理はない。從つて市民の間に劉市長の評判が良くないのは當然だ。然し、一方には劉君の支持者もある。革命政府の新首都に市長となつて有らゆる情弊を打破して理想的都市を建設しやうとするには

是れ位の元氣がなくては駄目だと云ふ人もある。

處が、前に述べたやうに路頭に迷つた市民の中から頻々として自殺者が現はれ始めたので近來非常な物議をかもしてゐる。人道的立場から批難するのは勿論であるが、同時に政策的にも劉市長を排斥する聲が起つて來た。

私は或時現に國民政府の要路にゐる某氏に向つて南京の土地及び家屋の問題について質問したことがあつた。それは南京が首都と決定して以來異常な繁榮を示してゐるにもかゝはらず、目下の處では土地を買ふ者や家屋に投資する者が殆んど無い。例へば貸家が乏しくて從來二三十圓位の家賃で貸してゐた家が八九十圓に騰貴して而も敷金千圓を要求する現狀だから資本家がドシ／＼家屋を建てさうなものだがそれをしない。同じ意味で土地の思惑買ひをする者が澤山現はれさうなものだが事實は餘り無いといふのはどういふ理由に基くのであるかといふことを私は尋ねたのだつた。すると其の人は直ちに、それに對して四つの原因を列擧して私に說明した。

第一の原因は即ち南京市政府の方針が餘りに脅迫的であり暴力的であること。第二は國民政府の土地平均策。第三は政局の將來不安定。第四は（是れは餘り重大な原因でないと斷つた）南京土着民の經濟力の不足。

第一の原因は無論劉市長の責任問題だ。折角地所を買つたり家を建てたりしてもいつなん時金五圓で叩き潰されるかもわからないといふ不安。第二の土地平均策は孫文政策の一つで現に着手しつゝある。其の方法として、現に土地を所有してゐる者は其の價額を申告登記させる。而して將來其の土地の價額が騰貴して是れを他人に賣る場合には登記價額以上の分は政府で是れを沒收する。要するに土地買占めを防止する政策だ。第三の政局不安定は說明の必要がない。かやうな次第で不安の原因が數々存在するがために、上海邊の大資本家も南京へ固定的に投資することについては未だ多大の危險を感じて躊躇してゐる。されぱといつて土着の南京市民は積年の疲弊からまだ救はれる時期に達してゐないから金が無いといふ現狀だ。

いづれにしても市政府が現在のやうな政策を行つてゐる間は南京へ投資する者はない。それでは發展の見込はない。劉紀文氏の方針が一面に於て新首都建設事業を阻害しつゝある。個々の人民の生活を蹂躪して道路計劃ばかり立てたところでそれでは何にもならないではないかといふ議論が起つて、即ち劉市長を排斥する理由が生じる。消息通の言葉に依ると馮玉祥一派が特に劉氏を排斥して其の代りに自派の者を市長に据ゑやうとしてゐるなどとも云ふ。

かういふ風で幾分形勢が面白くなくなりかけたところへ、最近更に劉君が莫迦に評判を落した事實がある。彼は最近許淑珍女士といふ素的なハイカラ美人と結婚したが、盛大な披露を行つたうへ相携へて新婚旅行に出掛けたまゝ香港あたりで遊んでゐて一月餘も歸つて來ない。南京建設の大責任を双肩に擔つてゐる市長ともある者が市政府の椅子を一月以上も空虚にして女房の愛にうつゝを抜かしてゐるとは怪しからんといつたやうな岡焼きまじりの攻撃が始まつた處へ、おまけに彼は鼓樓の附近へ最新式洋風の住宅を新築して新婚旅行から戻つて來れば其の新邸へはいるといふことを新聞が報導した。新聞も明かに反感を示して其の記事の終りに「此の家で愛人許淑珍と二人で公餘の暇を優遊することであらうが、其の娯みはまさに喩へがたいものがあらう、これを家を破壊され棲むに地の無い市民に比較すると、苦樂眞に天地霄壌の別がある」と云つて揶揄してゐる。彼が職務を放擲して一月も新婚旅行から歸つて來ないところを見ると既に辭職の意志があるに違ひないなどと尤もらしく宣傳してゐる者もあつた。

劉君が辭職するかしないかそれは私の關するところでないが、劉紀文なる一市長のとりつゝある政策が現下の南京の狀態を最もよく說明するものだと思ふので彼の紹介をつとめたのである。劉市長の方針に對しては賛否が岐れるにしても、大體としては其の政策が現在の國民政府の首都建設方針を代表してゐるものと見て差し支へはない。

考試院長戴天仇氏とは幸ひ東京で一面識があつたので私は或日先生を訪問した。考試院はまだ實際上の仕事はしてゐない。」羊皮巷（ヤンピーシャン）といふ處の、昔は金持の住宅でもあつたらしい純支那式の古風な家が考試院籌辦事處で同時に戴先生の住居になつてゐた。一番奥の棟の客室で戴季陶氏は朝の七時に卓上に線香をたきながら藥湯らしいものを飲んで、例のねばりのある口調で新都建設の抱負を語つた。

「上海、漢口は自然にああいふ風に出來上つた都市である。廣東はやや計劃的に造られてゐてあの土地は山が無くていい町だが要するに香港の模倣に過ぎない。民國時代になつて支那に於て計劃的に造られた都市は一つもない。それでわれ〳〵は南京を國都として恥しからぬものに造りたいと思つてゐます。こんな殺風景な野原みたいな土地がどうして立派な町になるかと云ふ人もあるが、たまじ何も無いから仕事がやりいいと私達は考へてゐる。とにかく來年一杯には道路だけは目鼻がつくでせう。大通りの家屋は内部はとにかく外觀は東洋建築を採用する方針です。しかし是れは造形美術の上から云ふと六ケ敷い問題で東

洋建築が果して新時代の商館や何かに適するかどうかやつて見なければわからないが、少くとも一見して東洋の都、支那の首都だと思はせるやうな町を造りたいと思つてゐるわけです。私達は今後十年間に理想的都市を造り上げる見込みで一同努力してゐる。そして所謂江南全盛時代を復活してみたいと思つてゐる」

私も戴天仇先生の所謂江南全盛時代が一日も早く實現されんことを衷心から祈つてゐる。此の儘國民政府の基礎が安定して行けば其の理想は案外手易く實現されるかも知れない。

舊物破壞

私は民國十二年の春この南京へ來たことがあつた。それから五年半經過して今度は秋の終りを二週間餘り南京で過して見た。其のことを南京の人に話すと

「舊遊と再遊の感想を聞き度い」と誰でも云ふ。

「大變、變りました」と私は平凡に答へる。

「どんな風に變りました？」

「先年私が南京へ來た時、南京の黄包車（ワンポウ）はみな心棒に小さな鈴を附けてゐました、それが走る時リン／＼と微妙な音をさせました、然るに今度來て見るとそんな物を附けてゐる黄包車はなくなつてしまつた」

私がさう云つて話すと聞き手は「何だ詰まらぬことを」といふ顏をする。けれども私は其の鈴の音が懷かしいのである。

變つた物は黄包車の鈴が無くなつたばかりではない。あらゆる物が變化しつゝある。が、要するに黄包車から鈴をとつてしまつたやうに、古い物、優美な物は破壞されつゝある。懷古氣分や感傷癖は革命には大禁物だ。あらゆる舊き物を破壞して新しき物を建設するのが革命である。然し現在の南京は破壞の跡は見られるけれどもまだ建設の時期に達してゐない。殺風景に破壞されたまゝの町を見て私が僅か六年前を懷かしく思ふのもやむを得ない。現在に興味をもつことと過去を懷かしむ心とはあながち牴觸するものではない。

然し、現代の支那の革命家や一般の青年達は舊き事物に對しては何等の興味をもつてゐない。むしろ、舊文明を一概に呪つてゐる。善惡美醜を問はず舊き物は片つ端から破壞することに快哉を叫んでゐる。これは何處の國でも革命維新時の現象として止むを得ないことである。私が支那の革命に同感をもちながら一方では舊文物の沒落を惜しむやうな氣持がするのは、自己を其の渦中に置いてゐないからだ。若し私自身が彼等の同志の一人であつたならば私も彼等と同じく單なる破壞をも喜んでゐるかも知れないのだ。

或日私は一人の青年と同道して玄武湖を見に行つた。それは南京城の東北にある可成り大きな湖で、城壁の直ぐ眞下から水が擴がつて一方は紫金山の麓迄續いてゐる。湖中に五つの島がある。最近此處は市の公園になつて五洲公園と云つてゐる。蓮花の名所で蓮の時期に來ると見事ださうだが晩秋初冬の遊園地ではないと思つた。島中何等見るべき物もないが劉紀文市長のお得意とあつて道路だけは可成り立派なものが附いてゐた。丁度日曜日といひ菊花展覽會などがあつて其の日は大變な人出だつた。廣場に俄か造りの小屋掛けの茶館が出來てゐて澤山の客が入つてゐた。それを見ると私の作れの蕭君といふ國民政府へ勤めてゐる青年は仰山に驚いて見せて

「村松さん、此處にはつい先達て迄古い家がありました、それが一月の間に無くなつてゐるのです」と云つた。

私には其の時蕭君の云つた氣持は解らなかつたが彼はそれから莫迦にハシヤギ出してあちこち歩き廻つた。別に見る物もないので間もなく歸途についたが蕭君は馬車へ乘つてから

「私今日は大變愉快でした」と云ふから

「何がそんなに愉快です」と尋ねると

「私、丁度一月前に五洲公園へ行きました、すると其の時あつた舊い建物が今日は無くなつてゐる、變つてゐるといふことはとにかく愉快なものです」

と蕭君は眞實滿足さうに話すのである。淸朝時代の某總督が建てたといふ其の建物を私は見てゐないから何とも云へないが、若し見ておつたら私は或ひは憤慨の極に達したかも知れない。蕭君は今年一ツ橋の商科大學を卒業して歸國したばかりの教養と常識に於て缺くる處のない青年である。私は彼の氣持を肯定して遣らなければならぬ。

有名な鼓樓は測候所となり、北極閣は無線電信臺に利用され、完全に改造されてゐる。現代の支那には骨董を賞玩する餘裕はない。骨董の錆を磨き落し修繕を施して臺所の實用品にするのは上の部である。彼等が古美術を尊重せぬことを憤るのは憤る方が無理だ。

冷たい秋雨のそぼ降る日、私は獨りで馬車を驅つて莫愁湖を訪れた。其處も先年行つた場所である。私は莫愁湖そのものには大した感興を唆られてゐなかつたが、其處へ行つて見たい二つの理由があつた。一つは名高い商女の歌の石刷を買ふこと、いま一つは、先年莫愁湖へ行く途中、水西門から城外へ出ると河があつて其處に大きな石橋が架つてゐた。不思議なことにはその橋の上には兩側に家が並んでゐた。殆ど全部が食べ物屋で勿論大きな家はなかつたが、とにかく橋の上に一のつ町が

造られて、其の店々に汚ない客が一杯入つてガヤ〳〵騒いでゐる光景はいかにも珍らしいものに私には思はれたのだつた。先年は單に其の光景を車上から眺めて通り過ぎたが、今度は成る可く馬車を停めて其處で百姓達と一緒に饅頭でも食つて來やうと樂みにしてゐたのだつた。

地圖によつて見ると其の橋には『覓渡橋』といふ名が附いてゐる。南京の市街も西部の一角だけは比較的舊態を保存してゐる。舊式の店舖が並んで商業も榮えてゐるやうで此の邊へ來ると初めて古風な南京らしい氣分がある。處が間もなく水西門を出て覓渡橋へ掛つて見るとコハいかに、橋上の町は一軒殘らず取り拂はれてゐるではないか。而も最近取り拂はれたらしく家のあつた跡だけ石の色が變つてゐる。それは全部天然石で造られた橋で幅は六七間、長さは四五十間ある。恐らく明時代にでも架けられたらうと思ふ古い橋であるがまだ少しも破損してゐない。現代式石橋ならいざ知らず、古代にこんな大規模の石橋を造つたのは流石に支那だと感心せざるを得ない。橋には改めて感心したが橋上の町が取り拂はれてしまつたのには期待が外れてガツカリした。然しこれも交通の便を論ずる日になれば問題ではない。全體これ程立派な幅の廣い石橋を造つて置きながら其の上に家を建てゝ大部分の通路を塞いでゐたといふことが不合理である。橋上に町を造るなどといふことは支那人でなければやらないことだらうと思ふ。見様では支那の國民のどんな空間をも利用する自然性の一例ともなるが、然し是れは最初から許されて始めたことではない。

南京に限らず、在來の支那の都會は何處でも思ひ切つて道路の幅が狹い。殆ど廂と廂とが觸れ合ふやうになつてゐて其の下を人が歩いてゐる。この光景を目撃して、支那の都市は最初からかういふ風に道路の幅が狹く造られてゐるのだと考へると間違ひである。古代に都市が制定された時はみな相當に廣く道路の幅を取つたものだ。處が其の町が繁榮して土地が不足して來ると何時となく家々が道路へ向つてせり出して來た。甚だしくなると道路の中に更に一條の町を造つたりした場合がある。かういふことが各時代を通じて比較的自由に放任されて來た結果多くは近代のやうな莫迦々々しく狹い街路を現出したものである。道路の狹いのが支那の都市の本來の面目ではない。南京や蘇州などでも町の處々に非常に古い石の牌樓などが普通の家より遙かに引つ込んだ地位に建つてゐたりして明かに古代の道路が廣かつたことを證明してゐることがある。先年私をして非常な感興を覺えさせた處の覓渡橋上の小市街などもつまり右の流儀で人民が勝手に造り出した變則的なものである。して見れば

今度劉市長の猛斷によつてそれらの家が一擧に弊履の如く掃き捨てられたからといつて別に怨む筋はないかも知れない。

莫愁湖は周囘僅か一里餘の水の淺い湖だ。城内の淸涼山を望み見る地位にあつて、夏なれば水中に荷葉亭々たる眺めがあるさうだが此の季節では仕方がない。歷史は知らないが三國時代から金陵の名所になつてゐる。湖に面して數棟の古建築があるが、『勝棋樓』といふのは諸葛孔明が吳に使した時此處で棋を戰はせたといふ遺跡である。此處の建築は何れも古代の粹を極めたものだがいかんせん朽廢救ふべからざる程度になつてゐる。私が先年遊んだ時よりも更に目に見えて朽廢してゐた。何等の保護も加へず風雨の浸入に委せてあるのだから破損するのも無理はない。それでも今ならばまだ建築の樣式だけは見ることが出來るが、今後二三年も經過したらそれすら窺ふことが出來なくなるだらう。

勝棋樓は一番前面にあつて此處だけは人が棲んでゐるので、流石に雨露だけは防いでゐる。湖を眺めつゝ茶を飲むことも出來る。此處の廻廊の壁に商女の歌を刻した大理石の碑が嵌めて塗り込んである。私は數枚の石刷を買つた。其の歌は

河中之水向東流　洛陽女兒名莫愁
莫愁十三能織綺　十四採桑南陌頭
十五嫁爲盧家婦　十六生兒字阿侯
盧家蘭室桂爲梁　中有鬱金蘇合香
頭上金釵十二行　足下絲履五文章
珊瑚桂鏡爛生光　平頭奴子擎履箱
人生富貴何所望　不恨早嫁東家王
右梁武帝河中之水歌又古樂府云莫愁
家在石城西秣陵之有莫愁湖其以此耶
蘇北張盛藻書并識
時同治癸酉三月朔日

壁といふ壁に支那人一流の落書が施してある。先年來た時面白いと思つて讀んだ落書が若しやまだ消えずに在るかしらと思つて探して見たが殘つてゐなかつた。『莫愁湖莫愁湖、來到此處萬愁起、光陰似箭催人老、切莫辜負好山湖』などといふのがある。詩になつてるか知らぬが多少私の氣持とも共鳴する。

讀書子らしい見すぼらしい老人が二人づれで見物して廻つてゐる。此處も兵士の宿舍になつてゐた。莫愁湖は全く現代から見棄てられた。

古き物は小氣味よく滅びつゝある南京――。

屋根裏に棲む歌妓・書坊に棲む陸軍中將



動かざる畫舫（夫子廟前）

同行の歐陽予倩君はかねて理想的大劇團を組織する抱負をもつてゐる。今度南京へ來た用向きも其の運動に關聯してゐるのだつた。彼は連日東奔西走してゐるらしかつた。

來てから二日目か三日目の晝、私は予倩君と其の友人の唐君、彼君の四人で安樂飯店へ午飯を食べに行つた。この安樂といふ家は近頃開業したばかりの店だが、支那料理の外に西洋料理もやり、別に食料品も賣つてゐる。香港に同じ店があつて非常に繁昌してゐるさうで、南京のは其の支店である。純粹の廣東式で設備も新式だし、場所も便利なので開業早々から素晴らしく繁昌してゐる。客の大部分が官吏や若い軍人達である。料理も相應だが値段の方は相應以上である。それにも係はらず此の家が目下南京第一の繁昌を示してゐるのは設備や營業振りのハイカラなところが現下の人氣に投じてゐるのだ。

唐君は日本にもゐたことがあつて日本語を上手に話す。其の後フランスへ行つて飛行學校を卒業して來たといふ。けれども一向飛行機には乘らず平常上海でダンスをやつたり素人演劇の舞台に出たりして呑氣に暮らしてゐる上海ボーイだ。彼君は南京の文學青年で印刷會社に關係してゐるといふ。

「村松さん、今日は彼君があなたに南京の歌姫を紹介すると云つてますよ」と予倩君が云ふ。

私達は食後に一臺の馬車へ四人乘り込んで雨の降る町を走らせた。

「其の歌ひ手は何處へ出て歌つてゐるんです」

「麟鳳閣といふ處へ出て歌つてゐます」と筱君が云つた。

夫子廟の近くの道幅の狹い横丁へ馬車は引き入れられた。それは古風な門の前で、門には『來賓棧』と書いた金箔の大きな額が上つてゐる。名前から見ると其處は旅館らしい。筱君は先に立つてどん／＼奥へ入つて行く。それは異樣な感じのする家である。二階建てで中央に庭のある大きな建物がある。甃を敷いた庭を通り拔けて行くと廻廊の一部分の壁を切り取つたやうな出口がある。それから外へ出ると、又其處にも同じ樣な建物がある。中庭に立つて見るとほゞ四角に仕切られた空と二階の窓が見える。二階へ上る雨曝しの階段が附いてゐる。更に奥へ進むと又同じ樣な建物が續いてゐる。階下の薄暗いタヽキの部屋には隅の方に木の寢床があつて一人の男がまんまるくなつて寢てゐる。二階の窓の外に菊の鉢が雨に濡れてゐる。太い圓柱に紅唐紙へ書いた對聯などが貼つてある。黑光りのする羽目板。

それは幾軒かの家の境壁を切り取つて一つにしたものか、それとも段々と建て增していつたものだか判らないが、とにかく行けども／＼同じ樣な家が幾棟も續いてゐる。家は一樣に古びて半ば朽ち掛けてゐる。二階の手摺などは毀れたまゝになつてゐる。此處で突つ放されたら元の處へ出られないかも知れないやうな妙な不安が湧く。建物の古びた色や、甃を敷いた庭や、外界と杜絕した部分々々の空氣の陰欝な澱みや、すべてが探偵小說的であり、怪談的である。

私一人が怪奇的な冥想に引き入れられてゐるのも構はず他の人々は普通の往來を歩くやうな足取りで筱君の跡について奥へ入つたり横へそれたりして進んだが、最後に中庭に附いてゐる一つの階段を上つて行つた。障子に破れ穴のある窓が高い處に見えた。

二人の娘と、其の母親らしい女が私達を迎へた。それは漸う九尺に三間位の狹い部屋で、其處には大きな寢臺と、窓際に卓が一つ据えてあるほかは目ぼしい調度はなかつた。天井板といふものは張つてなく屋根裏の圓い棟木やたる木が白いペンキで塗られたまゝくすぼり返つてゐる。

十八か九位の姉娘は、圓顏の愛嬌に富んだ顏立をしてゐる。粗末な長衫の上に黑の袖無しの上衣を着てゐる。十五位の妹娘がお茶をついで出す。

筱君は予倩君と唐君と私とを此の家族に紹介した。彼女達は

上海の名優が突如として此處を訪れて來たことを不思議に思つたに違ひない。しかし予倩君は獨特の溫顏を見せ乍ら姉娘に向つて唱の事を尋ねたが彼女は謙遜して話さなかつた。只筱君が代つて彼女が女形の唱を歌ふことだけを云つた。

彼女の名前は筱湘雲。

「昨年まで上海に居りました、南京へ來て丁度一年位になります」と母親は云つた。

こんな屋根裏みたいな部屋に棲んでゐてどれ位の生活費が掛るものだらうかと私は考へたので、其のことを筱さんに話すと筱さんは女達に此の部屋代は幾らかと尋ねた。

「一ケ月二十四圓です」と母親が答へる。

「鱗鳳閣から八十圓位の月給を貰つてゐるのですが、別にお客の註文で歌ふ分は收入になりますから是れでもどうやら生活は立つでせう」

南京政府では藝妓は絕對に禁止してしまつたが、この種の歌ひ手だけは許可してある。其のかはり一定の場所以外たとへば料理屋などへ行つて客のために藝を賣ることは嚴禁されてゐる。鱗鳳閣では午後二時から五時迄と、七時から十時迄と晝夜二回それらの歌ひ手が出場するのださうだ。

卅分ばかりすると予倩君はこれから或人を訪問する約束になつてゐるから私にも一緒に行かないかと云つた。私達は彼女と晩の再會を約して唐君と筱君の二人を其處へ殘したまゝ秦賢棧を出て待たせてある馬車へ乘つた。雨が强く降り出してゐる。

「誰を訪問するんです？」

「私の同鄕の人です、そして私のいゝ同情者です。此の人は陸軍中將で先達まで國民軍の師長をしてゐたのですがもう軍人はやめました。そして秦淮の畫舫の中に棲んでゐます。面白い人ですから會つてもいゝでせう」

秦淮河に架けられてゐる小さな橋を渡つて一丁ばかり上へ行つた處で馬車を降りて家と家との間を通り拔けると河岸へ出た。黃色く濁つた河水へ頻りに雨が降り灑いでゐる。其處に一艘の畫舫が浮いてゐて、陸から船のへりへ一枚の板が架け渡してある。板の上を驅けて渡つて私達は船の中へ入つた。

「ヤア、降るのによく入らつしやいました」

と船中の主人公は予倩君を迎へて、それから予倩君が私を紹介するのを待つて更に愛想よく私の手を握つた。主人の名は李況松先生といつて、年頃四十五六の口髭をのばした軍人にしては柔和過ぎる位な人で舊式の支那服を着てゐる。私の職業を聞いて興味をもつたらしくいろんなことを話しかける。

「私も以前日本に三年ばかり居たことがあります。それは中山

先生の創案でそれに頭山滿先生や寺尾亨先生等が盡力されて中國の革命黨員だけを教育する法政學校といふ法律政治專門の私立學校を造られたことがある。そして日本の一流の學者ばかりを特別に願つて講義をして貰ひました。教師が日本語で講義をするのを通譯を附けて聽講した。つまり普通にやると日本語を覺えるだけに長い年月を費すからそれでは無駄であるといふので、正味の學術だけを短日月の間に勉强させる目的で、私達の友達は大勢それへ入りました。蔣介石なぞも士官學校を卒業したあとで其の學校へ入りました。其の時戴天仇が通譯係でした。其の時分は私も少しは日本語を覺えたが今ではすつかり忘れてしまひました。コンニチアメフル、イケマセン――是れ位です、アハハハハ」

李先生は非常に愉快な方である。其の畫舫は餘り大きい方ではないが、さりとて小さくもなく、中央の其の客室は八疊位の廣さがあつて　完全な調度と裝飾が備はつてゐる。畫舫は古來秦淮の名物であつた。畫舫には善美を盡したものさへあつて、昔日はこれに酒と妓を滿載して秦淮河を上下して徹宵歡樂を極めたものだ。私も先年此處の畫舫の中で一夜を明かしたことがある。舫には寢室もあれば厨房も備はつてゐる。胡弓の音、唄の聲、かしましい麻雀の音――それが河水の上に流れ出て云は



南京城壁と秦淮河

ふやうない濃厚な遊蕩氣分を釀成してゐたのである。古來の風流才子が詩歌によつて咏嘆したのが此の畫舫の遊びであつた。然るに今度の藝者禁止令以來一朝にして畫舫は無用の長物になつてしまつた。現在澤山の畫舫が空しく河中に碇泊して時勢の非を歎いてゐる。處が、おのづから利用の道もあるもので、目下の南京は家屋拂底で借家が不便であるので、畫舫を借りて船中生活をする人が出來てきた。李先生も其の一人である。

其の室には紙に描いた文人畫風の山水や花鳥の繪が何枚も掛けてあるから「どなたがお描きになつたのです」と李先生に聞くと

「アハハハ、これは私が描いたのです。近頃は用がないので道樂に繪を描いて遊んで居ります。丁度今も描き掛けてゐた處ですし、お目に掛けませうか」

と云つて李先生は隣室から野菜と梅花をかいた半切を持つて來て見せた。どの繪もなか〳〵巧者でおのづから風韻雅致に富んでゐる。私がほめると先生は

「それでは是れを記念にあなたに差上げませう」

といつて隣室へ行つて其の繪に筆を加へ始めた。其處には國民軍士官の服を着た青年だの李先生の部下らしい人などが四五人もゐて先生が筆を執るところを見物してゐるのだつた。先生は繪が出來上ると更に詩文を書き加へた。

自從空海泛滄溟　江南春色到遙來
隴使相將堪致遠　願加田舍幾茜帶

「アハハハ、拙いです、たゞ紀念だけです」

李先生は紙の端へ指で唾をつけてそれを船の欄間へ貼り付けた。

歐陽君は劇團組織の用件について李先生と長い間談してゐた。硝子窓から外を眺めると雨は少し小降りになつたやうだ。石垣の下のあたりを家鴨が二三羽泳いでゐる。

「畫舫の生活は風流ですね」と私が云ふと

「風流でもありませんが家が無いものですから。然しお氣に入つたらあなたも船に棲んで見ませんか、此の直ぐ上流に手頃なのが一艘空いてますが」

と李先生が云ふ。

「幾許位で借りられますか」

「此の船が一ケ月十八圓です、今空いてゐる船は十七圓で貸すと云つてます」

「此の綺麗な船が十八圓は安いですね」

「村松さん一艘借りなさいよ」と歐陽さんが面白がつて勸める。

畫舫の中に棲む――。私は考へたゞけでも何となく空想的にならずにはゐられなかつたが、然し今度の短い旅行の期限では殘念乍らそれまでの耽溺は許されさうもない。暮色が迫りかけた頃私達は李先生に暇を告げて畫舫を出た。先生は雨に打たれ乍ら船のへり迄見送りに出た。私は歸りがけに李先生が新聞紙で卷いて呉れた繪を外套の下に入れて持つてゐたが、何となく此の文人的武人の風懷が慕はしくてならなかつた。

「李さんはいゝ人です」と馬車の中で予倩君も云つた。ペンキ塗の屋根裏に棲む歌ひ手――畫舫に棲む陸軍中將――南京――其の三つの世界が一つになつて私の心に映つた。

私達は馬車を麟鳳閣へ向けた。

茶館と書場

平建ての其の場内には四角な卓が百位置いてある。客は五分通り入つてゐる。正面の舞台では若い女が歌を歌つてゐる。とても騷がしい音樂が耳を聾するばかりに鳴り響く。お客達は茶を飲み乍ら歌を聽いたりガヤ〳〵騷いだりしてゐる。

唐君も俵君も先に來てゐた。私達は其の卓へ一緒になつて幾人かの歌を聽いた。暫く經つと榮湘雲が出たが彼女の歌は音聲が低くて餘りいゝ出來榮えではなかつた。それよりも黃艶秋といふ歌ひ手は年齡は十六位だが唱も好く美しい容姿を有つてゐた。此處へ出る歌ひ手は皆斷髮で服裝は極く質素だが、黃艶秋だけは飾の附いた綺羅美やかな服を着て、そして髮を編んで背中に垂らしてゐる。舞台へ立つ態度にも凛とした氣品がある。

唱に於て南北無双と云はれた歐陽予倩君は、田舍の若い歌ひ手達の唱を熱心に聽いてゐる。

「歐陽さん、此の人達の歌は好いですか」

「えゝ……なか〳〵うまいですよ」と云つて莞爾々々してゐる。

其處へ、詰襟の服を着て太い緣の眼鏡を掛けたイガ栗頭の人が來た。予倩君が其の人を私に紹介した。中央黨部の通信新聞記者の唐三といふ人だつた。

私達は晩餐に榮湘雲をはじめ此處の歌ひ手達を招待しやうといふもくろみだつた。唐三氏も誘つて五時頃麟鳳閣を出て秦淮河畔の金陵春といふ茶館へ行つた。古い大きな料理屋だ。私達は一番奥の廣い部屋を取つた。予倩君が直ぐに筆をとつて紅い紙の招帖へ『榮湘雲』『唐艶秋』『簫瑜』などと麟鳳閣の歌ひ手の名と自分の名とを書いて茶房に持たせて遣る。

外は秦淮河である。石垣の下には青く黃ばんだ河水がちつと

も動かず澱んでゐる。其處にも畫舫が三四艘繋いである。依然として雨が小降りに降つてゐる。對岸の家と家との間に二畝ばかりの大根畑があつて、河岸に楊が五六本立つてゐる。家鴨が夕闇の中で餌を獵つてゐる。

ある畫舫の中から一人の女が顏を出した。靑い服を着た、窶れた美しい女だ。女は何を考へてゐるのかいつ迄も河の水を眺めてゐる。其處へ荷船が一艘下流から上つて來た。女は荷船の船頭と何か口をきいたあとで船の窓をぴつしやり閉めた。

すべてが滅びてゆくもの丶最後のため息をついてゐるやうな感じがする。

「此の河は現在の約二倍位の幅に堀り廣げられる計劃で、既に向ふ側の家屋は取りこわしに着手してゐます。そして揚子江の水を上下に通じて水運を好くするのです」と唐三氏は私に說明した。

榮湘雲と蕭瑜が先にやつて來た。其の後から蕭艶秋が父親に伴れられてやつて來た。一同食卓に着いた。此處の料理はほんとの南京料理で此の土地の風があつた。味も好い。

女達は非常に行儀がよく、殆ど無駄口は利かないが然し快活に料理を食べた。少し箸を休めてゐると直ぐに唐三氏や予倩君は自分の箸で女達の小皿へ料理を取つて遣る、蕭艶の父親はさういふ娘を持つて生活しさうな人で、よく肥滿つてゐる。聞いて見ると福建の人だと云ふ。

「臺灣には私も二三年居たことがある。然しもう二十年も前の話です。貴下は臺灣へおいでゞせうな」と私に云ふ。

「いや、一度も行つたことがありません」

私は日本人でありながら臺灣を知らぬことを何だか恥かしく思つた。

蕭艶秋の父親は五十五六の此の年までには可成り種々の經路を辿つて來たらしい世慣れたそして覇氣のありさうな人だ。それにしても其の娘の美しさは——。

若いはふの唐君と筱君は拳をうつて盃を乾し合つた。唐君は私にも拳をいどんで來る。私は酒は飮めないから日本にある流儀で負けた方が一枚宛身の皮を脫いで戰はふと云ふと彼は「宜ろしい」と答へる。勝負は互角で進行したが、寒がりの私は下にも下にも筍のやうに無限に着込んでゐる。脫げども〱盡きないので流石の唐君も最後の一物になつて降參してしまつた。

唐君と筱君はシヤツ一枚でダンスを始めた。予倩君は若い女達を前に置いて學校の唱歌の先生が生徒を敎へるやうに、小聲で急所々々を歌つて聽かせたりした。

女達は七時過ぎから夜の部が始まるので伴れ立つて歸つてい

つた。私達も引上げることにして此處の支拂ひをしやうとすると、唐三先生が逸早く濟ましてあつた。こつちから誘つた人に勘定を拂つて貰つたんでは濟まんやうな氣持がするのでこつそり歐陽氏に相談すると、

「さうでしたねえ、」予倩君は一寸考へるやうな顔をしたが

「まあどつちでも好いでせう」

私と予倩君は人々に別れて馬車で旅館へ歸つた。

其の晩の終列車で予倩君は上海へ還つた。飛行家の唐君も翌朝一番列車で上海へ還るといふはなしだつた。

私はそれから二週間餘り南京に殘つてゐた。私の滯在は別に是といふ要件も目的も無いので、天氣のいゝ日は郊外の名所歩きをしたり、雨が降ればストーブに薪炭を燃しながら鞄の中の本でも取り出して讀んでゐる。夕方から誰か友達を誘つて秦准附近の料理屋へ行つて食事をし、其のあとで茶館や書場を廻つて歌を聽いて時間を潰す。そんなことでもするより外に菲しやうもない南京である。



南京の歌ひ手

秦准河に沿つたガランとした廣い通がある。其の一端に孔子廟があるので普通此の邊を『孔子廟(フーツミヤン)』といつてゐる。孔子廟(フウツミヤン)には茶館と書場と併せて十數軒ある。茶館と書場とは實際は大した區別はないが、茶を主にする處と、歌を聽かせることを主とする處と二つの流儀がある。書場でも茶を飲ませるが、茶館でも歌を聽かせる。それも一種の書場だが、茶館は歌は夜だけ、で、晝の間は純粹の茶館として營業してゐる

茶館は江南の名物である。上海でも、杭州でも、蘇州でも或ひは南京でも茶館は非常に發達してゐる。從つて大きな設備をしたのが澤山ある。南方の人は茶を好むこと非常である。が、茶館が發達した理由はそれだけではない。支那の人は多く朝は重い食物をとらない習慣がある。朝は大概粥か饅頭

の類か麵類などを食べて置く。それを自宅でする場合もあるが多くは茶館へ出掛ける習慣がある。中流階級より以下の者が多い。茶館で酒を賣る家もあるし賣らない家もあるが、どのみち茶館で酒を飲む人は少ない。勤め人なども朝出がけに此處で簡單に食事をして勤め先へ行く。閑な人間は此處へ來て數時間暮らしてゐる。

もう一つは商取引の相談所に茶館が利用されてゐる。商人達は店頭で相談をする代りに直ぐに作れ立つて近所の茶館へ行つて茶を飲み乍らゆつくりと商談をする習慣になつてゐる。朝から晝の間はかういふ客種で繁昌してゐる。茶館は一種の取引所だと支那の人は云つてゐる。

上海の四馬路にある靑蓮閣といふ茶館は殆ど一丁以上の間口をしめる二階全體の廣さで大きいことで有名だが建物は粗悪で何の風趣もない。茶館は反つて田舍の都市のはふが發達してゐる。私が見た中では蘇州城内の吳苑といふ茶館は庭園もあり建物も念の入つた家ですべてが高尚だつた。流石は風流の都だけあると思つた。とにかく此の茶館といふ營業組織は中流以下の生活にとつては頗る便利である。普通の茶代は極く安い。勞働者を專門に相手にする下等な茶館も到る處にある。手數を省く上にも經濟的にも利用されてゐる。

夫子廟の茶館には雅趣のある家はないが、規模は大きなのがある。六朝居、龍門居、新奇芳閣、四明樓などといふ名が附いてゐる。大きな畫舫を利用した茶社などもある。六朝居などは優に數千人の客を容れるだけの廣さがある。

專門の書場としては、麟鳳閣、新世界、又世界の三館がある。此の三館へは相當な藝人が出る。麟鳳閣と新世界は女優の唱を聽かせるが、又世界では大皷だの灘簧などのやうな雜藝を演じてゐるのでほゞ日本の寄席と同じ氣分である。

普通の茶館も夜になると書場と化してしまふ。が此の方へは上等の唄ひ手は出ない。

先づ客は入つて行つて何處でも自分の好みの席を取る。直ぐに茶房(ソーファン)が茶を持つて來る。それは附き物で例の西瓜子(シークワツ)や南瓜子(ナンクワツ)を持つて來る。大藥鑵の熱湯を提げて來て茶館に注ぎ、小茶碗に移して、更に湯を添へる。蒸しタオルを持つて來る。客は何がさて顏を拭き手を淨める。

正面に突き出した舞臺(高座)があつてテーブルが据へてある。樂手が其のうしろに六七人並んでゐる。左右に幕を垂れた出口があつて歌ひ手が場へ上る時は左から出て、入る時は右の幕の蔭へ入る。歌は大概は京劇の歌曲を歌ふ。昆曲を歌ふ時もある。何れにしても歌ひ手は役柄が極つてゐて、青衣、老生、

小生、大面などとそれ〳〵專門の歌をうたふ。

歌ひ手は出た時も入る時も看客に對して禮をするといふことはしない。歌ひ終つて引つ込む時などは最後の歌節を客に浴びせ掛けるやうにして颯と引つ込む。歌節の切れ目〳〵にはうしろ向きになつて客に背を見せて立つてゐる。一見した處すべての態度が男性的に近いくらい女らしい優し味が缺けてゐる。が、見慣れて來ると其の中に媚びもあれば魅力もある。

女形の唱には優雅な音樂が伴なふものもあるが、京曲の音樂は喧騷を極めるのが普通だ。而も其の喧騷は世界中のどの耳をもつていつても想像しがたい程度の强烈な音響の交錯である。一つ〳〵の樂器の音が、あらゆる看客の神經を殺してしまつて、其の高壓的リズムの中で快い陶醉狀態に陷らしめるのが京曲の特徵である。慣れぬうちは其の甲高い音響のために窒息して死にさうな氣持がする。此の喧ましいオーケストラの中から更にそれらの樂音を超越した一個の肉聲の强い叫び聲を聽かせるのが京曲の唱である。それは何とも云へない悲愴的、激情的である。亞細亞大陸に育つた民族の、あらゆる傳統、あらゆる歡喜、熱情、悲哀、憤激――といつたやうなもろ〳〵の感情が最高潮に、露骨に其處から迸り出てゐる。是れ程力强い、是れ程民族的性格を强く表現してゐる音樂は世界中に外にある氣づかひはない。

歌曲の所々では看客は「好、好」と掛け聲をする。此の掛け聲はなか〳〵六ケ敷い。看客は茶を飮み、煙草を吸ひ、雜談をし、場内は常に喧々囂々としてゐる。けれども、音樂の調子が高いから聽き手は敢て靜肅にする必要はない。音樂の調子が高いから聽き手が騷がしくするのではなく、そも〳〵これらの音樂はさういふ喧騷場裡から生れ出た音樂なのである。激越な、狂噪的な支那の民衆生活が自然に生み出した音樂である。

目下の南京は藝者が廢止されたから從來のやうな遊蕩場裡は全くない。と云つて劇場は極めて貧弱なのがあるが滅多に芝居らしい物は來ない。活動寫眞館は最近南京の中心地に立派な物を建設する筈で既に工を起してゐるがそれ迄は見るやうな處は全くない。よい意味でも惡い意味でもすべて娛樂機關といふものが絕無である。其の中で一つ許されて居る物はこれらの書場と茶社である。然るに此の土地には目下數萬の軍隊、數萬の官吏及び獵官運動者が新たに入り込み、勞働者や商人も殖えてゐる。人口は從前の二倍以上に達し、町の景氣は榮えてやがて黃金時代に近からんとしてゐる。さういふ狀態にあり乍ら娛樂機關が乏しいのだから、料理店が繁昌し、茶社や書場が榮えるのも無理はない。茶社や書場が新時代の娛樂機關としてそれらの

人々の要求を滿すには餘りに時代錯誤的なものではあるが、無に何も無いのだから此處が繁昌する。客の中で一番多いのは若い官吏や士官達である。國民軍の士官は平素は劍を佩いてゐないが、肩から革のバンドを掛けてゐる。それが軍閥時代の現代支那では一番好みの服裝になつてゐる。さういふ軍服を着た士官達が何の茶館へ行つても澤山陣取つてゐる。

書場でも茶社でも別に入場料は取らないが、茶代共に小洋（セウヤン）三十錢位を取る。

然し、いくら何でも單に唱を聽くだけでは物足りない。況んや相手が女の藝人であるに於ておやだ。客と歌ひ手との關係に何かしら情的展開の方法がないことには魅力が無い。其處で、これは表面は禁止されてゐることだが、客が自分の贔負にする歌ひ手に特に歌はせるといふ方法がある。それは一回一圓の纒頭を與へて歌はせるのであつて、さういふ客の註文を聞く役の茶房が二人位場内を絶えず廻つてゐる。例へば私が榮湘雲に歌はせやうと思へばボーイが側へ來た時それをこつそり註文する。實はさまでこつそりする必要はないのだが、すべてかういふことはこつそりやる處に趣味がある。茶房は了承して直ぐに樂屋へ通じる。すると間も無く榮湘雲が現はれる。一曲歌ひ了つた時に茶房が祝儀を徴收に來る。客の註文さへあれば何遍でも一人の歌ひ手が登場する。人氣のある歌ひ手は一夜のうちに數回登場するが、人氣のない者は一回義務出演をするだけで後は出ることが出來ないといふ結果になる。勢ひ歌ひ手同志も競爭的になるが、時に依ると一人の歌ひ手に對して客の間にも競爭が起る。面白いことは茶房が通す時どの客と云つて知らせるので出演者は舞台の上から其の客の居る方へ體を向けて歌ふ。だれが註文したのだか一般の看客には分つてゐなくても、少くとも、註文した本人だけは自分の註文に對して歌つてゐるのだといふことが一目して分るから、滿足もあれば同時に自惚れも起るわけである。

一回の唱に對する祝儀一圓の内、歌ひ手の懐中に入るのは其の三分の一、即ち支那の貨幣で小洋四十個。殘りの三分の二は樂師や茶房の收入になる、普通一曲は十分乃至十五分位歌ふところだが、客の註文が輻湊して來ると三分乃至五分位しか歌はない。歌ひ始めたと思ふと忽ち引つ込んで終ふ。さういふ人氣の競爭が生じるので定連の客が盛んに騷いで聲援したり冷やかしたりする、時刻が遲くなるに從つて此の彌次が盛んになる。歌ひ手は歌ひ了るや燕のやうに素速く身を飜へして幕の内へ消えてしまふ。

贔負筋の更に昂進した奴は歌ひ手の住家を訪問する。無紹介

では行けないが最初友達の何かに伴れてつて貰ふ。行けば先方は誰にでも茶を出し煙草をすゝめて歓待する。無關係の客は別に其の家へ祝儀など遣る約束はないが、度々訪問する以上はそこを氣を利かして贈り物でもするとか、お袋の掌にそつと十圓札の一枚も握らせて遣つたからといつて別に怒りはしない。目立たぬ程度で料理屋へ伴れていつて御馳走して遣ることも出來るし、或ひは其の家へ料理を取り寄せて家族一同と入婿氣取りで食事をすることも出來る。その程度の交際は手易く運ばれるが、それから更により以上發展させるにはどういふ方法を取るものだか私には判らない。が、專門の書場へ出てゐる歌ひ手は相當堅いやうである。此の種の藝術家に對する市政府の取締りも可成り厳しいらしい。

彼女達はそれぞれ襟の下へ三寸位の長さの布へ書いた鑑札を縫ひ附けてゐる。それには『戯詞鼓書營業人員臨時證章』と認めてあつて市政府の角印が捺してある。自宅にゐる時も場へ登る時も必ずそれを附けてゐる。ちやうど鶴が短冊を附けたやうに。それから彼女達の住居には必ず『南京特別市戯詞鼓書訓練所規則』なる市政府の御達しが額に入れて掲げてある。試みに二三章を譯文してお目に掛ける。

一、淫詞猥曲に關するもの、革命に違反するもの、或は國體を傷くるもの等、固く演詞を禁止す。

一、女學員は家族を除くの外男性と偕に飲宴し或は遊船及び一切類似行爲をなすことを得ず。

一、女學員は毎夜十二點鐘以後に家に返ることを得ず。

一、女學員は脂粉を塗り、或は耳飾胸飾等をなすことを得す。

と云つたやうな個條だ。『革命に違反する』が私は面白いと思つた。私が一日榮湘雲の住居を訪問すると先客が二三人ゐた。紹介されると、其の人達は皆市政府の吏員だといつた。襟に市政府のマークを附けてゐるから間違ひはない。そこで私が冗談に「榮湘雲をもつと贔負して遣り度いが、此の規則が恐いから出來ません」と云ふと一同は大笑ひをして

「此の規則はもう廢止しましたから御安心なさい」と云つた。

私は、晝の茶館へ入つてゆつくりと茶を飲んだり、夜の書場へ行つて歌を聽いたりしてゐると、自分が全く此の國の民衆と同化してしまふやうな心地がして愉快である。

夜の書場へ行つてゐると其處へいろんな物賣りが來る。煙草、菓子、蜜柑、といつたやうな物は不思議もないが、石鹸、齒磨き、揚枝、懐中鏡、靴べら等のやうな小間物類まで賣りに來る。新聞は上海の朝刊と南京の夕刊を賣りに來る。さらかと

思ふと、鍵の附いた錠前と金槌を賣りに來る男がある。其の男が毎晩來る。賣りに來るは勝手だが、書場と金槌との間にどういふ聯絡があるかといふ氣がして可笑しくなる。見た處賣れる樣子もないが毎晩やつて來る處を見ると矢張りたまには賣れるのだらう。つまり此の男の氣持で云へば、其の處へはとにかく大勢の人が集つてゐる。其の人達の鼻のさきへ錠前と金槌をつき付けて「さあどうだ」と云へば中には我家の錠前が毀れてゐることを思ひ出す人もあらうし、金槌が無いから買はふといふ氣になる人もあるだらうといふのである。かういふ處に支那人の呑氣さと機會主義が現はれてゐる。

新世界には麟鳳閣の倍くらいの廣さがあつて、其處は何處よりよい歌ひ手が出るので毎晩大入り滿員だ。此處で唱も上手で人氣のあるのは『張桂芬』『劉蓮芬』『李蘭芳』『朱小農』『徐美容』などといふ處。

或晩獨りで前の方へ出て歌を聽いてゐたが少し早めに歸らうとすると、うしろの方に新聞記者の唐三君が友達と一緒に來てゐて目敏く私を見付けて

「あなたはまだ南京にゐたのですか。私は、あなたは歐陽先生と一緒に上海へ還つたことと思つてゐた」

さういつて唐三氏は私を其處へ引き据えて彼の友人達に紹介した。

「唱はどうですか」と唐君が云ふから「私は此處の唱が面白くて南京が離れられない」と答へると「これでは此處の歌ひ手を誰か紹介しませう」と云ふ。

唐君は友達と相談して、最近上海の大世界から來たばかりの徐美容を私に紹介して呉れることになつた。ハネてから四五人で徐美容の住居を訪問した。其處は秦淮河に沿つた古風な旅館で、彼女の住居は階下の河に臨んだ大變廣い立派な部屋だつた。彼女は母親と二人暮しだが、自家専用の男衆を使つて可成り贅澤に暮してゐる。母親もまだ卅五六の若さで、娘と同じやうな斷髮で、藝人の母親には珍らしい人品のいゝ婦人だ。

徐美容は十九か二十であらう。立派な體格と美しく整つた容貌を持つてゐる。上海でも非常に人氣のある歌ひ手だが、南京の方が收入が多いのでやつて來たのだらうと唐君の友人が私に説明した。彼女は私の名刺を見て「村(ツン)――松(ソン)――梢(セウ)――風(フン)――」と美しい聲で讀んで「日本の方の名前は四字あるから大變調子がいゝ」などとお世辭を云つた。

彼女は多少教育があり、英語の單語を幾らか心得てゐるし、日本語も十位は知つてゐる。そして上海兒らしい我儘と贅澤の中で育つたやうな女である。歐陽予倩に師事して唱を修業した

こともあると云ふ。藝人らしくない上品な家庭だ。或時彼女が何か讀んでゐるから取り上げて見ると私の舊友郁達夫の短篇小說集であつたのは正に意外の感にうたれた。

　二三人の友達と一緒に或る晩も彼女を訪問して、彼女達の睡眠時間迄さまたげてゐると、十二時過ぎに突然此の旅館內に大騷動が起つた。最初二階の方で戰爭のやうな物音が始まつたから一同吃驚して靑くなつてゐると其の騷ぎはやがて家中に擴まつた。廊下へ出て見ると、劍附鐵砲を持つて物々しく武裝した憲兵が百人近くも入り込んでゐる。間も無く徐美容の部屋へも十人餘りの憲兵が入つて來て物凄い劍幕で一人々々を訊問したあとで部屋の隅々まで調べたが別に異狀はなかつたと見えて引き上げて行つた

　すぐにそれは二階の部屋に泊つてゐた三人の客が、其の日の午後の二時頃市中の銀行を襲つて數百弗の現金を强奪した强盜團の一味であることが發覺して手が入つたのだといふことがわかつた。其の部屋からは大きな木箱へ何杯かのピストルと彈藥が押收されて、其の夜のうちに十四五名の共犯者がよそであげられたことが翌日の新聞に載つてゐた。

モダーン・ライフ再吟味

形式と速度への生活

片岡鐵兵

負け通して最後の第十一競馬となつた。彼女は、どうせ負けるのなら、潔ぎよく丸負けで通す方がサツパリしてゐると思つた。それで、『バカアド』と云ふ、勝ちさうもない馬を、冒險的に一枚買つた。運だめしの興味もあつた。

『何を買つたの？』と山越さんが訊いたので、『バカアドを』と答へると、馬鹿だなと鼻のさきで笑はれた。

然し、結果は意外だつた。ラストで、第一着を走つてゐた『バカアド』が、思ひ切つた飛躍振りを見せた。これで、ゴォルに入つた時は、首で先登の馬を抜いてゐた。彼女は我を忘れてキヤー〳〵叫んでゐたのであるが、勝つた、と決ると泣き出したいほど『不思議な目に會つた』といふ氣持ちがした。

待たせてあつた自動車が、山越さん自慢の『バカアド』であつた。彼女が勝つた馬の名と一致する。『緣起が良い、緣起が良い』と彼女は云ひつゞけた。山越さんは、『まぐれ當りで慢心する奴があるか』と云つたまゝ、默つて車の快い彈力に身を任せてゐた。

澁谷の二葉によつて夕食をしたゝめた。スウプのあとで、蛤ライスが出た。この珍味に舌皷を打ちながら、山越さんは、馬の講釋をして與れた。

そこを出ると、日が暮れてゐた。彼女の出てゐるダンス・ホールまでバカアドを走らせた。そして、ダンスした。彼女は、セイ一杯の技巧で、山越さんを引つ張りまはしながら踊つた。

それから、ホテルへ泊りに行つた。

以上のことを、翌日になつて思ひ出して、彼女は、『最もモダーン的なりし一日』と心で銘打つた。そして、幸福を感じた。

彼女の從兄は、文學志望の青年だつた。彼女は、この青年を輕蔑してゐた。何故なら、この青年は、いつも『世の中に新しい物なんか有りつこはないよ』と豪語してるのだから。

『あたしなんかの生活を知りもしないで』と彼女は思つてゐた。自分と彼とは、まるで生活がちがふ。彼は、何も知らないんだ、さう思ふと、輕蔑せずには居られなかつた。

競馬が濟んだ翌日、彼女は從兄に逢つた。この從兄は、かび臭い下宿屋にごろごろしてゐた。訪ねて行くと、机に向つて、何か一生懸命に書いてゐた。

『何書いてるの、原稿？』

『あゝ、賣れもしない原稿をね』

『小說？』

『いや、現代に新しきものなし、といふ題で、隨筆を書いてるんだよ』

又始まつた、と思ふと口惜しくなつて、彼女は云つた。

『あのねえ、あたしのお友達が……昨日、競馬に行つたのよ、或る若い金持ちの坊つちやんとね、その人のお話なんだけど』

と、彼女は昨日の經驗を、友だちの事にして、從兄に話してきかせた。

往復が、パカアドといふ高級車で、競馬がスポオツと賭博との同時享樂で、そして、ダンス、ホテル、みんな、何とモダーンではないか、と彼女は誇らしく論じたのである。

『それや、ちつとも新しかないよ』と從兄は答へた。『自働車は馬車の速い奴だし、競馬は明治時代にもあつたのが復活したゞけの話だし、ダンスは何百年前からのものだし、ホテルに泊つたつて、性慾は性慾さ』

『でも、モオドがちがふ』

『そこだよ。モオドがちがふ、それからテムポがちがふ。型と速力だけだよ。競馬だつて、そこに集る人間の服裝——ニッカアボッカアの型だつて昔とはちがふだらう。パカアドといふ車は、型と速力とに於て、昔の馬車とは進化してるだらう。そして又、ホテルは明るく、すべてが輕快で、又茶代なんかで頭をひねる煩さもない、生活のモオドが新しい』

『それごらんなさい』と彼女は誇らかに笑つた『輕快で明るい——そこが新しいのぢやない？』

『輕快で明るいね』

青年は明るい調子で答へた。そして、それ以上、相手になら

なかつた。

ブウルジョアの支配する社會では、今までで文化の最高内容に到達したと云つて好いだらう。もうこれ以上、より新しき内容とより新しき思想とをその階級の物として附加することは出來なくなつてゐる。ところが、人間の本能として、彼らは益々高い精神的水準を求める。が、實際上、今が最高で、これ以上の向上が不可能となると、發達を内容に求めずに、止むを得ず形式とテムポとに求め、それを、物質的な環境に應じる新しさに、擴げざるを得なくなる。

今は、そのやうな時代だ。生活の、感覺方面のみが、新しいものを無限に求めて行く。モダーン・ライフとは、人間の斯る歩みの表れに他ならない。

言ひ換へるなら、この享樂的な現代生活の表れは、資本主義社會の沒落行程の、文化的表現である。ブウルジョアジイは、もはや打建てゝ行く文化を持たない。然しながら彼らは、既に持つ文化を飾り得るだけである。

その夜、ダンス・ホールからの歸り、氣がついて見ると、彼女は誰かに跡をつけられてゐた。警察の方で、ダンス・ガアルの行動に眼を光らせてゐるといふ話だから、或は刑事かも知れない……………

なか／＼、明るく、輕快にばかりは、物事は進行しない。あんまり、すべ／＼と進行させたら、つまり風紀紊廢がひどくなりすぎたら、搾り取るのに都合がわるくなるから、支配階級は、そこを巧く手加減しなければならないのだ。

そこで、彼女は、街角に待つて呉れてゐるパカアドをやりすごして、眞直ぐに自分の家に歸つて來た。歸つて見ると、家では、銀行の守衛をしてゐる父親が馘になつたといふので、大騷ぎをしてゐる最中だつた。母親は、父親を口汚く罵つてゐた。

『何て甲斐性のない人なんだらう！』と。

生活は、決して明るく輕快になつてはゐない。否、生活は、益々暗くなつて來るばかりだ！明るく、輕快なモダアン・ライフの背ろには、暗い、慘めな苦勞がある。

翌る夜、彼女は山越さんと踊つてゐた。ジヤヅが、桃いろの灯の光の中で、何物か煽情するやうに渦卷いてゐた。フオツクス・トロツトを踏みながら、彼女は、ジヤヅに助けられて、山越さんを益々煽情する必要があつた。ホテルへまで、踊つて行きませう！と云ふやうに。

彼女は、稼がなければならない。

享樂しなければならぬ。誰が享樂するなと誡めても、こんな世の中で享樂せずに居られるものか。みんなが、さういふ享樂をしてゐる時に、自分だけ取殘されて居られる筈もないのだ。金持ちは不安なく享樂するだらうし、さうでないのは、安つぽい、小つぽけな端くれに、僅かに有付いては、益々背ろの不安を濃くして行く。

『この自働車、ほんとに好いのねえ！』

　パカアドに馴れると、もう他の圓タクなど、馬鹿らしくて乘れなくなる。彼女は山越さんと並んで、ふか〳〵とクションに身を埋めながら、行き交ふシユボレエやナツシユや、けち臭いクライスラアのフオアを輕蔑の眼で見た。それらは、郊外に安つぽい文化住宅や、巷に擬ひ物のシイルの外套が滿ち溢れてゐるやうに、輕快なものゝ充滿だ。だがそれらは只輕快なだけで安つぽい。パカアドは、輕快な上に、何所となく崇重な、威力をその形に備えてゐる。

　高價な物は、皆この崇重な線を備えてゐるのだ。さうでないと、安物との區別がつかない。さうでないと――皆がブウルジヨアを尊敬しなくなる。

『ねえ』

と、彼女は山越さんに取縋るやうにより掛つた。今、この人から離れたら大變だ、何となく、さういふ氣持ちがしたからだ。

『人情が――』と山越さんは輕蔑するやうに云つた『センチメンタルなんか、古風だよ』

『それは、さうね』

　と明るく、屈托なく別れる女である事を暗示する調子で答へたが、彼女は、モダーンだモダーンだと自分で獨りよがりしてゐるうちに、結局何物かに煽てられて、騙されてるのを知らずに居たんだ、といふやうな感じに打たれた。自働車のカアテンがおろされて、山越さんの唇がしづかに彼女の上に近寄つて來た。彼女は眼をとぢて、待つた。

　カルテル、トラスト、金融資本――そんな四角つぽい言葉が積み重つたやうに、ビルデイングが肩を並べてゐる。その街の風景にふさはしい形のパカアドは、全速力で走つてゐた。

モダン層とモダン相

大宅壯一

モダン層

「モダン」とは時代の先端を意味する。しかもその先端たるや、本質的生産的先端ではなくて、末梢的消費的先端である。鋭く、細く、薄く、脆く、弱々しい先端である。研ぎすまされた時代の神經である。新しいもの、珍らしいものを最も鋭敏に感受して同時代人に傳へる民族のアンテナである。

毎朝、民族の心臓である大都會の中心に聳え立つてゐる幾つものビルディングに、このアンテナの幾百千もがラッシュ・インし、夕方が來れば又一齊にラッシュ・アウトする。そしてそれから愈々彼等のモダン・ライフなるものが展開される。

彼等は一様に、鋭敏な感受性と、輕い機智と、廣くて淺い智識と、だぶ／＼のづぼん又は短いスカートと、細いステッキ又は太いパラソルと、毎月五枚乃至十枚ばかりの十圓紙幣によつて、膨らませられる俸給袋以外に何物をも持つてゐない。映畫と、ヂャッズ音樂と、ダンスと、スポーツを通じて輸入されたモダニズムを生きてゐるものは、すべてこの社會層に屬する。

消費生活に於て、トップを切るものは常に沒落した中産階級である。上層階級の享樂生活は回顧的であり、下層階級のそれは追随的である。前者は歌舞伎と謠曲と待合を愛し、後者は劍劇と安來節と遊廓を喜ぶ。然るに沒落した中産階級であるところの有識無産階級は、西洋映畫とスポーツとカフエーの中の生の喜びを見出すのである。

しかしながら、今日の有識無産階級は、或る意味に於て讃く悲劇の主人公である。一人の有識無産階級の存在は、一つの失敗した投資を意味する。殊に最近は「智識」の値が急激に惡落した。「教育」による投資の成功率は著しく低下した。彼等が今日得てゐる僅かな俸給には、彼等の學生時代に人手に渡つた祖先傳來の田畑や、抵當流れになつた家屋敷や、一家一族の涙が籠つてゐるのである。

かつて新感覺派の某作家は、圓タクの列を見て「一圓札が並んでゐるやうだ」と書いたが、彼が若し現代の社會相に對する更に徹底した、一層唯物的な解釋を下し得るならば、出社時刻にビルディングの口に蟻のやうに蝟集して來る人間の群を見て、「ルーブル紙幣を撒き散らしたやうだ」と書くであらう。「モダン日本」はこれらの「ルーブル紙幣」によつて形づくられてゐるのである。

モダン相

ブルヂョア層の文學が感情の文學であり、プロレタリア層、

文學が意志の文學であるとすれば、モダン層の文學は感覺の文學であるといふことが出來る。モダン・ライフの重心は、感覺にある。

モダン・ライフとは感覺的滿足を目的とする一種の消費經濟である。そしてこの消費經濟は、前述の社會層に特有な、一種の階級的集團的ニヒリズムから生れ出たものである。そしてこのニヒリズムは、あの十九世紀の科學主義――自然主義から生れた、世界觀的、人生觀的、主觀的、個人的ニヒリズムとは全然別箇のものである。

モダン・ライフには「理想」がない。それはこの社會層に生きるものが、「理想」を持つことは無意義だと、考へるからである。

モダン・ライフには「道德」がない。それは「道德」の階級性を十分承知してゐるからである。

モダン・ライフには、刺戟はあるが「感激」はない。「感激」から甘さを除くとたゞ刺戟だけが殘る。彼等は禁酒國の無產者が、酒が得られなくてアルコールを口にするやうに、たゞ刺戟のみを追求する。

理想も道德も感激もない世界――これは感覺の世界である。これこそ「近代人」に殘された唯一の世界である。モダニズムはこの世界に生きるために發明された生活哲學である。

モダニズムには、昔のデカダンに於けるが如く「幻滅」がない。彼等は既に階級的に幻滅してゐて、個人的幻滅を繰返すことの愚なることを知つてゐるからである。

モダニズムには「執着」がない。それは彼等が最も執着しなければならないもの、即ち彼等の「くび」が、いつ何時飛ぶかも知れない危險性に絕えず曝されてゐるからである。

モダニズムには「昨日」もなければ「明日」もない。あるものはたゞ人工的刺戟によつて強く感覺に印象される刹那があるばかりである。「昨日」は記憶から驅逐しなければならない惡夢であり、「明日」はそれ自身何の魅力をも約束しない砂漠である。

モダニズムには「憂、後悔」がない。常に明るく朗らかである。理想のないところに苦悶がなく、道德のないところに悔恨がない。それはエピツキユリアニズムの復活である。

これを要するに、モダニズムは最も發達した享樂哲學である。享樂經濟である。

性の交換

上司小劍

某月某日、私は外の珈琲が飲みたくなつて、ぶらりと銀座へ出た。さうして、いつも行く裏町のカフエへ、いつもの私の癖として少しあわて氣味に、跳び込む——ほんたうに跳び込む、といふ詞のよくあて嵌るやうな歩き方で——と、二三日前に來て、このわたで御飯を食べた（私はよくこゝの家の人の食べる御飯とおかずとをねだつて食事をすることがある）。時には、まるで内部の様子が變つてゐる。私は殆んど酒を一滴も飲まないから、もとより醉つぱらふといふことはないし、其の他のことに就いても、可なり細心なつもりだから、決して、家を間ちがへるといふことはない筈だが、この時は、全くどうかしてゐたのである。間ちがへて一つ手前の横町を曲り、そこに丁度表つきのよく似た店があつたので、いつも行きつけの家だとばかり思つて、跳び込んだのである。昔しの落語にでもありさうな滑稽であつた。

出迎へた女給の顔に少しも見おぼえがないのをば、たゞしんまいの女給だとばかり思つて、まだ家を間ちがへたことに氣づかない。『どうぞお二階へ……。』といふ言葉も、行きつけの家とは調子がまるでちがつてゐるのを、變だとも思はなかつたのは、よほどどうかしてゐたのである。二階へ上ると、二階の裝飾や調度が、私の行きつけの家と、よほどよく似てゐたのは、幸か不幸か、私をして、家を間ちがへたことに氣付かせるのを、更らにおそくした。

この、家を間ちがへるといふことに就いては、一つの挿話のやうなものがある。それは明治時代のことで、時の或る高貴な方が、上野公園へお成りになつて、お馬車が廣小路のあたりを通御の節、突然御陪乘を承る侍者に向はせられ、『市中の家といふものは、どれもこれも、皆よく似てゐて、殆んど同じやうだが、あれでよく間ちがはぬものだのう。』と仰せられたさうである。いかにも貴人らしいお言葉で、このおほやうさが貴いのである。全くよく間ちがはぬものなのである。九尺二間の棟割り長屋でさへ、めつたに間ちがへて他人の家へ入つたといふことを聞かぬ。軒燈一つ光らない闇夜にでも、手さぐりで自分の家の戸を開けて入るところは、熟練と言はうか、なんと言はうか。

これもまたえらいものである。

偖私は、其の間ちがひに心付かぬカフエで、先づ珈琲を註文したが、いつも手間取れるのに似ず、今夜は非常に早く持つて來た。一と口飲んでみると、とてもまづい。まづさを通り越して、なんとも言ひやうのない、吐き出しても吐き出し足らぬやうな味である。東京でおいしい珈琲を飲ませる家は殆んどない。（大阪や京都はもろちんだが）あるかも知らんが私はまださういふ家へ行きあたらぬ。自宅よりも外の食事の方がすべてうまい、としてゐる私も、珈琲だけは、自分で焚つて、自分で碾いて、自分で入れた自宅の珈琲を、一ばんうまいとしてゐる。もちろん、個人の私邸には、私の家以外においしい珈琲のあるところがどッさりあるであらう。富井政章先生のお邸の珈琲なぞは、全く世界の逸品であらうが。

商賣で珈琲を飲ませる家では、目黑行人坂上の或る見すぼらしいカフエのが、東京で第一だと、私は思つてゐる。しかし、そこのよりも、私の家のゝ方が少しうまいやうに自惚れてゐる。（もちろん、日によつて出來不出來はあるが）一流のホテルやレストオランの珈琲は皆うまくない。

それでゐて、私は時々、ぶらり、銀座あたりへ出て、出來合ひの珈琲が飲みたくなるのである。まづいのを承知で。……ところが、この夜家を間ちがへて入つたカフエのまづさには全く眼の覺めるのを感じた。さうして漸く家を間ちがへたことに氣がついたが、すぐ逃げ出すのも變だから、食べたくもない果物なぞを註文して、稍暫らく腰を落ちつけてゐた。

先刻から、向ふの隅の方に、二人の若い男女がゐて、いづれも洋裝をしてゐるが、空の珈琲茶碗を前にして、タバコばかり吸つてゐる。この二人の紅い口から吐き出す烟りで、室の内はまるで霞がかゝつたやうだ。何を話すのか、ペチヤクチヤと、私のところまでは意味のわからぬ聲を發して、時には手を握りあつたり、頰を撫であつたり、いまにもキスをしかねない勢ひだつたが、タバコの烟りの中から透かしてみると、いづれも麗はしい目鼻立ちで、男は細面だし、女は圓顏である。どつちも白粉をつけて、口紅が赤い。

やがて、二人は何やら言ひながら、突然立つて背後のオリイブ色の帷の内へ、隱れるやうに入つたが、暫らくして出て來たのを見ると、今度は細面の方が女になつて、圓顏の方が男に變つてゐる。私はあッと驚いた。

其のうちに、他の卓子へ幾組もの男女の客が來て、可なり賑かな夜景を呈したが、電燈の光りのどうも暗いのを、私は氣もちわるく感じながら、妙に惹き付けられて、最初から居る一組

みの男女の方ばかり見てゐた。全くどッちが男やら、どッちが女やらわからないのを面白く思つたのであつたが、この男女はそれからまた珈琲を一つづゝ啜るやうに飲んで、タバコを吹かしながら、女をさきに男はあとから、同じやうな足どりで、二階を下りて行つた。私が追つかけるやうにしてこの家を出たとき、どつちが男だとも女だともわかない二人の姿はもうどこにも見えなかつた。

現代人は、いろ〳〵の享樂に飽きて、遂ひには表面だけでも、性の交換をやつて娯むやうになつたのであらう。強烈な飲みものや、其の他の刺戟では、もうどうにもならない。それが現代人の肉體なのであらう。

何かうまい仕事は？

高田保

何かうまい仕事はありませんか――と三人集ればきつとこの挨拶が誰かからか出るのである。すると聴手も同感して、實は私達もそれを探してゐるのですよ。といふ風に微笑してうなづくのである。例へばそこがあの華かなカッフェの隅であつても。

これは世相である。

誰も彼もが現在の自分の仕事に不滿であり不安であり、何處かに安心の出來る場所は無いものかと探してゐる形である。ある人が今の世を「失業日本」だと言つた。失業者にとつて仕事を探す事は勿論必至的だが、失業以前の者にとつても準必至的である。

首になる心配の無い點ぢや商賣が一等だ、――とそこで市長が饅頭屋さんになつた。そのニュースは全國に飛んで澤山の人を心から動かすのである。もしも饅頭が首尾よく賣れて捌けさへするならば、坐り心地の悪い廻轉椅子の上に腰かけてゐるより蒸籠の湯氣にむせてゐた方がどんなにいゝか知れやしない。

あのニュースを新聞紙が寫眞まで入れて大々的に扱つたことを記者の愛嬌だなどと思つてはいけない。今の世相の上にあつてはあゝした事こそが所謂報道價値を持つてゐるのである。

商賣をするなら、しかし、銀座だらうな。――と一人が言つた。

銀座なら、しかし、どんな商賣をするか――と別な一人が言

つた。

銀座で店を開くには、どうしても最低五七萬の權利金を支拂はねば出來ぬさうである。萬端の資本で十萬は越すであらう。ところでこの可憐な空想家達の財布は、馴染の女給に應分のチップを拂ひ得るだけが精々なのである。だが空想はつねにたのしい。切迫つまつた世の中なればこそこれがせめてもの慰めになる。――だがこの空想が今の世では決してお伽噺的ではなくなつた。テキサス州での大百姓になることや滿蒙の天地で馬賊の親分になることの夢も今ではあまりに古風である。今の世のロマンチシズムは銀座で商賣をすることにある。

僕は新しい理髪店を經營すればいゝと思ふ――と一人が言つた。今の世の中ではきちんと年期を仕上げていゝ腕になつた職人とても、店を一軒持つことは容易でない。そこで僕は銀座の裏へ二十坪ばかりの家を借り、一臺五百圓として十臺五千圓で椅子を据える。この椅子を月百圓敷金三つでその職人諸君に貸しつける。いゝ腕を持ちながら店の持てない諸君よ來れ、といふやうな事で。これはたしかに繁盛するぜ。

僕は三坪でいゝから荷物預り所をやつて見たい。――と別な一人が言ふのである。今日ではもう銀ブラは東京市民にとつての欠くべからざる休息なのだ。そこでその諸君のために、銀ブラ中お荷物預りますといふ事にする。郊外のぬかるみから足駄穿きでやつて來たお方には、散歩用お草履もお貸しいたします。綺麗なかあいゝ子供達を係りにして。これもチップが貰へやう。これならば大して資本の要る事ではないにしても、資本の要る事は確かである。この計畫そのものは決して空想的ではないにして、それ故に依然としてこれは空想である。

もし本當に銀座で商賣をする氣なら――とこの時、一人の女性が微笑した。あたしだつたら店なんか持ちやしない。

店を持たずに？

えゝ、さうよ、たゞ歩いてさへすりや出來る商賣！

かう言つて媚然とした。――さて、かうなるとこれは斷じて空想ではないのである。やらうと思ひさへすれば明日が日からでも始められる計畫である。でこの時折角の名案に夢心地であつた二人の男は、苦笑した如く互ひに見返つてゐたが、やがてしみじみ、實際これは大眞面目で、

成程、そこへ行くと女性諸君は羨しい。

かういつて長嘆した。

昔は達引、今は取引。

日本はどうしてウタマロの國ではなくなつたのか？　僕の知

合の一人のメリケンが急に拳固をかためて痛憤した事がある。だが僕は平然として答へた。――あなたの國が淸教徒のユートピアではなくなつたやうに。

彼と同國の男が一人の日本ムスメを戀人として持つてゐたのださうである。だが彼は所用で歸米しなければならなくなつた。そこで彼はそのムスメを所望した友人の一人に若干の額で賣つて行くことにした。とその時分、その日本ムスメが釋然として同意して言ふやうには「よろしいわ。だけどそのお金のうち半分は私のものよ！」

勿論これはウタマロの女性ではない。默阿彌のでもなければ紅葉山人のでもない。更には厨川白村のでもなく菊地寛のですらない。遙かにこれは近代的である。

僕はその後この挿話を三四の女性の前で傳へたことがある。するとその折、その彼女達が發した感嘆の文句に又しても啞然とした。曰く、まあ！　ほんとにその女の方、モダンだわね！

なぜモダンなのか？

彼女、颯然答へて曰く「だつてその賣つた買つた賣られたの中で、その人が一番職業的ぢやありませんか！」

すべてのものが職業的に。

藝妓ですらが――僕はかつて十八才の藝妓が、その抱主の息子なる、二十三才の大學生に向つて切つた明快な啖呵の文句を覺えてゐる。

「そりやあんたは立派に大學生で、あたし達はしがない藝妓だわ、だが一體あんたは誰の力で大學へ行けてると思ふの？　あんたが穢らしがつてゐるあたし達が、あんたの輕蔑する商賣で稼いでやつてればこそぢやないか。あたし達に立派な口が利きたいんなら、あたし達を絞らないやうにしてお言ひよ！」

だが、かうなるとこれは單に職業的のみではない。この言葉は立派に所謂階級的であらう。大學生は徒らに口をもぐ〳〵させた。

この話は極めてモダンなものである。だが人は決してこの藝妓の如きをモガとして呼ばぬだらう。なぜならば彼女はきちんと島田に結い、「逢ふは別れの始めぞ」と唄ひ、眺められる形は寧ろウタマロ畫中に似てゐるからである。

これをかの、銀座街頭、女だてらにオーバーオールを着被つた急進派女性に較べやう。

だが僕はこのオーバーオール族の一人を知つてゐる。僕は彼女と喫茶店の一隅で出會つた。彼女の胸にはほのかに何やらの香水が匂ひ、適當以上の按配をもつて塗りつけられた白粉と頰紅とは天井のシャンデリヤに美しく照し出されてゐた。がや

がて彼女は股の後のハンマアポケットから銀紙の包みを取出して。

「チョコレート、召上らない？」

それから彼女は胸のかくしからコムパクトを引出して、ぱた〳〵と已れの顏を叩いたものである。

彼女達は、思想を持つてゐない。しかしコムパクトは持つてゐる。――成程と僕は更めて合點した。これも亦たしかに一つの現代世相であらう。

だが男達は思想を持つてゐるか？

僕のある友人は、確かにそれを携へてゐた。彼は時に急に激しく議論を始め、その度にその携へた思想をポケットから把出しては已れの顏を化粧し直した。――彼は自ら謂ふところによればマルキストであつたのだ。

マルキシズムはある種の青年達にとつて一つのコムパクトである。――成程と僕は更めて合點した。これも亦たしかに現代世相であるに違ひない。

萬事厭な世相だ、とある人は眉をしかめた。

しかし世相とは人相の如く、よかれ惡かれ免れ難いものである。貧すれば窮した顏付きとなり、窮すれば世智辛い相貌となる。僕は別して皮肉の氣をもつて世相を語つたつもりはない。もし僕の言葉の中に何かしら感じられるものがあるとすれば、淡々漫然として僕が語つたのである以上、それは世相そのものの上にあるのであらう。ではなぜ世相がかうであるか。

が、讀者諸君よ、これでよいものか、果してこれでよいものか？編輯者の課した「モダン日本の再吟味」はこの質問からして始まるべきであらう。頓首。

カフヱ社會學

室伏高信

酒の歴史は珈琲の歴史よりも古い。モスレムの歴史からいつても、この民族は葡萄酒を愛用した民族であつて、「アラビアン・ナイト」のうちには、酒飲みの話が澤山出てゐるのでも分る。

珈琲飲用の發見されたのは十五世紀のことである。この發見とともに、宗教的なモスレムの人たちは、酒を止めて珈琲を飲み出した。回教の坊さんたちは禁酒を宣傳した。アメリカの禁酒

とは違つて、禁酒は嚴重に行はれ、酒の代りに、珈琲が、モスレム文明の常用品となつた。

酒と珈琲とは、如何なる職分をもつてゐるか。酒の効用は麻醉的(ナルコチツク)である。珈琲のそれは刺戟物(スチムラント)であることである。前者は理知の代りに靈魂である。理性人から永久小兒的な靈魂への復歸である。後者は、自由精神の喚起である。理知の刺戟である。靈魂の壓迫においての、精神の活動である。

前者が無意識の世界を代表するのに對して、後者は意識の世界を代表する。前者は文化に屬するのに對して、後者は文明に屬するといつてよい。

葡萄酒飲み(ワイン・ドリンキング)の時代に於てモスレムの文化が頂點に達し、珈琲飲み(カウヒイ・ドリンキング)の時代に於て、これが沒落したのは決して偶然ではない。

近代のカフエは、珈琲と酒とを統一した。流行の言葉でいふと、カフエにおいて、珈琲と酒との辯證法的統一が行はれた。意識と無意識と、理知と本能と、自由精神と自由靈魂との、辯證法的統一が、行はれたといつてよいかどうか——兎も角も、近代都市のカフエは、珈琲店でもなければ、居酒屋でもなければ、お料理屋でもない。カフエは近代都市の特産物である。希臘人は相會して酒も飲めば、ソクラテスは賣女アスパシヤの家で酒も飲んだが、彼はカフエのやうなものは知らなかつた。ロオマ人の間では、紀元前三世紀の頃に、葡萄酒の愛用が既に一般人民の間に擴まつたが、尙ほカフエの存在を知らなかつた。中世紀になつてからは、酒は、上流階級の間に限られ、ジヨン・ボオルの言葉でいふと、「彼等は酒を飲み、われ等は水を飲む。」——この點において平民階級は動物と撰むところはなかつたのだ。

近代都市は、一つの解放を意味する。それは、もちろん、その根本において金錢の解放ではあるが、それに伴つて、近代都市は、硬化した舊文化に對して、新しい解放の一般的通路ともなつた。奴隷の解放もそれ、商人の解放もそれ、知識の解放もそれ、婦人の解放もそれ、男女關係の解放もそれ、酒の解放もそれ——カフエの成立は、かくのごとき近代都市の解放的精神を象徵するものの一つとして、議會政治と並立するほどの重大な意味をもつてゐる。否、議會が純然たる支配階級の支配的欲望を代表してゐるのに對して、カフエは少くとも小ブルジョア的イデオロギイを表現する。議會政治に比べては一層高度の文明であり、一層高き解放を意味する。高度の近代的精神は、議會政治のうちにおいてよりは、カフエのうちにおいて、遙に多く示されてゐる。今日では、議會は田舍、カフエは都會といふ。

どの相違になつてゐる。更に、前者は老年を、後者は青年を、また從つて前者は亡び行く文明を代表してゐるにしか過ぎないのに對して、後者は亡び行く都會文明とともに、またそのうちに未來への一つの萠芽を孕んでゐる。歷史の年代學からいふならば、敎會、議會、カフエの順序であり、敎會が中世紀を、議會が初期ブルジョアを、カフエが後期ブルジョアを代表すると見ることができる。

日本のカフエは、ヨオロッパのそれに比べると、一層に高いものである。日本の文明が、ヨオロッパと、アメリカと、そして日本そのものとを、或る點において統一してゐるやうに、日本のカフエは、ヨオロッパ的なもの、アメリカ的なもの、そして日本的なものを辯證法的に統一する。この意味からして、日本のカフエは、外國において見ることのできない一つの特質をもつてゐる。

日本のカフエには音樂の欠けてゐるものが少くない。音樂なくしては、ヨオロッパではこれをカフエとはいはないのに、日本では音樂なきカフエが到るところに存在する。

またヨオロッパのカフエは、音樂とともに、賣女がつきものであるといつてもよい。ヨオロッパでは、これは一種の性的取引所である。ドアの開くともに、多くの賣女が先づ席を要所々々に占めて、客の來るのを待つてゐる。口の代りに先づ目をもつて物を云ひ、彼女等の職業を開始する。目から口となり、酒となり、タクシイとなり、ホテルとなり、金となり、肉となる。これは日本の引手茶屋を近代化したものだといつてもよいほどである。

日本のカフエはヨオロッパのカフエや、支那の茶館やのごとき、職業的性的取引所ではない。日本の老年はお茶屋や待合やにおいて、今日も尙ほ職業的性的直取引を享樂してはゐるが、われわれのヤング・ジエネレエションは遙にプラトニックであり、遙にロマンチックである。「プロレタリア・レアリスト」と稱するものと雖も、この點においては甚だしく小ブルジョア的ロマンチックである。こゝに女給の文明史がはじまるのである。

女給は、日本のカフエを彩る。カフエの花でもあるが、精神でもある。女給なくしては、日本ではカフエを想像することはできない。酒なくしてもカフエは考へられるが、女給なくしては、日本では、カフエの成立を想像することはできない。こゝに日本のカフエの世界に獨特な性質が存在する。

こゝに日本のカフエは單に酒を飲む場所、否、酒と珈琲──飮料によつての近代的官能陶醉の場所であるばかりではない。一層高い官能陶醉、戀愛實踐の場所である。

人々はカフエにおいて何をもとめてゐるか。戀愛を。カフエは戀愛の香りをもつて滿たされてゐる。流行のカフエであればあるほど、この香りは高い。この香りの高さに應じて人々が集まつてゆく。酒よりも戀愛が青年を引きつけてゐるといつていゝ。

だが、これは青年だけの問題でないことはもちろんである。それよりも一層重大なことは──日本のカフエの一層に重大な職分、從つてその文明史的な意義は、女性の解放といふことである。

女性の解放のうへから見て、日本のカフエは二つの役割を演じてゐる。それは凡ての若き女性職業の機會、就中特種の職業教育なき女性、無特權女性に對して廣汎な職業の機會を與へることによつて、一方には彼女等を家庭の桎梏から解放する。他方には女中奉公または賣女として奴隷化を免れることをえせしめる。第二には自由戀愛の機會を與へることによつて彼女等を性的に解放するの役割を演んずる。ヨオロッパのカフエが性的職業的取引所であるのに對して、日本のカフエは、自由戀愛の場所である。家庭の桎梏を破壞した若き日本の女性と、賣女の奴隸的職業的に滿足することのできない日本の青年とが、カフエにおいて自由戀愛を實踐する。女性解放の長い歴史は、かくのごとくして、日本のカフエにおいてその實を結びつゝあるといつてもよい。自由戀愛は、今日では最早や如何なる空想でもなくして、一つの實踐、經濟的基礎のうへに立つた、一つの實踐である。日本のカフエは正にその最高の場所である。

しかも倘ほこゝには一層に重大な時代が展開しつゝある。男が撰んだ時代に對して、女の撰む時代が來りつゝあるといふことである。

舞踏場素描

新居格

「君はダンスは好きかね」

「あゝ、すきだよ」

「やつてみたいと思ふかい」
「やつてみたいとも思ひ、やつてみる氣はある」
「ではなぜやらないのだい」
「暇と餘裕とがないからさ」
「やつてみる氣がどうしてあるのかね」
「やつてみると愉快だらうと思ふからさ。誰だつてやれるものを、やつてゐるものをやれないなんて業腹だあね。それにいい氣になつて踊つて居て自づと健康法にもなると云ふのならこれに越したことはないからね」

こんな問答をわたしはした。だが實際は遣つて居ない。知人の玉置眞吉が著はしたダンスの本を持つて來て與れた。玉置さんは四谷見附に練習所をもつてゐる。きわめて正確なレッスンを嚴格にやつてゐるらしい。「君もやりに來給へ」と勸められてはゐるが、年をとつての語學は續かぬごとく、玉置君の言葉に從つてやり出したところで永くは續くまいと思つてやらずに居る。テニスを始めやうか、フランス語をやり出さうか、ダンスを選ぶか、その悉くをやるか、そのどれもをやらないか。

全くの偶然から漫畫家宮尾しげをのお供をして澁谷の喜樂館へ行つた。行く道々ちつとも氣乘りはしなかつたし、いよ〳〵ホールの入口に立つたときには一寸足が立ち竦んだ。どうもプロレタリヤの演說會場に這入つて行くやうな譯には往かなかつた。だが兎に角這入つて行つて片隅の椅子に凭れて見物したが、這入つたときは五分か精々十分位見て直ぐ歸らうと思つてゐたのだが、少くとも二時間ほど倦きもしず、むしろ興味をもつて深く眺めた。第一わたしは日本のダンス場なんてもつとく〳〵含臭いものだと計り想像してゐたのだが、想像に反して中々立派なのに先づ驚いた。何故二時間ほども見てゐたかと云ふのに、實際だけに活動寫眞のダンスの寫しより趣味があつたからだ。チヤツヅ音樂につれて男女相擁して踊ること、それは踊る當人には愉快だらうが見物して居ても面白い。ブルウズなぞは上品でもなく馬鹿氣ても居るが、その馬鹿氣てゐるところが馬鹿々々しく愉快である。少くともダンスの見物は魚を釣つてゐるのを見るよりは比較にならぬ愉快さである。それにダンス場のもつ雰圍氣、そこにいい氣に、快活に、分別も理屈も投げ捨てゝ踊つてゐるところに何かしらがあると思つた。それは全く馬鹿氣てはゐない。理屈つぽい連中は「ダンスなんぞブルジヨア的な……」と云ひたがる。尤も帝國ホテルで催すダンスなぞは所謂淑女紳士のお集りで、それこそひどくブルジヨア的なものらしいが、營業的ダンス場はそんなではない。しかし、ブルジヨアの呑氣な坊ちやん達、輕快と裝飾とをかたりの程度にす

きらしい當世男達の世界だと云ふ氣はする。ダンサア達は一種の職業婦人としてそれらが織出す云はゞモダン享樂風景である。それだからと云つて目角を立てゝ神經質な瞳を投げる必要がどこにあらう。わたしはそれにだつて快い寛容を感じたい。第一資本主義者がもつ貪婪な狡智や、詰らない心配事やこだわりなぞはいい氣持になつて踊る瞬間にだけはなからうではないか。ダンス自體が惡い理由はない。たゞ現在のところそれは淑女紳士、ブルジョアのどら息子、ソーダ水のやうな當世男達の歸屬になつてゐるから、ダンス自體までをプロレタリアの狹量な憤慨家が唾を吐くやうに一口の下に斥けたがるのだが、プロレタリヤ文藝プロレタリヤ映畫等々がある限り、プロレタリアダンスがあるべきではないか。

わたしはそんなことを考へながら音樂館の見物席に凭つてゐた。そのとき菜葉服のダンス場を幻想した。音樂が鳴る。筋骨逞しい、晝間はハンマアを振つて生産的な勞働に從事してゐた勞働者達が工場からの歸り路とか、日曜日とかに晴れやかな氣持で、健康と勞働とを象徴した菜葉服のまゝで愉快に踊るダンス場、わたしはしらずしらずにそんな夢に耽つてゐた。

音樂は分からないが、でもわたしの頭は何時の間にかリズムの支配を受けてゐた。宮尾君は云ふ「妙なものだよ、君、第一回の見物のときと、第二回目のときとは餘程感じ方が違つて來る。三回目になると一つ俺も踊つてみやうと云ふ氣になり、仕舞には踊らないでは居られなくなるよ。」

リズムの支配力はたしかに効果的だと思つた。見物席にゐるわたしは何時とはなしに自分と同じやうに肥つた男に特に目をつけてゐることが分かつた。

「あの肥つた男、あいつはたしかにまづいぞ。だがこちらの男あんな大きな圖體をしてゐて何と云ふ輕妙さで踊つてゐることであらう。」

と思つた。そうした不知不識の觸目は多少ともリズムの影響を受けた頭が自分自身を餘程踊ることの假想の下に引張つて行つて考へさせたことではないかと氣付いてひそかに苦笑した。

ユニオン・ダンス・ホールと千代田ビル階上のホールとは同じ日の同じ夜に長谷川文人君の案内で一擧にして見物した。そのとき長谷川君が舞踊の種類、ダンサアスの巧拙、その他に就いてひそかに説明の勞を取つてくれたのでよく分かつたが、私の見たところではユニオン・ダンス・ホールの情景は澁谷のそれに比しては一段と華やかで、ダンサア達も多いし、室內照明の色も柔らかで床板がさらに綺麗だと思はせられた。「中々盛んなものだな。こんなにまで發達してゐたのかなあ」と私はひそかに

驚いた。レコード音樂が止んで、ヂヤツズバンドが着席する。ダンサア達は喝采する。チヤツヅ音樂が鳴りひゞく。とそれに應じて勇み立つてパトナアの方に向つて進み行く舞踊享樂者の群、これはまた何と云ふ愉快そうな、いゝ氣な、快活さだ。一頻り、幾十組のダンスが肉體的リズムを薄むらさきの光線のなかで搖曳させる。

「君もやらないかね」と長谷川君は云ふ。

「だつてやるにも何にもステツプやタアンは無論のこと、足のポズイシヨンだつて知らないのだからよすよ」

「なあに譯はないさ。ダンサアのするやうについて行きやいゝのだよ」

「何しろ、曾つてやつたことがないのだから止すよ」

と云つたものの、「なあに大膽不敵に遣つてのけてやらう」かと餘程思つた位であつた。

そこでは、ユニオンでは數人の外人が踊りに來てゐた。中年の男女であつたが、一人は頭の禿げた老年がゐた。その老年の踊るのをわたしは注意して眺めた。人の善さそうな老年でその人が踊つてゐるうちに頬が紅潮して若々しさが輝き出たのを見て感心させられた。この國の老人もせめてあんな風に氣輕に踊る位であればいゝがと思つた。

ユニオン・ダンス場から千代田ビルの階上に來た。こゝでも約一時間見物した。こゝの踊りは靜かで上品だと教へられてゐたが、そんなやうにも思へた。

爾來わたしにダンス場の見物には行かない。自分の仕事が極端に忙がしい事情の下に置かれて來たからであるに過ぎない。今更ダンスとわざ〳〵云ふにも及ばないとも云へる。特に目角を立てゝ反對するほどのことでもなければ、特にそれに力瘤を入れて熱説するでもない。が事實中々盛んであり、さらに盛行する兆があるかのやうではある。そしてそれが今の所謂モダン・ライフの相當有力な享樂的現象の一つでもあるやうだと思つてわたしはわたしの見物記を感想を交えながらスケツチした。

もつとも、ほんとうのモダンの精髓は、今多くの人々が稱してモダンと概念するあらゆる現象より却つて簡素化された樣式のうちにあつて、今の複雜と亂雜とを單純化し直線化したところに還元されてあるのではないかとは思ふが、それはたゞしここでの問題ではないらしい。

東京市會の暴露

石井満

後藤系の潰裂

東京市政紊亂の甚だしき、今日の如きはあるまい。

その市政紊亂の源因は、遠く後藤系の潰滅の日にあつたと云つてよい。

それにつけても、子爵後藤新平氏が、東京市會におけるタマニーと呼ばれた常盤會一派沒落の餘をうけ、一族郎黨をひきゐて衆望を擔ふて東京市政に乘り込んだ時のいかに華々しかりしことよ！

彼れ後藤子爵は、いはゆる三田二平の內閣と謳はれ、東京市空前の高給をはむ人材を以て市の幹部どころを形造つた。三田はいふまでもなく、助役の三羽がらす、永田秀次郎、池田宏、前田多門の三氏であり、二平は御大の後藤新平、電氣局長の長尾半平の二氏の謂ひである。

この人材內閣は人ごのみに氣位の高い東京市民の虛榮心を滿足させるには十分であつた。

否、さすがの市會議員も、これ等の人間の前には一寸手が出せない形であつた。

『三人の助役はめい〳〵特長のある武器を持てゐるのでさすがの東京市會もグーの音が出せないでゐます』

當時鶴見祐輔君などはとても感激して話したことだ。その感激はしかしあまり長くは續かなかつた。

もと〳〵市會議員なんて人種にとつて、市の利益だの、市民の幸福だのといふものより、自分達の賣名の方がはるかに急ぎで、重要なんだから、「××市長、△△問題を提げて、後藤市長に迫る」と云つた新聞記事でも出やうものならば、鬼の首を三つも取つた氣になつて、仕舞ふし又、こんなことを唯一の役得とまで心得てゐる連中が少くないので、何時かは、「名市長」とまで仰いでゐた後藤子爵に對しても、ツケ〳〵と（勿論それは市會の議場だけのことだが）物を云ふやうになつたものだ。

そこで一代の大政治家を以て自ら任じ、東京市長位では勿體なさすぎると自他共に許してゐた後藤子爵たるもののおさまる筈がない。彼れは、「逆鉾立ちをして三べん東京を廻つて見せる」てな名答辯を名殘にして、名を日露交渉のための多忙にかりて、未練もなげに東京市長の椅子からサッサと逃げ出して仕舞つた。

頭目に逃げられた後藤系は慘憺たるものだつた。今日が日まで、後藤系にあらざれば市吏員に非ずとまで思はれて來たものが、大

ら落ちた猿同然のはかなき狀態になり果てたのだ。

後藤子爵は、市政紊亂、市疑獄の後をうけ市會全會一致の推薦で、云はゞ市議連が七重の膝を八重に折つて、懇請した結果やうやく市長の椅子におさまつた人である。三萬圓の年俸をきめたのもこの人であるが在職中の俸給は殘らず市に返上して、十萬圓の報勞金も右から左に少年團に寄附すると云つた具合、さすがに東京市長としてのやり口は堂々たるもので市會市參事會の席上でも、いつも市議連をおさへつけてゐた。市政刷新はまづこの人をおいては困難と云つてもよかつた。その後藤子爵の辭職を見た上は、後藤系の人達は一齊に辭職を斷行して(少くとも幹部だけは)市政は、現狀のままでは、とても刷新も、肅正も、改革も、その實をあげることが困難である旨を內外に表明すべきであつたと思ふ。

市政を刷新すべき最も手近にして簡單なる方法は、不當なことや違法のことを要求して來る市議達に對して、市の理事者が職を賭してこれを拒絕するの外はない。それがためには、場合に依れば、その事件の內容を世間に發表して、市民の批判に訴へて、市議達を反省させることが最もいい方法である。丁度電車のなかの混雜にまぎれて、わるさをする男子達に對して婦人のとるべき最後の態度が聲を大にしてその男を居たたまらなくするにあることと同じである。處が、市の吏員の中には、そんなことをもつて來る市議達と相結んで自分の榮達を計らうとする了見のものが居るので厄介である。

たとひ、そこまではゆかずとも、一旦席についた以上敏腕家とか、才物とか、人を操縱することの出來る腹のある人物とか云はれたさに、果斷の處置もとりかねてゐると、そこが市議達のつけ目で一歩一歩と深入りをして來ると云ふ寸法である。

ところがこの場合、後藤系の色をつけられた數百の吏員の運命の問題などもあつて、永田は市長を受諾することになつた。そこで問題は長尾の市電局長であつたが、これも當時市議中の雄將、若林成昭君などが「電氣大王として殘留し給へ」などと煽つたもので、役不足ながら長尾も遂に踏みとゞまることになつた。

革新會前期

永田秀次郎氏が、後藤子の後任として市長となつたのは、氏の言葉をかりるまでもなく「綿入り市長」の感が多かつた。なるほど氏は世間のいゝうけと云つたやうなことになるとさして不評判の人ではない。だが、ともかくも大盤石のやうに市會議員を押へつけて來た後藤市長なき後の永田市長では、あまりに輕るすぎる感じがした。機敏なる市議連が、この比較的お粗末な市長の在職中に「するだけのことをしてのけやう」と決意したのはあまりと云へば當然のことであつた。

「飢ゑたる者は食を得易い」の譬にもれず、このたん〳〵と機會をねらつてゐた彼等の眼前に恰好な場面が展開された。それは、市長と電氣局長との間に漂ふ一抹の暗雲である。もつと具體的に云へば、永田と長尾の性格の相違から來た理事者間の不統一である。

東京市の要所の三分の二を占め、物品の購

入だけでも年に二千萬圓もすると云ふ市電氣局、一日の收入七萬を下らず多きは十二三萬圓に上ると云ふ市電氣局、金に人が集り、人が集るに金の必要な政治の舞臺にあゐて、この老大なる世帶の持主である市電局長の位地は或る意味において市長以上問題になる。

その局長が腕前にかけては市長以上といふ評判の人間であるから事はます／＼復雜である。市電局長は仕事をせねばならぬ。市長は時として、責任だけ負へばすむ職掌である。而して長尾は有名なクリスチヤンで禁酒黨で、彼れの就任披露の際にも酒の代りに水を出して物議をかもしたといふ一本氣の人物、永田はそれに反して、宴會の席上では小唄の一つも歌つて大向の喝采を博すと云つたやり口の人物であるから、當初、永田がやり損じて長尾が立派にやりのけると思はれた一般の豫想を裏切つて、永田はいたるところで評判がよく長尾はいたるところで不評判を招いてゐた。こんな性格の相違、立場の相違からここに後藤なき後に、後藤系の不統一といふやうな空氣がどこからとなく濃厚になつて來た。

時恰も大震災の後をうけて、東京は大混亂の最中である。東京市會は事ごとに市電局長を排斥して、市長を信任するかの如き形勢を示してゐた。この空氣は最も鋭敏に市當の吏員達の感情を支配した。

この狀勢を見て、ひそかに「時機到れり！」と、ニッタリ薄氣味の惡い微笑をもらしたものこそ、誰れあらう三木武吉君その人であつたのだ。

三木君は、早くから、全國に先じて、東京市にあゐて、憲政會の人氣がはるかに政友會のそれを凌駕してゐることを知つてゐた。この空氣を巧に操縦してゆけば、坐ながらにして政界の大物になり得ることも、承知してゐた。

三木君が政友系の市會におけるおん大將鳩山一郎君をしのいで、市會における絕對權を把握する機會が、この後藤系の、長尾永田兩者の間隙の間から生れて來やうとは、さすがに「政治は生き物なり」なんて、悟りきつたやうな顏をしてゐる其の道の玄人にも解しかねるところであつた。

だが、事實は、小說よりも複雜に展開して來た。

ここに關浦與七君といふ人物がゐる。山下あたりを中途でやめて、無限浪人の境遇であつたのを、當時の東京市政調査會常務理事松木幹一郎氏の折紙つきで兼ねて當時の市電の理事齊藤力君の推挽といふふれ込みで、市電の經理課長の要職をぬれ手で粟とつかむだ人物である。一年に二千萬圓からの物を買つたり、契約したりする、云はゞ大金持の大番頭とも云はるべき職務を無條件でボンと、經歷もない一靑年に與へたが亂暴と云へば、受けたも無謀と云つてもよい位のものだつた。唯これで見ても長尾といふ人が自信がつよく、市政を私しやうと云ふ偏見を少しも持たなかつたといふことはわからう。

この人物がトン／＼拍子の出世に、何と血迷つたか長尾の不評判をいいことにして、自分の推薦者齊藤力を市電局長にしやうと云ふ計劃をかきそくなつて首になり、切られた首をかかへ込んだのが、横ニラミに理事者のやり口を眺めてゐた三木武吉君の處であつた。

豐浦は三木と同鄕といふ所から、自ら三木の乾分を以て任じてゐた位のいい氣な男であつたが、三木にとつてはこれ屈竟の獲物である。早速この者の處分を瀨川光行君に命じたものである。

そこで豐浦は自分の在職中に手がけた仕事のどれこれから推して問題になり相なもの丶ありつたけを瀨川に話しこんだものである。その材料を克明につぎ合せて、堂々一時間ばかりの質問演說にデッチ上げて、大見得を切つたのが例の瀨川光行出世演說の一つである所の長尾局長糾彈の質問演說であつた。

瀨川の話があまりに當局の機微と思はれる所を細かについたので、誰れが聞いても豐浦の入れ智慧としか思はれないので、瀨川と犬猿も啻ならぬ仲の同じ四谷區選出の市議本田義成君などは、彼れの質問演說がすむと、「議事の進行について」發言を求めて、「こんな細い質問は、誰かの內通なしには出來ないことであるが、部內の秘密を洩す獅子身中の虫のゐたことは、市電にとつて迷惑だらう」と云ふやうないやみを瀨川に云つたものである。

だが、こんなことが動機になつて、市電に何か問題がある、ソレ伏魔殿の市電を調べろとばかりに、クリスチャン局長を罪人扱ひにして、十四人の市政檢査委員が、每日市電に乘り込んでア書類を調べるやら、係員を呼び出すやら、大騷ぎをやつたものだが、もと〳〵市電の番人たる經理課長の首を平氣で切れる位の、局長に、カラクリのあるべき筈がなく、十四人の委員達も一寸ひつこみがつかないといふ形であつた。この長尾局長いびり出し委員のなかに今度の疑獄でひつぱられた瀨川だの小俣だの、といふ人物がゐるから面白いではないか。

瀨川の書いた局長おひ出しの計劃は見事に外れた。だが、この矢は立ち所に用意された。今度は、震災のドサクサまぎれに乘じて新らしく出來た市の圓太郎こと、乘合自動車が最初の計劃のやうに儲からぬといふ云ひ分で局長不信任の氣勢をあげて來た。

一體、東京市には、「交通統一の決議」といふのがあつて、交通機關は市において之を經營するといふことに市會が決議してゐる。この決議に基いて、今日でも私鐵道や、郊外電車の市內乘込についても、市としては印でおしたやうに反對の決議をすることになつてゐるのである。ところが大正六年のころ、時の警視總監が市に何等の相談なしでダシヌケに今の靑バスの營業を許して仕舞つた。突然でも、ダシヌケでも許されて仕舞つては後の祭で、當時東京乘合自動車は、都大路をひとり我物顏で橫行して一日六七萬人もの人を運んでゐた。大都市の交通機關としての乘合自動車の値打なんてものを、ゴマメのあたま位に心得てゐた市議達には、この靑バスの獨占のところへともかくも圓太郎をわりこませた市電當局の苦心などがわからう筈もなく、その圓太郎が開業早々に廿萬圓も欠損をしてゐると云ふので長尾局長不信任を唱へ出したのである。

悲しいことには、圓太郎の計劃にあたつて、理事者の說明は、當初から相當の收益があることになつてゐた。公益事業を計劃して、最初からソロバンがとれなければ贊成しないやうな市議が大都市の代表顏をしてゐるからな

さけないことぢやないか。東京市の理事者となるには、そして仕事をしてゆくためには、この位のウソは散薬をつゝむオブラート位に心得てゐなければ出來ない。ところが何と云つても損は損である。これを正面からつつかれては、正直なものは責任を感じないわけにはゆかぬ。當時當局者の一人であつた僕などは、何事も三年待たねば分らぬ、圓太郎なども三年後は必らず物になると云つたがここに星霜を閲する正に三年にして、圓太郎は東京市での唯一のかせぎ者となつた。そして當時の反對者が殘らず疑獄の人々となつたのは少しく皮肉がすぎてゐる。

それはさて、かく二度三度と不信任案をつきつけられては、すまじきものの宮づかへする理事者は弱い。永田も、はじめは市電が事毎に物議をかもして、本市の方が安全なので、おさまつてはゐたものの、あまり市電の不信任がつよくなると、自分の頭の上も危くなるとでも感じたものか、長尾救濟に少しも乘り出して來ない。ムザ／＼長尾に詰め腹同様の最後をとげさせて仕舞つた。毛利元就の例をひくまでもなく束(たば)になつてゐればこその力で、長尾を見殺にした永田があとで大道局長問題で雪隱詰になつたのも自ら招いた運命で、後藤系が無殘な最後に終つたのも結局、そのなか間に一つの統制がなかつた爲めであつた。

それはともかくとして血を見ると獸はますます狂ふと聞くが、瀬川も、局長押ひ出しに成功すると、從來の無名の一市議ではなくなつて來た。立派な三木派の殊勳者である。彼れはやがて三木の參謀格の地位をかち得るやうになつた。

豐浦はしばらく社會局の囑託か何かをしてゐたが、機會は再び彼れにめぐり來つて、革新會の天下となるや、三木、瀬川は、早速彼れを商工課長に採用させて、ここに板舟事件の端緒を作るに至つたのであるが、ローマは決して一朝に出來たのでなく、彼れ等が東京市政を乘り取るまでには、實にかうした事件を數年間くり返して來たのである。惡事をする者の根柢はかくまで深いことを知らねばならぬ。

市電の一角崩る！　これ市役所内では青天の霹靂である。後藤系の沒落、三木派の擡頭。爾來瀬川も三木派の重鎭として文部に名をなして來た。

元來、市長を自分達で選ぶ市議達は、市長以下の市の吏員などは、自分の家の下男位にしか心得て居らぬ。そこで、市の吏員も、何がな市議の後援があれば肩味も廣い氣がするらしく、常盤會全盛のころは、市長以下の幹部は市役所に出勤前、必らず森久保、高橋、辰澤などの私宅に伺候したものだ相だ。今日でも、吏員の市議宅通ひはやまつてゐない。

成績不良、出欠不同などいかゞはしい吏員を調べ上げて見ると、チヤンと「何々市議推薦」となつてゐるとは市役所内の公知の事實である。この空氣のなかで、市電局長をさへ殘し得た瀬川に、市役所内の吏員がいかに追從して行つたかは想像に餘りある。彼れが刑の如く名をなして、彼れが刑の如く失脚したその間僅かに三年である。

市政刷新運動と革新會

東京の街を歩いて見る。家でも、道でも、電車でも、下水でも、堀割でも、そのほかのものでも、よくもこんなに不揃で、無統制でメチヤ／＼であるものだとむしろ感嘆したくなる。東京市のあらゆるものがしかく無秩序亂雜であるなかにひとり東京市政ばかりを刷新してゆかうとするのは無理な話かも知れない。それにしても、今日の東京はチトひどすぎる。

大阪を見ると、市長のことだけを考へて見ても、擲きにやめた池上四郎氏は十二年も勤め上げて三十六萬圓の報勞金を貰つて芽出度く退いた。今の關一市長は經濟政策の學者でしかも、電鐵部長から助役、市長と鰻上りに勤め上げて、しかも市長になつてからも重任してゐる。今の分でゆけば關氏も十年位勤めるかも知れない。ところが東京は最近數年の間にも後藤、永田、中村、伊澤、西久保、市來と猫の目のやうに變つてゐる。これで自治體の仕事が出來てゆけば天勝以上の奇術を見せて貰ふわけである。

市會議員は、少くとも各種の職業を代表して自治體の世話役たるの名を恥かしめない人物であつてほしいと思ふが嘗つて誰れかゞ調べたら、八十八人中の三十人近くは辯護士であつた。これでは議論たをれになるのも無理はないと思はれる。

また、中央政治の腐敗も、自治制の運用の妙に依つていく分調節される。自治制の運用は所詮人である。ところが東京市會議員の名を見ると、知識階級を代表するやうな顏ぶれが至つて少い。東京市會の名に恐れをなして並大抵の人は逃げ出して仕舞ふのだ。これではいけない。本當に市民の世話面倒を見てくれる人を、本當に市民の利益と幸福を代表してくれる人を市政の壇上におくりたいといふ運動は從來とてもない譯ではなかつた。

だが、この市政刷新運動も皆中途にして敗れてゐる。何故だらうと云ふ前に、ここに市政刷新といふ看板をかけて見事に成功した唯一の運動のあることを話して見やう。

記憶のいい讀者は、大正十五年の初夏に行はれた東京市會改選に方つて、先づ實業同志會が、東京市政刷新の運動をおこして專ら言論に依つて市民に訴へたことを記憶して居られるだらう。彼れ等は、尾崎咢堂、や小林丑三郎、添田壽一、近藤乾郎等々幾多の名士に演說をさせたり、活動寫眞にスローガンを織り込んだフヰルムを見せたりして、市內に百回に近い宣傳戰を行つた。

その前から後藤系の人々に依つて市政刷新聯盟が組織され大正九年の改選のときには突如十數名の理想候補を押し立て、宮島淸治郎、山崎猛吉等々の人々を刷新市議として送つたが、淸流に魚すまずでこれ等の人々も二度と立候補する勇氣もなく、刷新聯盟の人々も思ひの外に計劃がのびずにゐた。

その間に、吉野作造、安部磯雄、高島米峰と云つた指導階級の人々を中心として主として文筆言論に從事する人々の市政革新同盟といふものが、これもお手のものの言論文筆を以て市政革新の要を市民に訴へてゐた。

時もあれ、その改選直前に、計劃熟してか三木君を中心として市會の憲政會系の人々は大膽無謀にも革新會なるものを組織し莫大な金力を背景として、八百屋の板のやうに六十

數人の候補者を全市全區に擁立して華々しく打つて出た。

當時、市政の革新を叫ぶものゝ所論は期せずして、中央政黨の魔手を自治體から排撃せよ！と云ふことに一致してゐた、その矢先きに、何たる横暴、何たる無謀の企てぞや、識者はひとしく、この革新會の出現を呪つたのだ。

だが「政治は力なり」と云ふ言葉はこの場合最も正確にその價値を裏書された。選擧の結果は五十名といふ絶對多數で革新會は立派に(？)東京市會を横領することになつた。不正なる金と力とに對抗することの出來ない東京市民には既に「江戸つ兒」の精神もなくなつて仕舞つたのであらうか。

革新會の勝利と見るや、人間ばなれのした中村市長は進んで辭表を提出して、その鼻先を挫いたが、三木君にとつては、要するに思ふ壺のことにすぎないので、伊澤市長を自己のくわいらいの種とすべく押立てたことはあまりに世間に明白な事實であるが、かかる事件の結果が果して市民に何の利益をもち來らすか、禍を招待するかについて考へもしない東京市民の、「市政無關心」もあまりと云へば極端である。春秋の筆法から云へば、今次の大疑獄事件の眞の責任者は、革新會の候補者に投票した有權者であると云つても差支ない。

だが、革新會も當初の豫想通りに、多數を頼むで市政を左右することは出來なかつた。いま革新會はじめ市會各派の消長をあげて見ると、

	改選當時	解散ノトキ
革新會	五〇	二六……民政
正交會	一六	一六……政友
中正會	一九	一九……準政友
中立クラブ	……	一二……準民政
二八會	……	八……不明
無所屬	三	二……稲村藤太郎氏 田代博士

このなかで革新會だけの分を更にくわしく説明して見ると、

革新會

(一)大正十五年六月改選の當時五十名
(二)ガス問題のために六名脱會四十四名
(三)西久保市長彈劾の際八名脱會三十六名
(四)爾後死亡失格脱會のため三十六名となる

と云ふ順序で、次第にその頭數を減じてゐる。

ガス問題のことを書く前に、革新會と市長の關係を一言云つておく必要がある。三木に依つて擁立された伊澤市長は、市役所に出勤すること僅かに三十數日で突然その職をやめてゐる。この短命市長辭職の理由については、ガス問題にからんで革新會を脱會したある市議はかう云つてゐる。

「伊澤君辭職の眞の理由は、革新會が市長にガス報償契約の改訂と、板舟權の問題の提案をせまつたからで、現に革新會のあるものは、伊澤君を輕井澤の別莊に訪ねてこれを迫つた事實がある。そこで、伊澤君はさすがに革新會のくわいらいとなるに甘ぜずしてやめたのである」

と、伊澤氏はさすがに自己の將來に對する自尊心を重しとした。これに反して、西久保市長に至つては警視總監をやめて市川に閑居し政界に再起するの見込がなかつた人である。そこで濱口内相の官邸に呼びつけられ三木や革新會幹部の立會の上で、前記二案を[illegible]

案することを條件として市長受任の腹をきめたと云はれてゐるだけに、豫定の行動として一昨年二月一日の市會にガス問題の案を提出した。

元來ガス會社の報償契約は、先年千代田ガスと東京ガスが合併するときに、東京市と報償契約を結んだもので、その骨子は

(一)東京市は東京ガス會社の地下埋設物のため、地下を使用することを認めて、他の會社に許さないこと

(二)瓦斯會社は之の特典に對して、利益の百分の六を地下使用料の意味で市に納附すること

(三)また株主への配當は年九歩をこへざること、九歩以上の利益あるときはこの半は次年度のガス料金の値下に充當すること

であつた。

大正十五年六月に選出された市議達は大正九年當時の市議達がいはゆるガス疑獄までおこしてガスの値上を斷行した時の石炭の單價が三十二圓位から十七圓位に低下してゐることを發見し、その年の九月七日に理事者に對して、ガス料金値下を會社に交渉をすることを決議してゐる。

ところがこの決議さへ無視して、翌年の二月に西久保市長の提出したガス報償契約の改訂案はまるで市民の利益を無視し、會社の利益を主とした案であつたので、革新會としては即決可決の意向であつたけれども、他派の強烈な反對にあひ、この案の運命は病を押して市會に出でた長町康夫氏の一票で革新會の敗亡となり委員附托となつた。ガス問題の眞相についてはもつと詳細に書きたい材料が山積してゐるが僕に與へられたスペースも漸く少くなつたので一と先づこれで切りあげておくが他日更に筆を改めて書くことがあらう。

一葉落ちて天下の秋を知るとは、全くこのときの革新會の有樣を道破したもので、それから革新會の絶對多數はぐらつき出したのである。

革新會の絶對過半數がグラつき出しても彼れ等が惡事をやめるといふことにはならぬ。利權の前には敵も味方もなく、政黨の別もなく彼れ等はこれからも大ピラに他派と協力して惡事を行つてゐる。

なぜ、革新會がガスの問題をかくまでさつきになつて提案を急がせたがつてゐるかと云へばそも〳〵ガス會社の増資に方つて、百十萬株のなかの九十萬株は舊株主に割あて、殘る廿萬株は重役會に處分を委ねたところが重役はその割當をしなかつたので、これが株主總會の問題となつて、やうやく四萬五千株だけは株主に割當てたが、その殘餘は僅かに三萬株位を社員にあてた外全く不明で、これを時價一株十圓とするも百二三十萬圓の金になる。その中の約五十萬圓で、革新會の六十三名の候補が、擁立されたからだと云ふ人がある。

ガス問題はその後やかましい問題となつて、渡邊勝三郎、鈴木寅彦等の重役連が警視廳の取調べを受けたが、何故か突如事件はその進行をやめて、この疑問の大事件は暗から暗に葬られた。

これは取調べがすすめば、政友、民政、双方から相當多數の怪我人が出るので、かくてはお互のためにならずと同病相憐むだ次第で、この謎の問題は西久保市長おひ出しを條件として革新會員の檢擧の手はゆるめられたとも傳へられてゐる。

當時取調べを受けた小俣政市などは、「大久保刑事部長は西久保のおひ出しは内閣からの命令で之に贊成すれば取調の手をゆるめてやる」と云つたと公言してゐる。

これではまるで警視廳は罪人の取調べをするところではなくなつてゐる。

思ふに三木と中島とが固い握手をするに至つたのはこのころからのことで、この後にも多摩川上水流木權問題などがあり、二者はます〳〵接近したものらしい。

ガス問題をウヤムヤに葬つた警視廳の態度は市議達の惡事を大ピラにやらせることに十分のききめがあつた。

「もうどんなことがあつても警視廳はおれ達を縛ることは出來ない」

ある市會の幹部の一人は、かう傲語したといふ。

板舟權と京成電車

東京の市會議員のお手當は一年に僅か千二百圓、月に百圓にすぎない。

ところが市會議員になると連日連夜、待合や料理店に夜を更かして、家に歸ることはまれである。よくもかくまで遊興費がつゞくことと調べて見ると、結局誰れか頭株の人間が負擔してゐる。名もない辯護士だの、小賣店の主人だの、無職の人間だのが、かくも贅澤三昧をしてゐる裏面には誰か一切の締めくくりをしてゐる人間がなくてはかなはぬ。現に新橋の花月には、小島七郎の名で去年の九月に六千圓の借金が出來てゐたが未だ支拂はれたといふ話をきかぬ。その外、柳橋にも濱町にもいろ〳〵の人間の名でかなりの市會關係の支拂が殘つてゐる筈だ。

結局市會で牛耳をにぎる人間とはこの支拂勘定をすませる力のある人間のことで、新聞で見ると、僅か五百圓か千圓の金で、市會議員ともあらうものがその節操を賣つたかのやうに書いてあるが、それは大きな間違ひである。平生のお手當に莫大な費用がかゝる事實を見のがしてはならない。だから頭株の一人は必らずその背後に十人か十五人の市議をもつてゐるわけで甚だしいのになると一切の生活費まで頭株の人間から貢がれて生きてゐる市議殿もあるわけで「三木の丸抱」などと云はれたのはこの事である。

板舟權や、京成問題が市會の議にかゝるに方つて、各派の協議會が開かれた。ところがその各派の常任幹事達が擧つて無記名式による投票を主張したものである。元來市會では重要な案の贊否を決するには記名投票によるのが原則で無記名は明かに不當であつて、この事實を以てしても、この二案を通過させることが、各派の意向であつたかを窺ふことが出來る。

この明白な問題に敢然と反對したのは芝區から選出された市會切つての硬骨の士、和村

藤太郎君唯一人であつたと當時の目撃者は語つてゐる。

しかしいよ〳〵稲村君の努力が無記名にすることは可否が指名點呼となると、三十二名は無記名案に反對したが、結局多數で無記名案が勝つた。この無記名投票に賛否の指名點呼をしたことが、市會の速記錄に殘つてゐたので、今度の檢擧に非常に便利であつた相で、市議としては、無記名でこの事件を決しておきたかつた譯である。

無記名投票の結果、板舟權は三十五對三十七で七十萬圓の補償案が通過し、京成電車の市内乘入れ案は、三十五對四十二で、乘入れ可決となつたのであるが、その裏面には、人の記憶に新なる、前代未聞の醜怪事がひそんでゐて、結局、東京市會議員八十八名の中、三十四名の多數の者が、起訴されたばかりでなく、問題は更に問題を生むで、殆ど底しれずに展開してゆくかの觀があつた。

ことここに至つては、理事者の權威も、市民の面目も、完全に泥土にふみにぢられた形で、しかもこの醜状を目前にして、市民の中から熱烈な市會解散の聲も出ず、市政革新の輿論もおこつて來ないのを見ると、東京市民に果して自治政治を運用するの誠意ありや否やをすら疑ひたくなる位である。

ともかくも、既に一大怪物たる東京市會は解散された。

問題はまさに更始一新の大機會に方つて、東京市民が果してどれだけの奮發をなし得るかにかかつてゐる。

ところで、一時警視廳とても我等に制裁を加へる能力なしとまで傲語してゐた多くの市議達の豫想を裏切つて、かくまで檢擧の手がすすんだといふことは、不思議と云へば不思議なことであるが、これは、市會の内部にあつて少數の正義派が自ら市會の醜惡事を剔抉したこと、外部にあつてはある暴力團が日本橋魚業組合幹部を恐喝したことから同市場から市におさむべき十一萬七千餘圓の支途につき取調べを開始したる結果、はしなくも同組合幹部と市議達との關係を知るに至つた檢事局の活動の結果であつて、我等は東京市民としてこれ等の人々の活動に感謝すると共に、來るべき普選に依る改選に當つては、眞に市民の味方として、その福利のために健闘する正義の士を市會におくるやう全有權者諸君の奮起を祈つてやまぬ。また、市の理事者となる人としては、市會議員の一顰一笑に依つて左右されるやうな腹のない人物をこの際徹底的に市から排除して、市民のためには職を賭して、戰ふ底の人物に市政をゆだねるの慣習を作つてもらいたい

そして今度こそは眞の普選の精神に依つて清き一票を以て日本の首都、大東京を奈落のドン底から救ふと共に、選擧の範を天下にたれてもらひたいと敢へて血の氣の多い江戸兒諸君にお願する。

銀座繁昌記（十一）

魯庵生

（十一）銀座の大久保彦左衛門

(1) 三枝商店の先代

銀座人物志の筆頭第一が岸田吟香であるのは知らないものが殆んど無いほど餘りに有名過ぎる。吟香は單なる銀座の藥房の主人で無くして新日本の建設者番附に載る一人である。幕の内に入らないまでも少くも二段目ぐらゐに列ぶ顏である。が、吟香を知るものは餘りに多いが、銀座人としては吟香よりも寧ろ大きな足跡を殘した三枝與三郎は銀座人以外には知るものが甚だ少ない。三枝與三郎は銀座三丁目の三枝商店の先代で、銀座を傳ふるもの丶逸すべからざる名である。

正直にお世辭氣なしに云つて、社會人としての三枝與三郎の足跡は吟香ほどに大きなものでは無い。人物の大小高下は表面に現はれた事跡だけで定まるもので無く、人に出ては戰線の第一列に就く花々しさを喜ばないで、帷幄に隱れて裏面で號令し、若くは矻々として緣の下の力餅を樂むものもある。人物の器局の大小は單なる表面の仕事の秤量だけでは決せられない。三枝與三郎翁の如きは正直な咄、コツ〳〵として後方勤務を樂むガラでは無かつたが、得意になつて觀兵式の大將を嬉しがるお目出度い人間でも無かつた。銀座人以外に其名の大いに顯はれなかつたのは、帳場格子に隱れて社會的に顏を出すのを好まなかつたからだが、出シヤばりでは無いが遠慮する質では無かつたので、區政町政公私大小何事にも一と肌脫いでも老功と辣腕と信望と財力とで築き上げた潜勢力は吟香に過ぐるものがあつた。文明開化の急先鋒を任ずる新市街の鋭氣に加へて、生國の甲州つ兒の鼻梁の强い不負魂を搗交ぜた翁の向背は敵にも味方

にも恐ろしいものであつて、翁はイツシカ銀座の親分株に立てられ、俠名硬骨は銀座の大久保彦左衞門として鳴響いた。

三枝は地震後、主力の卸部を横丁に移して小賣部だけを銀座の舊地に殘してるが、今はラヂオ屋になつてる部屋――致文館のコッチ角が以前の三枝の卸部であつた。此の鐵筋コンクリートの堂々たる店さきに、銀座の大久保彦左衞門たる先代がドツカと御輿を据ゑて縱横の快辯に仲間や顧客や市公吏や有志家や運動員や勸誘員を煙に卷いたもんだ。時代が變つたから今の若い人には通じまいが、三枝といふよりは毛糸の伊勢屋と云つた方が昔の銀ブラ黨には早解りがする。夫程伊勢屋の屋號は昔のモガには馴染の深い名で、毛糸の輸入の元祖として伊勢屋と毛糸とは離れられない關係があつた。今日山村水郞のドコへ行つても毛糸を知らないものや使用しないものは一人も無いが、此の毛糸の編物の流行は伊勢屋の輸入に濫觴したのである。其頃は伊勢屋の外に取寄せるものは無かつたので、伊勢屋が一手に輸入して伊勢屋から諸方へ卸してゐたのだから、伊勢屋に賣つてるものも場末の糸屋に在るものも本とは一つ荷の品であつた。が、伊勢屋の店で買つた品で無いとお客が承知しなかつた。其頃芝に下宿してゐた靑年の私は當時のモダーンたる若い伯母さん達からお前さんの下宿は銀座に近いからと、餘り近くも無い伊勢屋の毛糸の御用を度々仰付かつたもんだ。

三枝は（今でもだが）昔から商賣が地味で手堅い一方だから大袈裟な自己宣傳は決して爲なかつた。奈良の大佛が富士の山のテッペンから喇叭を吹くやうなお向ふの岩谷天狗式の廣告は嘗てしなかつた。夫にも拘らず、毛糸の伊勢屋の名が東京中、といふより全國に響いたのは銀座の大久保彦左衞門たる三枝の先代が毛糸の輸入に卒先したからである。

(2)　四萬の邂逅

明治二十三年の夏、上州の四萬へ遊びに行つた時、私より四五日遲れて來た東京者の中老夫婦があつた。其頃の四萬の客は交通がマダ不便だつたから、上州や野州が多くて東京人は少なかつた。同じ東京者同士の私達は年配には大分の距離があつたが忽ち心易くなつた。衣類持物から富有の商人とは直ぐ解るが、ドコの町の何屋何兵衞と名乘りもしなければ訊きもしなかつた。其中に或朝偶と浴室の脫衣場で落合つて、私が裸體になるのを見てゐたが、軈て一緒に風呂へ漬ると、『君は贅澤なシャツを着てゐるナ、』と云つた。其頃の若い私は、贅澤ぢや無かつたが洋物は餘り下等くない品を常用してゐたから、默つて笑つてると、『其のシャツは烏渡誰にも解らない。だが、ワッシには解る、一と目で直ぐ解る、ワッシは唐物屋だから………』

『唐物屋さん？』と訊返すと、『銀座の伊勢與てのはワッシさ、』と云つた。伊勢與なら（其時から四五年前になるが）若い伯母さん達の使で買物に行つた店だから、顔は知らないでも舊識に會つた心地がした。伊勢與も地方人ばかりの湯治客の中に、青二才の書生ッぽでも自分の店を知つてる私を見付けたのはロビンソン・クルーソーが黒んぼのフライデイに會つた位には思つたらしく、前よりは一層打解けて、風呂から上つて一緒に歸ると、『先ア茶でも煎れるから話して行け、』と早速風月堂のカステラの箱を開けて、故郷の若い者でも迎へるやうに夫婦して歡待した。

此の老夫婦が三枝の先代だつた。丁度今の當主を養嗣子に迎へた年の夏で、『ワッシは最う隱居さ。之から氣樂に溫泉廻りでもして一生を暮さうと思つてる。イッマデ生きるものぢやなし、慾を渴いたら際限が無い。甲州の山ン中から七兩二分持つて江戶へ飛出した事を思やア此上慾を渴く事は無い』と、七兩二分から叩き上げたのが得意でもあつたらしく、自分の目鏡に適つた後繼者を貰ひ當てたので安心もしたらしかつた。

伊勢與はデップリ肥つた、一見太ッ腹の負けじ魂が眉宇に溢れる、堅氣の旦那よりは大親分然たる恰幅だつた。誰に會つても初對面からザックバランに碎けて少しも蟠まりが無かつた。座談が上手で、歯切れのイ、快辯で胸の透くやうな話振だつた。窾所を衝くやうな警句も吐いたし、衒氣の無い皮肉をも云つた。腕一本で誰にも頭を下げずに身代を作つた苦勞人だから談話の料にも富んでゐたので、毎夕晩餐後の涼みがてらに帳場の縁端に集まつて來る逗留客の漫談の中心となつて帳場議會の議長と稱されてゐた。一番得意なのが京都へ公使の供をして行つた時、浪人者に行列へ切込まれたチャンバラ劇の一とくさりであつた。

『何しろ異人の供をする奴は國賊てんだから、罷り間違へばソッ首が飛んぢまう。銀座の中央でズバリとやられたものもあるんだから、物騒ッたら無い。能く御一新の時の手柄噺をするものがあるが、ありやアみんなウソさ。ワッシのは逃げて廻つた意久地の無エ噺ばかりだからホントウさ、』と稱して得をしたやうな噺ばかりした。

三週間ほどは殆んど同伴であるやうに朝夕を偕にした。年齢は親子以上も違つてゐたが、地方人ばかりの中の東京者同士で口が合つた。愈々明日は歸るといふ前晩、『モウ今晩ッきりだ。東京へ歸つたら是非來給へ。近所に旨く喰はせる西洋料理があるから……』と、其の翌る朝最後のサヨナラをした時も、『イ、かい、東京へ歸つたら來給へ、西洋料理を御馳走する

らナ、』と繰返した。
間もなく東京へ歸つて、二ケ月三月してから、銀座へ行つた序に尋ねると、『能く來た。疾うから來さうなもんだと待つてた。』と四萬で朝夕顏を合はした時と同じ東道振だつた。細君も奥から飛んで出た。一週間ばかり四萬に泊つてゐた甥の次郎さん（今は鬢髪白い老紳士だらうが其頃は暴れん坊のヤンチャ）も羞恥みながら出て來た。私はホンの通り掛りに寄つたのだから、其日は用事を抱へてゐたし、十分ばかり咄して暇乞ひした。『ぢやア君、復たユックリ來給へ、今度は西洋料理を御馳走するから……』と、復た西洋料理を吹聽した。アンマリ氣の利いた洋食屋が其頃此邊には無かつた筈だが。
夫きり私は伊勢與を尋ねもせず、尋ねやうともしなかつた。湯治場の交際なんてものは其の土地限りのもので、東京へ歸つてまでも附纏はれては興が醒める。銀座を通る折々にデップリ肥つた健康さうな親分然たる伊勢與を時々見掛けたが、故と外々しく氣の附かぬ振をして素通りした。夫から十六七年も經つて私の知つてる或る保險會社の社員が社用で伊勢與を尋ねた時、ドウいふ話のキッカケからか私の噂が出ると、伊勢與は能く覺えてゐて、『ドウしてる、此頃は？　宜しく云つて吳れ、』と云つたさうだ。夫から又五六年經つた或る年、八ッ山下の京濱電車の出發驛で見掛けたが、丸で忘れて了つたらしく、非常の雜沓の中で外々しく別れた。之が最後で、夫から二三年經つと、築地の自宅から銀座の店まで生花造花の花行列が續いたといふ大葬式となつた。四萬で邂逅してから最う四十年となるが、滿身のエネルギーが破裂れさうにデップリ肥つた先代三枝與三郎の精悍な風丰は今以て眼に灰ついてをる。

(3)　甲州脫奔からサトーの從僕

伊勢與は甲州の山の中から飛出したと云つても根からの土百姓では無かつた。甲陽十八將に次いでの武田の士大將三枝勘解由左衞門の裔で、代々庄屋を勤めた家柄の三男だつた。若い時に親父が鄰村の某が江戸へ登つて出世した咄をして聞かせると、其の位の出世は俺だつて出來ると啖呵を切つて、何でも江戸へやつて吳れと迫んだ。到頭喧嘩別れをして其の翌る朝は稼ぎ溜めた七兩二分の革財布を懷ろへ捻込んで、向ふ見ずに江戸を指して親の家を追ン出て了つた。
此の七兩二分は伊勢與の自慢で、何かといふと『七兩二分だ』と云ひ〳〵したさうだ。四萬で一つ宿に暮した三週間かそこらの間にも七兩二分を三四度聞かされた。が、率直に飾氣なくいふと、十兩からは首の飛ぶ時代の七兩二分は山出しの風來者が身を立てる資本としては十分過ぎてゐる。鹽原多助が錢六百を懷

ろにして上州沼田を突走つたのとは比較にならない。多助が山口屋善右衛門に拾はれた時に懐ろに殘つてゐたのが二十八文。伊勢與の七兩二分は自慢をするほどの冒險なスタートではなかつた。が、此の懐金を二三日お江戸見物してからといふやうな悠長な見物左衛門でチヤ〳〵ホウチヤにして了はないで、大木戸から四谷を一直線に脇目も觸らないで、故郷で名を聞いたばかりの鮫ヶ橋の旗本屋敷へ押掛けて、直ぐ其日から置いて貰つたテキパキした果斷な早業は誰にも眞似られる藝では無い。且親と喧嘩して家を飛出した利かん坊の强情ッ張が他所の籬へ寄食すると忽ち神妙な辛抱人に早變りして如才なく立廻らないまでもマジメに拔目なく働いて氣に入られたのは單なる負嫌ひの向見ずでも馬鹿正直の木念仁でも無いのが解る。伊勢與は極めて豪放なヤリツ放しの如く見えて實は中々の大事取であつた。大膽な冒險家の如く見えて實は定石で固めて一石たりとも無駄石を打たない理詰な石橋を叩いて渡る流義のヤリ口であつた。

鮫ヶ橋の旗本の戸田といふは同郷人が曾て世話になつたといふ外には何の縁故も無かつたが、當つて碎けろといふキビ〳〵した氣象が喜ばれて舊知の如く迎へられ、ドコへも賴る家が無いなら當分遊んでゐるがイヽと、直ぐ半下男半食客に置いて貰つた。二度目に住込んだ異人屋敷といふは實兄小野満五郎(小山内氏の『森有禮』劇の臺詞に名の出る幕末の洋學者)の肝煎で、當時の英國公使館の書記生のサトーの從僕であつた。赤ツ顏の敵役然たるパークスの女房役としてのサトーは幕末外交劇の重要なる登場者の一人であつたが、パークスが上洛した時伊勢與がサトーの伴をして一行中に加はつたのは若い伊勢與にも亦一生の晴れの舞臺であつた。無論、身分の上から、年齢の上から端役だも勤まらない名無しの權兵衛のエキストラであつたのは云ふまでも無いが、左に右く一行中に加はつて、護衛の中井弘や後藤象二郎が公使の行列に亂入した浪人者を切つて棄てた血汐のシブキを浴びたのは銀座の商人の誰の傳記にも見られない幕末劍劇の一ト幕であらう。(サトーの『日本に於ける一外交官』に挿入する大阪に於ける一行の寫眞中、「ヤス」とあるのは多分「ヨサ」といふ名の訛であつたらう。)

幕府が瓦解して江戸が東京と改稱されたのはサトーが京都の使命を終へて江戸へ戻つてから間もなくだつた。青年與三郎もサトーの伴をして歸つて恐らくは英國公使館に勤續してゐた。が、故郷を出たのは腕一本で誰の世話にもならずに獨力出世して見せる意地であつたので、他人の廂の下で立身したのでは人の思はくは兎もあれ自分の心の内が濟まない。東西南北一人の知るものも無い江戸へ飛出した當座の二三年は操ろないが、然

うく〳〵いつまでも碧い眼玉の從僕の生活を甘んじてはゐられないで、到頭シビレを切らしてサトーに暇を呉れと申出た。夫も宜からうがと、サトーは親切に、モウ一年辛棒したら英國へ連れてつてやると諭して懇ろに引留めた。サトーが引留めたのは決して口から出任せの空證文で無かつたのは十分合得めたし、パアレイの萬國史が讀めれば一人前の洋學者として出世の出來た時代の洋行は決して惡くないのを萬更知らないでは無かつた。が、一端口外したからには跡へは引かないのが豫ての氣象で、火蓋を切つたらモウ矢も楯も堪らないで、サトーの好意を無にする心は無かつたが、後事を朋輩に賴んで其日の中に袂を拂つて公使館を去つた。

公使館を去ると直ぐ横濱へ行き、偶然邂逅した實弟の案内で豫て商ふツモリであつた洋品雜貨や食料品を外國商館で仕入れた。マダ落付く家も定つてゐないのに、直ぐ舟積みして東京へ引返し、夕方築地の備前橋際に左も右くも舟を着けた。夫から豫て公使館へ出入の者から聞いてゐた南小田原町の龜屋（今の銀座の龜屋の先々代）を藪から棒に尋ねて、龜屋の差配する家を一軒無理に明けて貰つて、舟から荷物を運ばせて電光石火に明日から店開きするツモリの支度をした。總てが甲州から飛出した時と同じ三枚流の出たとこ勝負で、一夜の中に九尺間口の商店の主人とも番頭とも小僧ともなつて、其の翌る日は立派に店を開けた。

之からが伊勢與の一本立の經歷が初まるので、今までのは開幕前奏曲である。が、一本立となつてからの伊勢與の前途は時代の潮流に順應して、折々に險波風濤に惱まされた事が丸きり無かつたわけでは無かつたらうが、丁度音樂大行進が銀座の大道を練つて行くやうだつた。今日の三枚商店の洋々たる隆運は先代與三郎の前奏曲の力強いベスやオーボエやケットル・ドラムの綾絲調に現はれてるので、此以上樂器を殖やして囃し立てないでもである。が、伊勢與が日本の開國史に密接の關係があるサトーの從僕に出身し、幕末の洋學者でサトーに日本の歷史や文學を授けた小野清五郎の實弟であつたといふは、伊勢與が單なる算盤人種で無かつたのを語る興味ある經歷の一節である。

(4)　毛糸の伊勢屋

伊勢與が一本立で店開きをした始めは築地の小田原町であつたが、外國人對手の洋品雜貨を買ふ店は東京に無かつたから、開店早々繁昌して忽ち手狹となつたので、幾何もなく同じ龜屋の店の入舟町へ移つた。銀座へ根城を構へたのはイツ頃であつたかハツキリ解らないが、多分トン〳〵拍子の商運に乘じた煉瓦の新市街竣功早々であつたらう。

處で甲州出身の男がナゼ甲州屋と云はずに伊勢屋と屋號を稱した乎。爰にも三枝一流の商賣哲學が現れてをる。全體屋號なぞは何でもイヽ、解り易く、覺え易く、大衆向きの月並がイヽといふので伊勢屋稲荷に犬の糞と手取早く伊勢屋の屋號をつけたのである。モウ伊勢屋でもあるまいと屋號を廢して三枝商店と改めたのは今の當主となつてからか、夫とも先代存生時代からであるかは左も右くも、毛糸の伊勢與の名は今でも通つてゐる。

伊勢與が身代を作つたは何であるかは知らぬが、伊勢與が賣出したのは毛糸である。いつの頃か不明であるが、多分明治十二三年頃であらう。横濱の商館の見本を一と山一手に引取つた中に毛糸が一と梱有つた。何にするものだか解らないで店の棚に載せて置いたのを、或る日通掛りの外國婦人が不斗見つけて、意外の堀出し物をした如く狂喜して早速買つて歸つた。夫から後聞傳へて代る／＼に買ひに來た外國婦人が數人あつたので、何にするものかと尋ねて初めて其の用途を知つた。丁度英國歸りの知人があつたので、試みに英國から取寄せて伊勢屋のレッテルを附けて賣出して見た。其時はモウ外國人から傳習を受けて毛糸の編物を初めたものもポツ／＼あつたのだから、伊勢屋で毛糸を賣初めたと聞くと、忽ち聞傳へて買ひに來るものが段々殖えて、伊勢屋の毛糸は評判になつた。

一體毛糸のジヤケツやショールを使用し出したのはイツ頃からだかハッキリ解らぬが、(維新前後既に外遊したものも澤山あるから、是等の洋行歸朝者がお土産に持つて歸つたのも亦澤山あるべきは想像されるが、夫は別として、)一般人が使用し初めたのはソンナに古い事では無からう。丁度洋服がマンテル、ダンブクロの戎服時代からは大分久しくなつてゐても普及し初したのは明治十五六年頃官廳勤務服として規定されてからであると同様に、毛糸のショールやジヤケツも少數歐醉者流の間には早くから知られてゐても一般に行はれ初めたのは男は洋服を常用し、女は束髪が流行してからである。私は其頃モダーンの若い伯母さん達から毛糸のお使ひを度々仰付かつたと前に云つたのはタシカ明治十四五年だつたらう。

話頭は少し混線するが、毛糸の流行した原因は官吏の勤務服が洋服に定まつて(夫より以前は判任以下は大抵和服)沓下が足袋と同じ常用必需品となり、毛糸の手編が保温上耐久上有利と認められてからだ。ショールやジヤケツの手編の流行は其後である。又少し脱線するが、ショールが流行り出したのは明治十二三年頃からだが、初めは女よりは男が用ひた(女の防寒具は十四五年まではお高祖頭巾だけだつた)ので、重に縁飾付き

の格子縞の薄羅紗だつた。此の擬ひの組織を堕落した達磨然と頭からスッポリ被るのが當時のモダーン・ボーイの粋がつた風俗だつたのだ。女がショールを用ひたのは十四五年頃からで、お高祖頭巾の外にショールを纏つた。一時は馬鹿に大きい膝掛ほどのを裾長に引掛けたもので、トンとカチユーシャの芝居を見るやうだつた。アレは露西亞の田舎女の風俗だといふ惡語もあつて餘り大きいのは流行らなくなり、同時に毛糸の手編が流行り初して伊勢屋が益々繁昌した。ジヤケツも初めは舶來の機械編ばかりだつたが、猫も杓子も編物をするやうになつてからはジヤケツも亦手編を競ふやうになつた。此のジヤケツ用の、俗に「ウドン」と稱する太い毛糸が、（前にも云つた如く其頃毛糸は伊勢屋が一手に輸入して、各市の毛糸は皆伊勢屋から卸したのであるが、夫にも拘らず、）「ウドン」に限つて伊勢屋の外に賣つてる店が少なかつたので、ジヤケツを編むほどの高級手藝家は益々伊勢屋黨となつて、毛糸は伊勢屋でなければならぬやうに評判された。之が第一期の毛糸の編物の流行で、此の流行で伊勢屋は暖簾の信用をも高くし身代をも肥らしたであらうが、經濟的順調の時代であつたから、歐洲戰當時の俄成金や染料成金の如き毛糸成金で無かつたのは明かに想像される。

(5) 伊勢與の人となり

そんなら伊勢屋は何で儲けた乎。私は伊勢屋の金儲けの一代記を知らないから渠の一生の損益勘定を揣摩する材料も持た無いが、渠の生涯には紀國屋文左衛門のやうな乾坤一擲的の痛快な冒險も無かつた、錢屋五兵衛のやうなアルゴナウチツクのローマンスも無かつた、鹽原多助のやうな經濟的立志談も無かつた。三十何年前の三週間の同宿中、渠は絶へず能く辯じ能く講釋をし能く氣焔を揚げ、時折は渠の成功談を聽くべく水を向けたが、終に一回も金儲け咄や金溜め咄をしなかつた。金に關する自慢咄とては借金した事が一度も無いといふ咄ばかりだつた。狹い土地だから贅澤の仕様も無かつたが相當贅澤もしてゐたらしかつたし、短かい時間だから金の遣ひ振を見る機會も無かつたが、金持に却て屢々見られる卑吝な或は慾張つた眞似や、金を出さない或は取られない豫防線を張るやうな不快な感じを抱かせるやうな事は無かつた。一言すれば金にビク／＼したり眼色を變へたりする金持通有の恐金擬呆症の症候が少しも無く、避暑地の土地柄お客の懐ろ都合や金の出し振を感知する鋭い敏感を持つてる旅館の使用人や、浴客の御用を聞きに來る商人達の評判も宜かつた。

更に一言すると、金を湯水のやうに振撒いたり金で面を撲るといふやうな鄙しい倨傲も無ければ、灰吹と同じく溜まるほ

ど汚ないと喩へられる蓄財家通有の卑吝な根性も無かつた。夫故に若し渠が世間に傳へられる如き一代富限であつたとすれば、夫は何とか成金と云ふやうに一度にドツカツと大金儲けをしたのでも、銀行のモグリのやうな金貸商賣の内職をしたのでも無くして、着實な商賣が産出した利潤が剩つたのであらう。由來甲州系の巨商には盆蓙の上で算盤を彈くに等しい共通の商賣人心理があるが、伊勢與には夫が無かつた。近路や拔道を行くのが商賣の極意なら伊勢與のは初めから本街道を石橋を叩きつゝ行つたので、御一新の風雲時代に育まれた商人に有勝ちのドキタサ紛れの火事泥的の一六勝負は僞なかつた。大膽なるが如くして細心、豪放なるが如くして熟慮、十日一水を描き五日一石を描く如き深謀努力を積んで些の危な氣が無しに着々として歩一歩と固めつゝ進んだ。飽くまでも甲州流の戰法の正々堂堂として平押しに進んだのだから、一擧に大きな山を掘當てたやうなゴールデン・ラツシユは見られなかつたが、次第々々にイツとなく大を成した所以は畢竟商賣の定石を外さなかつたからであらう。

(6) 伊勢與の交友

伊勢與の成功を助けた一つは天成の交際術であつたらう。四萬で同宿した時、東京人が少なかつたからとは云へ、二十歳も年齡の差ある當時十二才の私を對手として少しも老成振らず金持面をせず、三週日の長い間隔意なく對等に談笑して一度も不快な色を見せなかつた。私はマダ十二才でも其頃は新聞記者の端しくれで、職業に對する興味もあつたらうが、私より以下の木念仁の田舍漢ともお土産物を買ふ土地の婆アさまとも直ぐ心易くなつて、ドコへ行つても面白い旦那として知られた。格別如才なくお世辭をいふでも無く、隨分ブツキラ棒の惡語を云ふ事もあつたが、少しも毒氣が無くて惡語が却て親しみを增さしめた。勝負事は嫌ひ、酒は飮まず、座談一方だつたが皮肉も云へば滑稽も云ふ諷喩百出議刺縱橫の圓轉滑脫な老熟な辯舌が武器となつた天成の社交家だつた。

其前年だつた。林田龜太郎、林權助、武田千代三郎の三人が大學を出たホヤホヤで、飜譯物を持つて賃譯を兼ねて箱根へ遊んでゐた時、恰も同宿したさうで、伊勢與は度々三人の噂をした。此年は内田康哉や鈴木馬左也も出た大學の豐作年で、三人は其中の秀才であつた。林は理窟ツぽく、武田はムツツリで、林田が一番八面玲瓏だツたので、伊勢與は林田が一番氣に入つて其の應酬の才を褒めちぎつてゐた。間もなく林は外務畑に入つて海外へ行き、武田は内務畑へ入つて地方廻りをしたので、自然林田と一番心易くして四萬に逗留中も能く林田の噂をし

た。林田は才物だが少し險呑だ、店へ遊びに來ては帽子だのステツキだのと勝手に持つて行くがツイぞ拂つた事が無い、元氣でイ丶男だがゾボラ過ぎると、道樂息子を持餘す氣味だつた。夫に反して、武田さんは几帳面でお堅くて、と武田君は老夫人に大變評判が宜かつた。だが、林田とはドコか馬が合つてるかして、品物を借倒されてもイヤな顏もせず始終心易くした。『オイ林田、早く大臣になれよ、愚圖々々してゐるとコッチの命が無くなる』と晩年戲れた事があつたさうだが、相前後して二人とも續いて白玉樓中の人となつて了つた。伊勢與は書生を愛して青年の恬淡寡慾を喜び、年齡を忘れて爾汝の交を結んだものが多かつたが、林田は其中の最も有望なる一人で、其の青雲を樂んでゐた。林田は不幸半途にして蹉跌したが、林田が若し臺閣に列したら誰よりも喜んで誰よりも得意になるのは伊勢與であつたらう。

だが、之から爲すあらんとする青年又は壯齡のものとは好んで交際したが、勳爵高き權門とは舊誼があつても交を求めやうとは決してしなかつた。維新の際、攘夷の浮浪人ら跋扈して屢々開國論者を要擊したので、外人に親昵した諸藩の進步派の難を外國公使館に避くるものが多かつた。東禪寺以來公使館も亦危殆に瀕したので、公使館の外使も館內の日本人と共に船に集つて品川沖に浮んで浪士の襲擊を避けた事があつた。後の大勳位公爵たる伊藤俊助も其の一人にて、サトーの從僕たる伊勢與と七十餘日同じ船內に起臥して、時折は上陸して旗亭に淺酌した事もあつたが、公の榮達後終に一回も刺を通じなかつた。殊に末松子とは其後深交を結んで末松夫人とも亦親しくしたが、舊誼に夤緣して姻戚を介してまでも舊情を溫めやうとは思はなかつた。『先方が天下の伊藤公爵なら此方も銀座の三枚である』といふが伊勢與の見識で、尾を垂れて權家に伺候するには渠は餘りに潔癖に過ぎてゐた。

(7) 伊勢與と星亨と岩谷松平

前にも云つたが、伊勢與は社會的に第一線に立つを好まぬ男だつた。商人は帳場の牙城を守るが本分であるといふのが伊勢與の信條で、『柳橋新誌』の版元の山城屋稻田政吉が府政に首を突込むのを顰蹙して隣家の好誼上商人の政治運動は道草であると忠言した。が、一度云つて聽かざれば復た云はず、稻田の政治道樂を苦々しく思ひながらも始終渝らず後援者の一人として尻押したさうだ。が、時勢が變ると伊勢與も帳場格子にばかり引込んでゐられなくなつて、表面にこそ出動しなかつたが裡面では策動した。星亨が市會議長として傍若無人の辣腕を揮つた時、恰も議員の半數改選に方つて京橋區から自派のM某を出さ

んとして旨を腹心の京橋銀行のN某に授けた。當時星の權力は大川の水を逆流せしめ空吹く風の方向を變へるほど强盛であつたから、N某は一も二も無く唯々として同じ銀行の監査役たる伊勢與にM某推薦の盡力を依賴した。『アッシは御免を蒙る』と伊勢與は言下にピタリと拒絕けた。『星の子分の尻押をしたと云はれちやア京橋ッ子の名折だ。アッシは御免を蒙る。だが君も、自分の銀行の監査役に尻を捲くられたんぢや星に合はす顏が無からうから、序に銀行も御免を蒙むつて了はう、』と即時に監査役の辭表を叩き付けて了つた。

『先ア然う短氣を云はないで……』とN某は呆氣に取られて眼を圓くしたが、『アッシにはアッシの了見がある、』と伊勢與は膠もなくけんもほろゝに言放つたので、N某も取りつく島がなかつた。

伊勢與は豫て星の橫暴を快からず思つて、機會があつたら一と泡吹かして與れやうと思つてゐたので、要こそあれと一兩日過ぎるとフラリと眞向ふの岩谷松平を訪ふた。

『オイ坊主、』伊勢與はドウいふわけだか岩谷を坊主々々と呼棄てにしてゐた。『オイ坊主。手前を市會議員にしてやらうか。なる氣は無エかイ』

『市會議員?』と松平は半分自分の耳を疑つて變な顏をしながらもニヤ〳〵した。『お前が尻押しゝて與れるなら……』

『手前がなる氣なら俺が尻押しゝてやる。星が京橋からMを川さらウて腕なんだが、星の子分に京橋を荒されちやア銀座の名折れだ。ドウダイ坊主。一番四股を踏んで見る氣は無エか、』と伊勢與は松平を煽て込んだ。

松平は本とより賣名の徒。下地は好きなり御意はよしで、伊勢與が力瘤を入れて與れるなら千人力。金鍔を附張つた頬ペタを牡丹餅で叩かれるやうな氣がして、ホク〳〵もので承知した。

伊勢與が松平を擔ぎ上げたのは松平の人物を買被つたのでは無い。一つ町內の向ふ同士だから、松平の眞價は知り過ぎる位呑込んでるが、星の子分のM某の競爭者としては丁度松平がイイ取組だと星を愚弄したのであつた。伊勢與が星派の候補者擁立に反對して星の內意を承けたN某に啖呵を切つてN某の銀行の重役の椅子まで返上したといふ噂は忽ち廣がつたので、伊勢與が星派の候補者を蹴つて誰を出さうといふのだらうといふ評判が區民の興味を沸騰した。數日過ぎると岩谷松平が突然候補の名乘を揚げ、推薦者の筆頭第一が三枚與三郎と註されたので、區民就中銀座人はアッと魂消て開いた口が塞がらなかつた。人もあらうに岩谷松平とは何事ぞ。伊勢與も餘り人を嘗めてゐると不快にさへ思ふ者もあつた。が、中には伊勢與の意中

は左も右く、星の一味が東京市を我物顔に振舞ふ議場に岩谷の赤洋服を送るのは「曾」の顔見勢に飴坊主を力ませるやうなものだと、伊勢與の皮肉を手を拍つて痛快がるものもあつた。

伊勢與だとて松平が星の好敵手だと思つてやしない。松平一人の力で星の天下を如何ともし難いのを知らんでは無い。推さうと思へば他に適當な人物が無いでは無かつた。が、猿芝居や牛角力には道化役者が相應といふのが伊勢與の腹であつた。勝敗は兎もあれ、悍馬でも老馬でも千里の駿足を揃へたツモリの馬揃に豚一疋を放つのが痛快で、獨りで脂下つて北叟笑んでゐた。伊勢與は自ら出動して遊説し情願し斡旋するを好まなかつたから、推薦狀に署名した外には運動らしい運動も餘り仕なかつたが、推薦者としての筆頭第一の三枝與三郎の名は千人力にも萬人力にも勝つた威力があつた。岩谷の人物は第二の問題として、實際の擁立者たる『伊勢屋の親爺の顔を潰す勿』『伊勢屋の大將の尻押だ』『伊勢與の男を立てゝやれ』と、京橋區民は一齊に起つて岩谷の爲めよりは伊勢與の爲めに奔走し、伊勢與の眞意が段々解るとアンチ星のアンタゴニズムが益々強くなつて、餘り人氣の無かつた岩谷松平が强敵の星派のM某を見事に一蹴して最高點の月桂冠を得た。岩谷は殆んど勞さずして濡手で粟の最高票を攫んだので、伊勢與を深く德として、夫から後は伊勢屋を『爺さん』と呼び、『坊主々々！』と相變らず呼棄てされて、唯々として命を奉じた。剛愎の星亨も伊勢與の潛勢力の意外に强大なるを驚嘆し、『あの親爺には凹まされた』と冑を脫いで降參した。星歿後市會の大御所と云はれた森久保作藏の如きも、伊勢與に睨まれるのを恐れて常に一目置いたさうだ。

(8) 伊勢與の剛愎

伊勢與に呼棄てされたものは岩谷松平ばかりでは無かつた。甲州人固有の不負魂に加へて、商人に似げない狷介剛腹の利かん坊で、親より外には此頭は下げないと、初對面にすらも頭をしやくるばかりで決して叩頭しなかつた。『伊勢屋は頭が高い』と心中不快に思ふものもあつたが、初對面から城府を設けないで、誰に對しても百年の知己の如く語る洒脫の性格に忽ち釋然としてブツキラボウが却て親まれ、『伊勢屋の大將はお世辭が無いが、サツパリして氣が置けない』と誰とも直ぐ心易くなつた。誰でも呼棄てにしたが、呼棄てにされて不快を感ずるものは一人も無かつた。樞密顧問官の末松子爵をも、下院翰長の林田をも呼棄てにし、學問も門閥も無くして兄弟分か（林田の如きに對しては）親分子分の如く扱つても親爺々々と親まれてゐたのは一種の人德があつたのであらう。

正直に云つて岩谷松平は（人格的には餘り難有く無い人物だ

が）其の足跡は必ずしも伊勢與以下では無い。社會的には伊勢與よりもヨリ以上に知られてゐる。が、銀座人としての生活では伊勢與に『坊主々々』と呼ばれて伊勢與に對しては『爺さん』の敬語を用ひてゐた。龜屋の先代は伊勢與の細君の兄で、正しく伊勢與の義兄に當つてるが、常に兄貴々々と稱して兄事してゐた。銀座人は皆伊勢與に一目置いて親分株に立て、銀座人の悶着は町政其他一家の私事に到るまで伊勢與が顏を出せば直ぐ落着した。銀座の草分けの故老の筆頭であつたのみならず、義に勇み情に厚く公平にして毫しも私くしが無く、寛弘にして財を吝まなかつたからである。銀座の大久保彦左衛門と稱したのは誰が言初めたか知らぬが、そこら中にザラにある大久保彦左衛門のやうに矢鱈と親分振るヤカマシヤの爺さんであつたばかりぢや無かつた。末松青萍子が像背に勒して、富巨萬を致して毫も鄙吝の氣無く資性剛直にして俠氣ありと云つたのは決してお座なりの定文句では無かつた。

前にも云つたが、伊勢與は社會的に第一線に立つを好まなかつたから世間的には餘り知られなかつたが、銀座人としては決して逸すべからざる大いなる名である。

(9) 伊勢與の模範的家庭

伊勢與を憶起すに方つて同時に憶出さずにゐられないのは伊勢與の行く處影の形に隨ふ如く必ず同伴する糟糠の妻の杉本氏である。杉本氏は伊勢與が初めて家を持つた南小田原町の家主龜屋の本姓である。龜屋が築地から銀座に移つたはイツ頃であつたか知らぬが、食料品を商ひ初めたのは伊勢與と秦晉の好みを結んでから伊勢與の入れ智惠であつたらしい。龜屋は今が三代目で、伊勢與の妻は初代の女で、今の龜屋の當主には伯母に當つてる。

伊勢與が杉本氏を娶つたのは南小田原町から入舟町へ轉じた頃で、新婚早々丸燒けとなつて開店以來二三年の努力がフイになつて了つた。盤根錯節に遭はざれば利器と別たんで、伊勢與は鼻唄を唄つて商賣初めの總決算を濟ましたツモりでゐたが、細君は新婚早々の厄落しとノンキな顏してはゐられなかつた。其間に處する苦勞や心配は一と通りでなかつたさうだ。其時代の世帶のヤリクリや、薄資本の商賣の駈引や魂膽の苦辛經營談は四萬の湯宿の徒然に聞いた事があるが、今は忘れて了つた。があのガラ〳〵した江戸辯の伊勢與がシンミリした調子で、『婆アさんにも苦勞を掛けたもんだ、』と、シミ〳〵感謝するやうに云つた。『正直、一年に一遍でも憩うして氣樂に遊んでゐられるのは漸く此の四五年。初めて熱海へ行つた時は、馬鹿氣た咄サ、七八圓置いて痛工面をして贅澤な絹夜具を新調したもんサ、』

と呵然と笑つた。（其頃、明治十六七年頃はマダ溫泉地の風俗が質朴だつたので、贅澤な浴客は皆贅澤な寢具を携帶し、旅館は滯留客の夜具を二階の欄干へ晒して誇りとする風があつた。）

正直な咄、伊勢與は話が上手過ぎた。餘り上手過ぎて調子に乘る事があつた。英雄人を欺く罪の無いウソも交つた。金のある話や儲けた咄は決して仕なかつたが、金の無い話や損をした話はした。ドコまで信じてイイか解らぬが左に右く七兩二分（當時の七兩二分は夫程小額でなかつたにせよ）からアレだけに漕上げるには相應の苦勞を嘗めたに相違無いので、伊勢與は大部分を細君の內助の功に歸した。內助といふやうな言葉を伊勢與は使用しなかつたが、ワッシは湯治場廻りが道樂だが、ワッシよりは女房に保養をさせたいと思つて……若い時に散三苦勞をさせたから……」とシミ〴〵糟糠の細君に感謝の意を表してゐた。

私は其頃文學青年としては偏屈過ぎる位ピューリタニックであつた。今の言葉で云へば三角戀愛や第二夫人を怪まない國俗を爪彈きするより憎んでゐた。憎むよりは寧ろ呪咀してゐた。溫泉場などに逗留してゐると然ういふ敗德が公々然と露骨に、都會の社會的倫常から解放されてるかのやうに行はれてるのを目擊するに堪へられないので、現に此時も然ういふ紀綱紊亂者が二三組、紳士淑女然として滯留してゐた。其中に伊勢與の老夫婦の如く人慾を超越して伉儷愈々濃やかなるは千兩箱を杉なりに積んだ上に座るに勝した人生の淸福でもあつたし、又文明の紳士としての誇りでもあつた。

前にも云つたが、伊勢屋は卯が主であつた。小賣は家事に俘はれてるのが一家の主婦の能では無いといふ細君の見識から、云はゞ細君の內職（？）に初めたのだ。伊勢與の細君は早くから時代の好尙の推移に着目して、女の洋裝や兒供の洋服がマダ今日のやうに流行らなかつた頃から婦人小兒の洋裝附屬品を揃へ、東京にマダ指を折るほどしか無かつた婦人用品專門の洋物店として知られた。女の子の被り物としては毛糸の手製の月並の型しかドコにも賣つてゐないで、ハイカラ好みの人はワザワザ横濱まで搜しに行つた頃（三十年前）から伊勢屋には倫敦の新型を賣つてゐた。然ういふ新らしいものは皆伊勢與の細君の目鏡で仕入れたので、其頃兒供物婦人物はドコでも仕入れを困難としたを、伊勢與の細君は江戶生れの婦人であつて時代に率先した。十年ほどコッチ女の子の帽子が都鄙を通じて流行り出してからフエルトや麥稈の內地の製帽業者は皆兒供帽子を競爭したが、伊勢屋は帽體のみを註文して其粧飾は總て老夫人の意匠に由て加工した。シカモ其意匠は拔群にて生中の舶來品より

勝つて、三枝のは倫敦巴黎の本場仕入れで垢抜けがしてゐると評判された。或る著名な製帽會社の如き、常に新味を出す創意に感嘆して、兒供帽子は三枝老夫人の批評を聞いて加工したさうである。六十の老婦人がハイカラの走りの流行を考案するが如き誰でも意外とする處だらう。以て其の頭腦の如何にフレッシで明敏であつたかを知るべきである。

伊勢與を知るものゝ内には伊勢與よりはヨリ以上に細君の切廻しに巧みな才幹に服して女丈夫の讃稱を吝まないものもあつたが、女丈夫と云つては餘り强過ぎる、伊勢與の細君は柔婉溫籍、口數が少なくて萬づにツヽマシくて一見タゞの世話女房であつた。伊勢與は生一本で思ふ事は何でもズバ／＼と言捲つたから、時としては餘り率直過ぎて思はぬ敵を作る事が無いでも無かつた。が、細君は玲瓏玉の如く誰にでも笑顏で接したから、伊勢與の時としては辛辣骨を刺すが如き垢罵を浴びせられ、或は木で鼻をくゝつたやうなブツキラ棒な待遇で多少心持を惡くするものも、細君に會つて一と二タ言利くと忽ち春風に包まれる如く釋然として了う。伊勢與に畏れられ憚かられ、青天霹靂の肝癪玉を打つけられ、冷水三斗の痛罵を浴びせられて好感ばかりを持つてもゐられない場合があつても、老夫人に對しては何人も曾て不快を抱いた事が無く、伊勢與の家に出入したもので老夫人に感謝しないものは無かつた。

伊勢與は根が聲色に親むを好まない物堅い質であつたのだらうが、此の賢夫人が清淨なる家庭の礎石であつたのは爭はれない。日本は家庭道德の修まらない國で、論語で固まつた子曰先生でも第三第四の夫人の顏を一つ屋根の下に列べて怪まないのが醇風美俗となつてゐる。殊に市井の町人社會では猶更、町人が實業家と更まつても家庭は依然たる町人である。伊勢屋と向ひ合つてる岩谷松平が六十何人とか七十何人とかの子を舉げて豚と多産を競爭してゐると比較して、九尺間口の長家から鐵筋コンクリートの角見世まで艱難相助けて偕白髮まで終始一徹渝らなかつた伊勢與の家庭は日本では珍らしい美しいものだつた。

四萬で初めて會つた時、私が伊勢與に嘆服したのは其の豪放なる人物でも、其の縱橫なる快辯でも、空拳巨富を作つた立志談でも無かつた。正直に云つても姿貌餘り揚らざる老夫人との伉儷甚だ濃かなる情愛であつた。其頃（約四十年前）は今よりも家庭の概念が低くして、湯治場あたりには正夫人よりは準夫人を伴ふものが多く、中には一見如何はしき婦人を引張つて來て是れ見よがしに振舞ふものもあつた。現に此年も或る引退した大官とかいふ七十何歳の老人が二十四五の若い婦人を同伴して

滞留してゐた。此の老人は旅館の常得意で毎年必ず來浴するが、帯同の夫人が毎年必ず違ふといふのだから、第何號であるかは旅館の主人も知らないと云つた。何しろ七十を越した老人が孫のやうな女を引張廻すんだから忽ち湯治場中の大評判となつた。其上に同じ滞留客を下目に見る鎌大振が鼻持もならんので宿屋中の總スカンになつた。此の總スカンどのが或る日鼻の下を伸ばして第何號だかの長唄の自慢をしたといふんで、あのお撫りが長唄といふ面かい！と岡燒半分の人相見や戸口調査が初まつて寄つて集つて總スカンどのと第何號を散三に扱下した。伊勢與も一緒になつて衆議一決第何號の長唄を否決して了つたが、夫れから數日過ぎた或る日、伊勢與は何と思つたか、『家の奴は面はマヅイガ、アレで聲はイヽ、常磐津は式佐の名取だからホン物だ。東京へ歸つたら一度諸君を呼んで聽かせよう』と、老細君の常磐津禮讃を初めた。第何號でないレッキとした正夫人の禮讃だから無條件に全員一致して伊勢與夫人の藝術讃仰に同意した。私は腹の中で思つた。其頃はマダ女房に叱言をいふのをお客への御馳走にした時代であつた。細君の藝術を無邪氣に自慢する伊勢與の家庭圓滿は祝すべきでもあつたし、又嘆稱すべきでもあつた。伊勢與は溫泉廻りが唯一の道樂であつたさうだが、此の溫泉廻りにはイツデモ細君が同道したので、長い間の苦勞を倶にした細君への慰勞でもあつたし感謝でもあつた。

(10) 銀座ではストック第一の老舗

伊勢與の老夫人は震災後、間もなく易簀した。地震前から既に病褥に親しんでゐたので、震火の爲めに自邸も店舗も家財も一點剰さず全滅して、何十年の辛勞が一朝煙となつて了つたのが大打擊となつたさうだ。伊勢屋の資産は幾何あるか知らぬが、災後借貸家屋土地の敷金を借家人借地人に返還した分だけでも二十萬圓を超したさうだ。以て其富を想像すべきである。災後卸部を横町に移して小賣部だけとなつてゐる銀座では餘り目に立たぬが、高級なるストックの豐富は依然として銀座の覇をなしてゐる。當主代三郎氏の堅實なる才幹は寧ろ先代に勝るの評がある。今は伊勢屋としては却て知られないが、三枝商店は依然たる銀座の老舗で、ストック第一と稱せられてゐる。

(嗣出)

政界裏面 白眼老夜話

刀吏公記

◇……また政治季節になつたので吾輩のとこへ押しかけて來たのかい。この寒さじや老人は家の中に許り引こんでゐるので面白い話も聽かないが、今度の議會じや、何んと言つても支那問題が面白くなるだらうヨ。何しろ床次といふどつち付かずのワキ役が現はれたゞけに、狂言の運びは廻りくどいに極つてゐるからナ。參謀次長上りの田中の考では、幣原の軟弱外交のお蔭で支那がのさばり出したのだから、ガワーンと一つ喰らはせろといふので大がゝりの出兵さしたり、林權助を奉天くんだりまで使ひ走りさせて、旗竿の途中まで上つた青天白日旗を下ろさせたりしたものだヨ。青天白日旗を止めさせるなんて、あれ以上の内政干渉はなからうが、あんなに事平氣でグイ〳〵とやつてのけて行くところは矢張り軍人上りの田中の身上で、善い惡しいは別として、幣原などにはとても出來ない藝當だ。田中は戰人（いくさにん）だから、外交でも議會のかけ引でも戰のコツでやり居る。權助を奉天に使に出して青天白日旗の中止をやらせた時、「向ふ三ケ月」といふ期限を切つたものだが、その腹は、國民政府が奉天にまで實權を伸す前に、滿洲問題を張學良を相手に片づけて了はうといふのであつたさうだ。滿鐵の山本などもこの命を含んで、鐵道布設やその他の交渉を張學良を相手にドシ〳〵進め交渉はとゝのつたが、ハンコを押す段になつたら、「ちよつと待つて呉れ」と來た。それから矢の催促をすると、外交問題は南京政府とも相談してとか何んとか滑つた轉んだで要領を得させないで居る中に、去年の十二月廿九日に、日本へは御挨拶拔きで青天白日旗が滿洲一帶に上つて了つた。

◇……出兵の効能にしろ、今じや田中も少々持ち扱ひ兼ねてゐる氣味さ。第一、南京政府の奴等は、こつちの弱腰見拔いて、無條件で撤兵しなければ、日支交渉を進めないなんて言ひ出してゐるじやないか。そこへ持つて來て、彼奴等は大がゝりの日貨排斥はやる、英米はじめ諸外國からは正式承認を受ける、どう見たつて田中の對支外交は今までのところ大失敗さ。ガワーンとやつた筈の出兵が、今になつて見れば少しも利いて居ないのだからナ。出兵の効力のあつたのは日露戰爭頃までの話で、出兵即ち領土占領の時代が過ぎた今日では、巡査隊を出したも同じサ。

◇……床次が支那問題に目をつけて、飛脚旅行にもせよ、南京から奉天まで一わたり歩いて暮になつて議會の開院式頃に凱旋將軍

然と歸つて來て一寸人氣を立たせたのは、近頃の大出來だ。支那へ行つたのは何れ榊田か岡崎あたりの入智慧か知らないが、あの男には關西地方の商人の信者が割合に多くてネ、床次會などいふのも大阪附近に爲めになるのがある。この大阪商人の中には支那貿易屋が多いので、始終床次のところへ來ては支那の話をし、幣原の支那外交をいつも養味噌にいふので、これではいかぬといふ決心は實はこの邊からも起つたものだ。床次が民政黨を出た時の口實が對支政策の意見相違といふのもこの爲めであつたが、それなら田中外交賛成かといふとさうでもない。先づこの中間といふところだが、何れにしても支那問題で民政黨を出たのだから、何んとか世間に言譯の立つだけの事をこの問題でやらなければならない、そこで支那行となつたワケだ。向ふへ行つて蔣介石だ王世廷だ張學良だといふ風に新聞に名の出て居る連中には一わたり會つて「日ひ度い事があつたら腹藏なく聞かせてくれ」といふやうなワケで、田中外交の惡口は可成り仕込んで來たらしい。だが、それなら日本の對支外交をどう樹て直すかといふ段になると、實は別に大して新案もないのサ。もと〳〵支那へ行つたのは、役者が舞臺へ出るのに、舞臺の横手から出る代りに、花道の揚幕から出るのを摑んだのと同じやうなもので、この役者花道から勿體らしく出て來るからとて、大した名臺詞は持ち合せて居ないのだョ。

◇……床次といふ男は今の政治家の中では一寸變つた性格の持主だョ。原が生きて居る頃、無駄話の序に吾輩に言つたことがある――ウチ(政友會)の後繼ぎも好いのがなくて困る。まあ強いて求むれば床次と横田だが、横田は一を聞いて十を覺つて直ぐかけずり廻るので使ひ走りにはいゝが落ち着きがない。床次は噛んで含めるやうに言ひ聞かせて置いても時々感違ひをする。しかし、あれはイモで大學出で、男振りがよく、何んとなく大人の風があるから得をしてゐると、くさす樣な褒めるやうな事を言ひ居つた。正直そうに見えおつとりして品のいゝ政治家に見えるところがあの男の身上だネ。だが實は仲々腹黑いところもあり、それに近頃では途徹もなく已惚れてゐる。民政黨を脫走したのも次の內閣は自分だと確信してゐるからで、西園寺があゝ言つた、かう言つたと、あの人の惡い和尚の片言を自分一人の色目鏡で勝手に都合よく解釋して、田中の次のお鉢はどうしても自分だと信じ切つて、大臣面目で一座を集めて居るといふのはウソのやうなホントの話だョ。何んでも事の起りは、彼奴の脫走前に興津へ行つて和尚に會つた時、和尚が「田中のサーベル外交で支那問題はます〳〵惡くなるからこの上長くやつても行けまいし、さうかと言つて、民政黨のやり方では內政問題で左傾の取締がつかないし、君など一つしつかりやらなけりやいかん」と言つたとかいふ事で、それをてつきり、自分に內閣組織の準備をしろといふ謎と取つたといふ話だ。

◇……床次と田中が何度も會見して居るが、何を話してゐるかといふのかい? 分らないナ、恐らく當人同志も何を話したのか分るまいョ。こないだ犬養に會つたら、日本一の自惚屋と日本一の僥倖屋が會つてゐるのだから日本一の見物だと笑つて居たつけ。田中といふ男は運の好いといふ點では全く日本一だが、彼奴もそれを固く信じて居て、この前の總選擧の時でも、終り頃に政友會でもう百萬圓なくては勝てさうがなく、金は出來ず、弱りぬいてゐるところへ山条が來合はせて、「オイ、これじや負けるぞ」と言つたら、田中は「いや必ず勝つ」と言ふので「金は出來るのか」と念を押したら、「いや、金のアテはないが、オラには神樣がついてるから負けな

い」と眞顔で言つたので、これには山条もあきれるよりも感心して了つたと吾輩に話してゐたつけ。何んにしてもあれは運勢の强い男だヨ。この運勢一點張りの田中と自惚れの床次がワケのわからぬ會見をやり出したのは、御大典の時、久原が京都で先づ床次に會つてキツカケをつけたものでネ。久原はその時、東京へ歸つたら是非田中に會つてくれといふので、床次は「好からう」と大きく受けて置いたものだ。ところが、東京へ歸つてから、田中は一向會はうと言はない。これは田中の家來共が、うつかり會つてはこの相撲では田中がやられると心配して留めたからで、田中の腹を拵へるまで會はせなかつたものだ。その中に、政友會の長老株の岡崎と床次の參謀長格の榊田が會つて、すつかり獻立をこさえてやつたものサ。床次が支那へ行く前に田中に會つた時、田中から「宜しく賴む」と一言いはせたかつたのだが、田中はそこを家來から敎えられてゐるので、何んにもいはず「支那へ行くのは結構なことだ」といふやうなところで濟ませたのだヨ。

◇……サて、いよ〳〵床次が歸つて來てからの二度の會見だが、これが當人同志にも分らない不得要領な話サ。前にも言つたやうに、床次には別にこれぞといふ確たる對支政策はないのだから、「南京の誰はかう言つてゐた、奉天の誰はあゝ言つてゐた、日本の居留民はかう考えて居るといふやうな自分に責任のない意見を持ち出して、結極對支强硬外交を少し緩和してへ何うかといふ程度の意見を繰り返していふだけだつたらしい。これは床次のヅルイところで、實は對支政策なんか大した問題ではないので、こんな話をしてゐる中に「床次君一つ賴む」といはせて、それをきつかけに政權の盥廻しの下相談でもしたいのだが、田中はまだそこまで困つて居ないから、知らん顏して床次の對支意見をそのまゝ「さうじやノウ〳〵」ときいて居るだけで、この分では何度會つても同じだとサ。この樣子を見て作者の岡崎など近頃ひどく心配してゐるやうだ。といふのは、もと〳〵岡崎老は、出來ることなら、床次をもう一度政友會へ引こみ度いといふ考えを持つてゐるのでネ。こないだ吾輩が會つた時も「床次もぢつとして政友會に居たら、今頃總理大臣を一度や二度して居たのに」と言つて居た位だ。岡崎は何んでも榊田とどこかで飲んで、『ウチの田中も總理は一代きりだが、床次はまだ里心はつかんだらうか』と言つたら、榊田は、『そりや、副總理にでもすれば』と返事したといふ事だ。

◇……それからが一寸可笑しいのだヨ。岡崎はすつかりこれを内務大臣にして與れといふ註文だと合點して、田中をはじめ鈴木、小川、望月あたりに相談に行つた處が、他の連中はウンともスウとも言はないが、小川は、副總理は要るまいと氣のない返事をした。小川は自分が副總理のつもりで居るのだからナ。そこで岡崎は『副總理に誰がなるかは實力次第で決まるが、六ケしけりや田中が辭めた後の後任は籤でも引いてきめても好いではないか。兎に角床次を副總理にして與れと言つて内相の椅子を與れといふなら、入閣させたらどうだ。床次は何しろ三十の寶玉を持つてゐるからネ』と言つて床次を持ち上げたものだ。岡崎の爺さんがいふ通り、床次の下に代議士が三十人集つたといふ事は大したことで、これは田中でも濱口でも鈴木でも出來ない藝當だヨ。

◇……民政黨はどうしてゐるかつて？ホントに何うしてゐるかつて聞たくなるナ。根奴等の意氣地ないのには全くあきれるヨ。が官僚出が多いだけに反つくり返つて上の方許り見て居る連中と、いぢけて下許りうつ向いてゐる者

がないじやないか。今度の議會で折角の支那問題を出しても、永井や中野じやまだ駄目だし、肝心の濱口はあの通りの堅氣だから、外交問題となると一層堅くなる許り、若槻は一度總理をやつたのでもう大家振つて納つてゐるし、山本（達）は巾着の紐を締める一方、安達や町田もこの方面は不得手で役にたたない。たゞ江木だけは支那浪人などから買ひこんだ材料を集めて、幣原や宇垣に鑑賞を賴んでゐるさうだ。江木はあれで、いろんな材料屋でネ、いろんなものを仕込んで來てはゴツ〳〵とやる男だヨ。官僚出に似合はず、思ひ切つた腹黑のところがある。だが、支那問題では幣原を賴んで貴族院で一席やつて貰ふのを今から當てにしてゐる位だから、民政黨も駄目サ。幣原といへば、典型的な役人氣質の外交技術家と許り思つてゐたら、近頃は大分政治が好きになり出して來たやうで、賴まれなくても支那問題では一席辯じるつもりでゐるやうだ。それがといふのも、「幣原外交々々々々」とあんまりボロ糞にいふので、佛の顏も三度の喩で、牛が怒るやうに怒り出したのだヨ。

◇……支那問題はこの他例の張作霖暗殺事件といふ大問題があるぞ。これが仲々の難問題で、何れ議會では秘密會ものだらうが、政府筋じや大分ゴタ〳〵してゐるやうだし、民政黨の方では所謂材料を大分しこんでゐるから、形を代えた第二の朴烈事件のやうな泥仕合が始まるだらう。

◇……地租營業稅の委讓問題か。あれも仲々の大問題だが、そのことでこないだ後藤新平と伊東巳代治が揃つて番町の邸宅で田中に會つて密談したといふ事だ。その時、二人は田中にから忠告したさうだ。「地租營業稅委讓案は衆議院では二人か三人の多數でどうにか通るかも知れないが、貴族院では手剛い反對があるやうだ。研究會內でさへ贊否相半してゐる有樣だ。だから、政府はあれをむしろ始めから小問題に見せかける樣にし、餘まりこだはるナ。こだはると內閣の致命傷になるらしいぞ」と敎へたさうだ。田中もこの二人とは許してゐる仲だから、その通りするだらう。委讓案は結局お流れサ。なあに、あの案とて政友會の一枚看板だなんて騷ぎ廻るが、もと〳〵地方人の人氣取りに考え出したことで、案の根據に確信などあるワケのものではないのだから、貴族院で駄目になつたとなれば、もうオレ達の責任じやないと言つて地方をふれ廻はるまでの事サ。今の政治屋など皆んなその程度のものだヨ……。

◇……東京市會の方か。あれも困つたものだなあ。何しろ今までの議員の中三分の二は正業といふものを持たず、みんな市を食ひ物にして居り、市の吏員といふのが大低からいふ議員共の猊下なのだから、市政は全く亂脈にならざるを得ない。こないだ市來に會つたら、『今迄自分のやつて來てゐる大藏大臣、日銀總裁、東京市長のうちで、大藏大臣が一番やり易く、東京市長が一番六ケしい』とこぼして居た。だが、それは、市來の自ら招いたせいもあるのサ。はじめ助役をきめる時に市會に遠慮して、正交會（政友會）と革新會（民政黨系）の色彩のある男を一人づつ取つたのが間違ひさ。この二人の助役同志がいがみ合ひ、更に市長に對していがんでゐるのだから珍らしい三角關係だ。市來はどつち道、新しい市會が出來たら辭めなければならんのだが例の十年計畫の六百萬圓増稅案を一生懸命ででつち上げてゐる熱心は買つてやつてもいゝよ。だが、いくら増稅したところで、現在の市政では燒石に水だヨ。東京市政の墮落振りなら江木翼じやないが、材料を大分方々から持ちこんでゐるが、たゞ〳〵あきれる許りだネ。……まあ今夜は餘り遲くなつたから、又來いよ。その時ゆつくり話さうや……。



血と砂の接吻

谷譲次

1

燃え立つ太陽・燃え立つ植物・燃え立つ眼・燃え立つ呼吸——何もかもが燃え立つてゐる THIS VERY SPAIN!

そして、この闘牛場。

AH! SI!

何といふ熾烈・何といふ強調樂・何といふ極彩色! ふたゝび、何といふ炸裂的な「いすぱにあ人屠牛之古圖」! それがいま、私の全視野に跳躍してゐるのだ!

燃える流血・燃える發汗・燃える頬・燃える旗——わあつ! 血だ、血だ! ぷくぷくと黒い血が沸いたよ牛の血が! 血は、見るみる砂に吸はれて、苦悶の極、虎視耽々と一時靜止した牛が、悲鳴し怒號し哀泣し

——が、許されつこない。もうこゝまで來たらお前が死なゝい以上納まりが付かないんだから、おい牛公！ そんな情ない眼をせずに諦めて死んでくれ。そら！ また、鬪牛士が近づいた。今度こそは殺られるだらう——ひつそりと落ちる鬪牛場の寂寞——。

やあつ！ 何だいあれあ？

棒立ちになつた馬、鬪牛士の乘馬が盛んに赤い紐を引きずり出したぞ。ぬらぬら陽に光つてる。

ＥＨ？ 何だつて？ 馬が腹をやられた？ 角にかゝつて？——あ！ さうだ、數條のはらわたがぶら下つて、地に這つて、砂に塗れて、馬脚に絡んで、馬は、邪魔になるもんだから蹴散らかさうと懸命に舞踏してゐる！

それを牛が、すこし離れてぢいつと白眼んでる——何だ、同じ動物のくせに人間とぐるになつて！——といふやうに。

總立ちだ！

歡聲、灼熱、陽炎、蒼穹。

血と砂と音と色との一大交響樂。

獸類と人の、生死を賭した決鬪。

上から太陽が審判してゐる。

その太陽が、このすぺいん國マドリッド市の鬪牛場に充滿する大觀衆の一隅に、今かくいふ私——ジョウヂ・タニイ——を發見してゐるんだが、この眞赤な刺激は、たうとう私に、人道的にそして本能的に眼を覆はせるに充分だつた。

が、いくら私が眼をつぶつたつて、事實と光景はこのとほり活如として私の四圍に進展しつゝある。

だから、何うせのことなら私も、ペン先に牛の血をつけて、出來るだけ忠實に寫生し織り交ぜ「あらぶ・すぺいん」風の盛大な繪壁掛を一つ作り上げてみたい。

To begin with——of all the exoticism, gimme Olde Spain!

これから鬪牛場へ出かけやうとして、いま現實にマドリッドの往來に立つてゐる私——ＲＩＧＨＴＯ！ こゝから着手しよう。

西班牙では、私も意氣な西班牙人だ。放浪者の特權。小黑帽をかぶつてＣＡＰＡを翻してるＤＯＮホル——私——の上に太陽が燒け、下には赤い敷石が燒けて、私の感覺も「すぺいん」を吸收して今にも引火しさうだ。

太陽・紺碧——鬪牛日！

歌つて來る一團の青年。

聲が街上の私を包圍する。

亞弗利加の陣營で
ある西班牙兵士の唄へる――。
南方ヘレス產の黃葡萄酒、
北方リオハ產の赤葡萄酒。
この赤と此の黃と。
われらが祖國いすぱにあの國旗！

――なんかと、國旗の色をぶどう酒で識別してる。が、じつを言ふと、西班牙の國旗は、鮮血を流して黃金を取りに行くといふ世にも正直な慾望を寓意して、赤と黃から出來上つてるのだ。しかし、それはそれとして、その赤葡萄酒と黃葡萄酒、鮮血と黃金の無數の旗が、けふ同國首府マドリッドの大通りに矢鱈にひらひらして、かうして其處のアルカラ大街の雜沓に紛れ込んでるドン・ホルヘ――Don George――の耳に、「海賊の唄(コルサリアス)」と題するくだんのモロッコ從軍歌が、いま糖蜜のやうなイベリヤ半島の烈日に熔けて爆發してゐる――鬪牛日のMADRID！歐羅巴はピラネエ山脈に終り、あふりかはピラネエ山脈にはじまることとの、西班牙は「白い大陸」と「黑い大陸」の鎖だことの、やれ、ムウア人の黑い皮袋へ盛られた白葡萄酒の甘美さよ！ さうかと思ふと、西の土に落ちて育つて花が咲いて果を結んだ東の種だことのと、古來いろんな人に色んなことを言はれてゐるESPANA――黑髮の女と橄欖色の皮膚、醉へる視線と棕梠の並木、あらびや風の剳門(アアチ)と白壁の列、ゆるく起伏する赤石の鋪道と、市民のひとりのやうに其の上を濶步してるセニヨオル・ドン・ホルヘ・タニイ――べら棒に長つたらしいが、私だつて、西班牙へ來れば、George がホルヘと讀まれて其のうへに Senor Don の敬稱ぐらゐ附かうといふものだ――そこでその、ドン・ホルヘの聽覺へ晩秋の熱風は先刻の「海賊の唄」を送りこみ、風にSI・SIとしきりにhissing sounds――すぺいんの人はYESといふところを「スイ！」と齒の隙間から不可思議(ミステリアス)な息を押し出す――が罩もり、その呼吸に「カナリヤの勞働」――きな臭い煙草の名――の香が絡み、散亂する長調の音譜と茫湃たる此の雜色の動搖と、灼輝する通行人の顏と動物的な興奮それらの陰影がくつきりと濃く地に倒れて、上には、銅の鍋を低くぶら下げたやうな、いやにきらめく南國午後の太陽と、O！何と思ひ切つた紫外線の大氾濫！

そして、この西班牙的な群集・西班牙的な乘物・西班牙的な騷音！――それが何うだ！ 森と町の一方をさして渦まいて往く。鬪牛場へ！

AH！ SI！ SI！

すぺいん・マドリイはいま「血の祭典」を期待して爪立ちし

てゐる。深紅の國民的行事のうちに、誰もかれもが完全に「頭を失く」（ルウズ・ワンス・ヘッド）してゐるのだ、今日は。

プラサ・デ・トウロスに、午後四時から今年の季節（テンポラダ）中でも指折りの闘牛があるのだ。

だからこの流れる群集・游ぐ乘物・踊る騷音の一大市民行列―人呼んでマドリッド名物「闘牛行」（アウロス・トウロス）と言ふ―がCalle de Alcalaの町幅を埋めて、その繪畫的な色彩、南國的な集團精神、これほど「失はれたる前世紀の挿繪をいまに見せる」お祭り情緒はまたとあるまい。市に地下鐵が出來てから、この「闘牛場へいそぐ人の河」なる古儀に幾分氣分を殺（そ）ぐものがあるとは言へ、それでもまだ、此の日、支那靑（チャイナ・ブルウ）の空に火のかたまりの太陽が燃える限り、そしてすぺいんに「聖なる殺戮」があとを絶たないあひだ、過ぎし日（パイ・ゴン・デイス）を盲愛するこの國の人々は、銘々がめいめいの魂ひの全部をあげて、昔から闘牛の序曲のやうに習慣づけられてゐる此の市民的古式の行列「闘牛行」に、それぞれ派出な役目を持たうとするであらう。

闘牛行（アウロス・トウロス）は、闘牛のある日、市の中央の廣場「太陽の門」（ポエルタ・デル・ソル）から闘牛場（アラ・プラサ）へいたる途中、アルカラの町筋に切れ目もなくつゞく見物人の行列のことを修辭化したもので、郷土的な、そして歴史的な、西班牙街上風物詩の第一頁だ。

午後二時から四時まで、マドリッドを貫くアルカラ街は、闘牛場（アラ・プラサ）へ近づくにつれ、闘牛へ殺倒する人と車馬のほかは交通を禁止される。この老若男女のすぺいん人の浪、亡國調を帶びた其の大聲の發音、日光のにほひと眠たげに汚れた白石建造物の反寫、長く引つ張つて押しつぶすやうな、あの歩きながら「海賊曲」（コルサリアス）を繰り返しつゞける激情的な唄聲――。

モロッコへ陣地で
或る西班牙兵のうたへる。
南へレス産の黄葡萄酒、
北リオハ産の赤葡萄酒！
この赤と此の黄と――。

陽光に醉つた大學生の群が、肩に手をかけ合つて今日の闘牛行に加はつてゐるのだ。

低い太陽の眞下に、アルカラの燒け石道を踏んでぎつしり詰めかけてゆく眞摯な闘牛行の人々！

銀行員はペンを捨てゝ、鍛冶屋は槌をおき、八百屋の小僧は驟馬をつなぎ、政治家と軍人は盛裝し、女房と娘は「牛の光榮」のため古めかしくいでたつて、みんなが同じ赤と黄の華やかさにはしやぎ切つて急いでゐる。

AH・SI！　何といふ西班牙らしさ！

鬪牛は彼らにとつて傳統的國家精神の具現なのだ。宗教以上の宗教、第一位の宗教なのだ。黒い彫刻的な男の横顔と、白く閃めく女の眼と齒を見ただけでも、それはわかる。だから私も、西班牙人なみに眼の色を變へて、鬪牛場(プラサ・デ・トウロス)をめざし斯うして進軍しつゝあるんだが、これから目撃しようとする「血と砂」の國民的大スポウツの豫想は、皆がみな走りながらしやべつてる「西の支那人」の大群、その騒々しいこと、殺氣立つてること、これぢやあ今日殺される筈の牛族のはうが餘つぽど冷靜だらう。何のことはない。逆上と饒舌と有頂天の一大混成旅團が、アルカラ大街を帶のやうに除々に動いて、むこうの鬪牛場の入口へ吸ひ込まれていくと思へばいゝ。そして、この叙景に忘れてならないのは、ぢりぢりする太陽と眞黒な地物の影、女の焔と旗と植物を撫でてゆく此の高台の光風だ。

鬪牛場(アラ・プラサ)は近い。

太陽(ソル)も近い。

てらゝ・らん・らん!

てらゝ・らん・らん!

とつぜん鬪牛樂(パサ・ドブレ)が聞こえてくる。開演の迫つた合圖——軍樂隊のONE・STEPだ。

ドン・ホルへの歩調も、殺害さるべき牛の身の上を忘れてとても陽氣にならざるを得ない。てらゝ・らん・らん! てらゝ・らん・らん! と。

何と、舞踏的なパサ・ドブレ!

てらゝ・らん・らん!

てらゝ・らん——!

洪水のやうな西班牙人(スパニアード)の混雜に押されて、ドン・ホルへの私も鬪牛樂(パサ・ドブレ)に合はせて踊りながら、いよいよ入口を潜つた。

と、突如、圓形の黄砂の廣場は、直射を受けて眼に痛い。

そして共の周圍、城壁のやうに石の段々に重なつて動き、そよぎ、うなづき合つてゐる八千から一萬のすぺいん人種の顏——あとからもどんどん割り込んできてゐる。

上には、太陽の示威運動だ。

これより先——。

ボルドオから聖(サン)セバスチヤンを經てMADRIDへ辿り着いたジョウヂ・タニイ——それは陸橋に月が懸つて、住宅の根元の雜草にBO・BOと驢馬の鳴く晩だつた——が、ドン・ホルへに轉身してこのマドリイの宿ときめたのが、商業街の心臟(ハアト)モンテイラ街のいま居る家だつた。

こゝでちよつと道くさを食べる。いま言つた町の名だが、このモンテイラといふのは主馬頭の語意だ。すなはち、何時の

か此の町のこの家に、時の王に仕侍する主馬頭が住んでゐたことがあつた。あの、十字の船印しの附いた大帆前船を操つたすばいゝやあどが、自分らの鮮血と交換に黄金を奪りに海を越えた時代に相違ない。とにかく、その主馬頭の夫人は小説的な吸血鬼で、騎士だの侍従だの詩人だの澤山のBEAUXを持つ。だから主馬頭が宮廷に宿直の夜なんか、蒸暑い南國のとだから窓を明け放して、本人は寢卷か何か引つかけた肉感的なスタイルのまんま、窓枠に靠れて下の往來を覗きながら、南ヘレス産の黄葡萄酒・北リオハ産の赤葡萄酒なんかと好い氣に月を仰いで低唱してゐると、忍んで來た勇士達が、セニョラの窓の下で鉢合せを演じて盛んに殺したり殺されたりする。それを月と夫人が上から冷たく青白く見物してゐた——といふので、これがひどく有名になり、それからこの通りを主馬頭町と呼ぶにいたつた。かういふ因縁つきの町の、おまけに私の居る家といふのが、取りも直さず其の主馬頭の舊邸なんだから、夜中にたびたび窓の下でごそごそ人聲がする。さては騎士だの侍従だの詩人だの、例の主馬頭夫人の魅笑に惹き寄せられた戀のすぺいんの亡靈たちが何か感違ひして現れたとみえる——かう思つてGABAと寢台を跳ね下りた私がせいぜい歌劇的に窓へ進んでそのむかしセニョラがしたであらうやうに窓を開いて見下ろすとマドリッドは孤丘の上に建つてゐる。連日の青天に白く乾いた遙かの陸橋に新月がかゝつて、建築中の電話會社の足場の下を、朝市場へ野菜を運ぶ驢馬の長列がBO・BOと泣いて通り過ぎつゝあるばかり——芝居歸りのドン・フアン・テノリオ、夜のドン・キホウテとサンチョ・パンザの人影が霧にぼやけて、聖フランシスコ寺院の鐘も鳴らず、一晩ぢう戸外を笑ひ歩くマドリツトの町民もいまは短い明け方の眠りを眠つてゐる。あんまり好い月夜なので、ドン・ホルへもつい、うろ覺えの南部ヘレス産の黄葡萄酒・北部リオハ産の赤葡萄酒なんかと、むかし主馬頭夫人がやつたやうに月を仰いで低唱しようとしたところが、矢つ張りいけない。窓の眞下からSI・SI・SIとはつきり戀の迷魂らしいさゝやきが揺れ上つてくるのだ。

ドン・ホルへの私は、眼をこすつて窓の下の月光を透かし見た。

家の根元に、何だか黑い物が朦朧々してゐる。

2

と斯う言ふと、さしづめこのあとは「マドリッドの舊家に泊つて經驗した恐怖の一夜」といつたふうな西班牙種の怪談でも出て來なけりやならないやうだが、なに、そんなんぢやない。

私の寓居に、ペトラといふ若い娘がゐる。

いやに話しが飛ぶやうだけれど、飛ぶ必要があるんだから仕方がない。

で、私の家のペトラは若い娘だつた。西班牙の若い娘はすべて其の近隣の甘味である。だから、ペトラもこの公約により主馬頭街の Sweety だつた。

すでに甘味だから、ペトラはあの、アンダルシアの荒野に實る黒苺のやうな緑りの髪と、トレドの谷の草露のやうに閃めく眼と歯をもつ生粋のすぺいん兒だつたが、假りに、往時の主馬頭内室ほどのBEPPINぢやなかつたにしても、何しろマドリイの少女――と言つてももう廿五六だつたが――

なんだから、このモンテイラ街のペトラにも疾うに一人の男がついてゐたといふことは、そのまゝ、受け入れられていゝだらう。

などと、何もさうむきになることはない。要するにうちのペトラに戀人あり、名をモラガスと言つて西班牙名題歌舞伎リカルド・カルヴオ一座の、まあ言はゞ馬の脚だつた。じつは一度、私はこのドン・モラガスの舞台を見たことがあるんだが、幕があくと、グラナダあたりの旅人宿の土間で、土器の水甕の並んだ間に、派出な縫ひのある財布を投げ出したお百姓たちが、何かがやがや議論しながら、獸皮の酒ぶくろから南方へレスの黄葡萄酒かなんかがぶ呑みしてゐる。言ふまでもなく其他多勢の組であんまりぱつとする役ぢやないが、そのなかで、一きわ黄色い大聲を發して存在を主張してゐた「村の若い衆」があつた。それがわがペトラの愛人ドン・モラガスだつた。モラガスは水を呑んぢやあ義務のやうに醉つぱらつて、しきりに仲間の肩を叩いて笑つてゐたが、さうかうするうちにほんとの芝居がはじまつたと思つたら一同こそこそ追ひ出されちまつた。あんな金切聲を連發するやつが居ちやあ肝心の會話の邪魔になるからだらう。それからあとで、宮殿の番兵になつて烏渡おぢぎをしたきり、その夜のモラガスの出演はこの二つだけだつた。で、かういふドン・モラガスである。が、舞台外では、いすぱにあ俳優、かれは主馬頭横丁の甘味を相手に實演「夜の窓」の主役をつとめてゐたらう。

主馬頭の舊屋敷へ馬の脚が通つてくるなんて、私もこの恐しい偶然事にはひそかに戰いてゐたんだが、通ふと言へば、一たい西班牙ほど結婚の絶對性を認めてゐる近代國家はあるまい――どうも色んな方面へ話題がさまよふやうだけれど、これがみんな今に一頭の牛に對して必然的關係を生じてくるんだからままもすこし聞いて貰ふとして――西班牙では、結婚は、地に咲いた神意の花だとあつて、早いはなしが、姦淫者を見つけて斬り

つけても、殺さない限り必ず無罪だし、たとへすこし位ゐ殺したところで、むしろ「名譽の輕罰」でごく簡單に濟む。それほど合法の結婚を保護するに厚い。が、それが厚すぎて、決して離婚といふことを許さない掟になつてるので、間違つて咲いた神の花は何うにも萎みやうない。つまり一度結婚したが最後――ほんとにこれが最後――こんりんさい離婚は出來ない。どだい離婚といふ言語はすぺいんの辭書にはないんだから、いざ結婚といふまへに女は非常に要心する。これは何も女に限つた理窟ではなく、「六十年の不作」籤を引き當てちやかなはないから、男だつて相當に苦勞するんだらうが、どうも古代から受身のせいか、物語のうへでは女ばかりが嫌に被害妄念をもつて用心することになつてる。では、何う要心するかといふと、ここに一對の青年男女があつて戀を知り、兩方の親達が許し合ふと、これがほかの國だと文句なしに早速結婚しちまふところなんだが、西班牙ではさうは往かない。ここにはじめて男のまへに、長い試錬の月日が展開し出すのである。ＡＨ！

親が承知の婚約の仲だから、男も、晝は公然と訪問する。これはまあいい。厄介なのは夜だ。可哀さうな男は、毎晩毎晩ＣＡＰＡと稱する黒い圓套――裏に凝つて、赤と綠の天鵞絨なんかをだんだらに付けて通がつてる――そいつをすこし裏の見えるやうに引つかけ、ボイナといふぼつちのついた大黒帽の從弟みたいな物をいたゞき、もつと氣取つたやつはカパのなかにギタアを忍ばせたりして深夜に女の住む窓の下へ出かける。そして、南へレス産の黄葡萄酒よ！と合言葉を投げると、内部から、北リオハの赤葡萄酒！とか何とか應へながら、女が窓を開ける。時刻は兼て打ちあはせてあるから、女は厚化粧をして待つてゐて、古城の姫君にでもなつた氣ですつかり片づけてゐる。ここにおいて數分間、窓を通じて内外に戀のやりとりがあるんだが、この場合、いくら公認の忍びでもギタアを引つ搔いたりしちやあ近處の迷惑になるから、たいがい沈默のうちに兩人同じ月を眺めて溜息をつくくらゐのものだ。これが毎夜毎夜毎夜――以下無數――に繼續する。しかし、たゞ窓をとほして顏を見あつたり僥古つたりするだけのことだから、まるで動物園にお百度を踏むのと同じで、通ふと言つたところが、單に男のはうで、愛の恒久性、戀の保證をかういふ手段で見本に示すに過ぎない。だから、これに閉口たれて通勤を止しちまつた男は直ぐ駄目になるわけだが、來る夜もくる夜も根氣よく窓の下に立つてゐると、お前、こんどのは割りに長つゞきするぢやないか、なんかと先づ、女の兩親、ことに母者人が呆れ半分に感心し、男の誠實相解つた！と古風に手を打つたりして、あ

とはすらすらと事が運び、間もなく神の意思に花が咲くといつた經路だ。どうも廻りくどいが未だにやつてる。私も何時か、くらい横町にあちこち窓を見上げて立つてゐる青年をふたりも三人も見かけたものだつた。通行人も巡警もこればかりは知らん顔してとほり過ぎることにしてゐる。それはいいが、なかには、一晩に二三個の窓を掛け持ちして、自轉車を飛ばして走りまはつてゐる、私立大學のPROFみたいに多忙なのもあつたりして自然この「西班牙國男女婚約期間」には悲喜こもごも幾多の秘話があるんだが、元來これは闘牛のはなしの筈だから、そこで、無理にも筋を牛のはうへ捻ぢ向けよう。

が、これで判つた。つまりドン・モラガスはうちのペトラと許婚の間で、目下せつせと窓通ひをやつてる最中なんだが、ドン・ホルへはそんなことは知らない。夜中に窓の下でごそごそ人聲がするのは、てつきり主馬頭夫人（セニョラ・モンテイラ）の舊戀人たちの幽靈だらうと思ひこみ——まあさ、一たい何だらうと窓を開けて見下ろしたところが、丘の街マドリッドを明方の熟睡と月光が占領し——下のペトラの窓にへばりついて、

『ねえペトラさん、まだ話しが決まりさうもないでせうか。僕あもう闇黒の中で眼をつぶつて歩いても、ひとりでに此の窓の下へ來るやうになりましたよ。』

『まあ！　でも、未だらしいのよドン・モラガス。だつて、お母さんたら、うちのお父さんはわたしんとこへもうこの三倍も通ひました、なんて言つてるんですもの。』

などと、いすぱにあモダン・ガアル「窓のペトラ」と盛んにTETE・A・TETEしてたらしい役者ドン・モラガスが、はつとびつくりして上を見あげたから、私もばつが悪い。あわてて深呼吸をしながら遠くへ眼をそらすと、遊子ドン・ホルへの顔いつぱいに月が照らして——ま、そんなことは何うでもいい。話頭を闘牛へ戻す。

3

燃え立つ太陽・燃え立つ砂塵・燃え立つ群集・燃え立つ會話——何もかもが燃え立つてゐるこの大闘牛物。

とうろす・け・ばん

あ・まだろ・おい！

雑音を衝いて破裂する奇聲、濁聲。

4・P・M。ぢつとしてゐても汗ばむ太陽の赤光（しやくくわう）だ。

満場に横溢する力づよいさわめき。

切符の番號と見較べて席をさがす人々。

蒼穹に林立する赤と黄の國旗。
てらゝらんらんの鬪牛樂(パキ・ドブレ)。
誰からともなく唄ひ出す「海賊歌(コルサリアス)」の合唱。
男の圓套(マント)と原色的な女裝の點綴。
情熱と忘我と、above all 太陽――SI！ 鬪牛はいま始ちらうとしてゐる。

下の演技場は一めんの砂だ。

そこに、深紅の農民服を着た人足たち――と言つても、これはみんな名ある鬪牛士の下つ端弟子で、若いのばかりか、なかには白髮頭のお爺さんもゐる。野郎、これで一杯呑つて來い、なんかと時々親方が投げて呉れる金錢で衣食してゐる連中――が、開始前、手に手に箒を持つて、中央の大圓庭に砂を均してゐる。

見わたす限りの人の壁に、ところどころ派出な色彩が動くのは、吉例により、貴婦人達が扇を使つてゐるのだ。何といふ西班牙らしい輕さ！ 異國さ！ その怪鳥の羽ばたきのやうな、妙に柔いグロテスクなひゞき！ これは何ものでもない「Spain Herself の音だ。おまけに、あほぎ方がまた西班牙だけに餘程變つてゝ、先づ最初おもてを見せて二三回ひらひらあほぐと、つぎに、ひょいと器用に持ち更へて、今度は裏を出す。こいつを繰り返してゐる。このすぺいん扇はなかなか高價なもので、女はまるで寶石のやうにこれを澤山蒐めて威張つてるくらゐだが、主材料の竹の關係上、その大部分は日本出來である。何とかいふ京都の扇工場に西班牙人の圖案家がゐて――ま、扇のことは此のさい第二だ。

廿仙(センテモ)出して座蒲團を買つた私は、かうして石段の席へ腰を据ゑて、持參の望遠鏡で正面の入口の混雜を檢査してゐる。

牛の略歴で御座い(トウロス・ケ・パン・ア・マタル・オイ)
牛の略歴でござい(トウロス・ケ・パン・ア・マタル・オイ)

番付賣りの小倅が人を掻い潜つて活躍してるのが見える。この「牛の略歴」といふのを讀んでみると「今日第一回の殺害に使用さるべき名譽ある幸運牛は、名をドン・カルヴアリョと稱し、第一等の鬪牛用牛産地ヴエラガ公爵所有の牧場出身にして、父は、かつて名鬪牛士ドン・リイヴアスを角にかけたる猛牛鋼鐵王七世、母なる牛は――」と言つたぐあひに「牛量いくら、牛長――鼻先から尻尾の端まで――幾らいくら。牛性兇暴にして加徒力教の洗禮を拒否し、年齒二歳にして既に政府運輸の急行列車に突擊を試みたることあり。やうやく長ずるに及び、猛惡果敢の牛質、衆牛にぬきんで――」なんかと、まあ、言つたふうに、牛の生立ち・日常生活・その行狀(カンダクト)等を記述してき

りがない。みんな買つて わくわくしながら讀んでゐる。

入口は大混雑だ。

何しろ、襯衣一枚きりないものは其の一まいの襯衣を質におき、近在近郷の百姓はもちろん、聖フランシスコ寺院前の女乞食も、常用のよごれた肩掛を賣り飛ばしてさへ出てくる此の大闘牛日だ。「闘牛行」のしんがりが續々雪崩れ込んできてゐる。

開演まぎはに馬車で駈けこんで、滿員の全スタンドに思ふさま着物を見せやうといふのが、マドリッド社交界の流行だ。それがこゝに期せずして落ち合つて この不時の馬車行列――二頭立ての馬車が、砂けむりを上げて後からあとからと躍り込んで來る。四人乘りだが、けふだけは六人滿載して、幌のうへに女がふたりづつ腰かけてる。一行正式の西班牙裝束だ。女逹は、あのマントン・デ・マニラといふ、大柄な縫ひをして房の下つた、いはゆる Spanish Shawl を引つかけ、高々と結ひ上げた頭髪の後部に大櫛を挿し、或る者はそのうへから黑また白の薄いぺえるをかけ、カアネエションの花――西班牙の國花――を胸に飾つて。

席へつくと同時に、みんな言ひ合はしたやうにこのマントン・デ・マニラをひらりと肩から滑らして、自席のまへの欄干へ懸ける。これが何よりの闘牛場の裝飾になる。いまスタンドの其處此處に大輪の花が咲いたやうに見えるのが、それである。

扇子と manton de manila とCAPAと、ぼいなとカアネイションと牛と。

そして興奮と白熱と饒舌と女性と。

なかんづく太陽！――闘牛は今はじまらうとして。全すぺいんがこゝに集つて待つてゐる。

――で、直ぐ始めてもいゝんだが。闘牛に關する幾らかの豫備智識を持たなくちやお只見たつて面白くあるまい。もつとも私の席はかなり闘牛庭へ近いから、よく見えることは見えるんだけれど――とにかく。この座席を占領するために何れだけ私が苦心慘胆しなければならなかつたか。ひいては。闘牛といふものに對する西班牙人の心持は如何？ といふやうなことから、いよいよ始まるまでの數分間を利用して。この機會にすこし「闘牛考」をしてみよう。

もう大分まへだが、私がピラネエ颪みたいにこのマドリッドへ吹き込んで來た當初から、年に一回の最大闘牛、赤十字の慈善興行が來る日曜日――すなはち今日――催されるといふんで、町も國も新聞も居酒屋も、早くから其の評判ではち切れさうだつた。

闘牛――すぺいん語で謂ふ CORRIDA DE TOROS。

闘牛は、言ふまでもなく、一時この國に權力をふるつたアラビヤ人の影響で、十六世紀初期までは、勇猛な一人の騎士(カバレロ)が槍を持つて悍馬に跨がり、おなじく勇猛なる牡牛(トウロス)に單身抗爭してこれを斃すのがその常道だつた。そして主として貴族の特權的觀賞物だつたが、この遣り方は、牛よりも人にとつて危險率が多い――たしか十六世紀のはじめだつたと思ふ。或る年の闘牛祭禮(フエスタ・デ・トウロス)には、一日に十人の「勇猛なる騎士」が牛の角にかゝつて敢ない最後を遂げたと記錄に見えてゐる――といふんで、もつと安全にそして確實に牛を殺し、たゞその過程を華美に且つ勇壯にしようとあつて、首府マドリツドに大闘牛場(プラサ・デ・トウロス)が新築されるとともに、從來の闘牛方法を改正して現行の順序樣式を採用し、同時に闘牛は一般民衆の熱狂的歡迎と流行を獨占するにいたつた。こんにち西班牙國内の闘牛場は二百有餘を算し、なほ、常設の闘牛場を有たない小町村では、市場を祭日其の他の場合の臨時闘牛場に充當してゐる。如何にすぺいんの國民生活に、闘牛が重要な一部、じつに最も重要な一部を作してゐるか、これでも知れやう。

そんなら一たい、何故さう此の「儀禮と技藝によつて美裝されたる牛殺し」が、西班牙民族のうへに盡きざる魅力を投げるか？ 言ひ換れば、闘牛に潜む[illegible]は何か？――といふと、第一に、闘牛は必ず野天で行はれる。しかも夏日炎々として人の頭がぐらぐらつとなつてるとき、闘牛場には砂が敷いてある、其の黄色い砂利にかつと太陽が照りつけて、そこに、人と動物のいきれが陽炎のやうに蒸れ、たらたらと流れるわる赤い血――時としては人血も混じて――の池がむつと照り返つて眼と鼻を衝く。さうすると觀客はすつかりわれを忘れてわあつと沸き返る。といふ此の灼熱的な、ちよつと變態的な效果に盡きる。この南國病的場面を極度に助長させるため、そこはよく市民の心理を摑んでゐて、闘牛はいつも夕方にきまつてる。午後四時から五時、六時から七時までのあひだだ。何故？――と言へば、長い暑い、だるい一日が終りに近いてくると、人は、強烈な日光にらだつて八〇パアセントばかり病的な狀態におち入る。これは「氣候溫和にして」と地理の本にもあるやうな、わがにつぽん國ではちよつと想像出來ないかも知れないが、砂漠と仙人掌と龍舌蘭のすぺいんなんかでは、誰でも或る程度まで體驗する感情に相違ない。つまり此の、一日の暑氣と日光に當てられて、町ぢうの人が牛でも猫でも、何でもいいから早く殺しちまひたい發作的衝動に驅られてうづうづしてる時刻、ちやうどこの時は、太陽も沈むまへで思ひきり其の暴威を揮ふ。南の夕陽は發狂的だ。風は死んで、爆破しさうな焦立たしさが市街

を固化する。人の血壓は高い。神經は刺戟を求めて、そして何んな刺戟にでも耐へられさうに昂進してゐる。おまけに、陽はいま最も地上に近い――といつた、心理的にも氣象的にも殺伐な潮どきを見計らつて、何も猫を殺したところで初まらないから、そこで大々的に牛を殺すことにしたのが、このいすぱにあ國技「こりだ・で・とうろす」だ。だから、西班牙人は男も女も自らの情熱の捌け口をもとめて萬事を放擲してこれへ殺倒する。もちろん一つは、アラビヤ人との混合血液による國民性だが、毒を征するに毒をもつてすといふ爲政的見地から、皮肉に言へば、鬪牛は、夏のすぺいん人の一時的錯亂に對する安全瓣かも知れない。思ふに、この蠻風も風土的必要に應じて發生したものであらう。道理で、サン・セバスチャンにあつた有名な賭博場を閉ぢて國中からばくちを追つた現獨裁宰相――西班牙のムッソリニー――Primo de Rivera――も、まだこの鬪牛だけはそつとして置いてる。もつとも彼だつてすぺいん人だから、熱烈な鬪牛ファンであつても差しつかへないわけだが、鬪牛を禁止すると西班牙に革命が起るとみんなが言つてる。その革命も、夏の暮れ方に、のぼせ上つたDON達が街上に踊り狂つて互ひ料理し合ふんぢやあ騷ぎが大きい。おなじ屠殺するんなら、まあ、人よりあ牛のはうが幾らか増しだらう。第一、牛はあんまり文句を言はないし、それに、血が澤山出る。

これが鬪牛の哲學だ。したがつて物凄い鬪牛者には、男より・も女――のはうが何うもヒステルカルな殘忍性に富んでるとみえて――が多いことは、容易にうなづけやう。

鬪牛には季節がある。復活祭から十月までの毎日曜日と祭日が正規の鬪牛日だ。十月以後にもあることはあるが、それはいはゆる小鬪牛といつて、牛は若牛、鬪牛も幕下どころの下級鬪牛士で、本式ぢやないから何うも見劣りがする。

つぎに鬪牛場だが、その建物は、ちよつと見たところ羅馬の圓形鬪技場に似てゐて、途轍もなく尨大なものだ。這入ると中央の廣場がいはゆる鬪牛庭で、一ぱいに砂利が敷き詰めてある。それを見下ろして、ぐるりと高く雛段形の棧敷が取り卷いてゐる。見物席の根、つまり實際の鬪牛庭との境壁には、周圍に、高さ五呎ほどのタアル塗りの木塀がめぐらしてあつて、其のところどころに、牛狂亂の牛の角のあとらしいこわれが見えてゐる。それはいゝが此の觀覽席がまた妙なふうに區別されてゐて、まへにも言つたとほり、鬪牛は炎天下に行はれるんだから、その當日、何月何日の何時ごろには、どの邊に陽が射して何處らが陰になるといふことはちやんと前もつて判つてゐる。それによつて座席が二大別されて、日陰を Sombra と言

つて上等席だ。このはうはたいがい廿から廿五ペスター——一ペスターは邦貨約三十錢强——陽の照る側の SOL は、入場料十ペスターぐらゐで先づ二三等にあたる。

こんなふうに日陰(ソンブラ)の席がずつと高價い。さうだらう、陽かげは涼しいにきまつてるから——なんかと思ふと大變な間違ひで、では何うして日蔭が高級席かといふと、これにはまた大いに西班牙的な理由がある。それは、突かれ刺されて半死半生になつた牛は、苦しいもんだから例外なしに陽影へ日かげへと這入つて來て、死ぬ時はいつも日陰席の眞下ときまつてゐる。だから闘牛の後半——最も白熱的な部分は日陰の側で演じられるわけで、從つて、こゝに居ればよく見え、その殘酷な快感を詳細に滿喫出來るといふんで、ほんとの闘牛ゴウアウスの連中は、借金しても爭つて倍も高い陽かげ(ソンブラ)の一等へ納まるのだ。が、倍でも三倍でも、SOLにしろSOMBRAにしろ、けふのやうな年一度の特大闘牛になると、何でもいゝから切符が手に這入つたゞけで幸運に感謝しなければなるまい。私もこの切符のため數日來東奔西走したが、かなり前から發賣してるにかゝはらず、疾うの昔に賣り切れちまつて、市内の切符賣場(レベンダ)を廻つてみると、廿五ペスタの日陰券(ソンブラ)が一枚二百ペスター——六十圓——あまりに暴騰してゐる。べらばうな話しだが、かうなるとまるで入札みたいなもので、それさへ見てるうちに値上げされて行つて、なかなか手に落ちさうもない。これは、はじめ仲買人(レベンタ)が切符を買ひ占めて人氣を煽り、いま小出しにしてるのだといふやうな評判もあつたが、何しろちよつと近寄れさうもない鼻息で、私なんか途法に暮れたかたちだつた——するとこゝへかの下宿屋のペトラの戀人、名優ドン・モラガスが、このあらたかな切符をかざしてドン・ホルヘを救ひにあらはれたのである。

かういふわけだ。

窓逅ひの現場を發見されたのが面映ゆかつたのか、それとも、今後戀路の妨げをしないやうにお世辭を使つとく必要ありとでも認めたものか、私が夜中に窓をあけた翌日、ドン・モラガスが接近して來て言ふには、彼の友達にベルモント——これは當代隨一の闘牛家で且つ全西班牙の國家的英雄——の弟子の弟子の又弟子か何かがあつて、うまくそいつから入場券を寄附させたから、何うだドン・ホルへ、一つ日曜日の大闘牛へ行つてみないか、といふのである。

私がモラガスの肩を叩いて牛血を浴びた闘牛士のやうに勇躍したことは言ふまでもあるまい。

4

てらゝ・らん・らん！

てらゝ・らん・らん！

闘牛開始だ。

軍楽隊は一度に闘牛楽（パサ・ドブレ）の調子を高め、旗はいつせいにひらひらし、人は歓呼の聲を上げて――この闘牛士入場式の光景！

はじめは徒歩、それから騎馬の十七八人の闘牛士だ。見てるうちに私は何となく可笑しくなつた。

横に長い黒の帽子。

中世紀の小姓みたいな總金もうるの短衣。

赤・青・黄に同じくモウル付き半ずぼん。

揃ひの赤ネクタイ・白靴下。

肩や腰に紅布（ミウレタ）をかけてるのもある。

それが威儀を整へて練り込んで來るのだ。

絢爛。堂々。燦々。

が、何といふ莫迦々々しい大仰さ。

ナヴァロのやうな青年。

彫刻的な淺黑い相貌。

金ぴかぴかの全身にダンスする光線。

贔屓の闘牛士の名を呼ぶ觀客の聲。

てらゝ・らん・らん！

てらゝ・らん・らん！

こゝにちよつと妙なのは、この闘牛士連がみんなちよんまげを結つてることだ。

しかも、その蜻蛉のやうなまげの撥先を帽子のうしろから覗かせてゐる。

Coleta といふ。

ちよん髷の西洋人なんて初めて見たが、何となく不氣味な感じだ。ちようど日本のお相撲さんみたいなもので、この、闘牛士に特有の豚尾式結髪（ピッグ・テイル）――COLETA――は、西班牙では甚だ粋な伊達風といふことになつてゐる。闘牛士を追つかける踊り子なんか、あの人の髷つぷりが耐らなく憎らしいとか何とか――まあ、その間（かん）いろいろとろまんすがあるわけだが、じつさい、西班牙における闘牛士の地位は日本の力士に似てゐて、みんなそれぞれにパトロンがあり、なかには、名士富豪にくつ付いて廻つて酒席に侍したりする幇間的なのもすくなくない。派手な稼業だけに交際が大變だ。おまけに大立物（エスパダ）になると、見習弟子だの男衆だのと、いはゆる「大きな部屋」を養つてゐる。そのかはり名聲と收入も莫大なもので、近いためしが、今日の人氣闘牛士ベルモント――この人はセヴイラに宏壯な邸宅を構へてゐる。これはあとから私がセヴイラに行つて居た時だが、

或る日、ホテルの下の往來が急に騒々しいので覗いてみると、ちようど此のベルモントが、散歩か何の途中街上で市民に包圍されたところで、男も女も子供もわいわい後をついて歩いて、手を振る、握手を求める、上の窓から花を抛る、まるで紐育人が空のリンデイを迎へるやうな熱狂ぶりだつた。西班牙國民の大鬪牛士に對する崇拜ぶりはこれでもわかる。英雄ベルモントは探險家のやうな風格の、もう半白に近い軍人的な好紳士だ。一日の出場に七千から一萬ペスタ――わが約三千圓あまり――を取る。だから今では、大した地所持ち株もちだが、最近本人が勇退の意をほのめかしたところ、たちまち國論が沸騰した。牛で儲けた金だから死ぬまで牛と鬪へといふのだ。これには流石のベルモントも往生してるやうだが、このファンの聲も、言ひかへれば、ベルモントなきのちの鬪牛を如何せんといふ引止運動に過ぎないんだから、老鬪牛士も内心莞爾としたことだらう。その他、有名な鬪牛士にはガリト、マチヤキト、リカルド・トレスなんかの猛者がゐて、すこし古いところではアントニオ・フユエンテがある。この人はアルメリヤの近くに、「領土」とも謂ふべき土地と、古城のやうな屋敷を持つてゐる。それからこれも今は故人の筈だが、ラファエル・グエラはほんの一季節の鬪牛に二百二十五頭の牛を斃して七萬六千チユロス――十五萬圓餘――を獲たことがあるし、現今でも、何のたれそれと名のある鬪牛士なら、年收約二萬から二萬五千圓を下らないのが普通だ――稅務所の調べみたいになつちまつたがこんなふうに、名が出ると金になる。女には持てる。學問も敎養も要らない。要らないどころかそんなものは無いはうがいい。第一、人中で牛が殺せる！ と言ふんで、貧乏人の子供でちよいと腕つぷしの强いやつは、爭つて鬪牛士を志願する。なかには醫學生のぐれたのや、電氣技師の勤め口を棒に振つて鬪牛庭の砂にまみれるといつた醉狂なのがあつたりして、この鬪牛士の仲間は、色彩的な西班牙の社會により强烈な色彩を塗つてゐる繪具だ。マドリッドの太陽廣場から左手へ這入つた古い狹い横丁に、役者――ドン・モラガスをはじめ――だの、この下つぱ鬪牛士なんかのぼへみあん連中が勝手な生活をしてゐる一劃があつて、夜おそく其處らをうろつくと、方々のキヤッフエで西班牙酒をあほつてる彼らの影繪がもうらうと搖れ動いてゐる。で、まあ、それほど志望者が多いもんだから、ちやんと鬪牛學校まで出來てゐて、未來のベルモントを夢みる青少年の群――なかにはアルゼンチンあたりから留學してるのもある――に、初等鬪牛史、怒牛心理學概論、鬪牛道德、鬪牛作法、扱牛法大綱なんてのを講義したり實修したりしてゐる。

さあ、こゝで何時までも闘牛士にかまつちやゐられない。入場式が濟むと、直ぐに牛が出て來るから——。

粛々と前進してきた今日の出場闘牛士は、いま正面ボツクスの下に整列してゐる。

ESPADAのベルモントが、一同を代表して司會者——これはたいがい皇后さまか宰相夫人か、とにかく女性にきまつてて、この日は赤十字マドリッド支部長としての市長夫人だつた——へ、大芝居に騎士的な一禮をしてゐる。

何とgracefulな其の史的洗練！

扇をとめて、市長夫人がボツクスに立つた。何か抛つた。黒い小さな物が赤い尾を引いて、圓庭の砂を打つ。ベルモント門下の高弟槍馬士のひとりが拾ふ。鍵だ。赤いりぼんが結んである。牛小屋の鍵だ。

歡聲・灼熱・亂舞する日光。

鍵を押し戴いた闘牛士が、觀覧席の一方へ手を上げ、胸を叩いて絶叫し出した。

『OH！ わが心臟の主よ！ 悅びとさうして望みの君よ！ わたしはこれからあなたの光榮のためにこの牛を殺して私の勇氣と武藝を立證します——！』

AH！ 何といふDONキホウテ式せりふ！ 呆れた大見得！

その方角に當つて、人のなかゝら女が起立した。この闘牛士の妻、もしくは情婦、とにかくこれが「心臟の主」なのだ。

夥しい視線の焦點に、ぼうつと上氣して倒れさうな彼女。

胸のカアネエションに接吻して、下の闘牛士へぽんと投げる。

ふたゝび、喝采・動搖・亂舞する日光——雜典的場面の大燃燒。

これが合圖だつた。ベルモントをはじめ重立つた闘牛士は一時溜りへ引つ込んでいく。

あとには、最初出來るだけ牛を怒らせる役——Veronica——の若手が五人、素手に、おのおの肩や腰の赤布を外して振げながら、あちこちに陣取つて、身構へた。

廣い砂のうへに、ほかに人影はない。

5

はじめ噴火みたいな底唸りが聞こえてきた——と思ふと、いきなりリングの一隅から踴出した「眞黒な小山」——！

何て大きな牛だ！

闘牛場全體に溢れさうぢやないか。

あ！　こつちへ來る。びつくりしてらあ！　この日光に、色彩に、音響に。

まるで疾驅する「黑い丘」だ。鈍重の代名詞が、こんなに早く走れやうとは私は今まで思ひも寄らなかつた。

すでに彼は、早速手ぢかの紅布（ミウレタ）へ向つて渾身的攻撃を開始した。

きらりと角が陽に光つた。鬪牛士が身を躱した。黃砂が立ち昇つた。紅片がひらめいた。

牛はいま、さかんに其の赤いきれへ挑みかゝつてゐる。

さうだ。さう言へば、まだこの「牛（トゥロス）」のことを說明しかたなつたが、ちよつとこゝで一つ大急ぎで書いておかう。

鬪牛用の牛はTOROSと言つて、牛でさへあれば何でもいいといふわけには往かない。だから、昨日まで車をひいてた牛だの、そこらで田んぼを耕してた牛なんかを鬪牛場へ追ひこんで無理に喧嘩を吹つかけるといふんではなく、鬪牛士に鬪牛學校があると同じに、鬪牛（トゥロス）にもそれ專門の牧場があつて、そこでこの特別の牛類を蕃種させ、野放しのまゝひたすら其の鬪爭精神を育成する。野ばなしと教育とは、かうして鬪牛の場合にのみ、不思議にも、そして必然的に一致するのだ。そのため、父祖傳來猛牛の血を享けてゐる若牛は、山野の寒暑に暴されて全く原始牛のやうな生活をしてゐるうちに、すこしも牛といふ家畜の概念に適合しない、完全な野獸に還元してしまふ。今この鬪牛牧人（マリイダ）の苦心を叩くと、單に野放しに育てると言つたところで、そこには矢張り色んなこつがあるやうだ。早い話しが、いくら放任主義だからつて風邪——例のすぺいん風邪なんてのもあるし——を引かしたり、ほんとの野牛然と瘦せつこけたりしちや鬪牛として何にもならないなら、一方滋味作養をうんと與へて力と肉をつけながら、同時に、人に狎れないやうに深甚な用意を拂ひ、極度に怒りつぽく、何ものへ向つても直ちに角を逆立てゝ突進し、これを粉碎せずんば止まざる底の充分な野牛だましひを植ゑつけ、育むのだ。つまり、しぢう突いたり張つたりしてからかつて、怒ることを奬勵し、そして怒つたが最後、全身を躍らせて大あばれに暴れる、といふやうに仕込むのが鬪牛牧畜の要諦だ。事實この目的のためにはあらゆる專門的手段が講じられてゐる。それから、鬪牛の資格として最も大事なのは角だ。何しろ、怒牛角を閃かして馬でも人でも突き倒し、撥ね上げて、其の落ちて來るのを待つて角に懸けて振り廻す——から言つた、馬血人血淋漓たるところが、また鬪牛中の大呼物——じつさい何んな平凡な鬪牛ででも馬の一二三頭やられること

は普通だし、悪くすると、リングの砂が闘牛士の生命を吸ひ込む場合もさして珍しくない——のだから、闘牛(トウロス)の角つぶり、その角度尖鋭に對する關心は大變なものだ。色んな方法で牧者は絶えず牛に、武器としての角の使用法を敎へ込み、自得させる。かくのごとくすること幾春秋——なんて大仰だが、闘牛は牛齢五歳未滿をもつて一條件とする。とにかく、すべての方面から觀察してこれで宜しといふことになつて、はじめてマドリツドなりセヴヰラなりバルセロナなりの晴れの闘牛場へ引き出されるのだが、その時の牛は、けふの「牛の略歴」に徴しても解るとほり、また現にいま、私の眼下に黄塵を上げて荒れ狂つてる「黑い小山」を見ても領首けるやうに、牛骨飽くまでも太高く、牛肉肥大、牛皮鐵板のごとく闘志滿々、牛眼らんらんとして全くの一大野獸である。この闘牛(トウロス)の値段は、なみ牛のところで一頭三千ペスタ——千圓——が通り相場だが、今日のやうな年一回の赤十字慈善興行なんかに出場する「幸運牛(トウロス)」になると、あらゆる牛格を完全以上に具備してゐて闘牛中の王者といふわけだから、値段も張つて先づ七千から一萬ペスタ——三千二三百圓——に上る。したがつて闘牛養牧場(ガナデリア)——Ganaderias——は、西班牙では榮譽と金錢が相伴ふ最高の企業だ。が、立派な闘牛の産地は歴史によつて昔からきまつてゐて、今のところ二個處ある。けふの闘牛ドン・カルヴアリヨ氏——現在こゝであばれてる牛の名——を出したヴエラガ公爵の牧牛場(ガナデリア)と、もう一つセニヨオラ・MIURAのガナデリアと、このふたつとも南のアンダルシア地方にある。一たい闘牛士も闘牛も、多くこのアンダルシアから産出して、さうでないと本格でない程に思はれてるんだが、これは、ドン・ホルへの察するところ、該方面には、人にも牛にも比較的多分にあらびや人の好戰的血統が殘留してるためだらう。

この闘牛(トウロス)をいよいよ最後の運命地、市内の闘牛場へ運び入れるのがまた大變なさわぎだ。何處までも猛獸といふ觀念を尊重し、嚴丈な檻へ入れて特別仕立ての貨車で輸送する。停車場から闘牛場まではなほさら、法律によつて、檻のまんまでなければ決して運んでならないことに規定されてる。だから、車に積んだ鐵檻の猛牛に送牛人(カストロ)と稱する專門家が附いてえんさえんさと都大路を練つてくところは大した見物だ。さあ、これが今度の闘牛の牛だとあつて、はじめから切符を諦めてる貧民連中なんか、せめては勇壯なる牛姿の一瞥だけでも持たばやと檻を眼がけて犇めくのが常例だが、市民も、護送中の牛を途上に擁して、あの牛つ振りなら馬の二三頭わけなく引き裂くだらうことの、これあひよつとすると闘牛士も殺(や)られるかも知れない、な

んかと評判とりどり、これを見落しちやならないといふんで、たちまち切符仲買所(レベンダ)へ人が押しかける。要するにこの、御大層な警備で牛を送りこむのも、一に、これほどの猛牛だといふところを公示して、一種の誇張的錯覺——成程猛牛には相違ないが——を流布させ、それによつて人氣をあほらうの、ま、謂はば廣告手段だとも言へやう。いつかマドリッドの大通りで、此の闘牛場へ運送中の牛が、とうまるを破つて大暴れに角をふるひ、死傷者十數名を出したあげく、やうやく職業的闘牛士が街を飛んで來て、街上でそれこそ眞劍に渡り合ひ、やつと仕止めたなんかといふ椿事もあつた——これは餘談だが、さて闘牛場では、かうして運んで來た牛を、當日まで野庭(コラレ)と呼ぶ別柵内に圍つておいて市民の自由觀覽に任せ、いよいよ開演といふ四五時間まへ、つまりその日の正午前後に、リングに隣接した「Toriles」といふ暗室へ牛を追ひこむ。そして約半日闇黑に慣らしたのち、矢庭に戸をあけて「運命の戰場」へ驅り立てるのだ。このとき、扉を排すると同時に、上から釘でひよいと脊中を突いてやる。さうすると牛は、びつくり猛り立つて闇黑を飛び出し、その飛び出したところに明光と喚聲が待ちかまへてゐるので、この幾かの光線・色彩・群集・音響に一さう驚愕し、首に養牧者の勳章(デヴイサ)を飾つたまま「黑い小山」のやうに狂ひまはる。

6

その眼前に揶揄係(ヴエロニカ)の赤いきれが閃く。興奮(エキサイト)した牛は、先づこれをめがけて全身的に挑み——牛つてやつは紅いものを見ると非常識に憤慨するくせがある——かゝつてゐる。

噴火のやうな唸り聲だ。

みんな腰を浮かして吹鳴つてる。

が、まだこの怒らせ役(ヴエロニカ)が牛をあつかつてるあひだは、實を言ふとほんとの闘牛ではない。かうして好い加減、牛の憤怒と惑亂が頂天に達した頃を待つて、前座格のVERNICAが素早く牛を離れると、同時にいよいよ「血の本舞台(リデア)」の第一段へ這入る。

一口に闘牛と言つても、三つの階梯(スエルテ)から成り立つ。

1 Picadores

2 Banderillear

3 Matadores de Toros

この順序だが、1のピカドウルは馬に乗つて槍(ガロチヤ)を持つてゐる。これは、赤いきれを見せられてすつかり怒つてる牛の脊中へ、深さ約二吋の穴を二つあけて、ますます怒らせるのが其の

任務だ。2はバンデリエイル。徒歩だ。三人出る。バンデリラといふ短い手鉛のやうな物を、正面または横側から牛の背部、首根つこへ近いところへ二本づつ打ち込む。三人各二本だから合計六本の矢鏃(バンデリラ)を差されて、牛はおいらんの笄みたいな觀を呈する。そこへ單身徒歩で登場して牛に直面し、機を見て急所へ劍(エストク)の一撃を加へて目出度く仕留めるのが3のマタドウル・デ・トウロスだ。この留めをさす役が、闘牛中の花形(エスパダ)なのである。

槍馬士(ピカドウル)が出て來た。

日光と槍先と金モウルだ。

悍馬を御して牛の周圍を驅けめぐつてる。

牛は馬を狙つて角を下げてゐる。

ピカドウルの槍が走つた――うわあつ！　血だ血だ！　ぶくぶくと血が噴き出したよ牛の血が！　黒い血だ。血は見るみる牛の足を傳はつて流れて、砂に吸はれて、點々と凝つて、虎視眈々と一時靜止した牛が、悲鳴し、怒號し、哀泣し――が、何うせ殺すための牛だ。そら！　また槍(ガロチヤ)が流れたぞ！　もう一つ、赤い傷口がひらくだらう――ひつそりと落ちる闘牛場の寂寞――。

やあつ！　何だいあれあ？

棒立ちになつた馬、ピカドウルの乘馬が急に赤い紐を引きずり出したぞ。ぬらぬらと日光を反射してる。

EH？　何だつて？　馬が腹をやられた？　牛の角に觸れて？――あ！　さうだ、數本の馬の臟物がぶら下つて、地に垂れて、砂にまみれて、馬脚に絡んで、馬は邪魔になるもんだから蹴散らかさうとして懸命に舞踏してゐる！

それを牛が、すこし離れてぢいつと白眼んでる――何だ、同じ動物仲間のくせに人間に買收されて！――といふやうに。

總立ちだ。

足踏みだ。

傷ついた馬は、騎士を乘せたまゝ引つ込んで行つた。が、直ぐに出て來た。おや！　同じ馬ぢやないか。AH！　何といふghastlyな！　はみ出てゐたはらわたを押し込んで、ちよつと腹の皮を縫つてあるだけだ。その儘でまたリングへ追ひやる！

縫目の絲が白く見えてゐる。

何と徹底した苦痛への無同情だ！

馬は、恐怖にいなゝいて容易に牛へ近寄らうとしない。それへ槍馬士(ピカドウル)が必死に鞭を加へる。

この深紅の暴虐は、私をして人道的にそして本能的に眼をおほはせるに充分だ。

が、私ばかりぢやない。私の二三段下に、さつきから顏を押

ざへて見ないやうに努めてゐた佛蘭西人らしい一團は、このとき耐り兼たやうにぞろぞろ立つていく。女はみんな蒼い顔をして、はんけちで眼を隱してる。

ドン・ホルへは我慢する。

女のなかには氣絕したのもあつた。あちこちで擔ぎ出されてる。だから、女作れの外國人が闘牛券仲買所（レヘンド）へ切符を買ひに行くと、出口へ近い座席を選ぶやうに忠告される。青くなつて退場したり卒倒したり、はじめての女でおしまひまで見通すのは殆どないからだ。言はないこつちやない。

しかし、男でも女でも斯ういふ氣の弱いのは初步の外國人にきまつてゐて、西班牙人は大滿悅だ。牛の血が噴流すればするほど、馬の臟腑が露出すればするほど、女子供まで狂喜して躍り上つてる。反覆による麻痺だらうけれど、見てゐると彼らの道義感が疑ひたくなる。私は、無意識のうちに牛の肩を持つてゐる自分を發見した。

一たい闘牛に對しては西班牙國內にも猛烈な反對運動があつて、宗教團體や智識階級の一部はつねに闘牛の改廢を叫んでゐるんだが、この「血の魅力」はすぺいん國民の內部にあまりに深く根を下ろしてゐる。羅馬法王なんかいくら騷いだつて何にもならない。が、牛か人か何方かが死なゝければならないのが闘牛だとしたら、そして、はじめからリングで殺すつもりで育てた牛である以上、牛の死ぬのはまあ仕方がないとして、馬まで傍杖を食はして殺すのは非道い。かういふ議論が起つて、最近では、出場の馬へ硬革製の腹當てをさせることにしてゐる。しかし、これも形式的なもので何ら保護の用をなさない。何しろ相手は火のやうに猛り狂つてる野牛だ。馬の逃げ足が一秒でも遲いと、忽ち今日のやうな慘事を惹起することは眼に見えてる。が、この悲慘とか殘酷とかいふのも外國人にとつてだけで、すぺいん人はこゝが闘牛の面白いところだと手を叩いて喜んでるから、仕末におへない。闘牛のつゞくかぎり、馬の犧牲も絕えないだらう。

何故かういふ野蠻な存在を地球上に許しておくか？　これはじつに西班牙一國內の問題ではない。まさに全人類の牛馬に對する道德上の重大事である。なんかと度々海のむこうから文句が出るんだけれど、何うしても止さないものだから、海外の識者もみんな呆れて、諦めて、この頃ではもう默つてる。おかげで西班牙人（スパニヤアド）は誰憚らず牛が殺せるといふものだ。

これは、この闘牛を見てから二三日してからだつたが、例のドン・モラガスが私のところへやつて來て、

「何うだつたい、こないだの闘牛は？」

と訊くから、私――といふより、私の社交性が、
『うん。なかなか面白かつたよ有難う(グラシアス)。』
と答へると、彼は、
『ふゝん。』
と鼻の先でせゝら笑つて、
『生意氣いふない。君みてえなけいこく人に闘牛の味が解つて耐るもんか。ほんとに闘牛を見るやうになるまでにあ、君なんか、さうよなあ、もう十年この西班牙で苦勞しなくちやあ――。』
私はついむきになつて、赤布(ミウレタ)へ挑戰する牛のやうにモラガスへ突つかゝつて行つた。
『冗談ぢやない。闘牛なんかもう御めんだよ! 一度で澤山だ。何だ! 一匹の牛を殺すのにあゝ何人も掛つたりして。たゞ殘酷といふだけぢやない。あれあ卑怯だ。だから、見てるうちに、僕なんか牛に味方して大いに義憤を感じちやつた。すくなくとも文明的な競技ぢやないね。』
何うだ、ぎやふんだらうとモラガスの應答を待つてゐると、案の定、かれは急に話題を轉じた。
『うちの一座にメリイ・カルヴインといふ女優がゐる。』
『誤魔化しちやいけない。闘牛は何うしたんだ?』
『だから其の闘牛のことだが、君、メリイ・カルヴインつて名を何う思ふ?』
『何う思つて別に――たゞ西班牙名ぢやないな。』
『さうだ。アングロ・サクソンの名だね。事實メリイ・カルヴインは亞米利加人なんだ。』
『何だ、面白くもないぢやないか。』
『ところが面白い。』ドン・モラガスはひとりで勝手に面白がつて、『いゝかい。おまけに彼女は紐育の金持のひとり娘なんだ――では、何うして此の、紐育富豪の令嬢メリイ・カルヴインが西班牙芝居の下つぱ女優をつとめてゐなければならないか――ドン・ホルヘ、まあ聞き給へ。これには一條の物語がある。』
なんかと、いやに調子づいたドン・モラガスが、舞臺では見られない活々さをもつて獨特の金切聲を張り上げるのを聞いてみると、かうだ。
HOTEL・RITZ――マドリツト第一のホテル――の數年まへの止宿人名簿を探すと、メリイ・カルヴインの自署を發見するに相違ない。あめりかのちよいとした家の子女が誰もかれもするやうに、學校卒業と同時に最後のみがき(ポリッシュ)をかけるべく「大陸をして(ドゥイング・ザ・カンテネント)」ゐた彼女が、無事にこの西班牙國マドリツド市まで來たとき、ちようど季節(テンポラダ)で、血の年中行事が市全體を引つ

溢き廻してゐた。

　すぺいんへの旅行者は闘牛だけは逃がさない。早速彼女も出かけて行つた。そして勿論、正確に氣絶したひとりだつた。氣絶どころか、二三日食物も咽喉へ通らないで床に就いたくらゐだが、かうして寢ながらメリイ・カルヴインは考へたのだ。何うしてあゝ西班牙人がみんな面白がつて見てるのに、自分だけ氣絶なんかしたんだらう？こんな筈はない。Something wrong. これはきつと、解ると自分も好きになるに相違ない。いや、何うしても好きにならなければならない――と、こゝに妙な決心を固めて、それから一週間延ばしに旅程を變更しちやあ毎日曜日に闘牛へ通ひ出した。が、矢つ張り駄目だ。あのピカドウルの槍の先に血が光るのを見ると、彼女は、何と自分を叱つても身ぶるひがして來て、その次ぎも其のつぎも、二度も三度も續けさまに氣絶してしまつた。そこで彼女は、もの好きな話しだが、すつかり殘りの豫定を破棄してマドリツトに腰を据え、これではならないとわざと砂に近い席へ陣取つて、その季節中一つも欠かさずに、修行のやうに通ひ詰めた。言ふまでもなく紐育からは、何故さう何時までも西班牙にゐるのかと詰問の電報が矢のやうに飛來した。が、それを無視して闘牛場の石段にすわつてるうちに、數度の失心のゝち、やうやく刺激に慣れたと言はうか、だんだん全演技を通じて正視出來るやうになつて、しまひには、何んな光景に直面しても彼女は平氣になつた。西班牙人の闘牛の「見方」が彼女にも少しづつ判りかけたのだ。かうなると、個々の闘牛士の癖とか、無經驗な見物には氣のつかない危機とか、紅布(ミウレタ)の捌き、足の構への妙味、鳥渡した手銛(バンデリラ)のこつとか、つまり專門的に細かい闘牛眼がメリイ・カルヴインにも備はつて來て、そして、さう氣のついた時、彼女はもう押しも押されもしない立派な闘牛ファンになり切つてゐた。

　その年の季節は終つた。が、彼女は亞米利加へ歸るかはりに、地方巡業に出た闘牛と闘牛士を追つかけて西班牙ぢうを廻り歩いた。そして翌年のマドリツド闘牛場はまたメリイ・カルヴインの姿を發見した。あめりかも紐育も生家の富も、この血と砂の誘惑のまへには彼女にとつて無力だつた。歸國を促す交渉がたうとう破裂しても、西班牙に闘牛があるあひだ、すぺいんを見捨てることは彼女には不可能だつた。麵麭と入場料を獲るために彼女は女優になつた。そしてずうつとこんにちに及んでゐる。いまのメリイ・カルヴインは闘牛によつて のみ生甲斐を感じてゐるといつても、過言ではあるまい。

『さあ――何といつたらいゝか、この氣持ちはちよつと説明出來ないが――。』

とモラガスは、役者だけにさも困つたやうに首をかしげて、
『さうだな。動物に對する人間征服感の滿足とでも言はうか。いや、決してそんな安價な感情ぢやあないんだが、さうかと言つて、君はじめ多くの外國人が考へるやうな、單純な「血の陶醉」でもない。勿論すぺいん人だつて普通の感覺は持つてるし、闘牛以外では、ずゐぶん人に讓らない動物愛護者のつもりだが――とにかく、メリイ・カルヴインの場合なんか、メリイには、リングの牛が無神經に愚鈍に見えて仕やうがないさうだ。だから、そんな馬鹿には生きてる權利もない。何んなに虐殺しても構はない――と言つたやうな、自分でも不思議な、まあ一種の制裁的痛快感に、思はず拍手しちまふといつてる。それに、も一つ可笑しなことは、メリイは、闘牛を見るたびに、あゝ自分があの牛だつたらと思つてぞつとするさうだが、この戰慄（スリルス）も手傳つて、一生闘牛場へ呪縛されるのが、あのメリイの運命だらう――。』

7

槍馬士（ピカドウル）から仕留士（マタドウル）までかゝつて一頭の牛を斃す。一日の闘牛にこの同じ順序を六ぺんくり返して、つまり六匹の牛を殺すのだ。四時にはじまつて、この間二三時間。一回の闘牛の所要時間約廿分乃至三十分の勘定だ。

牛の脊に二つの穴をあけて、ピカドウルは喝采裡に退場した。

炎熱に走り廻つて汗をかいてるところへ傷口の血が全身に滲んで、この時はもう牛は一つの巨大な血塊に見える。

眞赤な丘だ。

ぢつと立ち停まつて喘いでる。

その影が砂に黑い。

入りかはりに其處へ、こんどは三人の矢銛士（バンデリエイル）の登場だ。二本づつ六本の銛を打ちこむ役である。

が、傷ついた牛はいま憤激の頂上に立つてゐる。生命を守る本能にすつかり眼ざめ切つてゐるのだ。その牛へ、ひとりづつ眞正面から向つて手銛を差すのだから、このバンデリエイルの勇敢と機敏と熟練と、そして危險さこそは闘牛のなかの見どころだ。聲援と衆望のうちにおのおの牛へ接近して、或る者は牛の鼻さきの砂に膝づき、または側面から銛をかざして狙つてゐる。牛が靜止してるときは決して突けないものださうで、いま躍動に移らうとして前肢に力の這入つた刹那、それがバンデリエイルの機會だ。牛のはうで自分の力で銛さきへ飛び刺さつて來る。だからみんな、眼を据えて、牛の肢の筋肉の微動を注視

してゐる

ひつそりと落ちる闘牛場の寂寞――。

鷹揚な牛が洒落た人間どもにいぢめられてる。必ず殺されることも知らずに、牛はいま、何とかして生きやうと最善を盡してるのだ。その努力が、また私をして面を外向けしめる。ふだんから牛の眼は何處を見てるのか解らないものだ。この必死の土壇場になつても、「赤い小山」は一たいどこを白眼んでるのか見當がつかない。青空と砂を同時に見てるやうでもあるし、ぼんやり周圍の見物席に見入つてるやうでもある。悲しい眼だ。何を考へてるのだらう？　私にはそれがわかる――一體全たい此のすべての騒ぎは何のためなんだらう？　牛は不思議さうにしてゐる。話して判ることなら何とか折合はうぢやないか。さうも言つてる。それに、これだけ集まつてる人のなかで、こんなに降參してる俺のために、一人だつて謝つて呉れる者はないんだらうか――牛の眼がスタンドを見渡した。私はその眼を忘れない。

急に私は牛のために祈り出した。

私のこゝろは奇蹟をこひねがつてゐる。

何とかしてこゝで、あの「赤い丘」が装甲戦車のやうな萬能力をもつて動き出し、闘牛士は勿論、觀覽席へのし上つて全見物を片つぱしから押し潰して廻るやうな超自然事は起らないかしら――？

牛も、時として復讐することがある。

闘牛士が角に突かれて絶命するのだ。そしてそれは、このバンデリエイルと次ぎのマタドウル・デ・トウロスに多い。

眼前の凄慘さを直視するに忍びない私に、影繪のやうな西班牙の其のまた影繪のやうな過去の物語がうかび上がる。

話中話――題をつけやう。

「イダルゴとホウセリト」

過去といつても、さう古いことぢやない。まだ五六年まへだがイダルゴといふ西班牙有數の女優と、ホウセリトと呼ぶこれも名高い闘牛士とが、愛し合つてマドリツドに共同生活を營んでたことがある。女は舞台の花、男は血と砂の勇士だ。場處は太陽に接吻されるすぺいんである。一流同士の華やかな戀愛として、この二人が當時どんなに全市の口の端にのぼつたか、そして只さへ戀巧者な南國人の、しかも女優と闘牛士だ、いかに灼熱的な日夜がふたりのあひだに續いたことか、それは想像に難くない。

なんかと、莫迦に女優ばかり引合ひに出すやうだけれど、女優と闘牛士なんて、どつちも西班牙の生活に別社會を作つてる

人氣商賣である。相接する機會が多く、じつさい、何だかんだとしぢう一しよに噂の種を蒔いて世間の脚下燈に立つてゐるんだから、止むを得ない。

で、女優イダルゴと彼女の若い鬪牛士ホウセリトである。

このイダルゴはいまだにマドリッドの劇場にかゝつてるが、Hidalgo といふのは Somebody's daughter、つまり「何者かの娘」「誰か名ある人の息女」といふ意味で、言ひかへれば「貴族の娘」といふ藝名だ。

或る夕方だつた——それはきつと陸橋に月が懸つて、住宅の根の雜草にBO・BOと驢馬の鳴く宵だつたに相違ない——ちようど其の時、マドリッドのヴィクトリア座は、イダルゴを主役とする「ヴェルサイユの王子」を出し物に大入りをとつてゐた。ヴェルサイユ宮殿の大奥を仕組んだもので、眞暗な舞台前景の向うに女官部屋だけ明るく見せて、そこで多勢の女官が着物を着更へたりする。するとこゝに美貌の一王子があつて其の男禁制の場所へ忍びこむ。この王子を取り卷いて女官達の間に戀の鞘當がはじまる。と言つたやうな筋で、イダルゴがその美男の王子に扮して大評判だつた。

その日は晝興行があつた。芝居はおはりに近づいて、女官部屋の場だつた。滿員の觀客がぢつと舞台に見入つてゐる。そして、イダルゴの出を待つてゐる。王子の扮裝を濟ましたイダルゴは、傍幕のかげに隱れて何時ものやうに登場のきつかけを待つてゐた。

が、このとき樂屋にはひそひそ聲の大相談が持ち上つてゐた。いま鬪牛士ホウセリト——Joselits——が牛に突かれて致命傷を受けたといふ報せが這入つたのだ。これを早速イダルゴへ知らせたものか何うかと、みんな聲を潛めて議論し合つた。芝居が大事だから閉ねるまで隱しておかうといふ説が多かつた。しかし、支配人はイダルゴの氣質を飲み込んでゐた。あの、感情的なイダルゴのことだから、もしそんなことをしやうものなら後のあとまで何んなに恨まれるか知れない。ことに其のためつむじを曲げて芝居を蹴飛ばすやうなことがあつちや大痛手だ。そこで、一座の反對を退けた支配人は、しづかに舞台の横へ出て行つた。

イダルゴの出は迫つてゐた。彼女は、步行の調子をつけるためにそこらをあるき廻つてゐた。そこをそつと支配人が肩を叩いた。そして平靜にさゝやいた。

『イダルゴ、ホウセリトが怪我をしたよ。』

振り返つたイダルゴは二三步よろけた。眼が燃えた。が、默つてゐた。ものを言ふひまがなかつたのだ。ちようど王子の出

である。しいんとして待つてゐる観客が犇々と感じられる。イダルゴはためらつた。イダルゴは胸を張つた。さうしたら次ぎの瞬間、彼女は舞台でスポツト・ライトを浴びてゐた。

闘牛士の怪我——それは直ちに死を意味する場合が多い。イダルゴはもうすべてを知つてゐたのだ。

残りのイダルゴの演出は白熱的だつた。力強い大聲の台詞が劇場中に鳴りひゞいた。高々と笑ふ聲が楽屋の人の胸を衝いた。この、いつもに倍したイダルゴの舞台に、見物はアンコオルを叫んで果てしがなかつた。それにもイダルゴは一々答へて、何度も何度も舞台へ現れて接吻を投げた。微笑を送つた。

マトリツドに近いトレドのむこうに、Taravera de la Rena といふ、陶器を産する町がある。

ホウセリトが角にかゝつたのは、こゝの闘牛場だつた。

芝居が終るまへから、イダルゴの命令で劇場の横町に二台の自動車がエンヂンの音を立てゝゐた。それに、外科醫と應急手當ての必要品一式が積まれて、イダルゴを待つてゐた。二台の自動車を揃へたのは、一台パンクした時の用意だつた。最後の幕が下りると同時に、イダルゴは楽屋口から其の一台へ飛び移つた。ヴエルサイユ宮殿の王子として、巻毛の鬘をかぶり、金色燦然たる着物に白タイツ、装飾靴といふ扮装のままだつた。

全速力で疾走する自動車の中で、イダルゴはたうたう足踏みをして泣き出した。

が、遅かつた。彼女が自動車から轉がり出たとき、タラヴエラ・デ・ラ・レイナの闘牛場で、ホウセリトは血と砂にまみれて息を引き取つた。

大通りを驀進していく自動車と其のうへの「ヴエルサイユの王子」——マドリツドの人はいまだにこの town's talk を愛してゐる。

この「ホウセリトの死」に關聯して一つの法律違反問題まで起つた。その前年、保守黨の首領ダアトが、上院の歸途、一無政府主義青年に暗殺されたといふ大事件があつたが、それがちようど日曜だつたので、知らないでゐた人が多つた。と言ふのは、西班牙には新聞記者日曜休日法といふ法律があつて、日曜の夕刊と月曜の朝刊は出さないことにしてゐる。したがつて日曜日には何んな突發事があつても、翌日の夕方までは一般的に報道されない。事實、このダアト暗殺事件のときも、あくる日まで誰も知らなかつた。が、ホウセリトが死んだ日は、闘牛があつたくらゐだから日曜だつたにも係らず、この法律を無視して堂々と大々的に寫眞入りの號外を出して、堂々と罰金を食つた新聞があつた。保守黨首領といふ政界大立物の横死には沈默

を守つても、一鬪牛士の異變を傳へるためには大金を犠牲にしてかまはないのだ。ここに鬪牛に對する西班牙民衆の態度が窺はれやう。

やあ！　急に騒がしくなつた。

ベルモントだ！

ベルモントだ！

ベルモントが出て來た。

何時の間にか手銛士(バンデルエイル)と代り合つて、いよいよ仕留花形(マタドウル・デ・トウロス)のベルモントが砂を踏んでゐる。

彼の業は素早かつた。

金モウルの手に劍(エストケ)がきらめいたと思つたら、濁つた音を立てて「赤い小山」が横に倒れた。

脱帽したベルモントが、圓形スタンドの全方面へまんべんなく挨拶してるのが見える。

總立ちだ。

カアネエション・指輪・CAPA・帽子・ステッキなんかが雨のやうにリングへ飛ぶ。

オレイハ！

オレイハ！

オレイハ！

太陽の叫喚。人民の聲。耳(オレイハ)！耳(オレイハ)！耳(オレイハ)！　牛の耳を切り取つてベルモントへ與れといふ觀衆の要求(ダマンド)である。

鬪牛士はみんな、この牛の耳を乾して貯めてる。これを澤山持つてるほど名聲ある鬪牛士だ。ベルモントなんかには、何と素晴しい牛の耳(オレイハ)の蒐集(コレクション)があることだらう！

現にいま、切り離したばかりの血だらけの牛の耳を提げて、彼は群集へ笑ひかけてゐる。

三頭立ての馬が「たうとう死んだ」牛の屍骸——マイナス耳——を引きずつて走り込む。

砂けむり。

牛の耳の乾物——私は西班牙まで來て、今日はじめて「牛耳を取る」といふ意味が解つた。

新著月評

堀口大學譯　グウルモン詩抄

西條八十

「氣ばらし」(Divertissements)といふのが、グウルモンが生前メルキール社から出した最後の詩集の名である。これにはほとんど彼の代表作がすべて收められてゐる。文藝の批評家であり、美學者であり、同時に心理學者でまた文法學者でもあつた所謂 "Jack-of-all Trades" の彼にとつては、詩を作ることは事實單なる「氣ばらし」であつたかも知れぬ。だが讀者として彼の詩を讀むと、ほかの批評家や學者の余技の詩、——たとへばサント・ブープや、ヴォルテールや、またはシモンズなどの作品を見る時とまつたく違ふ、より切實な、全人格的な或物の光耀を感ずる。それが尠らず私たちを惹付ける。

これは何とかいふと、グウルモンが書いた四十余卷の書物の、そのほとんど一々の裏付けをしてあるかれの微妙な色慾的感性が、最も美しい純粹な香炎となつてその詩の中に立ちのぼつてゐるからである。一生を通じ學徒のグウルモンを惱まし續けたものは色慾の問題であつた。「深く自らに訊ねたならば、グウルモンは、かれの藝術的創造の一切の慾望が、自分を惱ましてゐた愛慾であつたといふことを認めたであらう」と、評家ルネ・ラルウも言つてゐる。その惱みを露骨に出したのが、彼の晩年の著述「戀愛理學」である。さうして彼の詩は、この重大な特性を最も簡約的に、音樂と香氣を以て把握してゐる。

さて、この點からだけ見ても、グウルモン譯詩抄を詩人堀口大學君が出されたといふことはきはめて適任だと感ぜざるを得ない。現在の我が詩壇で君ほど思ひ切つた色情的な(戀情的では無い)詩を美しく、品位を以て書く人は居ないであらう。君の創作にかかる「彼女の靴下」や「風景」や「地震」の如きは、種種な意味で日本の詩壇のユニイクな寶物だ。

私は堀口君を故上田敏氏のやうにヅーサテイルな譯詩家だと思つてゐない。譯詩家としての君の個性はかなり偏狹だと考へてゐる。君の筆は、ヴエルレエヌやボオドレエルの抒情味、古典味に全く適さぬと同時に、アポリネエルやコクトオや、ラデイゲやさうしたエピグラム風な、新奇で端的な近代的感覺にみちた詩に於ては、驚くほどの飛躍を見せる。だから今度のグウルモンのサンシビリテを移植する際にも君は立派な成功をしてゐる。

グウルモンの詩の譯はまつたく難かしい。彼はマラルメ以上の言葉の穿鑿屋であり、言葉のニユアンスをひどく氣にする男だつたからである。「女の美しい肉體を愛するやうに言葉を愛さなければ」といつたのも彼であり「言葉は觀念よりも、もつと多數な決定的な歡樂を私に與へた」といつたのも彼である。とりわけ彼が好んで使ふ "Sequence" (これは "ère" のついた言葉を特に多く使ふ用法)などはどう譯出したものか、つねに譯者を當惑させるのである。しかしこの點も、堀口君は元來佛蘭西語の髓を嚙み知つて居られるだけに、かなり樂々としかも效果的にやつてのけてゐる。

寡作のせいかグウルモンの詩は本國に於てもまだあまり認められずにゐる。たとへば萬人必讀のストロオスキイ教授著「十九、二十世紀の佛文學」を開いても、そこには評家としてのグウルモンしか論じられてゐない。これは私たちとしてかなり不平である。「薔薇の連禱」其他の詩で彼が試みた長綴の詩形は自由詩の最も正當な先驅であり、「シモオヌ」の田園詩及象徵派の沒落以後興隆した自然詩のおなじく先鞭をつけたものであり、この點文學史的にもつと問題にされていいのである。だが、その詩の譯が、今一卷となつて日本で出版されたことはわれわれの渇飲をかなりさげて

くれる。たゞ遺憾なのは誰人もが傑作と認める「薔薇の連禱」や「立木のものがたり」の諸作の譯がこの集に收められてないことである。これは故上田敏氏の完譯があるため、堀口君の遠慮であらうが、私はいつそ堀口式譯筆で、これらも再譯して貰へたらどんなにか新奇なよき感銘を與へられたかとおもふ。

序でながら第一書房好みのこの書の裝幀の美しく爽やかなこともグウルモンの詩にもう一層適はしくおもはれた。グウルモンが自著の裝幀の好尚にはごくうるさかつたことは定評があるからである。(菊判二四〇頁、定價二・八〇、第一書房)

牧野信之著
武家時代社會の研究

黒正巖

私は兼ねてより日本歴史學派の確立、幷に之に關聯して地方鄕土史の研究を高調して來た。幸にも大正十二年の大震災を一劃期として、私の年來の待望は漸く達せらるゝの機運に向つた。汗牛充棟も啻ならぬ我國の出版物中、日本の歴史的研究に關するものゝ如何に多數となつたかによつても、我國の學界の趨向が私の待望を辿りつゝある事を覗ひうるであらう。而してこの歴史學派的傾向の最も顯著なりし昭和三年度の出版界に現はれたる最も優秀なるものとして、本庄榮治郎博士の「日本社會經濟史」瀧川政治郎氏の「日本法制史」牧野信之氏の「武家時代社會の研究」の三編を得たことは、斯道に精進しつゝある私の欣喜に耐えざる所である。三者共に日本の社會生活の歴史を把捉せんとするものではあるが、本庄博士は純粹の經濟學出身であり、瀧川氏は法學出身であり、牧野氏は文科出身であつて、夫々獨特の立場から、獨自の研究方法により、日本の社會生活の歴史的發達を取扱ひ、三人の學問的傾向が明白に展開せられて居る。元來他人の著書論文の批評は、その筆者と同じような研究を遂げたものゝみよく之をなしうるのであつて、一度や二度讀んだ丈けで輕々に批判論難するが如きは、學的神聖の冒瀆である。單なる思ひつきの部分的批評にすぎない。從て斯の如き經濟學出身の者が、畑違の文科出身の牧野氏の大著を批評するの資格はないけれども、氏の著書が公刊せられた事は、學界の慶事として、之を祝福するの意味に於て總括的に一言して見たく、茲に敢えて筆を執つた次第である。

牧野氏の研究態度の如何に地味であるかは、啻にその研究對象によつて知らるゝのみならず、その風丰によつても察せられる。氏は京大國史科を卒業して後、當時世人の餘り注目しなかつた社會史、經濟史の方面に開拓の鍬を入れ初めたが、從來の歴史が余りに中央集權的にして、從て庶民階級の生活史を知る事は頗る困難なるが故に、眞に社會史經濟史を研究するには、地方史の研究より初るに如くはなしとし、氏は去て石川縣に赴きその縣史の編纂に從事した。その大業を了るや更に福井縣史を編し、次で滋賀縣史を大成し、今日では堺市史の編纂に沒頭して居られる。而して前人未讀の古文書を蒐集涉獵して、常に學界に新材料を提供し、新説を發表して居らるゝ事は學界周知の事實にして、今更茲に架說する迄もあるまい。

新著武家時代社會の研究は、即ち明治四十四年、當時學界の一大問題とせられたる割地起源論―國家學會雜誌に發表したる大論文を初めとし、三十三編の研究を組織的に類別し、法制經濟史上の諸問題、土地制度及聚落問題、時勢の社會相、教界と名僧の四編を接配し、その頁數實は六百頁の大册である。就中最も私の學的興味を惹く部門がその大部分を占めて居る。從來の一般研究と異り、氏が二十年來研究に沒頭せられたる地方史料により、所謂針で井戸を鑿つ程の研究であつて、中央にあつて第二資料を用ひて抽象論を試みたるものの、到底追從し得ざるものである。吾人は此の著者を以て單なる研究者と見るよりも、

吾人の研究に對する第一資料書として信憑すべきである。その研究に用ひたる資料は氏自らが探訪して初めて明るみに出たもの許りであつて、然かもかの資料はよく咀嚼せられ統一せられて居る。專ら資料のみを詮索する事に急なる人々が往々にして、資料の羅列に終り、徒らに紙面を浪費して、大論文なりと誇るが如ききらひは少しも之を發見し得ない。苟も斯界に關與する好學の士は必ずや一本を座右におくべきものである事を斷言して憚からぬ。

但し私をして望蜀の感を述ぶる事を許さるるならば、それは內容や論理とは無關係ではあるが、第一に、氏の文章には比較的に形容句のない事である。固より歷史は客觀の主觀化であり、一種の藝術なるが故に、全然形容句を除きて乾燥無味のものとするの必要はないが、併しその餘りに多きに失する時は却つて歷史的論理を不明確ならしむるの虞がないでもない。第二は、氏の取扱はれたる資料が主として地方的のもので未だ公表せられたものでないから止むを得ぬ事ではあるが、その典據の頁數又は所在の不明なる事は、後學のものに不便である。第三に、地方的特殊的事項を主とするの餘り、片面的に失したるのきらひがある。他の地方のものとの比較研究をなす事によつて、その一般性と特殊性との關係を明かにして貰ひ度いものである。

併し之は全く私の望蜀の批評である。氏の眞摯なる學者的態度が書中到る處に溢つて居るのを見る時、私は斯學研究者の一人として敬虔の念を禁ずる事を得ない。氏が名利を脫し、人知れぬ民間の學者として歷史の研究に沒頭し、その必然的結果として生れ出でたるこの大著こそは永遠の生命をもちうる事を確信す。（菊判・六三〇頁、定價五・六〇刀江書院）

坪內逍遙著
シエークスピヤ研究栞

日高只一

英國は印度を失ふよりもシエークスピヤを失つた方が損失が大である、と哲人カーライルは云つてゐるが、沙翁は實に英國の至寶である、否、世界人類共有の至寶である。近代の大批評家ブランデスの言葉を借りて云ふと「世界に名高いものでシエークスピヤ程不朽の者はない、人類の王と云はれるのも褒め過ぎではない、彼は智界の王である許りでなく、彼の力は時と所とに於て無限である。」實に沙翁の藝術は、彼自身の言葉が語る如く、「今も昔も云はゞ造化に鏡を捧げる」ものである。かうして、微妙な人生の情味や、人生の因果律や、分析も解剖も出來ない、深い、複雜な人情とか、精神現象とかを直覺させるのである。さうして生の體驗の不足を補ひ、想像と理知の作用をも促すのである。「シエークスピヤの作を讀んでからは、運命の中に身を置きながら、これを切り拔けて行くだけの勇氣が湧き、又自然と云ふ大海から水を汲むだけの勇氣も出て來た」とは獨の文豪ゲーテの作「ヰルヘルム・マイステル」の中にだけ通用する言葉ではない。

實にシエークスピヤは月や日と同じく、只に英國人のみならず、世界人類の至寶である。

我が國に於て、此至寶の名は早くから知れてゐるけれども、眞に此至寶に接し、其恩惠を受けたものが幾人ゐるであらうか。實に少數であらう。これは全くシエークスピヤの原作が三百餘年昔の英文で書かれてゐる許りでなく、英語を知らない多くの人々には此至寶に接する機會が與へられなかつたからである。更に適當な研究手引がなかつた爲めである。そこで我が國最大の劇作家にして、かねて、沙翁研究の最大權威である坪內博士は、此の世界の至寶を傳へて、我が國の文化に寄與せんとの熱誠から、世界に稀な博學達識と豐富にして、美しい詞藻と、絕大な勢力とを傾けて三十九卷の沙翁全集完譯の偉業を遂げ、更に「シエークスピヤ研究栞」の好著を公にせられた。實に我が文化史上の一大金字塔である。

「シエークスピヤ研究栞」を繙くと、先づ其卷頭の「序」に斯う書いてある――

「此書は沙翁學に入るための第一扉たるに過ぎない……先づ過去二百數十年間に於ける斯學の情況と其推移とを多少の批判を加へつゝ叙說し、各事項毎に說明を附して其書史を掲げ、次ぎに、凡そ重要視せられる限りの斯學上の諸問題を同じ手續に依つて紹介し、かねて最近時の最も進んだ諸考覈の結實を讀者に傳へようと試みたのであつた。且つ又、其間に於て、能ふべくは、讀者をして沙翁傳の概略も又沙翁論の要旨にも通ぜしめたいと望んだのである」

此の博士の言葉は此著の如何なるものであるかをよく說明してゐるのであると同時に、此の著を通讀してみると、博士の此の希望は博士御自身の期待せられるよりも遙かに多く達せられることを實感するのである。――先づ第一章の「どの作を、どんな順序で、又最初の參考用として、先づどんな參考書を讀むがよいか?」との題目の下に書かれた二十八頁に亙る親切丁寧な指南の文字は沙翁劇の廣大無邊の世界地圖を鮮かに展開して、行くべき方向、踏むべき道を指摘し、其の上、杖ともなり、草鞋ともなり、時には望遠鏡にもなる參考書迄列擧して效能書まで加へてある。

此の第一章だけを讀んでも、此著の有難味を深く感ずるのであるのに、博士は更に十五個の章を重ねて、各方面から沙翁研究の栞を與へてゐられる、就中、第二、三の兩章に於て「訓詁本位の研究」、第四章に於て「文學本位の研究」、第五、六、七の三章に於て「傳記本位の研究」、第十二、十三章に於て「實演本位の研究」を擧げ沙翁研究法の精髓を詳說してゐられる。實に是れ等は、博士の一生に亙る劇道研鑽、又更に沙翁研究のエッセンスを悉く集めて、四ッに盛り分けたもので、此の著の骨子とも見るべきものである。

先づ「訓詁本位の研究」に於ては沙翁研究の基礎工事とも云ふべき語義、語法、措辭法、詩律等を初め、作の正經、非正經等種々の方面に亙つて研究上の指南と注意を與へ、參考書の如きも、數十種擧げて評論を試みつゝ其書の特色なども指示してある。

第二の「文學本位の研究」に於ては沙翁諸作の文學的研究の要諦を說き、此方面の研究若しくは批評の由來、發達をも述べ、單に演劇許りでなく、廣く文學一般の批評發展史をも彷彿させてある。殊に文學的研究若しくは批評に關する博士獨自の管見十ケ條の如きは只に沙翁研究のみならず、一般の文學研究若しくは批評に於ける要項を掲げたとも云ふべきもので、此方面に於ける大なる發明である。尙ほ、最後に、沙翁の此の方面の研究に必要である名著二十餘種を擧げて參考に供してある。

第三の「傳記本位の研究」の章に於ては、同研究を「主としてエリザベス時代といふ事及び其當時の劇壇といふ事の研究を第一義と立てゝシエークスピヤの閲歷、作家としての人格及び其作の批判、解釋に及ぶ」ものと解し、實に三章五十六頁を費し、此等の點を種々の方面から說述してある。此間に沙翁傳もエリザベス朝の時代相も示し、演劇の種々相、若しくは發達の經路、劇壇の大勢を明にし、殊に當時の劇場の構造、舞臺裝置等を圖解し、例解し或は我が國の其れとも比較して說明してある。實に此の博士にして初めて此榮ありと思はれる程に、種々の方面を展開して見せてある。

最後の第四の「實演本位の研究」の章に於ては沙翁劇の文學としてゞなく、舞臺藝術としての本體と、具體を如何に研究するかに步武を進めて、論じたり、說いたりして、米國演劇學の權威ブランダ・マシューズやベーカー教授、演出者として有名な英のクレイグ、佛のヌボー、獨のラインハルト迄引合ひに出してある。此種の研究法は沙翁劇の最も新しい而も最も其眞髓に徹する研究法であると共に一般演劇研究若しくは批評に於ても亦然りである。

以上四ッの研究法は沙翁劇研究法發達の經路を追ふて述べたものと云つてもよい。これは單は沙翁劇許りでなく。一般の演劇に於てもこれを見るのである。現今我が國の演劇の研究若しくは批評は多くは研究法の第一期或は第二期卽ち故實調べか文學的研究若しくは批評の域を脱してゐないやうである。坪内博士の右の四ッの沙翁劇研究法は實に我が國現在の演劇研究若しくは批評の上に多大の光を與へることゝ思ふ。

尙ほ、「シエークスピヤ研究栞」の中には右の外、ベーコン問題とか、ソネット問題とか、其他沙翁研究に必要な方面は細大洩らさず擧げて說述し、評論してある。

右の如く「シエークスピヤ研究栞」を考察してみると、此著は一面卓越せる沙翁研究の栞であると共に、他面博士の一頭地を貫いた演劇論でもあり文學論でもあり藝術論でもあると云ふも不當ではあるまい。してみると、此の著は單に沙翁研究家のみならず、一般の演劇研究家、否、一般の文藝研究家若しくは愛好者の是非一讀再讀更に熟讀を要する良著であると思ふ。(四六版三九九頁、定價三〇〇、早大出版部)

西村眞次著
日本古代社會
本誌記者

本書は、西村教授最近の斷片的業蹟を一書にまとめあげたもの。隨つて叙述に重複があり、體系的ではあり得ないが、然し眞理愛の魂より從來の古代史研究の不聰明を指適し、教授のいはゆる人類學的研究方法を以て叙述を一貫せしめて居る。玆に人類學的研究方法とは、「史學神話學土俗學考古學言語學其他の方面からする研究の總括であり、進化論的思想を以て人類昂揚の過程を跡づけるものである」。本書に於ける古代なる概念が明らかならぬを不滿に思ふ心は、この說明の頗る安易なのにも驚かされる。がそれにも係はらず本書の存在は貴重である。

先づ、序論に於てはキーン、ウキスラー、デニカー、ヂクソンなどを適當に利用し、按配して、人種と民族と文化との概念を明らかにし、ついでラッチエル學派に據りつつ、地理的環境の人類及文化への影響を論ずるが、教授の立場である文化單元說、人類單元說とフエップルあたりを結合せしめて、地理的制限の崩壞をとき、地理人類文化の三角聯盟を讃美する。(術語の譯語が一々英字と對照され

元明時代の儒教(秋月胤繼著) 宋代に起りて近世支那儒教思想界を縦斷せる二大思潮、程朱の思想と陸象山の思想とは、元明時代にいつて如何に屈折しいかに分派しか。本書は此の兩時代に於ける學界の趨勢と主要なる學者の思想とを明らかにせるもの。當時の概要を傳へ得て甚だ便利である。(四六版三五七頁、定價二・二〇、東京市赤坂區青山南町六丁目一〇　甲子社書房)

社會倫理學序說(藤井章著) 時代は轉變する。倫理學はその方法上に於て科學的となりその對象に於て社會的となつた。本書は此の間に於ける消息を傳へて居る。(四六版二八五頁、定價二・二〇、甲子社書房)

西洋哲學史講話(高見澤榮壽著) ウインデルバントは思想から思想への連結にたつて哲學史を見、コーエンは論理的體系を中核に置て哲學史を見る。本書は然しかかる哲學史への序論乃至補充としてのそれであり、通俗的なる點に於て意義を持つ。(菊版四七四頁、定價四・五〇、甲子社書房)

白隱禪師とその語錄(木村紬三著) 德川時代に於ける禪林の奇傑、白隱禪師の傳とその法語を收む。(四六版二四六頁、定價一・二〇、甲子社書房)

佛教幼兒用教案(内山憲堂著) 佛教主義の日曜學校幼稚園託兒所などのために編せられた幼年期宗教々育實際案であるが、一般兒童教育に應用されても面白い。著者が幼兒自身の内在的要求と具體的生活興味とに基き、宗教を幼兒の生活に押しつけんとせず、幼兒

て居るを甚だ便利に思ふが、フィアカントを教授はいつもウィールカントと發音して居るを遺憾に思ふ)第二章に於ては、日本人を構成する要素としてネグリート族舊アイヌ族ツングース族インドネジヤ族印度支那族原支那族蒙古族をあぐる。玆に日本人は人類の一變種卽日本人種である事が明確に措定されて居るは喜ぶべく、日本人を以上七種の混合と見る見解も現在では首肯さるべきであり、又シベリア在住のツングーズ族の農民が現在日本人の基調をなして居ると見るも面白い直觀であり、なほ移動線についても相當の結論を見出して居るが、然し是らの凡てが蓋然性を持つものである事は記憶せねばなるまい。

かくして、教授は以上七種族の混合せるを紀元三百年頃と推定し、その混合文化を固有日本文化と見做し、その中の主要なるもの卽ち食衣住と社會組織とを、主として言語學的に考察する。例へば戸をたてるとかおとなふなどの言葉によつて古代の建物を推し或は家の語源をさぐつて岩窟住ひの大陸時代を想定して家屋樣式を北方系のものと結論し、米の語源を尋ねては是を常食とするに至れる過程を明らかにし、又コシマキ、オビなどの語源をさぐつて當時の服裝の一斑を推し、或はコロモの語源に溯つて日鮮同俗をとく。社會組織を論ずるに當つても、母なる語源と照應せしめつつ母權時代をとき、更に村、郡、家つ子、君、凡て語源を泝りて日本國家がファミリイ・ステートである事を云ひ、その起源が征服ではなくして協同である事を主張する。然し起源はその現象の本質を決定するものでないのを記憶せねばならない。是らは三、五、六章に於て叙述する所であるが、第四章「古代文化の數字的反映」の題下に例へば天、海、鹿、雪、ワニ、桃などいふ意味の文字がどれほど古事記のうちにあらはれて居たかを統計的にあげ、その頻數によつて記紀時代の民衆生活を想像せんとして居るは、面白い試みである。

第七章船舶發達の研究は、教授得意の壇上である。ここでも文化殘滓乃至文化殘存の事實を認識の根本において船舶の種々相を該博にといて居る。次の日本神話の說述も教授の得意とする所、隨つて危なげもよりない。教授は文化連續說を奉じて日本神話も世界神話の片割であると云ふ見地から、天孫降臨神話をば蒙古のそれに類似を求め、兎がワニをあざむけるものをばインドネイジアンの間に見出し、羽衣の神話の如きはオーストラリヤ以外の地には何地にも存在する事を指適する。そして是らをトーテム時代の社會生活の反映と見做すをも興味深いと思ふが、只此處にはそれの說明がない。

の生活そのものを宗教的に育てていかんとして居る態度を買ふ。(四六版二一八頁、定價一・五〇、甲子社書房)

映畫による學習の實際と施設(下野宗逸著)　直觀教育の價値が高く評價されて居る今日、映畫を教材として用ひないのは、可なりイージー・ゴーイングな態度である。まして、兒童は動くものを好む。本書は乃ち、映畫教育の機運を醸成し、その普及發達のために企圖せられたもの。(四六版二三三頁、定價一・〇〇、東京神田表神保町三、教育書館)

小學校に於ける職業指導の實際(宗田存全著)　此の方面の良書を欠ける今日、現實に卽してものせられた本書は便利であらう。(四六版二〇六頁、定價一・〇〇、教育書館)

劣等兒教育の實際研究(西久保奈良石著)　著者の實際的體驗を基調とせるもの。(四六版二三二頁、定價一・〇〇、教育書館)

眞日本實現への學校經營(井村金三郎著)　熱のある著物である。(四六版二六三頁、定價一・〇〇、教育書館)

北海道論(山下龍門著)　廣袤六十方里富源豐かな北海道の歷史・風土・人口・海上・交通・都市・農村・教育・財政・そしてそこに躍る人物を活寫し未來を想望せるもの。(四六版三六二頁、定價一・五〇、北海道旭川第五條通十丁目、旭川新聞社)

詩と詩論　ここには高級な詩學がある。鮮新自由の詩がある。有意義なノートとエスキースとがある。(菊版二五八頁、定價一・五〇、

第九章に於ては、記紀を、主として呪的宗教的方面から取扱ひ、神話及言語の方面からも一すふれて居るが、著者の眸が日鮮琉の密接な三角關係に吸ひつけられて居るのが目立つ。次章、古代の貿易をとくに當つては、考古學的神話學的考察からして物々交換の行はれて居た事を指摘し、言語學的工藝學的考察からしては貝貨時代を想定し、更に文獻學的考證によつて異種族間に貿易の行はれて居た事を立證せんとして居るが、相當精細な研究である。「日本歌謠の原始形質」の研究亦力のはいつたものであり、後進のために大きな價値をもてるもの。ここでも世界全體の立場から考察されてあるが、先づグロッセの [illegible] が發生的見地からは不充分なものであるとして、人間以外にまで溯り主としてダーウインに淵源せる異性吸引説に基いて歌謠の起源を説明する。そして近隣民族の祈禱詞と比較する事によつて、原始歌謠の内包を呪的宗教的のものとし、沖繩の童謠を資料としてその外形を同音數句の聯結と見なして居る。

次の「婦人の社會的位置」の題下では乳と臍とを重要視する婦人論を導き出し、「日本古代社會の人種學的研究」の章下では、デリケートな Affinity をといて日本古代の氏族制度社會は生活の安定した愉快なものであつた事を想定し、更に公平自由な古代日本人をといて推論は可なりロマンチシクである。第十四章「國家發生過程の文獻學的研究」は、紀元四二九年に完成せられた「魏志」の倭人傳によつての日本國家發生過程の研究であるが、教授は倭國を九州と推定し、その統治や民衆やを考察して博引精細である。かくて倭國時代は日本社會組織が血族制より地緣制に移る過渡期であつた事が結論されて居る。

本書の内容は右のやうに素描されるが全篇を通じて、その雜然たる裡にも教授の所謂人類學的研究方法が一貫され、確固史實にたつての古代社會現象の記述が徹底されて居る、その科學性は更に檢討さるべきであるにしても本書は解決の書であるよりはむしろ暗示の書である。そして私は著者と對談して居る如き氣持を以て興味深く全篇を讀了した事を告白せざるを得ない。（菊版、四一六頁、定價三・二〇、東京東郷湯島切通坂町一九ロゴス書院）

——雨宮——。

童話作家協會編

日本童話選集

本誌記者

從來の兒童讀物の卑俗的分子を排滅し、内容表現共に文學的價値を持つたそれを要請して、大正七年六月鈴木三重吉氏主宰の下に「赤

東京市麹町區下六番町四八、厚生閣書店）

鏡（厚見他紹夫著）　著者が過去九年にわたる作詩選集。平語的な律調、忠實な描寫の裏に哀愁を漂はせて居る。（四六版一一七頁、定價一・二〇、東京本郷區四の四文武堂書店）

農村社會問題と教育（田淵藤藏著）　あるべき農村生活を論じて、その改善は結局教育に依存するをとく。教育的見地より眺められた眞面目なる農村問題論である。（四六版三七七頁、定價一・八〇、東京麹町區下六番町一〇、平凡社）

支那艶情小説集（米田祐太郎譯著）　ここには白話體でかかれた所謂艶情小説七種の原文とその抄譯とが收められて居る。内容はいはゆる禁本の露骨さを些さかぼかしたものであるが、譯文はとにかく原文にさへ伏字のあるのは甚だ惜しい。卷頭三十六頁にわたる「支那近代小説考」は便利である。（四六版三三六頁、定價三・〇〇、東京赤坂青山南町六、支那文獻刊行會）

[illegible]眞後史（米田祐太郎譯著）　本書は容易に手にはいらぬ禁止本の一つであり珍稀であるここには甲集第一卷の變化に富み興趣の深い部分の抄譯が原文と共に採擇されてある。全篇を一貫する主張は陰德をつめば陽報のある事をのべて居るのであるが、只是を例示するために性的享樂を生々しく描寫して場合が時折あるので當局の忌避にふれて居るわけである。（四六版四四二頁、定價三・五〇、東京赤坂南町六の一〇一、支那文獻刊行會）

大安住の地を求めて（常原敬竹次郎著）

い鳥」が創刊されて以來、「おとぎの世界」「金の星」「童話」その他の童話を主とする諸雜誌が相ついで月刊され、生み出さるる無數の童話は、これら諸雜誌以外にも進出して、例へば「婦人公論」「現代」「小學少年」「東京朝日新聞」「早稻田文學」「自由教育」等新聞、教育雜誌、婦人雜誌、娛樂雜誌、少年少女雜誌にまで寄稿さるると共に、「日本童話」上下二卷、「日本童話寶玉集」上下二卷、「星の世界より」「小さな草と太陽」「飴チヨコ天使」「未明童話集」「人魚のねがひ」「一房の葡萄」「歸れる子」「木の葉の小判」「赤い猫」「蝗の大旅行」「不思議な窓」「ふるさと」「魔法の小馬」「救護隊」「恭」「愛の歌」「椋鳥の夢」「マッチの兵隊」「小さな世界」「草笛吹けば」「小波お伽噺集」「日本實演童話集」「愛國童話集」「竹取物語」「源氏と平家」「お釋迦樣の話」「さかなのお庫」「イソップお伽噺」「グリム童話」「アンデルセン童話全集」「アラビヤン・ナイト」「ロビンソン漂流記」「不思議の國」「水の赤ん坊」「ピーター・パン物語」「トルストイ童話集」「世界童話寶玉集」「小公子」「アンクル・トムスケビン」「ロビン・フッド物語」「シエークスピア物語」「家なき少女」「何處へ行く」「聖書物語」「兒童劇集」など茲には全く枚擧に暇ない單行本の續出があり、豫約全集ものの發刊があつた。そして實に、大正十年內外を以て日本童話界の高潮せるを指標する事ができる。

私たちはそこにすさまじいまでの混沌と多樣の相貌とを見、その隆盛に刮目するけれども、然し創意に於て獨自性をもつものを物色するとき、斯界の高峰小川未明氏及び、島崎故芥川、宇野其他數氏の作を除けば、多くは飜案乃至再話にして、創作的氣魄に欠くるものあるを見のがすわけにいかない。而も「赤い鳥」が童話への努力十年にして未だ一人の新進童話作家を出だすなく、「おとぎの世界」が藝術的に落魄して廢刊し、「金の星」が內容に講談的探偵的分子を蟠居せしめて雜多卑俗な傾向を辿り、そしてそこには童話の商品化(惡い意味での)が形成されつつある。コンマーシアリズムの怒濤に浮ぶ童話の姿態、それはそのまま童話の題材でもある。

茲に童話愛好諸作家の自選による傑作の第三輯が、美しい裝釘の下に夫々內容にふさはしき童畫諸家の彩管を配して生れ出でた事はかかる現狀の斯界自らには、將來への彈力的進展の足場となるために、私たち局外者には現代童話の創作的領土に於ける情勢を知らしむるために意義あるものであらねばならぬ。私は茲に個々の內容を、創作たると飜案たるとには關係なく、短評する事によつて、本書月評の筆を擱かう。

卷頭巖谷小波氏の「胡蝶の死」は藝術的の

著者によれば、本書の目的は、財產道德の基礎付けを試み、活ける宗教の建設を目途せるものである。(四六版四一八頁、定價一・八〇、平凡社)

マルクス主義講座第十二卷　マルクス主義にたつての「日本無產階級運動發達史」我國協同組合に對するマルクス主義的批判、及びその他三四の文獻を收む(四六版三五〇頁非賣品、東京神田錦町一の一二、上野書店)

謎の隣邦(神田正雄著)　さきに大西氏の「支那の現狀」を得た私達は、茲に又本書を得た事を深く喜ばざるを得ない。大觀支那の目ぼしい特徴は、平易なる筆端の上にくつきりと描き出されて居る。(四六版二二一頁、定價一・〇〇、東京府下下落合一三六七海外社)

詩の原理(萩原朔太郎著)　著者が詩に對する懷疑沈潛の結集であり、詩とは何であるか、その表現の根本原理は何か、他の文學との關係は如何、人生に於ける詩の位置は如何、など詩一般がその內容と形式とによつて忠實に論ぜられて居る。著者の思想を知るに好個である。(四六版三二四頁、定價一・八〇、東京麹町一の五、第一書房)

艸木蟲魚(薄田泣菫著)　著者最近二年間の病中隨筆。筆觸の洗煉と感覺の鮮新とを持持つた芳香漂ふ藝術品である。(四六版三八七頁、定價一・八〇、大阪市西區靭上通一の三一創元社)

唯物辯證法批判(古谷榮一著)　マルクスの哲學思想を著者の所謂哲學的見地から檢討したものであつて、著者はその煩瑣なる形而

香氣高く、その純情プラス哀愁の渾然たる内包は、所謂童話としてタイピカルなものであり、小川未明氏の「その日から正直になつた話」は、大人の思考をそのまゝに出して大人の童話たる臭みなしとしないが、然し人間性の奥深きにたつ純粹直觀に據る言葉には、何らのキザなく、敎育童話として理想的なもの。馬淵冷佑氏の「蝿」は童話には珍らしい自然主義的寫實的なそして男性的なタッチを持ち、些さか大人の實感なれどくつきりと實感のあらはれて居るがよく、「神は眞を見せ給ふ」（濱田廣介）はむしろ事實譚として凄みあり、「光の馬と十三番目の國」（大木篤夫）ではその氣持よき痛快さを、「芒の踊り」（大木雄三）では果敢なき生を歎ふすつきりせる氣持よさを、「うごくお家」（細川武子）では無邪氣な純情を、「野萩と鈴蟲」（内山秋生）ではその渾然さをとる。「首なし子供」（長尾豐）は笑はせ、「シロの贈りもの」（小野浩）は、未明氏に見るスツキリしさを欠くもピツタリとせる敎育童話であり、「不思議の燭臺」（松原至大）も敎育童話として恐らく成功の部に屬す。「虹はなぜぢき消えるか」（藤澤衞彦）では、是が本當に虹のでるわけと思はれては困るが、然し話としては實に面白く、「森の中の大事件」（江口渙）も中々面白くよませる善きよみものであり、「月夜をゆく川水」（酒井朝彦）では、しんみりとせる切々たる象徴的哀調をとり、「石ころのお話」（蘆谷蘆村）では新しみある目的意識の閃きを興深く見る。「乘合船」（野邊地天馬）には矛盾とぎごちなさあるも面白く、「五つの春風」（水谷まさる）は地味なれどスツキリして居り、「お化饅頭」（北村壽夫）では却つて「お猿退治」にナンセンスな笑をほころばす。「ある一つの小石」（澁澤靑花）には中々深みあり、「鼻なし牛兵衞」（福永渙）は離のない悲喜劇、「帽子」（小寺融吉）は效果ある敎訓童劇、「薩摩武士のお話」（安倍季雄）は興味ある歴史の童話、「二勇士の失敗」（沖野岩三郎）は喜劇として成功して居り、「金貨物語」（石黑露雄）は倫理的意企描く目だつも相當のもの。「影法師」（豐島與志雄）は些さか呆氣なきもその明るさを推し、「小さな銀のお舟」（小野政方）はその思ひよけれど平凡であり、「火箸の一生」（鹿島鳴秋）は過程頗る面白くして納尾詰らなく、「あらむの歌」（尾關岩二）、「サンタクロースのお家」（德永壽美子）、「善太と汽車」（坪田讓治）、「うめのんこ」（鳴海要吉）、「消えうせた幸福」（中島孤島「川へおちた玉ねぎさん」（村山籌子）「身を守る橋」（宮原晃一郎）などに至つては、或は平凡或はダル或は頗る感心しないもので批評の限りでもない。附錄「大正昭和の童話界」（濱田廣介）は便利である　妄評多謝。（菊版五四七頁、定價三・七〇　東京日本橋區通二丁目・丸善株式會社）

——南宮——

上學的論理によつて唯物辯證法を卑賤粗雜混迷愚劣なりとして斥ける。「循環論證の新世界觀と錯覺自我說」「人間の自我は錯覺」などの著者のものとして本書にも亦特異な香ひがある（四六版五一七頁、定價一・八〇、平凡社）

東方主義へ（室伏高信著）　近代文明の根幹を貫く民主々義を批判し、是と對蹠的位置にたつ無政府主義と近代文明との關係をときつゝいで近代文明を否定する事によつて東方思想への必然的轉向を解明せんとせるもの。相變らず流暢な措辭、獨特な論理のテムポ、及全卷を貫く詩感を嬉しく思ふ。（四六版三五四頁、定價一・八〇、平凡社）

政治思想の變遷（高橋清吾著）　政治敎育の立場から、プラトン、アリストテレスよりマキアベリイ、モンテスキユー、クロポトキンを經、クラツペ、マクイバー、コール、レーニン、ムツソリニに至る政治思想を平易に講述せるもの。便利な書物である。（四六版六九一頁、定價四・二〇、東京市外中目黑五八二、章華社）

異國膝栗毛（近藤浩一路著）　著者の外遊中の出來事をかき綴り、それに漫畫をそえたものであるが、文字よりは繪の方が數等の出來榮えであり、その繪の持つ笑ひに對しては滿腔の禮讃を惜まない。（四六版五二六頁　現代ユーモア全集第九卷、豫約、東京神田表神保町六・小學館）

中央公論社代理部案内

東京市丸の內ビルディング七七六區

中央公論社代理部

振替東京七八四七五番

電話丸の內(23)二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。御註文の際は郵稅をお忘れなく。宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

スプリングコート兼用

バーバリーレインコート



英國製と同様の生地を用ひた純國產品です。多額の運賃と少からぬ關稅とを仕拂ふ必要がないだけそれ丈、品質も仕立も非常に吟味されたものです。これならばスプリングコートともなり、天候の危ぶまれる日の外出にも安心して着て出られます。

色は紺・テツ・茶系統の常に最も斬新な流行色で、寸法は襟下鯨尺二尺六寸から三尺二寸毎に三尺二寸までそれぞれ取揃へてあります。

各色共一着　十九圓

送料東京市內十二錢　內地十八錢　[illegible]四十五錢

見本は二錢切手封入御申込の事

純良レインコート

純良なイージー印のレインコートをお頒ち致します。上等の羽二重に良質のゴムを裏附けしたもので、何裏面には上品な縞柄が染出してありますから、その製品の良さは從來の舶來品の比ではありません。

色はネヅミ及茶系統の最も斬新な流行色を選んだもので、現在盛んに海外に輸出されつゝあるものです。

寸法は何れも襟下鯨尺二尺六寸から三尺二寸まで二寸毎に取揃へてあります。

各色共一着　十三圓

送料東京市內十二錢　內地十八錢　[illegible]四十五錢

見本は二錢切手封入御申込の事

替ズボン

常時洋服生活をなさる人に最も經濟的な替ズボンを御紹介致します。

三つ揃でなければならなかつた時代は過ぎて、上下變つたものにかへつて良き調和を見出す事が喜ばれる様になつた今日では、ズボンだけ新しくすれば古い上衣をもう一度新しく着る事が出來、或ひは毎日屋內で執務の時間を經濟的な替ズボンですごせば、新調の洋服を何日までも上下同じ新しさを保たせる事が出來ます。

特に二三着の替ズボンを用意して、時々かへて外出する等は、單に氣分上の問題でなく、最も實際的經濟的な方法です。

御註文には股下から裾までの寸法を計つてお通知下さい。

A紺サージ　四圓五十錢

Bスコッチ　四圓八十錢

Cスコッチ（腰廻り裏付）　六圓五十錢

特上黑サージ　九圓八十錢

送料東京市內十二錢內地十八錢　[illegible]四十五錢

▲見本は二錢切手封入御申込の事

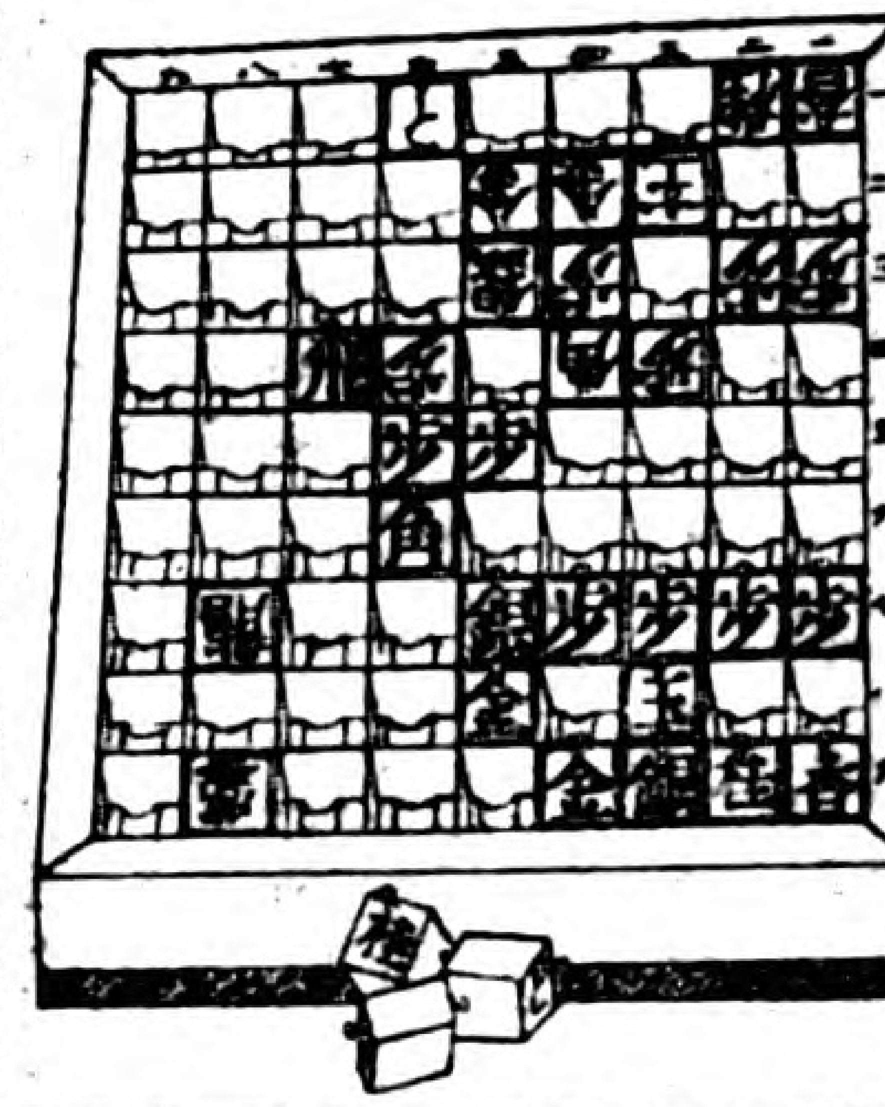
携帶用

輕便將棊盤

縱三寸七分橫三寸二分厚サ五分の輕便將棊盤です。木とアルミニームで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重くなく駒には一個一個蟲針が附けてある等婦女子の眼にも可愛らしいものです。

駒は標準文字を用ひ盤には縱橫に數字が記されてありますから、新聞を見乍らの研究には一層便利です。

其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、



或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價（駒全部附）　**一圓八十錢**

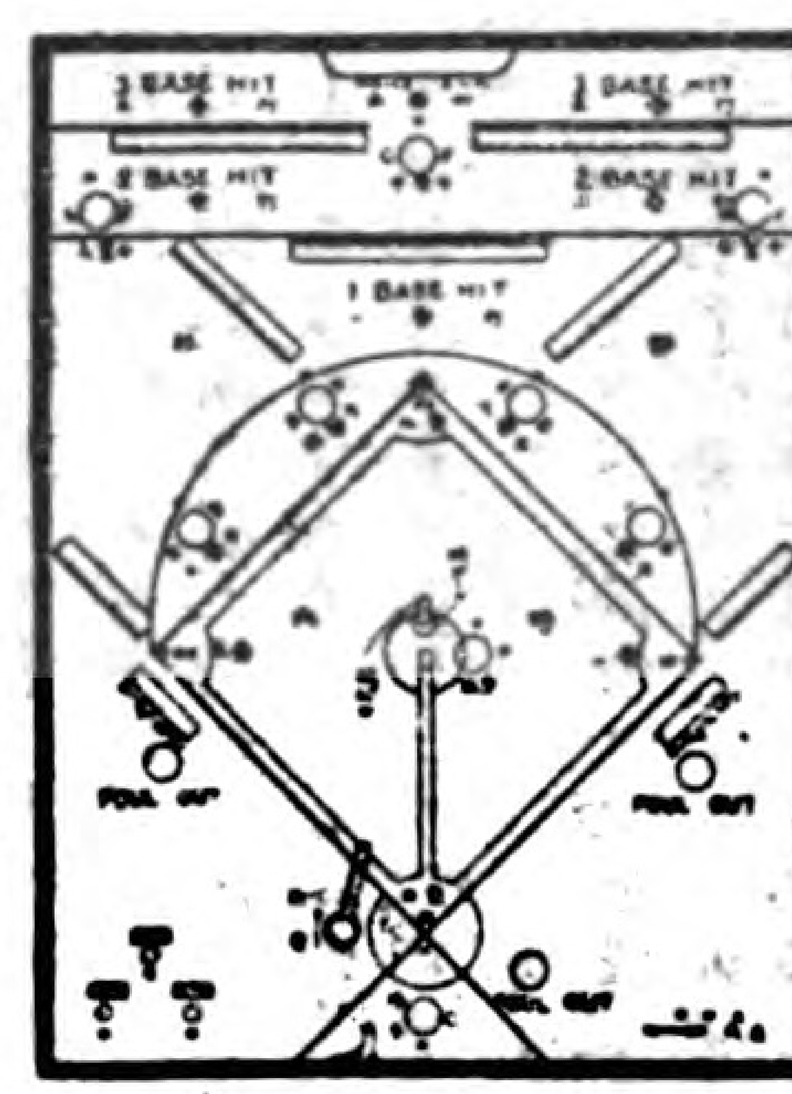
送料東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

高桑式

野球競技盤

約二平方尺の盤上で野球の實戰と同じ興味と緊張味を味へる樣に工夫されたのがこの高桑式野球競技盤です

盤面は飛行機から見た野球場そのまゝで、投手は直球・曲球・軟球剛球自由自在に、打手も亦恰度選手がボックスに立つた時の緊張した氣分で、バットの振り方一つに美事本壘打を飛す事も出來れば、油斷をすれば投手に計られて三振「アウト」にされて了ひます。



實戰に臨む人も之によつて自らの技量を試し、又高尚な新しい家庭遊戲として一般の御家庭におすゝめ致します。

小型（長一尺四分 巾七寸五分）　**一圓三十錢**

中型（長一尺六寸 巾一尺二寸）　**三圓八十錢**

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

高級で低廉な

アテナ萬年筆

使ふに從つて直きに執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書き好くなるといふ定評を得てゐます　低廉で、シカモ舶來品に勝る高級品であります。

定價三圓五十錢・四圓・四圓五十錢

（回轉式自働吸入器）　**三圓五十錢**

送料内地十八錢　領土四十五錢

▲型錄は二錢切手封入御申込の事

インターナショナル式

新聞綴器

近來の新聞はみな欄外が狹くなつたゝめに、普通の新聞綴器では折目に近い部分は讀む事が出來ず一々取はづすのは余りに煩瑣極ると云ふ缺點を、完全に一掃した新工夫の新聞綴器です。

本器は、新聞を挾んだまゝ欄外その他の部分も完全に讀む事が出來、廻轉裝置で任意の一枚でも容易に取はづせる點に最も工夫をこらした、凡そ新聞を讀む御家庭には是非備へ度い品です。

定價（表紙裏紙附）　**一圓二十錢**

送料東京市内十二錢内地二十七錢領土五十五錢

舶來・自働砥式

バレイ安全剃刀

安全剃刀には多種多樣ありますが、バレイほど完全かつ簡便な優秀品はありません。巧妙な機械裝置によつて、いかなる素人にも立派に砥げます。從つて每日使用しても一枚の刄が半年以上はもちます。その切れ味に就ては廣光の古銘刀のそれに匹敵することが既に證明されてゐます。

C型（革砥、替刄三枚つき レザー箱入）　**一圓八十錢**

同　同　**二圓**

B型（革砥、替刄一打つき ニツケル箱入）　**十三圓五十錢**

送料東京市内十二錢内地十八錢　領土四十五錢

最も安全で低廉な

電氣湯たんぽ

電氣アンカや電氣フトンのやうに、發火する恐れは絶對に無く、普通の湯たんぽのやうに數時間每に湯を取換へる手數も要らず、熱湯を用ふる危險もなく常に攝氏七十度内外の快い溫度を保つ。絶對安全、使用法簡便、堅牢、養老に保育に、ぜひ家庭に備へねばならぬ品です。



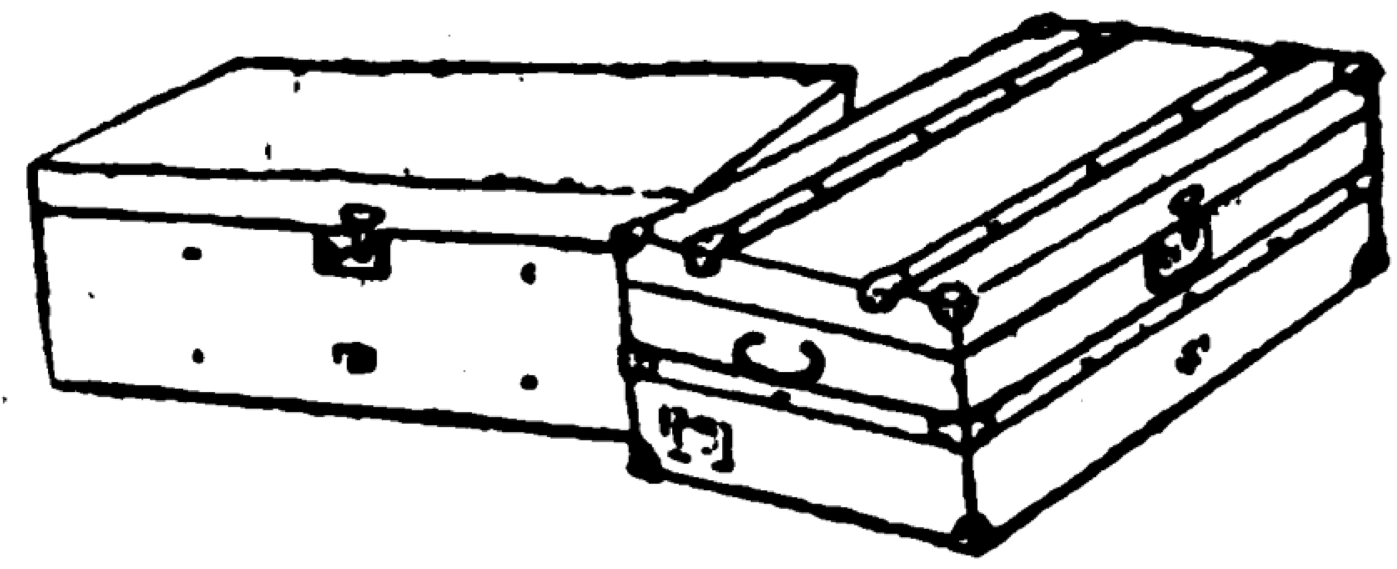
定價（二種用ソケツト及びカバーつき）　**四圓五十錢**

送料東京市内十二錢内地廿五錢領土七十七錢

防濕防蟲毛織物入

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分の堅牢な容器で、内壁の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン樟腦の入れものがついてをり、外面には漆の燒附けを施して立派に仕上げ絕對に外氣の侵入を防ぐやうに出來てゐますから、毛織物その他の大切なものをしまつておくのに必須な品です。



特製は、要所に筋金が使つてありますから、トランク代用としてそのまゝ送り出す事が出來、簞笥や支那鞄より遙に便利です。

定價特製九圓八十錢
並製六圓八十錢
送料東京市内二十錢　地方は運賃先拂

紋染紙製

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備し、シカモ布よりも丈夫で洗濯が出來るといふ重寶な品です。この紋紙製品は婦人公論代理部で好評を博してゐますので、本誌でも特に格安にお取次いたします。

定價（大）一圓廿錢　（小）八十錢
送料東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

輕便容器入

ユトマ・ポマード

毛髮の榮養を兼ねた純良なポマードを棒狀輕便な容器につめたものです。使用法は蓋をとつて容器から直接に毛髮に塗りつける丈で、少しも手に脂がつかず、使はれた丈の脂は常に表面の綱を滑つて出て來る裝置の、一抹の無駄もない、至極重寶な、特に外出前や旅行先での使用には一層便利を感じます。後は何回でもつめ替へがきく單に容器としても價値のあるものです。

定價　金六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢　領土四十五錢

理想的美髮料

スタイルセット

油やアルコールを絕對に含まぬしかもあまりばさばさしない理想的の新美髮料で、フケトリとポマードとを兼ねた合理的新製品であります。使用法はまづ髮を少量の水で濕らしておき、掌に少量のスタイルセットを滴らして、毛髮全體にゆきわたるやうに塗りつけるのです。

定價　六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢　領土四十五錢

香油とフケ取り香水兼用の

ヘヤトニック

良い香料を使つたものでしかもべとつかず、適當の油を含んでゐて髮の榮養劑にもなり、フケ取り香水をも兼ねるもの―ヘヤトニック―こそ一番理想的なものです。常用して髮を惡るくする事絕對になく、サラッとした感じの非常によいものです。

定價一圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢　領土四十五錢

顏剃りの後の化粧液

シエービングローション

顏剃、髭剃りの後につけるとかみそりまけがせず、肌を痛めないので好評を得てゐるこの化粧液は、粗製品と異つて、ぶつぶつができる心配はありません。皮膚の保護劑として毛深い御婦人方にも專用されてゐます。

定價一圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

四季の香水

香水は夏のものに思はれたのは昔の事で、此の頃は一年中香水が用意される樣になりましたが、それも毎も同じものでなく、氣候や季節によつて變つたものを用ふるために、中央公論社代理部で創製したのが、この四季の香水です。春・夏・秋・冬の四種に別れてをり、贈答品にもふさはしい樣、素晴しい豪奢な體裁の函に納めてあります。

四季の中何れでも、お好みに應

じてお註文下さい。

定價（春、夏、秋、冬）各 二 圓

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

オプチサナ

獨逸製藥品の偉力は世評の認める所ですが、特にこのオプチサナは、せきを止めるのに著しく效果があります。甘くておいしいので百日ぜきの子供にも苦もなく飲ませられるし、一週間服用すればきゝめがあらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。

定價 二 圓

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

佛蘭西化粧界の驚異

除毛劑タキー

顔はもとより手足その他の部分の毛を剃刀を用ひないで、容易にしかも綺麗に除る藥がロージエ化學研究所で發明されました。

これはチューブ入のクリームで、これを手でも足でも腋の下でも、任意のところに塗つて五分か十分おき、水で洗ふと剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり毛がとれてしまひます。これを五六度繰り返して使つてゐるうちに次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂に全く發生しなくなつてしまふのが「タキー」の特色であります。「タキー」は赤腋臭を除く效果があります。

定價 二圓二十錢 マス・クリーム附

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

痔の藥

ネオラチオリン

慢性痔病にも急性痔病にも著しい效果を持つネオラチオリンは實驗的なきゝめがあると萩原博士も推奨されて、痔療藥が數百種もあるうちで特に自信をもつて選ばれたものです。

定價（大）二 圓 （小）一 圓

送料東京市内十二錢内地十八錢 領土四十五錢

糖尿病特效藥

プデイン

病狀の進行を停止するばかりでなく、奇妙に根本的に全治さすと云ふのが、他の糖尿病藥と異る點で「プデイン」の特長です。

定價 十 二 圓

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

確實に效果のある理想的な

産兒調節藥

從來のもの〻やうに醫師の手をわづらはさず、絶對的信用のある「オクルサトル」は用器と錠劑に分れてゐて、用器は永久に使用できるもの、錠劑は一錠一週間有效確實といふ、强い殺菌力を持つてゐます。あれこれと使用して效を奏さなかつた人にも、之だけは十分の滿足を得られると實驗者が口を揃へて推奨する「オクルサトル」の效果をお試し下さい。

定價（用器と錠劑十二錠付）六 圓
（錠劑だけ十二錠）二 圓

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

强精劑ルンプリン

一時性の昂奮劑でなく、其の吸收性は極めて敏活で、血肉細胞の新陳代謝を旺んにし、全身神經を强壯にして、特に神經衰弱に偉效を奏する最新强精劑であります。

類白色の錠子に造られた本劑は極めて佳快な獨自の芳香を放ち、藥劑の服用を懐忌する婦人であつても喜んで用ゆる事が出來ます。

定價（一週間分） 三圓五十錢

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

河瀬トンビ襟

和服用二重マワシの何れにでも取附け自由に工夫されたカワウソのトンビ襟です。

春暖の日には簡單に取外しが出來て、厳寒の候乃至新春の禮服の上を被ふ二重マワシの襟にこれがあるだけによつて少からぬ重々しさを加へます。

種類は餘りに贅澤に渉らない最も實用的な左の四種類とし、何れも確實なものばかりを選びました

定價 一號 金七拾五圓
二號 金五拾圓
三號 金參拾五圓
四號 金貳拾五圓

送料は何れも市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

＝大擴張の古書案內・取次＝

急告!!

主として地方在住の讀者諸氏の御便宜を計る目的を以て特設いたしました中央公論社代理部の古書案內・取次は、日尚ほ淺きにも拘らず異常の歡迎と信賴を受け諸方よりの申込殺到、爲めに弊社代理部では晝夜兼行の多忙を極めてゐる次第であります。で、之れに力を得ました代理部では、この企てを更に有意義ならしむるため、地方讀書諸氏の希望を容れて、從來の古書案內・取次の外に、讀者諸氏の御藏書中御不用なもの〻評價紹介をも今後はお引受けして奉仕的にやることにいたしました。どうぞ御遠慮なく御用命下さいますやう。御所藏の書籍はもとより、古文書、和本、錦繪等、價値値段の不明な御不用品がありましたらどし〱御問合せ下さい。御問合せだけで御返事申上げかねるやうな書籍書畫なれば、一應御送附下さいますならば、東京市內一流の專門家に囑して、正確迅速に評價して御返事を差上げます。この古書評價の紹介は、古本案內の御取次以上に煩雜至難な事業ではありますが、地方の讀者諸氏には非常に御便利な企てであると信じ頗る乘氣になつて奉仕的獻身的に御便宜を計る積りですから精々御利用下さいますやうお願ひいたします。

以上の擴張に伴つて古書案內・取次規定を左の如く改めます。

(A)紹介は往復ハガキ又は通信料添付のこと。(B)註文はなるべく振替を御利用下さい、但し送品は拂金後一週間以內のこと。(C)評價御希望の古書は、書名、著者名、發行年月日、發行所、書籍汚損の程度等を詳細に御報知ありたし。但し古文書、錦繪等の如きは現品拜見の上でなければ正確に評價できない場合がありますからその旨お含みおき下さい。御送附のものに對しては本代理部で全責任を持ちます。(D)宛名は中央公論社古書案內係と明記のこと。

東京市丸の內ビルデング七七六區

中央公論社代理部

(振替東京七八四七五番)

現代文化を横行する

性慾神經衰弱症

──その治療と豫防法

◇

現代人の八十パーセントは性的神經衰弱症であるといふ、性的神經衰弱症とは生殖器の障害に伴ふ神經衰弱であつて、生殖機能の衰退から陰萎（不能症）遺精、夢精、過敏性亢奮無精等の症狀を現はし、更に精神的にも肉體的にも一般神經衰弱の症狀を現はす、所謂現代病をいふのである。

文明が進歩すればする程本症の患者は加速度に殖えて行く傾向がある、特に學生、會社員事業家、軍人、學者、智識階級等、精神勞働者に頗る多く見られる。

◇

本症の患者の症狀はまづ安眠不能、夢を見る頭痛がする、頭内不快、仕事に疲れ易く、不快感、無力感が甚だしく、意志薄弱となり、漸次憂鬱性となる。更に生殖器官に於ては性的行爲が病的となり、微妙を缺き內分泌が缺乏して、稍もすれば無精亦は早發性陰萎をさえ見るのである。勿論、夢精、遺精、精漏等の不快なる現象を伴ふので、患者は益々悲哀を訴へ、衰弱を加ふるのみである。特に

◇

陰萎症は此種患者の最も苦悶とする處のもので○起不全、交○不可能の狀態であつて、絕對的無力を示すので、全然用を成さない、近來この種の患者が壯年季の人に迄見られるのは如何に性的神經衰弱が現代文化を橫行してゐるかを物語つて余りがある。

◇

最後に本症に對する治療と豫防の法であるが生殖器障害專門の權威ある醫師に診療を乞ふも一方であるが、本症治療及び豫防の著名藥として名聲ある戶塚博士の**トツカピン**の服用が最も簡單で有効の方法であると信ずる。何となれば**トツカピン**は現代藥化學の精粹を集めてゐるばかりでなく、幾十萬の實驗者に依つて實證された折紙付の高貴藥であるからだ。

◇

單なる神經衰弱位ならば一週間分を試みるがよからう、亦性の障害を伴ふ惡性のものは多少の辛棒は必要であるが、再び明るい人生の光明に浴することが出來る、殊に本劑は根本健康を基調とせる精力腦力の強壯成分を多量に含んでゐるので、陰萎症、老衰者、精力增進を望む人には一種言外の効目がある。

亦健康男女が之を服めば性の旺盛は言はずもがな腦は明晰に、體力は增進して、年が年中春風のなかに逍遙ふ如き愉快の泉となる。

トツカピンは三十錠參圓、五十五錠（携帶容器付）五圓、百三十五錠（携帶容器付）十圓、三百十錠（携帶容器付）二十圓、全國海外到る處の藥店にある、本舖は東京銀座新昇町大阪市西區新町通一ノ二、**丁子堂藥房**

徳田秋江に與ふ

中島孤島

徳田君

久つ振りで君の無駄話を讀んで、筆舌の愈々健やかなるを喜ぶ。眞に久し振りである。お互にまだ若い若いと思つてゐるうちに、もう二昔も前の思ひ出を語るやうになつたかと思ふと、あの時分よく氣にしてゐられた君の白髪もいよ〱ふえたことであらう。

併しあの文を讀んで、ふと感じたことは、あのゝ複雜した當時の思ひ出を正しく語るには、僕らの感情はまだ熟してゐないといふことである。その文章がいつもの君の無駄話に比べて、精彩と輕快さとを欠いて、妙に重苦しい感じを與へるのは、それがためであつたらう。あのうちには、無駄話には禁物な、敵意と誹謗とが多量に含まれてゐる。薄田君は「明治太平記」の著者として、史上の人物を自由に活殺する手腕に於ては、恐らく君に劣らない人であるが、その斬雲があの圓かな眼を一層丸くして、「少しも知らぬ事實を聞かされたのは珍妙だ、長生きはするものだね」と驚いて來た。實をいふと、僕は其時まだあの文章を讀んでゐなかつた。どうせいつもの無駄話だらうとたかをくゝつてゐたのだが、併し讀んで見ると、やはりいゝ氣持はしない。間違つたことは是正しておきたくなるのが人情だ。

簡單に斷言しておくが、あの文中僕（並に斬雲）に關する事は、大部分君の當推量だ。當時の關係者は一二を除くの外、みんなまだ生存してゐるのだから、正確な事實を調べるに何の困難もない。それにもかゝはらず、想像にまかせて「文壇太平記」を作るといふのは、飛出しの記者ならば知らず、多少の文名もある君としては、輕卒な沙汰といはねばなるまい。

自然あゝした分裂騷ぎなぞのあつた當時は、双方に感情の縺れがあるので、得て邪推の渦を捲き起すものである。現にあの當時も、君たちは水谷氏側からは、「獵犬」といふ渾名をつけられてゐた。島村君のために樣々の消息を嗅ぎまはるものゝやうに思はれてゐたのだ。僕は其間の爭鬪には無關係であつたから、詳しいことは知らないが、君の書いてゐるのは、單なる一面觀に過ぎないやうだ。つまりあれは君の獵犬的觀察の集積に外ならない。それよりも一層複雜な事情が伏在してゐたらしい。公平に觀察して、島村氏の一生を貫いた狹量な一本調子（これは君も認めてゐる）の一つの現れであるともいへよう。

併し僕が、それから幾ケ月かたつて、全く單獨に、島村君と袂を別つやうになつた事情については、君は多く知つてゐないやうだ。後藤君の讒誣云々といふやうなことは、これも君の獵犬的推量に外ならないことを斷言する。それは後藤君と僕との友誼が、昔も今も、一貫して變らない事實を見ても分るだらう。眞の原因は感情よりも寧ろ思想

であつた。島村君と僕との思想が次第に隔たつて行つたのは、あの前後からであつた。

「君と鬪はうではないか」

「よろしい、鬪ひませう」

これが島村君と僕との最後の對話であつた。此時から我々は公然と敵になつたのである。

此間の事情については、いつか自傳でも書く折があつたら、平靜に且つ委細に記述して見たいと思つてゐるから、玆には此程度でとゞめておく。

德田君

此文を書くうちにも、昔、君が、朝に、夕に、矢來の家を訪れて來たあの當時の、喪家の狗のやうな君の面影が目の前に髣髴する。あの時、君から預かつた無花果の盆栽を、僕は轉居するたびに、幾たび持歩いたことか。とう〱枯れかゝつたので、庭におろしたのが、今ではかなりな大木になつて、毎年實を結んでゐる。思へば君の消息を絶つてから、隨分久しい年月がたつたものだ。いつかまた膝を交へて昔を語る機會もあるであらう。幸に自重したまへ。

楊宇霆の慘死を語る

小村俊三郎

一

予が楊宇霆慘殺の報道を聞いたのは、舊年末から上海南京から山東への旅行を終り、大阪に着いたその日のことであつた。そしてその報道についての感想をここに書かされたのも、それから中一日を隔てゝ東京に歸つた晩のことである。だからその感想といつても、新聞電報に基づいたものの外、何等據るべき材料がある譯ではない。予が今度の支那旅行は、中途山東から歸路を急いだが、實は最初奉天に廻り、この悲劇の主人公とも會ふて、滿洲を中心とした日支の大局關係を談ずるプログラムであり、そしてその會見には、間接の約束も出來てゐた位であつたのだからまたこの事件に對する予の疑惑は、一般讀者のそれと異なるところはなく、何等讀者のためにその疑惑を解き得るものがある譯ではない。

が、予にも讀者にも、第一に疑惑の種となるものは、その慘殺の直接原因である。新聞電報に據れば、國旗問題、車輛問題等について、南北統一の邪魔をしたといふことを、その原因として舉げてゐるけれども、張作霖の存生中、河南において、南軍のために大敗を取つた前後から、張學良に勸め、戈を反して親を諫めてまでも、南北妥協を圖らんとしたものは、即ち楊宇霆であり、從つて張作霖の變死後、奉國妥協の主動者となつてゐたものも、同しく楊宇霆であるから、その間の事情は、南方政府程よく眞相を知つてゐる筈である。そも〲、これ等の妥協運動を出凝した第一の力は、わが田中外交にあるのであるが、それも實は表面上だけのことであつて、その裏面には、東三省と國民政府とは、三民主義の下に統一するとしても、東三省には東三省の三民主義を行はんとする地方的希望が、張學良楊宇

霆の如き新派にも存在してをつて、田中內閣の警告は、たまたまその國旗の掲揚を遲延せしむる道具に利用されたに過ぎない。故に楊宇霆のみがその國旗の掲揚を妨げたといふことは、理由を成さぬのみでなく、南方政府は、田中の警告に對する遠慮も、東三省の三民主義實行の希望も、その表裏の情實を知り拔いて、滿洲の事は後に廻はしても、別に急がぬといふ方針を執つてゐたから、尙更これがために、楊宇霆を殺して南方に申譯する理由とはならぬのである。

その他慘殺の原因として、楊宇霆が兵工廠を私し、且何か秘密の計畫を進めてゐたといふことが擧げられてゐるが、兵工廠問題ならば、これを以て直ちに同人を慘殺する理由とするには足らぬ。その他の陰謀云々も、支那のことであるから、自由にその證據を製造することも出來るから、勿論これを信用する譯には行かぬ。然らば、張學良が楊宇霆を慘殺するに至つた眞の原因理由が、必竟何であるかといへば、それは普通に解釋されてゐる通り結局兩人の勢力爭ひといふ事に歸する外はない。

二

が、この張楊の勢力爭ひといふことにも、またその原因理由について、大なる疑惑がある。何となれば、張楊の兩人は、故張作霖の部下に在つて、共にその股肱心腹であつたばかりでなく、兩人はいはゆる新派軍人の領袖であつて、共に舊派軍人に對抗しつゝ、內に在つて帷幄の計をも共にすれば、外に出でて勝敗の苦樂をも共にし、魚と水との如く離るゝことの出來ぬ間柄であつた。獨りマーヂャン道樂の親友ばかりではなかつた。張作霖の死後においても、この關係は變りはなく、學良が父の餘蔭によつて、東三省保安總司令となつても、たゞ御曹子見たやうな若年の立物といふだけで、宇霆を知囊として仰がぬ限り、內外文武の重任に堪ゆる筈もない。また宇霆はといへば、新派領袖であるだけに敵が多く、學良を擁せぬ限り、その地位を保ち、勢力を張ることは出來ぬ。殊に南北妥協については、宇霆がその主謀者であるから、學良としては、假令保安總司令部にその大牙を擁してゐても、宇霆の門前が市の如くなるのに、敢て心を動かさしめらるゝやうな必要もなかつた。で、ツイこの頃までの張楊兩人の關係は、少し不似合ではあるけれども、譬へば猶家光と井伊本多の如くであつたものが、何故にかくは俄然として、賴家を除かんとする北條父子の如くに疑はれ、そして却つて賴家の爲に機先を制せられて、慘殺の憂目を見るに至つたか。こゝに根本の疑惑があるのである。

勿論かゝる兩者の關係は、或は學良をして、宇霆の陰然たる勢力に、反感を抱かさしむるに至つたかも知れぬ。また宇霆をして、學良の年少與みし易きに乘じ、野心を動かさしむるに至つたかも知れぬ。が、學良をして、俄かにその機先を制し、今度のやうな慘擧に出でしめたについては、孫傳芳一派の力が、直接の動機を爲し、次には或る外來の勢力が、間接の原因を爲

じてゐることを見逃がしてはならぬ。孫傳芳一派が、張學良に代つて、直接の下手人であつたと同様な事實は、當時の奉天電報で、學良はこの暴擧を敢行するに臨み、神經昂奮して殆どその意識を失ひ、當日これに代つて我が軍人顧問等に面接したのも孫傳芳であり、ステートメント類似のものを出すことまで敢てしたのも、同人であつたことに徵しても、これを推知することが出來る。そして最も不思議なことには、この孫傳芳といふ男は、山東で張宗昌と共に敗北した以後、今日まで餘りその動靜を知られなかつた男であるのに、この時に至つて、突然として其の覆面を拔ぎ棄てゝ本舞臺に現はれ出で、張學良に代つて楊宇霆殺しの下手人と同様な役目を演じたことである。この孫傳芳と張宗昌・乃至安福派の吳光新等とは、果してどういふ關係にあるか、これ尙未だ黑幕中の疑問であるが、先きに張作霖がヤラれた後、楊宇霆が伺ほ灤州方面に在つた時分宇霆も曲者であるゆへ、これをも序でにヤツつけろといふ噂さが立つた頃のプツチヤーの役目は、張宗昌が務めるとのことであつたが、その陰謀は却つて學良のために發覺され、危く宇霆が助かつたこともあつた。それが今度は同じ立役の孫傳芳が、宇霆殺しを實演することゝなつた。兎に角物騷なヤカラであるが、今後の奉天は、弱少の學良を擁して、かゝる黑頭巾の反動派が當分その勢力を張ることとなつたことを、讀者は目をとめて覺て置かねばならぬ。この一大變化は南方のためには勿論甚だ厄介な局面であるが、日本のためにも決して好ましき事態ではない。これから先きの東三省は、かゝる反動主義者のために、一時自然の進化的政治作用を中斷され、支那と日本とは、これを中心として、更にまた、今日以上に、無益にして有害な紛糾狀態を續けて行かなければならぬといふことを、覺悟して置かねばならぬ。

三

が、それは皆な主として東三省の內部から起つた直接の原因である。しかし、前に斷つて置いた通り、そこにはまた東三省の外部から來た間接の原因がありはせぬか。最近の二三ケ月、奉天方面から、頻りに次のやうな噂さが傳はつて來てゐた。それはその外來の勢力中に、學良派と宇霆派との二派が分れ、學良と宇霆との間柄は、その頃までは前述の如く、何でもなかつたものを、この外來の一派が鎬を削つて相爭ひ、一派は一派に對する怨言を、公然とさへ、何も知らぬ第三者にまで、放つまでの烈しさとなつた。その初めには、恐らく學良も宇霆も、何の事かは知らず、むしろ餘計なおセツカイ位に思ふてゐたであらうが、しかし、一を擁立して他を排擠するといふことは、結局その地位權力ばかりかその生命にも關することとなるのであるから、竟には兩者各相猜疑し、各相警戒し、進んでは先發して他を斃すといふやうな危險な感情關係にまで、突き進んで行つたものと見なければならぬ。この機微な關係と時機とに乘

じ、一方のために功名を立て、自己のために立身の道を得んとして、ブッチャーの役目を買つて出たものが、即ち孫傳芳一派の黒頭巾の浪人組であると斷じても、必ずしも牽强附會ではなからうと思ふが、これが即ち前にいふた直接の原因と、間接の理由との關係に對する根本の疑惑である。もしこれを牽强附會でないといひ得るならば、その黒頭巾の浪人組を驅つて舞台に上せ、そして今後の滿洲時局をその反動派に攪亂せしむるに至つたものも、またその外來の勢力それ自身であるといふことが出來やう。

で、南方派がこのクーデターと、これによつて生ずる新局面をどう見るかといふことも、一の疑問であるが、新聞電報に據れば、大體楊宇霆に同情はしてゐるが、しかし、內心には餘りこれを悲んではをらぬ。何となれば張作霖死し、楊宇霆死し、この次には自ら羽翼を殺いだ張學良が、追々と死んで行くであらうことは、自然の政治的分解作用によつて、奉天軍閥新舊大小の頭目が自滅し、これと妥協とか、そのために隱忍とかいふやうな不必要な手段を待たずして、東三省全體の青年や民衆と共に、一躍して南北統一の氣運に進み、完全に關內關外の障壁を撤するといふことになるのであるから、內心の喜びを禁じ能はぬのに無理はなからう。しかし、南方としても、その前に考へねばならぬことは、こゝにこの張楊の爭に乘じて、孫傳芳、張宗昌、吳光新乃至これに安福派や、直隸派や、舊進步黨系の軍人政客等で、國民黨に容れられず、身を置くに所なきヤカラが、これから或る時期、即ち弱主の張學良が倒れ、舊派軍人の首領で政治を解せぬ張作相等が倒れるまでは、そのヤカラ共が自由にかれ等を利用し、妥協統一を妨碍するいふ一時代が、前にいふた青年と民衆の時代の來る間に狹まれて、奉國關係の紛糾を免れぬといふことである。これを思へば、南方は楊宇霆の死を聞いて喜ぶどころの沙汰でなく、むしろ宇霆の如き、過去の罪過は兎に角として、新派軍人の領袖で、孫傳芳一派やその他の陰謀をも抑ゆることの出來るものを生かして置き、學良を助けて奉國間の漸進的妥協統一を圖らしめた方が、遙かに得策であつたかも知れぬ。

楊宇霆の慘死が、日本と如何なる影響を有つに至るであるかは、重要な問題であるが、しかし、それは予の語るに憚きところである。かの某重大事件といはるゝ張作霖の變死に次ぎ、今度は楊宇霆、次ぎには張學良の番となるであらうことも、智者は略ぼこれを未然に知ることが出來るのであるが、その結果中間的反動勢力の滿洲攪亂は、日本に取つても、果して利か不利か、また結局その時期を過ぎての最後には、東三省自身の青年民衆の新勢力に直面せねばならぬ運命を、自ら急いで作りつゝあることの智慮と共に、今の政府軍閥は、果して自らこれを識別し得る智能を有してゐるのであらうか。予はこれを知らぬ。從つてこれを問ふことをも敢てし得ない。（をはり）

巴里滯在記

小宮豐隆

一九二三、一〇、二八。

柏亭君が敏子さんと一緒に訪ねて來てくれる。柏亭君は『秋のサロン』に出品する『二科會』の用向を帶びて、此間から巴里に來てゐるのださうである。この三十一日が招待日だといふので、招待劵を一枚くれる。敏子さんも、津田の分を一枚くれる。一緒に出かけて、ブールヴァール・デ・ジタリアンの伊太利料理へ行く。

『二科會』の連中の畫は、此所の專門家の間で、なかなか評判が可いのださうである。富田溪仙の畫を面白がる、鏑木淸方の畫の線を面白がる、津田青楓の畫を面白がる、安井曾太郎の畫を面白がる、のだといふ。さういふ畫の何所をどう面白がるのか、具體的に精しい事は聽くを得なかつたが、然し溪仙だの淸方だのを面白がる心持は、ほぼ想像が出來る樣にも思はれる。溪仙の畫には覇氣がある。その覇氣が、粗礦と洗練とを雜居させたままで、何かしら新しいものを創り出さうとして、頻に搔藻いてゐるといふ樣な所がある。其所に或は巴里の新人達の新しさが共鳴する何ものかが存在してゐるので

にないか。清方の畫の線は、ともかくも、年季を入れた線である。さうしてそれは、國貞あたりの浮世繪が明治化された樣な味を持つてもゐる。是が巴里の新人達の氣に入るといふ事と渓仙の畫が亦その氣に入るといふ事とは、一見矛盾するものの樣でもあるが、然し清方の畫には、巴里の新人達の持つてゐる新しさではなく、寧ろその古さが響を合せるのだと考へれば、別に大した不思議でもなくなる樣にも思はれる。彼等の血の中にも、年季を入れた藝をアプレシエートする藝術感覺は流れてゐるに違ひない。また、洒落た意氣なものを喜ぶ傳統的な巴里趣味も動いてゐるに違ひない。さういふものが、ロマンテイツクな異國趣味と一緒になつて、彼等をして特に、清方の畫の線を取り上げさせるのではないか。

西洋人から見て、西洋畫の根柢が一番しつかり出來てゐる樣に思はれるのは、恐らく安井の畫であるに違ひない。その點で、安井の畫が此所で評判になるのは、寧ろ當然だといふ氣がする。然し津田の畫は、大分趣きが違ふ。柏亭君は、津田の日本畫が一度西洋畫を潜つて來た日本畫であるといふ事を、此所でたびたび説明したけれども、みんなどうしてもそれを承認しなかつたと言つてゐたが、是は寧ろ承認しない方が、尤もなのではないかとも思はれる。勿論津田が、二年だか三年だか此所に來てゐて、ちやんとした師匠をとつて、西洋畫を勉强した事は事實である。またその後も、間でいろんな事をするにはしても、ずうつと續けて今日まで西洋畫をかいてゐる事も事實である。然しその事と西洋人が理解する意味での西洋畫を潜るといふ事とは、十分別なものであり得る。津田の畫は、その日本畫にしろ西洋畫にしろ、論理的精神と、[illegible]の精神から擯はれずに、最も多く直觀的な綜合的な、その意味での印象主義的な精神によつて導かれてゐるからである。津田は、是まで、如何なる場合にでも、純粹な日本人としてしか、西洋畫をかかなかつた。それが西洋人には、我我が感じるよりはもつと顯著に感じられる所から、みんな柏亭君の説明を承認しようとしなかつたのではないか。さうして彼等が津田の日本畫を面白がるとすれば、彼等は、假令渓仙や清方などとは違つた意味ではあるとしても、矢張純粹な日本人の日本畫として、其所に捕へられ其所に現はされてゐる、特別な藝術

的な芳香を喜ぶのではないのだらうか。

伊太利料理を出て少しあるくと、活動小屋がある。ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』をやつてゐる。ともかく這入つて見る事にする。

這入つて見ると、小屋はなかなか廣く且つ立派である。淺草の小屋なぞとは丸で比べものにならない。もつとも棧敷の手摺が朱塗の欄干の樣なもので出來てゐたり、舞臺の額縁が亦同じ樣に朱塗に出來てゐたり、豪奢と言へば言はれなくもないけれども、然し趣味として、餘り結構な趣味だとも思れない。さういへば、此所の『オペラ』の内部の色彩も、全部紅を主にした、それと金と僅か許りの白との組み合せである。棧敷の壁のタペストリや椅子の天鵞絨などには、凡て紅い色が用ひられる。天井や二階三階四階五階の手摺や舞臺の額縁には、凡ての裝飾が金色に綾どられる。派手で賑かな感じではあるが、薔薇の花の中にでも埋められた樣な、むしむしと窒息しさうな、重苦しさと煩はしさとを感じない譯には行かない。この活動小屋の内部の色彩が朱をその基調としてゐる事も、恐らくはかういふ巴里のロココ趣味の、安つぽい現はれの一つであるらしくも思はれる。巴里の女が一體に非常に厚化粧を施して、唇に濃く紅をさしてゐる事も、また、慥にかういふロココ趣味の他の一つの現はれである。——

此所の映畫幕は、日本のそれの樣に舞臺の額縁に密接して張られるのではなく、額縁の奥に一つ小高い壇が出來て、そこに枠に張つた白い布が立てられる。從つて日本の活動小屋の場合よりも、映畫が少し高く映し出される事になる。映畫機の置いてある所も、日本の樣に平土間の後の廊の上ではなく、二階棧敷の正面あたりの所にあるらしい。是は恐らく、日本のよりも小屋が廣くもあれば高くもある所から、この位の高さにしないと、何所の座席からも好く見えるといふ譯に行かない爲だらうと思ふ。

映畫そのものは別に取り立てて言ふ程のものを持つてゐなかつた。『シラノ・ド・ベルジュラック』の様な戯曲は、舞臺で見れば或は面白いかも知れないが、然し言葉のない、從つてその言葉を便にして此方に働らき掛けて來る委曲な且つ微妙な心理(サイコロヂー)のない、簡單な說明つきの映畫として見るのでは、いくら役者が動いて見せても、到底面白からう筈がないとも言へさうである。然し私一己としては、この戯曲が、十七世紀の中比に起つた事件を取扱つてゐる爲に、出て來る人物の服裝が悉く異樣である事に、深い興味を懷かせられた。もつともこの時分の異樣な服裝は、レムブラントやルーベンスなどの畫を通して、私にとつては、既に馴染のある服裝ではある。然し此所では、さういふ服裝をした男や女が、生きてゐて、ぞろぞろ動いて廻るのである。恐らく西洋人が日本の歌舞伎芝居を觀て感ずるであらう樣に、それが私に、恰もレムブラントの畫やルーベンスの畫の中の人間が、そのまま畫の中から拔け出て來て動いて廻りでもする樣な、不思議と斬新との交錯した、普通にはまづ獲難い刺激を與へたのである。

もつともさういふ點だけでなくても、ともかくも筋は通つてゐるし、要所要所は攫んであるから、戯曲の方を思ひ出し思ひ出ししてゐればこの映畫でも、決してつまらない事はない筈である。一方から言へば、其所にポピュラーになつた戯曲や小說を映畫化する事の利益があるのでもあらう。然し私は第一にこの戯曲をそんなに、映畫の弱點を補つて行く事が出來る程に、細かには記憶してゐない。第二に、よし記憶してゐる箇所があるとしても、映畫はその物理的な性質上、非常な速度で絕えず前進するものを持つてゐるから、然も時間的には藝術的なリヅムを殆んど無視するとさへも言つて可い位の等速度で前進するものを持つてゐるから、此方で戯曲を思ひ出して適宜に一つの箇所に力點(エムフアシス)を置いて味はつたりなぞしてゐると、映畫の方ではどしどし前進して了ひ、自分はいつのまにか遙か後(うしろ)の方に取り殘されてゐるといふ樣な、甚だ鈍馬な事にもなつて了ふのである。從つて、少くとも私だけに就いて言へば、その方面では、可い加減に覺えてゐるも

のを可い加減に思ひ出して、さうして可い加減に面白がつてゐるより仕方がなかつた。——周圍を見廻すと、見物はみんな嬉しさうな顔つきをしてゐる。この連中は恐らく私よりも、戯曲のデテイルをよく覺えてゐて、それを場面場面に迅速に適用して、さうしてこんなにこにこしてゐるのでもあらう。それとも、そんなデテイルなぞはどうでもよく、唯此所に描き出される映畫の世界だけで、十分堪能してゐるのだらうか。

此間モスコウの『藝術座』を見に行つてゐて特に目に立つた事は、見物の大部分が、いつでも外國人——殊に露西亞人だつた事であつた。露西亞の芝居に露西亞人が澤山行つてゐる事は、何も不思議な事ではない。私も勿論それを問題にしようとするのではない。ただ然し、私にどうも不思議でならないのは、一面では全歐羅巴の劇壇を支配してゐると人も許して自分も許してゐる『藝術座』の芝居に、佛蘭西人の見物が、あまりに少ないといふ事であつた。それは、入場料が高い（高いと言つても一等が四十フランである）せゐもあるかも知れない、またこの『藝術座』が巴里へ來たのは今度が初めてではないせゐもあるかも知れない、また役者が凡て露西亞語で通して佛蘭西語を使はないせゐもあるかも知れない。然しそれに對する愛惜さへ心に燃えてゐれば、さういふ事はそれほどの障碍にはならない筈のものでなければならない。殊に、あらゆる藝術家の聲價は巴里での評判できまるとまで言はれ、從つて藝術的には全歐羅巴で最も高い教養を持つてゐる筈の巴里人が、型に依つた『コメディイ・フランセーズ』の芝居や白痴嚇しの多い『オペラ』のオペラには、行く事を見榮にして見に行く癖に、事實藝術的に言つて世界無比と言つて可いこの『藝術座』の芝居に、僅日數へるほどの數しか行つてゐなかつたといふ事は、私にはどう考へても不思議でならない事であつた。もつとも相馬君の話によると、巴里人は、音樂會でも、イザイやカサールスや、さういふ外國人の有名な音樂家の演奏會には、あまり行かないのださうである。それは一つは入場料が高いせゐもあるが、それよりも、さういふ藝術の熱愛者は多くはカルチエー・ラタンなぞの、

市の中心からは遠い、邊鄙に住んでゐるので、なかなか演奏會なぞへは出て來にくいからなのださうである。——といふ事は然し、若い學生の樣な人が観に來たり聽きに來たりしてゐる事の少ない辯護にはなつても、巴里の市民一般が本當に良いものを見に來たり聽きに來たりしてゐる事の少ない辯護には、少しもならない。結局相馬君も、巴里の市民一般は、外の甲國乙國の都市の市民一般と同じ樣に、眞正に藝術的なものには殆んど何の關心をも持つてゐないのだといふ事を、肚の中ではほつきり承認してゐるのではないのだらうか。

その『藝術座』の場合とは反對に、此所の活動小屋に來てゐる見物は、殆んど全部と言つて可いほどの、佛蘭西人である。もつとも何所の國の活動小屋でも、見物は大抵その國の人計りで成り立つ事を常とする。此所に澤山の佛蘭西人がゐるといふ事はごくごく當り前の事であり、此所の見物の佛蘭西人の數と『藝術座』の見物の佛蘭西人の數とを對照させて、それによつて佛蘭西人の趣味の程度を論じようとするのは、極めて愚な事であるには違ひないが、それでもこの見物に對して、私の心の中にいろんな感慨が動き出た事は、また遂に已むを得ない事であつた。

一九二三、一〇、二九。

二三日前相馬君に探して貰つて、いよいよ借りる事にきめた、リュー・ボーケーの素人下宿に、今日越して行く。シャンゼリゼーの裏通りで、家を出て一寸右へあるけばすぐイエーナの通りに出られる、割に閑靜で然も便利な位置である。神さんは波蘭人だとかで、佛蘭西語も使へば獨逸語も少少は使ふ、娘は英語も使ひますと言つてゐた。部屋代が二間で月チフラン、朝飯が月百フランづつ、石炭が同じく百フランづつ、卵を食べるのなら、それは又別に戴くといふ約束である。小西と二人で一間づつ　私は奥の寢室めいた一間に這入る。

柏亭君敏子さんなどから、寄席(ヴァリエテ)見物に誘ひ出される。一番有名な『フオリ・ベルジエル』へ行く事になる。切符賣場に大きく五フランと書き出してある。外のこまこました事を讀みもせずに、五フランの積りで四人分の金を出して、棧敷を四枚くれといふ。すると奥から、棧敷なら一人前三十フラン何十サンチームだから、もつと金を出しなさいといふ。連れのレデイの顏もあり、今更それぢや五フランの方にするとも言ひかねて、それだけの金を四人前拂ふ。拂ひながら、こんな事なら『オペラ』へでも行つた方が可かつた、つまらない事をしたと思ふ。

中に這入つて更に驚かされた事は、何所へ行つても、必ず祝儀を呉れろと言つて、向うから祝儀を堂堂と請求する事であつた。外套やステツキを預けると、そこで祝儀をくれと言ふ。座席に案内させると、そこでも又祝儀をくれと言ふ。繪本賣りを呼んで繪本を買ふと、是がまた祝儀をくれと言ふ。一體からいふのは、向うから請求されるまでもなく、大抵は與れてやる習慣になつてゐるのである。然もそれは、ほんの五錢か十錢の端た金に過ぎない。然し此所の樣に、それが當然の權利であるかの如く、向うから堂堂と請求して來るとなると、支出そのものは別に痛くも痒くもないに拘らず、ひどく強制された樣に、不愉快を感じない譯に行かない。

もつとも此所は外國人向きの設備ださうで、そのお客は殆んど全部外國人なのださうである。從つて此所の雇人は、江戸の芝居者が田舍者の見物に祝儀の出しやうを敎へてやらうとするのと同じ心理(サイコロジー)から、凡ての見物に、祝儀は何所と何所とで出すべきものであるといふ事を、敎へて與れてゐる積なのかも知れない。それとも吉原に初めて上がつた客を、いろんな者が寄つてたかつて、いろいろにむしり取らうとする樣に、斷はれないといふ客の弱點につけ入つて、いくらかでも物にしようといふ積なのかも知れない。いづれにしても、又いづれでないにしても、見物こそ好い面の皮である。

舞臺一面に、少し奥まつて、奥へ奥へと高まる、十五六段の階段が出來る。階段は大理石に見える樣に白く光つてゐる。階段のまん中には華やかな絨氈が布き下ろされる。

奥の階段の頂上に、絨氈を踏んで、女が一人現はれた。この女の兩側にも、女が一人づつ現はれた。みんな殆んど素裸で、上にマントの樣に羅を羽織り、裾を長長と曳きながら、並んで階段を下りて來る。羅に織り出された模樣と羅を染めた色とは、それぞれに違つて、あるものは動物であり、あるものは植物である、あるものは淡紅であり、あるものは黄橙である。さうして女達は、あとからあとからと頂上に現はれては、あとからあとからと階段を下りて來る。これがひと渡り濟んで了ふと、今度は舞臺の上に、せり上げになつて、前ほどの數の、違つた女の一群が、姿は同じ樣な姿をして現はれる。さうして前とは逆に、この一群は、一人づつ裾を長長と曳きながら、今度は階段を上ぼつて行く。

最後の、多分この一幕の中心にされてゐるらしい女が、階段の頂上に立つた時には、この女の曳く裾は、二十段に近い段段をなほ曳き餘り、且つ最後の段の幅を一杯に埋めて了ふ位に、末廣がつた。女の着てゐる羅の地色は碧で、それが白く輪つなぎの樣に染めぬかれる。それに紅や綠や黄色や紫色の電氣が、間を置いて代る代るにあたると、丁度孔雀が朝日に向かつてその尻尾を廣げてゐでもする樣な感じがする。

幕が明くと、奥にまた黒天鵞絨の幕が下げてある。その前に姿見が十ばかり並んでゐる。十人許りの女が、是も、鳥の羽根の[redacted]以外は、殆んど素裸の儘で出て來て、自分達の姿を、それぞれの鏡に映しながら、いろんな踊を踊つて見せる。

暫らくすると、その鏡の中で舞臺の女の影の樣に踊を踊つてゐた女は、實は影ではなく、本當の然し別な十人の女で、それが舞臺で踊つてゐる女達から、それぞれ手をとつて鏡の枠の中から引き出され、今度は同勢が二十人一緒になつて、舞臺の上で、同じ樣な踊を踊つて見せる。あとでみんなが列をつくつて、黒天鵞絨の幕の陰へ這入つて行く。這入つ

たと思ふと、又前の十人の一組が現はれて、一番初めの折の樣に、姿見の前で、一番初めの折の樣な、踊を踊り始める。姿見に映るものは、また一番初めの折の樣に、舞臺で踊を踊つてゐる、その十人の姿である。と思ふと、今度は急に、本とに素裸になつた女どもが、鏡の枠の向うに坐つて、右や左、上や下と、頻に身體や頭を動かしてゐる。それがまた忽のうちに消えて、そこには、舞臺の上で踊を踊つてゐる、十人の姿が現はれて來る。

此所で支配してゐるものは、單に官能的なエロテイツクな要素のみである。人間の中に動いてゐるさういふ要素に媚び、さういふ要素を刺激する爲に、此所では、あらゆる富とあらゆる勞力とあらゆる科學とあらゆる藝術とが、その一點に傾け悉されようとしてゐるかに見える。なぜなら、此所のライト・モーテイフを形づくつてゐるものは、結局女を裸にして見せるといふ事であつて、それ以外のあらゆる技巧は、音樂も色彩も線條も運動も照明も装置も、凡てこのライト・モーテイフを廻ぐつて動き、このライト・モーテイフを活躍させる爲めにのみ採り上げられてゐるに過ぎないからである。もつとも此所の特色として、そのライト・モーテイフの現はし方に、ある節度があるとも言へなくはないかも知れない。外の國のかういふ種類の興行物の樣には、此所のものは、露骨ででも野卑ででもなく、ある藝術化されたサムシングを持つてゐるとも、言へば言はれ得るかも知れない。佛蘭西贔屓から言へば、其處に洗練された佛蘭西趣味の影響が見られ得るのでもあらう。然しそれは、結局五十歩百歩の事である。假令それが洗練されてゐようがゐまいが、又それが藝術化さるてゐようがゐまいが、それは日本の吉原の張見世制度と同性質の制度であり、然もそれは張見世制度よりももつと野蠻な(一方から言へば、もつと殘酷な)制度である事丈は爭はれない。さうして此所では、極めて單純な事に、さもさも勿體ぶつて、あらゆる金と頭と勞力とを用ひて少しも憚る所がないのである。こんな勿體ない事はないといふ氣がする。

然し不思議なのは、そのライト・モーティフが、私にはちつとも、ライト・モーティフらしく訴へて來ないといふ事である。私には、女の肌が、少しもリアルな女の肌だといふ感じがしなかつた。丸で蠟細工かなぞで出來上つてゐるものの樣な氣しかしないのである。或は向うで、極めて巧妙に出來た肉襦袢の樣なものでも著てゐる爲に、さういふ感じがするのかとも考へて、特にその點に注意して見るに、腋の下や臍のあたりが、決してそんな仕掛にはなつてゐない事を證明するものの樣である。また、士官が女たちを裸にして木馬飛びの稽古をさせる所で、飛べない木馬の上に女たちが突つ伏す樣にして、幾つかの剝き出しのお尻を見物の方に向けてゐると、それを士官が平手でぴちやぴちやと、片つ端から叩いてあるく。その音から想像しても、女は大抵は肉襦袢の樣なものを、用ひてゐない事は確かである。それにも拘はらず私は、少しも私の欲望を刺戟される事がなかつた。――是は一體どういふのだらうか。

振動數が多すぎても少なすぎても、音は人間の耳には聞こえない。それと同じ樣に、この刺激は、私の官能にとつて餘りに强すぎる爲に、全然何の感じをも與へないのだらうか。此方に來たてに、ルーヴルでルーベンスの畫を初めて見た時には、一寸是に似た經驗を持つた事を、未だに私は記憶してゐる。然し、そのルーベンスの畫に出て來る瑰麗な女の裸體は、今ではもう可也强い牽引の一つになつてゐる以上、私の官能の享受能力の幅は、半歲の間に、可い加減廣げられてゐる筈である。そんなら彼等は、あまりに自分の肌を人目にさらしつけてゐるから、何か微妙な心理生理作用によつて、一種無形の著物の樣なものがその上に出來てゐて、その爲め、裸として人に訴へなくなつてゐるのだらうか。是は我我の顏の事を考へて見れば、それほど許され難い想像でもない樣である。ペルシヤの女は常に覆面してあるいてゐる。從つて、ペルシヤの男は、覆面しない女の顏を見ると、肉感的に刺激されるのだといふ。是には勿論いろんな聯想が手傳ふには違ひないが、然し一方から言へば、常に覆面してあるくペルシヤの女の顏と始終むき出しに計りしてゐる我我の顏とでは、（勿論科學的には許されてはゐない想像であるに過ぎないが）何所か微妙な點でその生理的條件を異にしてゐるのではないか。

同じ様に、常に覆はれてゐる日本の女の腕と大抵はむき出しにされてゐる西洋の女の腕と、乃至は常に包まれてゐる一般の女の肌と常に露出されてゐる此所の女の肌の様な肌と、さういふものの間には、微妙ではあるが、然し可也はつきりした相異が、生理的に出來てゐるのではないか。然も此所では、さういふ女の肌の上に、ぎらぎらした色電氣の光線が、必ず劇しく注がれるのである。白壁の様に厚化粧をすれば、どんなに美しい溌溂した女の顔でも、必ず死んで了ふと同じ様に、彼等の肌は、その電氣の厚化粧の爲に、或はリアルに我我に活きかける能力の大半を、なくして了ふのかも知れない。然し、一方から言へば、いくら厚化粧をしてゐても、花嫁さんの顔は、花婿さんにとつては、十分特別な刺激にもなり得る筈のものだとすれば、若し是で私が、西洋の女の肉に十分の親しみを持つてゐたら、換言すれば、是は自分のエンジョイする事の出來る肉であるといふ心持で彼等を眺める事が出來たら、或は又事情が違つて來るのかも知れない。少くとも此所に來て眼尻を下げてゐる西洋人の大部分は、恐らく此所のライト・モーテイフの故に牽き寄せられてゐるものに違ひない。然も遺憾の事には、そのライト・モーテイフがライト・モーテイフとして響くほど、私は西洋の女の肉に親しみを持つてはゐないのである。――ともかくも私には、かういふ女の肌よりも、ルノアールの畫の女の肌の方が、どの位美しくもあれば（是は無論の事であるが）又どの位エロテイツクに人を刺激する力を持つてゐるか、分からない。

此所で今一つ感じた事は、形の上から言つても、西洋の女の裸體が、必ずしも美しいとは言へないといふ事である。伯林にゐる時分に、現在の西洋の女の、いろんな裸體の寫眞を集めた本を見た事がある。その寫眞に出てゐた女は、どれもこれも凡て貧弱で、恰好が悪く、チチアノやチントレツトやルーベンスや、さういふ人達の畫の中に出て來る様な、堂堂たる釣合のとれた美しい肉體を持つたものは何所にも見當らず、結局十九世紀から二十世紀へかけて人間の肉體は、段段醜悪になつて來てゐるとしか考へられなかつた。然しルノアールの畫にある様な女の肉體の事を考へれば、あながち

に又、段段醜惡になつて來てゐると、主張する事も出來ない樣でもある。是は一體どう辨解すれば可い事だらうかと、多少問題になつてゐた。

然しこの『フオリ・ベルジエル』に狩り集められてゐる女の凡てが、こちこち瘦せすぎてゐなければぶくぶく肥りすぎてゐて、少しも美しい恰好を持つてゐるものがないとすれば、然も此所の大方針の上からは、少しでもさういふ點での優良者を選まうと心掛けられてゐるに違ひないといふ事が十分推測され得るとすれば、ルノアールは畫家として自分の眼鏡に叶ふモデルを探し出す爲めに十分骨を折つたか、それでなければ、ルノアールの內にある美しいものが、それほど美しくもないものの中から、十分美しいものを睨み出す事が出來たかであつて、ああいふ美しい肉體を持つた女が、佛蘭西にはさうさらにあるのだといふ事には、ならない筈の樣にも思はれて來る。この事は或は同じ樣に、チチアノやチントレツトやルーベンスなどの場合に就いても言はれ得るかも知れない。

無論西洋では希臘の昔から、裸體の美しさが尊ばれ、その日常生活に於ても、日本と違つて、その美しさを傷つけない樣な原則が採用されて來てゐる。從つて、概括的に言へば、また選み上げられた箇箇のものに就いて言つても、西洋の女の裸體の方が日本の女の裸體よりも、より美しいものである事は疑ひを容れない。然しルノアールの場合の樣に、若し日本の畫家に、自分の眼鏡に叶ふものを選み上げるに十分骨を折づたり、若くはそれほど美しくないものから十分美しいものを睨み出し得る丈に內に美しいものを持つてゐたりする者がゐたならば、日本にももつと美しい肉體を持つた女が――假令西洋には優らないまでも、少くとも劣らない位の美しい肉體を持つた女が――ゐるといふ事になりはしないだらうか。

外に出てタキシを呼んでゐると、夜の女が三四人どやどやと押し寄せて來て、口口に我我に誘ひをかける。見ると見物

席の隣に設けてある食堂の中を、さつきうろうろしてゐた手合である。此所ではつまり舞臺でさんざ挑發して置いて、凱旋隊が食堂や出口で見物を虜にしようといふ仕組になつてゐるのである。不圖吉原の花魁の道中を思ひ出す。然しあの道中の方が、どの位無邪氣で節度があつて詩的な趣味があるか分からない。

タキシに乘らうとすると、その一人はうるさく後を追つて來て、外套の裾をひつぱり、乘つてゐるものを曳き下ろさうとさへもした。

一九二三、一〇、三〇。

巴里では、伯林と違つて、一棟の住宅の門番が、日本の昔の差配の様な、役目と勢力とを持つてゐるものらしい。一階の家でも二階の家でも三階の家でも、ともかくもその一棟のうちに居住してゐる限り、みんな門番の機嫌をとらなければならない事になつてゐる様である。今度の下宿の神さんでも、いきなり、門番には幾ら幾らの祝儀をやつて下さいと言つた。郵便屋でも郵便物はみんな門番の所へ置いて行く。それを門番が、それぞれの家に配り屆ける。素人下宿をする場合には、この人はだれそれの家に下宿してゐるのだといふ、門番の證明を貰つた上で、それを管轄の警察に差し出して判を貰ひ、更にそれを持つて警視廳に出頭する事になつてゐるのださうである。どうも甚だ面倒である。こんな事なら、今までどほりキャムペルにゐる事にすれば可かつたと思ふ。然しさういふ面倒な事は、一切相馬君がしてくれるといふ、唯警視廳へだけは一緒にお出なさいといふので、萬事よろしく賴む事にする。

今日も相馬君はその爲めわざわざ來てくれたのであるが、門番が留守で證明が書いて貰へない。四時頃までには歸つて來る筈であるが、それもはつきりした事は分からない、と門番の神さんが言つたさうである。仕方がないから、ローザ、

ベールの店へ畫を見に行きませうと言ふ。ローザンベールには原君の買つたドラクロアがある筈である。序にそれも見せて貰つて來る事にする。

ローザンベールへ行つて見ると、亞米利加で展覽會をする爲に、原君の二點を除いて、目ぼしい畫はみんな、ドラクロアも何も、すつかり送り出して了つたのだといふ。それで兎も角も原君の二點を見せて貰ふ。

ドラクロアには抒情詩的な要素と戯曲的な要素とがあつて、それが多くの場合、燦爛たる色彩と流動する筆觸となつて、その畫面に現はれる事を常とする。これらの二つの要素が、ドラクロアの畫の中で、どう矛盾し若くはどう調和するかを、一一の畫に就いて明らかにする事は、私にとつて、一つの興味ある問題である。が、然し、今此所ではそれに就いて觸れる事を避ける。唯概して言ふと、私は、動を題材としたドラクロアの大きな畫を、どうもあまり好きになれない事丈を、言つて置きない。同じ動を表現してゐるにしても、ルーヴルにある『虎』に現はれた動や、意味は少し違ふけれども、同じルーヴルにある『ショパン』の顏に現はれた動の樣なものは、非常に面白い。然し、大きなものとなると、大抵は、乾度何所かに作者の態度に無理があつて、作者と一緒に十分動き徹せない、遺憾を殘すのである。

然し原君の買つた二つの畫は、殊に『處女の教育』の方は、寧ろ動の少ない、さうして抒情詩的要素の多分にある、寧ろ抒情詩的要素のみから成立つてゐると言つて可い位の、沁やかで淸らかでさうして甘い、牧歌的な美しさを持つた畫である。今一つの畫には、赤い帽子をかぶつたアラビヤ人が、一頭の馬に跨がり、今一頭の馬を後にひつぱつて、向うの山の上で待つてゐる連の所へ、勢よく馳け出して行く所がかいてある。此處ではドラクロアの好きな動が、前の『處女の教育』に於けるよりも、遙に多分に表現される。それでもドラクロアが好んで用ひる赤や碧の派手やかな色は、此所でも、その動を戯曲的に强調する代り（ドラクロアの美しい色彩は、多くの場合に、題材そのものの中に含まつてゐる筈の動の

の、なまなましさや劇しさを、ある時は緩和させ、ある時はふやけさせる樣に思はれる）に、それを抒情詩的に弱めた美しいものにしてゐる樣である。──さうして、かういふ世界の方が、卽ち戲曲的に動のある世界よりも寧ろ抒情詩的に動のある世界の方が、ドラクロアにとつて、或は本來のエレメントではなかつたのかとも想像する。

外にモネの赤い船をかいた畫があつた。セザンヌの淡彩ものがあつた。──セザンヌを數多く見るにつれて、セザンヌの本當な味は、實は我我日本人でなければ分からないのではないかといふ氣が、次第次第に强くなつて來る樣である。

コローが伊太利でかいたといふ畫がある。是は通常コローの畫として我我の頭の中に出來上がつてゐる概念とは丸で違つた、輪廓も色彩も空氣も光線も、何もかもはつきりと、極めて明るい畫である。伊太利といふ土地そのものが、その通りの土地だからと言つて了へばそれまでであるが、然しこの畫を見てゐると、なんだかコローの畫ぢやないといふ氣がしてならない。

是と同じ樣な經驗を、ゴーホの畫で、ルーヴルとアムステルダムとで、二度經驗した事がある。ルーヴルにあるゴーホの畫は、最も豐富な色彩を驅使して絢爛無比の美しさを表現してゐる點に於て、アムステルダムにあるゴーホの初期の、コローを模寫した樣な畫は、單色的で乏しくて淋しくて然も柔しく暖かな世界を表現してゐる點に於て、それは、マイエル・グレーフエあたりから吹き込まれ、寫眞や三色版などを通して私の頭の中に出來上がつてゐるゴーホの畫とは、どうしても一つのものになる事の出來ない、他人の畫であるに外ならなかつた。──然し、事實これはゴーホの畫であつて、他人の畫ではないのである。私は私のゴーホを、他人が理會したゴーホではなく、私が理會したゴーホを、新に組み立て始めなければならなかつた

ゴーガンの畫でも同樣である。その初期の、例へばコペンハーゲンにある畫の樣な畫を、後のタヒチの女をかいた樣な畫とならべて出されたら、誰でもそれが同じ人の手になつたものであるといふ事を、容易くは承認出來ないであらう。然もゴーガンにコペンハーゲンにある樣な畫があり、ゴーホにアムステルダムやルーヴルにある樣な畫があるといふ事は、多くの批評家からは看過されてゐる。少くとも力點（エムフアシス）を置いて、論じられてゐない。然し彼等が斯ういふ畫をかいてゐるといふ事は、彼等の後年の畫の世界を解釋し理會する上に、重要な鍵を與へる筈のものである。此所に力點（エムフアシス）を置かない批評は、結局藪睨みの批評にしかならない。例へば、晩年のゴーホの畫とその當時のゴーガンの畫とを、それらだけ截り放して並べて見ると、二人がなぜ親しくあり得たかが、殆んど理解出來ないほど、二人は違つた道をあるいてゐる樣に見える。然し二人の作品を、その初期のものからずうつと並べて見て、二人の作品を貫ぬいて流れる、二人の藝術家としての特質を確實に捕捉するならば、二人の發展のある時期までは、若くはそのある時期を過ぎても尙、二人を必然に親しく結びつける契機を、我我は容易く發見する事が出來るのである。

是は然し、コローやゴーホやゴーガンの畫に限つた事ではないのである。戲曲、小說、詩の類は、日本にゐても、直接その原作に觸れる事が出來るから、さのみ問題にならない。然し、地理的の關係から、寫眞と他人の說とのみを通してしか親しむ事を許されなかつた、西洋の繪畫彫刻の類は、此方に來て實物に當つて見ると、大抵の場合、頭の中に出來上がつてゐるものとは可也違つてゐる爲に、若くは頭の中に出來上がつてゐるものに多くの改訂や補足を加へなければならない爲に、隨分狼狽もし又可也憤慨する事も出て來る。段段己惚が昂じて來ると、我我は我我の手で、西洋美術史を書き直す必要がある、とまで思ふ事さへもある位である。

ローザンベールの店を出ると、巴里の暮れがたの空が、殆んど同じ高さに並んでゐる五層樓の町並の彼方にくつきりと

晴れ亘つて、然もそれが稍とろんとした薔薇色にそめられてゐる。町の家家も、上の方はその照り返しを受けて、同じ樣に、ほんのり薔薇色に染まつてゐる。私はルノアールのかいた女の肌の色を思ひ出した。同時にまた私は、ルノアールのかいた森の若葉の畫で、その若葉に到る所さされてゐる淡紅い繪具の色を思ひ出した。巴里には——巴里に限らず、一體に佛蘭西には、かういふ微妙な光と空氣とがあるから、それで特に畫が發達するのではないかと考へる。

一體に巴里の天氣には非常に變化が多い。然しその變化は、北國的に荒荒しく劇變するのではなく、いかにもマイルドに變る、さうして實に變化が多いのである。然も巴里の町は、大抵同じ高さに連らなつてゐる上に、殆んど一樣に灰色がかつた白い家ばかりだから、一つの顔に纒まり易い上に、天氣工合によつて、いろんな色合を微妙に反映し易い。今度此所に來てからは、散歩しながら、その町の表情を眺めるのが、私の樂しみの一つになつた。

序だからといふので、相馬君が、デュラーやレムブラントの版畫を賣つてゐる店を、二三軒案内してくれる。大抵は一萬何千フランといふ樣な値段である。安くても六七千フランぐらゐな事はいふ。元より買ふ氣もなし買ふ金もなし、默つて聽いてゐればそれで可いのではあるが、然し仕舞には馬鹿にされてゐる樣で、段段腹が立つて來た。是は寧ろ此方が段段ひけめを感じ出したせゐであらう。

デュラーのエッチングには割に面白いものがあつたが、レムブラントのものは、アムステルダムのレムブラント・ハウスに置いてあるものよりも、大抵は落ちるもの計りであつた。それでも面白かつたのは、ニグロの女か何かをかいた、裸體で向うむきに寢てゐる、全身眞つ黑な女のエッチングである。それが四六版位の大きさの、日本の鳥子紙に、横に刷つてある。鳥子には特有の色がある、又特有の光澤がある、同時に柔軟な感じもあるから、この眞つ黑な女の裸體が、ぴかぴか光る香油でも塗つた樣なものになつて、恐らく外の紙では出す事の出來ない、不思議に活活した特別なエフエクトが現はれる。

然しその事よりももつと私に興味があつたのは、この鳥子紙とレムブラントとの關係であつた。レムブラントの生れたのは、日本の事にすると、たしか慶長十一年の筈である。從つてレムブラントが生きてゐた時代は、和蘭が日本と通商してゐた時代であるから、日本の鳥子が和蘭に這入つてゐるといふ事は、別に不思議な事でもなんでもない。また遙遙日本から持つて來られ、然も歐羅巴では到底製造する事の出來ない品物である以上、その鳥子が當時和蘭で非常に珍重されたに違ひない事は、十分に推察出來るところである。然しその鳥子の樣なものがどうして和蘭に持ち運ばれ、それがまたどうしてレムブラントの手に這入つたものか、又それを手に入れて、レムブラントは日本といふ國をどういふ風な國として想像したか、さういふ事をそれからそれへと考へて行くと、なんだか不思議に暖かな世界が、徐ろに私の目の前に開けて來る樣な氣がするのである。

是が本當にレムブラントのものであるかどうかは、專門家の鑑定を俟たなければ、遽にきめる譯には行かないのかも知れない。又是が本當に鳥子紙であるかどうかも、一應はその方の專門家の鑑定を必要とするでもあらう。然し、若し二つのものに疑ひがないときまれば、日本の鳥子がどうしてレムブラントの手に這入る樣になつたかを調べて見る事も、日蘭貿易史を飾る一つの興味ある挿話として、決して無駄な事ではあるまいと思ふ。

一九二三、一〇、三一。

午後に相馬君が、一緒に警察に行つてくれる。門番の書いた證明を差し出すと、警察では、それにすぐ判を捺してくれる。伯林でかういふ所に行くと、必ず長い間待たされた。それからよくあつちへ行かされたりこつちへ行かされたりした。さうして大抵は、金をとられたり金をやつたりする事になつてゐた。それが癖になつてゐるせゐか、かう簡單に事が運ぶと、有難いといふ心持よりも、寧ろ少少あつけない。是で本當にすんだのか知らんとさへ思ふ。まつたく不思議なも

のである。」

それから『秋のサロン』へ廻る。

會場に這入つて見ると、どうも大變な人である。どの部屋もどの部屋も人が一杯に詰つてゐて、喧嘩腰にでもならなければ、到底思ふ所で思ふ畫を思ふさま見てゐる譯には行かないほどの、凄じい雜沓である。なんでも出品者が三千からあるのだといふ。その人達が假に五枚づつの招待券を配つたとして、是は一枚で二人づつ這入れる事になつてゐるのだから、三萬人は來てゐる。その他、會そのものから出した招待狀も可也澤山あるに違ひない。又平素の五倍の入場料を拂つて入場した、篤志家や見榮坊の數も、隨分ある筈である。然して此所が今日雜沓するのは初めつから知れきつてゐる事ではあるが、然しかう雜沓するものだとは、來て見るまでは、到底想像する事が出來なかつた。是では元來みんな、何をしに來てゐるのか分からない位である。

是は恐らく今年だけが特にこんなに景氣が可いのでなく、例年この通りであるに違ひない。が、然し、これで一體展覽會の目的は、達せられた事になつてゐるのだらうかと思ふ。畫を見に行くのだか自分を見せに行くのだか分からないと、たしかオスカー・ワイルドだつたかが言つてゐたと記憶するが、此處の今日の雜沓は、そんな生温い話ではない。見るとか見られるとかの問題はとつくの昔に通り越して、唯一生懸命に押しに行くのである。丸で池上のお會式である。この中で、少しでも人目を牽くものがあるとすれば、それは、最もぎらぎらした萬燈の光と最も獰猛なお題目の聲との外のものではあり得ない。

私は可い加減五つ六つの部屋を押され押されてあるいてから、到頭此所を飛び出して了つた。勇敢と膂力とを持つてゐなければ竟に畫を見る事が出來ないとなると、私には到底畫を見る資格がないからである。それで、折角會ふ事を樂しみにしてゐた『二科會』の諸君の畫にも、唯遠方から默禮を取り交はす丈で、それなり別れて了はなければならなかつた。

編輯者雜記

×

前號發賣禁止になつた爲め我が讀者諸君に多大の御迷惑をかけたことと思ひます。切り取つて再び發賣したのでしたが、お蔭で大體賣り盡したやうでした。只遠隔の地方はどうにも手が屆きませんでしたので其儘押收されて讀者の手に渡らなかつたところもあらうと思ひます。平に御宥恕下さい。

×

なあに詰らないことでさ。黒島傳治の「氷河」といふ小說がいけないといふのですが、い丶當不當を言つたつて始まらないでせう。い丶か惡いかは、もう十年もすればわかるでせう。愚痴や憤慨はよして詰らない目にあつたものだと諦めておきます。その代りにこの二月號は前號よりもまして立派な出來です。前號の損害埋合せに大いに買つて下さい。

○

現代日本の社會相、思想界に現れた行詰の狀態を檢討することは刻下の急務だ。此行詰を打開して新局面を展開せんとする努力は猶一層必要だ。行詰れる現狀の打開とその展開とは何か。それは社會、思想界に於ける新舊兩勢力の混沌たる渦卷を正視してそれらに統一と整理を與へんとする努力だ。それは結局現代日本の再認識の問題でなければならぬ。新しき日本はそこから生れるであらう。此意味に於て本號の諸家の「現代日本の再認識」に關する批判は必讀の文字だ。同じく本號の「モダン・ライフの再吟味」は前者と併讀すべき好文字だ。

○

創作欄に久しぶりで永井氏の好篇を得たことを喜ぶ。新進の太田黒氏の一篇も好い作品だ。室生氏、宮島氏の作品もそれ〴〵特色の現れたい丶ものだ。とにかく本號の創作はみんな讀ごたへがするものばかりだ。

□

「現代日本の再認識・再吟味」の問題を提げて特輯號を出しました。あらゆる外來の思想と物質をせつかちに吸收して自己の肉體を形造りつ丶ある現代日本はそれ〴〵如何なる相貌を以て諸氏に見みゆることでせうか。現代日本の再認識問題は實に日本國家にとつての最大問題たるのみならず日本人個々人にとつても緊要必須の活問題でなければなりません

◇

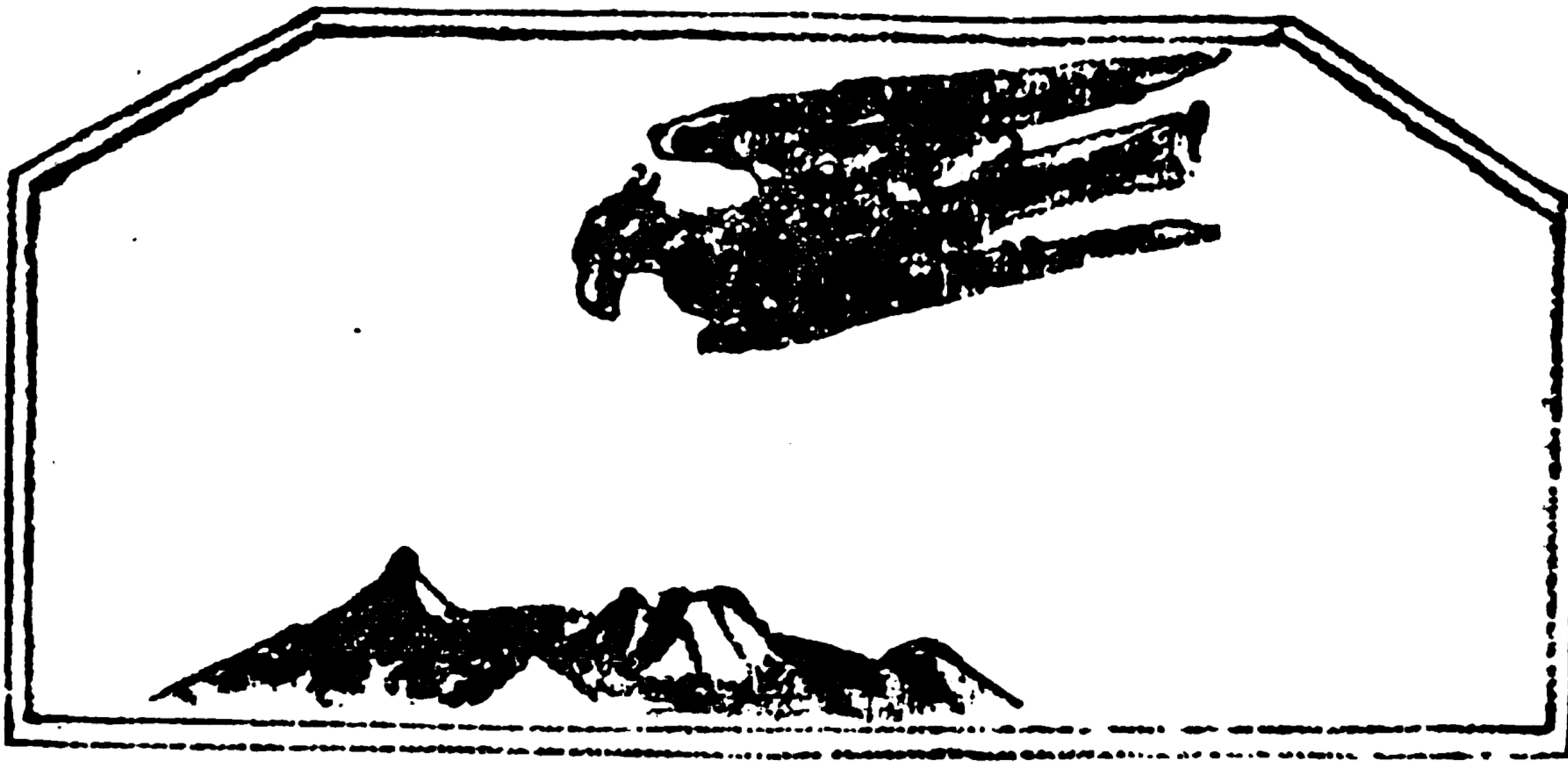
それから前號所載河合氏の論文の原名は「反動の潮流と戰ふ」と云ふので、題名に就ては教授も自由な態度を採つて居られたが、印刷切迫の際筆者との相談の暇なくそのまま變更された該題名に對しては、困惑さるる赴き、由て玆に教授の意を傳へておきます。

◇

本號も亦充分の自信を以て讀者にお薦めする事のできるのを心から喜んで居ます。知的大衆の待望を具現し、その總意を能く反映して居る一分の隙もない此頃の本誌の編輯振りは、識者驚異と禮讃の的です。本誌が放つ獨特の香氣を心ゆくまで吸はれよ！讀者はそこに月毎に甦生する自らを見出すと共に本誌への愛着を示さざる得なくなるであらう。

△

熄みなき社會諸現象の繼起と發展成長並に其の歸趨とを觀ずる時、必要とさるるもの、それは認識把提の的確と透徹とである。現代日本を圍繞する緊要問題の如何に夥しき事よ！「現實」に照合し發展法則に準據して夫等諸問題は批判されねばならぬ。「問題」として吾等の提示する所、把握批判に當て讀者諸賢の示唆とは至らずとも契機ともなり得れば吾等編輯者の苦心は酬ひらると言ふもの。



或女の手記

室生犀星

一

母は茶の間でする家族の話聲を聽きたがり、雇女に「襖を開けて置いてください」と言ふのだ。茶の間の光景を臥所にゐながら見ようとする、母親の意地惡い腹であつた。——薄明りの未だ漂ふ夕方、敦子は次女に添乳をし、彦太はまだ勤先から歸らなかつた。國から上京してゐる敦子の先夫の子供の竹次は、玄關の間で夕刊を讀んでゐた。敦子はさういふ靜かな中の間の疊の上に、何か物音の擦れるけはひを感じ、能く見ると這ひながら茶の間の様子を窺はうとしてゐる、痩せ落ちた醜い物凄い老母を眼に入れるのであつた。

「あんまり靜かなもんぢやで……」

母は敦子の顔を見ると、眺を見せながら自分の部屋の方に、向きを變え、ずるずると這うて行くのであつた。敦子は母が何故自分に眼聡い注意を拂つてゐるかを、鳥渡考へて見ない譯にはゆかなかつた、

敦子は彦太にそのことを話すと、彦太は別に孰方にも味方せずに、何か輕い愉快な氣持で聞き流してゐるらしかつた。さういふ彦太の性格を知る敦子は、國にゐる三年間は其事だけで苦勞したも同樣だつた。事實、敦子には先夫の印象は日毎に薄らいでゆく一方であつたが、彦太には一齊通じない氣持であるらしかつた。敦子は却つて彦太に刺戟されて先夫のことを考へて見ることがあつたが、印象は甚だしく不鮮明だつた。先夫の顏に重(かさ)なる彦太の印象の方が却つて強い方であつた。

先夫は陸軍の將校だつた。三年で死別れた敦子は子供に先夫の姓を繼がしてゐたが、田舍で育つたので自分の子供ではあるが愛情は別樣のものだつた。竹次の顏を見詰めてゐても先夫のことは思ひ出さなかつたけれど、時々その聲の中に漂うものを感じた。母や彦太、彦太の親戚の慶子も必然に竹次に冷たく當つてゐた。先夫の死後五年近く獨身で暮してゐた敦子には、先夫の印象が濃い筈はなかつたのだ。彦太はそれにコダわり敦子はどう言ひ拔けよう術もなかつた。

竹次には就中老母の當りが邪險だつた。東京辯が能く解りかねる竹次は子供らしくない欝陶しい顏付で、庭や玄關を掃除する習慣になり、使歩きや彦太の子供の守をすることなどにも、最早誰も不思議とは思はない程になつてゐた。そればかりではない雨の日は彦太を停車場迄出迎えにやることもあつた。敦子は皆の前で竹次に親しく話しかけることを控え、彦太が出勤した後の靜かな朝の間、老母の晝寢の隙間などに自分の前に座らせ、何か有合せの菓子などを食べさせることが屢々だつた。さういふ氣持を自然に嚥み込んでゐるらしい寡默な竹次は、溫和しく口を動かしながら座つてゐた。敦子はさういふ自分の行爲に何等の邪しさは感じなかつたが、部屋を這出る老母を一度見てから、物音にひびく神經を募らすことは度々であつた。

彦太は仕事が忙しい爲、疲勞も激しく從つて癇癪が起り口喧しかつた。それに會社の下役で行くところのない安成を漫然と引受け、寄宿させるやうになつてから一家は眠る部屋もない程手狹だつた。座敷には彦太と敦子に二人の女の子、玄關に安成が眠り、老母と雇女とそれに竹次は床の敷くところがないので、老母のわきに床を敷いてゐた。彦太の姪は中の間に眠り、却つて女中部屋の方が樂な程だつた。

「安成さんをお引受けになるのは考へものですわ。」

敦子は觸らぬつもりでさう言つて見たが、彦太はその抗議には極端に不機嫌だつた。そのことは言はないで竹次を雨の日に電車道まで迎えに出すことを、殊更に咎め立てるのであつた。

それればかりではなかつた。長女は五つになつてゐたので、彦太はさういふ些細な神經をも使ひ分けて危險視した。敦子はそのことでは默つてゐられなかつた。「まだ子供なんですもの、そんな滅多なことなんかございません。」

併し彦太は意地惡い尖を帶びた聲で、唯一言で敦子を壓倒してしまふのだ。

「おれはあの子の性質は知らないんだ。お前はよく知つてゐる筈だ。」

敦子はそれ以上何もいふことがなく、何時もじりじりと迫る夫の手口を知り過ぎてゐたので、もう返す言葉が無かつた。

かういふ紛紛した呼吸苦しい家族の中で、彦太の姪の慶子だけは毎日のやうに出歩いてゐた。慶子が歸宅するごとに、その表情に昂奮のあとが見られ、何か鋭さが彼女を輪廓的に隈取り、その鋭さは敦子には叶はない烈しい調子を含んでゐた。敦子はさういふ慶子に眼を付けてゐたものの、殊更に不行狀らしいものを認めなかつた。

彦太が好意以上のの或柔かい感情で慶子に接してゐることは、敦子の眼にも度々或は露骨に映じた。併し敦子はその事では眼をつぶり、散歩に出向いてゆく二人を機嫌よく送るのであつたが、それすら決して愉快な氣持ではなかつた。彦太

が狹苦しい座敷で讀物をしてゐるときにも、用もないのに其本の上を覗き込み、それなあにと甘えた聲でいふのも慶子であつた。さういふ座敷の有態を茶の間にゐてチラチラと見るともなく感じる敦子は、その度に針のやうな鋭利な痛みを胸に感じた。

安成が、寄宿してから最初の日曜日だつた。女の子供を連れ、慶子は自然に安成と上野に出掛るやうな都合になつたが、敦子はその事で何も頭に來る感じはなかつた。只、彦太は働き過ぎて身なりを亂してゐる敦子を見ると、荒々しく舌打ちを續けるのであつた。態々敦子の洗濯をしてゐる傍に來て迄、何か苛立つ氣持の捌け口を見付けようと焦る彦太の姿は、さういふ彦太を見まいと努力する敦子の氣持に重りかかり、眩惑する狀態にまで惹き入れるのであつた。敦子は濯ぐ毎に滑くなる木綿襦袢の下に、竹次の襯衣を同じ洗濯物の下へ掻き込みながら、くらくらする程夫の暴力的な迄に迫る氣持を感じるのだ。さういふ敦子の經驗は度々だつたけれど、それを怺へるものが肉體の中に最早稀薄になつてゐることを感じた。

併し彦太は何も言はないで前庭へ去り、敦子はそれを知ると凄じい氣勢の挫折で、ガックリと膝の折れるやうな氣持になるのであつた。慶子が上野へ行つたことに原因してゐる不機嫌であると見るより、敦子の考へようは無かつた。

老母は沸々部屋で屈女對手に安成のことを喋り、手を拭いて上つた敦子の耳にそれが應えた。彦太は彦太でむつつりと座敷で煙草を咥へて庭を見てゐた。庭に出てゐる留守番の竹次は一人きり自分の糀を磨き、敦子は晝の支度に竹次を呼んで、使に行つて貰ふのであつた。

晝になつて歸つた皆は茶の間ですぐ食事にかかり、慶子は一人で大聲に話し立てゝ、その騷ぎは一頻歇まなかつた。その騷がしい中で彦太の癇癖は露骨に亢ぶつてゐることが、敦子にはぢかに感じられた。彼女は皆の食事が濟むとそれを勝手に撤んで、彦太の膳をつくる前に老母に粥をすゝめるのであつた。固い飯が食べたいといふ母親は、却々粥ばかりでは

承知しなかつた。

「彦太を呼んでください、あれにさう言ふて見る。」

母親は彦太を呼ぶと、粥ばかり食べさせるので元氣が無いのだ。固い皆の食べる御飯を食べさせてくれ、と讒訴めかしく言ふのであつた。彦太は依然不機嫌な顏付で、邪險に立つたまゝでゐた。

「そんな用事なんですか。」

彦太は直ぐ敦子に、「お母さんは固い御飯が食べたいと言つてゐられるんだ。」さう執方つかずに言ふのだ。

「もう暫らく我慢をしていたゞかないと先生に惡うございますわ。」

「固いのが欲しいといふんだから上げたらいいぢやないか。」

「さういふことをしたら後が大變ぢやございませんか。」

彦太は敦子の顏から眼をそらし、庭でさわいでゐる安成と慶子を眼に入れると、寧ろ憎惡は母親に絡みついてゆくのだつた。「後がよくないことくらゐお母さんだつて知つてゐる筈だ。」敦子は普通の飯を母親にすゝめたが、母親は敦子を輕蔑し切つた顏付だつた。「彦太に言へば皆よくしてくれるんです。」さう雇女に言ひ、雇女は氣の毒げな鳥渡挨拶めいた眼付で、自分より若い敦子を劬はる氣持を示すのであつた。併し彦太は澁々寢つかれない晝寢からさめ、極端に不機嫌な雰圍氣をつくり上げながら言つた。

「固い御飯をあげたか？」

「ええ、御承知のやうでございましたから、お召しあがりになりましたの。」彦太は急に驚いた顏をして見せ、敦子はしまつたと思ふのだつた。併しそれは何にもならないことだつた。敦子は一人藻掻く自分自身を見守るより外に、彦太に答へる言葉を知らなかつた。彼女は善良だか馬鹿だか分らないといふ夫の言葉のなかに、何事も怺へてゐる自分の魂をも刺さ

ずにゐられない憤りを感じるのであつた。併しそれは決して彼の表面に現はれるものではなかつた。結局、敦子は彦太に謝るより外に仕方がなかつた。

「わたくし、うつかりしてゐて惡うございました。」

併しその事で母親は胃をコワすことはなかつたが、自然に粥を攝るやうになり、それが又自然に重湯を啜るやうになつたのが、秋口になつてから殆食欲すら無くなつてゐた。細かい事に氣のつく安成は敦子の味方だつたが、勿論母親の味方でもあつた。或日敦子は終日老母から口說かれ、氣持がへとへとになつた末、精神的にも立てないやうな狀態の中で、不圖安成にいふのであつた。

「お母さんさへ片づいて了へばいゝんですけれど。」

この言葉は決して毒を含まない敦子の實感に過ぎなかつた。

數日の後に老母は敦子を呼び付け、誰が死ンで遣るものかと猛々しく罵り、敦子はカツと逆上るのであつた。不思議に彦太までが此の言葉を知つてゐて、母と敦子の間の揉めるのを冷淡に笑つて言ふのであつた。「簡單に人間は死ネるものぢやないよ。」――敦子は殆それから數日は口を利くことも物憂かつた。チヤホヤする安成を自然に冷たく見据えてゐたが、卑屈になり下つてゐる安成はさういふことで、氣持を矯らせはしなかつた。

彦太は勿論安成を家に入れたことを後悔してゐたが、安成から出て行かない以上、こちらから出て行けといふことは言へなかつた。彦太は毎朝の出勤にも時間を加減して一緒に出て行くことを控えた。これらの家庭の沈澱しきつた中で生きてゐる感じを見せるものは、只一人慶子の姿だけだつた。極端に派手な容貌をしてゐる彼女は、何時も日の當つてゐるやうな或る匂を發散してゐた

二

翌年の夏に老母は死去した。敦子は悲哀の情は些しも感じなかつたが、表面にはそれの情愛を示すことを怠らなかつた。老母の肉體は肉體といふよりも寧ろ骨の珠數つなぎも同樣だつた。軋めく身體を棺の中で橫臥させる時には、敦子は無關心な程確かりと身體を引伸すために、骨をヘシ折るやうな凄じい氣持の經驗であつた。それよりも一層快よく感じたのは、奧の間のカラりと空いた疊の上に朝日のさし込む、臥床を拂つた後の淸潔な感じであつた。敦子は七年間自分に交渉して來た老母が自然に自分から隔つた感じが、老母自身の運命だとしか思はれず、輕蔑するには今は却つて物足りない氣持であつた。

その前後に安成は外國に行つたが、彥太はその頃は殆安成に冷淡以上に接してゐた。慶子まで安成と何故か一緖に食事をしようとしなかつた。此の不思議に人から嫌はれる安成は、最後に放逐されるも同樣に彥太の家から姿を沒した。慶子は二ノ腕の見える浴衣姿で彥太に幾らか甘える聲でいふのであつた。「あんな厭らしい人たらありません。」

彥太は安成の容貌から卑劣と同程度の劣情とを感じてゐたが、慶子にもそれに近いものが無いとは言へなかつた、安成との間に何が存在してゐたか、かういふ彥太の想像のなかにゐる慶子は、折々巴丹杏色をした頰にあぶらを見せる、强い肉感的な明るさを持つてゐた。自分の行爲にも結果にも拘泥しない、言はゞ冷淡を搗き交ぜた慶子と安成との間に、どういふ密接さがあつても其樣事に氣を揉む女ではないらしかつた。彥太が妙に息苦しい氣持になるのも其氣持以外の想像ではなかつた。送葬のゴタゴタした着換えの部屋が一緖だつたので、彥太は自制力を失ひ、輕く慶子の胸に觸つて見て驚いたことは、身を引かないで、ココンところお可笑しいでせうと胸をはだけて見せる、さういふ意識を意識する慶子だつた。彥太は自ら恥て手を引いたが前後に一度だけさういふ事のあつた彥太は、慶子から自然に輕蔑に近い氣持を感じ、そ

れを打挫ぐちからを失うてゐた。慶子の甘え方に何か別様なものの交錯を感じるものは、強ち彦太ばかりではなく、敦子が自然にそれを感じてゐた。

敦子は慶子と彦太が對照される家庭の靜かさを、この頃になり其靜かさ自身を恐怖するやうになつてゐた。今迄よりもぢかに慶子から働くものを感じることは敦子に餘りに瞭乎と分る事だつた。彦太は妻の眼付に注意するやうになり、その餘憤めいた氣持の焦點は今はぢかに敦子に行かずに、竹次に當ることが屢々だつた。その事で敦子は何も言へない位置であり、竹次を庇ふことをしなかつた。

國から結婚まで幾らかづつの仕送りのある慶子は、家の中の妙に壓迫される鬱陶しさから脱けて、殆そと出ばかりしけ、外出から歸つて昂奮してゐることは依然として歇まなかつた。別に手紙のやうなものは來ず、それに眼を行届かせる爲に氣持を向ける敦子には、何も映るものはなかつた。さういふ筈のない慶子の氣持に立ち入る敦子は、慶子の簞笥や行李、みだれ箱の中のノオトや古手紙の類まで搜つて見ては、激しい昂奮に喉の乾きを覺えるのであつた。それは決して老母の生前には經驗しないものだつた。

彦太は或午后の濁つた事務室の中で、訪ねて來た慶子を見て驚きと恐怖とを感じた。何も用事もないのに慶子が訪ねて來ることは、何か空恐しい氣持にずり落ちる感じだつた。ビルヂングの階下まで買物に來た序に寄つたといふだけで、彦太はその着飾つた姿の中に、不思議に同じい家族の者と思へない特異な「彼女」を感じ、それは漠然とはしてゐたが新鮮な恐怖でもあつた。

「わたくし、今の間にその仕事を覺へて置きたいと思つてゐますの。」

慶子は裁縫の教習所に通ふために、その近くの芝の方に下宿をしたいと言ふのであつた。彦太にもその豫感はあつたが、却つて其豫感は慶子から先を越され、敦子に相談をしたらいいだらうと言ふより外にいい考へは浮ばなかつた。彦太

は紅茶々碗を器用に持ち、さういふ放縦な考へに耽る慶子のよく肉づいた手くびに彦太は生理的な憎々しい一瞥を加へた。

「下宿に出るならばおれはこれから何も關はない。」

慶子が勤先に訪ねて來たことは、彦太は敦子に明さなかつた。却つて慶子は妙にしなのある眼付で「おかへりなさい」と何時ものやうに言ひ、帽子を受取らうとしたが、彦太は自分でそれを帽子掛にかけるのであつた。彦太は睨むやうな親密な故意とらしい眼付をする慶子を、何かイヤな氣持に感じた。それらの僅かな氣持の障りが敦子に影響してゐるらしいことも、彦太は自分の弱みから感じた。神經の鋭くなつてゐる敦子にもこれらの丈の合はない氣持の曇りが、靜かに彦太と慶子との間を模索して行くらしかつた。

三

敦子は彦太の病床から立つと、醫者と立合ふために廊下に出たが、醫者は最う一度手術をして見ると言ひ、腦に化膿が擴ることは絶對にないと安心をさせるのであつた。中耳炎の化膿を切開したが充分な結果は得られなかつた。もう一度切開したら或は良い結果を得るかも知れないといふのだつた。さういふ間にも彦太の苦しみうめく聲がドアの僅かの隙間から、のた打つ身悶えも想像させて聞えて來るのであつた。

「あのうめき聲を止める方法はございませんでせうか。」

「それはどうにもなりませんね。少時は止めても永くは持たせることができないのです。」

醫者は再度の手術をするかどうか、それは危險狀態に患者を置くから親戚筋の遠方の人は呼んで置くやう、その再度の化膿を切開しない以上、絶對に腦膜炎の症狀を免れる事ができないと言ふのであつた。敦子は自分だけが承諾すればいい

のであるが、あや子の氣持にも當つて見る順序があつた。敦子はドアを少しすかし見て、看護婦と並んでゐるあや子を低聲で呼ぶのであつた。敦子は醫者から再手術の話をして、あや子にその第一の同意を求めるのだ。再度の手術が完全に効果があれば或は取り止めることが出來るかも知れない、それすら院長自身で手術後の經過を待たない限り受合へないとのことだつた。

「お母さまさへ好いとお考へになつたら、わたくしもさうした方がよいと思ひます。」

「ではいいわね。」

「ええ。」

女學校の制服を著けてゐるあや子は泪ぐんで見せ、氣の弱りかけた敦子も同樣に潤ふた眼で醫者を見上げた。

「では此の子もいいと申しますので、どうぞ手術してくださいまし。」

醫者は廊下から去り、洗面所に烈しい水道から撥く水音が聞えた。敦子は二度目の手術がうまく行けば持ち直すかも知れないと、あや子を勵ますのだつた。母親似のあや子は默つて母親のうしろから病室に這入り、氷嚢の下に身をもがく父親を見出すのだつた。

彥太の意識はまだ失はれてゐなかつた。敦子よりも烈しい初老の衰へを見せた彼は、もう身もだえと唸ることより外に現世の仕事は殘されてゐなかつた。敦子は看護婦の手のとゞかない細々しい用を勤め、彥太の顏を覗き込んで、優しい語勢で再度の切開を承諾させようとするのだつた。彥太は此儘死んでもよいから切開を中止してくれと、哀願に近い聲でいふのだ。敦子は仕方なく表面その事を中止するやうに言ひ、彥太を宥め慊した。

夕方の魔睡劑の利いた靜かな時だつた。

「お前にもいろいろ苦勞をかけた、惡く思はんでくれ。」

彦太はさう敦子に言ひ、弱りかけた氣持で恥を感じずに謝まるのであつた。敦子はそんな事はお互ひよと言ひ、淋しく笑つて見せはしたものの、十七年の間かういふ弱り切つた彦太を見たことが始てだつた。敦子の肉體にまでひびく先夫への絕へ間のない嫉妬は、殆十七年の間打通して何かの隙間に滲み出、その神經をコキ下ろし捩ぢれるだけ捩ぢつたのだつた。

「あや子が、笑つてゐますよ、あなたがそんなお弱いことをお仰有いますと、――。」

あや子は笑つて窓の方に向いてゐた。彦太はあや子を見ようとする爲、捩ぢ向ける繃帶の頭を痛がつた。

「あや子、お父さまがこちらへお向きなさいつて。」

あや子は父親の方に向いて只笑つて見せたが、彦太は苦痛のために歪んだ眼を醜く瞬たいて、あや子に傍に寄るやうに言ふのであつた。

「お母さまと仲よくするんだよ。」

「えゝ、どうして。」

あや子は敦子を見かへつたが、敦子は橫から彦太の寢顏のなかに老母に類似した感じを瞭乎と感じた。併し曾て母親に持つた憎しみの情とは自ら異つたものであつた。それにも拘はらず敦子は何か激怒に似たものが頭の中に通り過ぎることを覺えた。

敦子は彦太の頭を少し右の方に靜かにずらさうとしたが、その時は局部魔睡の醒めかけた瞬間だつた。彦太は苦しげに身悶えをつづけ、その叫び聲は二階の廊下一杯の幅になるほど、大きな苦しい聲だつた。――あや子の妹の節子は學校がへりを病室の前に走來て、足を竦ませドアの前に立つてゐた。間もなくあや子が、それを見付たが、節子は何かさういふ彦太の悶えるありさまを見ることを恐れ、控えの二疊に固くなつて座つてゐた。

その翌日再手術をしたが彦太は昏睡からさめても、記憶は完全に喪はれてゐた。敦子をも見分けることができず、そのうめき聲にも最早昨日の力はなかつた。醫者の檢診が外れ腦膜炎の症狀に移り、翌日は輕い肺炎の徵候さへ顯はれ既に全くの望みは無かつた。敦子はどちらにしても全快の不可能なことは覺悟はしてゐたが、恢復しても白痴同樣では困ると思ふのだ。その翌日からうめき聲が甚しく細れ、溜息のやうに微かな狀態に變つて行つた。時日の問題となつた山口彦太の生命も、それから一日とは持たなかつた。敦子は夫の死顏を見詰めてゐても悲哀の情は感じられずに、却つてあや子や節子をどういふふうに育てゝ行くかが、功利的に頭にひらめくだけだつた。

敦子は湯灌の後に不圖彼女が今迄に三度人間の死體を手にかけたことを思ひ出した。先夫の死體、老母と彦太の死體、そして彼女にはこれらの死體が單に死體である以外に、何等の感銘をも殘すものでないことを知るのであつた。先夫の死體の湯灌の時に、何か尊い、人間とは別な淸い感じを持つたものの、老母の時の痩せ枯れた骨の軋めいたことを思ふと、やはり彼の時に激しい憎しみが交つてないとは言へなかつた。或は先夫の時に死に對ふ恐怖と尊敬との感情が、既に亡びて了つてゐるのかも知れなかつた。

「慶子さんも淸めて上げて頂戴。」

敦子は襷を手に取る、母親らしくなつた慶子にさういふのであつた。芝の或雜貨店の主婦になつてゐる慶子は、六ツになる女の子を寢かしつけ、彦太の死體の前に膝頭で詰め寄るのであつた。併し慶子は何か遠慮して直ぐに手を出さなかつた。

「コワいの。」

敦子は自分で彦太のからだを拭き淸めたが、寧ろいら立つた氣持が交らないでもなかつた。慶子もおづおづと型ばかりの湯灌を濟した。

「彦太も慶子さんにかうして濟めて戴くことは因縁があるんですね。」

敦子は戯談にさう云ひ、言つた後にその自分の言葉が胸に痞へて來てならなかつた。「厭なおばさんね。」慶子はあや子にさう言つて見たが、あや子は何故か母親の表情の中に筋ばかり固くなつてゐる、逞しい昂奮を見出すのであつた。それはあや子の經驗によると餘程母親の不機嫌以上に憂鬱になる時に、遂に刺し貫いで來る表情であつた。同時に慶子の顔には何かひしやげ萎れた氣持をも、あや子は若くて鋭い神經に比較しながら感じるのだつた。

通夜の人々が去つてから、あや子が一ト睡りした後に、不圖母親と慶子とが默つて座り合うてゐるのを見出し、あや子は直覺的に凄じい母親の形相を見るのだつた。母親は依然として何も言はず、慶子は首を垂れ、凡ゆるものが極端な緊張と硬ばりを廣げて見せてゐた。御隱殿を過る汽車の音も聞えない、穩かで靜かな夜明だつた。あや子の感覺は寧ろ朧氣ではあつたが、或る事に就てぎつくりと頭を締めつけられ、次第に驚き冴え返る氣持は、母親の顔に瞬きもせず見詰められてゐた。

「わたくし澤山お禮を言ひますよ。」

さういふ母親は急に立ち上ると、土器の燈心を掻き立てて、靜かではあつたが不自然に鉦を打ち叩くのだつた。その音響はあや子には全然的に打響いて來る、物凄い忘れがたい音響であつた。鉦を叩いた後の母親の顔は一層緊張し、肩先で荒々しい、自制力を失つた片息をついてゐた。かういふ母親を見ることは、あや子には始だつた。始だといふよりも或は別人の母親であつたかも知れなかつた。彼らはなほ永い間、默つて對ひあひ、時々母親は寧ろ脅迫的な迄に鋭い溜息をつくのだ。あや子はその溜息が突然に聞えて來るときに、頭に縛りつけられたハリガネのやうなものが、一層手強く瘤を締めつけて來ることを經驗した。

慶子は蒼ざめた中に有繋に弱りかけた氣持を凛はしてゐたが、さういふ中にもある美しさは、寧ろ以前とは違つた母親

らしい落着を帶びてゐた。彼女はハッキリと頭を上げ、敦子を冷たい眼差しで見上げながら言つた。「では彼の當時に何故に注意してくださらなかつたんですか。今更さういふことをお言ひになつたつて仕方がないぢやありませんか。」
「わたしはそれは生涯言ふまいと考へてゐたんですよ、今夜は何故かそれを言ひたかつたんです。」
敦子は漸と口をきいた慶子を見て、幾らか心が靜まるやうな氣がした。それらの古い痛手を掻き捜るだけ一層朦朧とした。標的の無い齒痒い氣持だつた。その齒痒さが亢ぶる時は永い間默つて耐へてゐたゞけ、何か狂氣じみたものの迫るやうになり、漸次にカッとして來るのであつた。慶子は薄笑ひを漏しながら言つた。
「あなたのお考へになるやうなことは、まるで無かつたも同様なことですわ。あなたはそればかり考へてゐらつしやるんだけれど。——」
慶子は自分でもさう信じ、事實を否定するだけの彼女は彼女の立場を持ち、決して負目を取らない揺がない母親の氣持に立つてゐた。言はゞその冷たい薄笑ひの中に最早彼のころのお俠ンな慶子の、肉感的な垢は洗ひ落されてゐた。敦子は自然に又慶子の氣持をも次第に感じなければならなかつた。——さういふ氣持にならせるものは、次の間にねむる慶子の長女の邪氣のない姿ばかりではなかつた。敦子は暫時して突然に笑つて見せた。
「佛の前でわたくしは一度あなたにそれが言ひたかつたんですよ、それきりよ。」
慶子も何故かその機會に自分で今迄の硬ばつたものを、取り急いで毀して置きたかつた。それ故彼女も笑つて了ふのだつた。
「でもわたくし何をお言ひになるのかと、吃驚りしましたわ。」
夜が白み鮮かしい朝日の光が、障子の中の棺や造花の悲哀じみた裝飾があるにも拘はらず、庭樹の頭に既に匂ひながら射しかけてゐた。敦子は障子を開け、疲れてゐる慶子に一ト睡りしたらどうかと、感情的になり優しく言ふのだつた。

「こんないい天氣なんですもの。」

綾子は起きて出た長女の髮を結うて遣り、あや子は昨夜と變つた機嫌のよい母親が、同じく節子の背後に廻つて髮を解いてゐるのを、もう朝日の射しかけた椽側の板の上に見出したのであつた。

四

敦子はあや子と節子とを學校に送り出すと、漸と二階では長澤が起きかけ洗面に降りて來るのだつた。長澤の降りかける時は日ざしは梯子段の三段目あたりに射し込み、敦子は定つて何かいふ長澤を機嫌よく迎え、彼だけの食卓を整へた。

「皆出かけたんですか。」

「時計をごらんなさいな。幾時ですか。」

長澤は頭を掻いて周章てゝ、食事をすると、學生らしく快活に出かけて行つた。敦子は年齢よりも若粧りをし、小肥りの圓い肉置きは品のある快活に近い顔立に變つてゐた。――長澤が出かけた後、二階の四疊半で物品を抛げつける音響がし、敦子は耳を立てゝ顔を掻き曇らすのだつた。その物音は或は何かを蹴りつける音響にも時々變つてゐた。敦子は梯子段の下まで行き、宥める中に叱責を含める聲音で言つた。

「竹夫、靜かにしてゐて頂戴。」

物音は直ぐその聲と同時に歇んだが、反對に呶鳴るやうな聲が續けさまにしてゐた。敦子は椽側に出て鳥籠の餌に青味を遣り、穩かに朝の新聞をよむのであつた。彼女が下宿人を晌してから長澤は四人目だつた。斷つた三人の學生達は何かの意味であや子に氣持を見せようとし、それに氣のつかない敦子ではなかつた。彼女は鋭い、外面には判り兼ねる細かい心づかひで、下宿人を警戒することは、殆直覺的に的中することが多かつた。彼女はさういふ學生には優しい手厳しさを

示し、最後に決斷的に出て行つて貰ふのが常であつた。あや子にさへ解り兼ねる母の氣持であつたが、敦子は決して自身で何事も見誤りはないと信じてゐた。事實、敦子の永い間に先夫や彥太に就て抉られた氣持は、何時の間にか彼女の鍼や氣持の重みとなり、自然に鋭利な作用となつて働きかけてゐた。

出て行つた學生の内の一人は何かの意味で能く遊びに來てゐたが、敦子は冷然とその男にその日の新聞を渡したきり、自分は勝手で働きながら對手にならうとしなかつた。その氣持には鳥渡した小聰しい氣がするだけで、冷笑より外のものを敦子は感じなかつた。併し長澤だけには何も不純な氣持の入り雜つたものを感じなかつた。或は長澤には未ださういふ氣持が起きかけない、順境の育ちであるためかも知れなかつた。敦子は自分の中に未だ彥太の記憶の烈しさを失はない、確かさ以上の自信を寧ろ折々快く感じてゐた。嫉妬深い彥太の毎日のやうな煩い口小言も、今になると骨や身や皮膚になり、大抵の場合他人の氣持を讀む位のことは、靜かに平氣で讀み謊せるものを持つてゐた。さういふ時には曾ての彥太の嫉妬すらも一笑に附したい位だつた。敦子はさういふ意味で彥太を何か冷酷に輕蔑し、野卑な感じさへ此頃になり持つのだつた。

「何故あゝいふ奴を家に置いておくんです。」

二階から降りて來た竹次は、――竹次は逞しい青年の肉體を持ち、顔には曇天のやうな重い、或昏惑された鬱陶しいものを表情してゐた。一見、それはどういふ種類の人間かといふことが、その憂欝な鈍感さをもつてゐる肢體の上にも感じられてゐた。

「それはお前にだつて分つてゐることぢやないか、家の事情から言つてもさうする外に仕方がないんです。」

敦子は成るべく竹次の神經にふれまいと努力して、優しい語勢で言ふのであつたが、衝立つた竹次は直ぐには何も言はず、ジロジロと母親の顔を見つめ、今言つた自分の言葉を頭の中でもう一度模索するやうな狀態にゐて、そのまゝ立ち竦

けてゐるのであつた。敦子はその竹次の粗い皮膚と脊の浮いて居る顙の感じが、忘れてゐる十何年か前の先夫の容貌を彷かに現はして來ることを感じた。是迄決して竹次からはさういふ先夫の俤を感じることが稀だつたのに、病を得てゐる此頃の竹次に屢々その記憶を動かされて來ることは、寧ろ不思議な位宿命的なものだつた。その爲か敦子は稀に心から竹次に憎しみを感じる機會が、あや子や節子に比較して多かつた。

敦子は先夫の背中に彈丸の痕を殘してゐるばかりではなく、頭腦の中にも其あとを止めてゐることを記憶してゐた。それが竹次の症狀に影響してゐることは、强ち醫者の注意がなくとも解ることだつた。不思議に竹次を見る氣持の中には何時もそれらの二つの彈丸の痕跡が、軍人だつた豪壯な先夫の肉體を髣髴させるのであつた。生理的にも旺盛さをもつ先夫が何か竹次の上に覆ひかかつてゐるやうに、敦子は些しも竹次から眼を放すことができなかつた。竹次自身は下宿する學生を憎むことは、例外な程烈しい憎しみだつた。或時長澤が不圖座布團を持ちあげて見て、その下の疊を鋭利なナイフで十文字に截り斷つてあることを發見した。その後長澤は竹次を怖がり、なるべく話し會ふことを避けるやうにしてゐたが、對ひ合うては際立つたことをする竹次ではなかつた。只、さういふ時の竹次は自分の部屋の中に衝立つた儘、氣味惡く笑つてゐるに過ぎなかつた。

敦子は何時もさういふ竹次を見ることが、心が眞白になる程脅迫を感じた。

「いい加減になさい。さういふ變な眞似をするのは止してください。」

竹次は依然笑つてゐるだけで、軀幹を故意と軟かく、ぐな〳〵に搖ぶつて見せるのであつた。敦子はそんな竹次を見ると、確かりと押へ付けて置いて打のめしたい衝動を感じ、頭がふらふらする程亢ぶるのだつた。竹次は母親の苛つくのを見ると、一層異體の判らない笑ひをつゞけた。

一度さういふ狀態に他人が注意し出すと、際限もなく同じい姿勢と下司な笑ひとを繰り返すことが、竹次には快感を增

すらしい容子だつた。それに若き入れられないやうにしてゐても、敦子は次第に怺へてゐられずに對手になるのであつた。しまひに敦子は本氣になり哀願するより外に方法はなかつた。

「お願みだからもう止して頂戴。お母さんは命が縮まるんです。」

執拗な竹次は一層笑ひをつゞけ手を振つたりすることを止めなかつた。敦子は氣が遠くなる程逆上せ、飛び蒐るやうな激しい氣勢を示した。あや子は「お母さま」と呼び母親に注意する位だつたが、敦子は全く氣が變になる程の昂奮であつた。竹次の顏が憎惡以外のものに見えない程、敦子はその顏を打ち挫きたい欲望を感じるのであつた。

あや子は兄を恐れ嫌うてゐたが、竹次はあや子には粗暴なことは一さい控えてゐるらしいところもあつた。

「お兄さま、そんなことをなさるとお母さまがからだを惡くなさるぢやないの、止してよ。」

敦子は此前昂奮の餘り一時貧血して倒れたが、後二三日は頭に異常な疲勞を感じた。その時にもチラと感じたことは竹次と同樣な症狀を畏怖する氣持であつた。醫者のいふ血液的な混濁が自分の體内にも無いとは言はれない、さういふ脅迫されてゐる氣持の不安さは、血液の中に既に廻つてゐるに違ひない恐しさであつた。敦子は頭の痺れる迄それらに神經をつかひ果して夕方起き上らうとして再度床の上に昏倒したのだつた。あや子はさういふ母親を知つてゐるだけ、竹次を宥めることが必要に感じられ、二階へ上げるやうに優しく仕向けるのであつた。

敦子は時々竹次が假病をつかつてゐるのではないかと思ふても見たが、さういふ筈はなかつた。垣根の外の水溜りに映る、白い雲の去來するのを見ても、犬が走つてゆくのと見違へる竹次だつた。用事もないのに長澤の部屋に這入り込んで机の曳出をしらべる竹次は、長澤とあや子の間に嫉妬を持つてゐることも實際であつた。敦子はあや子や節子が竹次を厭がり、厭がられてゐることを知つてゐる竹次は、自然長澤を憎んでゐた。

「竹次はお前の言ふことを聞き分けるのは不思議なやうね。」

「わたしだつて恐いわ。恐いけれど仕方がないんですもの。」

敦子はかういふあや子に持つ竹次の從順もハツキリと解り、解るだけに何かコダワリを感じた。その半面には早く竹次をあや子から引離すことが肝心なことに思はれ、竹次なぞにあや子に指も觸れさせまいといふ凄じい覺悟に似たものが起るのも、鳥渡今までに想像もして見ないことだつた。實際、あや子は穩かな何處か冷たい娘らしい目立たぬ美しさを、此頃になり少しづつ、殖してゆくやうに思はれた。

敦子は竹次を神戸にゐる叔父に預ける手紙を書き、敦子自身で竹次を送つて行つてもよいと書き添えるのであつたが、あや子もそれには贊成であつた。數日の後に叔父からの返事には病室も空いて居り預るとのことだつた。神戸の叔父は神經科の病院を計營してゐたので、敦子は吻として竹次を連れて神戸に發つて行つた。

その朝竹次は比較的素直に列車に乘り込んだものの、列車の中を烈しく無意味に往き來して、敦子はどうしていいか手のつけようがなかつた。出來るだけ優しく逆らはぬやうに注意したが、竹次は窓際に立つた儘笑ひはじめ、女子師範の徽章をつけた女學生が一人怺へかねて笑うたが、竹次はその笑顏を見遁さう筈がなかつた。

「何故君はお可笑しいのです。」

女學生は敦子に救ひを求め、敦子は周章てて竹次を自分の席に連れ戻るのであつたが、淺猿しい竹次の顏を見るとムラムラして、憐愍とも激怒ともつかぬ、前後を忘れた氣持で力一杯に竹次の太股を抓り上げるのであつた。竹次は小さい叫び聲を立てたが、不思議にその儘暴れることがなく、呆乎として窓外を眺めてゐた。敦子は彼と同じい方向を見詰めたまま、靜か過ぎる氣持になり初めて泣けるのであつた。その靜かな中に彥太の生きてゐる間、絶えず竹次は負ケ目な位置にゐて、彥太の眼の色を讀みながらゐた氣持も、急に溫和しく畏(かしこま)つてゐる竹次を見ると、何か可憐らしく思ひ出されるのであつた。

彦太は竹次を愛してゐなかつた。それぱかりではない、竹次の容貌や物腰を隙間なく口喧しく言ひ、或時は露骨に先父の習癖が竹次に現れてゐるといふこともあつた。敦子はそれでも默つて怺へてゐた。お厭でせうがあの子だけは助けると思うて眼をかけてくれるやうに賴んだが、彦太はさういふ時敦子の膝の上に叩きつける唯一つの言葉があつた。

「お前の子供はおれが知るものか。」

敦子はいまもその彦太の言葉を思ひ出すと、十何年前のことであらうと其時に溯つて彦太にその事をなじりたい氣持を焦らすのであつた。一生の內に唯の一度も反抗をしなかつた從順な彼女は、かういふ發作のある時に彦太の顏に手をかけ、その取澄した能く冷笑ひの上る皮膚を生爪で引搔きたい、狂氣じみた欲望を感じるのだつた。その欲望の中にゐる彼女はもはや生前の彦太が見てゐたやうな、最早控え目な生やさしい敦子ではなかつた。

敦子は次第に竹次を憫れむやうな氣持になり、先刻のところは痛みはせぬかと低い聲で竹次に尋ねて見たが、竹次は急に腹立たしげに太股を捲つて見せるのであつた。指の頭ほど瘀血した痕は紫を交ぜた色に腫れ上り、竹次は母の顏に弛みを見ると遽かに物凄い眼を怒らすのだつたが、敦子は再び蒼ざめた鋭い表情をして見せ、その太股のあたりに指先を擬して見せるのであつた。寧ろ發作的な母親は却つて竹次よりも烈しい、切迫した物凄い形相を竹次の眼の前に過らせるのであつた。

敦子はさういふ自身を經驗するごとに、孰方の氣持が狂ふてゐるのか解らなかつた。或は敦子自身すら何時の間にか氣其に罅が入つてゐるのかも知れないと、發作的に顏色を變えるのであつた。

窓明りに歴々と見る竹次の顏が次第に氣嵩になり、敦子は眼を閉ぢて見まいとするのであつたが、竹次もまた睡てゐる風を裝うてゐるらしく、時々薄眼を開けて敦子を窺うてゐる容子だつた。さういふ動勢を搜り合ふ氣持はコヂれて、妙に固苦しい消極的な氣に陷入らせ、幾度か敦子は竹次に何か叱責的な言葉を浴びせたい衝動を感じた。

「僕は神戸へ行つたつて歸らうと思へば直ぐにもかへれるんですよ。」
「だからどうだと言ふの。行くことが厭になつたんですか。」
「さうぢやないさ。」
突然眼を開けた竹次は、敦子に急にさういふ質問をしたので、彼女も眼を開けて答へたが其はいつの間にか、睡入り込んでゐたらしく思はれた。隣席にゐる人々への氣を兼ね、敦子は恥を感じて赭くなつた。竹次は母親の狼敗を眼に入れると明かに輕蔑的な眼差しになり、故意に眼を閉ぢて見たり又睡てゐる風をして見せ、敦子の神經を搔き亂すのであつた。敦子はかういふ宿命的な竹次が自分にどういふ罪科があつて憑き纏ふのかと、激しい憤怒を感じ、その憤怒の行き場のないことを知ると、ぐつたりと窓際に頭を靠らせたまゝ、永い間口も利かなかつた。

五

正月七日の晩だつた。敦子はあや子や節子と一緒に芝の慶子の家に招かれ、夕食を終えたばかりのところであつた。慶子は昔の慶子の俤はないばかりか、純粹な母親以外の女には見えなかつた。敦子はかういふ慶子と彦太の通夜の時に諍うたことを思ひ出し、今はそんな氣持が全然無いことを發見した。
「わたし彦太さんをお勤先へたづねて行つたことがあるわ、どんな氣持で行つたのか自分でもよく分らないんですよ。」
「へえ、そんなことがあつたの。」
「その癖何んにも話すことがなくて困つたわ。若い時分は能くそんな根もないことを仕て見たくなるものね。」
「あの時分聞いてゐたら唯ぢや濟されないことね。」
「え、そりやもうね。」

其處にあや子が來合せ、二人はその話を中絶して了つたが、敦子はふしぎに些しもその話に昂奮を感じなかつた。只、さういふ事もあつたといふことだけで、その事實は氣持を騷いで來るやうなことは最早無かつた。二人は期せずして笑ひ合ふのであつた。

「あや子さんはいいわね。何んでもこれからなんですから。」

「それはどんな意味ですか叔母さん。」

あや子はさういふと少時して後に顏をあかめ、敦子はそれに習慣的に注意した。彼等は花札を撒き、その花札を手に各各取り上げ、小さい團欒に入らうとする時だつた。誰かが表の門から取亂して這入つて來ると、「山口の叔母さんに烏渡。」と息せき乍ら言ふのだ。その聲は疑ひもなく長澤の聲音だつた。敦子は立ち上つて玄關に走り出た。

長澤の顏を見た敦子は直ぐに不吉を豫感したが、長澤はわざと吃驚りしないやうに注意するのであつた。敦子は震えるあや子を背後にゐることを感じ、節子は譯もなく聲を上げて泣き出すのだつた。慶子は敦子の肩先に確かりと力を容れて摑み、敦子はがたつく膝頭を踏み締め、長澤の蒼ざめ切つた驚愕の表情に見入るのであつた。

「お叔母さん確かりしなければいけないわ。」

慶子はさう敦子を勵ました。敦子も何かそれに類似した出來事だと思ふたが、まさか自分の上にかういふ不慮の災厄が襲ふてゐることは知らなかつた。

「大丈夫よ。」

彼女は長澤と一緒に出掛ける時にも、あや子に此處にゐるやうに言ひ附けるのであつた。敦子は櫻木町で車を降り路次をまがると、物の焦げる臭氣はあたりの家並を掠め、處々に夥しい撒水が暗い軒燈のかげを沈めてゐた、人込みはもう散りはじめた後だつた。敦子はその妙にさびしい光景の中にもう絶望的なことは分つてゐた。四五人群れてゐる中に或子供

の聲で敦子の家の名前が呼ばれるのに氣附いた。長澤の言葉も信じられないではなかつたが、或は半分だけ燒け殘つてゐるかも知らない氣がしたからだつた。

「だめね。」

敦子は低いだるい聲でさう言ひ、拔小路をまがると、そこらは一面に潦になつてゐて、家の前までゆくと風の向きで急に焦げたものの臭ひが烈しく鼻を刺戟した。家は二階の柱を殘した儘完全に燒け落ち、暗い中に未だ水の滴たる音が雨の後のやうに肌寒かつた。敦子は悄然とその燒跡に這入つて見たが、炬燵の爐石が殘つてゐるばかりで何も殘つてゐなかつた。敦子の驚きにまじるものは火の要心に就て能く警めた、彦太の聲の記憶だつた。その聲が始めて彼女の耳を貫ぬいて聞えるのであつた。敦子はその聲を耳にした儘、燒け黝ずんだ柱のかげにある、火の屑の燻りを見上げるのであつた。

長澤が外から歸つて來た時は、もう火の手は屋根を拔いてゐて、殆ど茫然と見てゐるうちに瞬く間に家は燒け上つて了つたのだ。敦子は安火に布團をかけて置いたことを思ひ出し、其儘にして置いて出向いたのが過失の原因だつたことに氣がついた。勿論文鳥を入れてあつた鳥籠などは問題ではなかつた。長澤と二人で近隣の家々に謝るために廻るのだつたが、どこの家の人も冷淡な顏はしなかつたのが意外だつた。敦子は感傷的になり人々の憐愍の間に立ち竦み、自分も到頭ここまで來たのかと思ふた。

荷物は半分以上裏の空地に出されてあつたが、敦子はそれに手をつける氣も起らなかつた。朝霜は一層慘めな黑焦の四本柱の上に置かれてゐたが、彦太時代のものは悉く燒け盡されてゐた。敦子は鳥籠を燒灰の中に搜してゐる節子に、可憐らしい氣も起らないではなかつたが、輕く叱るやうな氣にもなつてゐた。

「そんな鳥籠なぞ搜してゐる場合ぢやない。」

敦子は焦げた荷物を一瞥したゞけで居竦むやうになり、氣持は荒む一方だつた。長澤と手分けをして家を捜し、當分は慶子の家に寢泊りすることにした。敦子は何か運命的なものを感じ、その運命的なものの正體が何者だか分らなかつた。半ば燒けた荷物を始末しながら疲れ切つた敦子は、殆ど一夜に白髮を帶びる程、死のやうな草臥れを身心に感じたのであつた。

「わたくし一ト晩ですつかり年を老つてしまつた。」

彼女は或朝鏡台に向うて髮をたばね、そばにゐる慶子にさう言つて見たが、明かに慶子の眼にも敦子の衰へと弱り方が著しく映じた。この敦子が自分に逞しい炎を上げて取り憑いて來た女だとは、どうしても考へられなかつた。彦太に默つて喰ひ入る眼の美しい敦子とは、人が違うてゐるとしか慶子には思はれなかつた。純白な碁石のやうにつやのある彼の時分の敦子の肌膚は、かうして鏡台に向うてゐる襟頸にも最早名殘をとどめてゐなかつた。慶子は敦子に同情に似たものを朧氣に感じ、敦子のうしろに廻り髮癖と落毛を梳くのだつた。さういふ慶子の親密さは敦子には泌々と胸に應えて來るものがあつた。

「もうわたくし何もする氣が無くなつたやうよ。」

「でもまだあや子さんがゐらつしやるし、節ちやんも小さいから、まだすることが澤山殘つてゐるぢあないんですか。」

「もう澤山――」

敦子は戰ひ疲れたやうな氣がしたが、まだ自分の仕事の殘つてゐることも確かだつた。あや子に初潮を見る程あや子は女になつてゐた。その驚きは極めて小さいものであつたが、敦子はその感覺から自分のからだにも未だ不浄物のあることが、何かの惡戯のやうに思はれ、さういふ日は只汚らはしい氣持ばかりした。敦子はあや子の中に自分自身を見ることは厭だつたが、それは敦子にどうなるものではなかつた。

佐久間町の裏通りに適當な家を見付けた敦子は、一先づ其處に落着き、長澤も一緒に引越すのであつた。火災の件で長澤は保險の金や警察への始末書、家主の掛引を一人で引受けてゐた。敦子は長澤を信じ長澤は下宿人らしくない待遇の中にゐた。敦子は何故長澤が自分の家のために盡してゐるかといふことを、あや子の肉體の上に感じてゐた。その感じは同時に不安なものだつたが、努めて敦子はその事に頭をつかふことを拒むやうな氣持であつた。

併し敦子はあや子が二階にゐる間は落着かなかつた。じり〳〵と氣持は苛つき、まだ衰へ切らない肉體的な感覺は樣々な記憶を呼びさまして來るのだつた。敦子は極端に不機嫌になり、誰を信じていいか解らなかつた。自分の氣持の行き着くところが無かつた。

「あや子」

敦子は我知らず銳い聲でさうあや子を呼び、呼んだ後は一層昂奮するのであつた。あや子が降りて來ても、此頃妙にあや子に對する氣持の鈍さを感じ、物言ふことが鼓しい氣がするのも不思議だつた。反對にあや子の方は敦子に正面から切り出すものを持つてゐた。敦子の心はあや子に遠慮めいたものを感じた。

「何だか氣が滅入つてね。お前にでも傍にゐて貰はうと思つて呼んだの。」

あや子は母親の頭に考へてゐることを直覺し、輕い動揺を感じたが、白ばくれた氣持に變るのであつた。

「何時だつて傍にゐて上げますわ。お二階には別に用事が無いんですから。」

敦子はそのお二階を平氣でいふ、あや子の高びしやさを頭にこたへるやうな氣がして、自分で打込めない氣の弱さを感じた。

併し一時間も經たない內にあや子はもう二階に行き、敦子は苛立つたが今度は呼ぶ元氣が起らなかつた。

敦子は長澤と同じい食卓で食事をすることが、次第に極端な神經的な嫌惡を伴ふた。あや子と節子の向側に長澤が座り、何か愉しげに話しながら食事をする光景が、食事時分になると敦子に應えた。かういふ人達の爲に忙しい夕餉支度を寒い勝手ですることが、心から厭はれ寧ろ反感さへ催した。敦子はそれゆえ自然と心をこめた料理をする氣にならず、有合せの單に煮焚する以外の複雜な味ひのある物は料理しなかつた。彼女の料理は彼女の父である茶人系の血統的な切味だつたが、敦子には自分の好みを日常の生活に最早丹念する氣は起らなかつた。

「お母さまは此頃無性になつたのね。まるで拙くて手がつけられないわ。」

あや子が顏をしがめ、節子までが露骨に母に攻勢を取るのだ。敦子は冷淡に娘達を見て故意に眞摯な顏付をして見せた。

「あなた方の御馳走にお母さまは一日勝手にゐられませんからね。おいしいものがほしかつたら自分でおつくり！」

「でもお母さまは自分でいつもおつくりになつて、わたくし達に手をつけさせないぢやないの。」

「これから勝手に拵へたらいいわ。」

敦子は默つて箸を動かしてゐる長澤に、妙に靈的な感じで烈しい厭惡を感じた。あや子はあや子で不思議に長澤が傍にゐると、定つて敦子に衝きかかつて來た。長澤のゐない時のあや子は從順だつたが、彼がゐると人が變つたやうに粗暴になるのであつた。

「それにお母さまはもう御料理なんて飽き飽きしてしまつたのさ。」

あや子は不機嫌に立ちあがり、長澤は何時ものやうに話もせずに二階へ上つて行つた。敦子は體軀の大きい長澤を憎氣に見送り、敦子は一人で勝手で汚れ物を洗ふのであつたが、まだ二月の薄氷の殘る流し元で敦子は暫く、何か腹に痛みを

感じその儘靜かに手をやすめてゐた。日は暮れきらなかつたが外はもう暗くなり、梯子段を上るあや子の足音が聞え、敦子は自分にもなくカッとして立ち上らうとした程だつた。

敦子は自分だけ皆の食後に、一人で食卓に向ふやうになつたが、味氣ない薄命な氣持だつた。あや子は長澤と何時も食卓にならんでゐた。併しそれは長澤にもあや子にも苦しい事だつた。敦子はさういふ彼らの苦しさうな容子を見出すことは、頭の明晰になるほど快い氣持であつた。長澤は食事に故意(わざ)と遅れて外から歸るやうになり、敦子はその隙間に何か恐しいものを待つやうに、手早く娘達と食事を濟すのであつた。あや子には母の氣持が解る程、意地惡い氣持を搗き交ぜることが多かつた。

「お母さまはこのごろどうかなすつてゐらつしやるのね。」

「さう見えて……」

「ええ、お可笑しい位だわ。長澤さんがゐらつしやらないと一緒になさるし、さうでないと……」

あや子は急に口を噤んで母親の顔色の變るのに氣がついて、言葉がそれ以上出ない壓迫を感じた。

「わたしはあの人が嫌ひなんです。」

かういふ敦子は依然たる凄じさを見せる、曾てあや子の小さい時分に見た覺えのある敦子だつた。父の通夜に慶子と諍ふた母親と何の變りはなかつた。従つてさういふ母親を見ることは、あや子には到底叶はない苦手な母親であつた。

「お母さまは此處までお前だちと來たが、お前達が好きなことをする前に最う少しお母さまのこと位考へてくれてもいいでせう。」

あや子は默つてそれが何を皮肉つてゐるかを知り、漸つと顔をあからめた。併し敦子は露骨に長澤の名前は出さなかつた。事實、長澤は火災以後種々な意味で敦子一家の爲に勞力を惜まなかつた。

「あの人に行つてくださいなんて言ひはしないけれど、唯わたくしにあの人と一しよに食事をしたくはないの。誰も他人を入れないでお前たちと樂しくいただきたいんです。」

「そりやあわたくしだつて左う思ひますわ。」

「それが近頃そんな譯にゆかないぢやないか、分つて？」

「ええ。」

敦子は比較的從順なあや子を見ると、語勢に衰へを見せながら言つた。「いまお前と仲たがひするやうなことがあつたら、それこそ何も彼もお終ひよ、弱いやうなことを言ふやうだけれど、お母さまはもうすつかり草臥てしまつてヘトヘトよ。」

あや子は泪ぐみ、戰へるだけ戰つた母親を見て、もう何も言ふことがなかつた。あや子は自分の惡かつた事を言ひ、母親の顏に疲勞以上のものを見て劬るやうな氣持になつた。

あや子は母親に氣を兼ね、長澤と話し込むことは稀になつた。長澤も滅多に二階から降りて來ることがなかつた。併しあや子は默つて食事をする外に、特に敦子に親しむことも少なくなり、それが、敦子に一層手强く影響した。敦子は冷かに生欠伸をするあや子を見ることが苦痛になつた。

敦子は長澤が二階にゐることだけでも、その物音を聞いても動物的な感じがしてならなかつた。敦子は長澤が厠へ降りて來る姿を憎々しく見送り、これ以上猾い人間が生存してゐないやうにも思はれ出した。それは長澤が當然出て行かなければならぬ立場にゐて、一向さういふ容子を見せなかつたからだ。それにあや子との間に一層以前よりか微妙な氣持が停滯してゐることも、敦子の鋭い洞察の中に映つた。或夜の寢苦しがるあや子を見ても無關心でゐられないものを感じ、自分も同樣に寢苦しい雰圍氣に引き摺り込まれるのだつた。その中で踠く敦子は彼女自身でさへも、自分の變り果てた狀態

を、自分ですら辯解できない氣持だつた。

敦子は或烈しい暴風雨の晩、彼女自身はその暴風雨とは反對な沈んだ靜かさで、何かギユギユ頭を締めつけられる、發作的な氣持を感じ出した。彼女のさういふ頭を締めつける苦痛は今更初つたものでない、その感じの來る時は敦子は何時も猛烈な發作のある瞬時だつた。あや子はそれを豫感し、隣室にゐて母親の傍へ行かうとしなかつた。外の暴風は小歇みなく木々や屋上に荒れ、敦子の不安も又少しも休む間がなかつた。彼女は彼女自身にあるかも知れぬ「恐しい病氣」の事を考へ、その考への中に腕き悶えるのであつた。

あや子は母親が間もなく梯子段を上つてゆく、その足音と梯子段の軋むのに耳を振ぢ向けられてゐた。同時にあや子は何の爲に今頃二階へあがる母親だかが心に蟠り、恐怖を呼び出して來るのだつた。併し二階では別に話聲もせず、長澤の聲は聞えなかつた。

長澤は電燈をあびながら立つ、敦子を見ると、何故か身内に竦みを感じ、背後にある障子を靜かに閉める手つきにも、曾てない異常さを見出した。その異常さの中に敦子の姿は氣味惡い超人間的な感覺を強制して來るのだつた。長澤はどうぞと言つて座布團をすゝめたが、敦子の顏は少し近づいた時に氷のやうな透明さを持つてゐた。

「ご勉强ですか。」

「いゝえ。」

敦子は長澤の聲に慄えのあるのを知り、反對に彼女は平素よりも寧ろ確かりした聲の中にゐた。

「あなたに御相談があつて參つたのでございます。實は家にもいろいろ都合がありまして一時餘處にお宿を定めて戴からと思うて參つた譯でございます。」

長澤は直ぐに越すことを誓ふた。彼には此瞬間の敦子ほど全神經を脅かすものを見たことがなかつた。

「二三日中でいいでせうか。」

「それは越してさへ頂ければ關ひません。」

敦子は梯子段を下りながら、その中途にある明り窓の外に立つ棕櫚の木を不圖眼に入れ、餘りの恐しい姿に聲を立てようとした位だつた。棕櫚の木は濡れて人のやうに立ち、敦子の眼に打つかり合つたのであつた。敦子は階下に降りると烈しい眩惑がして、疊の上に横になつた儘その眩惑の去るのを待つた。敦子はその間に樣々な過去の人間を頭に描き、目を開けた時はやはり睡つてゐたことに氣がついた。

あや子が額の上に冷たいタオルを置いて、顏を見守りながら座つてゐた。敦子はあや子を見て穩かに言つた。

「あの方にお引越ししていただくやうに言ひました。さうでないとお母さまは落着けないの。」

敦子は何か酷（ひど）いことをした後の氣持で、あや子を劬り額の上にある手をとらうとしたが、あや子は自分の手を引いてしまふのであつた。その事が敦子を全身的に不愉快さをコヂらし、少しづつあや子とは反對の方に顏を向けるやうにした。

「それはお母さまの都合でわたくしの知らないことです。」

あや子は冷然とさういふと、隣の間に行つてしまつた。その冷かすぎる中に蕀（とげ）をもつあや子は、死んだ彦太に見た酷薄さが何時もとは別な意味で、敦子の頭に映つた。彦太の肉體的なものの働きがかういふあや子に影を見せてくることが、あや子が年頃になると一層其性格に類似して來てゐた。人はその一代きりで滅びてしまふものでないことが、敦子には明瞭過ぎるくらゐに解つて來るのだつた。

或る凍てついた風のある晩だつた。敦子は勝手口の障子戸の外に人の氣はひを感じ、障子を開けて見ると、其處に神戸にゐる筈の先夫の子である竹次が、佇んでゐた。敦子は前の日の夕方の電報で竹次が上京したことを知つてゐたが、併しその顏を見た時は、まる一年間に完全に精神病者である彼の容貌が形づくられてゐることを發見した。竹次の容貌にある

凡ゆるものは間伸びのした、ダラリとした力の無いものだつた。

「お母さん。」

竹次は懐しさうにさう呼び、敦子は直ぐ竹次を茶の間に座らせ、飯を食べさせるのであつた。竹次はキチンと座り温和に空腹らしい箸を忙しく動かしてゐた。「お前、そんなに無斷で出て來てどうするの。」敦子は優しく氣に障らぬやうに言つた。

「僕は來たかつたから來たんです。」

敦子はさういふ竹次を泌々見守つた時に、竹次が泣いてゐることを知つた。敦子も竹次から動かされ、靜かに何か泣ける氣持であつた。かういふ氣持は彦太在世の時分に經驗した以外、決して無かつた氣持だつた。

「それでお前はこちらにずつとゐる心算なの。」

「神戸はいやなんです。」

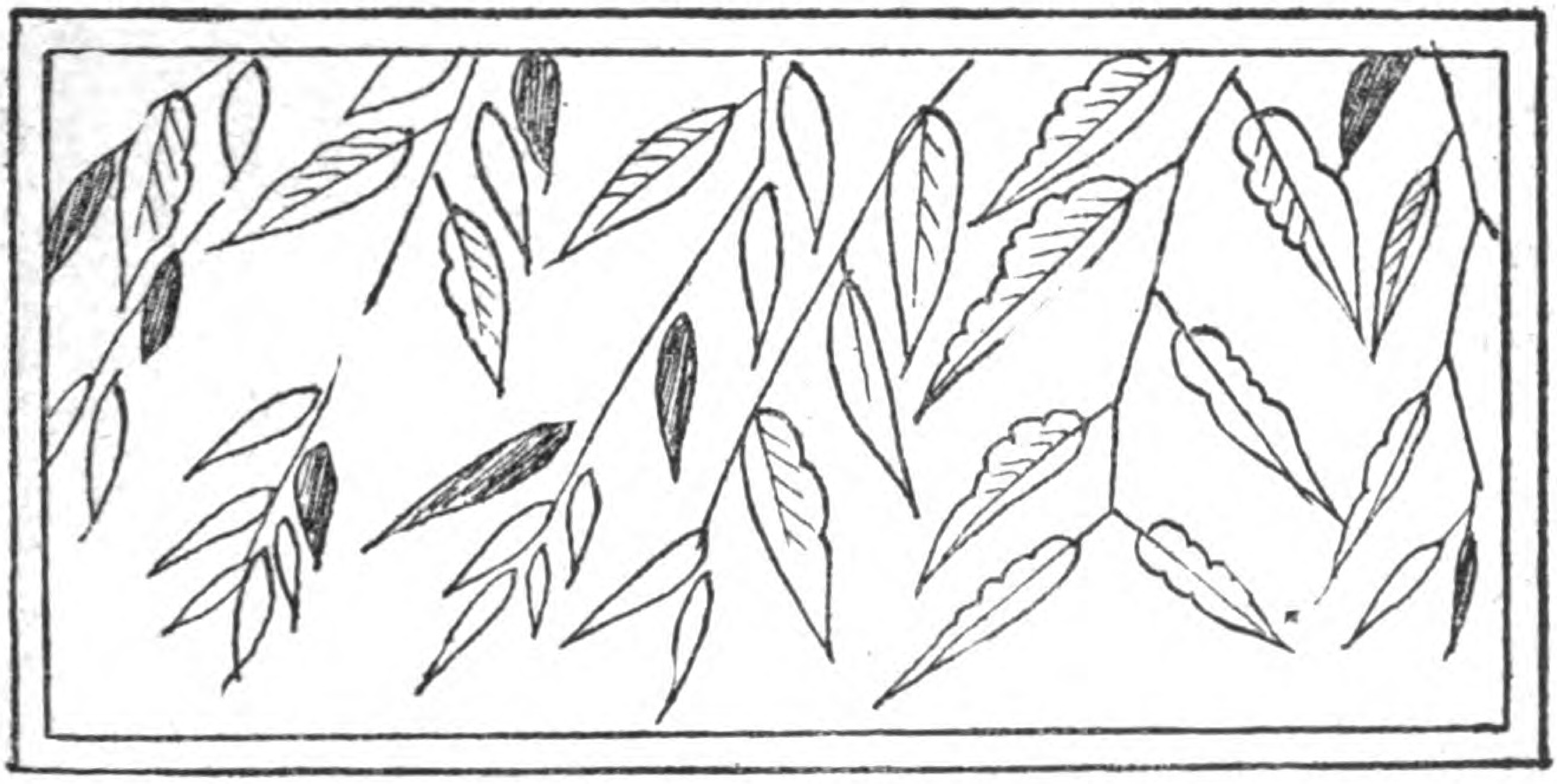
其處にあや子が這入つて來ると、驚いて聲を噛んで立つてゐたが、すぐ柔しい笑ひをうかべた。併しその微笑は輕蔑しきつたものだつた。

「よく入らしつたのね。でも、まるで人が違つてゐる程、變つたわ。」

竹次は濃い烈しい若い女をあや子に感じ、それが竹次に微妙な耻かしい氣もちを與へたらしく、彼は紅くなつて眼をふせた。敦子はさういふ耻らふ竹次を見ると、背中に異常な寒さの通り過ぎることを覺えた。あや子はその時から寧ろ殘酷な程、冷たい笑みに變つてゐた。

「此の家でお兄さんはあなた一人きりになつてゐるのよ、外にあなたの嫌ひな人なんてゐなくなつたわ。」

あや子の辛辣なその言葉は、敦子には手痛い皮肉を叩きつけられたやうだつた。敦子は彦太そつくりな娘を見て、猛々しい顏のなかにも彦太を感じた。併し竹次の痩せ落ちた頬の上に、厭らしい笑ひが、慄ひながら一すぢ上つてゐるのを見ると、敦子は嘔くやうな厭惡を感じた。それは淺猿しい餓鬼道から辷り堕ちて來た笑ひも同樣であつた。



河童ヶ淵（一幕）

太田黒克彦

（登場人物）

釣師。

紳士。

女。

隱居。

男。

幕明く。

川水が淀んでゐる。岸には草木が生ひ繁つてゐる。氣味の惡い淵である。夕風が

微かに葦の葉ずゑを甞うてゐる。

釣師が釣糸を垂れてゐる。

紳士と女、登場。

紳士は手に釣竿を持つてゐる。やがて釣師の傍へ行き、餌の支度を始める。

女も一緒に其の傍へ立つ。

釣師。此處で釣る積りかね？

紳士。さうだ。

釣師。此處は深いよ。

紳士。さうかね。

釣師。向うの方へ行つて釣つたらどうだ？

紳士。僕はさつきから深い所を探してゐたんだ。君だつて此處で釣つてゐるぢやないか？

釣師。此處には河童がゐるよ。

紳士。河童がゐる？

女。ほんと？

釣師。うん。一匹ゐるんだ。此處は河童ヶ淵といふ所だ。其奴が時々出て來て餌に食ひ付くんだ。すると決して放しはしないね。竿ごとすつかり水底に引張り込んで仕舞ふよ。それつきりさ。其の時竿をはなさずに、無理に引上げようとす

りやあ、こつちも一緒に河童のお供だ。何處へ連れて行かれるか分りやあしない。
紳士。冗談ぢやあない。君は一體河童の姿を見たのかい？
釣師。見たとも。何度も見たよ。但し頭だけさ。
紳士。へえ。どんな頭をしてゐた？
釣師。河童の頭かい？　とても口では云へないね。見た者でなくちや分らないよ。そりや氣味の悪い恰好さ。
女。嘘でせう？
紳士。もちろん嘘さ。
釣師。何が嘘なものか。君達は嘘をついたり嘘をつかれたりする生活に慣れてゐると見えるね。だから直ぐ人の言ふ事が嘘だと思ふんだ。
紳士。そんなら河童の恰好を云つて見給へ。それを話して見給へ。
釣師。そりや、見た者でなくちや分らないよ。とても口では云へないよ。凄い恰好さ。思つてもゾツとするよ。
紳士。ふむ、馬鹿々々しい。（餌の支度が出來、釣糸を垂れる。）
釣師。さうだ。恰度その邊さ。恰度君が今ほうり込んだあたりだ。其所いらの水底に河童が棲んでゐるんだよ。
紳士。其の話はもう澤山だよ。（女に）なか〳〵深いな。こりや深い。
女。深さうネ。
釣師。つい一昨日の事だつたよ。君、聽き給へ。つい一昨日の事だつたがね、恰度君の其處ン處へほうり込んで、暫く待つてゐると、グイと來たんだよ、グイと。
紳士。グイとは分つたよ。それで、鮒だつたのかい？　鯉だつたのかい？

釣師。ところが君、それが河童だつたのさ。グイと來た。グイとあわせた。あわせて引上げようとした。と、なか〳〵重い。なか〳〵引上げられない。ヂッと喰へ込んで水底にもぐつたまゝ一寸も動かない。懸れもしない。たゞシーンと引込んでゐる。

紳士。ふむ。一人で喋り給へ。

釣師。そのうち、ふと氣が付いて見ると、俺の釣竿のさきが次第に水際へ附いて行くんだ。つまり俺の方があべこべに水の中へ引込まれようとしてゐるのさ。そこで、はゝア事によると此奴は河童だな、と悟ればよかつたのだが、其の時まではまだ俺の方ぢや鯉か鯰だと思つてゐたものだからネ、こつちも一生懸命に引張つたんだ。そしてやつと水際まで引上げたんだ。すると君、恰度もう日の暮れ方で、ことにもう水の上は薄暗くなつてゐたのだがネ、其の薄暗い水の上に、灰色で、丸くて、とても口では何とも云へない異樣な物が、ムク〳〵〳〵と、何しろから……

紳士。現れたのかい？

釣師。さうだ。現れたんだ。現れたといふ言葉が、平凡だが、一番あてはまつてるね。

紳士。それからどうしたんだ？

釣師。それからどうしたも何もあるものかネ。まあ其の場合の俺の身になつて考へても見給へ。もちろん俺は釣竿をはなして仕舞つたよ。すると、河童の頭はスーッと水底にしづんで行つた。そして糸も一緒に、それから釣竿も一緒に、何もかも水底へヅブ〳〵〳〵と消え込んで行つてしまつたよ。かう話せば何でもないやうだが、イヤ凄かつたね。

紳士。馬鹿々々しい。あはゝゝゝ。餌は矢張りみみずだつたのかね？

釣師。みみずだ。

紳士。いつたい河童はみみずを食ふのかい？

釣師。君は餘程不幸な性質と見えるね。人の話を疑ふ神經が餘程發達してゐるやうだ。

紳士。はてな。これはいけない。(しきりに釣竿をあちこちへ動かす。)

女。どうかなすつたの？

紳士。釣針が水底で何かに引つかゝつてゐるのだ。

女。はづせない？

紳士。何、今にはづせるがネ。

釣師。怪しいぞ。それは怪しいテ。君、どんな手ごたへなのだ？

紳士。手ごたへも糞もないよ。何かに引つかゝつてゐるんだよ。

釣師。どうだかね。何しろ恰度その場所に河童が棲んでゐる筈だからね。

紳士。はづれたよ。うまくはづれた。針先もちつとも傷んでゐない。

釣師。どれ見せ給へ。おや、餌は綺麗に食はれて仕舞つてるぢやないか。妙だな。どうも妙だ。

紳士。うるさい奴だなア、君は。もう默つてゐてくれ。河童、河童と、うるさくて堪らない。誰がそんな馬鹿な事を信じるものか。

釣師。よろしい。ぢやあ君の合點のゆくやうにしてあげようかね？ ちよつと俺の顏を見給へ。俺の顏をぢーつとよく見詰めてくれ給へ。いゝかね。吃驚りし給ふな。實は俺が河童なんだよ。そらッ！ 俺は河童ケ淵の河童だぞ！(兩眼を丸くし、口を大きくあけ、舌を出し、奇妙な顏付になる。)

女。キヤーツ。(悲鳴と一緒に紳士に縋付く。)

紳士。馬鹿。馬鹿。馬鹿な眞似をして女をおどかすな。失敬な。

釣師、默つたまゝ、依然、奇妙な顏付を續けてゐる。
女。あたし厭だわ。氣味が悪いわ。早くあつちへ行きませうよ。
紳士。うん。行かう。此奴、不愉快な奴だ。折角の郊外散歩の邪魔をしやがる。だが、まあいゝや。場所を更へさへすりやいゝんだから。此の場所でなくちや樂しめないといふ譯ぢやないのだから。
女。さうよ。貴方。
紳士と女、歩き出す。
釣師、元の顏付にかへる。
紳士。（歩き乍らちよつと振向いて、）妙な奴だね。まるで氣違ひだね。
女。ひよつとすると、あれは本當の河童ぢやないか知ら？
紳士。すくなくも彼奴の顏は繪に描いてある河童の顏によく似てゐるよ。河童の表情を眞似た時なんかそつくりさ。
女。ホヽヽヽ。
紳士。あはゝゝ。
女。今日の收穫ネ。
紳士。ほんとさ。話の種さ。
紳士と女、退場。
隱居。釣竿を持ち、歩いて來る。
釣師、鯉を釣りあげる。
隱居は立止つて、それを見、やがて釣師の傍へやつて來て、直ぐに餌の支度を始める。

釣師。此處で釣る積りかね？
隱居。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。……
釣師。此の爺イ、耳が遠いんだな。
隱居。はい〳〵。何か云つたかね？
釣師。向うの方へ行つて釣つたらどうだ？
隱居。何故な？
釣師。此處は河童ケ淵といふ所だ。河童が一匹棲んでゐるんだ。其奴が時々出て來て餌に食ひ付くんだ。
隱居。わしもそんな話を聞いてゐるよ。それでは此所が其の河童ケ淵といふ所かい？　成程な。さう聽けばカウ氣味の惡い場所だね。だが折角の事に一ツ河童にお眼にかゝりたいものぢやないか。わしはまだ河童を見た事がないからね。ははゝ。
釣師。君はそんな冗談を云つてゐるが、若し本當に河童でも釣りあげて見給へ。そりや凄いものだよ。お爺さんなんか河童を見たらきつと氣絶して仕舞つて、其のまゝ息をふきかへさないにきまつてゐるんだ。さうなれば明日はおとむらひだ。
隱居。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。(釣糸を垂れる。)
釣師。妙な爺イだな。念佛をとなへながら釣つてゐやがる。
隱居。わしはこれでも信心は忘れぬよ。お寺參りはいつも缺かした事がないよ。あすこのお寺には良念樣といふえらい坊さまがゐらつしやる。それは慈悲ぶかい方でな。有り難い事ぢや。さて、おいでなすつたな。食ひはじめたぞ。鮒かな？　鯉かな？　鯰かな？

釣師。河童かも知れないよ。その食ひ方はどうも變だぜ。早く竿をほうり出した方が無事だよ。でないと君も一緒に河童のお供をして水底へ沈められて仕舞ふぜ。

隱居。オヤ／＼あれきりか。餌を突つついただけで逃げやがつた。

釣師。さうだ。此奴だ。確かに此の爺イに違ひない。

隱居。わしの事かな？

釣師。まあ話すから聽けよ。いゝかね？

隱居。聽くよ。わしは話は大好きだよ。

釣師。よし。それを聽いてから慌てるな。つい五六日前の事だつたがネ。月のいゝ晩だつた。俺は此の河童ヶ淵で夜釣をした。だが、どうも餘り思はしくないので、今夜はもうあきらめて歸らうときめて、釣道具をしまひ始めた。すると其の時さ、急に川面から霧がもく／＼と湧いて來て、見る／＼うちに、俺の周りを眞白に包んで仕舞つたのだ。俺は思はずゾツとしたね。いくら霧でも、さう早くかゝつて來る譯はない。どうも不思議だ。これは普通の霧ぢやあない。

隱居。あはゝゝ、釣に夢中になつてゐると時々そんなことがあるものだよ。釣に夢中になつてゐるうちは、其の間に空のお月さんが二ツに殖えやうが、つい一間うしろで首縊りがあらうが、自分の釣竿のさきより外に、何が眼に見えるものかね。もちろん君の話の霧だつて、君が熱心に釣つてゐるうちに、次第々々にかゝつて來たのだが、君は愈々道具をしまひ出す段になつて、初めてそれに氣が付いたのだよ。あははは。

釣師。何て圖々しい奴だらう。あんな事を云つて胡魔化してゐやがる。だがまあいゝや、今に分るから。あとを聽けよ。

隱居。それは聽くとも。それからどうしたね？

釣師。俺はその不思議な霧の中を家の方へ歸りかけた。そしてあすこの稻荷橋の近くまで行きかゝつたのだ。すると、其の時ふと氣が付くと、うしろの方からバタリ〳〵と、草履をひきずつて來るやうな音がする。はてな、こんな眞夜中に、此處いらに滅多に人通りのあらう筈はない、これはこつちの耳のせいか知ら、と俺は一度は自分の耳を疑つたが、此方が立止ると、向うも立止る。此方が歩き出すと、向うも歩き出す。いつまでも俺の後からついて來る。バタリ、バタリ………

隱居。成程な。よくある話だ。

釣師。默つて聽いてゐるがいゝ。今にわかるから。……それで、さうやつて、氣味の惡い思ひをしながら、俺は稻荷橋まで歩いて行つたが、橋の上へ來ると、俺は急に立止つたのだ。そしてヒョイとうしろを振向いたのだ。と、俺の後をつけて來た奴は、霧の中からボーツと姿を現した。見ると一人の氣味の惡い老人だつた。ところで、爺さん、其の老人の顏と云つたら、お前の顏にそつくりだつたよ。

隱居。馬鹿を云ふなよ。わしはそんな眞夜中にまるで泥棒見たいに川のふちを歩き廻るやうな者ぢやあないよ。わしは此の通り狸顏こそしてゐるが、此の近在の地主で仁右衞門と云つて、少しは人樣に知られてゐる者だ。冗談を云ふのは止してくれ。

釣師。そんなら後を聽くがいゝ。……俺は其の橋の上で、老人をぢつと見た。別に普通の人間と變つた所も見えない。が、よく〳〵見ると、其の老人の足には黃色い毛が一ぱい生へ、長い爪が生へてゐるのだ。だから俺ははアと悟つたのさ。で、悟つたと一緒に、俺は釣道具の袋を振上げて、「化物!」と呶鳴り付けたんだ。と、老人は忽ち橋の上から眞逆樣にドブーンと、川の中へ飛込んだ。だが其の時には勿論もう川獺の姿だつたのさ。老人の正體は川獺だつたのだ。……やい、爺イ、かう話して來ても貴樣はまだ白ばつくれてゐる積りなのか? 貴樣は二度も出て來て俺をだまさうと云ふのか? そんなに俺のびくの魚が欲しいのか? 川獺だ。川獺だ。貴樣の正體は川獺なのだ。失せやがれ!(杖を振り上げる。)

隱居。冗、冗談ぢやない冗談ちやあない。君は本氣でそんな事を云つてるのかい？

釣師。まだあんな事を云つてゐやがる。お前の其の脚は何だ？　其の長い爪は何だ？　川獺だ。川獺だ。川獺だ。貴様は川獺の化物だ。（ます／＼杖を振上げる。）

隱居。（あわてゝ釣竿を引上げ乍ら）これは氣違ひぢや。氣違ひぢや。何といふ途方もない話ぢや。早く逃げよう。どうも初めから樣子が變だとは思つてゐたが、矢張り本當の氣違ひだつたのか。氣違ひぢや。氣違ひぢや。

釣師。川獺だ。川獺だ。川獺の化物だ。

隱居。ヤレ／＼可哀想に。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……

　隱居、急いで退場。

　釣師、元の姿勢にかへる。

　日くれかゝる。

　男。釣竿を持ち、登場。釣師のゐる方へゆつくりと歩いて來る。そして釣師の傍へ立つ。

　長い間。

釣師。君は人間かね？

男。……人間のやうには見えないかね？

釣師。それとも君は幽靈かね？

男。……幽靈のやうに見えるかね？

釣師。君はきつと棒杭だらう。いやに默つて突立つてるぢやないか。何故釣らないのだ？

男。もう釣るのを止めたのだ。さつきから向うの方で釣つて見たが、一匹もかゝりはしない。もう厭だ。……

釣師。此處で釣つて見たらどうだ？　釣れるかも知れぬよ。此處は釣れる場所だ。此處なら河童も釣れるよ。

男。いやもう釣るのは止めた。鯉を一匹釣つた所で仕樣がない。釣つても釣らなくても同じ事だ。……

釣師。そんな心細い事を云はずにもう一度釣つて見給へ。釣れればまた氣がかはるよ。

男。まあさうすゝめないでくれ給へ。しばらく君の釣るのを見てゐたいから。

釣師。嘘をつき給へ。君は決して俺の釣るのを見てゐはしないぢやないか。俺は知つてゐるよ。君の眼はぢつと水の上を見詰めてゐる。そして水の底の事を考へてゐる。どうだ、當らなかつたかね？

男。……僕はそんな樣子に見えるかね？

釣師。君の顏は蒼ざめてゐる。眼には生氣がない。時々力のない咳をする。何といふ暗い姿だ。君がぢつと水を見詰めながら何を考へ込んでゐるのか、俺にはおよそ想像がついてゐるよ。それは恐ろしい事だよ。氣をかへて釣り給へ。此處は釣れる場所だ。それに川底には魚寄せの仕掛がしてある。俺は此の川の漁師だ。俺は此の場所へ、釣りを樂しむ事が目的の閑人がやつて來て、無遠慮に邪魔をするのを喜ばないがね。しかしまあ君なら構はないよ。

男。ありがたう。君は僕に同情してくれるんだね？

釣師。それは分らないね。俺は君を川の中へ蹴込んで仕舞ひたいのかも知れぬよ。

男。釣つて見よう。（釣竿に卷き付けた糸を解きながら、）毎日可なり釣れるかね？

釣師。釣れないね。魚は毎年へる一方だ。その反對に、樂しみに釣りに來る奴は、毎年ふえる一方だ。そこで俺の商賣は日増しに面白くなくなつて行く許りさ。

男。さうかねえ。それはいけないねえ。お察しするよ。

釣師。何、察して貰はなくてもいゝよ。俺は察して貰ふのは大嫌ひだ。俺は此の通り生きてゐるんだ。俺は此の川の漁師だ。此の川の魚は俺が一匹殘らず釣つてしまふのだ。俺は飢えかゝつてゐる。だが此の川にはまだ魚がゐる。俺は釣れるだけは釣るのだ。

男。……飢えかゝつてゐるといふのに、君は何といふ元氣のいゝ人だらう。何かから君を見てゐると物凄いやうな氣さへする。だが君は愈々となれば此の川を去つて、外の土地で働く事も出來るのだね。

釣師。餘計な事を云はぬがいゝ。俺の氣持は俺だけが知つてゐるのだ。君はどんな身の上なんだ？

男。僕かい？　僕かい？　僕は失業者だよ。職を失つてからもう四年にもなるのだ。僕は肺病になつたので、會社を追はれたんだ。そしてそれつきり何所でも雇つてはくれないのだ。僕の病氣はだん／＼惡くなる一方だ。死がもう眼に見えてゐるのだ。僕には妻と三人の子供がある。妻は封筒をはる。子供は納豆を賣りに行く。家族は日に二度か一度默つてかゆを啜る。そして僕には藥を飲ませてくれる。しかし君、其の藥は僕には飲めないよ。とても咽喉をとほらないよ。それよりも僕はむしろ、いつそ一思ひに……

釣師。釣り給へ。餌をつけ給へ。なぜ餌をつけないのだ？　君は釣りに來たのぢやないのかね？　君は矢張り棒杭かね？

男。釣りに來たんだよ。さうだ。僕は鯉を一匹釣りに來たんだよ。妻の乳が出なくなつたのだ。赤ン坊がひつきりなしに泣き叫ぶのだ。乳を出すのには鯉を食べるのが一番ださうだ。そこで僕は釣竿を持つて出かけて來たのだ。せめてそんな事が今の僕に出來る凡てだと思つたのだよ。だが、鯉を一匹釣つたところで、どうなるだらう。それが家族五人のくらしにどう影響する事が出來るだらう。それだのに、僕のやうな病人が、ふと思ひ立つて、鯉釣りなどに出かけて來たのは、今から思ふと、自分ながら妙な氣がするよ。

釣師。君の眼は釣りをしに來た人の眼ではないよ。君の眼は川水を見詰めに來た人の眼だよ。元氣を出し給へ。不幸に堪へるには元氣を出すより外はないよ。餌をつけ給へ。鯉を釣り給へ。此處は釣れる場所だ。此處は河童ケ淵といふ所だ。もう陽が沈んで夕闇が迫つてゐる。今が一番釣れる時だよ。

男。おや、あれは何だらう？　今の水音は何だらう？

釣師。今の水音かい？　たぶん川獺だらうね。此の川には川獺が棲んでゐるのだ。川獺が水に飛び込んだのだよ。靜か

だからね。よく聞えるよ。

男。此の川は深いかね？

釣師。一體に深いよ。ことに此の邊は深くなつてゐるよ。

男。もう大分暗くなつて來たね。もう直き夜が來る。……

釣師。ねえ、君、聽き給へ。俺の釣つた鯉を君に一匹上げようぢやないか。俺は今日は四本も鯉を釣り上げたのだ。先づ大漁だつたのだよ。だから君に是非一匹進呈するよ。それを持つて歸つたら君のおかみさんはどんなに喜ぶだらう。乳が出る。赤ン坊は泣き止む。ねえ、今夜君の家の食卓では鯉の御馳走だ。一番大きいのを君に上げるよ。

男。いゝえ、いらないよ。御厚意はありがたいが、僕は欲しいとは思はないよ。鯉を抱いて歸つたら、僕は餘計に悲しくなる許りだよ。本當ならば働き盛りの主人の手から、たつた一匹の鯉だけを、僕の家族は受取らねばならないのかね？それよりも彼等に迷惑をかけないためには、僕はいつそ……

釣師。君は何といふ馬鹿者だらう。よろしい。そんなら俺は君に云つて聞かせるがね。それを聽いてから吃驚りするなよ。いゝかね？　此處は河童ケ淵といふ所だ。ところで、俺の顏をよく見給へ。ぢーつとよく俺の顏を見詰め給へ。俺の此の眼と、俺の此の口を見給へ。そら！　俺は河童ケ淵の河童だぞ！　（急に凄い顏付になつて男を睨み付ける。）

男。冗談はよし給へ。凄い眼付だね。

釣師。やかましいやい。默つてゐろ。默つて其所に立つてゐろ。俺は河童ケ淵の河童だぞ。お前は俺の云ふ通りにするんだ。（びくから鯉を一匹つかみ出して、手拭を水に濡らし、それで鯉をグルりと包み、男の手に渡しながら、）さあ、此の鯉を受取るんだ。さうだ。さうやつてしつかりと腕の下に抱くんだ。そしてお前の家へ歸るのだ。

男。君は僕を暗示にかけようとするんだね。何といふ凄い眼付だらう。僕は君の暗示にかゝりさうだ。だが僕にはもう力が盡きてしまつた。

釣師。やかましいやい。俺は何童ケ淵の河童だぞ。ぐづ〳〵云ふと承知しないぞ。……さて俺ももう歸らう。君が鯉を受取つてくれたので滿足だ。それにもうろきもころ〳〵見えなくなつて來た。（數本の釣竿を引上げ、手早く始末をする。其の間も始終男を睨み付けてゐる。）

男。僕は此の鯉を抱いて家へ歸らねばならないのかね？

釣師。さうだ。家には君のおかみさんが待つてゐる。子供達が待つてゐる。乳を欲しがつて赤ン坊が泣いてゐる。もう食卓の上には灯がともつてゐるだらう。

男。僕の家。僕の家族。ああ。

釣師。君の家はどつちの方だね？

男。向うの方だ。

釣師。さうか。ぢやあ、俺は此方の路だからネ、こゝで別れるとしよう。

男。さうかね。ありがとう。そんなら此の鯉は頂いて行くよ。大きな鯉だね。僕はしかし……

釣師。まつすぐに君の家へ歸り給へ。川の邊りでぐづ〳〵してゐてはいけないよ。いいかね？　俺は河童ケ淵の河童だぞ。あはゝゝゝ。

男。わかつたよ。ありがとう。君に厚くお禮を云うよ。

釣師。ぢやあ、さようなら。

男。さようなら。

　男、去つて行く。

　釣師、男を暫く見送つてから、反對の方へ去る。

　日ます〳〵暮れる。

間。

紳士と女。登場。

紳士。あゝ足勞れた。

女。足疲れたのはあたしだわ。

紳士。僕だつて足勞れたよ。

女。自分で勝手に足疲れたのは、足疲れたうちに入らないことよ。

紳士。まあさう云ふなよ。

女。一匹だつて釣れやしないぢやないの？　だから矢張り芝居を觀に行つた方がよかつたのだわ。

紳士。まあ堪辨してくれよ。

女。釣りする馬鹿とはよく言つたものネ。

紳士。釣りを見る馬鹿といふのもあるぜ。

女。此處はさつきの場所だわね。

紳士。さうだ。さつきの場所だ。

女。河童はもうゐないやうね。

紳士。河童かい？　うん。ゐないやうだね。もう川へ歸つて仕舞つたのだらう。

女。川へ？　ホヽヽ。

紳士。おい。ちよつと待つてくれ。

女。なあに？

紳士。此處で鳥渡釣つて見よう。ほんの鳥渡下ろして見よう。

女。厭アよ。およしなさいよ。どうせ釣れやしないぢやないの？ それにもう暗くはなるし、霧はかゝるし、こんな氣味惡い場所で釣るのはおよしなさいよ。

紳士。ほんの烏渡さ。ね、ほんの烏渡さ。

女。貴方にも呆れたものネ。仕方がないわ。ぢやあ、お釣りなさいな。

紳士。ありがたいね。その代り歸りに何でもおごるからね。鰻かね？ 天ぷらかね？ ついでに坊やへお土産に人形を買つて行くかね？

女。馬鹿々々しい。

紳士、水際へ行き、釣る。

女、その傍に立つ。

夕闇濃くなる。

間。

女。あツ！（紳士に縋り付く。）

紳士。何だ？ どうしたのだ？

女。……河童が……河童が……あすこの崖の下の水際を、往つたり來たりしてゐるわ。

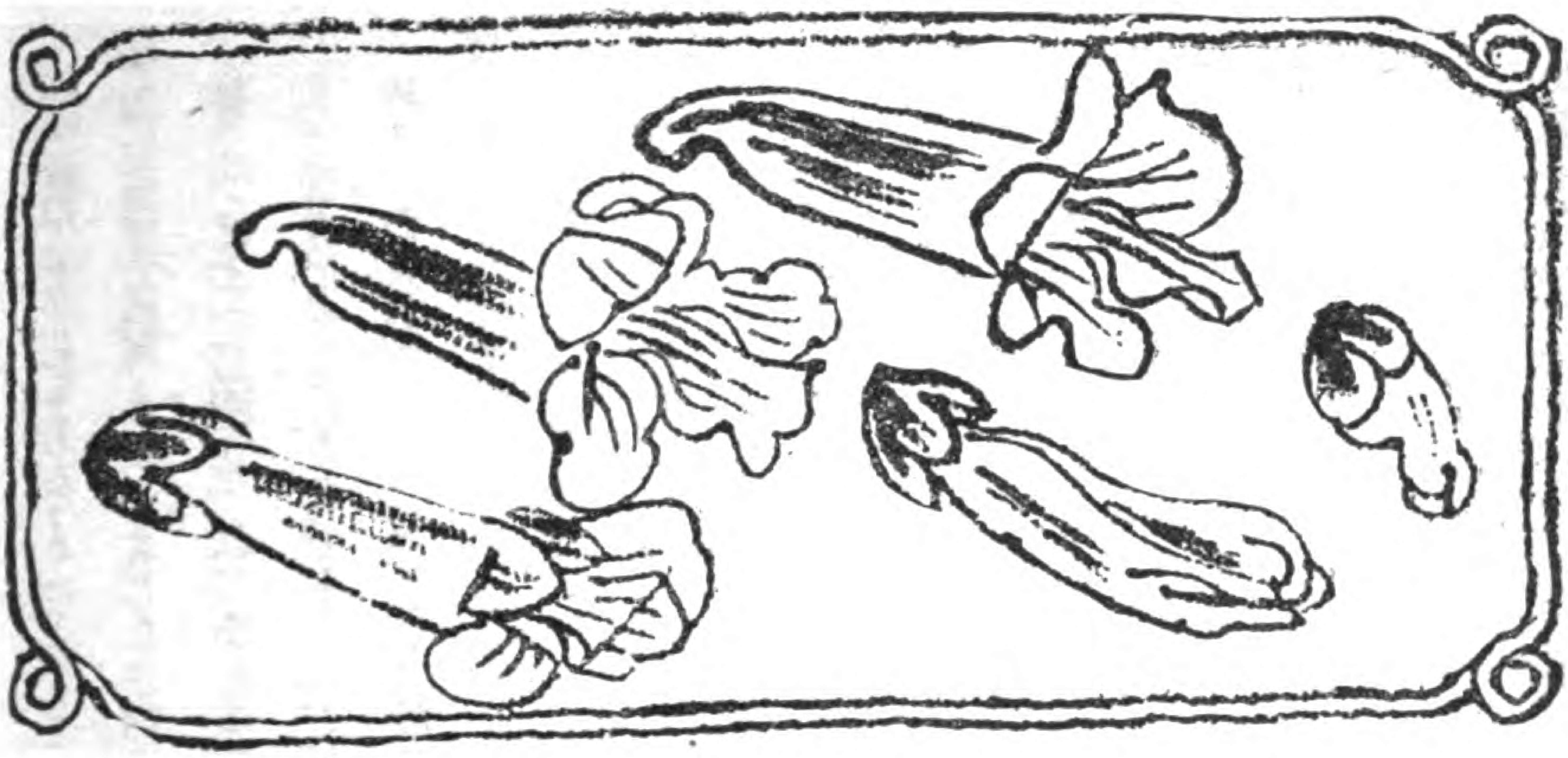
紳士。馬鹿な。何を云うのさ。

女。いゝえ、河童なのよ。河童なのよ。ちやんと人間のやうな形をして、脇の下に鯉をつかんで。ほら、あすこに。

紳士。何處に？

紳士と女、向うを見る。

幕下りる。



かたおもひ

永井荷風

銀座通をとほり過ぎて、とある商店の硝子戸にラヂオ放送の藝人の寫眞あまたつらね出したるを、道行く人に打交りて何心もなく立留りて眺めやれば、思ひもかけぬかの柳橋の增次が姿、さりとては、暫く見ぬ間にいよ〳〵年ふけて、白襟の五紋きたる三味線のかまへもすつかり師匠らしくなりしよと思へば、ガラスの面にうつるおのれが身のさまにたくらべて、增次が身の上また更に何とも知れずあはれ深き心地したりしも、過ぎしむかしの事を思へばまんざらわけなき事にもあらじと、或人の語りしは、明に治る御代の改りて大に正しきといふ年になりたる頃のことなりけり。わが始めて作りて見たりし淨瑠璃所作事の一幕、濱河岸なる明治座の舞臺に上りし初日の夜なり。世の中の事好きにつけ惡しきにつけ面白くてならぬ血氣ざかり。わけてもわが淨瑠璃の述作はじめての事なれば、年月もちやんと覺えて今に忘

れぬ彼岸前、花もそろ〳〵さかうといふ好い天氣の夕方より風吹き出し、ハネ際になりてだしぬけの大雨車軸を流すが如く、芝居小屋廊下のところ〳〵には雨漏りのするさはぎに、歸りの見物木戸に押合ひ、車よ自働車よと、呼べど叫べど、皆出はらひて一輌もなく、雨のしぶきは風につきて木戸口に佇む人の裾も忽にして絞るばかり。稻妻物すごく閃きわたりて、雷のとゞろきに橋を渡る車の音も聞えず、樂屋の者も木戸口の觀客と同じく、途法に暮れたりし折柄、茶屋の男のわれを尋ね來りて、唯今今戸の師匠が許よりお迎ひの自働車、やつと一台參りましたれば、御都合にて先生にも御一緒にとの事に、茶屋の二階へ上りて見れば、都三中といふ一中節の師匠、今日はわざ〳〵わが新作淨瑠璃の一幕見に來りしも、日頃のつきあひに、半ば藝人の義理を思ひてなるべし。三中がよびたる自働車には、代地河岸の茶屋如月の内儀と藝者增次の二人も共に乘合せて、まづ道順に如月の門口に來かゝれば、如才なき内儀がすゝめに、遊びざかりの身はこのまま歸ることの何となく殘り惜しく、且は淨瑠璃の批評も後學のため聞いて見たしと、三中をさそひて無理やりに二階の座敷に通れば、增次もともに從ひ來て、すぐに酒とはなりぬ。俄の大雨はがらりと晴れと、大川に臨みたる窓の硝子障子に、月の光青くさしこみ、夜も忽一時過ぎとなりしかば、三中は茶屋より人力車雇ひて今戸の家に歸りしが、われは瓦町の借家住居、つい鼻の先なり。增次が家は柳橋の河岸通といふに、それではと連立ちて、代地の橫町話しながら步み行くに、大雨に洗はれたる路の面ぬかるみもせず、ところ〴〵の水たまりに、澄みわたりし月の光のうつりたるを、增次何と思うてや立留りて空振り仰ぎ、さつきの雨風に引きかへて、雲一ツない此の晴れやう。人の心もこのやうに晴れたならさぞいゝ心持であらうにと、譯ありさうな獨語。これは聞きのがしができぬ。いづれ意氣なはなしなるべし。月の夜ふけの道づれも多少の緣なり。是非ともそのはなしのわけ聞きたいと言へば、增次さびし氣にほゝゑみて、お酌の弘めしてから數へればもう七年ほどになります。商賣柄にも似合はない馬鹿氣た事とお笑ひなさるにちがひはなし、止しませうよとためらふを、いや〳〵話の糸口引出して此のまゝではどうも心持がわるいと攻め掛けられ、それではお話しいたします

が、三年この方毎日のやうに顏を見て冗談も言ひながら、どういふわけやらつい言出しそびれ、その儘になつてしまつた人のこと、どうしても忘れかね、折々は夢に見て、ほんにばかばかしいと、われながらくやしいやうな心持にもなりながら、さてさつぱりと思ひきれぬが心の迷ひなるべしといふに、それ程までに思ひ込まれた冥加な男、それは一體どこの誰かと問へば、それはあなたも御存じの人なれば、話の中に自然とおわかりになります。はじめてお目にかゝりましたのは一昨年の暮のこと、まだおひとりだと聞くからに、すいたらしさの身にしみて、浮氣な家業をさひはひ、世話になる旦那には申譯がなけれど、内所にて一夜二夜の遠出なりともして見たいと、友達にも打明けて好い首尾をと窺ふ中、聞くともなしに聞く噂、その人は新橋にて容貌も藝もまづ第一と言はれた鯉家のお杉さんが大事な大事な命とは、互の腕にも書いてあるとか。洗湯には行かずとも其土地では知らぬものはないとのはなし。また此の柳橋でも惚れぬいてゐる藝者、わたしの外にも二三人はあるといに、もし言出して恥かゝされた擧句、お互に氣まづい仲にならうよりは、大事を取つての控目も、ぞつこん惚れぬいた弱味なり。このまゝ奇麗な交際なれば、たとへ兩國橋のまん中で手を握り合つて何言はうと、遠慮はいらぬ心やすさ。口先だけ大びらに、御師匠さんはわたいの岡惚と言ひふらすを、せめての心やりにして、好勝手な冗談、つい口癖のやうになれば、眞底わつての胸の中猶更通じる折もなく、あゝくやしいと心に泣けど、月日のたてば猶のこと言寄りにくゝなりて、いつしかに半年あまり。日頃のいぢきたなさにお腹をこはして十日ほど枕につきしが、藥よりもきらいなお粥の養生漸くにしるしありて、今日から座敷に出ませうと、久しぶりに出かけし結髮の家。日頃仲の好い千代吉が居合せて、增次さん、もうよくおなりか。まだ顏色がよくないが大方今夜はあすこへお出であらう。あすことは、ソレお前が岡惚のお師匠さん、今夜八百善で、あの新橋のといよいよお芽出たい御披露。わたしのとこへもお座敷がかゝつたれど、前々から據處のない約束があつて行かれぬから、お前さんからよろしくとのはなし。何事も知らさりし此方はびつくりして、折角の床上も、また四五日は起上る氣力さへなくなりて、人知れず枕紙をぬらしましたと、增

次がはなしの長ければ、短き柳橋もいつか渡りて、河岸通の小家が軒に梅家といふ灯出せし門口。別れてわれは唯一人瓦町の家に歸しが、さて世の中はひろいやうにて狹いものなり。増次がこの年月思をかけたりし男、誰かと思へば、わが知れる三中なりしかと心づけば、これまで二人が樣子のそれと思ひ合はさるゝことども多きにつけて、已が身の鈍き譬へむ方もなかりしこそ笑止なりけれ。われその頃は年三十を三ツ四ツ越して、いまだ定まりし妻とてもなかりし身なり。文學士といふ肩書はあれど、白足袋はいて芝居小屋への出入り。或時は劇評をものし、或時は狂言淨瑠璃などつくりて口を糊する道樂家業。物堅き家の令孃を迎へて奧樣にする量見はもとよりなし。どうでも一人にては生涯暮らされぬ身とあらば、容貌には別に望みはなければ、その代り三味線だけは人並よりすこしは上手と許さるゝ藝者が女房にして見たいと、あぢな望のそれとはなしに、あちらこちらの茶屋々々を、遊び歩いてゐる最中なり。清元のさらひにて、ふと増次が姿を緋毛氈の上に眺め見て、その音締の氣に入りしより、何とはなくその面影心の中に殘りしが、さて噂に聞けば、その人には年もわかく、お金もある歷とした旦那あり。自前にしてもらつてまだ半年とはたゝぬに、河岸通の家も買つてもらひ、抱の三人、半玉も二人まで、つい此頃に弘めをさせたといふに、借家住ひのおのれが身のまはり、俄に裏寒しき心地しだして、座敷へ呼んで見やうといふ氣も消え失せしが。かの都の師匠といふは。もと〳〵家富み榮えたる酒問屋の倅にて、われとは小學校の稚友達。十五六の頃肺がわるいと醫者にいはれて學問をやめ。ぶら〳〵遊んでゐる中。いつか病氣もすつかり直りし頃には、慰みの藝事もめつきり上達せしより、濱町のしづかなる新道に家を借りて。一中節けい古場の札をかけ、毎日今戶の本宅より抱車で通ふ結構な身の上、今の世にはめづらしく、どうやら人情本にでもありさうな若隱居なり。芝居などにて折々出會ひて、われとの交り再びむかしの如くなりしかど。増次がことはついぞ話に出たこともなきがまゝ、今宵ふとした事より女の述懷聞くまでは。さらに氣のつく折もなかりしなり。増次が道々のはなしでは。去年の秋、三中が新橋の女內へ納れし頃の事までにて。それから後はどういふ事になりしにや。久松町の初日の歸り。一緒の自動車に乘つた

のは、思ひかけなき其場のはづみか。イヤどうもさうではない樣子。若しさうでもないとすれば、增次が思ひはその後になつて湧いたのではなからうかと疑れば、われは枕につきてもどうやら寢つかれぬ一夜、明けるを待つて三中をたづね、增次とのわけきいて見たい氣はすれど、まさかにそんな野暮らしいまねも出來ねば、われは晝飯でも馳走してやる體にして、增次を茶屋に呼び。昨夜のつゞきが聞きたいと冗談にまぎらして、實を探るに如かずと、正午になるを待ち、馴染の茶屋へ行つて梅家の增次をと命じけり。增次は時ならぬ晝の座敷、唯今と受けてから、悠々と髮を結ひ、洗湯にまはり、さて念入に化粧して來るものとおぼしく、まづ二時間あまり、たつぷり待たせて、やう〳〵に座敷の褄越し、女中を話相手のわが聲聞きて、わざとらしくあらと叫び、ずか〳〵と遠慮なく食卓の前に座り、昨夜はすこし醉つてゐましたので、いろ〳〵愚痴をこぼし、ほんとに濟みませんでしたと言ふをよい事に、昨夜のはなしはまだ讀切りにはなつてゐない。その後のつゞきが聞きたさに、わざ〳〵今日は出て來た仕末。このやうな好い心掛のお客、近頃にはめづらしからうとさす盃。增次受取つて、どうもはゞかりさまと酌をさせ、それでは氣のきかないはなしなれど、藝者の身にて體裁よく思ふ男に逃げられた一伍一什おはなしいたしませう。あなたのお察し通り、わたしの惚れたはあの三中さん。そのお友達とあれば箱の事かくしてゐても仕樣が御ざりませぬ。それもつい此間の事で御ざります。内の旦那も一中節の稽古してゐますので、三四人の藝者とも〳〵三中さんをさそつて箱根へ出かけ、二三日は遊ぶつもりの處、旦那はお店の急用にて、其の晩にお歸りなされたので、こんな好い首尾二度とはあるまいと知るものから、雜魚寢の隙を窺ふしんの夜半。風呂場か廁か知らねど、一人立つて行かれた三中さんの後、そつと追ひかけて、その歸りを廊下の角に待ちかまへ、出合頭に行當つたやうな振をして、お師匠さん。お湯ならお背中でも流して上げましたのにと、冗談らしく言ひかけると、師匠は默つて襖のあいてゐる傍の明座敷へはいり、お增さん、實はすこし話がある。此間から折があつたら話をしやうと思ひながら、ついその折がなかつたのでと、どうやら改まつた言ひ方に、嬉しいのは通り越して、俄に波打つ胸の中。突立つたまゝで男

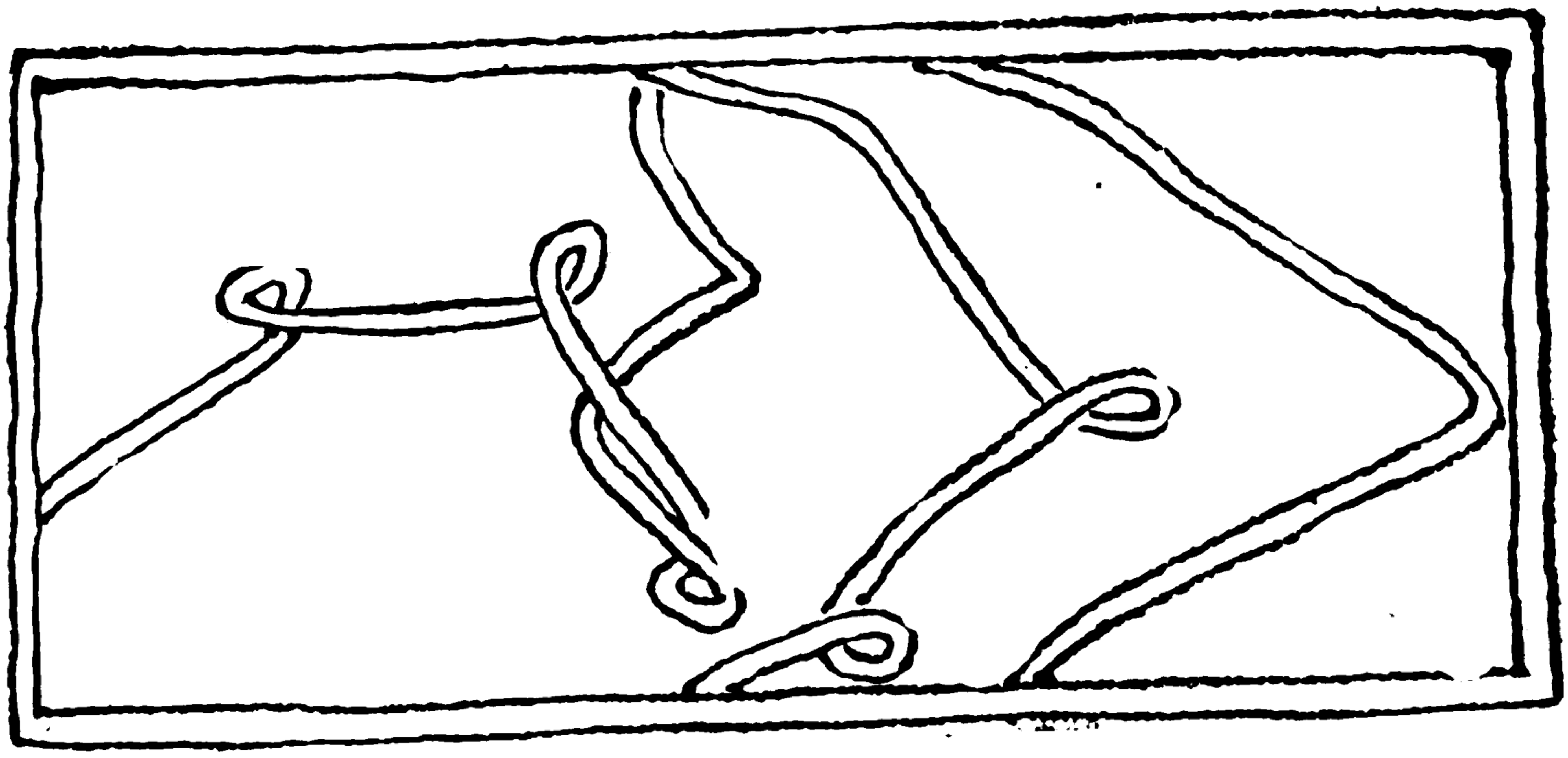
の顏を見てゐれば、三中さんは寢衣のふところより巻烟草取出しながら、何ぼわたしが盆槍でも、まんざら譯のわからない野暮ではないつもり。男と女の仲一言に浮氣とはいふけれど、この浮氣にもいろ〳〵ある。後も先もない一晩きりの浮氣なら、誰彼の詮義もいふまい、この場かぎり、掛流しの心易いはなしなれど、よく〳〵其の人の身の上を思ひやり、一生涯どうか仕合でゐるやうにと考へれば、何かにつけて思過しが多くなり、つい輕々しいまねもできぬわけ。ましてや人のつきあひ浮世の義理、こればかりは人間と名のつくかぎり捨てもならぬ切なさ。お前もわたしが心の中よく察しておくれと言はれて、何のわけとも知らず、急にかなしくなり、襦袢の袖に顏押當てゝ、その場に突伏す折から、誰やら廊下をこなたへと來る足音に、三中さんはそツと向の緣側に姿をかくす。わたしは逃場を失ひ、座敷の隅に立つてゐる二枚折の屛風のかげに隱れたを、それとも知らぬ二人づれは、都なにがしといふ三中さんのお弟子に、一座の年増藝者。廊下の襖しめるが否や、二人は得たりとばかり、あたりかまはぬ忍び會ひのあられもなさ。わが戀の果敢さに引くらべて、腹が立つやら口惜しいやら、花瓶の水頭からぶつかけてもやりたいやうな心持。ぢつと押えて、咳一つ出來ず我慢した其場のつらさ。思ひ出しても汗が出ますと、増次は下に置いた盃取上げて唇をうるほしぬ。その日はいつよりも早く、お約束の座敷を受けてゐるとて、まだ日の暮れぬ中、迎ひの車を呼び、それではお先へ失禮いたします。お通りがゝりに、あの通り猫の額ほどな家なれど、氣の置けるものは居りませぬから、どうぞお寄りなされて下さいまし、ほんとにかまひませぬ、お待ち申してゐますとて坐を立ちぬ。もと〳〵忘れがたき女の事なり。誘はるゝがまゝに明日といはず、その夜の中にも尋ねて見たくは思ふものゝ、それでは何となく腹の底見すかされはせぬかとおそろしく、二三日過ぐれば第六天の緣日となりしを幸、參詣のかへりと見せかけて、植木の鉢物携へ、河岸通なる梅家が格子戶、おそる〳〵開けかけるに、氣たゝましくチリチリンと鳴出す鈴の音。増次は丁度座敷よりの歸りしところと見えて、鏡臺の前に立ち、帶解きながら、開け放せし障子越し、わが姿見返るや、しごきのまゝに褄も取らず立出で、さアお上りなさいまし。此の通りの狹いところ。

御免なさいとて、わが見る前も更にかまはず、縞模樣の着物と共に、長襦袢もさらりとぬぎ捨て、婆やの着せかける寢衣に半纏、平ぐけの端ぐつと引きしめながら、長火鉢の前に立膝して、茶を入れかける樣子。いかにも遠慮なく、人前つくらぬ心やすさ。土地での噂にも、アノ増次さんのやうな氣心の好い人はない。我儘で強情張りなれど、あのやうにわけ隔なく、胸に蟠りのない人もめづらしと言はれてゐるも道理なり。つい往きやすくなるものから、その後は三日目四日目と折をはかりて、梅家の門におとづれしが、増次がはなしといふのは、いつもかはらず三中が事ばかり。よくそのやうに惚れられたもの。日頃は何事にも執着なく、さつぱりした氣性にも似合はないと、或日戯れにからかつて見れば、それが思案の外ですよと、増次はいつもの投げやつた調子にて、然しどうやら心の底ではあきらめがつくやうになりました。それといふのは外でもない。つい一昨日の晩の事、いやな夢を見て、どうしてもあきらめやうといふ氣になつたので御座ります。あなたの外には誰れも話のできぬ事なれば、まア聞いて下さいまし、わたしはまア、あんな恐しい心でゐたのかと、夢とは言へ、つく／＼わが身の根性がおそろしくなりました。其のわけは三中さんのおかみさんが病氣で死ぬか。さうでなければ二目と見られぬ面相になるやうにと、山寺に籠り斷食して呪をかける有樣、寢汗に夜具まで濡らし、寤めての後まで心持がわるく、三中さんが内の樣子もしもの事でもあつてはと、人知れず聞かせにやりしに、おかみさんは此中風邪ひいて寢てゐたれど、もうすつかりよくなつて、昨日からは外へもお出かけになつたとの事。まアよかつたと覺えず嬉涙をこぼしましたといふに、われは心の中何となく勇み立ち、さては増次も三中が事さつぱりと思ひ切りしか。さすれば今のところ、外に心をよする男もあるまじければ、やがてはおのづからわが思のとゞく日もあるべしと、いよ／＼足しげく音づるゝに、女の愚痴のさても／＼限りはなし。又もや同じやうな夢のはなし。聞かさるゝ事もたび／＼となれば、始めの中こそ人情本讀むやうな優しき心地もしたれ。遂には又かとあくび嚙みしめて、話を合すやうになりしも是非なし。兎角するほどに、一年二年と月日は過ぎぬ。よく／＼思返せば、相手はそれとも露知らぬわが戀、いつ叶ふべき望もなき

は、さながら三中がこと思ひつゞくる、増次が思のはかなさにひとしく、又更に思返せば、色の巷に生立ちし増次の氣性、つきあひの派出なるをよろこびて、宵越の錢はつかはぬといふ風になれば、巳れ等が如き寒士の家には向くべくもあらず、矢張野に置きて見るべき花なるべしと、次第にあきらめの心起るにつけて、瓦町なら町家住居さへ、どうやら住み憂きものに思ひなされしは、無花果しげりし小屋の垣となりに、自轉車修繕の鍛冶屋引越し來りて、齒の浮くやうな鑢の音、折には夜に入るも斷えざる事あり。それのみならず二階の窓際に据えたる机の上には、砂ほこり日に增し多くなりて、墨◇るたび／＼硯の面ジヤリ／＼と音するやうになりしを、何故かと怪しむに、表通を馳せ通る貨物自働車日毎に增加するがためと、洗湯にて老人のはなし、誠にさよふと思はれし折から、近隣に火事二度まで起りしより、少しは藏書もある身なれば、山の手の靜なる横町俄に戀しくなりて、牛込袋町の坂上に移りしかば、増次の家を訪ふことは月日たつにつれて、いよ／＼稀になりぬ。その頃の事思返して、今も猶忘れがたき心地せらるゝは、瓦町の家を引拂ひし其日のことなり。家具書物の運搬、自働車なれば一輛にても餘るほどなりと、引越請負の男の言ふ所なれど、貨物自働車は其名を聞くさへ憎らしければ、これまで通りの大八車がよいと言ひしに、時間がかゝつてもよろしいならば、いつそ荷船のあいたのを傭ひ、ツイそこの堀割から荷物を積み載せ、一まづ大川に出てから、神田川を牛込揚場の河岸まで遡るが一番便利にて、賃銀もお安う御ざいますとの事。これは近頃にない珍しい引越なりと、何事によらず奇を好むも客氣滿々たる年頃。後日に至つて思返せば、われながら嘔吐を催す種なれど、其折には村田春海が火を恐れて藏書を船に蓄へ、花川戸の方に繋ぎ置きしとやら云ふはなし思浮べて、いよ／＼うれしく、夏の夜明けの河霧、まだ消遣らぬ中、書篋、几案、寢具。食器のたぐひ、飯たきの婆もともに傳馬船に乘せ、藏前の堀割より肥船と舳艫相銜みて大川に漕出で、それよりすぐに柳橋の下をくゞりて神田川に入るに、兩岸の妓家ゆふべのまゝに戸を閉したるが中に、ふと増次が家の軒を見れば、梅家といふ見馴れし灯、空のあけ行くにつれて、光も薄く悲し氣に見えたるに、何故とも知らずこの年月の心置きなき交りも、この日を

かぎりに、事皆空しくなりしやうなる心地。忽然胸の中に迫り來りて、已れは朝汐に送らるゝ荷船の上より、背のびして見返り見返り、淺草橋をくゞりしこそ怪しかりけれ。されど此の怪しき咄嗟の感慨は、やがて已が境遇の變り行く知らせなりけり。牛込に住みしはわづかに半歳ばかりにして、已れは九州の或大學に招聘せられ、褐を釋いて教鞭を乘る身となりしかば、いつまで一人にてもゐられまじとて、人のすゝむるまゝに妻を娶りしが、氣心の合はざるのみか、親類との折合面白からず、またもとの一人となれば、放課の心は致仕の如しと古人の戯れ身にしみ〴〵と思合され、ふら〳〵と東京に歸り來りし時、歐洲大陸の戰亂恰も終りを告げしにぞ、新しき世のありさまを見歩かむとて、新聞の通信記者となり、一年あまりの月日を海外の旅に送り、歸朝の後は新聞社の俗務に其日其日をすごす中、いつしかわれも古足袋の、四十に足を突込む身とはなりしぞかし。若き時は、空しく過す月日も更に惜しからねど、一たびそれと心づく時、月日の早さは何にか譬ふべき。人にすぐれたる才智學問ある身とも思はねど、四十年の此の年月、人を知り世を閲したることもすくなからねば、このまゝ草木の如く朽ち果つるも、さすがに悲しきかぎりなり。せめて、江戸時代の藝文に關する著述なりと世に殘さむものと思ひ立ちて、古書舊記の間に月日を送ること、また三四年なりしが、かの大地震に年頃あつめたりし著述の資料も、一人身の取出すよしはなく、着のみ着のまゝの浴衣一枚、猛火に追はれて行衛も定めず、とある郊外の新開町に知る人をたよりて、身を落ちつけし或日の事なり。物買ひにと立寄る荒物屋の店先、これも同じく火に遭ひたるものと覺しき三四人の女の、同じく物買へるを、ふと見れば、その中の一人はかの柳橋の増次なるに、イヤこれはめづらしいと驚けば、増次もびつくり、かうしてお目にさへ掛かれゝば、それが何よりうれしう御ざります。わたくし達はツイこの先の一念寺といふお寺が、おばアさんの菩提所なので、境内の貸家を借りて居ります。晩方にでも御遊びにお出でなさいまし。くよ〳〵してゐても仕様がありませぬから、毎晩みんなで好き勝手なことをして騷いで居りますからと、何年たつてもむかしに變らぬ愛嬌よき調子なり。われはその夜増次がはなしにて、その後打絶えて消息なかりし都三中がことも知りぬ。

また年久しく增次が世話になりし旦那のことも聞知りぬ。その頃には瓢節とやらいひたる半玉。肉付逞しき當世風の女になりて、茶など持來るを、その年問へば早や二十二になりしといふに、わが身のことはさて置き、增次が年を何となく氣の毒になりて問ひかねたり。そはともあれ。一時增次が思をかけたるかの三中、三四年このかた、少年の時患ひし胸の病の再發してより、興津の別莊に引籠り、折折發句などよみて、心靜に餘生を送るといふ。して又、この度の地震にもかはることのなかりし由、人のたよりにて聞きしとか。四方山のむかしがたり、夜をあかしても盡きまじきを、耳元ちかく響出る鐘の音におどろかされ、それではまた遊びに來ませうと、戸口を出づるに、月の光限なく照りわたりし寺の門内。松風の音しづかに、いづこよりともなく漂ひ來る木犀のかをり身にしみぬ。甃石ことごとと踏み鳴して、寺門のくゞり戸押明けながら見返れば、戸口に立出でし女達の、猶われを見送りゐて、また明晩、お待申して居りますよ。左樣なら。おやすみなさいと、口々によぶ聲。田舎の犬の聞馴れぬにや、門の外より俄に吠出せしもをかしかりけり。二タ月ばかり夜毎のおとづれも夢の間なりき。增次をはじめ皆々、元住みし町に假小屋たちたればとて寺を去れば、災異の年も早く盡きて、われのみ一人、郡部の借家に、茫然として迎ふる正月より、二月になれば、猶更烈しく吹きすさむ富士おろし。去年まで覺えしことなき寒さの骨身にこたえ、桜の花さく頃まで炬燵を出る力もなかりしこそ、いよいよ迫る老のしらせなれ。それより後の事は君もよく知りたまへるが如し。年々に變り行く世のさまを見るにつけ、老を養ふ身のつれづれなるに、わかゝりし時の事ども戯に書きつゞりても見んと、筆とりかけし事もありしが、それさへすぐさま懶くなりて、今年はいつか五十の春。一時は世に殘さむとまで意氣込みし著述の草稿、一朝にして灰となりしも、今は却て嘲りのたねまかさりしを心やすく思ふものから、人生の至樂は唯折に觸れて、心置きなき友と埒もなく、むかしを語るに如くものはなけむと、語り終りしその人は、聞く人よりも先に大きなるあくびして、眼脂を袖にぬぐひけり。



階梯

宮島資夫

佐伯仙藏は思ひ切つて、明るい銀座通りへ出て行つた。そして、この町一杯に流れてゐる、夏の夜の散歩者の群にまじつて、悠々と歩き初めたとき、彼は漸く一種の氣易さを胸に感じた。

彼は今夜も已に二時間餘り、ある薄暗い町の角に立つて、山吹の表と裏を見張つてゐた。それは彼のやうな、常にあとを追はれてゐる脱營兵の身にとつては、この上もない危險だつた。そしてもし、そこに時子が出入りする姿を見出したら、彼の感情の爆發が、どんな慘劇に導くかも知れない豫感があつた。仙藏はおど／＼したり、いら／＼したりしながら薄暗い場所を撰んでうろ／＼した。が然し、遂に、自分自身が苦痛に堪え切れなくなつてしまつて、この明るい町に飛び出してしまつたのだ。

彼はほつと大きく息をついた。そして、麥稈帽子を一寸眞深にかぶり直しはしたが、人波の流れにつれて、ショウウヰンドの中を時折は眺めながら悠々と歩き初めた。歩調のゆるい事が彼の心を靜めたのか、或ひはこの多くの人にまぎれ込んだ氣易さからか、不思議に彼は、自分の身に迫る危險も、心に湧き上る悲劇の豫感も忘れ果てゝ、自分自身も、不知な一人の散歩者のやうな氣持になつた。

無數に歩いてゐる人達の中には、若い男女の群もあつた。身輕な洋裝をしてゐる女もあれば、派出な浴衣に日本髮を結つてゐる女もあつた。中には肩の形や腰つきが、時子にどこか似てゐるのもあつた。けれども佐伯は、それ等の女に注意しようとも思はなかつた。それよりも彼はかへつて、いつか二人が生活に窮した時、友達のところから集めた古雜誌を持つて、神田や上野の夜店に出た時の事を思つた。時子は柔順に、悪びれもしないで、一人して露店に坐つた。佐伯はその周圍をうろついた。若い女の坐つてゐる店の前には多勢の人がたかつた。そして、古雜誌はよく賣れた。彼はそれを眺めながら、ひそかに誇と喜びを感じてゐた。そして、店をしまつて歸る時には、小さな包みを抱へて、恰も散歩者であるやうに、遠い町まで歩いて行つた。

『あの時は俺も時子に感謝した。そうして、若い女のところには、男が多勢たかつて來るものだね』わざと人事のやうに時子に話したのであつた。

佐伯はそれを考へると、薄い笑ひが口唇に浮んで來るのを自分で感じた。

左側のショウウヰンドの前に、若い男と女が笑ひながら話てゐるのがふと彼の眼に映つた。ウヰンドの中には、鞄やトランクが飾つてあつた。男はそのトランクの一つを指してゐるのだつた。そうしてまた何か一言二言云ふと、女は打つやうな眞似をした。二人は愉快らしくまた笑つた。

『夫婦かしら』思はず瞳を据えながら、佐伯は更に歩調をゆるめた。――それとも二人は戀人同志で、あのトランクを提

げて旅行する相談でもしてゐるのか。――彼は餘計な事と思ひながらふと考へた。が然し、それはどちらにしても好い事だつた。彼等はいま、あゝしてたゞ無邪氣に、愉快らしく語り合つてゐるだけだ。夫婦にしたつて、戀人にしたつて、若い男と女とが、自分達だけの樂みに浸つてゐるだけの事である。善い事でもなければ別して惡い事でもない。たゞそれだけの事なのだ。が然し、若しあの女に別に亭主とか或ひは戀人でもあつたとしたら、と佐伯の步調は思はずゆるんだ。

それにしたつて、どつちしても同じ事だ。彼は强て、斷ち切るやうに考へて見た。あの若い男と女は、自然に湧いて來る自分達の喜びに浸つてゐるだけだ。一方にあつてはたゞそれだけの罪もない悅びが、一方にとつては生死を賭した暗い問題になつてくる。之れは果して人間の愚かさばかりから生れてくるものなのか。假令ば時子が、いまどこかで若い男とあゝして笑ひさゞめいてゐるのを見ても、自分はそれをたゞ、罪もない男と女の悅びとして許せるか、彼はそれを考へると、現在の自分の心さへ判らなくなつて來て、二人の男女から眼をそらせて足を早めて步き出した。

佐伯の頭はだん／＼と混亂して來た。先刻まで、あの山吹の横の薄暗い角に立つてゐた時は、ふと自分に近づいて來る人があると、もしかそれは私服憲兵ではないかと云ふ惧れからおど／＼しながらも、時子がこゝに姿さへ現せば、喚かうと叫ばうと、今夜こそ、心のはれるまで自分の思ひ通りに振舞つてやらうと云ふ氣で一杯だつたが、この明るい町に出て、人波の中に滑り込んで、やゝ安住を心に感じたり、愉快らしい若い男女の群を見た事が、彼の決心に幾分かのゆるみを與へたやうであつた。彼は先刻までのやうに物凄い、上づつた眼もしてゐなかつた。がその代り、彼の額のあたりには、云ひ知れない深い惱みが現はれてゐた。

『それにしても、現在の俺自身は、一體何をどうしたら、一番好いのか』彼は繰返し同じ事を考へた。

『時子はきつと、いつかはあの山吹へ來るに違ひない。が然し、彼奴は果して今頃、あの二人の男女のやうに、若い男を相手に、愉快らしく笑つてゐるか、俺の考へた事の全てが實際なのか、或ひはまた間違つてるか、それはまだ自分にもは

つきりと判つてはゐやしない。たゞ俺は、此頃あの女の顔を見るたびに、色々な男の映像がそこに現はれたり消えたりした。それを時子に云ふと、彼奴はいつもふゝんと笑つた。然しそれよりも現在一番悪いのは、時子が俺から姿を消してしまつたと云ふ事だ。何もかも判らなくなつてしまつた。さうして俺は、公然と女を探して歩く事の出來ない日陰の身だ。俺は一體どうすりや好いんだ』彼は心で喚き立てた。町の明るいショウヰンドも、道行く人の顔も眼には入らなかつた。熱病やみのやうにふら〱歩いてゐる中に、幾度か人に打つかつた。その度毎にはつとして我に返るのだつたが、最後にどかりと打つかつたのは、髯を生やした、いかつい顔をした男だつた。

『氣をつけないか』太い沈んだ聲がその男の口から洩れた。

『や、どうも』帽子に手をかけながら、その男の顔を見たとき、佐伯は思はずぶるつと震えた。

『どうも失敬しました』再び頭を下げながらちらりと見たとき、ヨにやけた、髯の太い男の顔には、憫むやうな笑ひが浮んだやうに彼には思はれた。

『どうも』ともう一度ぺこりとお辭儀をして摺り抜けるやうに身をかわした。さうして足早に行き過ぎて、町の角を曲りながら、後ろをぢつとよく見たが、さつきの男の姿はいつまでたつても見えなかつた。

『憲兵ではなかつたのか』佐伯は安堵の息をほつとついたが、それと同時に、彼自身が如何に甚しい危険の地位におかれてあるかを、またしみ〲と身に感じた。取分け現在の彼自身は、どこに頼るべき友もなく、隠れるべき家もなかつた。最初、、、した時には、彼は上官の暴壓に反抗したためだと云つた。彼の友人達もそれを受け入れて出來るだけ彼をかばつた。時子もどうにか隠れて彼に逢つては、憲兵の、、の模様などを委しく告げて警戒した。彼自身も全く自分は、軍隊に對する反抗と、愛着との二つによつて動いたものと思ひ込めた。二回目の時はそれとは事情を可なり異にしてゐた。彼は第一回の脱營後、隊内での虐待が、可なり烈しくなつた爲めだと云つてゐた。然し、事實はそれ程でもないことを、時

子も友人達も知つてゐた。殊に時子はその當時、臨月に近い腹を抱へて、間近く迫つた分娩の費用を作る爲めに、山吹に住み込んでゐた。佐伯が脱營すると、山吹へは朝晩憲兵が訪ねて來た。客商賣をしてゐる山吹では可なり迷惑な事であつた。分けて時子をそこへ世話した菅谷は、中に挾つて一層弱つてゐた。佐伯がこつそり菅谷を訪ねたとき、彼は不機嫌な顏をして、

『反抗するなら君、EやOのやうに、斷乎として反抗したら好いぢやあないか。細君は子供を生む金を作るために働いてゐるのだし、君はたゞ時々さうしてふらりと逃げて見たつて、僕には何にもたらない事としか思へない。君が飽くまで强い信念を持つてやるなら、それは何とも云へない事だが、さうでなければ、何處へ行つたつて壓迫のないとこなんて、ありやう筈はないのだから』と言つた。

『然し、この間以來は實に、、、が烈しくつてね、貴樣みたいな、社會主義者が理窟を云ふなら云つて見ろ、つて、、、、、、、、』と佐伯は辯明した。

『そりや君、その位の事はやるだらうさ、向ふに取つて不利益な理窟をこつちが述べ立てれば、向ふは怒るに極つてゐる。それよりも僕は君が、さうして、自分は如何にも××主義だと云ふやうな顏をするのが、惡いと思ふ。君が本當にそれに信念があるならば、そんな顏をしないで、寧ろ默つてもつとすべき事があると思ふ』冷かに菅谷は云つた。可なり過激な思想を抱いてゐる鹿田すら、二度目の、、の時には、

『君、僅かの間の隱忍だ。君が默つてぢつとしてれば、向ふでも敬遠するよ、ぢたばたしたつて、君だけの話なんだ。周圍への見せしめで餘計やつつけられるばかりぢやないか。それにさうして逃げ出したつて、時子さんと長く一緒にゐられるわけぢやなし、第一逃げて隱れて步いてゐたら、自分が喰ふにも困るぢやないか』さう云つて意味あり氣ににやりと笑つた。

佐伯はその時も力盡きて隊に歸つた。さうして一月近い營倉の、、、間を送られた。

今度はこれで三度目である。それに時子は佐伯の實家にゐた。分娩後の赤子が死んでから、二人の間には可なりうるさい爭ひはあつたが、それは友人に對する脫營の口實にはならなかつた。

彼は追ひつめられた、孤獨な自分の無力をひし〳〵と身に感じた。

『事實俺は、もう反抗でも虐待でも何でもない。時子との問題さへ解決すればそれで好いのだ。あいつが俺の入營中、貞淑に俺の家で暮してゐるとさへ誓へば、俺はちやんと隊にゐたのだ。それをあいつが拒んだから、俺は遂にまた疑ひ初めた。どこへどう引つ張り廻さうと、二人で露店に出た時の事を思へば何でもない話なのだ。どこへでも二人して逃げれば好いのだ。それなのに、あいつは一人で逃げてしまつた。今の俺は、あいつを探し出すよりほかに何の用がある。友達とは別れてしまつた。あとからは、狂犬のやうに驅り立てられる。その上あいつに逃げ通されてどうなるのだ。俺は必ず探し出す。さうして俺は、存分にしてやるのだ。さうしなければ胸がはれない』彼はさう考へると、先達の朝、のめ〳〵と彼女と別れた事を考へて地團太踏んだ。

『あなたが家へ來ると危いから、明日の夕方きつとあすこへ來て待つてゐる、とあいつが、云つた。それを俺は信じて別れた。然しもうそれつきり、あいつの姿は見えなくなつた』

ひよつとすると、これでもう一生時子に逢へないやうな氣にもなつた。限りない愛着と憎しみが、彼の心をしぼり上げた。

『俺が脅かしたのが惡かつたかも知れなかつた』彼は懷の短刀の柄を握つて見た。出來の惡い鞘と身が中で觸れてがちや〳〵音を立てた。

『殺されると思つたのか、然し、今出てくれればきつと許す。俺と一緒に行きさへすればそれで好いのだ』彼は心で呟いた

が、自分自身も行く處のない事を考へると、寂しい笑ひが顔に浮んだ。

暗い町をぐる〳〵廻つた。まだ表の開いてゐる店の中を覗き込んで見ると、時計は十一時少し前を指してゐた。その頃ならば、山吹にも、客は尠くなつた時分である。憲兵も、夜遲くは訪ねて來ない事は、彼もかねて聞いてゐた。彼は裏町をよつて遠廻りをして、山吹の裏口へ出た。

幅の狹い格子戸は閉つてゐた。佐伯はあたりによく注意してから格子戸をそつと明けて、

『今晩は』と低い聲で云つた。板場のそばの障子を明けて、顔馴染のお新と云ふ女中が出て來たが、佐伯の顔を見ると、

『あらつ』と驚いた顔をした。

『誰か來てますか、これでも』佐伯は指で丸をこさへて、額の所へもつて行つた。

『いゝえもう、でも先刻までゐたんですよ』

お新の答を聞くと、佐伯は思はずひやりとした。

『ずつとこゝにゐたんですか』

『えゝ、宵の口から』

それも知らずにあの角に立ち盡くしてゐた自分を顧みて苦笑しながら、

『御主人は』と何心ない調子で訊ねた。

『えゝいらつしやいます』

『では一寸』

お新は心得たやうに中へ入つた。少時すると、山吹の主人の須藤が、痩形な身體をそこに現はして、

『やあ、しばらく、まあお上りなさい』と、いつもの通り、隔りのない調子で云つて、裏梯子を靜かに上つて行つた。

裏二階の小さな部屋だつた。

『さあどうか、お構ひなく、お楽に』砕けた調子で布團をすゝめて、

『また、出なすつたさうですね。どうしてもゐられませんか』腹藏のない顔で訊ねた。

佐伯は固くなつて坐つてゐた。そして、彼の片手は、襟元を合せるやうな風をして、懐ろに入れられてゐた。彼は時子に三人ほど力を盡してくれる男があるやうな事を、聞いたのを覺えてゐた。もしかしたら、この須藤がその中の一人ではないだらうか、久しい前からの疑ひだつた。今夜も彼は、ここに來た時から、先の出方一つでは、そこに一點の懸念でも挿む事があつたらば、須藤だけでもと云ふ心持は充分あつた。佐伯は懐ろに手を入れて、幾分うつ向き加減になりながら、眼を据えてぢつと相手の態度を窺つてゐた。いやに砕けた須藤の調子さへ彼には幾分不愉快だつた。

『はゝ、もうすつかり御承知だつたんですか』

少時たつて、彼は白ぱつくれた風で訊ねた。

『えゝよく判つてゐますとも、何しろこの間から、毎日憲兵がやつて來るんですからな、それも最初の中は、朝晩ちよいと訊きに來る位だつたんですが、今夜なんか、宵の口から張り込んでゐるやうな始末ですからな、いやどうも』須藤は屈托のない聲で笑ひながら、『然し、えらい事になりましたね』と云つて佐伯の顔をぢろりと見た。

『飛んだ御迷惑をかけて恐縮です』佐伯は一寸頭を下げて、

『その後時子はお伺ひしましたか』と靜かに訊ねた。

『えゝ來ました』須藤は躊躇する様もなく答へた。『さう、あれからよく遊びには來ましたがね、最近に來たのは、さうですな、五六日前だつたか知ら』と小首を傾けた。

『え、五六日前に』

佐伯は思はず力を入れて訊ね返した。

『えゝ、たしかに五六日前でしたよ』須藤は何氣ない風で答へた。

五六日前とすると、と佐伯は自分の胸に訊ねた。自分が時子と別れたのは一週間ほど前である。時子は家を出てから、たしかにこゝへ來たのである。『よし』と心にうなづいた。そして

『で、その時は別に變つた風もありませんでしたか知ら』

『さあ、別に變つたとこも見えませんでしたね。たゞこれから下谷だか本郷とかへ行くとは云つてゐましたが』と須藤は云つたが、

『何ですか、何かお時さんに變つた事でもあつたのですか』と訊き直した。

『えゝ、實は時子がゐなくなつたのです』と云ひながら、須藤の顏をぢろりと見た。

『え、ゐなくなつた、それはいつの事です』

『一週間ほど前に別れた時からゐなくなつたのです。もつとも、それから一寸、家へ歸るには歸つたと云ふのですが』

『一週間前と云へば、それぢやこゝへ來たのはそれから後の事ではないですか』須藤は不思議さうな顏をした。

『えゝさうです。それで實は僕も探しあぐんで、危險だとは思ひながら、こちらへおたづねに來たのですが』

『はあさうですか、それははじめて伺ふ事ですよ、この間こゝへ來た時は、別に變つた樣子も見えなかつたんですが、家を出てゐたんですかな。それで一體お時さんはどうして家を出たのです？』と須藤は訊ねたが、彼のその態度には、理由も結果も既に判り切つてゐる點があるやうに佐伯には思はれた。

『つまり何です。あの女は僕の實家にくすぶつて暮してゐる事がいやになつたのです。それで僕が、入營してゐる間だけ我慢してくれと幾度も云つたのですが、どうしても肯かないのです。僕はそれを解決しない中は、どうしても氣が落ちつ

かないので、また飛び出してしまつたんですが、さうすると今度は女の方で逃げ出してしまつたのです。結局あの女は、ぢみな生活が嫌やなんです。それにあなたの前でから云つては何ですが、こちらへ伺つてから殊にさういふ風になつたやうな氣がするのですが』

『はゝ、これはどうも恐縮ですな』須藤は無邪氣に笑つたが、

『然し、何ぢやないですか、お時さんは、あなたと一緒になる前にも、淺草のオペラか何かへ出てゐたと云ふ話ぢやありませんか。さうして、そこであなたと一緒になつたと云ふやうな話も聞いたんですが』

それを言はれると、佐伯も一寸弱つた顏をしたが、

『えゝ、それはさうです』と答へてしまつた。

『ぢやあ穴勝ち、こゝへ來たから、ぢみな生活がいやになつたとも云へないでせう。それに私の方では、菅谷君からの話もあつたし、あの人の身體もあゝいふ風だから、私の方としては、かなり心を使つていたはつてゐたつもりです。それに、お産をしてから後も、時々遊びに來てはまた使つて貰ひたいやうな事を言つてをられたが、何しろ夏場は店もひまだし、あなたとの間の事も薄々は聞いて知つてゐたので、まあその中に、その中に、と云つてのばしてゐたやうなわけでしたが、はゝあさうですか、お時さんが、とう／＼逃げてしまひましたか』と云つて、須藤は何か、別の事をでも考へるやうに思ひに沈んだ。

佐伯は一寸出鼻を挫かれたやうな氣持がした。その時の調子だつたとは云へ、つまらない事を言つたものだと後悔もした。それにこの須藤の話を聞いてゐると、その態度にも語調にも、時子との間にひそんでゐる怪しさなどは、微塵も發見する事が出來なかつた。彼は一時にどつかりと、力が拔けたやうな氣持がして、懷ろで固く握つてゐた短刀の柄の手もゆるんでしまつた。

『いやどうも、飛んだ事を言つてしまつて失禮しました』少時たつて、佐伯はまるで、別人のやうに穩かに變つた調子で云つた。そして、何となく間の惡さうにもぢ〳〵してゐたが、

『實はその何です。時子がこちらにゐる中に何でも三人ほど、世話してくれる男があるやうな事を聞いたもんですから、それで今度も、そんな關係から逃げ出してしまつたんぢやないかと思つて、それ等の事もお訊ねしたいと思つて來たんですが、つまらない事を云つて、氣を惡くおさせして失禮しました』あやまるやうな調子で言つた。

『いや、氣を惡くするとこなんか少しもありません。私はそれより、お時さんがどうしたかと思つて考へてゐたんです。然し女一人では中々大變ですから、その位なら、この店にゐた方が却つてよかつたかも知れないと思つてゐたんですが、その今の三人と云ふのはどういふお話ですか、お時さんが、三人色男でも持つてゐると、誰か話でもしたんですか』と須藤は訊ねた。

『いゝえ別に、こゝの店では時子よりほかに誰れも知つてゐる人はないのですから、つまり何です。いつか時子がひよつとそんな事を口走つたんで、或ひはそんな事のある關係上、だん〳〵あゝいふ風になつて、僕から離れて行つたんぢやないかと思ふんです。それになんです。こちらにおれがお世話になつてゐた時分は、何しろあの通り臨月に近い大きな腹をしてゐたんですからな。それを何だ、金力か何か知らないが、誘惑して弄んだかと思ふと癪にさわつて、一突きにでも刺し殺してやりたくなつて來るんです。』佐伯は唇をわな〳〵ふるはせて、懷ろの短刀をまたしつかりと握りしめてゐた。

『はゝあ、さうですか』須藤は佐伯の興奮した態度にも、氣をとめないらしく、『お時さんの話だつたのですか』と云つて輕く笑つた。

『私はまた、誰かさういふ實際を知つてゐてそんな事をあなたに話したのかと思つて、それにしては不思議だと考へたんです。何しろ男と女の事だから何とも云へませんが、私の見た所では、この店にゐる間はそんな風は見えなかつたので

す。そりやかういふ店にゐれば來た客が、笑談の一つや二つ云つたり、からかつたりする事は珍しくない事だが、それを氣にしてゐたらこんな商賣は出來やしません。それは何でせう、お時さんがきつとそんな事を云つて、あなたの氣を揉ませたのでせう。女といふものは、よくそんな事を云ふ事が好きなものだから』と云つて須藤は更に快活に笑つたが、ふと思ひ出したやうに、

『失禮ですが、あなたまだ夕飯前ぢやありませんか』と訊ねた。佐伯は思はずはつとして『いゝえもう濟みました』と答へてしまつた。事實彼は金もなく、氣持も落ちつかなかつたために、晩飯も食べてゐず、空腹にかられてゐたが、どこか自分の態度にさういふ卑しさが現はれたやうに思はれて、遂さう云つてしまつたのであつた。

『さうですか。然し、こゝはどうせ喰物屋ですから、遠慮する事はありません。ともかくもうおそくなつたから御飯だけでもあがつていらつしやい』須藤は手をたゝいて女中を呼ぶと、さつさと食事をあつらへてしまつた。

女中が膳を持つて來た時には、酒も一本つけてあつた。酒の呑めない佐伯は、盃を一つ二つ重ねると、眞赤な顔になつてしまつた。

『では、私は酒の方をお交際ひしますから、あなたはどうか御飯を』須藤は手酌で酒を呑んだ。

二杯ばかり飲んだ酒が身體に廻ると、佐伯は氣が輕くなつて、どこか心持にゆとりが出て來た。するとと今日はまだろくに食事もしてない彼は、俄かに烈しい食慾を感じた。須藤がちび／＼と、酒を飲んでゐるひまに、彼はそこに並べられた肴を貪り喰つて、手盛りで飯を何杯かつめ込んだ。それは勿論大した御馳走ではなかつたが、近頃の彼にとつては、とも角も珍しい物だつた。羞恥も何も忘れ果てたやうに喰べ終ると、彼はふと我に返つて須藤の方をぢろりと見た。然し須藤は、自分の酒を樂むやうに盃に酒をついでゐた。自分一人で、また一層顔のほてるのを感じながら、『少しの金があれば、かうして何でも喰へるのだ。然し俺は、たゞ餓と惧ればかりが殘されてゐる。さうしてこの樣子では、あの女もどこ

へ行つたか判るまい』情けない思ひが、また湧き上つた。
『御馳走さまでした』と云つて、膝をわきへよせると、
『いや何のお愛想もなくて』と須藤は答へたが、
『然し何ですよ佐伯さん、あなたもさうしていらく〳〵なさるか知れないが、お時さんもあれで隨分苦勞したんです。こんな事を私が云つては失禮かも知れないが、無謀なことは考へないで、落着いて隊に入つてをられたらどうかと思ふのですがな。あなたさへ落着いてゐれば、あの人もきつと落ちついて待つてゐると思ふのですが、どうです。もう一度さういふ風に考へ直して御覽になりませんか』なだめるやうに云つた。
『有難う』と佐伯は答へた。さうして默つてうつ向いた。――この男には、今の俺の氣持は判りはしないのだ。俺はあすこへ行つてる限り、女に對して手足を縛られたやうになつてゐる。だから、その間は女も愼んでぢつとしてゐてくれと云つたゞけだ。成程、俺の家は貧乏で狹い家に、舅や姑と一緒にゐるのはつらい事かも知れない。然し、俺も隊では苦しい不自由を忍んでゐるのだ。それなのに、女は却つて自由に氣儘に振舞はふとしてゐるのだ。俺は女と離れるか、隊を出るか、どつちかを撰ばなければもう生きて行けなくなつてゐるのだ。その心持は、いまこの男に話したつて判りはしない――
――彼はさう考へてゐた。
『いや、色々御親切に有難うございました』
と頭を下げて立ち上つた。
『お歸りですか、それで今夜は』と訊きかけたが、氣が附いたと見えて、
『まあお大事に、さうしてまあ成るべく穩かに考へて御覽になる事ですな』と云ひながら須藤は佐伯を送つて、梯子段を下つて來た。

そして最後に別れを告げたとき、

『あの佐伯さん、これは甚だ失禮ですが、まあお小遣のたしにでも』と紙に包んだものを佐伯の手に握らせた。

『いや、僕こんなものは』佐伯は強く拒んだ。

『怒つちやいけませんよ、たゞあなたも今は不自由な御身分だから、私の志です。少しばかりだが、まあどうか』須藤の言葉に嫌らしい點は少しもなかつた。

『さうですか、では』佐伯も遂に穏和しくそれを受け取つた。

十二時近くはあつたが、表にはまだ涼みに出た人々がちらほら通つてゐた。彼は薄暗い通りを、風に吹かれてぶら〳〵歩いてゐた。久しぶりで腹も滿ちてゐた。そして、もう二時間ばかり前までは、場合によつては、殺してもやらうと思つた男から貰つた金も持つてゐた。さうして彼は幾分かのんびりとなつた心持を、蔑むやうに自分で笑つた。

京橋の通りへ出た時、淺草行の電車が走つて來た。彼は停留場へ來ると、何を考へるひまもなく、それに飛び乗つてしまつた。電車でゆられてゐる中に、堪え難い寂寥と、恐怖とが、ときれ〳〵に彼を襲つた。田原町で電車を降りると、佐伯はカフエーに飛び入んだ。彼は思ひ切つてウヰスキーをあつらへた。小さいコップについだ液體の强烈な香がひどく鼻をついた。眼をつぶつてぐつと呑むと、焦げ臭い匂が頭の中に泌み込んだ。佐伯はまた代りを命じた。二杯のウヰスキーが頭をくら〳〵させて、口の中がひり〳〵した。彼は遊びに行く人でゝもあるやうにふら〳〵歩いた。何も見もしなければ考へもしなかつた。と云ふより、彼はたゞそんな風に自分で思ひ込んでゐたのかも知れなかつた。

細い横丁を幾つか曲つて、少し廣い通りに出たとき、佐伯は、太田屋と書いた宿屋の看板を見た。

『ふゝん』と彼は、自分で自分を嘲笑つた。

『矢つ張り俺はこゝへ來たかつたのか、苦しい思ひをしてウヰスキーを飲んでみたり、目をつぶつたり、强て頭に起る考

へを拂ひのけたつて、結局こゝへ來たかつたのか』憐れむやうに心で呟いた。そして、その宿屋によろけ込んだ。
狹い部屋ではあつたが、一人きりの部屋に通された。垢臭い匂が、醉つてゐる彼の鼻にも烈しくにほつた。女中が布團を持つて來て宿帳もつけてしまふと、彼は初めて解放されたやうに、寢床の上にがつたりと轉がつた。薄暗い電燈が一つ、天井からぽつつりと下つてゐるだけで、煤けた襖で圍はれた部屋の中は、いやに陰氣で蒸暑かつた。然し佐伯は、疲れた身體をそこに横たへ、なへた足をぐんと伸すと、漸く警戒から免れた心安さを身に感じた。がそれと同時に、ウヰスキーの醉がまた頭に上つて來て、くら〳〵した。彼はひどく感傷的になつてゐた。最後に時子と別れた前の晩、二人して泊つたのがこの家だつたからである。今夜も彼は遂にこの家を撰んでしまつた。彼はその晩の事を考へた。すると涙が止め度なく流れ出した。がり〳〵の兵隊頭を抱へながら、彼は布團の上を轉げ廻つた。時々呻くやうに、『畜生つ』を低く叫んだ。かと思ふと、『時子つ』と懷しさうに呟きもした。
それは彼が三度目に脫營した日の事であつた。隊では別に、彼が脫營しなければならないほどの原因が、あつたわけではなかつた。たゞ上等兵が一寸ばかり何か言つたゞけの事であるのに、極度の恐迫觀念と、一つはそれに口實をつける時子への疑惑と執着が、彼を驅り立てゝわけもなく脫營させた。その時彼はどうしたわけか、肩章をもぎつて、劍と一緒に土手際に捨てゝしまつた。脫營の上に餘計な罪を附加するその事は、或ひは自分で自分の決心を强める爲かも知れなかつた。
搜索の手の廻らない中に、佐伯は急いで家に歸つた。彼が一番心配したのは、もしや時子が不在になつてゐはしないか、と云ふ事だつたが、幸ひに彼女は家にゐた。
『おい、俺と一緒にすぐに出てくれ、急いで話をしなけりやならない事が出來たんだ。ぐづ〳〵してたら大變だから』
脈しつけるやうな聲で彼は時子を急き立てた。時子は、佐伯の樣子ですべてを察してゐるやうだつたが、それでも默つ

てすぐに着物を着換へた。佐伯も軍服を和服に着換へると、押入れの奥から短刀をそつと出して懐ろに忍ばせた。

佐伯は、日比谷や淺草へ行くのは危險なやうに思はれたので、わざと向島の土手を撰んだ。焼け灰のやうに熱く輕い埃の立つ土手を二人は並んで歩きながら、絶えず罵つたり爭つたりしつゞけた。佐伯は恐ろしく昂奮して頭はまるで混亂してゐた。彼はその日盛りの道を歩いた半日に、何を時子と言ひ合つたのか、後になつてもまるで憶えてゐなかつた。たゞ時々脅えたやうに青くなつたり、變に蔑むやうな笑ひを洩した、時子の顏の變化だけが、妙に佐伯の頭に殘つた。

三圍の境内で、木蔭の石に並んで腰を下した時分は、日射しも餘程斜めになつて、川から吹いてくる風も凉しくなつてゐた。然し、時子は可なり疲れたやうにぐんなりしてゐた。膝の上に肘をついて、指先で唇を弄んでゐたが、その額際には、汗にまみれた埃が黄色く斑になつてゐた。

佐伯はぢろりと時子を睨めた。おどけたやうな丸い眼と、つんと高い鼻と、唇の薄い口と、變に調和のとれない顏で、その癖どこかに魅力があるやうに思はれてゐた時子が、今日は何だか恐ろしく醜く見えた。彼は口の中で變にねばつく唾をぺつと吐いたが、

『おい、それでお前はどうする積りだ』と、恰も今迄の話の續きでゝもあるやうな調子で訊ねた。時子は默つて額を押へて眼をつぶつた。

『おい、どうするんだつて云ふのに』佐伯の聲は烈しくなつた。時子はそれでも默つてゐるので、

『おい、こん畜生』彼は堪りかねて肩を突いた。

『何をするのよ、うるさいわね』はじめて眉毛をよせて佐伯を睨んだ。

『何が、うるさいんだ。俺が先刻から訊いてるぢやないか』ぢりつと彼は膝をよせた。その時も彼は懐ろで短刀の柄をじつと握つた。時子はその手元をぢろりと見たが、

『どうするつて、そんな同じこと何度訊いたつて同じぢやありませんか。私の事なんかよりあなたこそ、どうするんだか決めた方が好いでしよ』と云つて、またぢつと額を抑へた。

『ふゝん、判つてら、お前何だな、どうしても俺の家にはゐない積りだな、さうして自分勝手な眞似をしようつて云ふんだろ』佐伯はまたつめよせた。

『ちつとも自分勝手ぢやありませんわ。』時子は下眼を使ふやうに彼を見ながら、

『第一私は初めつから、あなたの親御さんと一緒に暮すつて、約束なんかしませんよ。それをあなたは勝手に自分できめたやうに私がしなければ、すぐに變だとか、可笑しいとか、勝手に氣を廻すんぢやありませんか。あなたこそ本當に自分勝手だ』と云ひ放つた。

『何が、俺が、自分勝手だ、俺は自分の勝手で兵隊に出たんぢやない。俺だつて苦しいんだ。だからお前にその間辛抱してくれつて云ふんぢやないか』

『だから私はその間、ちやんと一人で暮してるつて云ふんです。それをあなたが勝手に疑つて、まるで人に鎖でもつけとかなけりやいけないやうな事を云ふんぢやありませんか。あなたは男だから兵隊に行く、それだからあなたは男だつて、勝手にかうして威張つてゐるぢやありませんか。私は何も女だつて、自分さへちやんとしてれば、あなたの親のそばにゐて小さくなつてお互ひに苦しい思ひをして暮してる事はありませんわ、第一あなたの家だつて苦しいし、あたしだつて、氣づまりで堪りやしない。お父さんやお母さんにでも聞いてご覽なさい』

『ふゝん、だからお前は一人になつて勝手な眞似をしようつて云ふのか』

『勝手な眞似と思ふなら、勝手だと思つたら好いぢやありませんか』

それを聞くと、佐伯は頭がくら／＼つとした。

『何つ』と懷ろの手を固く握りながら、中腰に立ち上りかけたとき、

『およしなさい。人が見てますよ、第一あなたの身體が危いわ』時子は平然とした態度で云つた。佐伯ははつとして腰を下した。全く向ふの石碑の蔭で人影が動いてゐた。さうしてそれは隱れながら、こちらを覗つてゐるやうにも思はれた。

『毒婦つ』と彼は低く叫んだ。

『貴樣は何だな。それだから俺との間に出來た赤ん坊も、あゝして病氣なのも構はずにおいて殺してしまつたんだな。さうだろ人鬼』彼が烈しく睨みつけたとき、時子の眉毛のあたりがぴりゝと動いた。彼女はまた一すこめかみのあたりを押へたが、

『あたしが、殺したんですつて』抑揚のない低い聲で云つたが、

『ふゝん、あたしが殺したなら殺したで好いぢやありませんか。あなただつて、あたしに、愛情なんかちつともありやしない。たゞ今迄の關係があるもんだから、意地になつて、友達や何かへの虛榮心で、無理にもあたしを壓へつけておかうつて云ふだけだわ、どうでも好い。あたしはあたしの勝手にするから』彼女はさう云つて膝の上に顏を押しつけてしまつた。肩のあたりが、かすかにふるへてゐるやうに、佐伯には思はれた。

『自分勝手な理窟がこねたきや勝手にこねろ、俺はな、あの子供を、寢る眼も寢ずに看病したんだ。それも隊からやつと暇を貰つて疲れ切つてた時だつたんだ。それをなんだ、貴樣は平氣で冷淡な顏をしてたぢやないか』

『あの時はあたしはまだ身體が本當でなかつたんですからね』時子は顏を上げながら、あざ笑ふやうに佐伯を眺めた。そして。

『ほゝ』と笑ひながら、『だから男の人に女の事なんか判るもんかつて云ふんだわ』と云つて向ふをむいた。

佐伯はもう、一思ひに突き刺したい衝動にかられてゐた。然し、向ふの石碑の後ろの人影は、依然としてそこにあつ

た。そればかりでなく、夕方近くなつた故か、この境內を突き拔けて行く人の數も殖えて來た。彼等はこの大柄な單衣に、紅色のまぢつた帶をしめた、派出な恰好をした女と、日に燒けた青年が並んで腰をかけてゐるのを、ぢろ〳〵と眺めて通つた。佐伯は齒を食ひしばつてぢつと堪えた。そして、

『おい　もう行かう』と立ち上つた。時子も彼のあとに續いた。境內を出るとき、彼は先刻の石碑の方を振り返つたが、そこには四十位の法被（はつぴ）を着た男が、にや〳〵笑ひながら二人の後ろを見送つてゐるのだつた。

『何だ。あんな奴か』彼はがつかりしたやうにつぶやいたが、またほつと安堵の息もついた。それにしても、この女のためにかうして危險な地位に身を置いて、それを女に利用される自分の愚劣さを自分で憫んだ。

吾妻橋を渡り切つたとき、時子は急に

『頭が痛い』と云ひ出した。

『駄目だ』と佐伯は、低い聲で壓へつけるやうに云つた。彼は正面を向いたまゝ、普通の話でもするやうな態度はしてゐたが、

『こゝで歸らうつたつて歸しやしないぞ。今日は何でも好いから俺について來い。變な眞似をすれば人混みだつて何だつて、今度は構やしないからな』と囁いた。不思議に時子はそれに反抗もしなかつた。二人は小さな家に入つて晩飯を食べたが、その時も時子は如何にも親しい連であるやうな顏をしてゐた。十時近くまで、佐伯は活動を見たり、公園をぶらついた。時子は口もきかずに、たゞ默つて彼の後に從つた。佐伯は時折、いやな惡感を心に感じた。誰かが彼を見張つてゐるやうな氣持もした。然し彼は、時子を手許に引き連れてゐる事で、凡てを慰めて步いてゐた。

この太田屋へ來たのは十一時近かつた。二階の奧の別室と云ふのへ通されて、二人切りになつたとき、時子はきちんと座つたまゝぢつと彼を眺めてゐた。極度の疲勞と昻奮に、彼女の顏は蒼ざめてゐた。

『おい、いくら威張つたつて、とう／＼こゝまで來たぢやないか。先刻はなんだ。俺が日陰者だと思つて脅かしたり何かしたが、もうこゝならどうも出來ないからな』彼は時子の苦痛と反抗に滿ちた顏を、愉快らしく眺めながら、ごろりと横になつて煙草を吸つた。

『ふん短刀や何かで人を脅かして、こんな所へ連れて來て、それで夫婦だなんて云へるもんか。だからあなたは身勝手だつて云ふんです』時子はさう云つて、きつと口を結んだ。平素のおどけたやうな影が消えて、彼女の顏には、どこか悽慘な色が浮んだ。

『何でも好いや、俺は俺のしたいやうにしただけだ。これから後もさうするだけだ』

彼は立ち上つて時子を蹴倒した。彼女は手足を堅く引きしめて、猫のやうに轉がつた。

『生意氣な眞似をしたつて駄目だつ』と佐伯が怒鳴つた。

その翌朝だつた。時子は顏を眞蒼にしてわな／＼震えてゐた。それは彼女の持病の前兆のやうにも思はれた。

『ともかくもここを出たいが、歩けるか』と訊ねた時、時子は穩和しくうなづいた。二人は公園のベンチで休んだ。そこで佐伯は時子に謝罪つた。そして、

『身體の工合が惡ければ、家へ歸つて休むが好い。然し、明日の晩は、どんな事をしてもこゝまで來てくれ。こんどは落ちついてよく話をして、自分の身體もちやんときめるから』

どこまでも引つ張り廻すと云つた、自分の覺悟に對しても、可笑いほど彼は氣が挫けてゐた。時子は默つてうなづいた。そして、

『だけど、昨日みたいに怒つたり、恐い事ばかりしちやあたしいやよ』と云つた。

『あゝ大丈夫だとも、今度は決してしない。だからお前も歸つて休んでおくれ、それからお前の身體も注意するに違ひな

いから、屠行なんかされないやうに賴むぜ』と佐伯が云ふと、『えゝ大丈夫だわ、そんな間拔けはしない事よ』と時子は笑つた。二人は快くそこで別れた。

その翌晩、彼は十一時頃までそのベンチでいら〳〵過した。時子は遂に來なかつた。佐伯は危險を冒して、岡本の家を訪ねた。さうして自分の家を訪ねて貰つた。然し時子は彼の家にも歸つてゐなかつた。身體を害ねたのではないかと云ふ惧れもあつた。彼は凡ゆる方法で友人の家を探つた。然しどこにも時子の姿はなかつた。さうして最後に、今夜、須藤の家で聞いた所では、彼女は身體も惡くもなくその翌日か翌々日、山吹まで訪ねて來たといふのであつた。

佐伯はウヰスキーの醉に痛む頭を抱へて布團の上に轉がつてゐた。

『俺は何故、思ひ切つてあいつを殺してしまはなかつたのだ』彼は懷ろの短刀の柄をまたぐつと強く握つて考へた。

『石碑の蔭に人がゐると云つて時子は平然とした顏をしてゐた。然し、眞實に殺す勇氣を持つてゐたら、それでも俺は殺せたわけだ。』

『あなたはあなたの虛榮心で、私をつかまへてゐるだけだ』と女が云つた。彼はそれを思ひ出してひやりとした。心の底まで時子に見拔かれてゐるやうな感じがした。それと同時に、今はもう何處へも逃れて行くべき場所のない、孤獨の寂しさがしみ〴〵と彼の心に湧き上つた。

『俺は實際勇敢に、軍隊に反抗したのか、どんな苦難に會つても敢然として爭ふ覺悟を持つてゐたのか』彼はそれを考へると、一時にかつと、顏がほてるやうな氣持がして、眼を開いてあたりを見廻した。薄暗い電燈が天井でどんよりと光つてゐるだけだつた。

佐伯は太い息をほつとついた。

『結局俺は、社會主義のイロハみたいな智識をひけらかして、友達に威張つて見せたゞけぢやないか』彼がさう考へる時、それを否定すべき考へは何一つ起つて來なかつた。

女を殺す勇氣もなかつた。えらさうに振舞つたり喋舌つたりした事も、結局附燒刃に過ぎなかつた。

『あの朝、あの朝』彼は繰り返しそれを考へた。

『あの朝、時子を歸したのは、心から彼女を愛してゐた爲だらうか。上つ面な脅迫で彼女を心のまゝにしたと云ふ滿足から、それから更にまた女を呼び出したいと云ふけちな叢見から、あそこで奇麗に別れたのではなかつたか。女の病氣を恐れる人間が、どうして何處までも引張り廻す事が仕終せるのか』

佐伯はもう全く、挫けたやうに布團の中に顏を埋めた。先刻入つて來たときのやうに、時子に對する愛着や憤怒の昂奮でもなく、友人達に捨てられた孤獨の寂しさからでもなく、彼は全く空つぽになり切つた、拔殼みたいな自分にぶつかつて、すつかり氣力を失つてしまつてゐた。

夜が明けるのを待ち兼るやうにして、佐伯は明方の町に出た。往來には、まだ遊びからの歸りらしい人の姿が、ちらほら見える位だつた。彼は太田屋を出て少し行くと、一寸また振り返つて見た。この前一度泊つた事のある家へ、さうしてそれは、時子の口から憲兵へ、いつ洩れないとも限らない家へ無謀にも泊つた自分を顧みてひやりとした。

朝明けの風はすが〳〵しく彼の顏を吹いて通つた。然し昨夜一睡もしなかつた彼は、眼はちか〳〵痛むやうに充血して、口の中がいやに熱つぽくにちや〳〵した。公園のベンチのあたりに來たとき、そこで夜を明した浮浪者の群にあつた。彼はそのベンチの一つに腰を下した。朝になれば、この邊ももう安全らしく思はれた。彼はそこで漸く落ちついて、腕を組んで眼をつぶつた。彼は全身に、ぶちのめされたやうなだるさを感じた。頭の中は、石炭俵を詰めたやうに重くなつて、何を考へる氣力も失つてゐた。時子の事も思はなかつた。あたりに寢轉んでゐる浮浪者のやうに、全くの無爲の中

に、ぐんなりと溶け込んでゐた。然し、時々Aの書いた小說で憶えてゐる、懲治隊の、嚴寒の水風呂や、鞭のしもとの物凄い光景が、きらりと頭に浮んでは彼を脅やかした。彼はその度毎に、ぎくりとして眼を開いてあたりを見廻した。

午頃になつて漸く佐伯は氣力を少し恢復した。のつそりと立ち上つてどこかへ行つたが、やがて原稿紙と鉛筆を買つて來た。そして再びベンチに腰を下して何か熱心に書いてゐた。漸くそれが書き上ると封をしてポストに入れた。

翌日の或紙には、『脫營兵の自殺』として、彼の遺書が揭げてあつた。それには、集團の力によつて個人を壓迫せんとするものに、吾人の良心は堪ゆる能はず。――と云ふやうな書き出しで、集團（恐らくそれは軍隊の意味かも知れない）を呪ふ文章だつた。さうして、自分はその暴壓に堪えかねて、自殺を決するに到つた事が、佐伯仙藏の署名によつて書かれてあつた。

彼の友人は半ば憂え、半ば疑つた。が、然し幾日たつても、幾月たつても、自殺した彼の死體は發見されなかつた。

翌年になつて、夏がまためぐつて來た。午頃の日が銀座通りの片側をちりちりと照りつけてゐる頃だつた。佐伯仙藏は、餘り上等ではないが、新しい背廣の服を着て、新しい麥稈帽子を被つて、悠々と銀座の町を歩いてゐた。三丁目の角へ來たとき、彼は自分の前に洋裝の女を發見した。服裝はちがつてゐるが、その身體つきや斜めに後ろから見える横顔はどうしても時子らしかつた。彼は急いで女を追ひ越して、振り返つて見たとき、女の方で『あつ』と聲を立てゝ顔を押へた。佐伯はちつと立ち止りながら、

『やあどうした』しばらくだね』と云つたが、その聲には、わざとらしくない落着きがあつた。

時子は默つてちつと彼の顔を眺めてゐた。佐伯はその洋服に覆はれてゐる彼女の腹と妙にやつれた顔を一見した時、時子は普通の身體でない事を悟つた。

『どうしたねその後は』重ねて彼が訊ねた時『えゝ田舎にゐるんです』時子は簡單に答へた。

『誰かと一緒になつたのかね』

『あなたの知らない人です』時子も平然とした顔をしてゐた。が、不思議な事には、佐伯はそれを聞いても、何の感じも起らなかつた。

『君とは一度、話をしたいと思つてゐたんだが、お茶でも飲まうか』と彼が云ふと、

『今日は急ぐんですから、明日にして下さい』

と時子が答へた。

『ふゝ、また逃げるのかね』佐伯は輕く笑つた。

『逃げなんかするもんですか。明日の三時頃に、××堂で待つてゐて下さい。きつと行きます』時子はきつぱり云つた。

『さうか、それぢやさうしよう。逃げるなら來なくつても好いが、』佐伯はさう云つて先きに歩き出した。時子は次の横町を曲つた。あとをつければ直ぐ判るのだが、と思つたが、佐伯は追ひもしなかつた。彼は時子と逢はなかつた時のやうに悠々と歩いてゐた。

翌日の三時頃、佐伯は××堂の隅のテーブルに向つて腰を下してゐた。店の中は幸ひにすいてゐた。今日の彼は黄色の眼鏡をかけて、新聞を讀んでゐた。彼が來ると間もなく、時子は昨日と同じ洋裝で入つて來た。そして彼の姿を發見すると、悪びれもしないで、前の椅子に腰を下した。時子は肩で息をつくやうにしてゐたが、來るとすぐにレモンソーダを誂へて、飲んでゐた。

『いつかはとう／＼すつぽかしたね』佐伯は普通の話をする調子で言ひ出した。

その時、學生のやうな姿をした青年が店へ入つて來ると、二人の方をぢろりと見て、向ふの隅に腰を下した。

『お前變な眞似をしやしまいな』佐伯は一寸眼を光らせて時子に訊いた。

『何が』と訊きながら、佐伯がちろりと見た視線の先きを振り向くと、

『ふゝん』時子は鼻で笑つた。そして、『あの時は私全く恐かつたし、困り切つてゐたんですもの』と云つた。

『恐かつたかね、ふゝ、然し、それはそれでもう好いさ。昨日は何だか逢つたら話があるやうな氣がしたが、逢つて見るともう何にもない。それで今はどうしてゐるのだね』と彼はまた訊ねた。

『ある人と一緒になつて田舍にゐます。けれど、それは全くあなたの知らない人です』

『さうかね、それは結構だ』佐伯は靜かに答へた。彼はいま眼前に向ひ合つて坐つてゐるこの女が、一度は少くも自分に多少の殺意さへ持たせた女かと思ふと、當時の自分が全く違つた人間だつたのか、或ひは今の自分がまるで感情を失つた人間なのか判らなくなつてしまつた。この女に別れてから後には、饑えと疲勞と恐怖の苦しい日が長く續いた。そればかりでない。昔の知人に逢つて、その人の世話になつて、現にかうして暮してゐても、いつ捕るか判らない絕望から、自分はその人の金を使ひ込んでかうしてのう〳〵とした顏をして歩いてさへゐるのだ。時々絞られるやうに痛む現在の心の苦惱も以前の苦勞も、この女のために與へられたものだとは、現在の彼にどうしても思へなかつた。今はもうどうでも好い存在だ、と彼は思つた。

『折角來て貰つたけど、もう何にも話をする事もないよ』と彼はぶつきら棒に云つた。

『でも、あなたはいま何をして暮してるの』

と時子が訊ねた。

『機械みたいなものゝ賣込みさ、聞いたつて仕樣がないよ』と興味のない聲で云つた。

『ぢやあ歸らう。失敬したね』と云つて彼はボーイを呼んで金を拂つた。彼の財布が、多くの紙幣でふくれてゐるのを、

時子は不思議さうにちらりと見た。佐伯は先きに立上つて『左樣なら』とカッフエーを出た。

今日も西日が往來の片側を燒くやうにかつと照りつけゐた。

『ふゝん、あれが今のあいつの男なのだな』隅の方に向ふむきに腰かけてゐた靑年の姿を佐伯は思ひ出した。そして、『俺は全くあの當時、どうしてあんなにまで變になつたのか』彼は不思議らしく改めて自分の過去を振り返つた。そこにはたゞ、要もない下らない物が、ごろ〳〵轉がつてゐるやうな氣持がした。

『何もかもつまらなかつた。何にしてもこれからだ』彼は自分に勇氣をつけるやうに考へた。するといつもの癖で、殿裏の水風呂と、皮の鞭のうなる獄治×の物凄い光景が頭に浮んだ。

『それも好い』彼は心で呟いた。

『俺みたいな半分腐りかけた人間は、へたばるか、息を吹き返すまでやるまでだ』

彼は心で笑つて、頭に浮んだその物凄い光景に相對した。

定價		
定價	送料	
一册	八十錢	參錢
六册	四圓八十錢	送料共
十二册	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

△御照會夭節詳細御回答申上ます

廣告料

昭和四年一月十八日印刷

昭和四年二月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　高木鳥三

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區

中央公論社

電話丸ノ内二〇六番

振替東京三四番

同　長野三二〇五番

神經衰弱
不眠症



レーベン

▼岡田醫學博士▼伊藤醫學博士
▼福田醫學博士▼[illegible]ンソン博士證明推獎

主効病状

腦病・神經衰弱・ヒステリー頭痛・頭重・逆上・便秘・不眠症・耳鳴・眩暈・記憶力減退・勉學過度・憂鬱焦燥・心身衰弱・遺精・夢精・陰萎等の生殖器障害

注意

學者、銀行、會社員、學生、著述家、技師、官吏、其他平素腦を使用する人は必ず常用せよ

レーベン は米麥等を主食とせる日本人の體質に適應する植物製劑にして絶對に副作用の憂なし
レーベン は腦の重要なる榮養素たるリンサンを多量に含有し積極的治療劑として健腦強精の卓効を有す

◉進呈
増田博士森常持兩學士共著神經衰弱療法精神療法は申込次第贈呈

藥價
一圓・二圓・三圓・五圓・(德用分)拾圓(試用分)五十錢
全國到る處有名藥店にあり

◉取次、中央公論代理部にても取次します。

發賣◀ 東京市京橋區弓町 大阪市天王寺上汐町六 中南定太郎藥房▶

GHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO, Published Monthly.
Terms of Subscription : Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.